

神の意思が俺を T S させて百合ハーレムを企んでいる

とんこつラーメン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

テンプレのように車に轢かれて死んだ俺は、神によって無理矢理I Sの世界に転生させられた。

だが、そこで待ち受けていたのはこつちが予想だにしない事ばかりだった！

遊び半分の神の意思によってTS転生させられた俺…いや、私はこれからどうなるのだろうか？

目次

オープニング	〜最初から予想外〜	1
プロフィール		9
第1話	再会と出会いは突然に	16
第2話	ルームメイト	30
第3話	初めての朝	39
第4話	鍛えよ 勝つために	51
第5話	専用機と初試合	64
第6話	転生特典	75
第7話	赤い彗星	86
第8話	百合の花	96
第9話	お空をビューン	110
第10話	セカンドと就任パーティー	124
第11話	もう一人の幼馴染と恋する少女達	135
第12話	女達が寄ればかましい	146
第13話	セクハラはやめましょう	157
第14話	水色の姉妹	167
第15話	龍VS彗星	180
第16話	黒い異形	192
第17話	反撃開始	204
第18話	決着	215
第19話	タイミングは大切	224
第20話	私の父は『白い狼』	235
第21話	思春期の少年の葛藤	248
第22話	金と銀の転入生	259

第23話	実習も楽じゃない	271
第24話	リヴァイヴ強化	285
第25話	試射	298
第26話	噂と約束	310
第27話	上級生達	323
第28話	黒い雨VS赤い彗星	334
第29話	偽りの復讐者	349
第30話	お前は私を怒らせた	360
第31話	真の忍殺	370
第32話	静寂無き学園生活	380
第33話	また日が昇る	391
第34話	偶には女の子らしくお買い物	403
第35話	少女達と潜む者達	414
第36話	臨海学校初日	426
第37話	少女達の真剣勝負?	436
第38話	青い巨星のかき氷	448
第39話	大人の魅力と和の心	460
第40話	先生だって恋をする	472
第41話	彼女達の気持ち	484
第42話	もう一人の私	496
第43話	天災兎と紅い椿	508
第44話	波乱の予感	518
第45話	銀の福音	530
第46話	暴走の機械天使	540
第47話	撃墜	556

第48話	リベンジと先人	566
第49話	私だけの赤い彗星	576
第50話	待たせたな	590
第51話	絆と共に	601
第52話	究極進化	612
第53話	大人への階段	623
第54話	新たな戦乱の予感	635
第55話	本当の始まり	647
第56話	強くなりたい	662
第57話	動き出す時	672
第58話	黄金の『姉』	681
第59話	少女達の日々と新たなる布石	693
第60話	夏直前と紫の薔薇	701
第61話	害虫駆除	709
第62話	お姫様とピンク色の女傑	719
第63話	他人から見た私	729
第64話	なんで登校日ってあるんだろうね	737
第65話	夏休みはフラグの宝庫である	747
第66話	伏兵は一人じゃない	756
第67話	水上ペア障害物レース（スタート編）	765
第68話	水上ペア障害物レース（ゴール編）	773
第69話	頑張れアンジェロちゃん	785
第70話	買い物に行こう	792

オープニング く最初から予想外く

IS学園にある1年1組の教室。

その一番前の教壇の目の前と言う、ある意味では最強の特等席とも言える場所に『私』は座っていた。

目の前には緑の髪で眼鏡を掛けた副担任『山田真耶』先生が皆に自己紹介を促している。

って、いきなりこんなスタートじゃ何の事だか分からないよな。

取り敢えず、自己紹介からしましょうか。

え？誰にだって？そりゃ決まってるでしょ。

これを見ているアンタにだよ。

私の名前は『仲森佳織』。性別は一応『女』

どこにでも……は、いないか。

私は二次創作物で言うところの所謂『転生者』って奴だ。

普通に歩道を歩いていたら、いきなり車が突っ込んできてドカーン。

ハイ死亡……ってな感じだった。当時の記憶はもう曖昧になってるけど。

あ、こんな風に話してるけど、実は元『男』だったりする。

さつき『一応』ってつけたのはこの為。

もう面影とか残ってないけどね。

完全に死に設定だな……こりゃ。

で、死んだ筈の私が出たのは、神を自称する謎の男だった。

そいつはいきなり、『こつちの不手際でお前を死なせてしまった。

それは済まない。その詫びとして、お前を転生させる。って言うか、

転生しろ』と言ってきた。

こんな場合って普通は転生特典とかがあると思うだろ？

ところがどっこい。

私は有無を言わず、いきなりのボツシユート。

こつちの意思とか完全無視よ。

落ちる瞬間に密かに『俺好みの美少女になって、最高の百合ハーレ

ムを築いてくれよ。転生者君』って聞こえた。

これを聞いた途端、なんとなくだけけど、転生後の展開が予想出来た。こいつの意思によって俺は女にされるんだと。だけど、こつちにはこつちの意思がある。

お前の好き勝手にさせてたまるか！

そう意気込んでいたんだけど……

いざ転生した世界は『インフィニット・ストラトス』の世界だった。通称『IS』。

知ってる人は知っている、知らない人は覚えてね。

簡単に言ってしまうえば、女性にしか動かせないパワードスーツと鈍感難聴系主人公が出てくる学園系のラノベだ。

私はそれなりに原作を知っているから、どんな風に行動すれば大丈夫か分かっているつもりだった。

だが、その考えは脆くも崩れ去ることになった。

別に女にされたことに関してはどうか言うつもりはない。

変態じみた発言かもしれないが、前々から女性としての人生に興味があった。

だから、これは問題ないのだ。

私をTSさせる時に、どうやら神はこつちの精神にも介入してきたようで、気がついた時には無意識の内に女口調にさせられていて、一人称も『私』に変えられた。

女の体にはまだ抵抗感があるが、うじうじ言っても仕方が無いので、少しでも早く慣れるように今でも頑張っている。

……ここまではいいのだ、ここまでは。

問題は、この作品に登場する原作キャラたちだ。

簡単に言ってしまうえば、ここは私が知っている『IS』の世界じゃなかった。

神によって都合よく改変された世界だった。

だって……この作品の大前提が無くなってから。

それは、今私の隣の席に座っている女子を見ればよく分かる。

「ん？どうしたの？佳織」

私が見ると、向こうもこっちを見返してきた。

黒いセミロングの少女……彼女こそが、本来であればこの世界の中心人物とも言うべき原作主人公『織斑一夏』だ。

そう……あろうことか、本来なら男である筈の一夏が女になっているのだ！

しかもこれ、別に人体実験でこうなったとかじゃない。

最初からこうなのだ。

はい？なんで知っているのかだって？

そりゃ奥さん、だって私……この子の幼馴染ですから。

原作キャラと可能な限り関わり合いになりたくないと思った矢先、実はご近所さんでしたと言うオチ。

しかも、幼稚園、小学校、中学校と同じ所に行った。

勿論、その全てにおいて同じクラスだった。

これ絶対に神が仕組んだでしょ……

一夏と知り合っているなら、当然のように彼女の幼馴染とも知り合っている。

窓際の一番組の席に座っている黒髪ポニーテールの少女『篠ノ之 箒』

原作のメインヒロインである。

本来ならば一夏に惚れてここにいるのだが、一夏が女である時点でフラグの建ちようがない。

だから、この二人は普通の親友同士だ。

一夏が女になったせいとか、原作前に起こる筈だったイベントがことごとく変わっている。

その一例を紹介しよう。

小学2年の時の箒のいじめ↓そんなもの……最初から無かったよ。その後、普通に転校はしたけど。

小学5年の時に転校してきたヒロインの一人『凰鈴音』に行われたイジメ↓それありませんでした。

一夏の誘拐事件↓そもそもモンドグロツソを見に行っていない。

鈴の告白↓何故か私に言ってきた。マジで意味不明。
因みに、白騎士事件はちゃんと起こっている。

これだけは原作と同じだった。
世界的な大事件が起きて安心する自分に、心の底から辟易したのをよく覚えている。

こうして言っていくと、もう原型も無いな。

私の持っている原作知識は完全に役に立たないと考えるべきだろう。

そうそう、念の為に私の容姿も教えておこうか。

ちゃんと言わないと想像しにくいだろうし。

首元まで伸びた茶髪（天然）をうなじで結んでいる。

顔は……比較的整っている方だと思う。

自画自賛はしない。

「はぁ……」

一夏に付き添うような形でIS学園に入ったけど、これも絶対に神の策略だよなあ…。

いや、もしかしたら束さん辺りの仕業も考えられる。

箒と一緒にいた関係で、あの人も知り合っている。

なんでか一目で気に入られて、いつの間にか『かおりん』って呼ばれている。

あの篠ノ之束が私を気に入る理由が分からない。

絶対に神のせいだ。

「……おり」

筆記はそれなりに頑張った方だとは思うけど、実技はダメダメだった。

っていうか、今までISに関わってこなかったんだから、上手いくわけ無いじゃん。

これが物語ならばご都合主義があるんだろうけど、今の私にとってはこれが現実。

現実にはご都合主義なんて存在しない。

あつという間にKOでした。

こんな結果なのに、どうして合格出来たのか…。
確実に誰かの意思が介入してるだろ。

「佳織!!」

「えっ!？」

な…なんだ!？」

「なにボーツとしてるの? 佳織の番だよ」

「番…:…?」

一夏に言われて一瞬だけ呆けてしまったが、目の前で泣きそうになっっている山田先生を見て状況が分かった。

「あの…:…今は『な行』まで来てて、仲森さんの番なんだよね? 自己紹介してくれないかな? ダメかな?」

「あ…:…すいません」

もう私の番か…。

少しボーっとしすぎた。

慌てて席を立てて自己紹介をしようと思ったが、さっきまで別の事を考えていたせいで頭の中が真っ白になってしまった。

「え…:…と…:…」

まずは名前か…:…?

「な…:…仲森佳織…:…と言います。趣味は読書と音楽鑑賞です」

嘘は言っていない。

主に読むのは漫画とラノベで、聴くのはアニソンやボーカロイドだけど。

これも立派な読書と音楽鑑賞だよな?

「よ…:…よろしくお願いします」

居た堪れなくなつて、急いで座った。

自己紹介なんて、こんなもんでいいよな?

私の番が終わり、また自己紹介が再開しようとする、急に教室の扉が開かれた。

「自己紹介はもう終わったか?」

「あ…:…織斑先生」

一夏の実の姉にしてIS学園の教師。

そして、モンドグロツソ2連覇を達成した世界的有名人。さつきも言ったが、一夏の誘拐事件が発生していないため、この人はちやんと大会に優勝している。

けど、何故か原作と同様にドイツに行つて、しかも引退している。何が理由なんだろうか？

少なくとも、原作と同じ理由ではないだろう。

「悪かったな。色々と押し付けて」

「気にしないでください。これも副担任の役目ですから」

立派な心掛けだ。

山田先生がどいて、教壇に千冬さんが立った。

「私がこのクラスの担任の織斑千冬だ。今日からお前達新人をたった一年で使い物になる立派な操縦者にすることが私の仕事だ。これから私の言うことをよく聞いて、よく理解しろ。分からない者には分かるまで、出来ない者には出来るまで指導してやる。15から16歳の間に十分に鍛えぬいてやる。別に逆らってもいいが、私の言う事には基本的にはYESで答えろ。いいな？」

……こうして生で聞くと、かなりの問題発言だよな…。

でも、下手に何か言えば被害をこうむるのはこっちなので、敢えて何も言わない。

千冬さんが発言した直後、教室は急に騒がしくなった。

キヤーキヤーうるさいな…。

耳がキンキンする…。

「相変わらず、お姉ちゃんは人気高いね」

「もう見飽きた光景だよな」

ここまで同性にモテる奴も珍しい。

絶対に学生時代は女子生徒からラブレターとか貰っていたに違いない。

「……毎年毎年、よくもまあこれだけ馬鹿な連中を集めたもんだ。呆れを通り越して感心すらする。まさか、私のクラスにだけ集中させているんじゃないだろうか？」

そうかもね。

千冬さんの言葉は効果は無く、逆に彼女達の興奮が増す結果になった。

このままいけば声で窓ガラスが割れそうだ。

「静かに!!」

お、鶴の一声。

一気に静かになった。

「大丈夫か?」

「あ…はい」

何故に私にだけ?

隣には貴女の妹さんがいますよ。

「元気があるのは若者の特権だが、何事にも限度があることを理解しろ。さもなければ、私が強制的に黙らせる」

出席簿を持って軽く素振りをする千冬さん。

あれが原作にもあった例の出席簿か。

あれってどんな材質で出来てるんだ?

相当に頑丈そうだけど。

「分かったら、自己紹介を続けろ」

千冬さんの言葉に従って、自己紹介が再開された。

その途中、ヒロインの一人である『セシリア・オルコット』も自己紹介をした。

高飛車な態度がムカつくから、ここでは敢えて描写しないけど。

(確かに綺麗ではあるけど、今はそれだけだな)

原作では一夏との試合を通じて惚れて、女尊男卑の考えを改めるようになった筈。

けど、ここでの一夏は女。

一体どうなることやら。

全員の自己紹介が終わり、また千冬さんの話が始まる。

「これでSHRを終了する。お前達にはこれからISに関する基礎知識を半月で覚えてもらう。その後に実習があるが、基本動作も知識と同様に半月で習得しろ。分かったならば返事をしろ。返事!!」

「「「はー!!」」」

立派なお返事。

これが返事だけでない事を祈ろう。

分かってはいても、初日からこうだと後が思いやられる。

これが当たり前前的事だと分かっているても、不安は拭えない。

せめて、最初のイベントぐらいは穏便に終わりたい…。

プロフィール

名前：仲森佳織（なかもりかおり）

年齢：肉体的には15歳。

身長：155cm

体重：言ったら殺す（by佳織）

スリーサイズ：シャルロット以上箒以下（自己申告）

趣味・読書（主に漫画やラノベ）と音楽鑑賞（アニソンやボカロ）とゲーム

好きな物：家族。友達や身近な人々。辛い食べ物。精進料理。

嫌いな物：空気を読まない人。しつこい人。甘い食べ物。脂っこい食べ物。

転生特典：赤い彗星を模倣する程度の能力

CV：東山奈央

変態で自分勝手な神によって、半ば無理矢理に近い形で転生させられた人物。

前世では男だったが、神の手によって女に変えられた。

その際に様々な所に手を加えられて、一人称を私にされた挙句、思考や仕草も女性寄りにされた。

この時点ではまだ転生特典は授かっていない。

転生当初はそのことに憤慨したが、後に女性としての生活に苦勞せず済んだことから、今では複雑な心境を抱いている。

最初は原作に介入する気は全く無く傍観者に徹するつもりだったが、彼女に百合ハーレムを築かせて自分の欲を満たそうとする神がそんな事を許す筈も無く、神は原作での主要人物である織斑一夏（女）の家の近くに彼女を引っ越させて、流れで一夏の幼馴染にさせて、その繋がりで箒とも仲良くなる事に。

当然、その二人と仲良くなったのであれば、二人の姉である千冬と束とも仲良くなる。

特に姉二人とは色々あった結果、完全に恋慕に近い感情を抱かれているが、本人は全く気が付いていない。

勿論、一夏と一緒に学校の学校に入ったと言う事は、後に箒と入れ替わりに転校してくる鈴とも仲良くなる。

原作とは違って周囲に目立った男子がいなかったせいとか、いつの間にか佳織に対して鈴のフラグが建っていた。

ことごとく原作とは違う展開に、いつしか自分の持つ原作知識は全く役に立たない事を悟り、小学5年生にして色々と諦めた。

中学の時には五反田弾とも知り合うが、二人の関係はあくまで友達同士（だと佳織は思っている）で、リア充爆発しろ的な事にはなっていない。

一夏がIS学園に進学すると決めた際に自分もIS学園に行くことを決める。

佳織はまるで絵に描いたような平々凡々な人間なので、勉強などは本当に苦労した。

一夏と一緒に必死に勉強した結果、なんとか筆記では合格。実技は……言わずもがなである。

IS適性はA+。
適性自体は非常に高いが、操縦技術は完全に素人。

よくある俺T U e e e e e e e e e系 of 転生者ではない。
巻き込まれるような形ですることになったセシリア・オルコットとの試合の中で、遂に神から転生特典を貰う事になった。

それこそが『赤い彗星を模倣する程度の能力』である。

これはISに搭乗している最中限定で、佳織の能力がシャアを模したものである特典。

戦闘能力は勿論、その口調も彼にそっくりになる。
だが、あくまで『模した』だけであるから、本当のシャア・アズナ

ブルには遠く及ばない。
元々のスペックが大きく違う上に、佳織は別にニュータイプじゃない。

しかも、分不相応な力を酷使するせいで、自分の体にかかる負担も相当なものになる。

しかし、佳織が自分を鍛えて少しでもシャアの動きについていける

ようになれば、あるいは……？

容姿は天然の茶髪を首元まで伸ばして、それをうなじの所で結んでいる。

スタイルは周囲の少女達に負けず劣らずのナイスバディで、誰もが認める美少女。

中身的には前世との年齢も含めて相当な事になっているが、神による改変と元来の子供と大人が緬い交ぜになったような性格と優しさが周囲にはとても可愛く見えるようで、本人や神の意思とは関係無く、着実に百合ハーレムを築いている。

そんな佳織が自分から誰かを好きになる日は来るのだろうか…？

く専用機く

機体名：ラファール・リヴァイヴⅡ（仲森佳織専用機）

表向きは、デユノア社が社運を賭けて進めたプロジェクトで開発された、ラファール・リヴァイヴを再設計した正統後継機……なのだが、実際には佳織を転生させた神によって生み出されたジオン軍で最も有名なモビルスーツ『ザクⅡ』とラファールの要素を融合させた機体。基本的な形状は原型機であるラファール・リヴァイヴを踏襲しているが、全体的に装甲は丸みを帯びている。

更に、追加装甲としてザクのパーツを模したスパイクアーマーとシールドも付属していて、防御力も向上している。

一次移行した際に機体色が原型機を基にした緑色から、まるでシャア専用機をイメージしたかのような赤に染まり、機体各部にシャアのエンブレムも描かれた。

それに伴い、機体性能も一部だけ変化した。

シャア専用ザクⅡをイメージしたのか、各部スラスターのリミッターが全て解除されていて、機体本来の限界性能をフルに発揮出来るようになった。

だが、その代償として、非常にシビアな操縦技術を要求されると同時に、SEの消費量が大幅に増加。

普通に使用すればあっという間にエネルギーが枯渇して行動不能に陥るが、転生特典を得た佳織は巧みな操縦技術によって、機体を見事に乗りこなしている。

武装の方もザクⅡを意識したラインナップになっている。

IS用マシンガン（ザクマシンガン）

ヒート・ホーク

IS用バズーカA2型（ザクバズーカ）

左腕固定式2連装マシンガン

IS用対艦ライフルASR-78

今はまだこれだけだが、拡張領域にはまだまだ余裕がある為、これからも色々な装備や換装用のパッケージが追加される可能性がある。

くラファール・リヴァイヴ・バリスティックく

フランスから来た転校生であり代表候補生でもあるシャルロット・デュノアがデュノア社から持って来た、フランスとイギリスで共同開発されたラファール・リヴァイヴⅡ専用の追加武装『バリスティック・ウエポンズ』を装備した状態。

片手でも保持が可能な『ハンドビームガン』に高い威力を持つ『ビームバズーカ』。

長大な近接武装の『Wビーム・トマホーク』。

そして、ビット兵器の『ファンネル』。

いずれもビーム兵器で構成されている。

これらを装備する事によって機体性能が飛躍的に向上……は流石にしないが、実弾兵器とビーム兵器をバランスよく装備した為、汎用性と総合攻撃力が大幅に向上した。

特に、ビット兵器が追加された事は大きく、それで今まで出来なかったオールレンジ攻撃が可能となった。

装備を追加した事によって、機体の名称が『ラファール・リヴァイヴⅡ』から『ラファール・リヴァイヴ・バリステイツク』に強制変更された。

佳織自身は別に気にしてはいないが、余りにも長すぎるために『バリステイツク・リヴァイヴ』と名称を省略して呼ぶことにした。

百式

福音との死闘にて大破してしまったバリステイツク・リヴァイヴの代替機として用意された、新たな佳織の専用機。

その名の通り、一夏の専用機である『白式』の姉妹機として製造された機体……なのだが、実際は『機動戦士Zガンダム』に登場したクワトロ・バジーナが搭乗したMSを模して造られたIS。

白式の予備パーツを使って製造されたので、機体の形状自体は白式と全く同じなのだが、機体色がオリジナルと同様の金色に染まっっていて、ウイングパーツにはどこぞの書家が書いたと思われる『百』の字が描かれている。

この色は機体表面に特殊なビームコーティング処理を施した結果、自然となったものであり、この辺はMSの百式と大差ない。

かなり早い段階から束によって送られた佳織の戦闘データ（どうやって入手したかは謎）が製造元である倉持技研に持ち込まれていて、お陰でナイスなタイミングで本人に手渡すことが出来た。

機体の性能も白式と殆ど変わらないが、その代り武装がかなり変化している。

と言うのも、超近接使用になった白式の反省を生かして製造された経緯があり、結果として百式の開発コンセプトは『射撃戦重視寄りの汎用型』になった。

お陰で武装もかなりシンプルになっていて、『ビーム・ライフル』に『クレイ・バズーカ』といったオリジナルと同様の物もあれば、白式の持つ雪片式型と同型の『雪片・改』もある。

だが、そんなスタンダードな武装類の中でも一際異彩を放っているのが、百式お馴染みの超武装『メガ・バズーカ・ランチャー』だ。

ガンダム好きなら知っていると思うが、兵装そのものに高出力のジェネレーターとスラスターが内蔵されており、ちよつとしたサブ・フライトシステムの運用も可能。

攻撃力だけならば間違いなく最強クラスだが、エネルギー効率は最悪な上に命中率が絶望的。

大きさが大きさ故に取り回しも非常に難しい、間違いなく玄人向けの武装となっている。

百式自体はかなり優秀な機体なのに、この武器の存在が色んな意味で駄目になっている感は否めない。

まさに『シャア』の意志を受け継いだ佳織だからこそ運用可能なピーキーな機体となっているのだ。

フル・フロンタル

佳織と全く同じ顔と声を持つ謎の少女。

佳織とフロンタルの違いと言えば、肌の色と髪の色と長さぐらいで、他は全て顔と全く同じ容姿をしている。

顔だけでなく体のスタイルも全く同じで、スリーサイズも同じ。

それどころか細かい癖すらも同じで、二人が並べば本当の双子のように見える。

口調がISに乗った時の佳織と酷似しており、まるで他人の心を見透かしたかのような発言をする。

身近な人間達からは『大佐』と呼ばれている、全てが謎に包まれた存在。

分かっているのは、彼女が佳織達の明確な『敵』であると言う事だけ。

CVは東山奈央

アンジェロ・ザウパー

フロントルの直属の部下と思われる、束と同じ顔と声を持つ少女。だが、今の束よりは少し幼い体格で、佳織曰く『学生時代の束に似ている』。

容姿が酷似しているだけでなく、その頭脳と身体能力も束と全くの同等で、自分自身の手でISのコアを製造出来るほど。

故に、彼女は全く新しい、新機軸のISの開発に成功している。フロントルの事を完全に信用しきっていて、それは最早、尊敬を超えて信仰の域にまで経っている。

彼女もまたフロントルと同じように、全てが謎に包まれていて、何故か佳織と束と千冬を激しく憎悪している。

CVは田村ゆかり。

専用機は紫にペイントされたアンジェロ専用のギラ・ズール。

第1話 再会と出会いは突然に

自己紹介タイムが終了し、そのままの流れで一時間目のIS基礎理論の授業があった。

このIS学園は通常の学校とは違い、入学式の日から授業が始まる。

まあ、ISなんて代物を扱うんだ。

これぐらいは当然かもしれない。

で、今は丁度休み時間。

他のクラスメイトはもう仲のいいグループを形成していて、私は完全に出遅れた。

別に気にはしないけどな。

因みに授業の方はなんとかなった。

と言うのも、私がIS学園を受験することが決まった次の日に、いきなり匿名で私宛にISに関する参考書の類が送られてきたのだ。

普通ならば訝しむところだろうが、犯人については心当たりがあるため、そこまで動揺はしなかった。

やっぱり、事前に予習しておくのは大事だな。

前世では全くもってそんな事をしてこなかったから、何回も痛い目を見たし。

もう二度と追試を受けるような真似はしたくない。

そんな感じで、少なくとも勉強に関しては問題は無い。

後は人間関係だけか。

こればかりは一足飛びにどうこう出来るものじゃないしな。

まずは以前からの知り合いである一夏や箒を主軸に、ゆつくりと花を愛でるようにしながら交友関係を広げていけばいいだろう。

「ねえ、佳織」

おっと、そんな事を考えていたら、早速お隣さんの一夏さんが話しかけてきましたよ？

「さっきの授業……分かった？」

「一応。そっちは？」

「私もなんとか…。後でちゃんと復習をしておかないと」

原作とは違い、私の知っているこの『一夏ちゃん』はとても勤勉で努力家だ。

少なくとも、あの口だけの鈍感男とは雲泥の差がある。色んな意味で。

「よかったらさ、放課後にでも一緒に勉強しない？」

「別にいいよ。私もやっておきたかったし」

持つべきものは幼馴染ですなあ。

別にボツチを否定はしないけど、孤独に勝てる奴はそういない。

少なくとも、私は無理。

「ちよつといいか？」

「ん？」

私が幼馴染の素晴らしさに改めて感動していると、そこにもう一人の幼馴染がやって来た。

実に6年振りの再会となる幼馴染、『篠ノ之箒』である。

年月を経ても、勝気な印象は変わらない。

「その……佳織、一夏。屋上まで行かないか？」

「今から？」

「ダメか？」

「そんな事は無いけど……」

今から屋上なんかに行つて、次の授業に間に合うか？

全速力で走ればなんとかなるかもしれないが、廊下を走ったら確実に怒られるだろうし……。

「屋上まで行つたら確実に次の授業に遅れるよ？廊下じゃ駄目なの？」

「廊下……か。まあ…別に構わないが……」

「なら、廊下に行こうよ」

よく言った一夏！

私じゃ下手に何か言えばどうなるか分からないからな。

コミュスキルがある人間はこんな時に頼りになる。

そんな訳で、三人揃つて廊下に行くことに。

廊下もまた生徒でごった返していた。

初日と言う事もあつてか。全員が浮かれているというか、浮き足立っているような印象を受ける。

「ひ…久しぶりだな。二人とも」

「そうだね。確か6年振りぐらいになるのかな?」

「もうあれから6年か……」

時間が過ぎるのはあつという間。

これは何時になつても変わらない。

「そう言えば箒」

「な…なんだ?佳織」

「剣道の全国大会で優勝したんだつてね。おめでとう」

「な…なんでそんな事を知ってるんだ?」

「新聞で読んだ」

「私は佳織に教えて貰つて知つたよ」

「なんで新聞なんか読むんだ!?!」

「いや、普通に読むでしょ」

そんなに顔を赤くして怒ることも無いでしょうに。

高校生は新聞を読んじやいけないってか?

今のご時世、私達学生も政治に関心を持つてなくちゃダメなんだぞ?
?

選挙権を持つ歳になるのなんて、本当にあつという間なんだから。

「何をそんなにムキになつてるの?」

「私はムキになんて……」

「あつ…そつかく」

「な…なんだ一夏……」

「佳織に再会出来た事が嬉しいんでしょ?」

「な…ななな……!」

おいおい一夏さんや。

久しぶりに会った幼馴染をからかうのはよくないぞ。

箒だつてさつき以上に顔を真っ赤にしてるし。

「大丈夫か?」

「も…問題無い！」

「そ…そうか」

怒られた。

「ねえ……箒」

「なんだ…」

おや？なにやら一夏が箒に近づいて話している。

私の位置からはよく聞こえない。

「あの時の気持ちは……まだ変わってないの？」

「……!？」

「やっぱりそうか……。時間が過ぎても、佳織の事を好きなのは変わらない…か」

「わ…私は……」

つーか、さつきから箒の顔が真っ赤のままなんですけど。

マジで気分でも悪いんじゃない？

あ、でもまだ保健委員とか決めてないっけ。

「別に他の事で負けるのは構わないけど……これだけはいくら箒でも譲れないから」

「い…一夏？」

「私……負けないからね」

うーん……本当に聞こえない。

もしかして、私って今ボツチですか？そうですか。

私だけがのけものですか。

いいもーんだ。私にはスマホゲームのユーザー達やネットでの友達も沢山いるもんね〜(泣)

私が一人で寂しさを味わっていると、急に皆が教室に入りだした。

これは……

「二人とも、もうすぐ授業が始まる」

「な…なに？」

「やばい…！私達も早く教室に入ろう！」

幸いな事に、私達がいたのは教室のすぐそばにある廊下だったため、遅刻だけはせずに済んだ。

席に着いた直後に千冬さんが来た時は本気で焦ったけど。

・
・
・
・
・
・

二時間目の授業も何も問題無く進んだ。

隣の一夏を少しだけ見てみると、凄く真面目に授業を受けていた。

確か、原作ではここで『全部分かりません！』って問題発言をぶちかまして、教室中をフリーズさせたんだよな。

そんでもって、参考書を電話帳と間違えて捨ててから千冬さんのありがた〜い出席簿の餌食になっていた。

だが、ここではそんな事は無い。

原作とは違い、私の知っている一夏は自らの意思でここへの入学を望んだ。

故に参考書を間違って捨てるなどと言う愚行をしていないし、予習もばっちりやっている。

だから、授業についていけないと言う事は決して無い。

え？私はどうなのかだって？

私も大丈夫だよ。

さつきも言ったでしょ？予習はちゃんとしてきたって。

流石に代表候補生のようなとはいかないけれど、授業にちゃんとついていけるレベルには達していると自負している。

勿論、参考書も読破済み。

どんなもんだい！

にしても……

「〜であるからして、ISの基本的な運用に関しては現時点では国家の認証が必須であり、もしも枠内を逸脱したIS運用を行った場合に

は刑法によつて厳しく罰せられ…」

教壇の上で教科書をスラスラと呼んでいく山田先生には違和感しか感じません。

ぶつちやけ、私達と一緒に制服を着て席に座っていてもなんらおかしくない容姿だろう。胸以外は。

なんだありや。一体何を食べて、どんな生活をすれば、あんな超ド級のバストになるんだ？

……こんな事を考え始める辺り、もう本格的に思考が女子寄りになつて来てる…。

昔の男気に溢れた『俺』ははずこに……。

・
・
・
・
・
・
・

二時間目も無事に終了し、またまた休み時間。

今度は一夏と箒と一緒に談笑をしていた。

話し慣れている人物との会話程、気楽なものはない。

だが、ここである人物がやつて来る。

「少しよろしくて？」

来たか……。

日本人ばかりがいるこの一組において、珍しく金色の髪を靡かせている白人の少女。

そう、原作ヒロインの一人でありイギリスの代表候補生でもある『セシリア・オルコット』である。

「……なんだ？」

おおい！箒！？

最初っから喧嘩腰ってどうよ!?

「貴女には用事はありませんわ。私が話しているのは貴女です、織斑一夏」

「私……?」

「ええ。貴女、織斑先生と同じファミリネームですけど、もしかしてあの人の血縁者ですか?」

「織斑先生は私の姉さんだけど?それがどうしたの?」

一夏もそう睨むなって〜!

どうして二人とも、そんなに怖いんだよ〜!?

(佳織との話を邪魔して……!)

(何様のつもりだ……!)

けど、そんな二人に怯まないこの子もこの子だよ……。

もしかしたら、私の知っている原作ヒロインはここには存在しないのかもしれない……。

「姉……ですの……」

なんか一夏の事をジロジロと見てるけど、なんなんだ?

一夏が女である以上、彼女が嫌悪感を感じる理由にはならない筈だし……。

「あの『世界最強』の妹ともなれば、さぞかしお強いのでしょうか?」
「……!」

あ…言ってしまった。一夏に対する禁句を。

こいつは昔から千冬さんを通して見られるのを最も嫌う。

だからと言って、千冬さんの事を嫌いって訳じゃないみたいだけど。

「私は私だよ。そんな決めつけは好きじゃない」

「あら、ごめんあそばせ」

絶対に謝罪の気持ちなんてないな。

だって、顔が笑ってるもん。

「ですが、こうして一緒の学園にいる以上は、いずれ試合をする日もあるでしょうし、その時にでも貴女の実力を確かめさせてもらいますわ」

私は今までもこれからもお前達に埋もれるモブキャラで充分なんだよ。

キーンコーンカーンコーン

「チャイム鳴った」

チャイムが鳴ってから、クラスの中や外にいた生徒はすぐに自分の席に着いた。

私と一夏もそれに合わせて、次の授業で使う教科書などを取り出した。

・
・
・
・
・
・
・
・

三時間目。

今回教壇に立ったのは千冬さんだった。

「三時間目は実戦で使用する各種武装の特性などについての説明をしようと思う」

さて、また気合を入れて頑張りますか。

……あれ、何か忘れているような気が……。

「おっと、忘れるところだった」

何を？

「まだ再来週に行われる予定のクラス対抗戦に出る『クラス代表』を決定していなかったな」

そうだった……！

本来ならこれで一夏が推薦されて、それにセシリアがブチ切れて、そこから口論に発展して、最終的には決闘騒ぎになるんだよな……。

でも、今回はどうなるんだ？

全く先が予想出来ない。

「先生。クラス代表ってなんですか？」

「他の学校で言うところの学級委員だ。先程言ったクラス対抗戦の他に、生徒会が定期的に関く会議や委員会への出席などが主な仕事だ」
うん、まんまですね。

「最初に言ったクラス対抗戦とは、簡単に言ってしまうえば、入学時点で各クラスの実力の推移を計るものだ。現時点ではどのクラスも五十歩百歩だが、こうした競争心は同時に向上心も生む。一度決定したら、少なくとも一年間の変更はしないつもりだから、そのつもりでいるように」

案の定、クラス中が騒ぎ出す。

まあ、私は別にどうでもいいけど。

だって、私のような凡人が推薦される事なんて皆無に等しい事だから。

「じゃあ……はい！」

「織斑か。どうした？」

「私は佳織を……仲森さんを推薦します!!」

ほら、早速呼ばれてますよ、仲森さくん。

「ならば私も！佳織を推薦します！」

「篠ノ之もか……」

おや、二票になってしまったね。

何も言わなくていいのかな……って……

「私いつ!？」

ヤバイ……少しか現実逃避してた…。

「少し静かにしろ、仲森」

「すみません……」

でも、いきなり大声を出した私は悪くないと思う。

だって、いきなり自分の名前が出るなんて、誰が予想する!？」

「なんで私を推薦したのさ!？」

「だって……佳織なら適任だって思ったんだもん」

「だもんって……」

どこをどうしてそう思った？

「中学の時も佳織ってクラス委員をしてたし、二年の後半からは生徒会の副会長もやっていたじゃん」

「それは……」

あれは、私が家の用事で休んでいた時にいつの間にかクラス委員を決める話し合いで候補に挙がっていて、私の意思とは無関係に決定してしまっただけから、仕方なくやっただけだ。

副会長の件だって似たようなもの。

当時の会長さんと個人的に親しくて、土下座までしてきて『生徒会に入って私をサポートして!!』って言ってきたから、渋々生徒会に入っただけだ。

あの状況で『いいえ』と答える勇氣は私に無かった。

「結構実績あるんだ……。じゃあ、私も仲森さんがいいと思います！」

「じゃあ私も！」

ああ〜！他の連中も二人に便乗して私を推薦し始めたよ〜！

どうするんだよ〜！もう〜!!

「ふむ……今のところの候補者は仲森か。他にはいないか？別に自薦でも他薦でも構わんぞ」

本来ならここで抗議すべきなんだろうが、そうしたらきつと『拒否権は無い』って言われてしまうのがオチだ。

ならば、ここは他の二次小説で見た方法で行かせてもらう！

「わ…私は織むr」お待ちください！納得いきませんわ!!」…：さんが〜……」

そうだった〜！

余りの出来事に、こいつの存在をすっかり忘れてた〜！

怒髪天を衝くと言わんばかりにセシリアがいきなり立ち上がった。

「なんで代表候補生である私ではなくて、そんな人を推薦するのですか!？」

いきなりの問題発言乙。

「この私を差し置いて、彼女のような人物がクラスの代表だなんて……このセシリア・オルコットに一年もの長きに渡って恥辱を味わえ

と!?冗談じゃありませんわ!!」

まだ言いますか。

その辺にしておいた方がいいんじゃないかな?」

因みに、私は別に怒ってなんかいません。

だって、心は立派な大人ですから。

今の私を怒らせたなら、大したもんですよ。

「実力、実績共に優れているこの私がクラス代表に選ばれるのは最早必然!!それを、ただ過去に同じような経験があるからと言う理由だけで素人の少女を選ぶなんて、そんなのは唯の恥さらしですわ!!」

言うねえ。

でも、私の沸点まではまだまだ遠いかな?

「いいですこと!?クラス代表とは即ちクラスの顔!それはクラスで最も実力のある人物……即ち私こそが最も相応しいのです!!」

御高説、ありがとうございます。

でも、その発言でクラスの殆どを敵に回したね。

ほら、お前さんの事を凄く目で睨み付けてるぞ。

「アンタ……いい加減にしなよ」

「なっ…!」

あ……一番プツンしてた一夏が立ち上がった。

余計な事を言わなければいいけど……。

「佳織のことを何も知らないくせに、偉そうな事を言うな!!」

「なんですって!」

「お前みたいな奴なんかより、佳織の方が100倍強いんだから!!」

何を言い出すか!お前はく!!

そんな訳ないだろくが!!

少し考えれば分かる事だろうがよ!!

「その通りだ!!」

ほ…箒まで!?

「佳織は貴様のような女には…絶対に負けん!!」

言わないでえく!!

混乱と羞恥心とでどうにかなっちまうよく!!

っていうか、そこの教師陣は少しは止めようとしろよ!!

「け…け…け…」

「…この流れは…まさか…」

「決闘ですわ!!」

「ですよ〜!」

「言うと思いました〜!」

「仲森佳織!!」

「は…はい!?!」

「指差さないで〜!」

「皆もこつち見ないでえ〜!」

「この私とクラス代表の座を賭けて勝負なさい!!」

「わ…私はし〜」「望むところだ!!」「…言わせてよ…」

「私の意見を言わせてもらえない…」

「完全完璧な素人である私が代表候補生に勝てるわけねーじゃん!!」

「試合をする前から負けフラグが乱立してるよ!!」

「佳織の真の実力を見せてあげるんだから!!」

「覚悟するがいい!!」

「それはこつちのセリフですわ!!」

「当事者を無視して話を進めるなあ〜!!!」

「…って言いたいけど、言えない私って本当にヘタレ…」

「話は纏まったな」

「へ?」

「ま…纏まった?」

「それでは、勝負は今から一週間後の月曜日の放課後。場所は第3アリーナで行うものとする。仲森とオルコットはそれぞれに準備をしておくように」

「いや…私ですな…?」

「もう決定事項だ。潔く諦めろ」

「そんな〜無体な…」

「私が何をしたらっていうんだ…?」

「大丈夫!一週間もあれば十分だよ!」

お前と一緒にするな〜!!

私は一夏のような主人公体質の人間じゃないんだよ〜!

一週間でどうにかなるなら、誰も苦勞せんわ〜!

「織斑、篠ノ之、オルコット、そろそろ座れ」

「二あ…はい」

流石に千冬さんには逆らえないのか、三人は大人しく座った。

「では、今から授業を始める」

はあく…これも神が与えた試練なんだろうか…。

今から緊張で胃が痛いよ…。

これから本当にどうしよう…。

第2話 ルームメイト

やっと初日の授業が全部終わった……。

授業自体は大丈夫だったけど、問題は私がセシリア・オルコットと試合をすることになったこと。

「うう〜……」

どうしてこんな事になってしまったんだろう……。

私ってばどこかで何かを間違えた？

「えっと……その……ごめんね？」

「謝るぐらいなら、今後はもう少し沸点を高く設定してほしい……」

「本当にゴメン……」

隣の一夏が済まなそうにしているが、私にはそんな事を気にする余裕が無い。

「佳織……」

「箒？」

今度は箒か。

「さっきは悪かった……。あの女の発言についてカツ！となってしまうて、気が付けばあんな事に……」

シユン……として落ち込んでいる箒。

心なしか、彼女のポニーテールも下がっているような気がする。

「はあ……。もういいよ、二人とも」

「え？」

「し……しかし！」

「決まってしまった事は仕方が無いよ。こうなったら、ウジウジと考えるより、試合に向けて何が出来るのか考えた方が建設的だ」

「佳織い〜……」

大体、私がこの二人に文句とか言うわけないじゃん。

経緯はどうあれ、一夏と箒は私の事を思っ立ち向かったんだし。

私一人だったら、絶対にあの迫力に負けてたしね。

「取り敢えず、今日の所はもう帰ろうよ。IS学園の寮がどんな風になっっているか興味もあるし」

実はアニメで見た事はあるんだけど、やっぱり生で見てみたいよね。

「そうだね。噂じゃかなり高級な仕様になってるって聞いたけど」

「そうなのか？」

「うん。ネット上でIS学園の色んな噂が飛び交っていて、その中にそんな事が書かれてあったの」

機密だらけのIS学園が、よくそんな事を許したな。

まだ噂の段階だからか？

少しだけ後ろを向いてセシリアの事を見てみると、案の定と云うか、誰にも話しかけられてなくて、完全なボツチになっていた。

自業自得とは言え、見ていて何とも不憫な気持ちになる。

「どうした？」

「ううん。なんでもない」

私達はさっさと帰りの準備をして、教室を後にした。

今は皆が女の子なので、特別処置で寮の部屋決めをされてはいない。

私達全員が入学時に予め寮の部屋の場所は教えられている。

だから、ここで千冬さんと山田先生がやって来ることは無い。

・
・
・

・
・

・

寮の中を見学しながら私達は歩いて行く。

こうして見てみると、廊下すらも高級感満載だな。

流星は、この世界の根幹を成すISを学ぶ学校だ。

細かい所にも気配りが見え隠れしている。

「夕食って何時からだっけ？」

「確か、18時から19時までで寮にある一年生用の食堂で食べられる筈だ」

一時間か。

使う時は早く行かないと、場所取りが大変そうだな。

「ここには大浴場もあったな。でも、あまり使う機会はないだろうな」

「え？なんで？大きなお風呂って気持ちよさそうじゃん」

女になっても、一夏のお風呂好きは変わらない…と。

「一応、各部屋にシャワー室もあるから、嫌だったらそれを使えばいいでしょ」

「でもさ、シャワーだと体はあんまり温まらないよ？」

前にテレビでも言ってたな。

可能であれば肩まで湯船に浸かって体を温めた方が疲れも取れやすいか。

「か…佳織は大浴場を使う気なのか？」

「う〜ん…私は機会があれば行こうかな？」

興味が無いと言えば嘘になるし。

大きな風呂に浸かりたいと言う一夏の気持ちも理解できるしね。

「二人の部屋はどこなの？」

「私は1025室だ」

「え？私もだよ？」

「なに？」

……ここも原作と変わらないようだ。

性別が変わっても、この二人はセットなのね。

「佳織と一緒にじゃないのか……」

「いや、こんだけ生徒がいるんだから、私と相部屋になる可能性なんて皆無に等しいと思うけど？」

「それでも願ってしまうよね…」

一夏よ、お前もかい。

「まあ……さっきの佳織ではないが、決まっちゃったものは仕方が無い。一緒のクラスであるだけ、まだマシと考えよう」

「そうだね。前向きに前向きに」

ポジティブシンキングですな。

後ろ向きな考えよりはずっといい。

話しながら歩いてみると、いつの間にか1020と書かれた部屋の前にいた。

「む？ここが1020ならば…」

「この5つ先が私達の部屋だね」

「そうなるな。では、私達はこれで」

「うん。夕食ぐらいは一緒に食べようか」

「ああ。時間になったら待ち合わせでもするか」

「それいいね！」

二人とはそんな事を話しながら一旦別れた。

「さて、私の部屋は……こつちか」

私の部屋は二人の部屋からは少し離れている。

別に苦ではないが、会いに行くには少し面倒かも。

私の部屋はどこかしら♪

「お？ここか」

1047室。

かなり離れてるな。

「まずはノック。コンコンと」

軽くドアを叩くと、中からは全く返事が無い。

「ん？誰もいないのか？」

まだ来ていないのか。もしくは私の一人部屋？

まさか、寝ているってことは無いよな？

あ……もしかして。

(原作の一夏みたいに、シャワーを浴びていてこつちのノックに気が付いていないって可能性も……)

でも、女同士でそんなラッキースケベとか意味無いしな。

場合によっては私の方が『きゃー！』って言う立場だし。

「鍵は……」

あ、開いてるし。

「……入ってみようか」

そつと扉を開けてから中に入る。
念の為に静かに入室。

「失礼しまくす……？」
抜き足差し足忍び足。

爪先を立てて歩いて行くと、中はガラ〜ンとしていた。
部屋の中を調べてみると、シャワー室には誰もいないし、かといつて他の誰かの荷物があるわけじゃない。

この状況から察するに、つまりは……

「私の心配は杞憂だった？」

自分の早とちりだったと分かると、急に力が抜けた。
適当に荷物を置いてから、ベットに倒れ込んだ。

「うわあ〜……ちよーふかふかなんですけど〜」
すげ〜……これならマジで熟睡できそうだわ〜。

吉良吉影もびっくりだ。

「ま、寝ないけどね」

まだ寝るには早すぎる。

つて言うか、全然眠気とか無いし。

「……本当に一人なのかな」

だとしたら寂しいかも。

最初は気楽に感じるかもしれないけど、きつと途中から孤独に耐えられなくなるって思う。

人は一人では生きられないから。

そんな感じに一人でシリアスごっこをしていたら、再び部屋のドアが開かれた。

「ん？」

誰だ？つて……入学初日にここに来る人間なんて限られてるじゃん。
まず間違いなく同居人だろう。

一体誰さんしょ。

「あれ〜？もしかして、かおりん〜？」

この間延びした声は……まさか？

「えつと……布仏さん……だったよね？」

「本音でいいよ。そっか〜…かおりんが私のルームメイトだったんだね〜」

布仏本音。

制服の袖がやたらと長い彼女も立派な原作キャラの一人だ。

他のヒロインよりは出番は少ないが、それでも結構な人気はある。

この独特のキャラ性が人気の秘密だろうな。

何気に生徒会役員だし。

「えつと…これからよろしくね?」

「うん。よろしく〜」

基本的にいい子ではあるし、よくあるテンプレのように更識簪や監視目的で生徒会長の更識楯無が来るよりはずっといい。

あの姉妹とこの段階で知り合うとか、ストレス以外のなにものでもない。

決して嫌いと言うわけではないが、こっちにだって心の準備が必要なんだ。

「そうだ。どっちのベットがいい?なんとなく私はこの窓側にいるけど、もしこっちがよかったら…」

「私はどっちでもいいよ。かおりんが好きな方を選んで、残った方を私が使うから」

本音ちゃん…なんていい子や〜!

やべえ…本音ちゃんマジ天使。

「ねえ…『かおりん』って私の事?」

「そうだよ。嫌だった?」

「そんな事は無いよ。ただ、同じように私の事を『かおりん』って呼ぶ人がいるからさ。ちよつと気になって」

「そ〜なんだ。かおりんがかおりんなのは、もう運命なんだね〜」

運命で渾名を決められても。

「それじゃあ、軽くこの部屋のルールとか決める?」

「そうだね〜」

本音ちゃんとなら、いいルームメイトになれそう。

きつと、この子が私の癒しになっていくんだろうな…。

・
・
・
・
・
・
・

授業が終わり、私と真耶は職員室に向かって歩いていった。

「にしても、なんだか大変なことになりましたね。まさか、試合にまで発展してしまうなんて……」

「そうかもしれないが、これもいい機会だと思って割り切ろう」

「織斑先生は達観してますね」

「達観と言うよりは、慣れたな」

「慣れ？」

束の相手をしている時は、いつもがトラブルの連続だった。

私を初めとして、一夏や箒、佳織もよく巻き込まれていたものだ。

「けど、仲森さんは大丈夫でしょうか……」

「と言うと？」

「だって、オルコットさんは代表候補生ですよ？これが三学期とか二年生になった時ならいざ知らず、今の段階で仲森さんが勝つのは……」

実に常識的な意見だ。

確かに、普通に考えればちゃんとした訓練を受けてきたオルコットに素人同然の佳織が勝利するなど、万に一つもあり得ないかもしれない。だが……

「そうとも限らんど？」

「え？」

「山田先生は、仲森の入学試験の時の実技を見ているか？」

「え……はい。一応は」

「あの時にアイツの試験官をしたのは私だった」

「はい。よく覚えてます」

試験の際、打鉄を纏った佳織を見て、柄にもなく興奮したもんだ。あの歳にして中々にスタイルがいいからな、あいつは。

「実はな、あの時の最初の一撃だけ、私は全力だったんだ」

「ええっ!?でも、それって……」

「ああ」

結果としては佳織は秒殺に等しかったかもしれない。

だが、あの最初の一撃を佳織は完全に回避して見せたのだ。

私の全力の一撃を……だぞ？

引退したとはいえ、まだまだ腕は錆びついてはいないつもりだったが、あれには本気で驚かされた。

しかも、その後も佳織は的確に防御と回避を駆使して見せた。

まあ：最終的には私の勝利だったがな。

それでも、今までISに乗ったことも無い少女とは思えないほどの動きを見せたのは事実だった。

「確かに仲森はド素人だ。だがな、それはあくまで『今』の話だ。アイツには間違いなく天性の才能がある。何か切っ掛けとなつてそれが目覚めれば、凄い事になるかもしれないぞ?」

「先輩がそこまで言うなんて……。だから、さっきも止めようとしなかつたんですね?」

「そういう事だ」

おいおい、先生が抜けてるぞ。

今更、気にはしないが。

「仲森さんのIS適性ってA+でしたよね?」

「そうだ。だから、あの試験を見ていた連中が早くも仲森に関して色々と話し合っているようだぞ?」

「じゃあ、もしかして専用機が?」

「可能性は高いだろうな。仮に用意できなくても訓練機をアイツ用に貸し出すくらいの事はしそうだ」

今のIS委員会は将来性を重視する傾向にあるからな。

その点で言えば、私の妹の一夏も目を付けられているが。

一夏も実技試験で中々の動きを見せた上に、IS適性がAだった。この分だと、一夏にも専用機が用意される可能性も出てくるな。

「兎に角、試合があるまでの一週間は少し目を掛けてやってくれないか？私も可能な限りフォローはするつもりだ」

「分かりました。どこまでやれるか分かりませんが、せめてちゃんと試合が出来るぐらいにはしてあげたいですからね」

「そうだな」

佳織。お前はよく自分の事を卑下するが、お前にはお前自身も知らない才能が埋まっているかもしれないんだ。

だから、自らの可能性を閉ざそうとはするなよ。

私は信じているからな。

第3話 初めての朝

セルジオ越後く♪(ドラクエの宿屋に止まった時に流れるBGMに乗せて)

つてな訳で、次の日の朝になりました。

「うう〜ん……………」

ベッドから起きて、体を思いつきり伸ばす。

そしてカーテンを開けると、眩しい朝日が差し込んでくる。

実に清々しい朝だ。

「さて…と。本音ちゃんは……………」

「すび〜…」

はい、まだまだ夢の中でした。

しかし…………彼女はどうして殆ど着ぐるみに近いようなパジャマを着てるんだろう？

別に悪いとは言わないが、寝苦しくないのかな？

「本音ちゃん。もう朝だよ。そろそろウエイクアップするがよろし」

「うう〜…………あと五時間〜」

「そこは普通、後五分じゃないの？」

どんだけ寝る気だよ。

仕方が無い。少し強引に行くか。

私は彼女の体をゆすつて起こすことにした。

「ほ〜ら！早く起きないと朝ご飯を食べそこなうよ！」

「それは嫌だ！」

あ、起きた。

「ふう…………。おはよう、本音ちゃん」

「おはよう…………かおりふああ〜……………」

最後まで言えてないぞ。

「まずは顔を洗ってきなよ。服とかはこっちで用意しておくからさ」

「ありがと〜。なんか、かおりんってお母さんみたいだね〜」

「こんなに手のかかる娘はいりません」

「にやはは〜。じゃ、行ってくるね〜」

全く：お母さんみたいって……。
実は割と言われ慣れてたりして。

どうやら、私は他から見たら少し世話好きのように見えるらしく、気が付けば同級生からもお母さんと呼ばれて、よくからかわれたっけ。

「おっと、こつちも準備しないと」

マジで早く行かないと、私まで朝ご飯を食べられなくなる。

今日の授業は確か……

……

……

……

……

……

食堂に着くと、もう既に結構な数の生徒がいて朝食を食べている。

「うわあ〜：本当にいる〜」

「でしょ？：今度からは、もう少しだけ早起きしようね？」

「は〜い」

……：本当に同年代なのか疑わしくなってくるな……。

ここの食堂は販売機で食券を購入し、それをカウンターに出して注文の品を貰うシステムになっている。

私と本音ちゃんも一緒に販売機の所まで行くことにした。

「どれにしようかな〜」

「朝からガッツリしたものは食べたくないな〜……」

なんとなくだけど。

私はご飯もパンも両方食べるけど、基本的に朝はご飯は食べない。
食べるとしたら昼か夜だな。

「これにしようか」

目についたトーストと目玉焼きセットを注文。

ついでにコーヒーマも。

「かおりんは決めたの〜」

「うん。そっちは？」

「私はね〜……」

少しだけ悩むような仕草を見せると、私と同じボタンを押した。

「えへへ〜……お揃い〜」

なにこの可愛い生き物。

「じゃ……じゃあ、早く注文しようか？」

「うん」

そそくさとカウンターまで行って、食券を出す。

すると、おばちゃんがあつという間に注文の品を出してくれた。

「早……」

「予め用意してあるからね。けど、それだけで大丈夫かい？」

「はい。その代わりに昼と夜に食べますから」

「若いっていいね〜」

そんな貴女も十分に若いと思いますが？

なんて言ったら、また話が長引きそうだったので、大人しく飲み込んだ。

トレイを持ってどこか空いている席が無いか探していると、見覚えのある背中を見つけた。

「あれは……」

「おりむーとしののん？」

……『おりむー』って一夏の事？

そして、『しののん』は箒の事か……？

二人は揃って座っていて、もう食べ始めているようだった。

丁度いいから、私達も彼女達に便乗することに。

「ここいいかな？お二人さん」

「か……佳織？」

「おはよう、佳織」

「おはよ〜」

二人はどうぞやら和食セットを食べているようだ。

一夏はともかくとして、箒も相変わらず和食が好きなんだな。

「で、ここいい？」

「遠慮せずがいいよ」

「ありがと。じゃ、お邪魔して」

私と本音ちゃんは二人の隣に座ることに。

「ところで、佳織の隣にいるのは……」

「ああ……。この子は私のルームメイトの布仏本音ちゃん。まだ完全に覚えてないかもだけど、れっきとしたクラスメイトだよ」

「そ……そうか。早く皆の顔と名前を憶えないとな……」

箒は昔から人の名前や顔を覚えるのが少し苦手な傾向があるからな。

ま、少しづつ覚えればいいさ。

「布仏本音だよ。よろしくね」

「篠ノ之箒だ。こちらこそよろしくな」

「私は織斑一夏。よろしくね」

「知ってるよ。これから仲良くしようね、おりむーにしののん」

「お……おりむー？」

「しののん？」

うん、それが普通の反応だと思う。

「ところで、二人ともそれで足りるのか？」

「佳織はいつもの事だけだね」

「そうなのか？」

「中学の時はよく佳織の家まで迎えに行くことがあったから。その時に朝食の風景をよく見かけたんだ」

普通ならあり得ないかもしれないが、互いに勝手知ったる仲だったし、別に気にしてなかった。

私だってよく織斑家にお邪魔したことがあったし。

「佳織は朝食べない分、昼や夜に沢山食べるんだよ」

「それでよく太らないな……」

「私もそう思う。多分、体質じゃないかな？」

「佳織……たった今、世界中の婦女子を敵に回したよ」

「え？なんで？」

体質は仕方ないでしょ？

昨今のフードファイターなんて、その殆どが痩せてるじゃん。それと一緒にだって。

なくって話しながらも、ちゃっかりと食事は進めていますよ。

我ながら、結構器用なもんだ。

「そう言えば、佳織達は一年寮の寮長って誰だ知ってる？」

「いや？もしかして…千冬さんだったりする？」

「正解。よく分かったね…」

「一夏がそんな話を振ってくる時点で、なんとなくそんな気はしてた」

「佳織は本当に勘が鋭いな…」

「そう？」

普通に推理すれば分かりそうなもんじやない？

「おお…：かおりんはちよーのーりよくしゃだったのか」

「いやいや」

超能力って…。

偶々答えが当たった程度でそう言われてもな。

こつちが苦笑いをしていると、そこら辺からひそひそ声が聞こえてきた。

「ねえ…：あの子が…」

「うん、聞いた聞いた」

「代表候補生と試合をするんでしょ？勝ち目なんてあるのかな？」

「いや、普通に考えて勝率なんてゼロに等しいでしょ」

「ははは…：言われてますなあ」。

「…気にするな佳織」

「そうだよ。あんな高飛車女になんか絶対に負けないって」

「どこからその自信は出てくるんだ…」

少なくとも、私には勝てる見込みも根拠もない。

無様に負けるビジョンしか頭に浮かばないよ。

1週間後の試合の事を考えると、ふと思いつくのが実技試験の時の事。

あの時の私は凄く緊張していて、手も足もガタブルだった。

しかも、その時の試験官が千冬さんだと知って、更に緊張が悪化。最終的には胃まで痛くなった。

試験が始まって、千冬さんが剣を構えて凄い形相で突っ込んでくるもんだから、私は怖くなって思わず後ずさり。

その時に足がもつれて倒れそうになったのだが、それが結果として千冬さんのファーストアタックを回避することになった。

偶然って恐ろしいもんだよ。

その後も、恐怖から腕で顔を覆ったりして、その瞬間に腕の装甲に振動が走ったり、反射的に体を縮めこもうとして、自分の体があった場所を剣が通過したりと、私的には恐怖体験の連続だった。

正直な事を言うと、もう二度とISの試合とかしたくない…。

あの実技試験は私のトラウマになったよ…。

(でも、やるって決めちゃったしなく…)

自分で自分の言った事を覆すような真似だけはしたくない。

確かに私はドジでマヌケでヘタレだけど、自分に嘘をつくのは嫌だ。

やれるだけやって、後の事はそれから考えよう。

「って言うか、早く食べないと朝のホームルームに遅れるかも」

「そうだな…と云っても、もう食べ終わるがな」

私達四人の皿はもう空寸前だった。

あと一口二口食べれば終了だ。

ささつと食べ終えてから食堂を後にすると、案の定と言うべきか、ジャージ姿の千冬さんが食堂に行く姿を目撃した。

その後、食堂の方から『いつまでちんたら食べている!! 食事はいつも迅速に効率よくとるようにしろ!! もしも遅刻したら、グラウンドを10周させるぞ!!』って叫び声が聞こえてきた。

それを聞いて、私達は早く食べてよかったと心底思ったのだった。やっぱ、怒った千冬さんって怖え…。

・・・

・
・
・
・
・

早くも今日の授業の内の二時間が終了し、今は三時間目。

授業を受けながら、これから何をすればいいか考えたが、素人染みた事しか浮かばない。

体を少しでも動かして体力を付けたら、放課後に授業以外にも勉強して、知識だけでも身に着けるとか。

付け焼刃だと分かつてはいても、この程度しか思いつかない自分が腹立たしいよ…。

けど、そんな事を考えている間も授業は進んでいくわけで。

「そんな訳で、ISは宇宙空間での作業を前提として制作されていますので、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアで覆っています。また、生体機能の補助をする役割もあり、ISは常にパイロットの身体を安定した状態に保ちます。これには主に心拍数や脈拍、呼吸量や発汗量なども含まれていて……」

この辺りはもう予習で勉強してるから、私としてはこの授業の内容は復習に近いんだよね。

だからこそ、私は他の事を考える余裕があるんだけど。

なんか女子達が山田先生に向かって変な質問をして、それに対して山田先生も慌てながら変な例えで答える。

それによつて、教室全体が変な空気に晒されることに。

ああ……これが女子高特有の空気ってヤツか。

今までは共学しか行ったことないから、なんか新鮮だな。

教室の後ろの方で授業を見ている千冬さんの咳払いで空気が再び引き締まり、授業が再開する。

そんな事が何回か繰り返された後に授業が終了。

これでいいのかと思つた私はおかしいのだろうか？

「次は空中におけるISの基本制動の方法をしますからね」

まだその辺りか。

私はもうちよつと先までやってるぞ。

授業が終わってすぐ、皆は各々にグループに分かれる……と思っ
ていたが……

「ねえねえ！仲森さんって強いのだ！」

「今度の試合、私は応援してるからね！」

「大丈夫！きつとなんとかなるよ！」

なんでか皆が私の所に殺到。

そこまで注目するような事？

「今朝さ、織斑さんや篠ノ之さんや本音ちゃんと一緒に食べてたけど、
あの三人とは仲いいの？」

「まあ……一応。一夏と箒は幼馴染だし、本音ちゃんはルームメイトだ
から……」

「へえ……そうなんだ〜」

お願いだからあっち行って！

私のようなコミュ症にはこの状況は非常にキツイ！！

今はなんとか笑顔で誤魔化してるけど、実はヒクヒクしてます。

手は冷や汗でびしょびしょだし。

誰でもいいからボスケテ〜！と思っで一夏や箒の方を見ると……。

「は……入れない……」

「佳織い〜……」

二人もこの人だけに困っているようで、本音ちゃんに至っては

……

「す〜……」

寝てるし！！

この喧噪でよく寝れるな!?

本気で感心するわ!!

おのれ〜……私に救世主はいないのか!?

「お前達……」

「あ……」

お〜い……みなさ〜ん……後ろ〜……。

「「「へ？」」」」

次の瞬間、私の周りに群がっていた女子達の頭に出席簿が振り下ろされ、教室に凄い音が鳴り響いた。

「休み時間はもう終わりだ。とつとと席に着け」

ち……ち……ち……千冬さあくん!!

今のこの瞬間、千冬さんが誰よりも眩しく見えた。

皆は蟻の子を散らすかのように、自分の席に戻っていった。

よ……よかつたあく……。

「大丈夫か？」

「はいいゝ……」

「そうか」

なんかそっけないけど、今の私にはそれだけでも有難いですう。

(私の佳織を困らせおつて……！これからは少し厳しめにいくか?)

なんだろう……どこかでこのクラスのハードモードが決定したような気が……。

全員が席に着いたことを確認してから、千冬さんも教壇に立った。

授業の挨拶をして、席に座って教科書を開こうとしたら、なんか千

冬さんがこつちを見ていた。

「授業の前に仲森と織斑。お前達に知らせる事がある」

「はい？」

知らせる事？

このタイミングなら……一夏の専用機『白式』の事か？

あれ？でも私の事も言ったよな？

「今回、お前達には特別にISが用意されることとなった」

「ええっ!？」

一夏だけじゃなくて、私も!?

「ど……どういう事ですか？」

「入学試験の際に行った実技試験。あれを委員会のお偉いさんが見ていたらしくてな。そこで活躍した織斑に試作機のテストパイロットをしてもらいたいそうだ」

「私がテストパイロット……」

「そうだ。これは依怙鼻肩などではなく、純粹にお前の実力と努力が認められた結果だと思え」

「分かりました！」

実技試験で活躍って……一体何をしたん？

「あの……一夏は今の理由で納得しますけど、どうしてそこに私の名前も挙がるのでしょうか？」

「その理由はいくつかある。まず一つ」

何個もあるのかよ……

「お前のIS適性が高かったことだ」

「私の適性が？」

「そういや、入学時に色々調べていたっけ。」

私の適性は……なんだったっけ？

「先生。仲森さんのランクが高いって、どれぐらいなんですか？」

「仲森のIS適性はA+だ」

「「「おお〜!!」」」

A+って……世界中の専用機持ちの殆どがそのレベルだったよな？

あれ？じゃあ私って適性だけは高いってこと？

何よ、その宝の持ち腐れは。

「それと、委員会の方々がお前の将来性に期待したからだ」

「は……はい？」

将来性とな？

「結果はどうあれ、お前の動きを見て、委員会がお前に専用機を与えてもいいと判断した」

いやいや、別に判断なんかしないでいいから。

私になんか期待するだけ無駄だって。

今からでも遅くないから、考え直そうよ。

「と言つても、お前の場合は織斑のようなワンオフの機体ではなく、量産機の改造機のようなものだがな」

気にするなと言っていているようにも聞こえるが、私的には充分すぎるぐらいに分不相応ですから！

「本来ならば国家や企業に所属する人間にしか用意されないのだが、

お前達二人はIS委員会から機体のデータ収集の為にテストパイロットとして起用された。だが、あくまでテストパイロット。機体はお前達に譲渡するのではなくて貸し与えるのだと言う事を忘れるなよ?」

「はい」

ISを個人で持つとか、絶対に不可能でしょ。

ISのコアは世界中に467個しか存在せず、そのコアを製造出来るのは束さんだけ。

肝心の束さんはなんでかISのコアを必要以上に作ろうとはしないし。

その明確な理由はよく分かっていない。

だからこそ、ISの専用機を持つ存在は一種のエリートのような扱いを受けている。

セシリア・オルコットも、自分の事をエリートだと思っている類の人種だろう。

「いいなあ〜…専用機……」

「この時期に与えられるなんて、二人ともどんな試験だったのかしら?」

「やつぱり、仲森さんって凄かったんだ…」

また私に対する評価が無駄に高くなりそう……。

けど、事実を知った時にその夢は醒めるだろう。

そうなれば、また静かな毎日が帰ってくる。

「話はここまでだ。では授業を始める」

あれ?ここで箒が束さんの妹だっという話が来るんじゃないの?

でもあれって、一夏が教科書を読んで束さんの名前が出て、その流れで箒の話になったんだっけ。

今回は教科書を読んでないから、その流れにならなかつたのか。

普通なら名字で気が付きそうなもんだけど、皆なりに気を使っているのか?

けど、専用機……か。

どう考えても面倒くさい事になるだろうな……。

神の意思はどこまで私を玩具にするきだろうか……。

第4話 鍛えよ 勝つために

なんか最近、今までの人生以上に流されてる気がする…。

私の意思とは関係無くクラス代表の候補になって、私の意思を無視して専用機が用意されて…。

いやね？私だって流される方が楽なのは知ってるよ？

勿論、それがあまり良くないってことも。

前世では、流されるがままの人生を送ったせいで碌な目に遭わなかった。

だから、今度こそは自分の意思で色んな事を決められるようになるう！って思ってたんだけどなあ…。

やっぱり、理想と現実って全然違うわ…。

なくんて事を考えていたら授業は終わり、今はお昼休み。

私は精神的疲労から机にグテ〜ンと体を預けていた。

「少しだけ安心しましたわ。まさか、無改修の訓練機で試合に臨もうとは思ってはいなかったでしょうけど」

またお前か。セシリア・オルコット。

この時期の彼女って、こんなにもウザいキャラだったんだ…。

お前さんは優雅にやって来たつもりかもしれないが、周囲のお前に対する目線は絶対零度だぞ。

「まあ…勝負はするまでも無く分かりきってはいますけど、流石にあのままでフェアとは言い難いですものね」

「そうですか」

いいから、とつとどっかに行つてよ。

「こちとら早くお昼が食べたいんだよ。」

「なんですの！その態度は…このエリート中のエリートとも言うべき私と会話をしているのですよ！背筋ぐらいは伸ばしたらいかげすの!?!」

伸ばす元気も無いんだよ。

主にお前のせいだ。

「いい加減にしなよ」

「一夏……」

さつきから隣で様子見をしていたけど、我慢出来ずに話しかけてきたか。

出来れば、もうちょつと早くしてほしかったけど。

「佳織が迷惑してるじゃん。早くお昼でも食べに行ったら？」

「この私という事が迷惑ですって……？どうやら、専用機の所持が認められたからって、調子に乗っているようですわね！」

「専用機は関係ないでしょ！それに、調子に乗ってるのはそっちの方じゃん！」

ああ……火に油を注ぐような真似を……。

「なんですって!?!」

「なによ!?!」

どうにかして止めなきやく！と思っけていても、私が下手に話しかけたら悪化しそうだし、どうすれば……。

「何をしている。早く行くぞ」

「箒……」

ほ……箒か……。

でも、彼女はある意味では一夏以上に沸点が低いし、これはヤバいかも……。

「一夏も。そんな奴は放っておけばいいんだ」

「でも……」

「ここで言い合っても意味無いだろう。それに、当事者である佳織が冷静なのに、お前が熱くなつてどうする」

「う……」

別に冷静じゃないけどね。

ただ、どうすればいいか困っていただけで。

って言うか、箒ってこんなにも落ち着いたキャラだったっけ？

私の記憶が正しければ、もう少し乱暴なイメージが……。

「そう言えば貴女……」

「なんだ？」

「あの『篠ノ之博士』と同じファミリーネームですけど、もしかして親

族だったりしますの?」

どうしてソレを今ここで聞いちゃうかな?!

私と一夏、あの千冬さんも安易に触れないようにしている事なのに
〜!

「……………さあな」

小さくボソツと呟いて、箒は教室から出て行った。

やっぱり、何かしらの思うところはあるのかな…………。

「フ…フン!とにかく!このクラスの代表に最も相応しいのは、この
セシリア・オルコツトだと言う事をお忘れなきように!」

セシリアも行ってしまった…。

「…………私達も行くのか?」

「だね。本音ちゃんも一緒に来る?」

「いいの〜?」

「勿論」

「じゃあ行く〜!」

そんな訳で、私達は先に行った箒の後を追うようにして、揃って食
堂に向かうことにした。

・
・
・
・
・
・
・
・

途中で箒と合流した私達は、そそくさと食券(日替わり定食)を購
入して注文の品を受け取った。

そして、空いている席を発見するや否や、速やかに移動して席を確
保。

この時ばかりは実に見事なコンビネーションだったと言える。

「箒…………さつきはごめんね。なんか巻き込んだって…………」

「別に佳織が謝る必要はない。アイツが全部悪いんだ」

「でも……」

「箒の言う通り、佳織は何も悪くないよ。向こうが勝手に喧嘩売って来たんじゃない」

一夏はセシリアの事をめっちゃ敵視してるな。

まさに『犬猿の仲』って感じ。

逆に箒は軽く受け流してる。

まさか、箒の方が大人の対応をするとは思わなかった。

「かおりんも大変だね」

「そんな口調で言われたら、全然大変な気がしないね」

「なんだか、こっちまで脱力しそうだ」

「え〜?」

でも、さつきまでのピリピリした空気は無くなった。

本音ちゃんは凄いなあ〜…。

まさしく、愛すべき一組のマスコットだね。

そんな事を話しつつ、今日の日替わり定食についてきた納豆をコネコネとこな。

「納豆はいいよね〜。栄養たっぷりで美味しくて、まさにリリンの生み出した文化の極みだね」

「納豆が文化の極みだったら、江戸時代辺りから日本の文化は極まっていることになるな」

実際そうじゃない?

過去から学ぶ事って私達が思っている以上に多いし。

こねまくった納豆をほかほかのご飯に投入〜♡

「ねえ、君が例の噂の子でしょ?」

「「は〜?」」

至福の瞬間を迎えようとした時、隣からいきなり話しかけられた。今回で二回目だな。

よく見ると、それは見た事の無い年上と思わしき女子生徒だった。と言うか、実際に年上だな。

だって、リボンの色が赤…つまり、三年生の色をしていたから。

「噂ってなんですか?」

「あれ？知らないの？今年の新入生の代表候補生以外で唯一、IS適性がA+の子がイギリスの代表候補生と試合をするって、学園中の噂よ？」

「うえ〜…マジですか？」

「マジもマジ。新聞部の子が躍起になってたから」

い…いつの間になんか事にな…!?

恐るべし…IS学園の情報伝達速度…!

学校とは一種の閉鎖社会だ。

故に、少しでも目立つ情報が流れれば、あっという間に端まで伝わる。

そんな話を昔聞いた事があったような気がしたけど、まさかそれを我が身で実感する羽目になろうとは……。

「でも、大丈夫なの？こう言っちゃなんだけど、君って素人…だよね？」

「はい。紛れも無く、どこに出しても恥ずかしくないド素人です」

「そ…そこまで自信满满に言わなくてもいいけど……」

素人なのは本当だし。

「君の今までのIS稼働時間ってどれぐらいなの？」

「他の皆と大差ないですよ」

「だったら、かなり不利よ。ISはね、基本的に稼働時間が物を言うの。相手は代表候補生。間違いなく300時間は超過してるわよ？」

「でしようね」

んなことあく分かってるんだよ。

「だったらさ、私がISの事を教えてあげようか？」

そう言うと思っていましたよ。

けどね……

「悪いですけど、今回はご遠慮します」

「…え？なんで？」

「先輩の申し出は本当に有難いです。けど、最初から誰かに頼ろうとしていたら、きつとこれから先も誰かに頼ることが癖になってしまいます。別にそれが悪い事とは言いません。私は何も言おうとせず

流された結果、今の状況にあります。ここに来て、また状況に流されていたら、この流れから出られなくなってしまうような気がするんです。だから、この『最初の一步』ぐらいは、自分の意思で踏み出したんです」

なんて偉そうな事を言っではいるけど、本格的にヤバくなったら恥も外聞も捨てて、遠慮無く頼るんだろうな。

でも、それまでは自分の足で歩かなきゃ。

「…君の言ってることは本当に素晴らしいわ。でも、代表候補生はそんなに甘い存在じゃないわよ?」

「分かってます。今の私じゃ勝ち目なんて全く無いってことぐらいは」

「だったら…「でも」…?」

「あの偉そうなツラに一泡吹かせるぐらいの事は出来るかもしれないじゃないですか」

一週間もあれば、一矢報いるぐらいは可能かもしれない。

同じ負けるでも、何も出来ずにボロ負けするよりはずっといい。

「ここは思ってる以上に情報の伝達が早いようだし、もしも先輩に教わったのが知られたら、相手はまた増長します。下手したら、先輩にも迷惑が掛かるかもしれない。甘い考えかもしれませんが、そんなのは嫌なんです」

「佳織……」

「かおりん……」

あゝ…私っては何を言ってるのかしら。

こんなシリアスなセリフを言えるようなキャラだったかな?

「ふう……分かった。そこまで言うなら、私からは何も言わない。その代わり……」

あら、頭を撫でられた。

「頑張りなさいよ。私個人は君の事を応援してるからね」

「はい。ありがとうございます」

「それじゃあね」

あ……名前を聞けないままに行ってしまった。

「佳織は先輩からも期待されてるんだな……」

「本当に佳織は凄いなあ……」

「そんな事は無いって」

あれは単に噂の後輩の顔を拝みに来ただけでしょ。

思った以上に話しちゃったけど。

「けど、実際問題……これからどうしようか……」

私の考えなんて、所詮は素人の浅知恵。

それが効果があるとは思えないし……。

「なに、大丈夫だ。佳織」

「箒？」

何が『大丈夫』なのよ？

「実戦経験豊富で専用機を所持している代表候補生が相手だからと言って、素人同然でISにも碌に乗ったことが無い佳織が負けるとは限らないじゃないか」

「箒……その短い文章の中に、負けるであろう要素が山ほどあるんだけど……」

「なに!？」

気が付いていなかったのかよ。

「でも、本当にどうする気？」

「うん……」

なんであんな事を言ってしまったんだろう……。

見栄を張った結果、自分の首を絞める事になるとは……。

もうこの時点で負けフラグ建ってね？

「先生にでも聞いたらいんじゃないかな？」

「先生に？」

「うん。別に、誰かに方法を尋ねるぐらいは問題無いでしょ？それを実行するかはかおりん次第なんだし」

ほ……本音ちゃんの口から正論が飛び出した!？」

でも、実にごもつともな意見だ……。

「そうしよう……かな？特訓をお願いするわけじゃないんだし……」

「それ以前に、訓練機は予約が一杯で貸出不可らしいけどね」

「それは私も聞いた。なんでも、基本的に訓練機の貸し出しは上級生が優先されているらしいな。二学期以降ならまだしも、入学したてのこの時期に私達一年が訓練機を借りるのは非常に難しいだろう」
それなら私もどっかで聞いたな。

だからこそ、原作でも一夏は箒と一緒に体を動かすと言う名目で剣道をしていったんだし。

「訓練機に関しては私も最初から諦めていたよ。だから、ここは本音ちゃんの提案を飲んで、放課後にでも先生に聞きに行くことにするよ」

「それがいいな」

.....
.....
.....
.....

お昼に話した通り、私は職員室まで来て千冬さんの机の傍にいる。

一夏と箒と本音ちゃんは廊下で待っている。

「成る程な……」

「何か私が今の段階で出来る事ってありますか？なんでもいいんです。教えてください」

「そうだな。まずは基礎トレーニングと知識の習得。それが一番だろう」

「ですよね……」

流石の私も、それは真っ先に思いついた。

でも、なんとなくそれだけじゃ駄目な気がしたんだ。

「知識もそうだが、ISは本人の身体能力が大きく関わってくる。お前はお世辞にも動ける方じゃないだろう？だから、例え付け焼刃と分かっているけど、何もしないよりははるかにマシだと私は思うぞ」

千冬さんの口から言われると、物凄い説得力があるな。

「それでも不安なら……そうだな。実際の試合の映像を見てイメージトレーニングでもしてみたらどうだ？」

「映像でイメージ……ですか？」

「ああ。お前が思っている以上にイメージトレーニングは大事だ。国家代表に選ばれた選手の殆どがイメージを絶対に欠かさない」

「織斑先生も……ですか？」

「当然だ。私も現役時代は試合の前には毎回のように頭の中で相手選手と戦ったものだ」

イメージ……か。

それなら私にも出来そう……。

「映像資料ならば『資料室』に保管されている筈だ。あそこには過去にこの学園で行われた様々な試合の様子が記録されているDVDがある。中にはモンドグロツソを初めとした世界規模での公式戦の映像もあつた筈だ」

にゃんと……！

それは本当にレアな代物じゃないですか！

「放課後ならいつでも出入りは可能だ。今からでも行ってみるといい」

「分かりました。教えてくれて、ありがとうございます！」

「気にするな。生徒の相談に乗るのは教師の役目だからな」

何気にちゃんと『先生』をしてるんだな……。

「それにな……」

「ふあ!？」

い……いきなり抱きしめられた!?

しかも、顔がすぐ横にあるんですけど!?

「私はお前に期待しているんだ……。だから、頑張れよ……佳織」

耳元で囁かれちゃったよ……。

息がかかって凄くくすぐったかった……。

余りにも恥ずかしくなつて、慌てて職員室を出た私の耳に、去り際に千冬さんが言った一言は聞こえていなかった。

「お前ならきつと勝てるさ…。私の愛する佳織…」

・
・
・
・
・
・

職員室から出てきた私が息を切らせているのを見て、待っていてくれた三人は驚いていた。

「ど…どうした!?! 一体何があった!?!」

「な…なんでもないよ」

あんな事、もしも言ったら…また騒動に発展しそうな気がする。

ここは黙るが吉と判断する。

「顔真つ赤だよ? 大丈夫?」

「だいじよぶ、だいじよぶ」

「でも、照れてるかおりんは可愛いね♡」

いや、私的には君の方が可愛いからね? 本音ちゃん。

「で? 何か聞けたのか?」

「うん……」

私はさつき千冬さんに教えて貰った事を報告した。

「やはり、基礎トレーニングは必須か…」

「それと勉強も…だね」

「この二つは基本だよね」

そこら辺は皆の共通認識だったようだ。

「しかし、イメージトレーニングと言う言葉が出てくるとは思わなかったな」

「でも、姉さんなら普通にしてそう」

「実際に試合の前によくしていたって言ってたよ」

「やっぱり」

だよ。

「なら、早速行くとするか」

「善は急げ……だね」

いつ資料室が閉まるか分からないから、急いだ方がいいかも。

かと言って、廊下を走るわけにはいけないので、早歩きで行くことに。

でも、本音ちゃんの歩行スピードに合わせていたら、結局は普通に歩く羽目になるんだろうなく。

・
・
・
・
・
・
・

資料室に到着し中に入ると、そこは金属製の棚に沢山のDVDや紙製の資料が保管されている、文字通りの『資料室』だった。

部屋の奥にはパソコンがあり、そこでDVDの再生や情報の検索が出来るようになっていたようだ。

基本的に生徒の寮の各部屋にもパソコンは設置されているが、このパソコンはIS学園のサーバーに直結しているみたいで、より多くの情報を知る事が出来るのだ。

「まさか……これ程とは……」

「どれがいいのかな……？」

私達の他にも生徒はちらほらと見かけてはいるが、そのいずれもが静かにしている。

この空気の中で声を出せる程、私は大物じゃない。

私の心臓は蚤の心臓、ガラスのハートなんですよ。

棚に貼られた項目のシールを見ながら探していくと、『公式試合』と

書かれた場所にたどり着いた。

「ここか……？」

「探してみよう」

すると……出るわ出るわ、色んな試合が記録されたDVDが。

幸いな事に、殆どの資料が貸出されていなくて、私は必要と思ったDVDを借りる事にした。

カウンターにいる係の人に話かけて、私は借りる予定のDVDを出した。

「これを貸してください」

「はい、分かりました……って、貴女は……」

「ん？」

このパターンは……

「そう……成る程ね」

なんか一人で納得したんですけど。

手元にあるパソコンを操作して、私にDVDの束を渡してくれた。

「応援してるわ。頑張ってるね」

「ははは……どうもです」

こんな所にまで話は広まっているのか……。

無事に資料を借りる事が出来た私達は、資料室を出てからこれからの事を話した。

今日の所は、このDVDを部屋で見ることにした。

明日から本格的に頑張る事に。

放課後に学園内にあるトレーニングルームなどで体を動かして、夜には部屋で勉強。

休憩の合間にDVDを見てイメトレ。

トレーニングは箒が、勉強は一夏と一緒にすると言い出した。

最初ぐらいは自分で頑張ると言ったのに、つき合わせたら悪いと言ったら、二人は……

「私達が勝手にやっている事だから問題無い!!」
って言うてきた。

それは屁理屈でしょ……。

滅茶苦茶嬉しいけどさ。

え？本音ちゃんの役目？

あの子は疲れた私を癒す存在。

その場にいるだけでヒーリング効果があるからいいの！

こうして、私の試合に向けてのトレーニングが始まった。

どこまでやれるか分からないけど、0%の勝率を少しでも引き上げる事が出来ればいいな。

第5話 専用機と初試合

「ふあ〜……」

瞼を擦りながら目を覚ます。

隣のベットにはルームメイトの本音ちゃんが寝ている。

「……………」

少しだけボーっとした後には覚醒。目が覚めた。

「あ……………そうか……………」

部屋の壁に掛けてあるカレンダーの今日の日付の所には赤いペンで丸が書かれている。

今日はセシリアとの試合の日。

遂に来ました、原作での最初のイベント。

試合をするのは一夏じゃなくて私だけだ。

この日の為にやれる事は全てやった……………と思う。

一夏と一緒に勉強をして、箒とはランニングや、時には剣道の打ち込みにつき合わされたり。

そして、部屋では借りてきた試合のDVDを見てイメージトレーニング。

それをこの一週間ずっと続けてきた。

まあ…こんな事で代表候補生に勝てたら誰も苦労はしないけど、それでも、前に名も無き先輩に言った通り、一矢報いる事ぐらいは出来るかもしれない。

そうすれば、彼女も少しは自分の高飛車な態度を改めるかもしれない。

今はそれに賭けるしかない。

原作通りに相手が油断をしていてくれれば尚良し。

より一層、こっちがジャイアントキリング出来る可能性が生まれるってもんだ。

差し当たって、今するべき事、それは……………

「本音ちゃん。朝だよ〜」

この、隣で爆睡中のお姫様を起こすことだ。

「ううん……」

こうして彼女と一緒に暮らすようになって少し経つが、彼女は自力で起きると言う事を一切しない。

もしかして、これまでもずっとそうだったのだろうか？

確か、本音ちゃんには二つ上の姉がいた筈。

私的には結構厳しいイメージが強いが、この世界では違うのかな？

「で、起きないと」

これもいつもの事。

この短期間で既に慣れてしまった。

慣れとは恐ろしいものだ。

「仕方が無い……」

また『あの手』で行きますか。

「本音ちゃん。早く起きないと、君の分の朝ごはんも食べちゃうぞ」

「それだけは嫌だ!!」

はい、起きました。

「あれ……? かおりん……?」

「目が覚めた?」

「うん……」

「まだだったら、顔でも洗ってきなよ。サツパリするから」

「わかった」

未だに眠たそうしながら、本音ちゃんはゆったりとした足取りで洗面所へと向かう。

「その間に準備をしておくから」

「はい」

……学生を子どもに持つ母親って、毎朝こんな事をしているんだろうか……?」

だとしたら、マジで尊敬するな……。

ちゃんと親孝行でもしてから死ぬんだ……。

前世では私って碌な子供じゃなかったし。

……

・
・
・
・

今日の授業が全て終了し、今は放課後。

私は第三アリーナのAピットにて待機していた。

既に着替えは済ませていて、恰好は入学の際に学園から貰った学園指定のISスーツ。

と言えば聞こえはいいが、実際にはちよつとだけ洒落たスク水である。

実技試験の時と合わせてこれで着るのは二回目だが、やっぱり慣れそうにはない。

だって、この恰好で人前に出るとか、普通に羞恥プレイじゃん！

よく皆は平気でいられるな!?

割り切ることが大事ですってか!?

「おお〜…」

「気のせいかな…。また佳織…一段と大きくなっている気がする…」

「やはり、何度見てもいいな…」

「せくすいくだねえ〜」

そして、さつきからこつちを舐めまわすように見ている四人。

流石に勘弁してください。

めつちや恥ずかしいです。

「あの……姉さん」

「なんだ…一夏」

あ、まだ放課後なのにプライベート用の会話をしてる。

いつもなら怒るのに、今日は怒らないんだ。

「実技試験の時さ……揺れてた?」

「ああ……ばつちり揺れてたぞ」

「そう……」

揺れてた!?何が!?

自分であまり言いたくはないが、私の胸は目の前にいる女性陣に負けず劣らずのサイズになっている。

恥ずかしいから細かいサイズまでは言いたくないけど、分かりやすく言うなら…そう…:

箒以下、シャルロット以上…ってところかな。

え?カップ?言いませんよバカ野郎。

それこそ、ご想像にお任せしますってやつだ。

「そう言えば、佳織のISはまだ到着していませんですか?」

「ああ。少しだけ搬入が遅れているようだ。今は山田先生が確認に行っている」

この辺は原作と似てるのね。

「因みに、織斑のISは近日中に届く予定だ。その時は今回のようにぶっつけ本番ではなくて、ちゃんと事前に準備をしてからの試運転となる」

「分かりました」

ははは…:…なんで私だけ…:

今の私は『ド素人』から『素人に毛が生えた程度』にランクアップした…:…と思う。

物凄く微々たる差だけど。

「ねえ…:…かおりん」

「な…:…なになかな?本音ちゃん」

「おっぱい揉んでもいい?」

「ストレートだな!?ダメに決まってるじゃん!」

「ええ…?」

なんでそこで不満そうな顔になる!?

君の方が胸は大きいでしょうが!

「ならば、担任である私ならばいいな」

「担任でも駄目ですよ!?!」

なんで担任ならいいと思っただんだ!?

「じゃあ、幼馴染の私なら?」

「幼馴染でも駄目！」

「ちえ……じゃあ、私もダメか？」

「アンタもかい！」

箒だけじゃなくて一夏も狙ってたのかよ!?

そんなに胸を揉みたければ、自分のを揉めよ!

ここに居る皆がご立派なものを装備してるんだからさ!

「な……仲森さん！仲森さん！仲森さん！」

「あ」

山田先生が奥の方から駆け足でやって来た。

今にも転びそうな足取りだけど。

この辺は結構凸凹が多いから気を付けないとダメですよ？

「山田先生、落ち着いてください。こんな時は波紋の呼吸法ですよ。ほら」

「そ……そうですね。コオ……」

いや、本気でしないでよ。

一夏も、なんでここで波紋な訳？

ISの試合で波紋疾走でもやらせる気？

「あまり山田先生をからかうな」

「すいません。つい……」

つい、で波紋をやらせるな。

「も……もういいですか？」

「いつまでしてるんですか……」

普通にやめようよ……。

「つて！こんな事をしてる場合じゃなかったんだ！来たんですよ！仲森さんの専用ISが！」

「やっとか」

き……来たんだ……！

こうなったら、マジで逃げ場が無いぞ……！

奥の方にあるピット搬入口が重い音を上げながらゆっくりと開いてゆく。

その向こうに現れたのは……

「これは……？」

そこに鎮座していたのは、見た事のあるフォルムのISだった。全身が緑色に装飾してあるその機体は……。

「ラファール……？」

そう、この学園にも何体か配備してある第二世代型の量産型IS『ラファール・リヴァイヴ』だった。

でも、よく見たら、このISは私が知っているラファールとは少し違った。

確かに機体の構造などはラファールそっくりだが、なんて言うか……全体的に丸い。

角ばった場所が殆ど無くて、装甲が丸みを帯びている。

しかも、肩の辺りに本来のラファールには存在しないパーツがあった。

右肩には逆L字型のシールド、左肩にはどこかで見た事があるような丸いスパイクアーマー。

うん、思いつきリザクIIをイメージしてますね。

ああ……これ絶対あの『神』の仕様だわ……断言できる。

「これが仲森さんの専用IS『ラファール・リヴァイヴII』です！」

「ん？」

「ツー？」

「えっと……カスタムII……じゃなくて……ですか？」

「はい。この機体名には『カスタム』はつきませんよ」

「え？」

「ど……どゆこと？」

「これってどう見てもラファールの改造機じゃない！」

「そこは私が説明してやろう」

「織斑先生……」

千冬さんが前に出て説明してくれるようだ。

「このISは、デュノア社が自社で開発した量産機であるラファールを再設計したISだ」

「再設計……？」

え？え？マジで分からない…。

「ラファールと言う機体を世に出したデユノア社は長い間、第三世代機を開発出来ないで低迷していた。だが、そこであるアイデアを閃いたそう。『新しい機体を開発出来ないのなら、元から製造しているラファールを再設計して、正当な後継機を作ればいい』とな」

「それが…この…」

「そう。ラファール・リヴァイヴⅡになるわけだ」

え〜つと…つまり、元のラファールがザクⅠだとしたら、この目の前にあるラファールⅡはザクⅡに該当する機体って事？

これでいいのか分からないけど。

「お前がさっき言ったカスタムは、文字通りラファールをカスタムした機体であって、それ自体はどこまで行ってもラファールではない。だが、このラファールⅡは違う。基本性能を向上させ、拡張領域も拡大、更には整備性も上がっている代物だ」

「つまり、これは現場の事を第一に考えたISなんです。実際、開発の際にはパイロットの意見を多く取り入れたと聞いています」

あ…あれ〜？

デユノア社ってそんなにも殊勝な事が出来る会社でしたっけ〜？

私を知る限りじゃ、かなりえげつない会社だったような気が…

「そして、この目の前にあるISは先行量産試作機として製造された数機のうちの一機になる。確か…」

「はい。このラファールⅡは試作1号機に該当する機体だそうです」

し…試作1号機…ですか。

先行量産って事は、将来的には勿論、量産を前提にしているわけであって、とゆーことは…

(あれ？これって、普通に専用機を受領するよりも大変じゃね？)

だって、私のデータ次第で、これからの方向性が決まるわけでしょう？

それって想像以上のプレッシャーなんですけど!?

しかもこれ、よく見たら…

(シールドにジオン公国の紋章が書いてあるし…)

悪ふざけが過ぎるだろうに……!

「これ以上オルコットを待たせてもあれだ。早速準備に取り掛かう」

「はい」

こうなったら腹をくくれ!私!

逆に考えるんだ。負けちゃってもいいさと。

私はそつと眼前にあるラファールIIに触れる。

すると……

「……!?」

私の中で『何か』がガツチリと填まった気がした。

例えるなら、不具合だった歯車が上手く噛み合ったような、今まで空いていたパズルのピースがはまったような……そんな感覚。

前に普通のラファールに触れた時はこんな事は無かったのに……。

これが……『専用機』って事なのか……?

各部装甲のハッチが開き、まるで私の搭乗を待っているような印象を受けた。

「乗り方は分かるな?まずは背中を預けるようにして、座るような感覚でいい」

「……こうですか?」

「もう少し……こうだな」

千冬さんが直接搭乗を手伝ってくれた。

普段は厳しい印象だけど、根っこの部分はとても優しい人なんだよな。

(ふふふ……さりげなく佳織の体に触れたぞ!しかも、今何気に尻に触ることに成功した!この手は少なくとも今日の間は洗いたくないな……)

今一瞬、とてつもない悪寒が背中を走ったけど、気のせいだよね……?

完全に私の体が入ってから、各部装甲が閉じて、同時に空気が抜ける音がピット内に響く。

すると、不思議な感覚が私を支配する。

何とも言えないような『一体感』。

本当に：このラファールⅡは私の為だけに存在してるんだと実感させられる。

目の前に色んなセンサー類が表示される。

と同時に、視界が非常にクリアーになる。

ああ：これがハイパーセンサーってヤツか。

実技試験の時は色んな意味で必死だったから分からなかったけど、今なら理解できる気がする。

確かにこれは、『宇宙で活動する事』を前提としている物だと。

束さんの『夢』に、私は乗っているんだ…。

「ハイパーセンサーはちゃんと機能しているか？」

「はい。大丈夫です」

「そうか。いかに最終的な量を目的としているとは言え、それはお前用にセッティングされたISだ。故にコアの方も予め初期化してある。私が言いたいことは…わかるな？」

「ええ。つまり、ちゃんと最適化処理フィッティングしなくちゃダメだ…ってことですよね？」

「その通りだ。お前は物分りがよくて助かる」

「それほどでも」

普通だと思うけどね。

「本当ならば、この場でやるべきなんだが、生憎とアリーナの使用時間も限られている。だから……」

「試合中にしろ……ですか」

「そうなるな。なに、お前なら出来るさ」

「どれだけ私の事を高く評価してるんですか…」

「では、ピット・ゲートの方に移動してください」

「了解です」

ほんの少しだけ体を前方に傾けるだけで、ISは前の方に移動した。

目の前には、最適化までのタイムが刻まれている。

実を言うと、私の手はさつきからずっと震えっぱなしだ。

自分の腕を抑えるようにしていたから、バレずにすんでいただけ。
いよいよなんだよな……!

こんな時は、偉大な先人の言葉を思い出せ!

『本当の『勇氣』とは何か!?それは『怖さ』を知る事!『恐怖』を我が物とする事じゃ!!』

『人間賛歌は勇氣の賛歌!人間の素晴らしさとは勇氣の素晴らしさ!!』

……これ、二つとも言ってる人同じじゃん…。

「佳織……」

ふと声が出た方を見ると、箒が何かを言おうとこつちを向いていた。
た。

「えつと……その……」

あれ?箒ってこんなにも初々しい顔をする子だったっけ?

ちよつと可愛いんだけど。

「が……頑張れよ!この一週間の努力は、絶対にお前を裏切ったりしない!」

「うん。ありがとう」

『頑張れ』は自分の向けるものじゃなくて、他者へのエールに使うもの……か。

箒のエール……確かに受け取ったよ!

「私も応援してるよ!大丈夫!佳織なら絶対に勝てるって!」
「ははは……」

相も変わらず、なんの根拠も無い事を言っちゃって…。

でも、だからこそ一夏って感じた。

例え気休めでも、『勝てる』って言ってくれて嬉しいよ。

「かおりん。ファイト!」

「うん。自分に出来る事を精一杯してくるよ」

どこまで出来るかは分からないけど。

でも、言われたからにはやらないと、女が廃るでしょ!

「発進準備が完了しました!タイミングは仲森さんにお任せします!」

「はい！」

よ…よろし！

こうなったら、少しでもそれっぽい事を言ってから発進しよう！

「仲森佳織！・ラファール・リヴァイヴⅡ……発進します!!」

第6話 転生特典

僅かな勇気を振り絞って、自分を奮い立たせる為に格好つけて発進した私を待ち受けていたのは、優雅にステージの中央付近で専用機を纏って宙に浮いているセシリアだった。

「随分と掛かりましたわね。このまま来ないかもしれないと思いましたがわ」

「そう……」

いつもなら色々と言い返したいけど、生憎と今の私のはそんな余裕はない。

（あれが…『ブルー・ティアーズ』か……）

こうして肉眼で見ると、実に美しい機体だと思う。

青い装甲に特徴的な4枚のフィンアーマー。

成る程、原作で一夏が騎士のようだと言ったのも頷ける。

流星はイギリス製のISと言う訳か。

そして、彼女の手にはその体よりも長大な光学射撃武器『スターライトMk-III』が握られている。

レーザーの発射速度は多分、私が映像越しに見た時以上だろう。

一瞬でも遅ければ、間違いなく直撃だ。

「あら、その機体は……」

彼女がこっちのISをまじまじと見だした。

「見た感じではラファール・リヴァイヴのようですが、少し形状が違いますわね…。もしかして、改造機ですか？」

「まあ…ね」

正確には後継機だけど、ここで律儀に答える義理は無い。

「ま、貴女の機体がなんであつても関係ありませんわ。何故なら、勝利するのはこのセシリア・オルコツトなのですから」

本当に強気だよなあ…。

自信に裏打ちされた実力があるんだろうけど、彼女はどう見ても油断している。

『獅子は兎を駆るのにも全力を尽くす』って言葉を知らないんだろう

か？

「こつちにとつては都合がいいけど。」

「そこで、こちらから一つ提案がありますわ」

「て…提案？」

あゝ…この展開は……。

「貴女だって、折角の専用機を受領したその日にボロボロにされるのは本意ではないでしょう？ですから、ここで大人しく私にクラス代表の座を譲ると言うのであれば、手加減ぐらいはしてあげてもよくなってよ？」

うわゝ…超上から目線だく。

セシリアの目が細くなった。

と同時に、ISから情報が齎される。

【敵機、射撃モードに移行。武装のセーフティーロックの解除を確認】

撃つ気満々ですやん！

それが分かった途端、私の顔に汗が流れる。

くそつ……！

やってやるって心に決めたのに…どうして手が震えるんだよ！

装甲の中に手があるから周囲に気が付かれてないけど、心臓はバクバクしてるし、手は汗でびっしょり。

しかも、さつきから喉までカラカラになってきた。

もう試合開始の鐘は鳴ってるのに、どこまでも余裕をぶっこいちやって……！

「で？…お返事は？」

「………私自身は別に、クラス代表になんて興味は無いし、なりたくとも思わない」

「でしたら「でも」……ん？」

「今日までずっと、一夏や箒が私なんかの為に一緒になって頑張ってくれた。ここでその提案を飲んだら、きつと二人の気持ちを侮辱することになる。だから……」

何を思ったのか、私は彼女の事を睨み付けてしまった。

「御託並べている暇があるなら、とつととかかつて来いよ……金メツ

キ」

「貴女……!」

うわあ〜!!何を言っただ私はある!?

どうしてこうも見栄を張りたがるかなあ〜!?

私ってホント馬鹿……。

「いいでしょう……そこまで言うなら……」

く……くるっ!

「リクエストにお応えして差し上げますわ!!」

銃口がこちらを向き、そこから青白い閃光が走る。

「……っ!」

分かっていても、怖いものは怖い。

恐怖のあまり両腕で体を庇うようにした結果、レーザーは右肩のシールドに当たり、なんとか直撃だけは避けられた。

「なっ……この私の攻撃を防いだ……!」

多分今のは『反射的』に行ったから防げたんだと思う。

もしも今の動きの何らかの『思考』があつたなら、間違いなく防衛は遅れていただろう。

「どうやら……貴女に対する認識を改めた方がいいみたいですわね……」

なんか変に認められた!?

「ぶ……武器は……」

こつちも武器を装備して、反撃に移らないと!

咄嗟に拡張領域内に収納されている武装を確認する。
すると、そこに表示されたのは……

【IS用マシンガン】

うん、形状は完全に『ザクマシンガン』ですね。

そんなでもって……

【ヒート・ホーク】

いや、どこまでザクを意識してるんだよ!

私もザクは好きだから気持ちは痛いほど理解出来るけどさ!

「今はこれだけか……!」

まだ、このラファールⅡは完全に私の専用機になった訳じゃない。だから、現状ではこれだけしか使えないんだろう。ちゃんファースト・シフトと一次移行を終えたら、使用可能な武装も増えるに違いない。ザクバズーカとか。

相手は射撃戦に特化したIS。

本当ならば機動性を活かして攻撃を回避しつつ、懐に飛び込んでの近接戦闘に持ち込むのが定石なんだろうけど、私にはそんな技量も度胸も全く無い。

だから、ここでの選択肢は必然的に一つ。

「来て……！」

私はIS用マシンガンをコールして展開、装備する。

グリップをしっかりと握りしめて、サブグリップもちゃんと持つ。

「ふふ……私が最も得意な射撃戦で挑もうだなんて、随分と見縊られたものですわね。それとも、貴女も射撃がお得意なのかしら？」

「別にどうでもいいでしょ！」

「それもそうですわね。では……」

再び相手さんが攻撃態勢に移行する。

「存分に舞い踊りなさい！この私と我が愛機『ブルー・ティアーズ』の奏でる円舞曲ワルツで！私がたつぷりとリードして差し上げますわ!!」

「余計なお世話だ!!」

レーザー攻撃にマシンガンって……。

マジでどうするよ!?

・
・
・
・
・

本格的に試合が始まってから、一体どれだけの時間が経過しただろう……。

まだ一分しか経っていないようにも思えるし、もう一日以上こうしているような気さえしてくる。

それ程までに、私は肉体よりも精神の方が疲弊していた。

「ほらほらー…さっきの威勢はどこに行きましたの!？」

「く…くそっ…!」

私に向かって降り注がれるレーザーの雨。

今日までの勉強やイメージトレーニングが功を奏してか、なんとかまだ直撃はしていない。

でも、それだけ。

直撃はしていなくても、装甲に攻撃が掠っている。

それが徐々に蓄積していつて、結果的には結構なダメージとなっていた。

拙い動きでセシリアの動きについて行こうとしているが、代表候補生である彼女と私とでは動きが全然違う。

相手の方は本当にダンスでも踊っているかのようだが、私の方はどうだ。

まるでよちよち歩きじゃないか。

「当たれ!!」

「中々にいい狙いですが、それでは当たってはあげられませんわね!」

こっちのマシガンは全く当たる気配が無い。

幸いな事に、拡張領域には予備のマガジンが結構な量あったので、弾切れだけは心配ない。

攻撃が当たらなければ、全く意味無いけどね。

文字通り、私はマシガンの弾を湯水のように使っている。

「そろそろ直撃…:…いきますわよ!」

向こうが本格的にスコープを覗いた!

狙い撃つ気だ!

「まずは左足!」

やばい!今の私の態勢じゃ回避出来ない!!

そう思った瞬間、彼女の宣言通りにレーザーが左足に直撃し、体全体に衝撃が走った。

「ぎやあつ!?!」

「ふふふ……」

くそ……このままじゃ嬲り殺しにされる……!

でも、どうしたら……!!

(残りSEは……53。武器は破損してないけど……)

全く命中する気配が無いから、これを喜んでいいのかどうか……。

「試合開始から約27分……想像以上に粘った方ですわね。これは素直に評価に値しますわ」

「そう……ですか……!」

あれからまだ30分も経ってないのか……!

時間の感覚が完全に麻痺している……。

「仲森さん。貴女のその闘志に敬意を表して、『これ』で止めを刺してあげますわ」

「これ……?」

まさか……『アレ』が遂に来るのか……!

今までずっと使用してこなかった、ブルー・ティアーズの代名詞とも言うべき武装が!

「お行きなさい! ティアーズ!!」

セシリアが右腕を横に翳すと、四基のビットが本体以上の機動性とスピードで追従してきた!

全方位から襲い来るレーザー。

一つのレーザーを避けようと右に動けば、次の瞬間には上からレーザーが肩に当たる。

まさにこれはレーザーの包囲網……いや、牢獄と言った方がいいかもしれない。

「ほらほら! 上手く避けないとあつという間にSEが無くなってしまいますわよ?」

くっそっく!

ビットに攻撃を全部任せて、自分は高みの見物をしやがって……!

でも、そんな大ピンチの中、頭の片隅に冷静な私があった。

(やつぱり……ビットを動かしている最中は自分は動けないのか

……)

ここら辺は原作と同じか。

(私の記憶が正しければ、あのビットは攻撃の際に毎回毎回セシリア自身から攻撃命令を送らなければ動かすことは出来ない。そして、その制御に神経を集中させているから、彼女はビットを動かしている最中に動くことが出来ない……だったよね?)

念には念と思い、ネットで何回か彼女の試合の映像を見て、その結論に至った。

けど、だからどうしたって感じだよね。

分かるのと実際にやるのでは大違い。

頭でイメージ出来ても、本番で出来なければ意味を成さない。

そんな考え事をしている間も攻撃は止む気配が無い。

右腕、右足、そして背中。

着々とダメージが重なっていき、とうとうSEが危険領域に入っ
た。

「これで閉幕ファイナルですわ!!」

な…なんだ!?!ビットじゃない物がこつちに来る!?

「あれは!」

ミサイル!?!しかも二基!

(ヤバイ!ビットを攻撃に晒されながらの状態じゃ、絶対に避けられない!)

形状は違っても、あれも立派なビット。

所謂、ファンネルミサイルと同等の武器。

あれなら他のビットを操りながらも別の攻撃が出来る!

ミサイルが私の眼前に迫り、もう駄目だ!?!と思った時だった。

(……………え?)

突然……『世界』が停止した。

……
……
……

『よう……随分と苦戦してるじゃねえか』

この声は……私を無理矢理転生させたくそつたれな神野郎!!

『おいおい……仮にも俺は『神』なんだぜ?少しは敬意を払えよ』

敬意を払うような事を少しでもしたの?

『お前を転生させたじゃねえか』

無理矢理だけどね……!

『別にいいじゃねえか。そんな昔の事はよ。お前だってなんかかんだ言つて、第二の人生をエンジョイしてるんだし』

……それに関しては否定しないけど。

で?一体何の用?私は今、とらつても忙しいんですけど!?

『忙しいって……負けそうになってるじゃん』

うっさい!仕方ないじゃん!相手の方が色んな意味で上手なんだから!!

『そいつは仕方ねえよな。お前はどこまで行つても唯のド素人。方や相手は今まで研鑽を重ねてきた歴戦の代表候補生。最終的な実力はともかくとして、現状のお前とじゃ月とすっぽんだな』

分かつてるよ!そんな事ぐらいは!態々口に出して言うな!もつと惨めになるわ!

『あははは!そう言うなって!折角の美少女顔が台無しだぜ?か・お・りちゃん♡』

お前がそうしたくせに……!

『つて、こうして時を止めてる以上、表情なんて動きようがねえか!だははは!』

声だけで姿が見えないのが本当に腹立つ……!

ISのパワーアシストがあれば、こいつの顔面に一発パンチをお見舞いする事ぐらいは出来そうなのに……!

『何気に物騒な事を考えてんじゃねえよ。ま、こっちの業界じゃ美少

女のパンチは立派なご褒美だけだな！寧ろ、俺からお願いしたいぐらいだぜ！』

この神はまさかの変態でした！

こんな奴に私は転生させられたのか……。

とつても複雑な気分です。

で？今更だけど、私に何の用なの？

まさか、単純に様子を見に来たとかじゃないでしょうね？

『そんな訳ねえって。俺だってそこまで暇じゃねえよ』

どうだか…。

『実はな、お前さんに『転生特典』を与えようと思ってな』

よりにもよって今かよ!?

『あの時はごつちも忙しくて慌ててたからな。かと言って、適当に変な特典を与えても意味ねえし』

そりゃあ……ねえ。

『だから、あれから俺も色々と考えて、一番面白そうな特典を思いついた』

面白そう!?

今こいつ『面白そう』って言った!?

『もう分かっているとと思うけど、お前が今纏っているそのISも特典の一つだ』

でしょうね！

それはなんとなく予想がついてたよ！

『俺さ、MSの中じゃザクが一番好きなんだよな。お前もだろ?』

それには同感だけど、自分の好みで特典を選んだの!?

こう言うのって普通は転生者と色々話し合ってから決めるもんじゃないの!?

『なにそのフィクション。超ウケるんですけど』

ギャルか！

って言うか、あれってフィクションだったの!?

『いやいや…二次小説と現実をごっちゃにしちゃダメでしょ。見た目はともかく、中身は立派な大人なんだし』

うわあ〜ん！変態に正論を言われたあ〜！（泣）

『美少女の泣き声……あざーす!!』

うっさい死ね!!

『そんな訳で、今からお前に転生時に渡せなかった特典を与えるから』
いきなり話を戻したやがった！

もうなんなのこいつ!?

『受け取りな！これが神オレから転生者お前に送る『転生特典』だ!!』

いやいやいや！ちゃんとどんな特典なのか説明してよ!!

ちよつと！聞いてますか〜!?

『俺がお前に接触するのは、これで最後だ。後はお前自身の手で切り開け！人類の未来を!!さらばだ!!』

なに散り際の早乙女博士のセリフを真似てるんだよ！

ふざけるのもいい加減にしろ！

『いいじゃんか！一度でいいから言ってみたかったんだから！でも、もう二度と会う事が無いのは本当だぞ。そんなやなく』

え？ここで去るって事は時間が動き出して、そうなるとミサイルが当たるわけで……。

『そして時は動き出す』

DIO様かよ!?!

そんなツツコみを言う暇も無く、セシリアの発射したミサイルが再び動き出して私の体に直撃し、大きな爆発が起こった。

「……認めたくないものだな。自分自身の若さ故の過ちというものを」

第7話 赤い彗星

「想像以上に頑張りますね……仲森さん」

真耶の呟きがピット内に響く。

私達は今、ピット内にあるリアルタイムモニターで試合の光景を見ている。

確かに、代表候補生相手に起動が二回目とは思えないほどの健闘ぶりだ。

あんなにも闘志に溢れた佳織の目を見るのは初めてかもしれない。だが……

「あいつは……緊張しているな」

「「え？」」

その場にいた全員が一斉にこつちを向く。

「ど……どうしてそんな事が分かるんですか？」

「さつきから佳織は何度も唾を飲んでいいる。あいつは昔から緊張すると頻繁に唾を飲む癖がある」

少なくとも、私が知る限りではそうだ。

私と佳織が初めて会った時も、丁度あんな感じだった。

「そんな癖があったのか……」

「私も初めて知ったよ……。なんで知ってるの？」

「ほえ……かおりの意外な一面を発見」

ふふ……私は佳織の事をよく見ているからな。

それこそ、体の隅から隅までずずずいとな。

「なんで仲森さんの癖を織斑先生が……」

「愛する者の癖ぐらい知っていて当然だろう」

「「はっ!？」」

む……つい調子に乗って言ってしまったか。

まあ、別に気にしないがな。

「み……見た感じだと、一進一退って感じですけど……」

「そうだろうな。だが、まだお互いに決定打を与えていない」

真耶め……話を逸らしたな。

「佳織の武装は……」

「マシンガン……か。相手とは明らかに火力に違いがあるね……」

「かおりん……」

上手く急所を狙えれば、ここからの逆転もあり得るだろうが、今の佳織の技量では困難だろう。

確かに佳織は適性値が高い上に才能もあるだろう。

だが、それはあくまで将来的な話に過ぎない。

今の佳織は紛れもなくISの初心者。

仮にここで敗北しても、誰も責めたりはしないだろう。

寧ろ、代表候補生相手にここまで操縦時間が30分にも満たないアイツがここまで粘った事を褒めるべきだと思う。

「あつー！」

一夏の叫びが聞こえてモニターに目を移すと、そこにはオルコットのレーザーによって左足を狙撃された佳織が映っていた。

「ヤバイ……足をやられたー！」

しかも、そこからオルコットは更に追い打ちをかけるように、アイツの機体の第3世代兵装であるビット兵器を射出し、レーザーの包囲網を作り上げた。

「かおりん！」

「そんな……このままじゃ佳織が……！」

「くそっ……！」

今のままでは佳織の敗北は必至。

だが、どういう訳か、私には佳織がここで終わるようには思えなかった。

なんと言うか……経験者故の直観のようなものを感じるのだ。

「かおりん！前!!」

布仏が叫ぶと、モニターの向こうの佳織の眼前にミサイルが飛来していた。

ビットの攻撃によって身動きが取れない佳織には回避する術が無い。

万事休すか。

多分、私も含めて、この場にいる全員が同じ事を思っただろう。だが、それは最良の形で裏切られた。

「あれ……？ブザーが鳴らない……？」

試合終了のブザーがいつまで経っても鳴らない。

と言う事は……

「ふっ……やはりお前はそうではなくてはな」

爆発によって生じた黒煙が晴れると、そこから出現したのは……

「赤……？」

真っ赤に染まったラファールⅡの真の姿があつた。

・
・
・
・
・
・

セシリアは、今日の前で起きている事象が正しく認識出来なかつた。

ミサイルが直撃し勝負が決したと思つた次の瞬間、煙の中から声色の変わった佳織の声が聞こえてきたのだから。

「……認めたくないものだな。自分自身の若さ故の過ちと言うものを」

「な……何を言ってますの……？」

先程までの焦りと臆病風に吹かれていた少女はそこにはいなかった。

今の佳織の全身から、今までとは比べ物にならない程の『何か』が発せられている。

「いくら私が素人だからと言って、大切な友と恩師の目の前で、このよ
うな無様を晒すとは……」

煙の向こうで佳織が何か操作をしている。

それはすぐに終わり、すぐに高周波な金属音と共に真紅の光が彼女の体を包み込む。

何度も光が消えては光りを繰り返し、少しずつラファールが『変化』していく。

その光が収束し、そこから出現したのは……

「なっ……!?!」

先程までの戦闘のダメージが全て消え、真っ赤に染まったラファールⅡの姿だった。

ラファールの純正の色だった緑から打って変わって、まるで佳織の中にある情熱を表すかのように眩い赤。

スラストや胸部にある装甲、左肩にあるスパイクアーマーにはアルファベットの『A』に鳥の絵が描かれたエンブレムが刻まれている。更に、頭に装着してあるセンサーの頭頂部からは一本のブレードアンテナが屹立している。

ラファールであつてラファールではない。

そんな言葉が浮かび上がるような機体に変貌していた。

「ふっ……。脳内に直接ファースト・ソフトデータを送り込まれるとは……面白い」

「その姿は……もしや……一次移行!?! 貴女は今までずっと、初期設定のまままで戦っていたと言うんですの!?!」

「その通りだが、それがどうかしたかね?」

「どうかしたか……ですって……?」

わなわなとセシリアの肩が震える。

「分かっていますの!?! 初期設定のまままで戦うと言う事は、全身に鉛の重りを付けて動く事と同義! 明らかかな自殺行為ですわ!!」

「だが、私はこうしてここに立っている」

「それは……!」

思わず唇を噛む。

余裕に満ちた佳織の態度が気に食わないと言うのもあったが、それ以上に自分が舐められたような気がしたからだ。

「さて、ではここからは私のターンと行こうか」

「え……？」

全ての工程が終了した事で武装が増えたのか、佳織は今まで使用していたマシンガンを収納し、代わりにIS用バズーカA2型を装備した。

「改めて見せて貰おうか……イギリスの代表候補生の実力とやらを!!」

「の……望むところですよ!!」

セシリアの周囲で滞空していたビットが再び佳織に襲い掛かる。

レーザーの雨が文字通り佳織に降り注ぐ……が。

「そんなっ!!」

その全てを佳織は見事なマニューバで回避して見せた。

装甲には掠り傷一つついていない。

「こんな事……こんな事あり得ませんわ!!彼女の動きが見えないなんて!!」

佳織の回避運動がセシリアの精神に僅かな動揺を生んだ。

それがビットの動きに直結し、明らかに動きが悪くなっていった。

「どうした?ビットの動きが単調になっているぞ。それでは私のいいのだ」

「なんですって!!」

「その証拠に……」

高機動を繰り広げながら佳織がバズーカを両手で握りしめてスコープを覗く。

そのままトリガーを引くと、バズーカから発射された弾がビットに直撃し、破壊された。

「私のビットが!」

「君自身が気が付いているかどうかは知らないが、君は相手の死角から攻撃する頻度が非常に高いようだ。だが、それさえ分かれば君の攻撃を避ける事など造作も無い」

説明をしながらも、佳織はステージ上に赤い軌跡を残しながら一基、また一基とバズーカでビットを落としていく。

「確かにISの全方位視界接続は完璧と言えよう。だが、それを使用

するのはあくまでも人間だ。背後や直上など、普段からあまり向かない方角を見ようとすれば必然的に直感で『見る』ことは不可能。送られてくる情報を脳内で整理する時間が生じる為、ほんの僅かではあるがタイムラグが発生する。君はそこを狙っているのだろうか？」

「……!?」

自分の考えが全て読まれているかのように、セシリアの戦法が白日の下に曝される。

「逆を言えばそれは、こちらから意図的に隙さえ作れば、君の動きをある程度は誘導可能になる……と言う事にもなる。いかに鋭い攻撃でも、来る場所が予め分かっていたら、私のような素人でも回避するのは容易だ」

素人と言ってはいるが、今の佳織の動きは明らかに素人のそれを上回っている。

セシリアの動き……正確には目を見ながら佳織は空になったバズーカのマガジンを取り出し、拡張領域内から予備のマガジンを装着した。

「後はこのように攻撃すれば……」

最後のビットがバズーカに撃たれて撃破される。

「この通りだ」

完全に試合の流れは佳織の方に向いている。

絶体絶命のピンチからの、まさかの逆転。

まるで少年漫画の王道のような展開に、アリーナに試合を見に来ていた生徒達は一気に湧き上がった。

バズーカをセシリアの方にロックする。

それを見て焦ったのか、彼女は慌ててミサイルで迎撃しようとした。

「あり得ませんわ……こんな事！絶対に有り得ませんわ!!」

「ほう……虎の子であるビットを全機撃墜されても、まだ諦めないとは……見た目とは裏腹に存外、闘志はあるようだ。だが……」

バズーカを収納し、再びマシンガンコールする。それでミサイルを迎撃した。

今までとは比べ物にならない程の精密な射撃を受けて、ミサイルは佳織に命中する事なく爆砕。

アリーナの中央付近が先程のように黒煙に包まれる。

「ど…ど…ですの!？」

ハイパーセンサーは全ての方位を確保するが、流石に視界が物理的に遮断されては手も足も出ない。

何処から敵が来るか分からない恐怖に、無意識の内に力強くスターライトMk-IIIを握りしめる。

その時、ブルー・ティアーズのセンサーが熱反応を捕えた。

「そこですわ!!」

迷わずセシリアはその反応に向かって射撃。

だが、全く手応えが無かった。

「甘いな」

「はっ!？」

それは背後から聞こえてきた。

煙を突き抜けるかのようにして佳織がセシリアに接近。

勿論、彼女とて黙って棒立ちにはならない。

瞬時に振り返って攻撃に移ろうとするが、そのライフルの銃身は佳織の手に掴まれて動かなかった。

そして、いつの間にか装備していたヒート・ホークでスターライトMk-IIIを一刀両断。

そこから更に追撃と言わんばかりに、セシリアの腹部に向かってキックが炸裂。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

そのままセシリアは地面へと落下、アリーナの壁に激突した。

「うろうろ……」

完全に立場が逆転していた。

ブルー・ティアーズのSEは風前の灯。

それに比べ、佳織のラファール・リヴァイヴIIのSEは完全回復してほぼ無傷。

どう見ても勝敗は決していた。

地面にゆつくりと降りたつた佳織は、壁に背中を預けながら地面に座っているセシリアに近づいていく。

その間にヒート・ホークを仕舞い、またマシンガンを取り出す。

「これで王^{チエックメイト} 手だ、お嬢さん^{フロイライン}」

マシンガンの銃口がセシリアの眼前に向けられる。

それを見て彼女の顔が青褪める。

「さて……………どうする？このまま潔く敗北を認めるか、それとも……………」

佳織の指がトリガーにかけられる。

いかに自尊心が強いセシリアでも、武装の殆どを失い、エネルギーさえも底を突こうとしているこの状況で逆転が狙えると思うような楽観的な考えは持ち合わせていなかった。

ブルー・テイアーズには最後の武器として近接用のショートブレードである『インターセプター』があるが、それ一本で今の佳織には到底太刀打ち出来ない事は、セシリア自身がよく分かっている。

「……………降参……………しますわ……………」

「それでいい。時には引く事も、また勇気だ」

マシンガンを下して収納、そのまま後ろを向く。

【試合終了！勝者……………仲森佳織!!】

終了のアナウンスとブザーを聞いた後、佳織は静かにピットへと戻っていく。

「ま……………待ってください!」

去り行く佳織の背中に向かってセシリアが立ち上がって叫ぶ。

佳織も反射的に彼女の方を振り向いた。

「ん? なにかな?」

「貴女は……………貴女は何者なんですの!」

「何者……………とは?」

「今まで碌にISに搭乗した事も無いにも拘らず、あれ程の動きをして見せる……………普通では到底考えられませんわ!!」

「そう言われてもな……………」

佳織の顔に僅かに笑みがこぼれる。

「私は仲森佳織。それ以上でもそれ以下でもないよ」

「答えになつてませんわ!」

また前を向いて歩きだす佳織。

セシリアに背を向けながら、その口を開いた。

「最後に一言だけ言わせてもらおう」

「なんですの……?」

「ISの性能の差が、戦力の決定的差ではない。それをよく肝に銘じておきたまえ」

「……………」

それだけを言い残して、佳織はピットに戻った。

・
・
・
・
・
・

モニターを見ながら、皆が目を丸くしていた。

勿論、私も。

「あ…あれが本当に佳織なの…?」

「明らかに常人の動きじゃない…。いや、素人の動きじゃない…!」

おりむーとしののんも冷や汗を掻きながら呆然としている。

「これは流石に予想外だ…。何か切っ掛けがあれば化けるとは思っていたが、ここまでになるとは……」

織斑先生も驚きを隠せないみたい。

ピットの中が静かになっていると、いきなり山田先生が叫びだした。

「お…織斑先生!!」

「どうした?」

「その…仲森さんの戦闘時のスピードなんですけど……」

「スピードがどうした?」

唇が震えていて、絞り出すように山田先生が話し出した。

「こちらに提供されたラファールⅡのスペック上の速度の三倍を計測してるんです!!」

「何っ!？」

「「さ…三倍!」「」」

凄いスピードだったけど、三倍って……。

「こんな事ってあり得るんでしようか……」

「分からん…。これは一度、機体を診てみる必要があるな…」

かおりん……大丈夫かな……?」

「にしても、なんか途中から佳織の口調が急に変わったよね…。あれってなんだろう?」

「さあな…。いつもの佳織からは想像も出来ないほどに自信に満ちていたが…」

それは私も思っていた。

まるでかおりんが別人になったような……そんな感じがした。

「それに関しては、仲森自身から直接聞くしかないだろう」

「そうですね…」

でも…なんでだろう。

試合中のかおりんを思い出すと、胸が苦しくなる…。

キュツつてなって、ドキドキして……。

「こんな気持ち……初めて……」

私……どうしちゃったのかな……?」

「本音ちゃん?大丈夫?」

「顔が赤いぞ?熱でもあるのか?」

「な…ななななんでもないよ!？」

うう……なんか恥ずかしいよ…!

(ああ……これは堕ちたな)(

皆が生暖かい目でこつちを見てるし……。

「あ、佳織が戻ってきた」

どうしよう……かおりんの顔…ちゃんと見られるかな…。

はう……。

第8話 百合の花

佳織とオルコットさんとの試合は、佳織の勝利で幕を閉じた。試合をした本人は静かにピットへと帰ってきたけど……。

「か……佳織？」

「大丈夫か……？」

「かおりん？」

ISを纏ったまま、直立不動のまま動かない。

少しした後にはISが粒子化して、ISスーツ姿の佳織が降り立つ。

佳織のラファールIIは機体に描いてあったエンブレムを模したペンドアントになって、佳織の首から下がっている。

私達がどうすればいいのか分からずに困惑していると、千冬姉さんが前に出て佳織に近づいた。

「初陣にしては上出来だ。よく頑張ったな」

「……ありがとうございます……」

「あれ？いつもの佳織に戻ってる？」

さっきまでの強い感じは今日の前にいる佳織からは全く感じない。よく見たら、佳織の顔は赤くなっていて、息も荒いように見える。

汗も沢山掻いていて、どれだけ大変だったかがよく分かる。

（そっか……当然だよな）

あれだけの動きをしたら、誰だって疲労困憊になるのは当たり前だ。

お世辞にも体力がある方とは言えない佳織ならば、猶更キツく感じているだろう。

「疲れているところで悪いが、少しだけ聞いていいか？」

「なんで……でしょうか……」

「試合中、急に言葉使いなどが変わったように見えたが、あれはなんだ？」

「……私にもよく分かりません。ただ……」

「ただ？」

「ファースト・シフトが終わった瞬間、頭の中が急にクリアになって、

思った言葉が口に出るようになって、それで……」

「……そうか、分かった」

姉さんはまだ納得していないようだけど、当の佳織本人の疲労がかなりのレベルだと判断したのか、途中で話を切り上げた。

「えっと……今、ISは待機形態になっていきますけど、仲森さんが呼び出せばいつでも展開が可能です。でも、ちゃんと規則があるので気を付けてくださいいね?」

「規則に関する本を本当は渡すつもりだったが、今は自分の体を休める事を優先した方がいい。本はルームメイトの布仏に渡しておく。お前もそれでいいか?布仏」

「あ……はい」

本音ちゃんも佳織の様子を心配したのか、珍しく呆けていたみたい。い。

気持ちは凄くよく分かるよ……。

「それじゃあ……お先に失礼します……」

そう言うと、佳織はゆつくりと奥に下がっていった。

「織斑先生……」

「ああ……」

二人な何やら悩んでいる。

多分、試合中の佳織の事だろう。

「もしか、佳織はアレなのか?」

「アレって?」

「ほら、よく漫画やアニメなどであるだろう?車のハンドルを握ったら急に性格が変わる……」

「こち亀の本田さんみたいなの?」

「そうだ。佳織もISに乗ったら性格が変わるのではないか?」

「でも、最初に乗った時は何ともなかったよね?」

「む……言われてみれば確かに……」

でも、箒の言った事が一番納得するかも……。

って言うか、箒も漫画とか読むんだ……。

「いや……存外、篠ノ之の言った事が正しいかもしれないぞ」

「「え？」」

まさか姉さんがそんな事を言い出すなんて…。

「仲森の試合中に見せたアレは、一種の自己暗示かもしれん」

「自己暗示？」

「そうだ。恐らく、ISの一次移行が切っ掛けになって、あのような事になったのだろう。無意識の内に自分に暗示をかけて、自らの能力を強制的に底上げしたのかもしれない」

一次移行が切っ掛け……。

それなら、最初に乗った時になんともなかった説明はつくけど……。

(だが、私の知る限りでは佳織にそんなスキルは無かったはず。だとすれば、あれは外部からの影響で……?)

また姉さんが真剣な顔で顎に手を当てている。

最近をよく悩む姿を見るな。

「かおりん……大丈夫かな……」

「心配だな……」

「うん……」

凄く辛そうにしてたし、倒れてたりしてないよね…?

・

・

・

・

・

頭が凄く痛い……。

目が霞む……。

足元がふらつく……。

混乱している頭を少しでもスッキリさせようと思い、私はアリーナに設置された共同のシャワー室に向かった。

ISスーツを脱いで籠に入れて中へと入る。

既に誰かが使用中のようだが、幸いな事に現在の使用者は私を覗けば一人だけ。

折角だし、隣を使わせてもらおう事にしよう。

シヤワーからお湯を出して、頭から流す。

すると、ボーっとしていた頭に活力が少しだけ戻ってくる。

(なんなんだよ……アレは……)

試合中に『神』の野郎が無理矢理寄越した転生特典……あれってモロに……

(シヤア・アズナブルじゃねえーか!!)

なんでよりにもよってシヤアなんだよ!?

マジで意味わからねえよ!!

口調や態度まですっかりシヤア擬きになってたし!!

しかも……

(あれは……確かに私の意思で喋っていた……)

傍から見たら、あの状態はまるで別の人格が乗り移ったり、二重人格のように見えたかもしれない。

けど、それは違うんだ。

あの時、私の意思は存在していた。

つまり、試合中に言った言葉は全部、私の言葉なのだ。

でも、体は自分の意思を完全に無視して話したり動いたりしていた……

エロゲとかでよくある『ダメ……!体が勝手に……!』ってヤツだ。

更に、口調とかだけじゃなくて、戦闘能力もシヤアを模していたし……

だって、今の私にあんな高機動戦闘なんて絶対に不可能だし!

実際、心の中じゃずっと目が回りっぱなしだったよ。

下手したら酔ってたかもしれない……

なんせ、無理矢理体を動かされたようなものだし。

けど、ISを降りた瞬間に、あの感じは無くなったんだよな……

貰った特典は恒常的なモノじゃないって事か……

つまり、総合して私の転生特典は……

【IS搭乗時限定で赤い彗星（笑）になる程度の能力】

ってことになるのか……？

ふざけんなよ!!

ISに乗る状況って、殆どが人前に晒される時ばかりじゃんか!!
しかも、ISって授業でも乗ったりすることがあるんだよ!?

どうしてISに乗る度に、あんな恥ずかしい言い回しをして黒歴史
を量産しなくちゃいけないのさ!!

羞恥プレイにも限度つてものがあろう!!

私を恥ずかしさのあまり悶絶死させる気か!!

「はぁ……」

絶対に変な目で見られてたよね……。

明日からどんな顔をして皆と会えばいいんだろう……。

しかも、試合中の出来事だったとはいえ、セシリアのお腹を思いつ

きり蹴ってしまったし……。

女の子の腹を蹴飛ばすとか、どこの外道だよ……。

あぁ〜!バラの学園生活に一気に暗雲が立ち込めてきたよお〜!!

本当にどうすればいいのさぁ〜!?

……にしても、今日はすっごく疲れた……。

明日：筋肉痛とかになつてないといいけど……。

「……出よ」

・

・

・

・

・

シャワーの暖かなお湯が私の体を濡らす。

試合が終わってから、私は疲れた体を癒すためにシャワー室へと足を運んでいた。

(今日の試合……)

最初は私が圧倒していた。

負ける可能性なんて全く考えていなかった。

でも、実際には……

(負けてしまった……)

試合の流れが劇的に変わったのは、彼女のISが一次移行してからだった。

まさか、初期状態の機体で挑んできていたなんて夢にも思わなかった私は、少なからず動揺してしまった。

常に冷静でいようと心掛けている私にしては、実に恥ずかしい失態だった。

機体が真っ赤に染まってから、仲森さんの動きが一気に変化した。ステージ全体を凄まじい速度で駆け抜けていき、動きに全く追いつけなかった。

あの姿はまるで……

(赤い彗星のようでしたわ……)

こちらの攻撃を全て紙一重で回避して、自分の攻撃は絶対必中。

しかも、私自身が知らない癖まで見抜かれた。

でも、仲森さんの途中から変わったあの口調……どこかで聞き覚えがあるような気が……。

なんだったかしら……?

「はっ!」

そうだ……思い出した!

あれは確か……お母様がよく、お父様が仕事でいなくて自分が休みの日にいつもリビングで見ていたDVDで見た映像……!

お母様がよく口にしていたのを思い出す。

『セシリア。よく覚えていきなさい。これこそが世の女性が最も理想とする男性像よ。え?お父様?それはそれ、これはこれよ!』

見目麗しい女性であるにも拘らず、誰よりも凛々しく雄々しい口調

「いや……汗を流そうと思って……」

そ…そうですわよね！それ以外の目的なんて普通はありませんわよね！?

私は何を考えているのかしら、オホホホホ…。

考え事に夢中で全く気が付きませんでしたわ…。

「ど…どうしたの？大丈夫？」

「な…なんでもありませんわ！」

試合中の凛々しさはどこへやら。

今の仲森さんは教室で見かけるいつもの仲森さんでした。

普段の優しく可愛らしい仲森さんと、試合中に見せる格好いい仲森さん。

これがもしや…：ギャップ萌えと言うヤツですの!?

「このままじゃ風邪を引いちゃうね。早く出ようか」

「そ…そうですわね」

普段は結んでいる髪が下してあって、少しだけ大人びて見えた仲森さん。

なのに、表情はどこまでもあどけなくて…。

あぁ…もう！本当になんなんですの!?

自分の気持ちが変わらないまま、私達は一緒にシャワー室を出た。

・
・
・
・
・
・

私と仲森さんは一緒に更衣室で着替えていたが、お互いに言葉を一言も交わさない。

何を話せばいいのか分からないし、なにより恥ずかしい…。

どうしてこんな事になってしまったのかしら…。

「……今日はごめんね」

「え？」

「なんでいきなり謝るんですの…？」

「試合中に偉そうな事を言っちゃって、しかもお腹まで蹴っちゃったし…」

「そう言えば、色々と仰っていましたわね。」

「何故か一言一句覚えてますけど。」

「あと、あの鋭いキックは本当に痛かったですわ。」

「別に気にしていませんわ。あれは全て自分の未熟さが招いた事。私が反省する事はあっても、貴女が気に病む必要はありません」

「うん……ありがとう」

「なんか……沈黙が痛いですわ…。」

「寧ろ、謝罪するのはこちらの方です」

「それは……」

「仲森さん」

「着替え終わった私は、隣で着替えている仲森さんの方を向いた。」

「彼女はまだ着替えている途中で、上だけ下着姿だった。」

「改めてよく見ると、結構大きいですわね…！」

「この度は……本当にすいませんでした」

「え……ええ？」

「私は腰を折って彼女に謝罪した。」

「自分がクラス代表に推薦されなかったとはいえ、その事を貴女にぶつけるのはお門違いでした。本当にごめんなさい…」

「……………」

「あの場で私の名が出ずに貴女の名が出たと言う事は、それはクラスの皆さんが仲森さんこそが相応しいと思った証拠。それなのに私は……」

「あの時、私が思った感情は『嫉妬』だ。」

「私は選ばれた彼女に対して嫉妬しまったのだ。」

「けど、時が過ぎるにつれて心が冷静になって、自分の犯した過ちに気が付いた。」

でも、少なくとも試合が終了するまでは引つ込みがつかない。
だから、本当は勝敗に関わらず謝ろうとは思っていた。

それなのに、試合中にまたあんな事を言ってしまうなんて……私と
言う人間は……。

「……もう気にしてないよ」

「仲森さん？」

顔を上げると、そこには着替え終わった仲森さんが優しい笑顔でこ
ちらを見ていた。

「きつと、今までの自分の努力が否定されたような気持ちになったん
だよな？」

「私は……」

「オルコットさんは代表候補生になるまで、私なんか想像出来ない
程に頑張つて来たんだと思う。多分、あの時だつて代表候補生だから
自分がクラス代表になって当然だつて思ったんでしょ？でも、何故か
選出されたのは私のような無名の女子。そりゃ、怒つて当然だよ」

なんで……なんでそんな事が言えるんですの……？

今回の事は完全に私の子供じみた嫉妬と我儘から始まった事。

仲森さんは寧ろ被害者と言つても過言ではないのに……。

それなのに……

「だから、もういいよ。試合は終わったんだしき。全部水に流そうよ。
お互いにシャワーを浴びた事だし」

「それ……洒落のつもりですか？」

「あ、バレた？」

「全く……ふふ……」

「ははは……」

この時、私は確信した。

彼女こそが本当の意味でクラス代表に相応しいと。

試合中に見せた強さとカリスマ。

そして、この聖母のような包容力。

仲森さんになれば、ついて行きたいと私も思う。

「仲森さん。私の事はセシリアと呼んでくれませんか？私も貴女の事

を佳織さんと呼びますから」

「……うん、いいよ」

仲森さん……じゃなくて佳織さんは私の手を握って微笑んだ。

「これで私達は友達だね」

「友達……」

私と佳織さんが友達……？

「そう……ですわね……」

私の学園生活の友達第一号が、まさか試合をした相手だなんて……
皮肉ですわね。

でも、それがいいと思っっている自分がいますわ。

「佳織さん。私……友達で終わるつもりはありませんことよ？」

「ど……どういう事？」

「さあ？」

私の中に芽生えたこの気持ち……佳織さんと一緒にいる事で確か
めさせて貰いますわ！

いつも彼女と一緒にいる方々にも宣戦布告しなくてははいけません
わね。

「まずは、クラスの皆に謝らないとね？」

「はい。分かっていますわ」

きっと、とても勇気がある事だと思いますが、今の私なら出来ると
信じています。

だって、佳織さんが一緒にいてくれるから。

.....

.....

.....

.....

.....

佳織とセシリアの試合は、アリーナで見ていた全ての生徒に色んな

影響を与えた。

その中には、佳織に対して強い印象を持った人物も複数存在する。
例えば……

「仲森佳織……ね。今まで目立った噂が無い少女が、これ程の実力を隠し持っていたなんてね……。これは注視しておくべきかしら……」

どこぞのロシア代表と生徒会長を兼任している少女だったり……

「赤くて強くて格好良くて……まるで本当のヒーローみたい……」

その妹の日本の代表候補生な四組のクラス代表だったり……

「へえ……暇つぶし感覚で来てみれば凄いものが見れたな……。おもしれえ……!」

金髪美人な三年生のアメリカの代表候補生だったり……

「なんか凄かったスね……。私が一年の頃とは大違いっス……」

その個人的なパートナーである二年生のギリシャの代表候補生
だったり……

佳織が知らない所で、色んなフラグが乱立していることに、彼女は
まだ知らない。

・
・
・
・
・
・

次の日。

私は早朝から大ピンチに陥っていた。

「う……ううう……」

い……痛いよお……。

「ううくん……? かおりん……?」

一夏と箒は微妙な顔をしていたが、謝罪の提案が佳織からだとなると、仕方が無いと言った感じの顔をしていた。

実は佳織は勝敗に関わらずクラス代表を辞任する気満々だったが、色々あって完全に忘却していた事に、復帰してから気が付くのだった。

そんな佳織はと言うと…？

「によ…尿意があく…でも動く体が痛い…」

人知れず別の意味で再びピンチになっていた。

佳織の明日はどっちだろうか？

第9話 お空をビューン

私：織斑千冬が仲森佳織と言う少女と出会ったのは、もう随分と前の事になる。

あれはそう……私達姉妹の両親が突如として蒸発した頃か。

私達の家の近所に新しい家族が引越してきた。

当時の私は色々必死で他の事に気を向ける余裕なんて無かった為、どんな家族が来たかなんて全く把握していなかった。

だが、私の妹である一夏が友達として佳織を家に招待し、その時初めて私は佳織と邂逅した。

あの頃はまだ何も佳織の事を知らなかったから、私からすれば容姿を除けば至って普通の少女と言った印象だった。

佳織との出会いを切っ掛けにして、私達は仲森家の人々と知り合うようになっていった。

人々と言っても、佳織は一人娘だから、他にいるのは彼女の御両親だけだな。

それまでは東や箒の両親である篠ノ之夫妻になんとか支えて貰っていたが、正直言ってそれだけでは苦しかったのが現実だった。

当時はまだ私も学生。

バイトをしたいと思っても、学校側が簡単には許可してくれない。

だからと言って、流石にそんな事を面と向かって言うつもりは毛頭なかったがな。

私もそこまで失礼な女ではない。

だが、そこに仲森家の援助が加わってから、ようやく生活が安定しただした。

一夏が箒だけでなく佳織とも遊ぶようになったのを見て、とても嬉しく思ったのは今でもよく覚えている。

箒とも知り合ったと言う事は、当然のように東とも顔を合わせる事になるわけで……。

優れた頭脳を持つが故に他人を見下す傾向にある東は、最初は当然

のように佳織の事も見下していた。

だが、どんなに辛辣にされても佳織は決して諦めなかった。

私と束は自分でも他人よりどこか突出している部分があると自覚している。

特に束はその傾向が顕著だ。

だからだろうか、どうしても同年代の人間とは仲良くなりづらい。気が付けば二人で一緒にいる事が殆どだった。

だが、そこに佳織が加わることで私達の生活が劇的に変わった。他の連中は私達の事をどこか色眼鏡で見ている節があった。

都合のいい時だけ利用出来ればそれでいい……そんな感じだ。別にそれを否定するつもりはない。

私だってそんな部分はあるからな。

けど、佳織は違った。

佳織は何と言うか……どこまでも優しかった。

私がイライラしていて辛辣になった時も、日頃のストレスで苦しい時も、辛くて泣きそうな時も、いつも傍にいてくれた。

まるで本当の母親のような包容力を持っていたんだ。

勿論、佳織は優しいだけじゃない。

怒る時はちゃんと怒る。

特に私や束の部屋が散らかっていた時は凄かったな。

まるで鬼のような形相で叱りつけてきたっけ。

あれから、佳織を本気で怒らせてはいけないと言う、私達の中での暗黙の了解が出来てしまった程に。

だけど、だからこそ、私は段々と佳織に惹かれていったのかもしれない。

私の事をちゃんと『私』として見てくれたから。

私の心をずっと支え続けてくれたから。

気がついた時には、自分よりもずっと年下の少女の事を本気で好きになっていた。

多分それは束も同じだろう。

アイツもいつの間にか佳織の事を『かおりん』と渾名で呼んでいた

からな。

東にだけは絶対に渡さん…！

そんな平凡を絵に描いたような能力しかない筈の佳織が、まさかI Sに於いてあれ程の才能を發揮するとは夢にも思わなかった。

誰にでも一つは取り柄があるとはよく言ったものだが、まさか、佳織の場合はそれがI Sだったとは…。

世の中、何があるか本当に分からないものだ。

佳織が筋肉痛から復帰して、早速アイツのI Sを調べてみた結果、驚くべき事が判明した。

機体の色と頭部のブレードアンテナ以外は、特に機体の形状に変化は無かった。

なにやら特徴的なエンブレムは描かれていたが。

ま、佳織によく似合っているから私は気にしないがな。

話が逸れたな…。

ごほん。実は一次移行を終えた佳織の専用機『ラファール・リヴァイヴII』は、各部スラスターの出力リミッターが強制解除されていて、機体の限界性能が極限まで引き出されていたのだ。

かと言って、別に武器の威力自体に変化は無い為、ルール上は支障は無いのだが、それでも凄いやという他無かった。

あんな出力では操縦性は恐ろしく神経質になるだろうし、そこら辺の素人ならばあつという間にS Eを消費して機動不能に陥るだろう。

だと言うのに、実際の佳織は私達の目の前で卓越した操縦技術でアレを完璧に乗りこなしてみせた。本当に驚愕すべき事だ。

途中から口調が変わったのにも驚かされたがな。

あれはあれでとても恰好よかったから、私的には充分、許容範囲内だが。

あの試合の光景を見た一部の生徒達が、アリーナを赤い軌跡を残しながら駆け抜けていく様を見て、佳織の事を『赤い彗星』と呼ぶようになったとか。

まさか、入学して早々に異名で呼ばれるようになるとはな。

流星は私の佳織だ。

……なに？まだ彼女は私の物ではない……だと？

何を言う。最終的には私の物になるのだから、別にいいだろう。

これだけは誰にも譲れないからな。

それが例え実の妹であつたとしても……だ。

・

・

・

・

・

春も麗らかな4月下旬。

今日も今日とて、皆と一緒に楽しい授業の真っ最中。

私が筋肉痛で寝込んでいる間に、いつの間にか一夏の専用機の受領は完了していて、復帰した時には彼女の左手首に見慣れない白い腕輪のような物が装着されていた。

どんなISか聞こうとしたけど、それは授業の時までお楽しみと言われちゃった。

多分、白式だとは思うけど、もう原作知識は当てにならないからなあ……。

どこでどう変化しているか分かったもんじゃない。

で、今日の授業はグラウンドでの実習になる。

私達はISスーツを着てグラウンドに並んでいる。

千冬さんと山田先生は揃ってジャージ姿。

私的には見慣れた光景だけ。

「では、これよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。…が、その前に……」

……ん？なんでこっちを見るんですか？千冬さん。

「仲森。そのISスーツは何だ？」

「……これは……」

実は、私が今着ているISスーツは、この間の試合の時に着ていた

学校指定の物じゃない。

まるで私のラファールⅡと同じように真っ赤に染まったスーツを着ているのだ。

お腹の部分にはご丁寧にシャアのエンブレムまで描かれているし。「えつと……あれから私でも少しISを見てみたら、いつの間にか、このISスーツが拡張領域内に入っていたんです。で、試しに取り出してみたらなんでか私にサイズがピッタリで、それでどうしようか迷っていたら、なんでか皆が『着た方がいい』って言うてくるもので……。その勢いに負けてしまって、こんな事に……」

「そうか……」

これもどう考えたって、あの『神』の仕業だろう。

全く……！あのターニヤちゃんが存在Xを心の底から嫌悪する気持ちがよく理解出来るよ。

けど、これが見つかった時の皆も凄かったなく。

グイグイ迫って来るもんだから、完全に迫力負けしちゃったし。

特に一夏と箒とセシリアが凄かった。

三人とも鼻血を流しながら来るんだもん。

本気で泣きそうになったよ。

最終的には本音ちゃんの懇願に折れたんだけど。

「お前達……」

お？何を言う気だ？

「よくやった」

真剣な顔でサムズアップするような事か!?

「あの織斑先生……授業……」

「おっと、そうだったな。私としたことが……」

山田先生に言われて、ようやく授業に戻った。

こんなんで本当に大丈夫だろうか……？

「織斑、仲森、それとオルコット。三人とも前に出てISを展開。その後、試しに飛行してみろ」

「「分かりました」」

本当は抵抗感ありまくりだけど、ここは授業だと割り切って我慢し

よう。

お願いだから、また恥ずかしい発言はよしてよね…。

私達は揃って列の前に出て、ISを展開する。

私は自分の専用機である『ラファール・リヴァイヴⅡ』を。

セシリアは『ブルー・ティアーズ』。

そして一夏は…。

「よし、出来た」

「三人とも一秒未満か。中々に筋がいいな」

「えへへ…。」

嬉しそうに頬を緩ませちゃって。

純白の装甲に翼状の非固定浮遊部位^{アンロック・ユニット}。

間違いなく、私が知っている一夏の専用機『白式』だ。

「それが一夏の…？」

「そう。私の専用機の『白式』だよ！」

自慢げに胸を逸らす一夏。

今一瞬、確かに揺れたぞ。

「そうか。仲森はまだ見ていなかったんだな」

「はい」

「まあ、これから幾らでも見る機会はあるんだ。今は授業に集中しろ」

「はい」

そうだな。

流石にこれ以上は授業から脱線するわけにはいかないよね。

「よし。ならば飛べ」

そう言われると同時に、私三人は一斉に飛行を開始する。

上昇するスピードは、一番は私でその後ろに一夏とセシリアが並んでいる形だ。

「うわ…。。間近で見たら、佳織ってこんなにも早いんだ…」

「ふふ…。。当然です！この私に勝ってみせたのですから！」

「それって自慢するような事？」

話しながら出来てる時点で、二人とも余裕がある証拠だよ。

それだけでも私は凄いつて思うけどね。

ある程度の高さまで上がると、私達は停止した。

「ふっ……。普段は見る事の出来ない上から見ると、学び舎と言う物も、存外悪くないな」

「そ…そうですわね！（また佳織さんの『ツカキャラモード』を見れましたわ♡）」

「う…うん。偶にはいいよね。（きゃー！ISに乗ってる時の佳織って、やっぱりカッコいい♡）」

気のせいかな…？変な幻聴が聞こえたような気が…。

「と…ところで佳織さん？」

「ん？どうした？セシリア」

「これからは放課後に訓練等をするのでしよう？」

「そうだな。私はまだまだ未熟。体も心も操縦技術も、鍛えなければならぬ事は多々ある。これからはアリーナが空いている時は基本的にISの操縦訓練に放課後を費やすだろう」

「で…でしたら！是非とも私と一緒に訓練しませんこと？」

「君とか？」

「はい！」

それは嬉しい申し出だ。

勝負に勝ちましたけど、私が未だに素人なのは変えられない事実。

代表候補生であるセシリアから学べる技術は非常に多い筈だ。

「ならばお願いするとうしようか。君からは多くの事を教わりたいと思っていたいな」

「はい！」

「む…」

あ、一夏がふくれっ面になってる。

なんかしたっけかな？

「私もする！」

「え？」

「私も一緒に放課後の訓練する！私だってまだまだ未熟だもん！」

明らかにムキになってますね。分かります。

「抜け駆けは許さないんだからね…！」

「ぐぬぬ〜…!」

なんでそこで睨み合うの？

『お前達。今は授業中だと言う事を忘れてないか?』

「「あ」」

千冬さんからの通信回線で我に返る。

すっかり忘れかけていたよ…。

下を見てみると、箒と千冬さんが恨めしそうにこっちを見上げている。

本音ちゃんは相変わらず眠たそうだ。

流石に実技の最中の居眠りはやめた方がいいよ？

『そこまで余裕があるのならば、今から急降下と急停止をしてもらおうか。目標は地表から10cmとする』

10cmか…。

中々にシビアかも。

「了解しました。では私から」

こつちに目配せをした後、セシリアは来た時と同じ要領で一気に降りていく。

結構なスピードが出てるけど、見事に急停止に成功したようだ。

「むむむ…：…やっぱり凄いなあ〜…」

私からすれば、一夏も充分凄いからね？

「じゃあ、次は私が行っていい?」

「勿論だ。気を付けろよ」

「任せといて!」

私の一言で笑顔になった一夏は、セシリアと同じように急降下、そしてギリギリの所でなんとか急停止に成功したようだ。

基本スペックが違うせいかな、やっぱり原作のようにグラウンドに見事なクレーターは作らなかつたか。

「最後は私か」

この機体は所謂シャア専用バージョンアップされてるから、スピードには細心の注意を払わないと。

「では…行くぞー!」

なんて言ってる傍から全力降下あああああああつ!?
なんでそうなるのおおおおとおとおおおつ!?

「む……!」

ち…地表がもう目の前にいいいいいいいつ!?
ぶつかろううううううううう!!!

「ここだ!」

と…止まった…?

体を捻って態勢を整えてからの急停止。

凄いい勢いで降りたにも拘らず、クレーターどころか砂煙すらも碌に立ってない。

よ…よがっただあ…(泣)

「実に見事だと言っておこう。だが…」

千冬さんがやって来て、出席簿で軽く頭をポンと叩かれた。

「もう少し速度の調節を心掛けるようにしろ。見ているこつちが冷や冷やする」

「これは失礼しました。これから気を付けるようにしましょう」

「う…うむ。それでいい…(か…佳織の凛々しい顔が傍にく…ニヒルなお前も素敵だ…佳織…♡)」

また幻聴か…?

「佳織…♡」

「うう…」

そんで、箒は目をキラキラさせてこつちを見て、本音ちゃんは顔を真っ赤にして両手で胸を押さえている。

どこか具合でも悪いのだろうか?

「で…では、三人とも列の前に来い。次は武装の展開をしてもらう」

「了解です」

武装…ね。

白式の武装ってやっぱり『アレ』だよね…。

少し浮遊して移動し、皆の前に立つ。

「まずは織斑。武装を展開して見せろ」

「は…はい!」

右手を僅かに開いて、一夏は精神を集中させるように目を瞑る。すると、右の掌から光が発せられ形となり生成される。

光が収束すると、そこには真つ白な一本の剣が握られていた。

この間、僅か1秒にも満たない。

「出来た……！」

「0.5秒。及第点だな」

それで及第点なの!?

「ふむ……。一夏、それが君の武装か？」

「そうだよ。雪片式型って言つて、姉さ……織斑先生が昔使っていた雪片の後継に当たる剣なんだって」

「ならば、まさか零落白夜も……？」

「まさか……！そこまで都合よくできてないよ……！」

……………え？

今……なんて仰いました？

「織斑先生。少し佳織に説明してもいいですか？」

「構わん。だが、他の連中にも聞こえるように説明しろ」

「分かりました」

れ……零落白夜が使えないってどういうこと？

白式は最初から使えるんじゃないの？

「この雪片式型は、この実体剣と光学兵器であるレーザーブレードを状況によって使い分ける事が出来るんだよ。勿論、レーザーブレードを使用の際はエネルギーを消費するけどね」

れ……零落白夜の代わりにレーザーブレード……？

本当はこっちの方が普通なんだろうけど、下手に原作知識を知っていると、こっちの方に違和感を感じるよ……。

「一応、これは初期装備なだけであつて、拡張領域にはラファール程じゃないけどそこそこの空きはあるみたいで、そこに他の武装を入れる事は可能みたい」

えくと……つまり？一撃必殺の零落白夜が無くなった代わりに、エネルギー効率がよくなって、しかも他に武装が装備出来るようになって汎用性も増した……と。

攻撃力は低下したかもしれないけど、これって……

総合的に見れば、原作よりもずっと使いやすさがアップしてない!?
っていうか、こっちの白式の方がずっと強いような気がする…。

「最初でそれだけ説明出来れば上等だろう」

「ありがとうございます」

まさか白式すらも変化しているとは……。

どこまで変化しているのか、見極めるのも馬鹿馬鹿しくなってきたよ…。

「次はオルコット。やって見せろ」

「分かりましたわ」

セシリアは真横に右腕を突き出すだけで、あつという間に武装を展開して見せた。

光ったのも一瞬だけだ。

その手には前にも見た『スターライトMk-III』が握られている。しかも、ちゃんと銃身にはちゃんとマガジンがセットされていて、いつでも発射可能な状態になっていた。

うくん…こっちも見事だ…。

「流石は代表候補生……と言いたるところだが、そのポーズはやめろ。真横に銃を展開して佳織に当たったらどうする気だ」

「す…すいませんでした…」

今、私の事を名前で呼んだよね？

なんで誰もツツコまないの？

「これからは正面に展開できるようにしろ。いいな」

「はい…。精進しますわ…」

展開時間は合格点でも、他が駄目なら意味無いって事か。

これはこっちも油断できないな。

「では、次は近接用の武装を展開しろ」

「りよ…了解です」

少し慌てたセシリアはライフルを収納し、次の武装を展開しようとした……が、中々に出てこない。

展開の光はセシリアの手の中で光り続けるだけだ。

「まだなのか？」

「も…もう少しですわ…！」

「いつその事、名前で呼んじやええば？」

「それは……」

確か、頭でイメージするよりは直接名前を呼んだ方が早く呼び出せるって教科書にも書いてあったね。初心者用らしいけど。

「ああ…もう！来なさい！インターセプター!!」

我慢の限界だったのか、最終的には名前を呼ぶ羽目に。

すると、彼女の手中小型のナイフが握られていた。

「はあ……。馬鹿者。一体何秒かかっている。ご丁寧に展開するまで対戦相手に待ってもらおう気か？」

「ち…近づかれる前に倒せば問題無いですわ！」

「阿呆が。戦いとは常に最悪の事態を想定しろ。お前の弾幕を突破してくる相手なんて、探せば幾らでもいるぞ。お前の隣とかにもな」

「う……」

それって私ですね。そうですね。

「これからは近接用の武装もちゃんと短時間で展開出来るように訓練しろ。分かったな？」

「はい……」

あちら。すっかり意気消沈。

「最後は仲森。出来るな？」

「当然」

どうして私はここまで自信満々な。

「ではまずは……」

IS用マシンガンから始まって、次にIS用バズーカ。更にヒート・ホーク。

ここからは今まで出した事のない武装に移りまゝす。

まずは左腕の前腕に固定式の2連装マシンガン。

そのまま一番大きい武装である『IS用対艦ライフルASSR―7

8』を展開。

「これでよろしいですか？」

「ああ。全部合わせて約1.5秒。実に見事だ。お前達もこれを手本にしろ」

お手本は言い過ぎでしょ。

私の場合は単純にザクの武装が脳裏にこびり付いているから出来た芸当だし。

そうじゃなかったら、絶対に遅かったよ。

「で？今、お前が握っているのは何だ？初めて見るが」

「これは所謂『対艦ライフル』です。本来は対艦戦において使用される武器で、艦の装甲を貫いた際に弾子を撒き散らして内部から艦を破壊する特殊弾を高初速で発射するのですが、流石にIS同士の試合では使用しません。ちゃんと通常弾頭を使用するつもりですよ。そこはご安心を」

「そ…そうか」

因みに、対艦と言っているだけに威力は保証済み。

直撃すればかなりのダメージが期待できる…:…:…と思う。

キーンコーンカーンコーン…:

あらチャイム。

「もう時間か。今日の授業はここまでにする」

「」「」「ありがとうございました！」「」「」

やっと終わりか…:

今日はなんとか恥ずかしいセリフは出なかったな。

この調子が少しでも続けばいいんだけど。

イベントがあつたりしたら、そうもいかないだろうなあ…:

はあく…:前途多難だよ。ホント。

第10話 セカンドと就任パーティー

「ここがIS学園……ね」

すっかり暗くなったIS学園の正面ゲート前に、私は一人静かに立っていた。

ここから見えるIS学園の校舎を見つめているけど、なんか肩から下げているポストンバックが重くなってきたから、そろそろ行こうかしら……。

「えくつとく……受付ってどこにあるって言ってたっけ……」

確か、上着のポケットにメモ紙が入ってたわよね。

メモメモくつと。

「あ、あった」

すっかりくしゃくしゃになってるけど、読めればよし！

「本校舎の一階総合事務受付……いや、分からんし」

今日初めてここに来たのに、いきなり場所の名前だけ教えられても分かるわけないっつーの。

「まあ……いや。分からないのなら、足で探せばいいのよ」

刑事ドラマとかでも、情報は足で探すの基本だ的な事を言ってた気がするし。

どんなドラマかは忘れたけど。

「って言うか、出迎えが無い事は予め聞かされていたけど、それでも少し乱暴すぎやしない？もうちょいこっちに配慮とかしてくれても罰は当たらないと思うんだけど」

なんて言っても仕方ないんだけど。

今まで散々IS学園に行くことを断っておいて、今になって手の平を返すようにOKサインを出したんだもの。

向こうも色々と思うところがあるんでしょ。

当初、私はお上の方から専用機の実践テストとデータ収集の為にIS学園に行くようにずっと言われ続けていた。

けど、私からすれば、何が悲しくていきなり転校をしなくちゃいけないんだって話よ。

今まででもずっと転校転校のオンパレードだったのに、また転校だなんて。

しかも、今度は日本にあるIS学園。

どうせ、いる奴らは全員がお高く止まったエリート様ばかりなんだと思っ、代表候補生としての権限をフルに利用して断り続けた。

そんなある日、私の元にある情報が流れ込んできて、それを聞いた途端に私はIS学園に行くことを決めた。

ついこの間、IS学園で模擬戦が行われたらしい。

それ自体は別になんでもない。

ここはISの事を学ぶ為の学園だもの。

模擬戦ぐらいしたって不思議じゃないわ。

でも、問題は…その模擬戦をした選手だった。

イギリスの代表候補生を圧倒的な技量で打ち負かした、IS適性A+の女の子。

彼女自体はどこにでもいる平凡な少女だったらしいが、それがまさかのジャイアントキリングをしてしまったから、さあ大変。

IS学園にいる生徒からの情報であつという間にネット上に広まって、その試合の内容を見た連中はこぞって彼女の事をこう呼んだ。

『赤い彗星』……と。

それが誰か気になって、私も試しに映像を見てみたら、そこに映っていたのは……。

私の大好きな幼馴染の女の子『仲森佳織』だった。

もう驚いたなんてもんじゃないわよ。

赤い彗星の正体が佳織だって知った時、私ってばマジで椅子から転げ落ちたし。

まさか、佳織がIS学園に行っていたなんて思いもしなかった私は、すぐに上の方に掛け合っ、IS学園に行くことを了承した。

で、今に至る……って訳。

(誰か都合よく通りがかったりしないかしらね)。佳織とか佳織とか

佳織とか)

流石にそこまで都合よく出来てないか。

これから一緒に学園に通うんだし、会う機会は幾らでもあるわよね。

「しゃーない。こうなったら適当に歩いてみるか」

歩いていけばいつかどこかに着くでしょ。多分。

「やっぱり……さんは凄いです……ね……」

ん？なんか声が聞こえたような気が……

向こうから？

視線を向けると、そこにはISの訓練施設が見えた。

少し暗くて視界が悪いけど、どうやら複数人の女子が出て来たみたい。

丁度いいから、あの子達に場所を聞こうと。

少し小走りで彼女達の元に行くと、少しづつ彼女達の姿が見えてきた。

つて！あれってもしかして……！

「そんなことないよ。まだまだセシリアには及ばないって」

やっぱり……間違いない！佳織だ！

まさか本当に来日初日に佳織に再会出来るなんて！

これもきつと、日頃の行いがいいせいね！

もしくは、アタシと佳織が運命の赤い糸で結ばれてるかのどっちか。

愛の力って偉大だわ。

「でも、私達の中じや操縦技術は間違はなく佳織が一番じゃない？」

この声は……一夏!?

あの子もこの学園にいたの!?

まあ……一夏の実力なら入学出来ても不思議じゃないけど……

「そうだぞ。もっと自信を持って、佳織」

……何？あのポニーテールの女の子は？

しかも、見た感じでは結構仲良さそうだったし……

「ISに乗っている時は、あんなにも凛々しいのですのに……。でも、その

ギャップが佳織さんの最大の魅力なんですけど…♡」

あの金髪もなんか仲良さげだし…。

「はあく…かおりん。私…。」

あのツーサイドアップの子なんて、完全に佳織に対して恋煩いしてるじゃない！

あの顔は間違いなく、恋する乙女の顔！

「どうしたの？本音ちゃん。まだ調子悪い？」

「いや佳織。本音は別に調子が悪いと言う訳じゃなくてだな…」

「ある意味では、かなり厄介な病気だけどね」

「??？」

ああ…完全に分かってない。

佳織は無駄に鈍感な所があるから。

「辛かったらいつでも言っつてね。なんでも力になるから」

「う…うん…。」

「あくもう！本音ちゃんは可愛いなく！」

「ふにやく！」

ああ…!?佳織があの子に抱き着いたく!?

一夏や他の二人も驚いてるし！

つて言うか、あの四人組って全員が『規格外』じゃない？

なんか歩く度に、ある一部分が揺れてるし。

どこかは敢えて言わないけど。

言ったら負けな気がするし。

私が驚いているうちに、佳織達は校舎の中に入って行ってしまった。

それからすぐに本来の目的地である総合事務受付は発見できた。

実は佳織達が出て来た場所からすぐ近くにあったのだ。

これも佳織に早々に再会出来たからだと信じたい。

「えくつと…これで全ての手続きは完了しました。IS学園にようこそ、凰鈴音さん」

事務の人は愛想よく話してくれたが、今の私にそれに対応する余裕は無い。

「あの……仲森佳織さんって何組ですか？」

「仲森さん？ああく！例の『赤い彗星』の子ね！」

「どうやら、こうした人達にも佳織の異名は伝わっているようだ。」

流石は私の佳織♡

「仲森さんなら一組よ。で、貴女は二組。丁度お隣さんになるわね。確か仲森さんは一組のクラス代表を務めている筈よ」

クラス代表……。

昔からリーダーシップはあったし、少し予想出来たことかも。

「じゃあ、二組のクラス代表つてもう決まってるんですか？」

「決まっていたと思うけど、それがどうかしたの？」

「いえ……ちよつとO・H・A・N・A・S・H・Iしてクラス代表を譲って貰おうかな〜って思ってた……」

「ひいっ!？」

待ってなさいよ佳織……。

アンタを一番愛しているのは誰なのか、改めて分からせてあげるわ

！

・
・
・
・
・
・
・

「てな訳で、仲森さん！クラス代表就任おめでとぅ〜！」

………なんてこうなった？

私は今、学生寮の食堂にいる。

夕食後の自由時間はゆっくりとネットゲでもしようかと思っていたのに、クラスメイトの一人（鷹月さん……だったっけ？）に連行されるように食堂に来了。

で、待っていたのはクラスの皆とデカデカと『赤い彗星クラス代表就任パーティー』と書かれた大きな紙だった。

せめて中二病溢れる異名じゃなくて本名を書いてほしかった…。

これじゃあ、いい恥さらしだよ…。全然おめでたくないよ…。

そこかしこでクラッカーが鳴り響き、私の頭の上にもいくつか紙テープが降ってきた。

ははは…もう知らね。

って言うか、よく見たら明らかにクラスの人数よりも多いんですけど？

これ絶対に数人は他のクラスの子が混じってるよね？

「いや〜！まさか仲森さんがあれ程の才能を隠し持っていたなんてね〜！」

「うんうん！人は見た目によらないってよく言うけど、本当だったね！」

それに関しては私自身が一番驚いてるから。

「流星は『赤い彗星』！」

「お願いします、それだけは勘弁してください」

その名を呼ばれる度に、私の心が悶絶するんだよお〜！

私は食堂にあるソファアの中央に座っていて、その両隣にセシリアと本音ちゃんが座っている。

一夏と箒はその二人の隣。

なんか悔しがつてるけど、なにか欲しい食べ物でもあったのかな？

テーブルには皆が持ち寄ったと思われる色々なお菓子やジュース類があるけど。

「かおりんは人気者だね〜」

「そうかな？」

皆が望んでいるのは『赤い彗星』の方じゃないの？

「佳織さん。ジュースのお替りはいかがですか？」

「え？じゃあ貰おうかな？」

「わかりましたわ」

そして、セシリアはさつきからずっと私にくっついてお菓子を取ってくれたり、ジュースをついでくれたりしてくれている。

一体いつから君はそんなに献身的な女の子になった？

「ぐぬぬ……！ここからでは佳織に近づけん……！」

「我慢……我慢だよ箒……！まだ戦いは始まったばかりだから……！」

「そ……そうだな。まだ始まったばかりだよな」

なにがだよ。

両隣で挟んでの会話だから、いくら喧騒に紛れていても全部聞こえてるんですけど？

「はいはい……！どうも、毎度お馴染みの新聞部ですす！」

毎度お馴染みじゃないでしょ。

今回が初めてだよ、色んな意味で。

「噂に名高い『赤い彗星』こと仲森佳織ちゃんに特別インタビューをしよう！」

「……お……！」

おお……！じゃねえよ。

少しはこっちの身にもなって。

「あ、因みに私は二年生の黛薫子。こう見えても新聞部の副部長をしてます。これからよろしくね。はい、これ名刺」

「あ……どうも」

思わず名刺を取ってしまった。

と言うか、今この人『これから』って言った!? 言ったよなね!?

「それでは早速お聞きしましょう！まずは、入学早々に『赤い彗星』と言う異名で呼ばれるようになった佳織ちゃん！今の心境をどうぞ！」

「恥ずかしいの一言ですよ」

「デスヨネ。うん、それはよくわかる」

なら聞くなよ。

って、おい!? その手に持っているのはボイスレコーダーじゃないですか!?

この人、録音する気満々だよ!

「でも、それだけ君が凄いつて証拠でもあるよね。最初の試合から、あれだけ派手に大立ち回りをすれば、そりゃあ有名にもなるよ」

急に正論を言われてしまった……。

でも、あれは私の本来の力じゃない。

本当の私はどこにでもいるへっぽこ三等兵だ。

「じゃあ次ね。クラス代表になった感想でも聞かせて貰おうかな？」

「感想……」

そう言われてもな〜う〜ん……。

私は何を言おうか悩んでいると、急に頭にラファールIIのヘッドセンサーが部分展開された。

「……!」

やばい……!部分展開だけでもシャアモードになるのか……!

しかも、頭に展開したせいか、誰も気が付いてない!

「私は所詮、どこにでもいる一介の女子高生に過ぎない。だが、そんな私でも何かが出来ると言うのであれば、それを全力でやらせてもらおう。私はここで、一組のクラス代表に恥じない働きをすると皆に約束する」

言ってしまったああああああああ!!!

よりにもよって、この最悪のシーンでこの口調とか、絶対に黒歴史確定だよ〜!!

「……」

あ……あれ? 黛さん? 急に静かになってどうしたんですか?

皆も黙りこくってるし。

「あ……ごめんね。なんか急にボーっとしちゃって。あはは〜……」

黛さんの顔が赤いぞ。まさか、熱でもあるんじゃない……。

(うわ〜……。噂には聞いてたけど、これが佳織ちゃんの『ヅカキヤラモード』ってやつか〜……。不覚にも少し見惚れちゃったよ……)

あ、ヘッドセンサーが消えた。

ふう〜……よかった。

「仲森さん……素敵……♡」

はい?

「ヤバ……私、マジになっちゃうかも……」

「私も……。まさか自分が『そっち』の道に踏み込んじゃうなんて……」

ちよ……ちよつと!? みなさ〜ん!?

大丈夫ですか〜!?

「セシリアもなんとか言っただけで……っで！」

は…鼻血！セシリアの鼻から鼻血が出てるって！

それに反して目は凄くキラキラしてるし！

「ああ……やはり、私の目に狂いはありませんでしたわ…♡佳織さんこそが私の理想の……」

理想の!?!理想の何よ!?

「ふにゃく…かおりん……♡」

それで本音ちゃんは顔が完全に蕩けて私の腕に抱き着いてるし！

「そうだ！一夏と箒は!?!」

「はあく…佳織いく♡」

「完全に撃墜されちゃったよあく…♡」

「ええっ!?!」

いつの間にか二人は私の両足にしがみついて、頬を摺り寄せてる！

「ちよ…!二人とも！これじゃあ身動き取れないから！」

「佳織いく…♡」

「聞いてないし！」

この場にまともな人間は誰もいないのかあく!?!

「本当はここでセシリアちゃんにもインタビューをしようと思っただけ、もういいや……」

「それがいいですわ……」

いやいや！セシリアにもインタビューしようよ！

私だけなんて嫌だよ!?!

「取り敢えず、佳織ちゃんに惚れた事にしとくね」

「間違いじゃないから大丈夫ですわあく…」

間違いじゃないのかよ!?!

「しっかし、まさか本音ちゃんも……ねえ…」

「本音ちゃんの事を知ってるんですか？」

「うん。この子のお姉さんとは知り合いだね。その関係で本音ちゃんとも顔見知りなんだ」

思ったよりも顔が広い本音ちゃん。

意外な一面が次々と明らかになる…。

「頑張つてね佳織ちゃん！色んな意味で応援してるから！」

「色んな意味とな!？」

そんな事を言われても心配しかないよ!？」

「んじや、最後に皆で記念写真でも撮ろうか。当初は専用機持ちだけで撮るつもりだったけど、こうなったらもういつその事、皆で撮った方がいいような気がしてきた」

黛さんが一旦離れて、少し遠くにあるテーブルに自分のカメラをセツトする。

あれ、彼女が撮影するんじやないの？

「ついでだから、私も入るね」

マジですか…。

しかも、何気に私の前にいるし。

それを合図にして、その場にいた全員が私を中心に集まった。ぶつちやけ、窮屈で暑いです…。

「それじゃあ皆々。ジョナサン・ジョースターの必殺技と言えばく？」

「サンライトイエロー・オーバードライブ」
「「」山吹色の波紋疾走!!「」」

パシャ!

「なんでやねん!!!」

「お!見事なツツコミ!」

そりやツツコミもしますよ!

つーか、皆ジョジョ好きだな!？」

セシリアも一緒に叫んでたぞ!？」

「ジョジョ第一部の舞台はイギリス。その主人公であるジョナサン・ジョースターはアーサー王にも並ぶイギリスの大英雄ですわ!」

すげーなジョナサン!

いや、確かに凄い人物だけど、なんで漫画の主人公が円卓の騎士王と並ぶんだ!？」

その後も私のクラス代表就任パーティーは続いていき、終わったのは夜の22時を過ぎた頃だった。

私も本音ちゃんも一夏も箒もセシリアもすっかり疲れたのか、最後の方になるとすっかり大人しくなっていた。

別に何かをしたわけじゃないのに、すっごく疲れたよおく…。

図らずも今日もぐっすりと眠れそうだよ…。

でも、この時期って言えば何かがあつたような気が…なんだつたっけ…？

ま、いいや。明日考えよ。

第11話 もう一人の幼馴染と恋する少女達

「うう〜ん…?」

早朝。

なにやら奇妙な違和感を感じながら、私はそつと目を開けた。

「ん…?」

なんか重い？

何かが体に乗つかかっているようだ。

その証拠に、私の体の上にある掛布団が少し膨らんでいる。

しかも、胸の辺りに変な感触もあるし。

「一体何なの…?」

勢いよく布団を取ると、そこにあつたのは…

「すぴ〜…かおりん〜…」

「本音ちゃん!」

私の上に乗って熟睡している本音ちゃんでした。

っていうか、いつ抜け出して私のベットに忍び込んだの!?

「ちよ…:…:胸胸!」

現在、本音ちゃんの顔は私の胸に収まるように埋没していて、その両手はしっかりと私の両胸に触れている。

つーか、何気に揉もうとしないで!

「本音ちゃん! いい加減に起きてー!」

「えへへ〜♡かおりんのおっぱい…:…:ふにふに〜…:♡」

「寝言で感想を言うな!」

なんとか態勢を整えてから、体を揺さぶりまくった。

それを10分ぐらい続けて、ようやく起きてくれた。

「あれ〜?…?なんで私ってばかおりんのベットにいるの〜?」

「寝相だったの!?!」

いやいや…:…:これまでそんな事は無かったよね!?

どうして今になって、そんな寝相の悪さが露呈するのさ!?

「と…:…:とにかく!今は早く準備をするよ!急いで!」

「は〜…:…:いふあ〜…:」

最後まで言えてないし！

その後、なんとか食堂に到着して朝食を食べたが、急いでいた為どんな味だったか全く思い出せなかった。

……今度、超強力な目覚ましでも買ってこようかな…。

．．．．．

．．．．．

．．．．

．．

．

なんとかして遅刻の回避に成功した私達は、教室についてから即座に席に着き、いつものように皆が私の席の周りに集まる。

「なんだか今日は慌ただしかったな。一体どうした？」

「本音ちゃんが寝坊しかけたんだよ……」

「にやははく……ゴメンねるかおりん」

「そう思うのなら、せめてすぐに起きてほしい……」

「あはは……」

苦笑いをしてても誤魔化されないからね。

「佳織も大変だね……」

「本音さん。淑女たるもの、一人で起きなければいけませんわ」

「私は別に淑女じゃないんだけど……」

多分、セシリアの中じゃ女性は皆、淑女なんじゃないかな？

「あ、仲森さん。おはよう」

「うん、おはよう」

他のクラスメイトからも挨拶をされる。

あの試合以降、私に話しかけてくれる子が一気に増えた。

私がクラス代表になったと言う事も大きいのだろうが、それ以上に試合のインパクトが大きかったんだろう。

実に不本意ではあるけれど……。

「そうそう。仲森さんはもう転校生の話って聞いた？」

「「転校生？」」

「こんな時期に？…って、あれ？」

「この時期の転校生って…何か引つかかるような…。」

「なんでも、隣の二組に中国からの代表候補生の子が転入してくるんだって」

「中国…。」

私と一夏の言葉が重なる。

その瞬間、私の頭に稲妻が走った！

「あっ！」

「ど…どうしたんだ？いきなり」

「い…いいいや？なんでもないよ…」

「やっば〜！今完全に思い出したよ〜！」

「この時期って言えば、『あの子』がやって来る時期じゃん！」

「いや、この場合は『戻ってくる』の方が正しいのかな？」

「代表候補生…。」

「あ、セシリアがなんか反応してますよ。」

「もしや、この私の存在に危機感を覚えたが故の転入かしら？」

「ま…たこの子は…。」

「セシリア。慢心はダメだって。織斑先生もよく言ってるでしょ？」

「そ…そうでしたわね…。失言でしたわ」

「反省の意思があるならよし。」

「まあ、別にこのクラスに転入してくるわけじゃないんだ。そこまで気にする程の事でもないだろう」

「箒の言う通りだね。でも、一体どんな子なんだろう？」

「一夏は気になるのか？」

「うん。だって、隣のクラスってことは、今度あるクラス対抗戦で佳織と戦うって事でしょ？」

「そうだったな…。そんなイベントが控えているんだったな」

「多分、一夏も転入生の正体を知ったら驚くだろうなあ。」

「ならば！クラス対抗戦に備えて、今日からはより実践的な訓練をし

ましよう！私とならば必ずや佳織さんの成長に尽力出来ますわ！な
んせ、私は専用機持ちですから！」

「むく……私も一応、専用機を持つてるんですけど……」

「そうかもしれないませんが、実力はいざ知らず、知識や技術の方はまだま
だ勉強する事が多いのでしよう？でしたら、貴女はご自分の事に集中
して、佳織さんの事は私の任せてはいかがですか？」

「なんですって……！」

ああ〜ああ〜！

なんか朝から火花が散ってるし〜！

「二人は仲良しさんだね〜」

「仲良くなんて無い（ですわ）！」

「息ピッタリだな」

箒にツツコまれたよ。

こりやまた珍しい。

「喧嘩するほど仲がいい……ってやつ？」

「佳織さんまで……」

セシリアが泣きそうになりながらこつちを向く。

こんな風な会話が一番楽しい。

なんつーか……青春してる〜！って気になるから。

「取り敢えずは、やれるだけやってみるよ。昨日、皆の前で宣言もし
ちやったし」

図らずも……だけど。

「なに、佳織なら大丈夫さ」

「そうそう！きつと勝てるよ！」

「かおりんが勝つと、皆がハピハピだよ〜♡」

本音ちゃん……そのセリフって、どこぞの背の高いアイドルさんを
真似てない？

「そう言えば、対抗戦の優勝賞品ってなんだっけ？」

「確か、学食デザートの半年間のフリーパス券じゃなかったか？」

「デザートかあ……」

「あれ？仲森さんってデザート嫌い？」

「そうじゃないんだけど……甘すぎるのはちよつと苦手かな」
別に食べれないわけじゃないけど、少し気分が悪くなる。

個人的に好きなのは、モンブランとかビターチョコとかの甘さ控えめのデザート類だ。

「でも、皆が欲しいって思うのなら、頑張つて優勝を目指してみよ」
「その意気だよ！現在のところ、専用機を所持しているのは一組と四組だけだから、優勝する確率は結構高いって思うよ」

四組…ね。

いずれは『あの子』とも接触するんだろうか…。
でも、その場合ってどうなるんだ？

白式の詳しい開発経緯を知らないから、何とも言えないな。

「その情報……少し古いよ」

「「え？」」

いきなり、教室の入り口付近から声がした。

あゝ…この声は……。

「つい最近だけど、二組も専用機持ちがクラス代表に就任したの。簡単に優勝が出来ると思つたら大間違いよ」

いかにも『かつこつけてます』って感じのポーズで立っていたのは、原作ヒロインの一人にして、私にとってはもう一人の幼馴染とも言ふべき少女『凰鈴音』だった。

（ふふふ…。再会早々に私の成長をアピール大作戦は成功のようね。佳織も驚いたようにこつちを見てるし）

……なんか、こつちを見ながらニヤニヤしてるんですけど、あの子。
「もしかして……鈴なの？」

「そうよ一夏。改めて自己紹介をしてあげる」

そう言うと、腕を組んでいきなりの仁王立ち。

「私は凰鈴音。今度二組に編入した中国の代表候補生…そして、二組のクラス代表でもあるわ。（決まった！これで佳織もアタシにメロメロねー）」

なんで『勝者の笑み』を浮かべてるの？

「そして……」

ん？鈴が教室に入ってきて、こっちに來たんですけど？

「佳織の事を世界で一番愛している者よ」

え……ええく!?

って言うか、しれっと私の首に腕を回して抱き着かないでくれますか!?

「「「ええく!?」「」」」

ほらあく！案の定、教室が騒がしくなつた〜!

「か…佳織がががががががががが」

ほ…筈が壊れたああああああつ!?

「おのれく…!佳織さんは誰にも渡しませんわく…!」

で、セシリアはメラメラと炎を燃やしてるし。

「あわわわわわく…かおりんが…かおりんがく…」

本音ちゃんは派手に震えてる。

そう言えば一夏は？

「ふふふ……」

何故にそこで笑う？

「私の佳織に対する思いは、そんな言葉には負けない!」

「へえく…言うじゃない。流石は昔からのライバルね」

今度は一夏と鈴の間で火花がく!?

「「あ」」」

瞬間、私達は冷静になった。

何故かって？そりや……

「おい、貴様等」

「「え？」」

二人の後ろに千冬さんが來たからに決まってるじゃん。

勿論、睨みあっていた二人の頭には。伝家の宝刀である出席簿がタツクが炸裂。

見事なたんこぶを作り上げて、そこからギャグ漫画のような湯気が出ていた。

「もうSHRの時間だ。早く自分のクラスに戻れ」

「わ…分かりました……」

顔を青くしながら鈴は教室から出ようとする。

昔からあの子って千冬さんの事が苦手みたいだしね。

「また後で来るから！愛してるわ！佳織！」

去り際の一言が余計だよ！

「早く行け」

「は…はい！」

今度こそ完全に行ったようだ。

下手に教室に入らなければ、痛い目を見ずに済んだのに…。

「全く…佳織を世界で一番愛しているのは、この私だ」

この人、最初から全部聞いてたな!?

「お前達も、早く席に着け」

「は…はい！」

皆、何かを言いたげな顔をしていたけど、千冬さんの迫力には勝てなかったようで、大人しく席に着いた。

また、一段と騒がしくなりそうであく…。

・
・
・
・
・
・

（一体、今朝のあの女は何者なんだ…!?私の佳織にべたべたと抱き着きおつて!）

くそっ…!あの一件の事が頭から離れない…!

これでは授業に集中できないではないか!

しかし…あのツインテール女が抱き着いた時、佳織は全く抵抗する様子を見せなかった。

と言う事は、少なからず佳織の方も、あの女に対しての感情があると言う事か!?

だとしたら、これは由々しき事態だ!

(佳織……)

少し佳織の方を見てみると、真面目に授業を聞きながらノートを取っていた。

(本当に真面目だな……佳織は。どんな時も誠実さを失わない。そんなお前だから私は……)

そうだ、ここで諦めてどうする！

一夏も言っていたではないか！

あんな言葉程度で佳織への想いは揺らがないと！

私だって、佳織に対する気持ちは誰にも負けていない！

よし！早速、今日の放課後から頑張らねば！

「篠ノ之。……この答えは何だ？言ってみろ」

「え……う？」

「……答え？」

「二度も同じ事を言わせるなよ」

そ……そうだった……！今は織斑先生の授業だった……！

私としたことが、なんと言う事を……！

「き……聞いてませんでした……」

教室に強烈な打撃音が響き渡った。

後で『分かりませんでした』と言えば、少しは威力を軽減して貰えたかも……と思っただが、完全に後の祭りだった。

・
・
・
・
・
・
・

ああ……もう！一体彼女はなんなんですか!?

佳織さんに馴れ馴れしく抱き着いた揚句、愛してるだなんて！

私だっただけでまだ言った事が無いと言うのに！

唯でさえ、現状では幼馴染である一夏さんや箒さん、ルームメイトの本音さんと言う強力なライバルがいると言うのに、そこから更に謎の転校生が来て、それが佳織さんと仲がいいだなんて！

こっちは幼馴染でもなければ同室でも無い。

私の今のアドバンテージと言えば……

(同じ専用機持ちであり、佳織さんと剣を交えた事がある……と言う事ぐらい……)

これでは手札としては余りにも微妙ですわ！

なんとかして、逆転の一手を打たなくては……！

相手は私と同じ代表候補生と言う属性を持ち、しかも佳織さんとは旧知の仲。

(……完全にズルですわね)

相手の手札は非常に強力だ。

今までのようにISの訓練や模擬戦だけでは、今いち決定打に欠ける。

ならばどうするか？

いざとなったら、最後の手段に打って出るしかないのかもしれない。

「既成事実さえ作ってしまえば……ふふふ……」

「オルコット」

「佳織さんのあの柔らかな肌を……」

「……………」

いきなり強烈な衝撃が私の頭を走りました。

ううう……痛いですわ……。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

(かおりん……)

かおりんのあんな顔、私は初めて見たかもしれない……。
なんだか安心したような、そんな顔。

とても自然な笑顔だった。

きつと、あの子はかおりんにとって家族同然の存在だったんだらう。

「はあ……」

私も……いつか、かおりんにあんな顔をして貰えるような存在になれるのかな……？

ううん……なりたくないな……。

かおりんの事も考えると、いつも胸が苦しくなる。

息も途切れ途切れになって、顔も熱くなって……。

「あ……」

そつか……これが『好き』って気持ちなんだ……。

自分でも不思議だけど、なんとなく分かった……。

しののんやおりむーは、いつもこんな気持ちなんだ……。

そして、さつきの子も……。

私は……かおりんが好きなんだ……。

「~~~~~!」

ううう！自覚しちゃうと、急に恥ずかしくなっちゃうよお〜！

「はあ……」

ふえ？溜息？

ふと上を向くと、織斑先生が私に向かってポン……と非常に軽く出席簿で叩いた。

(全然痛くない……?)

どうして？二人には凄い威力だったのに……。

「ちゃんと授業に集中しろ。布仏」

「す……すいませんでした……」

それだけを言うと、先生は手に持った教科書に目線を落としました。

「……………精々頑張れよ、小娘」

「え？」

織斑先生…？

なんか去り際に何か言ったような気が……。

それからは、なんとか授業に集中することが出来た。

不思議と気分は晴れ晴れとしていたけど、なんでだろう…？

第12話 女達が寄ればかましい

「えっと……大丈夫？」

「うう〜……」

昼休み。

私を初めとしたいいつもの面々は、揃って食堂に向かっていた。

実はこの二人、午前の授業中に二人揃って6回も出席簿の餌食になっっている。

それと言うのも、授業中に箒とセシリアはなんだかずつと『心ここに非ず』状態だったみたいで、妙にポケ〜つとしていたようなのだ。

最初は本音ちゃんも似たような状態だったらしいが、途中からいつもの調子に戻った。

「ははは〜……。二人とも、姉さんの授業で呆けるなんてなかなかに度胸があるんだね」

「なんで一夏さんは大丈夫だったんですの!？」

「そうだそうだ!お前はアイツについてなんにも思わないのか!？」

アイツ?ああ……鈴の事ね。

「別に?鈴のああいった態度は今に始まった訳じゃないし」

「昔からなのか……」

そうだったね〜。

なんつーか、行動派なんだよね、あの子って。

思い立ったが吉日っていうか、なんて言うか。

「それに、朝も言ったでしょ?私はある言葉一つで揺らぐほど、軟な想いは抱いてないって」

「それは……」

「私達も同じつもりですけど……」

一夏は昔から一途なところがあつたからね〜。

良くも悪くも真っ直ぐなんだよね。

そこら辺は性別が変わっても一緒みたい。

何に何の想いを抱いてるかは分からないけど。

「で、本音ちゃんはさつきからなんでニコニコしているの?」

「ん〜？ないしょ〜♡」

……なにこの子可愛い。

持ち帰ってもいいかしら？って、同じ部屋だった。

そんな事を話しているうちに、気が付けば食堂前に到着。

食堂はお昼時と言う事もあつて、非常に賑わっている。

けど、結構早めに来たお蔭か、まだまだ席に余裕はあつた。

いつものように券売機にて食券を購入。

今日の私のお昼ご飯はかつ丼定食。

午後からに備えてガッツリといきたい。

因みに、箸はきつねうどん、セシリアは洋食ランチ、一夏は日替わり定食、そして本音ちゃんはTKGセット。

TKGとは、T（たまご）K（かけ）G（ご飯）の略。

御飯に味噌汁にお漬物。そこに獲れたて新鮮な生卵とTKG専用の醤油が付いている。

前に私も試しに一回食べてみたが、これが滅茶苦茶美味しかった。

本気でTKGにハマりそうになつたっけ。

「待つてたわよ佳織！ついでに一夏も！」

そんな叫び声と共に私達の前に現れたのは、既に昼食のラーメンを注文し終わった鈴だった。

手に持っているトレーの上には湯気が立っている出来立てのラーメンが鎮座している。

「私がついでなんだ……」

「当たり前じゃない。アンタだって、私の立場なら似たような事を言つたんじゃない？」

「それは否定しないけど……」

しないのかよ。

「待つててくれたのは純粹に嬉しいけど、別に先に食べててもいいんだよ？ラーメン、のびちやうでしょ？」

「だ…大丈夫よ！多少のびたぐらいでラーメンの味は変わらないわ！」

「いや、結構変わると思うが…」

ナイスツツコミ、箒。

「そもそも、別に佳織さんは貴女と待ち合わせなんてしてませんわよ？」

「べ…別にいいじゃない！そんな細かい事を一々気にしてたら大成しないわよ？」

「ええ？」

なんか微妙に会話が噛み合っていないような…。

「と…とにかく、私達はこの食券を出して来るから」

「わかったわ。じゃあ、アタシは先に行って空いている席を確保しておくから」

「ありがとう」

私は鈴のこういうところが好きだったりする。

なんていうか…阿吽の呼吸？って言うのかな？なんとなく、お互いの言いたいことが分かるって言うか…。

「な…なんですの…今の…」

「まるで、熟年の夫婦みたいな会話だったぞ…」

「私はもう慣れたけど」

「ふええ…。リンリンは凄いなだねえ」

リンリン？ああ…鈴のこと？

もう早速、鈴の渾名を考えたのか、本音ちゃんは。

揃って食券をカウンターに出して、注文の品を受け取る。

「おや、噂の『赤い彗星』のお嬢ちゃんかい？」

「こんな所にまで浸透してるんだ…」

一体何処まで広まってるんだ…？赤い彗星の名前は…。

「こつちこつち〜！」

少し離れた場所で鈴が手を振っている。

どうやら、あそこが確保した席のようだ。

確かに、今いる皆が座っても余裕がある広さだ。

そこに向かって私達も歩いて行くことに。

「(…)(…)いいわよ」

「んじや遠慮無く」

「ああ〜!?!」

鈴が譲ってくれた席は、丁度彼女の隣だった。

で、箒とセシリアはなんで叫んでるの？

「余裕があるのかないのか」

「だね〜」

本音ちゃんにまで言われてるぞ、二人とも。

「にしても、本当に久し振りだね。あれから一年ぐらいになるんだっけ？」

「そ…そうね。一年と言っても、私にとっては凄く長く感じたけど」

「そう?」

大袈裟だなく。

私にとつてはあつという間な一年だったよ。

「でも、佳織の元気そうな姿を見て安心したわ」

「それはこっちもだよ。何も変わってないようで、ちよつと嬉しかった」

「あ…ははは…そう…なんだ…。(嬉しかったって言われちゃった…♡)」

言えません!鈴の事は本当に忘れなかったけど、君がこの時期に転校してくることをすっかり忘れていただなんて言えません!

「にしても、佳織には驚かされたわよ。なんなの?あの『赤い彗星』つて」

「それに関しては、こっちの方が聞きたいぐらいだよ…」

本当に…一体誰が言い出したんだ?

別に私は家族を殺されてはいないし、復讐なんて物騒な事も考えてない。

ましてや、変な仮面なんてつけたくも無い。つける理由も無いし。

勿論、後に名前を変えてサングラスを付けたりもしないし、総帥になつて隕石落としなんかもするつもりはない。

「あれって誰が言いだしっぺなのよ?」

「さあ?いつの間にか色んな人から言われてたんだよ」

「そうなんだ。ま、異名なんてそんなもんでしょ」

軽く片付けられてしまった。

昔から鈴はサッパリとした性格の女の子だったが、それは今も変わらないようだ。

「あゝ…佳織？もうそろそろソイツとどんな関係か話してほしいんだが…」

「そ…そうですね！佳織さん！もしやこの方とお…お付き合いをしていらっしやるのではないでしょうね!？」

「お付き合い？」

なんの？過去に買い物付き添いなら何回も行った事があるけど。

「残念だけど、まだそこまでには至ってないわ。告白はしたけど」

「い…告白!？」

もうそろそろマジで食べ始めようかな。

一夏と本音ちゃんはもう食べてるし。

「へ…返事は？」

「まだよ。っていうか、私の方から言わないようお願いしたの」

「なんでだ!？」

「だって、こっちだけが一方的に好きになっても仕方が無いじゃない。アタシは両想いになりたいの。だから、佳織が私の事を好きになってくれたら、改めて告白するつもりでいるの」

んんん♡

ここのかつ井は最高だなく♡

出来ればおかわりがしたいぐらいだよ♡

って、この三人は何を話してるの？

食べるのに夢中でよく聞き取れなかったけど。

「お…大人ですわ…!？」

「く…悔しいが、こいつの方が私達よりも一枚も二枚も上手だ…!？」

何を話してるか知らないけど、早く食べないと時間が無くなっちゃうぞ。

「というか！なんで一夏さんと本音さんは平気そうに食事してるんですか!？」

「いや、私も鈴と同じ気持ちだし」

「私は、今はまだかおりんと一緒にいられるだけで幸せかな」
まさに三者三様の反応だな。

見てて面白い。

「あのさ、なんか話しが逸れてない？私と鈴がどんな関係か話そうとしてなかったっけ？」

「「あ……」」

完全に忘れてたな……

「鈴は私の幼馴染だよ」

「お……幼馴染……だと……!?!」

「そうそう。丁度、箒が転校した後に入れ替わるようにして転校生として来たんだよ」

「懐かしいなく。あの頃は私と佳織と鈴とで一緒に遊びまわってたけ」

「そうね」

いやはや、高校生ともなれば、半分子供で半分は大人だ。

昔を懐かしむような余裕さえ生まれるか。

「つて事は、このポニーテールの子が？」

「そう。前に私と一夏が話した篠ノ之箒。一夏と千冬さんが通ってた剣道場の師範の娘」

「ふうくん……アンタが……」

鈴はまるで舐め回すかのように箒を見ている。

……気のせいかな。鈴の視線が箒の胸に集中してるような……

「初めまして。これからどうぞよろしく……とだけ言っておくわ」

「こちらこそ。これから先、お前とは色々顔を合わせる事が多くなりそうだ」

「奇遇ね。私もそんな気がしてるわ」

「「ふふふ……」」

な……なんかこの二人が怖い!?

鈴の背後に龍が、箒の背後に虎が見るんですけど!?

「んん！私の事をお忘れではなくて？凰鈴音さん？」

「え？アンタは……」

「おや？鈴はセシリアの事を知ってるのか？」

「思い出した！確か、佳織との試合でボコボコにされてた奴でしょ！」

「ボコボコになんてされてませんわ！……苦戦はしましたけど……」

「それを世間一般ではボコボコって言うのよ」

「クキィ〜!!」

マンガみたいな反応したよ、この子。

「って、なんで私が佳織さんと試合をしたと知ってるんですの？」

「あれ？知らないの？二人の試合はネット上に動画として流れてるわよ。アタシもそれを見て知ったんだし」

「ええっ!?!」

そ…それって大丈夫なの？

「なんかヤバくない？機密の保持とか、色々と問題があるんじゃない？」

「その辺はI S学園やI S委員会がちゃんと規制をすと思ひますけど……」

「そ…そうだよね？大丈夫だよね？」

流石に、そこまで学園も馬鹿じゃないか。ははは……

「と…とにかく！一応の自己紹介はさせてもらいますわ。私はイギリスの代表候補生のセシリア・オルコットと申します。以後お見知りおきを」

「ごつちこそよろしく。ま、同じ代表候補生でも、アタシの方が強いと思うけど」

「へえ〜……言いますわね……」

「事実でしょ？」

今度はセシリアと鈴の睨み合いなの？

セシリアの後ろにはペガサスが見えてるし。

「いつか雌雄を決してあげますわ……!」

「望むところよ」

勝手に試合の約束までしてるし。

当人同士がいいのなら、私は別に口出しはしないつもりだけど。

「それで、そこで幸せそうな顔で卵かけご飯を食べてる子は誰なの？」
「もぐもぐ……ゴクン。私は「本音ちゃん、口の周りに卵ついてる」え

「?ど(ど)ど(ど)ど?」

「(っ)飯粒もついでるし…。」

「ほら、こっち向いて」

「は〜い♡」

テーブルに備え付けの紙で拭いてつと。

「布仏本音だよ。これからよろしくね〜、リンリン〜」

「アタシはパンダか!？」

おう….:….:鋭いツツコミ頂きました。

「ねえ….:一夏。この子つて….:…」

「うん。今のところ、一番のダークホース」

「やっぱり….:…」

二人して何をこそこそと話してるの？

「よ….:よろしくね?本音つて呼ばせて貰ってもいいかしら?」

「いいよ〜」

「なんか調子が狂うわね….:」

気持ち分かる。

けど、慣れちゃえばこれも可愛いよ。

「そう言えば聞いたわよ。佳織つてクラス代表なんですつて?」

「だ….:誰に聞いたの?」

「事務のお姉さんに」

この学園….:情報の伝達速度が速すぎじゃなからうか?

「よかったらアタシがI.Sの訓練を見てあげようか?」

「!!」

いきなりだな….:。

箒とセシリアが面白い顔でフリーズしてる。

「う〜ん….:実に有難い申し出だけど….:…」

「….:?どうしたのよ?」

「いやね、私達つてお互いにクラス代表な訳じゃん」

「そうね」

「と言う事は、今度のクラス対抗戦でぶつかる可能性が非常に高い」

「うん」

「そんな二人と一緒に訓練してたら、周りの皆はどう思う?」
「あ……」

どうやら気が付いてくれたようだ。

鈴は物分りがいいから、とても話しやすく助かる。

「はあ……しゃーないわね。じゃあ、クラス対抗戦が終わるまでは自重するわ」

「それがいいよ。お互いの為にもね」

「でも、訓練じゃなかったら問題無いわよね?」

「そりゃあ……まあ……」

クラス代表って言う称号が無ければ、私達は同級生になるんだし。

「じゃあ、それまでは『普通』に接する事にするわ」

「うん……?」

なんで『普通』を強調した?

「はっ!?!」

二人が戻った。

「よ……よく言った佳織!」

「それでこそ、一組のクラス代表ですわ!」

「何を慌ててるのやら」

「だね」

……本当に、見てて飽きないな。このメンバーは。

「いつもこんな感じなの?この子達って」

「えっと……その……うん」

としか言えない。

「そうだ。弾は元気にしてるの?」

「そうじゃない?少なくとも、最後に会った時は凄く元気だったよ」

「その言い方だと、まるで弾が死んじゃったみたいだよ、佳織」

彼の場合は殺しても死なないでしょ。

元気だけが取り柄みたいなもんだし。

「今も『彼女が欲しい〜』って言ってるんじゃない?」

「へえ〜……。この様子……弾の気持ちを全く知らないっぽい?アイツも哀れね」

鈴はなんで哀愁に溢れた目でこつちを見るの？

「今日も訓練をするの？」

「そのつもり」

「ふくん……そっか……」

この表情……何かを考えてる時の顔だ。

「その通り。佳織は放課後も忙しいんだ。残念だったな」

「特に私は佳織さんと同じ専用機持ちですから、佳織さんとはいつも訓練をしていて忙しいんですよ」

「密かに私を勘定から外さないでくれるかな」

一夏も立派な専用機持ちですよ？

「あっそ」

そっけなく答えると、鈴はいつの間にか食べ終えかけていたラーメンのスープを一気に飲み干して、トレーを持って立ち上がった。

「もう食べたから行くわ。これからよろしくね、佳織。後、一夏と本音も」

「私達は!?!」

完全に存在無視だったな…。

二人のツツコみに反応せずに、鈴は食器を片づけて食堂を後にした。

「佳織（さん）!!」

「は……はいっ!?!」

「彼女にだけは絶対に勝ってくださいね!」

「今日もガンガン訓練するぞ! いいな!?!」

「りよ……了解……」

こ……この二人には逆らえない……!?!

今の筈とセシリアは、一度『やる』と言ったら絶対にやる『凄味』がある!!

「一夏あく……本音ちゃん……」

「大丈夫。私がちやんと二人のブレーキになるから」

「がんばれ、かおりん」

ううう……一夏の言葉と本音ちゃんの応援が嬉しいよお。

でも、クラス対抗戦と言えば……『アレ』が来るのかな……？
私的には、鈴との試合よりもそっちの方が心配だな……。

第13話 セクハラはやめましょう

放課後になって、本音ちゃんを除いた私達は揃って第3アリーナに行つて、いつものように訓練をしようとするが、今日はいつもとは違った。

「そ…そんな馬鹿な…！」

そこまで驚くか？

因みに、本音ちゃんはなんでも生徒会室に用事があつて、今日は不在になっている。

あの子つて生徒会役員だったっけ。

普段の様子からは想像も出来ないけど。

「へえ〜。よく借りられたね」

「ダメ元で行つてみたら、私に来る少し前に急遽キャンセルが出たらしくてな、奇跡的に借りる事が出来た」

この会話からもう分かつた方もいると思うが、今日は箒が学園に配備してある訓練機である日本製の量産型第二世代機である『打鉄』を装着して、この場にいるのだ。

確か、開発したのは倉持技研…だったよね？

私の記憶が正しければ、一夏の白式や、後に遭う可能性がある『4組の彼女』の専用機も、そこで製作された筈。

「そんな〜都合主義があるなんて…！漫画やアニメじゃないんですから…！」

「ふん。なんとも言う方がいい」

自慢げに胸を張る箒。

けどね、その瞬間に密かに、その高校一年生に不釣り合いな大きな胸が揺れたのを確認しましたよ。

え？お前も人の事は言えないって？

んな事は分かつてる。

最近になって、またブラがキツくなってきたし。

「これで訓練にもより多くのバリエーションが生まれるだろう。早速始めよう」

「だね。あまり時間も無いし」

アリーナの使用時間は予め決められている。

私だけがアリーナを独占するわけにはいかないからね。

次に待っている人達の為にも、早く、そして効率よく訓練しないと。

アリーナが使えない時には、トレーニングルームを利用して体を少しでも鍛えればいいだけだし。

「まずは佳織と手合わせをしてみたい。いいか？」

「私は別に構わんよ」

はい。私は既にISを展開済みです。

初っ端からシヤア様モードで登場です。

「ま……まあ、いいでしょう。箒さんのお手並み拝見と参りますわ」

「佳織は強いよく。油断しちゃ駄目だよ」

「分かってる。今の私では佳織に勝つなど夢のまた夢と言う事はな。だが、だからこそ、今の私と佳織との間にある『差』をこの身で確かめたいんだ」

流石は箒…。

この身は向上心で出来ている…ってか？

「ふっ……いいだろう。ならば、こちらもその期待に応えられるよう、全力を尽くすとしてしよう」

「是非ともそうしてくれ」

微笑を浮かべながら、箒は打鉄の拡張領域にデフォルトで搭載されている近接戦闘用ブレード『葵』を展開し、両手で保持して構えた。

正眼の構え……だったよね？

それに応じるように、私の方はヒート・ホークを出して構える。

……この瞬間だけは、私は流れに身を任せようかな。

「では……いざ参る!!」

「見せて貰おうか……剣道全国大会優勝者の実力とやらを!!」

……なんか、この言葉が決め台詞みたいになってない？

……

・
・
・
・
・

「もうそろそろ時間だな。今日はこの辺りにしておこう」

「はあ……はあ……」

夢中になつていると、時間が過ぎるのはあつという間で、いつの間にかアリーナの使用時間が終わる10分前になっていた。

で、箒とセシリアは息も絶え絶えと言った感じ。

箒との模擬戦は、特典のお蔭で私が圧勝。

もし特典が無かつたら、よくて互角だっただろう。

その後、セシリアとも模擬戦をして、またまた私の勝利。

今度は一基もビットを破壊せずに、レーザーの包囲網を潜り抜けてながらの砲撃戦で勝つてみせた。

しれつと高機動戦闘が上手になつている自分に驚きを隠せなかった。

「ふむ……出来れば一夏とも手合わせを試みたかったが……」

「時間が無いんじや、仕方が無いね。それはまた今度にしようよ」

「それしかないな。二人とも、立てるか？」

「大丈夫……ですわ……」

「わ……私もだ……」

明らかに強がつてますね、はい。

「無理をするな。ほら、手を貸そう」

私は二人に手を貸してから起き上がらせた。

「す……すまない……」

「お手数をおかけしますわ……」

「気にするな。我々の仲ではないか」

「佳織（さん）……♡」

あ……あれ？顔が急に赤くなった。

思った以上に疲れていたのかな？

「ほら！早くピットに行こう！」

「一夏は何を怒っている？」

「別に怒ってない！」

「そうか…」

女心は複雑ですなあ。

って、今は私も女でした。

ISを展開解除して、地面に降り立つ。

「ふう〜……」

疲れはしたけど、実に爽やかな気分だ。

こんな気持ちは久しぶりだ。

でも、汗でベタついたから、後でシャワーを浴びないとな。

(え…エロい！)

なにやら邪な視線を感じた気がする。

・
・
・
・
・
・
・

ピットに戻り、まずはタオルで汗を拭く。

こうしないと風邪を引くからね。

私の隣では箒とセシリアが同じようにタオルで汗を拭いている、

一夏は私の後ろにいる。

「まだまだ佳織さんには敵いませんわね…」

「全くだ。まさか、佳織の実力があれ程だとはな。幼馴染として誇ら

しくはあるが、同時に未恐ろしくもあるな」

「たはは……」

下手に何か言えば、また変な事を言われそうだから、ここは適当に

笑っておこう。

「佳織って確実に強くなってるよね。今回はあのレーザーの包囲網を完全に潜り抜けてみせたし」

「あれは単純に目が慣れたからだよ」

「僅か数回で目が慣れるって…」

「その発言自体が凄いですわ…」

え？マジで？

「一夏。今日はどっちが先にシャワーを使う？」

「別にどっちでもいいよ。汗を掻いたのは一緒なんだし」

「では、後でじゃんけんでもして決めるか」

「そうだね」

結構適当だなく。

二人がそれでいいのなら、私は何も言わないけど。

「本音さんはもう戻っているのでしょうか？」

「どうだろう？用事が長引いているのなら、まだだろうけど…」

生徒会の用事と言うのがよく分からない。

普通に考えれば、書類仕事とかだろうけど…

(あの本音ちゃんが書類に向き合って仕事をしている姿を想像出来ない…)

書類を見た瞬間に眠りそう。

「佳織〜！いる？」

私達が話していると、いきなりピットの扉が開いて、そこから意外なお客さんが登場。

「鈴？なんでここに？」

「差し入れをしに来たの。別に訓練を一緒にしたわけじゃないから、いいわよね？」

「へ…屁理屈ですわ…」

「屁理屈も理屈の内よ」

反論乙。

「ほらこれ。ドリンクはスポーツドリンクでいいでしょ？」
「ありがとう」

鈴は、手に握られている籠からスポーツドリンクが入っている入れ物を取り出して渡してくれた。

汗を拭いた後は水分補給。これ大事ね。体を動かした後はスポドリがお薦め。

適度に糖分と水分が補給出来るから。

因みにこれ、千冬さんから教えて貰った事だったりする。

「しかもこれ、ちゃんと適度な温度になっている」

「ふふくん！佳織の体の事を考えれば、これぐらいの気遣いは当然よ！」

「頭が上がらないなあ〜」

こう言う細かな気遣いが一番嬉しかったりするんだよねえ〜。

「ちゃんと人数分用意してきてるから。アンタ達も、ほら」

「す…すまん…」

「ありがとうございますわ…」

「さんきゅ」

なんだかんだ言つて、心の中じゃもう、箒とセシリアの事をちゃんと友達認定してるんだよね、鈴は。

「あれ？本音はどうしたの？」

「本音ちゃんなら生徒会室に行っている」

「生徒会室？もしかして本音って生徒会の役員だったりするわけ？」

「そうみたい。会計だつて言ってたよ」

「「会計…」」

あ、今皆が何を考えているのか分かった。

「「「いやいやいや」」」

全員同時に首を横に振って否定したし。

「あんなのんびりとした子じゃ、いつまで経っても仕事が終わらないじゃない」

「「同感」」

「ですわ」

そこまで言うか…とりたいけど、私も同感です。

ゴメンね、本音ちゃん。

「ねえ、お昼に聞きそびれたんだけど、佳織のルームメイトって誰なの？ここにいてる誰かだったりする？」

「私のルームメイトは本音ちゃんだよ。で、一夏と箒が一緒。セシリアは知らない」

「あの子が……」

「おや、急に顎に手を当てたってどうしたのかしらん？」

（一夏か箒、もしくはセシリアが佳織のルームメイトなら、無理矢理にでも部屋を変わって貰おうと思ったけど、あの『のほほん』とした本音と一緒にあったなんてね……。あの子から無理矢理にでも部屋を代って貰ったりしたら、罪悪感で私の胃が大ダメージを受けそうだから……）

「一体何を考えているのやら。」

「それならいいわ。変な事を聞いて悪かったわね」

「う……うん……」

「なんだったんだろう？」

「本人がいいって言うのなら、別に追及はしないけど。」

「アタシはそろそろ行くわね。その容器は別に返さなくてもいいから。それじゃ！」

「あ……」

「行っちゃった……」

「いきなりやって来て、いきなり去って行ったな……」

「差し入れは素直に嬉しかったですが、なんだったのでしょうか……？」

「相変わらず、鈴は動き回るのが好きだよね」

「……深く考えても仕方ないか。」

「とっとと着替えて部屋に帰って、それからゆっくりとシャワーでも浴びようっと。」

……
……
……

「てなわけで、遊びに来たわよ！佳織！」

「わお」

夕食後。

私と本音ちゃんが部屋でのんびりと過ごしていると、いきなり鈴がやって来た。

「入ってもいい？」

「う…うん。いいよ」

「ありがとね。じゃ、お邪魔します」

あの時、考えていたのはこれだったのか？

遠慮無くベットに座ってるし…。

「思ったよりも小ぎっぱりとしてるのね。もうちょっと荷物が多いと思ってたわ」

「私も本当はもうちよつと持って来たかったんだけど、最初は持って来れる荷物が限られてたから」

「私も」。だから、今度の休みの日にでも家に一回帰ってから、色々と持ってこようって思ってるんだあゝ」

「成る程ね」

今部屋にある私の私物は、自分の私服や教科書を初めとした勉強道具の他にはパソコンしかない。

連休になったら、実家から色々持って来ないとな。

主にゲームとか漫画とかラノベとか。

「鈴はどうなの？何か持って来たの？」

「別に。最低限の荷物しか持ってきてないわ」

「それで大丈夫なの？」

「平気よ。必要な物があつたら、こっちで買えば済む話だから」

昔から鈴はこうだ。

無駄な荷物を持つ事を極端に嫌う。

常に軽装備を好む傾向にある。

「それよりも気になる事があるんだけど……いい?」

「え?ああ……いいけど」

気になる事ってなんじやろほい。

「佳織……」

「な……なんですか?」

真正面から見つめられて、妙な緊張感が……。

「アンタ……アタシが中国に戻ってから、胸が大きくなった?」

「は……はいっ!?」

いきなり何を言い出すんだ!?

「ほほぅ?それは私も聞きたいなあ?」

「本音ちゃんまで……」

いくらTSしても、恥ずかしいものは恥ずかしいんだよお!!

「ほらほら、ちゃっちゃと白状しちやいなさい」

「かおりんのお母さんが泣いてるよ」

別に泣いてないよ!

私は人質をとって立て籠もった犯罪者か!

「……分かったよ。でも、あまり大声で言いたくないから、二人とも

耳を貸して」

「はいはい。別にここにはアタシ達しかいないんだから、気にしなく

てもいいのに」

「部屋の外で聞かれてるかもしれないじゃん」

「初心だね」

……本音ちゃんがそれを言うの?

「それじゃあ……言うよ?」

「うん」

「えつと……だよ」

羞恥心を抱えながら、私は二人に向かってそつと呟いた。

「ええっ!」

「へえ」

はあ……これが本当の女子トークなのか…。

女の子って世の男子が思っている以上にアグレッシブなんだなく。
「まさか……あれから3センチもアップしてるなんて……。アタシな
んて全然……」

「成長期だねえ〜」

「それはここにいる全員が該当するでしょ」

私達全員が同じ歳なんだから。

「この胸か!?この胸なのか〜!?!」

「きやあああああああつ!?!」

い……いきなり鈴が胸を揉んできたあああああああ!?!

「うぐぐ……確かに大きくなってる……!気のせいか、肌触りも良くなってる気が……」

「服越しに分かるの!?!」

なにそれ怖っ!?!

「私もおりんのおっぱい触る〜♡」

「本音ちゃんまでっ!?!」

っていうか、君は前に触ったでしようが!

覚えてないかもしれないけど!

「もみもみもみ〜♡」

「ビニヤアアアアアアア♡♡」

もうやめてええええええええええ!?!

私が二人から解放されたのは、それから一時間後だった。

うう……本当に大変だった……。

鈴ってば、一体何処であんなテクを……。

次の日、校舎内に設置してある掲示板に、クラス対抗戦のトーナメント表が設置された。

一年生の部の一回戦第一試合は一組と二組。

つまり……私と鈴の試合だった。

ここだけは原作と変わらなかったか……。

じゃあ、『アレ』も乱入してくるんだろうか……?

第14話 水色の姉妹

五月。

鈴が転校してきて数週間が経過して、来週にはクラス対抗戦が始まる。

今日も今日とて私は皆と一緒に訓練をしよう……と思っていたが

……

「すまない。今日は剣道部に顔を出そうと思ってるんだ」

「私も一緒に行つて、ちよつと見学をしようかなつて。本当にゴメンね！」

箒は少し前に入部した剣道部に行つて、一夏はそれに付き添つて見学に。

「先程本国から連絡があつて、今日はレポートを作成しなくてはいけないんです。この時期にこんな事になつてしまい、本当にすいません……」

セシリアは代表候補生としての仕事。

国家に所属している人間は大変だ。

このように、今日に限つて皆はそれぞれに用事が出来てしまった。それならば一人で訓練しようかなつて思ったけど、アリーナは全部が使用されていて使用不可能。

じゃあ、トレーニングルームにでも行つて体を動かそうと思つたら、そこには見知らぬ先輩が沢山。

そんな中に堂々と入つていける程、私はコミュ力高くない。

だからと言って何もしないわけにはいかないし、私自身が時間を無駄にしたくないと思つた。

今日はどうしようかと考えていると、なんと本音ちゃんから提案が出て来た。

「それじゃあ、今日はISの整備でもしたらいいんじゃないかな？」

「それだ！」

そう言えば、私はラファールⅡを受領してから、まだ碌に整備もしていない。

いい機会だから、ちゃんと整備してクラス対抗戦に備えるのも大事だと判断した私であった。

それに……

(これから先もI.Sの整備をする事はあるだろうから、ちゃんとやり方を学んでおくのも大切だよね)

確か、整備マニュアルが入った端末を前に貰ったつけ。

軽く見たけど、複雑すぎてすぐに端末を置いちゃった。

そんな訳で、私は今、本音ちゃんと一緒に整備室に向かっている。

「でも、私に出来るかな？」

「だいじょうぶ。私もついてるから」

「え？」

ど……どゆこと？

「私ね、実は整備班なんだよ」

「せ……整備班？」

な……なんですと？

「整備班って……整備をする人の事……だよね？」

「それ以外にあるの？」

「いや……ないけど」

あ……あれ？原作でも本音ちゃんって整備士だったっけ？

よく思い出せない……。

「む……かおりんってば疑ってるな？」

「そ……そんな事は無いですよ？」

「目が泳いでるよ」

「ごめんなさい。」

「じゃあ、かおりんの目で直接確かめればいいよ」

「う……うん」

本音ちゃんに背中を押されながら整備室に足を進める。

せ……背中に本音ちゃんの密かに大きな胸がががががが！

余談だが、鈴も今日は忙しいようで、昼食時以外には姿を見かけなかった。

・
・
・
・
・
・

自動式の重厚なドアが開き、整備室に足を踏み入れる。

「おお〜…」

ここが整備室か〜…。

色んなロボットアニメに出てくるような、絵に描いたような場所だ。

なんか… 『これぞ整備室！』 って感じ。

機体を固定するハンガーが幾つもあった、そこには訓練機であるラファールや打鉄が幾つも並んでいて、それ以外にも空いているハンガーがある。

あそこはきつと、私を初めとした専用機を固定して整備するために設けられた場所なんだろう。

壁側にある棚には色んな整備の為の道具が置いてあって、名前は分からないけど、うかつに使えないような雰囲気を漂わせている。

「本音ちゃんはここにはいつも来るの？」

「いつもって訳じゃないかな。でも、入学してからはアリーナ以上に来る事が多かったかな？」

「わお……」

本音ちゃんがここの常連……。

今日から彼女を見る目が変わるかも…。

「それじゃ、早速かおりんのISを整備しよつか？」

「わ…わかったよ」

『はじめてのおつかい』ならぬ『はじめてのせいび』だな。

すっごく緊張する……。

取り敢えず、適当に空いているハンガーに行って、そこにある機器

にラファールⅡの待機形態であるペンダントをセットする。

「あれ〜?」

「どうしたの?」

「隣……」

隣とな?」

よく見てなかったけど、誰か先に来てたのかな?

「誰かいるの?」

「うん」

誰さんしょ?

ちよこつとだけ見てみよう。

「そ〜つと」

隣にいたのは、どこかで見た事のあるような水色の髪の子だった。

「かんちゃん?」

あれ?本音ちゃんが『かんちゃん』と呼ぶ人間と言えば……

「ほ……本音?」

あ、こつち向いた。

「あつ!」

え……ええ?私を見た途端に驚いた?

「あ……あ……あ……」

「あ?」

凄く目を見開いてこつちを見る。

例えて言うなら、街中で大好きな芸能人を見たファンの女の子のよ
うな反応。

「赤い彗星の仲森さん!」

「またそれか……」

もういいや……好きなだけ言ってくれ。

「ど……どうしてここに!」

「かおりんはISの整備に来たんだよ〜」

「せ……整備に?」

顔を真っ赤にして体を震わせて、もう彼女の目線が別の意味で痛い

…。

「このままでいるのはちよつと失礼だと思つて、ちゃんと彼女の前に出る。」

「えつと……本音ちゃん、この子は……」

一応知つてるけど、ちゃんと聞いておいた方がいいだろう。

これからの為にも。

「えつとね、この子は」さ……更識簪つて言います！……だよ……被せるように言つてきたし……。

こんな子にこの子つて自己主張が激しい女の子だったか？

まさか、この時期に彼女と会うなんてね……。

原作には無い行動をとっている時点で、ある程度のイレギュラーは覚悟していたけど、まさか、後になつて登場する筈の更識簪と会うとは思わなかつた。

でも、こんな所にいるって事は、まさか専用機は……

「え……えつと……更識さん」簪つて呼んでください！「あ……うん。簪さん」呼び捨てでいいです!!」……簪はここで何をしていたの？」

原作通りなら、名字で呼んで欲しくないのは彼女の姉である更識楯無の妹として見てほしくないからって予想出来るけど、この目は……「機体の整備をしました……。(キラキラキラキラ……)」

この、まるで特撮番組のヒーローを見るような純粹無垢な子供のような目からは、全くそんな感じがしない。

「ねえ……本音ちゃん。この子は一体どうしたの？」

「かんちゃんはね、あのせしりんと試合があつてからずっと、かおりのファンなんだよ」

「ちよつと本音！それは言わないでつて言つてるでしょ！」

「え……？」

ファ……ファン？

誰の？私の？

この現実から目を逸らそうと思ひ、ふとハンガーの方に目を向けると、そこには薄い水色のISが鎮座していた。

「このISは……」

「わ…私の専用機の『打鉄式式』…です……」

「かんちゃんはね、日本の代表候補生なんだよ」

うん、それは知ってます。

「か…完成してるん……だよね？」

「…？はい、そうですけど……」

やっぱりそうかあ〜！

なんとなくだけど、そんな気がしてたんだよな〜！

「えっと……他のISに開発スタッフが取られて機体の完成が凍結されかけたって事は？」

「ないですけど……」

あれえ〜？

もしかして、白式と打鉄式式はほぼ同時期に開発されて、そして完成したって事？

そんなにうまく行くもんなの？

「この打鉄式式はね、倉持技研が開発した打鉄の正当後継機で発展機でもあるんだよ」

「正当後継機って事は……」

「うん。かおりんの『ラファール・リヴァイヴⅡ』と同じだね」

私のラファールⅡも、ここに配備してあるラファールの後継機だからね。

「二人は同じだね〜」

「お…同じ!?!」

簪の顔が一気に真っ赤に。

同時に顔を伏せてしまった。

「ど…どうしたの？」

「恥ずかしいんじゃないかな〜？」

私見て恥ずかしいって思われてもな……少し複雑。

「あ…あの…その…えっと……」

モジモジしてどうしたのよ？

「サ…サインください!!」

「ふえっ!?!」

サ：サインだつて!?

今度は私が驚いていると、簪はどこからか色紙を取り出してから、こつちに差し出してきた。律儀にペンまでついている。

「急に言われても……」

「駄目……ですか……?」

そんなウルウルとした目で見ないで〜!

罪悪感でどうにかなつちやうから〜!

「してあげれば〜?」

「で……でも、私サインなんてしたことはないし……」

しかし、ここで下手に断れば、連鎖的にあのシスコンの生徒会長を敵に回す事になる!

それだけは絶対に避けなくては!!

「変になると思うけど……いいい?」

「はいー」

そんなハツキリと言わなくても……。

「じゃ……じゃあ……佳織いきます」

震える手で色紙とペンを受け取りキャップを取る。

(お……思い出せ……家には確か、昔貰った某有名漫画家のサイン色紙があつた筈!それを参考にすればなんとか……!)

「え……ええい!ままよー」

私はそれっぽいやつを適当に書き殴った。

ついでに端つこの方にジオン公国のマークを書いておいた。

「これでいいかな……?」

……泣いたらどうしよう。

「あ……あ……あ……」

……今度はどうした?

「ありがとうございます!!一生の宝物にします!!」

「そこまで大切にしなければいいよ?」

私みたいな素人の小娘のサインなんて、一銭の価値も無いでしょ。

速攻で押し入れに放り込んでほしい。

「よかつたね〜、かんちゃん」

「うん……うん……♡」

泣く程の事か？って、結局は泣くんかい。

見られてないだろうな？

「ねえ……整備は？」

「あ」

忘れてたんかい。

「時間も限られてるし、早くやろうか？」

「そうだね」

「お……お詫びにお手伝いします！仲森さん！」

「助かるよ。それと、私の事は佳織でいいよ」

「そ……そんな恐れ多い！」

私はどこのお偉いさんだ？

特典の元になったキャラは最終的に総帥まで上り詰めるけどさ。

その後、整備マニュアルと睨めっこをしながら、なんとか頑張った。

その最中に本音ちゃんや簪がアドバイスを何回もしてくれて、本当に助かった。

簪はともかくとして、本音ちゃんの秘められた才能の一片を垣間見た気がする。

整備の最中、簪ってばずっとこっちを見てなかったか…？

すつごく熱い視線を感じたんだけど…。

・
・
・
・
・
・
・

四苦八苦しながらの整備はなんとか終わり、私は廊下にてトイレに行った本音ちゃんを待っている。

因みに簪は、まだもうちよつとだけ整備をしておきたいらしく、整

備室に残った。

「ん？」

なんか……どこからか視線を感じたような気が……。

「気のせいかな？」

色々注目されるようになってから、少し視線に敏感になりすぎて
いるのかも。

こんなんじゃ、まともな生活は送れない。

もうちよつと余裕のある心を持たないと。

「あら？気が付かれちゃったかしら？」

「え？」

この声は……。

「はあ〜い♡」

物陰から出て来たのは、簪によく似た二年生で、その手には機械的
な扇子を持っていた。

・
・
・
・
・
・

密かに噂に聞く仲森佳織ちゃんを付けていたら、なんと気が付かれ
てしまった。

これでも尾行にはそれなりに自信があったんだけど、まさかバレる
なんてね……。

ちよつと侮っていたわ……。

「ふうくん……」

「な……なんですか？」

少し近づいて観察してみる。

こうして見てみると、確かに美少女ではあるわね。

「えつと……貴女は……」

「あら失礼。自己紹介がまだだったわね」

適当に咳払いしながら離れて、彼女と向き合う。

「私は更識楯無。このIS学園の生徒会長をしているの」

「知ってます」

「え？」

な……なんで？私と彼女って会うのは初めてよね？

「だって、入学式の時に壇上に上がって挨拶してるのを見ましたし」

「うっ！」

そうだった……！

「あと、入学の時に貰ったパンフレットにも写真が載ってましたよ」

「そうだった……！」

それもあつた……！

「ついでに言うと、貴女ってロシアの国家代表でもありますよね？」

「そこまで知って!？」

「いや……IS学園のウェブサイトに軽いプロフィールが載ってましたよ？」

「……」

「……」

は……は……は……は……恥ずかしいく!!!

完全に忘れてたあゝ!!!

「よ……よく見ていたわね！合格よ！」

「はい？」

「よく入学した事に浮かれて、パンフレットとかを見てない生徒が多

いから、佳織ちゃんをテストしたのよ！おほほほ……」

……誤魔化せた……わよね？

「なんで私の名前を？」

「ああ……それ。貴女って今や、学園中の有名人よ？一年生はいざ知ら

ず、二年生や三年生にも知れ渡ってるのよ？」

「う……うへえ……」

あ、心底嫌そうな顔。

気持ちがよく分かるけど。

私も自由国籍でロシア代表になった時は同じ感じだったし。見てる感じでは至って普通の女の子ね。

本当にこの子が、あの超人的な動きをしたのかしら？

今でも信じられないわ…。

「ところで……」

「はい？」

「貴女……さつき整備室にいたわよね？」

「はい……」

「そこで、私の妹の簪ちゃんと会ってたわね？」

「い……妹……見てたんですか？」

「ばつちりと」

この私が簪ちゃんを見逃すわけないじゃない。

って、今はそれはいいのよ。

「簪ちゃん……泣いてたわね？なんで？」

「それは……」

いかにこの子が人気者でも、私の大事な妹である簪ちゃんを泣かせたとあつては許せない。

さあ、理由を聞かせて貰おうかしら？

「お待ちせ〜かおりん〜。あれ？かいちよ〜？」

「本音ちゃん」

このタイミングで本音ちゃんの登場か…。

さて、どうなるかしら？

「どうしたの？」

「いや、さつスキの整備室の事でちよつとね……」

「あぁ〜！かんちゃん、かおりんのサインを貰って感動で泣いてたね〜」

「サ…サイン？」

え……？どういう事？

あの時、私からはよく見えなかったけど、そんな事をしていたの？声から簪ちゃんが泣いていると判断したんだけど、あれは感動の涙

だったの？

「なんで言っちゃうかな〜…」

「え？言っちゃ駄目だったの？」

「別にそんな訳じゃ………」

「ここは空気を呼んで、適当な言い訳をする場面だったわよ、本音ちゃん。」

「ここだけは佳織ちゃんに同情するわ…。」

「ぶ…ごめんなさいね？なんか誤解してたみたいで…。」

「別に気にしないでください。姉として実の妹を心配するのは当然ですし、私も怒ったりとかしてませんから」

「佳織ちゃん………」

「何この子……いい子過ぎる！」

「どうして佳織ちゃんが皆に慕われているのか、分かった気がするわ。」

「これはクラス代表に推薦されるのも分かる。」

「こつちが仕入れた情報だと、中学時代も学級委員をしながら生徒会役員もしていたらしいし。」

「私には無い、独特のリーダーシップがあるんでしょうね。」

「ん〜……決めた！」

「何が？」

「佳織ちゃん。お詫びに今度、生徒会室に招待するわ！」

「え……う？いいんですか？」

「いいのいいの！私が生徒会長なんだから！」

「職権乱用って言われればそれまでだけどね。」

「でも気にしないわ！」

「だって私、佳織ちゃんに興味が出てきちゃったし！」

「え？かおりん生徒会室に来るの？」

「そうよ！本音ちゃん！」

「やった〜♡」

「ふふ……これで本音ちゃんもこつち側ね！」

「えつと……クラス対抗戦が終わってからでいいですか？」

「勿論。今は貴女も忙しいでしょうし」

ふふ……暇があれば佳織ちゃんとの試合を見に行こうかしら？

赤い彗星の公式戦デビュー、今から楽しみだわ！

「それじゃ、今日はここで失礼するわね」

「あ……はい。お疲れ様でした……」

「それじゃあ、かいちよく。またね」

二人に別れを告げながら、私はその場を後にした。

私としたことが、少しテンションが上がってる？

こんな気分になるなんて、もしかしたら生まれて初めてかも。

第15話 龍VS彗星

やってきました、クラス対抗戦当日。

私こと仲森佳織は現在、IS学園第二アリーナのピットにて待機をしています。

周りにはいつものように、一夏と箒とセシリアと本音ちゃん、そして、担任として来たのか、千冬さんと山田先生も一緒だ。

「さて、準備はいいか？」

「はい。問題ありません」

ISスーツを着て、臨戦態勢はばっちりです。

「鳳は強敵かもしれんが、お前なら必ず勝てる。頑張れよ」

「はい！」

担任にそう言われちゃ、頑張らないわけにはいかないよねえ。皆から少し離れてISを展開。

毎度のように私の意識がクリアになり、シヤア様モードに変身。

そのままカタパルトに向かって歩いて行き、脚部を固定。

「では、行ってくる」

「気を付けてね！」

「かおりん、ガンバ！」

「佳織なら大丈夫だ！気楽にな！」

「いつもと同じようにやればいいだけですわ！平常心をお忘れなく！」

皆からそれぞれに激励の言葉を貰った。

お蔭で増々やる気になり火がついちゃったよ。

私は無言で頷いた。

「発進タイミングは仲森さんに譲渡します！いつでもどうぞ！」
「了解した」

腰を低くして、頭の中でカタパルトデッキからモバイルスーツが発進する様子をイメージする。

「仲森佳織！ラファール・リヴァイヴⅡ！出るぞ!!」

私はいざ、幼馴染が待っている戦場へと飛び立った。

・
・
・
・
・
・

ステージに出ると、そこには既に鈴がISを纏って待機していた。機体のモニターに相手のISの情報が表示される。

(近・中距離両用型の第三代型IS『甲龍』シエンロン…か。やっぱり、独特のネーミングセンスだよなあ…)

見た目もそうだが、名前からインパクト重視にしているのか？

でも、これって初見で正確に読める人…いないでしょ。

「待ってたわよ、佳織」

「それは済まない事をした」

「…成る程ね。実際に見るまでは信じられなかったけど、確かに別人みたいだわ…」

「何がかね？」

「アンタの全てよ」

多分、学園中に流れている噂を聞いたんだろうなあ…。

どんな内容か気になるけど。

「ISに乗ると、まるで別の人間になったかのような口調と実力を発揮するって。セシリアにもそんな感じで勝ったのかしら？」

「さあな？」

うわあ…すっげー挑発してるし。

「本当に佳織？マジで疑うレベルで変化してるんだけど…」

「口調がどうあれ、私が仲森佳織であると言う事実には変わりはないよ」

「…それもそうね。変な事を言っただけ悪かったわね」

「気にしてないさ」

鈴のサッパリとした性格は、こんな時には本当に助かる。

変に追及されたら、こっちが困るからね。

「にしても……」

「どうした?」

急にこっちの事をジロジロと見だして。

「私の『甲龍』の『紅』とは全く違う、綺麗なまでの『赤』…。ISスーツまで真つ赤だなんて、それが佳織が『赤い彗星』って呼ばれている所にかしら?」

「恐ろくな。私自身は何とも思っていないのだが」

「それが普通よ」

鈴と試合前の会話をしながら、ふと観客席に視線を映すと、アリーナの全ての席が生徒を初めとした観客で埋め尽くされていた。

多分、転入したての中国の代表候補生である鈴の実力を見ようと思っているのと同時に、私の噂を聞きつけてやって来た連中も多分に含まれているんだろう。

なんつーか、嫌になるね。

『それでは両選手、既定の位置まで移動をしてください』

アナウンスに従って、私達二人はゆっくりと近づいて向かい合う。

まだ、私達の手には何も装備されていない。

「一応、本国からも佳織の実力を測って来いって言われてるんだけど、それとは関係無しに佳織との戦いが楽しみな自分がいるわ」

「仮にも代表候補生がそんな事を言っているのか?」

「いいのよ。私って無駄に偉そうにふんぞり返っている大人が大嫌いだから」

「……変わらないな、お前は」

「アンタの方はビツクリする位に変わったけどね。少し見ないうちにカッコよくなり過ぎよ」

こんな風に話しているが、互いに緊張は隠しきれない。

私達の空気に当てられたのか、いつの間にかアリーナ全体も静かになっていった。

『それでは………試合開始!!』

ブザーと同時に、鈴はその両手に大きい青龍刀(名前は【双天牙月】と言うみたい)を二本展開、装備して突っ込んできた!

「甘い！」

まずはヒート・ホークを右手に展開し、それで鈴の一撃を防ぐ。だが、私のヒート・ホークはひとつだけ。もう片方の攻撃には対処できない。

「左側ががら空きよー！」

「だらうな」

そんな事は想定済みだ。

左手にはIS用マシンガンを展開。

「しまっ……！」

「この距離ならば外すまい！」

迷わずトリガーを引く。

鈴は咄嗟に離脱するが、完全回避は出来なかったようで、何発かは食らっていた。

「や……やるじゃない……まさか、こっちの初手が読まれていたなんて……」

「戦いとは常に二手、三手先を読んで行うものだ。様々な状況を想定してイメージトレーニングをしてきたからな。この程度は造作も無い」

「成る程ね……！」

早くも汗を掻きながら、鈴は二本の双天牙月を連結させた。

「合体しただと？」

「これは元々こういう武器なのよ。それじゃあ……」

頭上で勢いよく回し、遠心力を付加して威力を上げようとしているのか？

「こっちも様子見は終わろうかしらね!!」

連結した双天牙月を振り回しながら、再び突貫してきた！

「二度も同じ手が通用するとは思わんことだ！」

「分かってるわよー！」

ヒート・ホークを収納し、マシンガンを両手で保持する。

鈴の斬撃を紙一重で回避するが、耳元でブォン！って音が聞こえた。

下手なジェットコースターよりもずっと怖え〜!!

回避と同時に鈴に向かって反撃。

「甘いわよー!」

「ちい!」

だが、鈴はまるでバトンのように眼前に振り回して、こっちの銃撃を全て弾いた。

「それだけじゃないわよー!」

「来るか!」

向こうの肩アーマーがスライドし、中にある球体が光る。

間違いない……『アレ』が放たれる!!

「やらせるか!!」

完全にズルだけど、原作知識から『アレ』の発射タイミングは予め分かっている。

だから、後はタイミングよく体を捻れば……!!

「う…嘘でしょ!?!なんで!?!」

回避に成功した私の後ろの地面が大きく爆発し、まるで何かに当たったかのような小さなクレーターが出来上がっていた。

「情報収集は大事だからな。そして!」

「やば…!」

瞬時にマシンガンを収納し、バズーカを取り出す。

そして、すぐにロックオン。

「くらえ!!」

だが、鈴も黙って棒立ちはしない。

攻撃直後の硬直が僅かにあるとはいえ、決して動けないわけじゃない。い。

鈴は咄嗟に手に持った双天牙月を盾代わりにしてガード。

だが、バズーカの威力に踏ん張りきれなかったのか、そのまま吹っ飛んだ。

「ぎやあああああああつ!?!」

こ…こ…これってダメージ入ったのかな…?」

.....

「な…何が起こったの…?」

ピット内で試合の光景をモニターで見ていた私達は、驚くを隠せなかった。

だって、いきなり佳織の背後にある地面が吹き飛んだんだよ!?

「あれが噂に聞く『衝撃砲』ですわね…」

「『衝撃砲?』」

セシリアが答えてくれたけど、聞いた事ない武器だ。

「ええ。あれは空間自体に圧力をかけ砲身を生成し、その余剰で生じる衝撃そのものを砲弾にして撃ち出す、謂わば『見えない弾丸』ですわ」

「み…見えないだ?!」

「で…でも、かおりんは回避したよね…?」

「それが一番の驚きですわ…。あれは砲身も砲弾も完全な不可視。しかも、斜角に制限が無いに等しく、その気になれば360度の全てに攻撃が可能な代物。それを初見で回避して見せるなんて…」

見えない攻撃を初めて見て回避って…：凄すぎるよ…佳織…：。

「抜け目のないアイツの事だ。予め情報収集をしていたんだろうさ」

「姉さ…織斑先生…」

危なく!思わず姉さんって言いそうになっちゃった。

でも、気付かれてなかったみたい。

だって姉さんの顔、すっごくニヤけてるもん。

「攻撃の瞬間さえ分かっていたら、いかに初見と言えども回避は可能だ。…相当にタイミングはシビアだな」

姉さんがここまで言う事を、ああもあつさりこなしちやうなんて…。

やっぱり佳織って凄い！

その後も、モニターの向こう側では佳織と鈴が互角に等しい試合を展開している。

「鈴も凄いな……」

「悔しいですけど、鈴さんの実力も相当ですわね。あの佳織さんの攻撃を何回も防いでいる……」

「だが、決して互角ではないな」

「「え？」」

モニターを見ながら姉さんが呟いた。

「よく見てみる。佳織の方はまだ表情に余裕が見えるが、凰の方は……」

「あ……」

佳織以上に汗を掻いて、心なしか疲れているようにも見える。

「アイツの切り札とも言わなければならない以上、凰に残された手段は近接戦のみ。だが、それが完全に分かりきっている佳織が、そう簡単に懐に潜り込ませると思うか？」

「確かに……」

さつきから佳織はマシンガンを使って牽制をしながら、隙を見て着実にバズーカでダメージを与えている。

鈴は佳織の弾幕に押されて、思うように動けないようだ。

「同じように試合をしていても、近接戦と射撃戦とは明らかに体力の消費量は異なる。なんせ、射撃を撃っている方は銃の反動などを押え狙いを定める事に集中し、いざという時に備えていつでも回避出来るようにしておけばいい。だが、近接戦ともなればそうはいかなくなる」

「そっか……。相手の懐に飛び込むって事は、それだけ多く動かなければいけない。それに、近づくとと言う事は同時に相手からの反撃も考えないといけなくなる」

「そのプレッシャーがより多くの体力を消耗させるのか……」

だから、佳織よりも鈴の方が疲労が蓄積しているように見えるのか…。

「衝撃砲の威力が最大限に発揮されるのは、初見の相手に対する奇襲だ。多少、攻撃力は低いけど、それでも何も知らない相手からすれば、見えない攻撃をいきなり喰らうのは驚きしかない。物理的ダメージと精神的動揺を誘発できる見事な武装ではあるが、あれは同時に諸刃の剣でもある」

「と言うと…?」

「今の佳織やオルコットのようには、相手に情報が知られてしまえば攻略が想像以上に容易になってしまうと言う点だ」

「攻略…?」

「そうだ。恐らく佳織の奴も、衝撃砲の最大にして唯一の弱点に気が付いている筈だ」

「弱点って…?」

「そんなのあるの?」

「いつもならば自分達で考えろと言うところだが、今日は特別にヒントをくれてやろう」

「なんですの?そのヒントとは…?」

「衝撃砲攻略のキーワードは…『色』だ」

「『色?』」

もう、完全に織斑先生のIS講座になってる気がする…。

「ああ。見えないのであれば、見えるようにすればいい…と言う事さ」

・
・
・
・
・
・
・

「あ…当たらない…!」

さつきから、ほんの僅かな隙を狙って衝撃砲【龍砲】を放っているが、一向に命中する気配が無い。

最初の一撃は何とか回避って感じだったのに、二発目からはひらひらと回避するようになった。

まるで、こっちの動きを先読みしてるように感じる。

かといって、下手に双天牙月で斬りかかれば、速攻でマシンガンの餌食になるし…。

もう…! 幾らなんでも隙無すぎ!!

ある意味、龍砲以上に死角が無いじゃない!!

私だって、伊達に代表候補生をやってるわけじゃない。

だから、ある程度戦えば相手の技量ぐらいは把握できる。

佳織は強い。多分、今まで私が戦ってきたどんな相手よりも。

少なくとも、同じ中国の代表候補生達にこれ程の実力者は一人もない。

その場その場に応じた適切な判断と武器選択。

そして、それを十全に使いこなす優れた技量。

成る程、この子が『赤い彗星』なんて呼ばれるのも頷けるわ。

だって、今日の前で佳織は赤い軌跡を描きながら飛びまわっているのだから。

一つ一つの行動が全て計算されているかのような動きに、観客は魅了されている。

「どうした? 動きが鈍くなっているぞ」

「な…なんでもないわよ!」

悔しいけど、かなり疲れてるのよね…。

ぶっちゃけ、喉カラカラよ。

「では、そろそろ自慢の衝撃砲を封印してしまうか」
「なんですって!?!」

ま…まさか、佳織は衝撃砲の弱点を知って…?…?

「そこ!」

「ちっ!」

少し斜め上にいる佳織が、こっちに向かってマシンガンを撃つ。必死に動いて何とか回避するけど、それが不味かった。

外れたマシンガンの弾は地面を抉り、そのまま土煙を生み出した。

「しまった!!」

私の周囲が完全に土煙で覆われてしまった。

これじゃあ、迂闊に衝撃砲が使えない!

衝撃砲は空間を圧縮して撃つ武装。

故に透明なんだけど、地球上で使用する以上は圧縮される空間には必ず空気が含まれる。

空気はその気になれば幾らでも色を付ける事が可能。

だから、煙幕弾などを使って何らかの煙を発生させてしまえば、本来は無色透明である衝撃砲に『色』を付けられる。

こうなってしまうたら、もう衝撃砲は単なる威力の高い空気砲と大差なくなる。

回避は今まで以上に容易になってしまう。

「ここまでやるなんて……。別に見縊っていたわけじゃないけど、完全に予想外だったわ……」

心のどこかで、私は昔の佳織のイメージを払拭出来ていなかったんだろう。

けど、こうしてISを纏って試合に出ているって事は、佳織もそれ相応の実力と自信を身に付けて来たって事なのよね。

(私の中にある昔の佳織のイメージは完全に忘れるべきね……)

この一年で私も佳織も色んな意味で成長した。

たった一年と言ってしまうばそれまでだけど、私にとってのこの一年は凄く長く感じた。

だからこそ、私は……。

「ふう〜……」

神経を研ぎ済ませ……精神を集中させろ……。

甲龍の残りSEは僅か84。

あと2〜3回ぐらい直撃を受ければ終わりだ。

次の一撃だけは何としても防ぐか避けるかしないと……!

「……………」

どこ…？どこから来るの…？

ハイパーセンサーをフルに使って、全ての方位を警戒する。すると、視界の端に何か光るものが見えた。

「そこだああああ!!」

迷う事無く、その光った方向に向かって双天牙月を振るう!

すると、確実に何かを斬ったような手応えがあった。

「これは……!」

私が斬ったのは、かなり大きな弾丸だった。

けど、これはバズーカの弾じゃない。

「なんだと!」

刃を振った勢いで煙が晴れて私の視界に映ったのは、かなり大きなスナイパーライフルのような銃を構えた佳織だった。

さっきの弾丸はあれから発射されたのね…。

「よもや、あの視界の中で対艦ライフルの弾を切り裂くとは…。やるな! 鈴!」

「当然じゃない! 代表候補生は伊達じゃないのよ!」

「ふふ……それでこそ私の幼馴染だ!!」

驚いた顔から一変、嬉しそうな笑顔に変わった佳織。

ああ…これは間違いなく『戦士』の顔だわ。

「この流れに乗って逆転してあげるんだから! 行くわよ佳織!!」

「いいだろう……来い!!」

私達が再び激突しようとした……その時だった。

「!」

突如として、アリーナ全体に大きな衝撃が走った。

思わず私も佳織も動きを止めてしまった。

「これは……」

「なんなの……?」

よく見ると、ステージの中央付近から煙が上がっている。

その上を見ると、いつもならアリーナ全体を覆い尽くしている筈の遮断シールドに大きな穴が開いている。

「どうやら、さっきの衝撃はあそこからやって来たものようだな…」
「そうみたいね…」

私だって代表候補生として訓練はしてきたから、それなりに事態の対処は出来るけど……

「全く状況が読めないわ……」

一体全体何がどうなってるのよ……？

私が密かに困惑していると、煙の中で何かが赤黒いものが光った気がした。

次の瞬間、私の目の前に真っ赤なビームが迫ってきた。

第16話 黒い異形

とうとう来ました、無人機戦。

原作同様にいきなり天井(?)をぶち破つての派手な登場をしようがった。

そして、いきなりの先制攻撃ときたもんだ。

「ちいっ!!」

鈴に向かって放たれた赤いビームを躲しつつ、私は咄嗟に鈴を抱きかかえてその場を離れた。

「か…佳織!？」

「大丈夫か？」

「う…うん(こ…こんな時に不謹慎かもだけど、佳織にお姫様抱っこして貰っちゃった〜♡)」

鈴の顔が赤い。

さつきまでの試合の疲労といきなりの襲撃にパニックになっているのかもしれない。

「これでは試合は中止だな」

「当たり前だけどね。にしても……」

「ああ。さつきからISのモニターに同じ言葉が出続けている」

【ステージ中央に高熱源反応確認。機体登録無し。未確認のISと推定されます】

んな事は分かってるっの！

問題は、アレをどうやって倒すかだよ！

「どうする?…佳織……」

「本来ならば、ここは教職員に任せるのが得策だろうが……」

チラツと観客席を見る。

いきなりの出来事に、案の定と言うべきか、アリーナ全体がパニックに陥っている。

「恐らく、今はあの混乱を鎮めると同時に、生徒達の誘導に手一杯に違いない。あまり期待は出来んな……」

「それじゃあ……」

鈴が不安そうに話し出した……その時だった。

急に私達二人に通信が入った。

『な…仲森さん！鳳さん！聞こえてますか!? 私です！山田です!』

「山田先生……」

今にも泣き出しそうな声ですけど。

『今すぐにアリーナから脱出してください！すぐに先生達がISに搭乗して鎮圧に行きますから!!』

「と言っても、今は他の事で忙しいのでは?」

『そ…それは……』

「ですので、ここは我々でなんとかします」

『ええっ!?だ…駄目ですよ仲森さん!!危険すぎます!!もし貴女に万が一の事があつたら……』

「大丈夫です。ここは私達を…貴女の教え子を信じてください」

『うう………』

こんな時になんだけど、山田先生の反応が可愛い。

「そう言うわけだ。鈴、君は一旦ピットに戻れ」

「はあっ?!いきなり何を言ってるのよ!?まさか、私におめおめと逃げろって言う訳!？」

「そうではない。お前の機体のSEはさっきまでの試合で枯渇寸前だろう?」

「それは……」

「私とて、一人でどうにか出来るなんて思いあがってはいない。だからこそ、お前には一度戻って補給をしてきてほしいのだ」

原作では一夏と鈴の二人でどうにかなったが、今回も同じように行くとは限らない。

だから、私はこの時に備えて色々と考えてきた。

寧ろ、この無人機との戦いこそが本番と言っても過言じゃないかもしれない。

鈴には悪いけどね。

「頼めるか?」

「で…でも、その間アンタはどうするのよ?」

「私か？私は……」

鈴を降ろしてから、私はバズーカを携えて煙の中の無人機と向き合う。

「時間稼ぎをしつつ、相手の分析でもするさ」

どこまで出来るかは分からないけど、これだけは言える。

逃げ回れば……死にはしない。

「私が相手を引きつける。行け!!」

「わ……分かったわよ！その代わり、絶対に負けるんじゃないわよ!!」

「無茶を言う」

鈴がピットに向かって飛んでいくのを確認した後、私は彼女を護るように前に出る。

すると、無人機が煙の中から出てくるようにして飛び上がった。

「やはりか……」

全身が装甲に覆われていて、全身にスラスターがある。

腕だけが異様に長くて、そこには先程ビームを撃つたとされる砲口が左右合わせて四砲並んでいる。

そして、頭部はまるで昆虫の複眼を彷彿とさせるカメラアイになっていて、真紅に光っているのも合わせて不気味さを演出している。

「こっちの声が聞こえているかは分からないが、私には分かるぞ。見ているのだろうか？」

無人機は何も言わない。

無言のまま、無慈悲な機械兵は私に向かって銃口を向けた。

「ならば見せて貰おうか！天災の造った無人機の性能とやらを!!」

・
・
・
・
・
・
・

それは、まさに怒涛の展開だった。

佳織ちゃんと中国の代表候補生である凰さんとの試合は熾烈を極めた。

当初は互角と思われていた試合だったが、途中から一気に佳織ちゃんがりード。

凰さんの敗北は時間の問題かと思われ、試合も佳境に差し掛かった……と思われたが……

「なんなのよ……あれは……」

いきなり落下してきた謎の存在。

土煙に覆われていて姿が見えない。

「きやあああああああつ!!」

「そごどいてよ!」

「何言ってるの! 私が先よ!!」

分かってはいたけど、荒事に慣れていない生徒達は混乱して出口にぐった返している。

このままじゃ、遅かれ早かれ怪我人が出てしまう。

生徒会長として、それだけは絶対に看過できない!

「皆落ち着いて!! 慌てずに一列に並んで!!」

先生達も皆を鎮めようと頑張っているけど、効果は薄いようだ。

この調子じゃ、あの存在の制圧にも行けないわね…。

その時、私は視界の端に見た事のある姿を見つけた。

「簪ちゃん!!」

私の妹である簪ちゃんが人込みに揉まれて右往左往していた。

「なんでここに!!」

って、試合を見に来たに決まってるか。

簪ちゃん、一目見た時から佳織ちゃんにご執心だったしね。

私は人込みを掻き分けながら簪ちゃんの元に急いだ。

「簪ちゃん!!」

「お……お姉ちゃん?」

「大丈夫? 怪我してない?」

「わ……私は大丈夫。だけど……」

簪ちゃんが不安そうにステージを見る。

そこでは、佳織ちゃんが凰さんと何かを話している。
作戦でも立てているのかしら？

「取り敢えず、ここは危ないわ。急いで脱出を…」

「お姉ちゃんはどうするの？」

「私は先生達と一緒に生徒達の誘導をするわ」

「じゃあ、私も一緒にする!!」

「えっ!？」

い…いきなり何を言い出すの!？」

普段の内気で人見知りなこの子からは考えられないセリフだった。

「佳織さんも頑張ってる…。私もあの人みたいに頑張りたい!だから!!」

……：凄いわね…：佳織ちゃんは。

今までずっと私に出来なかった事を、こうも簡単にしてしまうなんて…。

自分でもおかしいと分かっているけど、不思議と…：佳織ちゃんに賭けてみたくなっちゃうじゃない!!

「分かったわ。その代わり、私の傍から離れないでね」

「うん!」

これぐらいの困難、越えられないぐらいでロシア代表や生徒会長や更識家の当主はやってられないのよ!!

今の私には簪ちゃんもいるんだから、百人力よ!!

頑張ってるね! 佳織ちゃん!!

•••••

•••••

•••••

•••••

•

「鈴!!大丈夫!？」

鈴が疲労を隠しきれない表情のまま、ピットに戻ってきた。

一夏を初めとした面々が鈴に駆け寄る。

「わ…私の事は今はいいから！早くエネルギーの補給をお願い!!」
「補給だど？…どういう事だ？」

まさか、また出る気か？

「佳織が言ったんです。自分が引きつけている間に補給をして来いって。だから…」

「成る程な。分かった」

本来ならば真つ先に動くべき教師陣は生徒の誘導を行っていて出撃できない。

かと言って、あのまま戦闘を継続すれば最悪、二人揃って共倒れも考えられる。

だからこそ、少しでも勝率を上げるために鈴を補給に行かせたのか…。

実弾ばかりを使っている佳織はスラスタ以外にエネルギーを消費していない。

故に佳織が殿を務めた…と言う訳か。

「織斑、オルコット。二人で風のISの補給を手伝え」

「わ…分かりました！」

「了解ですわ！」

あの二人ならば大丈夫だろう。

次は……

「……………」

箒が悔しそうに俯いて拳を握っている。

この一大事の時に何も出来ない自分に憤慨しているんだろう。
いきなり箒が顔を上げてどこかに行こうとした。

まさかあいつ……

「お…おい「しののん!!」なっ……!!」

あの布仏が大声を出した…？

「しののん……どこに行くつもり？」

「私は……」

「駄目だよ。ここでののんが行ったりしたら、かおりんが悲しむよ」
「だが…私は！」

「私だって!!」

「……!?!」

泣いている……のか？

「私だって……かおりんの為に何かしてあげたいよ…。でも、私はI
Sの操縦は上手くないし、しのんのように運動神経があるわけじゃ
ない」

「……」

普段は何も感じて無いように振る舞いながらも、心の中では密かに
コンプレックスを抱いていたんだな…。

「私に出来るのは整備だけ。そんな私でもね……かおりんの為に祈る
事ぐらいは出来るんだよ?」

「本音……」

「しのんがしようとしている事はここじゃ出来ない事?」

「……」

箒の動きが止まった…?

「……すまない。私が馬鹿だった…」

「しのん……」

「私はダメだな…。いつも、衝動的になって後先を考えようとしな
い…」

激情的と言えばそれまでだが、布仏の言葉で留まったところを見る
と、こいつも成長しているんだな…。

「ならば、お前達も風の補給作業を手伝え。今は少しでも人手が欲し
い」

「はい！」

これで少しでも時間を短縮できればいいが……。

一応、念には念を入れておくか…。

私の手元には、学園から与えられた私専用にはセッティングされた打
鉄の待機形態である腕輪がある。

見た目は同じだが、機体性能は大幅に向上している。

私が密かに決意をしていると、佳織からの通信があった。

『一夏！セシリア！そこにいるか!?』

『う…うん！私ならここにいますよ!』

『私もいますわ!』

『よかった。ならば、鈴の補給が終了し次第、二人も一緒に来てほしい』

『わ…私達も?』

『そうだ。機動性はともかく、私一人では圧倒的に攻撃力不足だ。かと言って、この場に高火力の武器があるわけではない。ならば、少しでもこちらの手数を増やして総合的な火力を向上させるしかない。現状、今すぐ動けるのは専用機を所持している二人だけだ。頼めるか?』

この緊急事態においても、非常に的確な情報分析だ。

一体何処まで冷静なんだ、佳織は…。

『わ…分かったよ!』

『私も了解ですわ!』

『感謝する。それと、箒と本音はいるか?』

『な…なんだ!?佳織!』

『…勝利の美酒を君達二人に捧げる。だから、信じて待っていてほしい』

『……………!』

あいつめ…そんな事を言われたら…。

『うん!』

こうなるだろうか?

そんなセリフを言われて堕ちない女はいないぞ?

『では、こちらは戦闘に集中する。通信終了』

切れたか…。

『お…織斑先生！本当にいいんですか!』

『本人達がやると言っているんだ。任せるしかないだろう。それに現状…これ以上の方法が思いつくか?』

『……………いいえ。悔しいですけど、仲森さんの判断は的確です』

「ならば、今はアイツに託すしかあるまい」

「でも……菌痒いです。本当ならば守るべき立場である私達が生徒達に託すしかないなんて……」

「私もだ。だからこそ、我々は冷静でいなければいけない。今はコーヒーでも飲んで落ち着け」

傍の棚にあったインスタントコーヒーをカップに入れて、近くにあったポットからお湯を入れてスプーンで混ぜる。

その後砂糖を適度に入れる。

「あ……あの……織斑先生……?」

「なんだ?」

「それ……七味唐辛子ですけど……」

「なに?」

な……なんでこんな場所に七味唐辛子があるんだ?

本気で意味不明だぞ?

「……………出来たぞ」

「私が飲むんですか!？」

「嫌なのか?」

「それは……」

「私が態々淹れたコーヒーが飲めないと?」

「うう……分かりました!飲みますよ!」

それでいい。

真耶は涙目になりながら一気に辛味コーヒーを飲みほした。

「辛いコーヒーなんて初めてですよ……」

「滅多に出来ない体験が出来てよかったな」

「それを貴女がいうんですか……」

恨めしそうにこつちを見るな。

私だって態とじゃないんだ。

「あっ!？」

「どうした?」

「ア……アリーナ内の扉が次々とロックされていきます!」

「なんだと!？」

まさか……あの I S の仕業!?

こちらからの増援を警戒しているとしても言うのか!?

「遮断シールドのレベルが2に上昇……このままでは、こちらから出撃出来なくなります!!」

「くそっ!!」

これでは佳織の作戦が無意味になってしまう!!

「まだ補給は終わらないの!？」

「もうちよつと待って!」

「あと少しですわ!」

アイツ等も焦っているな…。

「織斑先生。アリーナにいた三年生がシステムのクラックをしているようです。これで少しは時間が稼げれば…」

「どうだろうな…」

別に生徒達を信じていないわけではないが、あまり期待は出来ないだろう。

こうなれば、時間の勝負になってくる。

凰の補給が終わるのが先か、それとも、遮断シールドが完全に閉じて袋の鼠となるのが先か。

もしくは……佳織が力尽きるのが先か。

いくらエネルギーに余裕があっても、佳織自身の体力は別問題だ。

佳織にとっては二つの戦いを連続で行っている事になる。

蓄積された疲労とプレッシャーは計り知れないだろう。

(こうなったら私だけでも行くべきか? いや、今私だけが下手に動けば全体の士気に関わる。仮に行くとしたら一夏達と一緒の方がいいだろう)

こんな時に立場が私を苦しめるとは……!

「一応、先程から政府に助勢の打診はしていますけど、正直言ってます……」

「今の政府に過度の期待は禁物だ」

アイツ等は己の保身しか考えていないからな。

私が最も嫌うタイプだ。

「もうちよつと……もうちよつと……」

まだか……まだ終わらないのか……！

モニターの向こうでは佳織が致命傷を避けながら謎の機体と高機動戦闘を繰り広げているが、いかんせん攻撃力が違いすぎる。

ビーム兵器と実弾兵器とは性質上、威力が段違いだからな。

このままではジリ貧だ。

「ほ……補給が終わったよーリンリン!!」

「よっしやあ!!」

やっとか……！

「それじゃあアンタ等！行くわよ!!」

「了解!!」

鈴がステージの方に移動し始め、そこにISを展開した一夏とオルコットが続いた。

「待て」

「「えっ？」」

やはり、待っているだけなんて私の性には合わない。

「私も行こう」

「で……でも、姉さんのISは……」

一夏め、私の心配をするのはいいが、何気に私の事を『姉さん』と呼んだな？

まあいい。今は特別に許してやろう。

「大丈夫だ。学園側から用意された打鉄がある」

「そんなのがあったんだ……」

本来ならば使わないに越したことはないんだろうがな。

だが、私の目の前で佳織がたった一人で戦っているんだ。

ここで行かないでいつ行くんだ！今でしょ!!

「織斑先生!!ピットの出撃ゲートが!!」

「ちっ！」

私は急いで打鉄を展開して纏う。

服の下に予めISスーツは着こんでいたからな、問題無い。

「お前達！急ぐぞ!!」

「はい!!!」

私達は閉じかけている出撃ゲートに向かってスピードを上げて飛
行する。

今いくぞ！佳織!!

お前は絶対に死なせない!!

第17話 反撃開始

鈴を補給の為に一回下がらせて、無人機に私一人で立ち向かう事に。

今更ながら、なんでこんな無謀な事を考えたんだろう…。

「くっ…！だが！」

シヤア様専用(?)にカスタマイズされているお蔭か、機動性はなんとか互角。

けど、やっぱり火力は向こうの方が圧倒的に上だった。

私が出た場所を真っ赤なビームが通り過ぎていく。

その熱量は、以前に体験したセシリアのレーザーライフルの比じゃない。

同じ光学兵器でも威力が違いすぎなんですけどく!?

「流石は…：…と言うべきか」

なんて余裕ぶっこいてる場合じゃないだろ私!!

さつき、私は自分達の不利を早々に悟って、ピットにいる一夏とセシリアにも増援を要請した。

二人は快くOKを出してくれたが、鈴の補給を手伝っているみたいで、それが終わらない事には二人も出撃出来ない。

つまり…：

「ここが正念場か」

なんとかして、皆が来るまで頑張らないと！

「ちいっ！」

向こうの砲門は4つ。

威力も桁違いではあるが、無人機だけあって動きが単調になっている。

それだけが唯一の救いと言うべきか、私が何とか致命傷を避けられている要因でもある。

向こうのビームは一直線にしか飛ばない。

故に、まずは回避に専念しながら隙を窺う。

そして、相手がほんの少しでも隙を見せたら、すかさず…：

「そこっ！」

こっちの攻撃を叩き込む!!

昔…つていうか、前世でエクストリームバーサスシリーズで鍛えた腕、舐めんなよ!!

すぐにバズーカの標準を合わせて引き金を引く!

弾頭は真っ直ぐに向かって命中。だけど……

「くっ……い！」

装甲が厚くて思うようにダメージを与えられない……!

人が乗っていないせいなのか、あの無人機にはシールドエネルギーのような物を感じられない。

元来、シールドエネルギーや絶対防御はダメージ等から操縦者を保護するのが役目となっている機構だ。

だが、その操縦者が最初からいない以上、つける理由も無い。

つまりは……

「余計な機能をオミットして、その分のエネルギーを火力や機動力の増加に利用したのか……」

無人機ならば操縦者の安全を考慮しなくてもいい。

だから、私達が使用している有人機には決して真似が出来ない芸当も易々と可能になる。

「厚い装甲に高い機動性能……まるでトールギスだな……」

トールギスはアレとは違って真っ白だったけどね。

どっちにしても、基本的な開発コンセプトは同じと見るべきだろう。

本来なら相反する物を、色々な事を度外視する事によって無理矢理実現させた。

なんとも、『あの人』らしい機体だよ、全く……

原作からの知識で無人機の挙動はなんとなく読める。

あいつはこっちが動かなければ動こうとしない。

だから、弾薬の補充などは想像以上に容易に行える。

え? だったら増援が来るまでジツとしてればいいだつて?

何を仰るウサギさん。

倒せる可能性が少しでもあるなら、倒す方がいいに決まってるでしょう？

私は壁の方に移動して地面に降りる。

そして、無くなったバズーカのマガジンを外してから、右肩のシールドに取り付けてある予備のマガジンをセットする。

「これで予備の弾倉も最後か…」

えくと？マシンガンの弾はまだまだ余裕があるけど、無人機相手じゃダメージなんて期待するだけ無駄無駄無駄無駄あつ!!

ぶつちやけ、雀の涙程度しか装甲に傷をつけれません。

対艦ライフルにはまだまだ弾の余裕があるけど、この状況じゃ上手く狙いを付けられない。

まあ、これは最初から私が使うつもりはないんだけど。

後々に備えて弾もちやんと『別の物』に交換してあるしね。

で、残ったのはヒート・ホーク。

うん、アイツに近接戦を挑むとか、私には無理っす。

私は一夏や千冬さんのような剣道馬鹿じゃないのデウス。

「残り3発。これでなんとか…」

ちよつち本気で覚悟を決めようとした、その時だった。

「佳織!!」

「なに？」

この声って……まさか？

「待たせたな！」

「お…織斑先生？」

どういう訳か、千冬さんが打鉄を装備した状態で一夏と鈴とセシリアを先導してきた。

え？ええ？マジで状況が分からない。

呼んだのは後ろにいる三人だけだよ？

私が内心、困惑している中、四人は私の傍に降り立った。

「ここからは私も協力する」

「貴女と言う人は…」

大方、生徒だけにやらせるのは心配だったから…的な理由で来たん

だろうな。

この人って昔から過保護な所があったし。

「お待たせしましたわ、佳織さん」

「大丈夫だった？怪我は無い？」

「私は大丈夫だ。まだ致命傷も直撃も受けていない」

あのままじゃ時間の問題だったけどね。

本当にナイスタイミングだった。

「四人とも、まずは一旦武器を仕舞ってから私の近くに来てくれ」

「武器を仕舞う？何故だ？」

「それを今から説明します」

不思議そうな顔を浮かべながらも、四人は武器を収納してから私の傍に近寄ってくれた。

「私があいつと交戦して分かった事を手短かに報告する」

「分かった」

「まず、あいつは無人機だ」

「「は？」」

だよね。鳩が豆鉄砲喰らったような顔になりますよね。

「いやいやいや、無人で動くISとか聞いた事ないわよ」

「その通りですわ。ISとは人間が動かす事を前提にした機械。それが無人で動くだなんて…」

「やはりか……」

否定的な意見を出す鈴とセシリアを尻目に、千冬さんだけが一人で納得していた。

「私も最初に見た時からおかしいとは感じていた」

「ど…どういう事？」

「アイツの動きは機械的と言うか、単調な気がする。それに、時折佳織の攻撃を人間の動きを無視したかのような機動で回避した時もあった」

流石は千冬さん。こんな時でもよく見ていらっしやる。

「佳織。お前があいつを無人機と思った根拠はそれだけではないだろう？」

「はい。機体の構造がおかしすぎる」

「構造？」

「そうだ。分厚い装甲に高い機動力を保持する為の高出力のブースター。こんな事をすればどうなると思う？」

「そりゃ……いくら絶対防御があっても、中の操縦者は唯じゃ済まないでしょ……って、まさか!？」

「その『まさか』だ」

鈴も気が付いたか。

「厚い装甲に高機動……機体としては理想的ではあるけど、そうすれば中の人間の事を完全に無視する事になる。でも……」

「中に人がいなければ話は変わってくる……ですか……」

「ああ。操縦者の事を考慮しなくて済む分、かなりの無茶が可能となる」

それでも強い事には変わりないんだけどね。

「それと、この状況で何か気が付かないか？」

「へ？なによ？」

「分からないか？私達がのんびりと話していると云うのに、どうして攻撃がこないんだろうな？」

「!!!」

またまた皆の驚いた顔を頂きました。

「アイツの動きは『鏡合わせ』なんだ」

「か…鏡合わせ？」

「そうだ。こつちが攻撃態勢に移行すれば、向こうも攻撃態勢に。逆にこつちが戦闘状態を解除すれば、向こうも？」

「攻撃してこなくなる…」

「正解だ」

単純であるが故に強い。

シンプル・イズ・ベストとはよく言ったもんだ。

「けど、そんな単純なら……」

「付け込む隙は必ずある筈だ」

あの装備から考えて、恐らく敵さんは複数の相手との交戦を前提と

していない。

多分、アレの狙いは最初から……

(私……か?)

一夏がクラス代表になっていない以上、もしも一夏が狙いであるなら無人機を送り込む理由が無い。

けど、私がターゲットだったら……

(色々と納得できてしまう……)

こんな風に歪んでいるのも、十中八九『神』の仕業に違いない。

あんやろく！こうなったら、絶対に無人機をぶつ倒してやるく！

「け……けど、あれが無人機だとしても、これからどうするの?」

「向こうが圧倒的な火力で来るのなら、こっちは連携で対抗するほかあるまい」

「連携……」

「と言っても、そこまで複雑な事を要求するつもりはない」

それ以前に、私に作戦立案能力とか無いからね?」

「まずはセシリア」

「はい」

「君は我々の中で最も狙撃能力が高い。故にコイツを頼みたい」

「これは……!」

私がセシリアに渡したのは、対艦ライフルARS-78だ。

「お前のレーザーライフルでは過度なダメージはあまり期待できない。だが、今回こいつの弾は本来装備される筈の貫通式の炸裂徹甲弾を装填してある。戦艦の分厚い装甲すらも易々と貫通してしまう代物だ。これならばあの無人機にも有効な一撃を与えられるだろう」

「し……しかし、ダメージが与えられると思っただけでいいのなら、どうぞ自分で使用なさらなかつたんですの?」

「お前ならばきつと、私以上に有効に使えると判断したからだ。勿論、ちゃんと使用者権限のロックは解除してある」

ISの武装は基本的には他の機体を使う事が出来ないようになってる。

でも、今回の私のように予めロックを解除して、別の機体を登録し

ておけば、本人以外でも武器の使用が可能となる。

「セシリアの銃の腕を見込んでの依頼だ。頼めるか？」

「私の腕を見込んで……」

あ…あれれ？急にどうしちゃったの？

「分かりましたわ！このセシリア・オルコット、見事に佳織さんの期待に応えてみせますわ!!」

「任せたぞ。私達の背中はお前に預けた」

「はい！」

いい返事だけど、ちゃんと分かっているのかな？

「次に一夏と鈴」

「え？あ…はい！」

「な…何かな？」

「二人には隙を見ての近接戦をやってもらいたい」

「近接戦？」

「そうだ。アイツの主武装は両腕に固定武装として装備されたビーム砲だ。だが、見た限りではそれ以外に装備していないように見える。

つまり…」

「上手く懐に飛び込めれば…」

「ごつちのもの…か」

理解が早くて助かるよ。

私の拙い頭で考えた作戦で悪いとは思うけど。

「だが、決して無理はするな。自分達が確実に攻撃出来ると思った時にしてくれればそれでいい。深追いは禁物だ」

「二分かった」

中途半端な私よりも、総合的な戦闘力は絶対にこの二人の方が上。

だからこそ、こんな危ない役目を任せる事も出来る。

罪悪感が無いと言われたら嘘になるけど。

「私はどうしたらいい？」

「織斑先生は……」

うーん……流石の私も、ここで千冬さんが参戦するなんて夢にも思ってたかったら、なんにも思いついて無かったよ。

そうだなあ〜…。

「ならば、先生には遊撃を頼みたい。ここにいるメンバーの中では間違いなく貴女が最強だ。無理の無い範囲で好きに動いて貰いたい」

「了解した。それと…」

「ん？」

急にどうした？

「今は別に私の事を『先生』と呼ばなくていい。いつものように呼んでくれて構わない」

ん〜？どーゆー事？

「…了解した。千冬さん」

「それでいい」

何故にそこで嬉しそうにする？

「肝心の佳織は何をする気なのよ？」

「私の役目は最初から決まっている」

敢えて私はマシンガンを装備して構える。

「私は陽動を担当する」

「よ…陽動!? 一人で!？」

「陽動は一人で充分だよ」

それに、一人だからこそ出来る事もある……ってね。

「ん？」

音が聞こえた。

まさかと思つて振り向くと、無人機が攻撃態勢に移っていた。

なんで? って…あ、説明の為に武器を出したの忘れてたや。

「全員散開！」

「了解!!」

あ…あれ? なんで私が指揮官みたいな事してるの？

なんか自然と皆に命令的な事を言つてしまったけど…。

皆が散らばつて、さつきまでいた所にビームが命中する。

あつぶな〜! ビームが当たった場所が真っ赤になって融解してる

じゃん!

あのまままでいたら一網打尽だった。

「では……行かせてもらおうか！」

マシンガンを両手で持って、態と不規則に動きながら無人機に迫る。

「こっちだ」

碌なダメージなんて入らないのは分かっているけど、敢えてマシンガンで攻撃。

私の役目は相手に向かって積極的に攻撃する事じゃない。

あくまで無人機の狙いを私に向かって隙を生み出す事。

だから、弾数にまだまだ余裕があるマシンガンが最適なのだ。

装甲に僅かな掠り傷を与えると、無人の顔がこっちを向く。

よしよし……私に狙いを定めたか。

その不自然なまでの腕がこちらを向き、銃口にエネルギーが充填されていく。

数瞬の内にビームが発射されるが、体を回転させながら紙一重で回避。

「鈴ー」

「分かってるわ！」

無人機がこっちを向いた隙を狙って、一夏と鈴が武器を構えて迫る。

ふと見ると、一夏の手には雪片以外にも、もう一本別の剣が握られていた。

（あれは……打鉄に装備されている筈の近接ブレード『葵』か？）

どっちも近接戦闘に向いているから、武器の相性はいいだろうけど…。

だが、無人機は射撃直後の硬直を無理矢理振りほどいて動き、二人の方に銃口を向ける。

けど残念。こっちには優秀なスナイパーがいるんだよ！

「そう簡単にいくなんて……思わない事ですわ!!」

セシリアに渡した対艦ライフルから放たれた特殊弾が、一夏と鈴の二人の間をレーザーライフルにも匹敵する速度で通り過ぎ、撃つ直前だったビームの銃口にめり込んだ！

次の瞬間、銃口の内部で弾が炸裂し、ビーム砲を一つ破壊、爆散した。

「やりましたわ!」

喜びながらもセシリアは次の弾を装填する。

「この隙は!」

「逃さない!」

爆発の余波で少しだけ体が倒れかけた瞬間を、二人は決して見逃さなかった。

一瞬で無人機の懐に潜り込み、一夏と鈴がXを描くように斬りつけて、そのまま離脱。

やっぱり……下手な実弾兵器よりも近接武器の方が効果的みたいだ。

無人機の装甲に確かな傷跡があった。

無人機はその場から移動し、態勢を整えようとしたのだろうか。

空中に浮いて離脱を凶ろうとしたが、その背後に人影があった。

凄まじい音と共に無人機が地面に叩きつけられた。

「逃がすと思うか?」

わお……凄いやつで睨み付けながら千冬さんが剣を構えている。

あれで攻撃したのか…。

(つーか、いつの間にか?全然分からなかった…)

一線を退いても、まだまだ規格外って事ね…。

だが、無人機も黙ってやられはしないようで、地面に這いつくばりながらも銃口を千冬さんに向けている。

だと言うのに、千冬さんはいつものように佇んでいるだけ。

心なしか顔も笑っているような気もするし。

「やらせんよ」

バズーカに持ち替えてから無人機の腕に向かって発射。

弾速はそこそただけ、あの体勢では上手く動けないようで、見事に命中。

こっちは射線さえ逸らす事が出来れば良いと思っていただけ、なんと銃口に直撃。

私の攻撃で相手の攻撃手段を潰せてしまった。

「佳織ならばやってくれろと信じていたぞ」

「光栄の至り」

偶然ですけどね。

「火力は確かに向こうの方が上かもしれん。だが、それだけだ。機械には絶対に出来ない人間の戦いと言うものを奴に見せつけてやろう。なあ、佳織?」

そこで私に振りますか。

「勿論。ここで負けては人間の名折れ」

こうなったら自棄だコンチクショク!

バズーカからマシンガンに持ち替えて、スコープを覗く。

「護るべき者を護る為に貴様を鉄屑スクラップにしてやる。だから……」

私はまた陽動をする為にスピードを上げて相手に突っ込む。

「かかって来い……無人機ガラクダ」

第18話 決着

いきなり乱入してきた無人機に対して、複数人での連携で挑む事になった私達。

私と一夏と鈴にセシリア、そして…まさかの千冬さんの参入によって戦局は一気にこちら側に傾いた。

機動力に優れた私が陽動を行い相手の隙を作り、その間に近接戦に優れた鈴と一夏が斬り込む。

後方ではセシリアが私の渡した対艦ライフルで援護射撃。

一番の熟練者でもある千冬さんは下手に行動を制限しないで自由に遊撃をしてもらう。

まさか、即席で組んだこのチームがここまで上手く機能するとは想像にもしていなかった。

既に4砲中の2砲を破壊され、総合的な攻撃力はかなり低下した筈。

このまま押し切れれば申し分無い。

今の流れだけは絶対に手放すわけにはいかない！

ギギギ…と動く無人機だが、さっきの千冬さんの背中の一撃でブースターをやられたのか、動きに精彩さが無くなっていった。

「皆、戦況はこちらに向きつつあるが、最後まで決して油断するな。余裕と油断は全くの別物だと思え」

念の為に言った一言に全員が頷く。

千冬さんに関しては何となく心配してなかったけど、他の皆はなんか油断して手痛い目に遭いそうな気がするんだよなあ…。

原作を知っているが故の先入観ってやつなのかもしれない。

無人機は残ったビーム砲を私に向けている。

どうやら、あいつなりにいつの間にか指揮官役になっている私を最優先目標に設定したようだ。

たしかにそれは賢明な判断だ。

どれだけ強大な部隊でも、頭が潰されれば一気に弱体化する。

士気は下がるし、何をすればいいか分からなくなった部隊員は場で

混乱する。

最悪の場合は内部分裂で自滅……なんてオチも考えられる。

だけどね……

「そう簡単に、私の首が取れると思われては困る」

こつちに向いたビーム砲の射線を変えるために、私はジグザグに動きながら接近、そこからマシンガンの連射をぶちかましてやった。

ダメージは殆ど無いに等しいが、それでも相手の動きの阻害ぐらいは出来る。

攻撃の際はずっとマシンガンのトリガーは引きっぱなしになって
いるから、弾薬は湯水のように消費するけどね。

結果として、ビーム砲の射線は誰もいない真上に行った。

既に発射態勢にあつたみたいで、ビームは彼方の方へと無駄撃ちさせられた。

当然、そんな大きな隙を見逃す私達じゃない。

「よお〜し……今なら!!」

一夏の気合と共に、彼女が手に持っている雪片の刀身が開いて、そこから一刃の光の刃が出現した。

「あれが……」

零落白夜の代わりに搭載されたって言うレーザーブレードか。

見た目的には零落白夜と遜色無いように思えるけど……。

「二いつくわよおおおおおおおおおつ!!!」

ふ…二人揃つての『瞬間加速』!?

凄いい迫力だけど、一夏はいつの間^{イケニツションブー}に習得したの!?

凄まじいスピードで迫る二人に気が付いたのか、すぐさま無人機は体の向きを変える。

だが、その先には我らが誇るスナイパーの銃口が待っていた。

「よ〜ぞ〜こちらを向いてくれましたわ……」

その刹那、再び対艦ライフルから炸裂徹甲弾が発射。

鈴の脇の下と一夏の股の間を潜り抜け、音速の壁を越えて直進。

その一撃は無人機の腰に命中し、大きく炸裂。

その威力で無人機の上半身と下半身は永遠の別れを告げる事に

なった。

壊れた部分から多くのコードを初めとした機械部品が飛び出し、露出したりしたが、そんな事を気にしている余裕は無い。

「狙うは!!」

「一点のみ!!」

一気に懐へと飛び込んだ二人は、その刃を無人機の肩関節へと突き刺した!

「これでええええええええええええ!!」

一夏と鈴の全力の一撃は、見事に無人機の腕を両肩から切断する事に成功。

これで奴に攻撃力は無い!

「佳織!!」

「了解!!」

千冬さんの声と同時に私も接近する。

私は咄嗟にマシンガンからバズーカへと武器を持ちかえた。

「フッフ……ダメ押しの一撃……ですわ!!」

優雅な笑みと共に、またまたセシリアの対艦ライフルが火を噴いた。

その弾丸が向かう先は……

「ほう……」

なんと、奴さんのど真ん中……つまりは胸部だった。

「一夏……」

「うん……」

弾丸が炸裂する前に二人は速やかに離脱。

その直後に大きな爆発音と共に無人機の胸部が爆裂した。

「この一撃で!!」

落下速度と両手持ちから放たれた千冬さんの真つ向唐竹割りが無人機を真ん中から両断した!

「終わりだ」

最後に私が大きく口を開いた胸部に向かってバズーカを撃ち込む!

吸い込まれるように弾頭は命中し、そして爆発。

いかに装甲が厚くても、内部に直接打ち込めば一溜りもないだろう。

「や……やった……の……？」

「そう……みたい……」

文字通り、完膚なきまでに叩きのめした無人機は完全に沈黙。所々から火花を散らして、見事なスクラップと化していた。

「やったあっ!!」

嬉しそうに一夏と鈴がハイタッチ。

その後ろではセシリアも安心したように地面に座り込んだ。

「よ……よかったですわ……」

その顔には幾つもの汗が滲んでいる。

冷静そうにしても、その心の中は相当なプレッシャーがあったに違いない。

そう言えば、狙撃手には冷静な判断力と緻密な計算力が要求されるってどこかで聞いたな。

何処だったつけ？

「佳織」

「先生……？」

で、千冬さんが一緒に戦ってくれたお蔭で士気も向上した。

本当にもう……マジで頭が上がりません。

「見事な指揮だった。やはり、お前にクラス代表を任せて正解だったな」

「偶然ですよ。私のした事などが知れています。今回の勝利は、チームの連携とこれ程のメンバーが揃った幸運。それから……」

ピットの方を見る。

そこには、もう扉が開くようになったのか、箒と本音ちゃんがこっちに向かって手を振っていた。

「待っていてくれる者達がいたからです」

護るべき存在がいるから人は強くなれる。

こんな歯の浮くようなセリフを言うつもりはないけど、なんとなく

気持ちは分かったような気がした。

誰かが待っていてくれるって思うだけで、不思議と勇気が沸いてきたし。

「じゃなきや、私のようなヘタレが頑張れるはずないもん。」

「そうかもしれない。だが、お前には確かな才能がある。お前にしかない才能が……な」

「そうでしょうか……」

「私が言うんだ。間違いないさ」

「成る程。一理ある」

世界最強……でももんね。

昔から、人を見る目はあったし。

「にしても、本当に無人機だったのね……」

「だね……。完全に集中していたから、途中で機械的な部品が見えても気にも留めなかった……」

「ですが、なんだか不気味ですわね……」

一夏とセシリアと鈴がやって来て、破壊された無人機の残骸を覗きこんでいる。

「人の形をしているのに人じゃない。なんとなく、あの子の気持ちに分かりますわ……」

ん？あの子とな？

「それってどういう意味よ？」

「あ……実は、私の幼い頃の友達の人に、『お人形が怖い』と言っていた女の子がいるんですの」

「ふうくん……珍しいね。お人形が怖いだなんて」

「当時の私も同じ事を思いましたわ。幼い頃の女の子は誰もが一度はお人形で遊んだ経験があると思いますけど、その子に限っては一度も遊んだ事ありませんでした。それどころか、お人形に近づこうとすらしなかった」

珍しくシリアスな顔になっているセシリアの話に、全員が聞き入っていた。

「それで、私はある時、その子に聞いてみたんですの。『お人形の一体

何が怖いんですの?』って」

「その子は何と答えたんだ?」

一度だけ唾を飲んでから、セシリアは口を開いた。

『人間じゃないのに人間の顔を持って人間の形をしているなんて、気味が悪くて仕方が無いわ』……彼女はそう言いました」

人間じゃないのに人間のような顔や形……か。

確かにそうかもしれない。

「今なら彼女が言っていた事の意味が分かりますわ」

「だね……。今まさに私達は『人間じゃないのに人間の形をした物』と戦っていたわけだし……」

「うん……」

場の空気が急に重くなった……。

「そろそろ撤収するぞ。この残骸は後で回収させる。勿論、今回の事は誰にも言うなよ。学園内にもすぐに箝口令が敷かれる筈だ」

「二「分かりました」三」

こんな事件……世間に知らせるわけにはいかないもんね。

もしもバレたりしたら、大変な事になってしまうよ。

「では、解散!」

千冬さんの一言で皆はISを解除する。

「ふう……あれ?」

私も皆と同じようにISを解除したけど、急に頭がフラツとなって地面にちやんと降り立てずに座り込んでしまった。

「か……佳織!」

「大丈夫ですか!」

「う……うん……」

な……なに……?急に眩暈が……?

「今まで蓄積してきた疲れが、戦闘が終わって気が抜けたせいで一気にきたんだろう。この中で佳織だけが唯一、連戦したんだ。無理も無い」

ああ……そっか。

そう言えば、私つてば全く休憩してなかったや……。

ははは……道理で体がだるく感じる筈だよ…。

「仕方があるまい」

はい？ち…千冬さん？

「うわあっ!？」

い…いきなり千冬さんにお姫様抱っこされた!？」

「佳織は私が保健室まで連れて行く。お前達は先に戻れ」

「ええ〜…」

「なんだ、その顔は」

「姉さん……送り狼にならないですよ？」

「保証は出来んな」

「『出来ないの!』『出来』」

私は一体どうなっちゃうの!？」

大人の階段を爆走しちゃうの!？」

「ほれ、さっさと行け！」

誤魔化すように言ってから、千冬さんは私を抱えてピットに向かった。

(これ……戻ってからも色々と言われそうな予感がする……)

一難去ってまた一難……か。

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．

．

仄暗い室内。

モニターの明かりだけが部屋を照らす中、一人の女性が机に突っ伏していた。

その傍には銀髪の少女が一人、困惑していた。

「あ…あの…束様?どうしました?」

「か……か……」

「か？」

「私の大好きなかおりんがカツコよくて強すぎて生きてるのが辛い」
「ええ〜!？」

ゆつくりと起き上がると、彼女……篠ノ之東は鼻血を垂れ流していた。

「色々と様子を見て、かおりんの強さを直に感じたいな〜って思っ
て『アレ』を向かわせたけど、まさかチームで撃破するなんて思わなかつたよ〜」

「ですね。しかし……」

「うん。悔しいけど、見事なまでの連携だった。ちーちゃんも参戦するのは完全に予想外だったけど」

「あの人がいた時点で負けフラグは立ってましたよね……」

銀髪少女が言った途端、東の頭に青い筋が出てズ〜ンとなった。

「だよね〜……でも」

ムクツと起き上がってモニターを見る。

「かおりんの凄さはよく分かったよ」

その目はとてもワクワクしていて、まるで新しい玩具を見つけた子供のようだった。

「かおりんには間違いない才能がある。ISの……戦闘の才能が」

「戦闘の才能……ですか？」

「うん。だって、即席のチームをあそこまで見事に指揮出来るなんて、常人には凄く難しいよ?」

「そうですが……」

「そして、あのとんでもなくピーキーな機体を、まるで手足のように扱う技量。冷静沈着な心に観察眼。更には異常ともいえる勘の良さ。まるで、どこぞの異能生存体のように……才能の全てが戦闘に特化している」

「……………」

沈黙が場を支配する。

「私が知っているかおりんは、勘が鋭い事を除けば至って普通の女の

子だった。とても優しくくて、包容力があって…」

真剣に話しているように見えるが、束の顔は完全に緩みきつていた。

「今なら分かるよ。かおりんの持つ天才的な才能は、日常生活はおろか、表側では決して発揮されない物ばかり。道理で私にも分からない筈だよ」

「束様……」

「多分、ちーちゃんも今回の事で理解したんじゃないかな？」

「あの方も鋭いですから」

「だね……って！あゝ!?!」

ふと見たモニターでは、千冬が佳織を横抱きにして運んでいた。

「いいないいな〜！私もかおりんをお姫様抱っこしたい〜！いや、私の方がしてもらった方がいいかな…?」

「変な事で真剣になりますね」

「そりや真剣にもなるよ！クーちゃんもかおりんに会えば分かるって！あの子は底なしに優しい……どんな人間にも絶対に手を差し伸べる子だって」

「どんな人間にも……ですか……」

束の言葉を聞いて、少しだけ考える『クーちゃん』。

「大丈夫。きつとクーちゃんの事も受け入れてくれるよ。私みたいに捻くれている人間の手も取ってくれたんだし」

「そう……ですね。束様がそう仰るのですしたら、私も信じてみます」

「うんうん！」

「仲森佳織様……ですか。私も会える日を楽しみにしております」

そう呟いた彼女の目は、好奇心に満ちていた。

そして、束は……

「ゴorem程度じゃかおりんの相手としては少々力不足だったかな……。やっぱり、かおりんの秘めている才能を最大限に発揮させるには、それ相応の相手を用意しないと……」

様々な感情を緋い交ぜにしながらブツブツと呟いていた。

その目は怪しく光り、これからの波乱を予感させるようだった。

第19話 タイミングは大切

突如として乱入してきた無人機を辛くも撃破した私達は、それぞれに解散した。

ピットに戻った私達を迎えたのは、今にも泣きそうな顔の山田先生と心配そうに駆け寄ってきた箒と本音ちゃんだった。

で、なんでか楯無さんと箒もいたんだよね。

なんでも、二人は先生達と一緒に生徒達の避難誘導を行っていたらしい。

なんと言うか……凄いなこの姉妹。

普段はあんなんでも、ちゃっかりと生徒会長っぽい事をしている辺り、やっぱり凄い人なんだなって思った。

私が千冬さんにお姫様抱っこされている様子を見て、一瞬で場が凍りついたけどね。

その場にいる全員がもれなく顔を真っ赤にしていたんだけど、それぞれに反応が違っていた。

箒はなにやら狼狽えてしたし、本音ちゃんはポケーツとしていた。

山田先生は手で顔を覆ってはいたが、隙間から何気に覗いていたし。

楯無さんはニコニコと笑っていたけど、なんだか複雑な顔をしていた。

箒に至っては立ったまま完全にフリーズしていたし。

私はそのまま、千冬さんに抱えられたまま保健室に行く羽目になった。

廊下で誰にも会わない事を祈るばかりです、はい。

・
・
・
・
・
・

「本当に大丈夫？」

「大丈夫だって。単なる過労だって言われたし」

まさか、保健室のベットを利用する事になるなんてね…。

ちよつと大袈裟じゃない？

ま、千冬さんがベットまで真っ直ぐ連れて来たんだけど。

けど、あの時の千冬さん…：…なんか目がギラついてなかった？

なんつーか…：…昔見た動物番組で見た獲物を捕食する直前に見せる獣のような目をしていた。

思わず身の毛が立ったけど、その直後に本音ちゃんと箒が来たから難を逃れた。

あのまま誰も来なかったら、一体どうなっていた事やら…。

想像もしたくない…。

因みに、千冬さんは山田先生に呼ばれてどこかに行つて、箒はジューズを買いに行つてくれた。

保健室を去る際、千冬さんの舌打ちが聞こえた気がしたけど、気のせいだって信じたい。

「かおりんなら大丈夫だって信じてたけど、それでも…：やっぱり心配だったよ…」

「…：ゴメンね。でも、心配してくれてありがとう」

それだけ想われているって証拠だしね。

「かおりん…」

「なんで本音ちゃんが泣きそうなのよ？」

「だってえ…」

「ははは…」

本当に面白い子だよなあ。

見ている飽きないって言うか、なんて言うか。

「兎に角、今日はゆっくりと休んでね。かおりんは休まずに二回連続で試合をしたようなものなんだし」

「りょくかい。私だっていつまでもベットのうえにはいたくないし」

こうして横になっていると、本当にリラックスできる。

あ……なんか眠たくなってきた…。

「かおりん？」

「ん……ちよつと眠気が……」

「寝てもいいよ。私がおりにいるから」

「うん……そうさせて……もらう……よ……」

ここにきて溜まった疲労がピークに達したのか、私があつという間に夢の世界に入った。

・

・

・

・

・

「……寝ちゃった？」

「……………」

どうやら、かおりんはあつという間に寝てしまったみたい。

まるでのび太君さながらの就寝スピードだ。

「しののんは……」

どこまで買いに行ったのか、まだ戻ってくる気配は無い。

他の皆も来る様子は無いし…。

目の前には無防備なかおりんの寝顔…。

実は今まで何度も部屋で見た事のある寝顔だけど、こんなシチュエーションは初めてかもしれない。

「す〜…」

静かな寝息だけが保健室に木霊する。

本来、ここにいる筈の保健室の先生は別の用事で不在中。

今この部屋にいるのは、私とかおりんだけ。

(私とかおりんだけ……なんだよね……)

あ…あれ？あれれ？

なんでこんなにも緊張するの？

私とかおりんはルームメイトなんだから、二人つきりになるなんてことは日常茶飯事の筈なのに…。

目の前に晒されるかおりんの寝顔。

かおりんの寝顔は本当に可愛い。

改めてかおりんの顔をまじまじと観察すると、この子は本当に美少女なんだと思わせられる。

綺麗な肌に長い睫毛。

プルプルに潤った唇に整った目鼻立ち。

そして、窓から入ってくる夕日に反射する綺麗な髪。

気が付けば、私はかなりの至近距離でかおりんの顔を見ていた。

「わ…私っては何を…？？」

思わず離れるけど、そこでピタツと止まった。

「今なら…誰もないから…？」

ゴクリと唾を飲む。

少しずつ顔を再び近づけていく。

「いい…よね…？」

かおりんからとてもいい匂いが漂ってきた。

私の大好きな匂いだ。

心臓の音がドクドクと鳴り響く。

心なしか、凄く大きく聞こえる。

「かおりん…私…私…」

私とかおりんの唇がくっつきそうになる…その瞬間。

「待たせたな。買ってきた…ぞ…？」

「あ…」

しののんと目が合っちゃった…。

「ほ…ほほほは本音?!お前は一体何を!？」

「し———!!」

いきなり大声を上げようとしたので、慌てて止める。

「かおりんは今寝てるの!静かにして!」

「あ……すまん……」

出来るだけ小声で言ってから、なんとか収まりがついた。

「で？今お前は何をしようとしてたんだ？」

「そ……それは……ははは……」

「笑って誤魔化そうとするな」

ですよね。

「全く……気持ちは分かるが、抜け駆けは禁止だ。あの千冬さんだつて我慢してるのに……」

「でも、私達がいなかったら間違いない織斑先生は行動に移してたよ？」

「だろうなあ……」

どうやら、しののんも保健室を出ていく時に見せていた、あの捕食者のような目を見逃さなかったみたい。

「ある意味、最強のライバルがあの人だから、厄介極まりないんだよね……」

「だね」

も……もしもかおりんが年上趣味だったりしたらどうしよう……。

「にしても、ぐっすりと眠っているな」

「うん。かおりんが一番頑張っていたからね」

「そうだな……。別に他の皆が頑張っていなかったと言う訳ではないが、最初からずっと戦い続けていたのは佳織だけだったからな」

きつと、私には想像が出来ない程に心も体もクタクタに疲れ切っているんだろう。

「このまま静かに寝かせてやろう」

「そうだね……」

今日は本当にありがとう、かおりん。

私に出来る事なんて微々たるものだけど、それでも、かおりんの専用機の整備ぐらいは出来るから。

私に出来る範囲で精一杯にサポートするから。

また保健室が静寂に包まれた…….と思っていたら。

「佳織……大丈夫……?」

今度はリンリンやおりむー達がやって来た。

「あら本音ちゃん」

「あ……」

「かいちよーにかんちゃん？」

「なんでこの二人まで一緒に？」

「な……なんでその二人まで……？」

「なんだか佳織ちゃんの事が気になっちゃって」

「右に同じ……」

かんちゃん……端折りすぎだよ……。

「もしかして、寝てるの？」

「そうだ。だから静かにな」

「分かっていきますわ」

皆は静かにこつちに来た。

「おお……」

「まあ……」

「これは……」

「あら……」

「……」

ん……なんとなく、次の皆の反応が予想出来ちゃった。

「「「か……可愛い……♡」」」」

だと思っただよ。

「佳織の寝顔とか始めて見たわよ……」

「天使の寝顔ですわ……♡」

「これを毎日見れるのか……本音ちゃんが羨ましいなあ……」

「これはまた……なんとも……」

「うわあ……うわあ……」

皆、顔を真っ赤にしている。

実は私としののんもさっきからずっと真っ赤だけど。

「佳織ちゃんは今日の事件の最大の功労者ですもの。静かに労わってあげましょう」

「同感です」

そう言ったかいちよーの扇子には『可愛いは正義』って書いてあった。

言ってる事と真逆な気がする…。

「取り敢えず、今の私達がするべき事、それは……」

皆が一斉に頷く。

「佳織ちゃんのこの寝顔を写真に収める事よ」

全員が同時に携帯を取り出して、カメラ機能でかおりんの寝顔を撮った。

途中、シャッター音で起きちやうかもって思ったけど、予想以上に熟睡してるみたいで、全く起きる気配が無かった。

結局その日、かおりんは保健室で一晩を明かす事になった。

・
・
・
・
・
・
・

IS学園の地下50m。

そこにはレベル4の権限を持つ特定の関係者しか入室を許可されない隠された空間が広がっている。

そこで、千冬と真耶の二人は、破壊されここに運び込まれた無人機の解析作業を行っていた。

「解析の結果、やっぱりこれは仲森さんの予想通り、無人機のようにす」

「そうか……」

実際に戦って実感はしているが、それでも俄かには信じられなかった。

未だに世界中のどの国でも完成していない…否、理論すら確立していない技術。

佳織はこの機体にAIが搭載されていると判断したようだが、千冬はそれとは別に、この機体の製作者による遠隔操作の可能性を考えていた。

「織斑先生は実際に戦ってみてどう感じたんですか？」

「そうだな……あれにはなんと言うか……『人の意思』のようなものが感じられなかった」

「人の意思……ですか？」

「ああ。もしもあれが何者かによって遠隔操作されていたとしたら、何らかの挙動のようなものが感じられる筈だ。だが、これはどこまでも無機質だった」

まるで実体のある幽霊を相手にしているかのような感覚。

歴戦の操縦者である千冬でも初めての経験だった。

「これが一体どうやって動いていたかは不明です。最後の皆さんの連携攻撃で完膚なきまでに破壊されました。機体の中枢機能は仲森さんが放ったバズーカの直撃を受けて粉々になっています。この状態だと、修復も不可能でしょうね」

「だろうな。オルコットが開けた穴に直接叩き込んだからな。内部にバズーカを撃ち込まれれば、どんなに頑強な機体と言えども一溜りもあるまい」

目の前で残骸と化した無人機を見ながら、自慢げに語った。

「コアの方はどうだった？」

「……どこにも登録されていない物でした」

「矢張りか……」

腕組みをして唸る千冬。

その眉間には皺が寄っている。

「それにしても、今日の仲森さんは本当に凄かったですね……。まるで、本物の指揮官のようでした」

「あれもアイツの才能の一つかもな」

「才能……ですか？」

「仲森にはISの操縦だけでなく、戦闘に関する様々な才能が眠っているのかもしれない」

「なんだか皮肉ですね…。荒事に巻き込まれて初めて発揮される才能だなんて…」

「確かに。だからこそ、私達教師が頑張らなければいけないのさ」
「そうですね!」

千冬の言葉にやる気が復活したのか、真耶の顔に活気が戻った。

「そう言えば、ここに入ってくる時に悔しそうな顔をしていましたけど、どうしたんですか?」

「あぁ…あれか」

なんでも無いように反応する千冬。

「なに。もしも保健室にあいつ等が来なかったら、あのまま佳織とラブラブ出来たかもしれないと思うと、何とも言えない気持ちになっ
な……」

千冬の言う『ラブラブ』には言葉とは別の意味が含まれているのだが、真耶は知る由が無い。

「本当に仲森さんの事が大好きなんですわね…」

「当然だ。私の全ては佳織の為にあると言っても過言ではないから
な」

「過言じゃないんだ……」

ジト目になりながら呆れる真耶であった。

そんな二人の解析作業は深夜にまで及んだ。

・
・
・
・
・
・
・

夜。

IS学園の学生寮の廊下に、箒は一人で佇んでいた。

なんだか寝付けない箒は、気晴らしをする為に寮内にある自販機で何か飲もうと思つて部屋を出て来たのだ。

「はあく……」

箒の頭の中にあるのは、佳織の活躍と恋のライバルたちの事。

「佳織はどんどん先に行っていく……。そして、他の皆も……」

今回、本音が止めてくれなかつたら、取り返しのつかない事になっていたかもしれない。

自分の身勝手な行動で佳織を身を危険に晒すなどは論外だった。

箒と同じように佳織の事を想っている面々は、佳織の隣で戦える程の実力を有している。

代表候補生であるセシリアや鈴は言うに及ばず、スタートラインは同じ箒の一夏すらも、いつの間にか彼女達と遜色無いレベルに達しようとしている。

そして、本音はその類稀な優れた整備スキルで佳織の事を見事に支えている。

彼女達に比べて自分はどうか？

実力は中途半端でISの整備が出来るわけでもない。

今の箒にあるのは、佳織の幼馴染と言うステータスだけ。

「このままでは駄目だ……このままでは完全に出遅れる……！」

更に、今の箒には他の懸念材料もあつた。

「生徒会長の更識先輩と、その妹である簪……。あの二人も恐らく……」

唯でさえライバルが多いと言うのに、そこから更に二人増加。

圧倒的不利な状況にある箒にとっては見逃せない事態だった。

「こうなつたら、恥ずかしがっている場合じゃない！」

自販機の前で気合を入れる箒。

傍から見たら変な光景だった。

適当にホットココアを選んでボタンを押す。

少しして紙コップに入ったココアが出てきて、それを取り出す。

「クラス対抗戦の後にある全員参加型の学年別トーナメント……あれで優勝したら、佳織に告白しよう！ うん！」

なんだかんだ言って、結局は告白する切欠が欲しい箒だった。

だが、その事を自覚せずにグツ！ と拳を握りしめる箒。

そんな事をすれば当然……

「熱っ!？」

こうなる。

紙コップは潰れて、中のココアが零れる。

だが、箒はある事を失念していた。

ここは学生寮。

当然、箒の他にも生徒は沢山いるわけで……

「フッフ……♡いい事聞いちゃった♡」

その中でも、最も聞かれてはいけない人物に聞かれていた。

彼女が持つている扇子には『恋は戦争!』と書かれている。

後に箒はこう語っている。

「私の人生の中でも最大級の不覚だ……。穴があつたら入りたいとはこの事か……」

この時の出来事が箒にとって間違いなく黒歴史となったのは言うまでもない。

第20話 私の父は『白い狼』

6月初頭の日曜日。

私こと仲森佳織は久し振りに一日限定で実家へと帰省していた。ウチは簡単に言えば、中流家庭だ。

極端な金持ちではないし、かと言って貧乏でもない。至って普通な一般家庭……のつもりだ。

そう言えば、私の家族についてまだ話して無かったっけ。

家族構成は父と母と私の三人。

前にも言ったかもしれないが、私は一人っ子なのだ。

だからだろうか、一夏と千冬さん、箒と束さんと言った姉妹を見てみると、時々羨ましくなる。

父の名前は『仲森信（しん）』

これを聞いたある特定の人種（ガンダムマニア）は、この作品の展開からして、種運命の不遇主人公が父親か!?なんて思ったかもしれない。

でも残念でした！私のお父さんはイケメンと言うよりは、お髭が素敵なナイスガイなんです！

なんでも、父さんは婿養子らしく、結婚してから名字が変わったんだとか。

前の名字は確か、松永だった筈。

あれ？松永…？

なんだろう…どこかで聞き覚えがあるような気が……。

そんな父さんは今、どこかの学校で教師のような事をしていらっしゃるらしい。

らしいと言うのは、私も詳しい事は知らないから。

親子とは言え、深く追求するのはよくないって思うから。

母の名は『仲森ゆかり』

私と同じ茶髪がよく似合う女性で、かなりの若作り。

ぶっちゃけ、母さんと一緒に街とかを歩いていると、よく姉妹に間違われる。

絶対に私の茶髪ってこの人譲りだ。

昔は弓道をしていたらしく、今でも時々弓道教室に通っている。アバウトなようでしたっけ。私とはとても気が合う人だ。

そんな私たち家族が住んでいる家は、織斑家から家を二軒離れた場所に位置している。

大きさは……そこそこかな？

新築だから、結構綺麗ではあるけど。

因みに、今日は一夏も途中まで一緒だった。

なんでも、彼女も久し振りに家に帰って、暫く放置しておいた家の掃除とかをしてみたいらしい。

生真面目と言うか、なんて言うか…。

そんな懐かしの家の前に立つと、不思議な懐かしさがある。

まだIS学園に入って数か月しか経過していないのにな。

さて、それじゃあ入りますか！

・
・
・
・
・

「ただいま〜！」

久し振りとは言え、いや、久し振りだからこそ挨拶は忘れずに。

「ん？」

ふと足元を見ると、玄関には見慣れない靴があった。

父さんの靴と見比べても凄く大きい。

「誰だろう？」

お客さんかな？

「あ！佳織〜！おかえり〜」

「ただいま、お母さん」

いつものような笑顔で出迎えてくれたお母さん。
変に気を使わないでくれて嬉しい。

「佳織がIS学園に入ってから一か月以上経つて言うのに、思ったよりも懐かしく感じないもんね」

「そう？ 私は懐かしさを感じたけど」

「それはきつと、アンタが帰って来たからよ。私達はずっとこの家にいるんですもの」

「そう言うもんかな？」

個人の感性はそれぞれだしね。

「ところで、お客さん？」

「ええ。お父さんの昔の知り合いなんだって」

「へえ〜…」

お父さんの昔馴染み…か。

どんな人だろう？ 興味あるな…。

「取り敢えず部屋に荷物置いて来たら？」

「うん。そうする」

母さんに言われて、私は自分の部屋に荷物を置いて、ついでに着替えてくることにした。

今はまだ制服だしね。

私の部屋はとても綺麗で、いつもお母さんが掃除してくれているのがよく分かった。

後で『ありがとう』って言おう。

・
・
・
・
・
・

私服に着替えてからリビングに行くと、そこではお父さんがソ

フアーに座って対面越しに誰かと楽しそうに話していた。

「がつはつはつ！そんな事もあったな！」

「はい。懐かしいものです」

あのお父さんが楽しそうに話している…。

って、あの姿はどこかで見た事があるような気が…。

「おお！佳織か！おかえり！」

「う…うん。ただいま、お父さん」

今日は妙にテンションが高いな…。

「んん!?この子は…」

「私の娘の佳織です」

「そうかそうか！大きくなったなあ〜…」

そう言ってこつちを向いたお客さん。

そ…その顔は…まさか…！

「お…お父さん…この人は…」

「ん？もしかして、覚えはないのか？」

「はい？」

覚えて…はいく？

こんなな体が大きくて、顎の辺りに傷跡がある人なんて、そうそう
忘れないと思うけど…。

「この方はお父さんが昔大変お世話になった人で、『ドズル・ザビ』中
将だ」

『『元・中将』だ。俺はもうお前と同じ退役軍人だぞ？』

「そうでしたな。どうも昔の癖が抜けなくて…」

「ははは！なあ〜くに、気にするな！俺もよくある！」

ド…ド…ド…ド…ドズル・ザビですとおく!?

ドズルって、あのザビ家のドズルさん!?

ギレン・ザビの弟のドズルさん!?

マジで!?!なんでそんな人がここに!?!

って言うか、この世界に実在してたんかい!?

なんでやねん!!!

しかも、なんかさつき気になる単語が飛び出たような…。

「た…退役軍人って…?」

「おや? もしや信。娘さんには何も言っていないのか?」

「そう言えば言ってますんでしたな。別に隠すような事でもないの
で、聞いてくれれば遠慮無く話したんだが…」

「なんで聞こうとしなかつたんだよ! 昔の私!!」

「父さんは昔軍人をしていてな。この人はその時の上官だったんだ」

「ドズル・ザビが上官で、軍人で…父さんの旧姓は松永…」

「松永信↓マツナガ・シン↓シン・マツナガ」

「シン・マツナガ!」

あの『白狼』の異名で知られたジオンのエースパイロットの!?

「軍を辞めた私は、その時の伝手で今は士官学校の教官をしているん
だ」

「因みに俺が校長だ!」

「士官学校の教官…」

確かに『学校』ではあるな…。

そこの教官ならば半分教師みたいなもん…か?

私は詳しくないからよくは知らんけど。

つか、私のお父さんって滅茶苦茶有名で凄い人じゃん…。

なんで今まで分からなかったんだよ…!

馬鹿か私は!?

「しかし、本当に覚えていないのか?」

「何を?」

「ドズル中将…じゃなくて、ドズルさんはお前が幼い頃に何回か
会っているんだぞ」

「ええっ!」

「ヤバい…全っ然記憶にない…」

「その頃の写真がどこかにあった筈だ。どこだったかな?」

「これかしら?」

ニコニコ顔で母さんがリビングに入ってきた。

その手には本のような物が握られている。

「それって…」

「昔のアルバムか。懐かしいな」

テーブルにアルバムを置いて、中を開く。

そこには沢山の写真が貼り付けられていた。

「ほら、これだ」

「え？」

お父さんが指差した場所には、幼い私が見知らぬ女の子と一緒にドズルさんの肩の上に乗っている写真があった。

「覚えていないのも無理はない。あの頃はまだ2〜3歳ぐらいだったしな」

そんな昔の事だったのか…。

「あの……この女の子は……」

「この子は俺の娘のミネバだ。丁度、今年でお嬢ちゃんと同い年になるか」

「ミネバ……」

ミネバって…あのミネバだよな？

劇中でのドズル・ザビの忘れ形見で、ユニコーンではバナージとリア充してた子。

「佳織とミネバちゃんは、幼馴染になるのかしら？」

「そうかもしれない！」

一夏……箒……鈴……。

私達の知らない所で、いつの間にか幼馴染が増えてたみたいですよ…。

しかも、私的にはミネバこそが真正正銘のファースト幼馴染じゃないか！

ついさつきまで顔はおろか、存在すら知らなかったのに！

なんか、めっちゃや申し訳ないんですけど！

「いつか機会があったら、こっちに連れてこよう。あいつもきつと喜ぶに違いない！」

私としても、一度ちゃんと会って話をした方がいいとは思いますが、会ったら会ったで罪悪感で胃がどうにかなりそう…。

「そうだ！お嬢ちゃんの噂は聞いてるぞ！」

「噂？」

「この流れは……まさか……」

「IS学園の『赤い彗星』。IS業界や軍関係者の中では相当な有名人になつてゐるぞ」

「そ……そうですか……」

「またこのネタかよ!!」

家でくらしい『赤い彗星』の事は忘れさせてくれませんかねえ!?

「これで佳織の将来は安泰ね」

「うむ。卒業後は各企業や各国からスカウトされるかもな」

「今から将来が楽しみだな!」

スカウト……か。

もしそうなれば、少しは親孝行出来るかな…。

♪

「おや?」

私の携帯に着信が来た。誰からだろう?

そう思つて画面を見てみると……

「一夏だ」

どうしたのかしらん?

携帯を持つて廊下に出て、そこで通話に出た。

「もしもし?」

『あ、佳織?今大丈夫?』

「うん。問題無いよ」

『よかつた。ついさつき家の掃除が終わつて、お腹が空いちやつたから、昼食ついでに弾の家に行こうと思つてさ、一緒に行かない?』

「弾の家か……」

原作同様に食堂を営んでいるんだよね。

あそこの御飯つて美味しいんだよね♡

『あ……でも、折角の家族団欒を邪魔しちや悪いかな?』

「大丈夫だよ。今、こっちはお父さんのお客さんが来てるから」

想像以上に超大物だけど。

「それに、今日は泊まつていつて、明日の早朝に学園には戻るつもりだ

から」

『そうなんだ。じゃあ、家の前で待ってるから』

「分かった。すぐ行くね」

はい、ポチツとな。

んじや、早速両親に許可を取りますかね。

まずはリビングに戻ってつと。

「さつき一夏から電話があつて、今から弾の家に行かないかって誘われた」

「行くの？」

「そのつもり」

「じゃあ、ご飯は向こうで食べてくる？」

「うん」

「分かったわ。気を付けて行ってらっしゃい」

「いってきます」

さて…と、部屋に戻って軽く準備をして…

「待ちなさい、佳織」

「お父さん？」

いきなりどうした？

「別に遊びに行くのは構わない。だがな……」

な…なんだ…この迫力は……

「男女交際は私の目が黒いうちは絶対に認めんからな!!」

「いきなり何を言ってるんですかね!この人は!!」

あの弾と男女交際？

いやいやいや…絶対に有り得ないから!

「確かに彼は誠実でいい少年だ。だが…」

あ、これは話が長くなるフラグだ。

「はっはっはっ!あの『白狼』も、娘の事となると形無しだな!」

完全に他人事だ…。

「しかし!同じ娘を持つ身として気持ちは分かる!」

分かるんかい。

「やはり、ミネバに相応しいのは今時のチャラチャラしたような奴

じやなくて、もっとこう…しっかりと将来のビジョンを見据えた…」
この人も同じ穴のムジナでした。

「この二人の事は放っておいて、さっさと行った方がいいわよ」
「だね……」

ここで足止めを食らうのは御免だ。

てなわけで、とつとと部屋に戻って準備をして、れつつらご〜！

・

・

・

・

・

「てな事があつてさ〜…」

「あはは……災難だったね」

「全くだよ…」

道中、一夏に愚痴を零しながら歩いてた。

「でも、そう言つて貰える相手がいるだけいいと思うよ？」

「一夏……」

……軽率だった。

一夏と千冬さんには……

「ゴメン……」

「あ！別に責めてるわけじゃないよ！ただ、普通にそう思っただけだから」

「うん……」

はあく…どうして私って奴は…。

少しだけ場の空気が重くなったところで、今回の目的地である『五反田食堂』に到着。

「ここに来るのも久し振りだね」

「全寮制である以上、頻繁には来れないから」
その通り。

生徒の安全を第一に考えている I S 学園は、外出の際にもちやんと『外出届』を寮長に提出しなくてはいけない規則になっている。

私達の場合は千冬さんだね。

「じゃ、入りますか」

一夏がいつものように食堂の扉を開ける。

「お邪魔します」

「らっしゃくせく…って!？」

店内は実にシツクな感じで、今時では珍しい。

けど、この感じが逆に私は好きだ。

食堂では弾が形だけの接客（お客さんが殆どいないから）をしていて、厨房では弾の祖父にして五反田家の対象とも言うべき存在である

『五反田蔵』さんが調理をしている。

「か…佳織に一夏!？」

「やっほ」

あ、ハモった。

「蔵さんも、お久し振りです」

「おう！二人とも久し振りだな！」

うくん…相変わらずワイルドな人だ。

これで既に 80 を超えているんだから凄い。

迫力だけなら、私のお父さんやドズルさんにも負けてない。

「と…取り敢えず二人とも入れ！」

「分かった」

またハモった。

何気に息ピツタリだな、私達。

「適当に座れよ。席なら空いてるから」

「は〜い」

これで三度目だ。

流石に凄い。

「こっちに来るなら来るって言えよな」

「あはは……てつきり一夏から連絡が行ってると思って」

「ビックリさせようと思って」

サプライズだったのか。

「「んん？」」

なんか二階からドタドタと聞こえてきたような……。

「この声って、もしかして佳織さん!？」

叫びながら降りてきたのは、弾の妹である蘭ちゃん。

今時風のチャライ弾とは違って、実に元気な女の子だ。

けど、今の恰好は……

「ひ……久し振り〜」

「ど……どうも……あつ!？」

自分の恰好に気が付いたか。

家だからラフな格好でいたい気持ちは分かるけど、タンクトップに

ショートパンツはやりすぎじゃ?

「ちよ……ちよつと待っててください!!」

またドタドタと二階に戻っていった。

「あの子も変わらないね〜」

「お前もな……」

「え?」

そりゃ、そう簡単には変わらないでしょ。

「はあ〜……」

ありやりや。実に盛大な溜息だこと。

(ホント、こっちの気持ちなんて全然気が付いてないんだろうな……)

今の状態じゃ、仮に佳織に告白しても、絶対に意味は伝わらないな……)

何か悩み事かな?

彼もお年頃だしね〜。

(プププ……弾、哀れな奴……♡実にワロス)

で、一夏は一夏で邪悪な笑みをしてるし。

二人はマジでどうした?

「お待たせしました!!」

あら、降りてきた。

「はあ……はあ……はあ……」

真っ白な半袖のワンピースにフリルのついた黒いニーソを履いて

いる。

さつきとは完全に真逆だ。

(負けませんからね……一夏さん!!)

(それはこっちのセリフだよ!!)

え?え?なんで二人は見つめ合ってるの?

火花が散ってるの?

「フフフフ……」

「……なんなの?」

「さあな……」

で、弾君は弾君で呆れた目でこっちを見てるし。

「弾。仕事はもういいから、嬢ちゃん達を二階に連れていけ」

「いいのか?」

「馬鹿野郎。折角遊びに来てくれた美少女二人を放置する気か?」

「爺ちゃんの口から美少女って言葉が出て来た……」

驚くところってそこ?

「昼頃になったらまた降りて来い。飯を用意しておいてやる」

「はくい」

意気揚々と来たのはいいけど、まだお昼には早いからね。

「じゃ、取り敢えず俺の部屋に行くか」

これもいつもの事だね。

「な…何言ってるのよ!お兄!女の子を二人も部屋に連れ込むなんて!」

「人間きの悪い事を言うな!!何もする気ねくよ!!」

「つて言うか、もししたら私がぶっ飛ばす」

一夏の目……本気だ……!

ゴゴゴゴ……って効果音も見えるし……。

「一夏さん。男は狼なんですよ。だから、私も一緒に行きます」

「いや来るなよ。唯でさえ狭い部屋がもっと狭くなっちまうだろうが」

「お兄に拒否権はありません」

「なんでだよ!?!」

「弾……」

相変わらず、五反田家でのヒエラルキーが一番下なんだね。
弾の立ち位置を哀れに感じながら、私達は二階に上がっていった。

第21話 思春期の少年の葛藤

いきなりウチに遊びに来た佳織と一夏を爺ちゃんに言われるがまま、俺は自分の部屋へと案内した。

なんでか妹の蘭も一緒についてきたけど…。

「だって、お兄が二人に何かしたら大変じゃない」

「どんだけ信用無いんだよ俺は!？」

「え……？」

「お願いします。いきなり真剣な顔にならないでください」

どうして俺だけこんな……。

「わ……変わらないね」

「変わってたまるか」

まだお前等がIS学園に入ってから数か月しか経ってねえんだぞ。

そう簡単に部屋のレイアウトが変わるかよ。

「あはは……ばたくん！」

「お……お前……ちよっ！」

「ん……何……？」

佳織の奴！なんでいきなり俺のベットにダイブするんだよ!?

幾らなんでも図々しくないか!?

「佳織ってば、はじめてるね」

「だって、家以外にリラックスできる場所って言えば、ここしかない

もん」

「あ……」

……そんなにあの学園は大変なのか？

何気に一夏の奴も納得気味な顔してるし……。

「つーか！とつとと降りろよ！」

「え……別にいいじゃん。減るもんじゃなし」

「(主に俺のSAN値が) 減るんだよ！」

「ぶ……ぶ……」

「あざとくしてもダメ」

「ちえっ。前はこれさえすればよかったのに」

「弾も成長してるんだよ……………多分」

「多分!？」

お：俺だって少しは大人になって……………あれ？

(冷静に考えたら、別に高校生になっても俺の生活に劇的な変化って無くね?)

いつものようにクラスの連中とばかやって、授業や勉強に追われて……………そして、家じゃ手伝いと称してのバイトに勤しんで……………

「俺って……………なんにも変わってねえ……………」

「あら。急に落ち込んだ」

「今日の弾は緩急が激しいね」

「全く……………お兄は……………」

で、仕舞には妹からは溜息を吐かれる始末。

「ところでお兄。折角来てくれた佳織さんと一夏さんにお茶は?」

「え?」

お……………お茶?

「はあく……………それぐらいの気遣いも出来ないから、いつまで経っても彼女が出来ないんだよ」

「余計なお世話じゃ!」

……………ここで兄の心を抉りに来るな!

「しようがない。私が持つてきてあげる。感謝してよね」

なんて言っではいるが、本当は……………

(ふふふ♡……………で『出来る女』アピールをして、佳織さんに見直して貰えば、あるいは……………)

なんて事を考えてるんだろうな。

だって、モロに顔に出てるもん。

伊達にこいつの兄をずっとしてきたわけじゃない。

ニヤニヤしながら、蘭は一旦部屋を出ていった。

「あの子も変わらないね」

「だね。確か、今は学校の生徒会長をしてるんだっけ?」

「へえ……………凄いな」

アイツを生徒会長に立候補した連中の頭を本気で心配する今日こ

の頃。

「そういや佳織。お前いつの間に、あんなにも有名になってるんだよ」
「う……」

あ、なんか不味い事を聞いたか？

「その情報のソースは…ネット？」

「まあな。動画の再生数とか凄い数になってるぞ」

「マジで？」

「マジで」

ほんの数日で100万再生突破してたしな。

久方振りに本気で驚いたわ。

「俺も動画見たけどよ、あれってどういうことだよ？」

「どういうって言われてもな……」

誤魔化すように頭を掻く佳織。

こいつがこんな風にする時は、大抵が本気で困っている時だ。

「……やめとくか」

「え？」

「だって、お前もこの話題が嫌なんだろう？」

「まあ……ね。学園じゃずっと騒がれるし……」

「じゃあ佳織って、あの事も知らないの？」

「あの事？」

なんだなんだ？

「実はね、学園で密かに佳織の非公式ファンクラブが設立したらしいって噂」

「ファンクラブとな!？」

それは…またなんとも……。

「と言うかさ……誰が最初に私の事を『赤い彗星』って呼び出したのかな〜？」

「さあ？少なくともオタク気質の人である事は間違いないと思う」

「俺もそう思うわ。完全に中二病全開の異名だしな」

「や〜め〜てえ〜!!」

っておい！悶絶するのは勝手だけど、俺のベットの所でゴロゴロす

るな！

唯でさえ薄着なのに！

大体な！佳織も一夏もスカートが短すぎるんだよ！

少しでも風が吹いたら中が見えそうじゃねえか！

お前等な、自分の姿を鏡で見た事あるのか!?

二人共、そこら辺の読者モデルが裸足で逃げ出すレベルの美少女なんだぞ！

スタイルも抜群だし！

正直言うと、お前達の私服って目のやり場にすつごい困るんだよ！

「どうしたの？急に黙って」

「なんでもない」

くそつ……！意識したら俺のムスコが急に元気になりやがった……！

耐えろ……耐えるんだ俺!!

静まれく!!!

「変な弾」

「いつもの事じゃない?」

言いたい放題言いやがって……!

「お……」

ち……沈静化してきた……。

やっと落ち着ける……

「あ、そーだ」

ぬ……ぬを!?

「久し振りに一緒に皆でゲームでもしようよ」

か……佳織が急に俺の背中に抱き着いてきやがった!?

「ちよ……佳織?」

「どったの?」

お……おっぱいが背中に当たつとります……!!

拝啓 父上様 母上様

海はどうして青いんだろう。

FFは一体何処までシリーズが続くんだろう。

スパイダーマンはマスクを付けている間って息苦しくないのかな

?

ストIIのリユウって普段はどんな生活をしてるんだ？

KOFの京はいつまで高校生をしてるつもりだ？

弾はもう佳織のおっぱい攻撃に耐えられそうにありません。

先立つ不孝をお許してください。

五反田弾。

「今度は動かなくなった」

「本当にどうしたの？具合でも悪い？」

今度は一夏が俺の隣に来て前屈みになりやがった。

胸の谷間が見えとります…。

このままいったらもう……俺は狼さんになっちゃうぞ？

「お茶持って来たよ……」

「げ」

よりにもよって、このタイミングで戻って来るのかよ!?

「何をやってるの……？お兄……」

マジ切れしとりますがな〜!

思ったよりも冷静みたいで、床に四人分の麦茶が乗ったお盆を床に

置いてから、こっちに来た。

「佳織さん、そんな風にしてると赤ちゃんが出来ちゃいますよ」

「「いやいやいやいや」」

んなわけあるか!

お前は俺をなんだと思ってるんだ!

・
・
・
・
・
・
・

少しして、ようやく佳織は俺から離れてくれた。

まだ背中に感触は残ってるけど…。

「危うく実の兄を警察に叩きだすところだった…」

「本当に危ねえな!」

問答無用かよ!?

「佳織。少しは慎みを持ってよ」

「十分持つてるつもりだけど?」

「普通、慎み深い女子は男の背中にいきなり抱きつきません」

「弾なら別にいいんじゃない? だって友達でしょ?」

完全に俺の事を異性として見てないな…。

多分、一夏も。

だって、二人ともミニスカートを履いて生足晒してるのに、全く動揺してないし。

「そ…:そういうや、一夏からメールで知らせて貰ったんだけどよ、鈴が転校してきたんだって?」

「うん。私達の隣のクラスだけどね」

いつの間にはと思ったが、今は大して気にしてない。

それよりも……

「これで、あの頃一緒にいたメンバーが揃ったな」

「そうだね。いつか皆一緒に遊びに行こうか?」

「それいいー!」

鈴もこの二人に負けず劣らずの美少女だしな。

中学時代はよく同級生に凄い目で見られたもんだ。

「鈴さんがこっちに……」

で、蘭はまた凄い顔になってる…つと。

こいつにとっては鈴も一夏も立派なライバルだしな。

俺が中学で一夏や佳織、鈴と知り合った頃に、俺を通じて三人は蘭とも仲良くなった。

最初は至って普通の関係だったが、佳織が蘭によく勉強を教えるようになってから、少しずつ懐くように。

そして、俺が佳織の学校での様子……主に生徒会副会長やクラス委

員を兼任して頑張っている事を話したら、あつという間に尊敬の眼差しに。

それがいつしか禁断の恋心に発展した……って訳だ。

こいつが生徒会長になろうとしたのも、佳織を完全に意識しての事らしい。

佳織も厄介な奴に背中を追いかけられてるな。

「IS学園って全寮制なんだろう？二人はどんな奴と一緒になんだ？」

「私は幼馴染の筈と一緒にだよ」

「ああ……前に話してた剣道が得意って言う……」

その子もかなりの美少女らしく、当然のように佳織LOVEみたいだ。

しかも巨乳。

「佳織は？」

「私は、クラスメイトの布仏本音ちゃんって女の子と一緒に。ほら、この子だよ」

そう言つて携帯の写真をごつちに見せてくれた。

「へえ……」

背は佳織同じか少し小さいぐらいか？

この子もかなりの美少女だ。

けど、それよりも気になるのは……

「なんで抱き着いてるんだ（ですか）？」

写真の中で、佳織はルームメイトの女の子と仲良さげに抱き合っているのだ。

ぶつちやけ、すげー絵になる。

「だって可愛いんだもん」

気持ちちは分かるが……それは腐った女子共や一部の女子にやる気を起こさせるだけだぞ。

現にほら……

「い……いつの間にかこんな写真を……！」

「IS学園……噂には聞いてたけど、まさか本当に（女の子の）レベルが高いだなんて……！」

一人は戦慄して、もう一人は驚愕してる。

「……私……決めました」

「何を？」

なんだろう……猛烈に嫌な予感が……

「来年……IS学園を受験します！」

「はあく!?」

って、驚いてるの俺だけかよ!?

「え?でも……蘭ちゃんの今通っている学校って、大学までエレベーター方式で行けて、その上、かなりのネームバリューがある所じゃないの?」

「問題ありません。別に他の学校を受験してはいけないうって規則はありませんし」

「まあ……そうだよね」

なんとなく予想はしていたとはいえ、実際に言われるとこう……何とも言えなくなるな。

「言つとくけどな、IS学園には推薦なんて無いからな?佳織も一夏も猛勉強の末に入学できたんだ」

「分かってるわよ。でも、私はその佳織さんに勉強を教えて貰ったのよ?筆記ぐらい余裕よ」

一体何処からその自信が出てくるんだ…。

なんとかして蘭を諦めさせるには……そうだ!

「い……一夏!あそこって確か、実技試験もあったよな!」

「うん。適性が無い子はそこで振り落とされるって姉さんが言ってた」

よし!あの千冬さんの言葉なら信用出来る!

「残念でした。これを見て」

「これ?」

徐にポケットから一枚の紙を取り出した蘭。

そこに書いてあったのは……

「IS簡易適性検査結果……判定A」

な……なんだと……!?

「へえ……Aランクなんて凄いね!」

「大抵はBかCなのに……」

ま……まさか……俺の作戦が裏目に出るなんて……!

「そんな訳で、そっちの方も問題無しです」

希望は絶たれた……のか?

「これって希望者が受けられるやつだよね? 確か、政府がISの操縦者を募集する一環として定期的に開催してるって言う」

「はい。実は少し前にうちの学校で行われたんです」

「そんな……」

そんなの聞いてねえよ!?

「そ……それですね。入学した暁には是非とも佳織さんにご指導ご鞭撻のほどを……」

どこでそんな言葉を覚えたんだよ……。

「いやいやいや! 私なんてまだまだだ……! つーか、私だって現在進行形で勉強中だし……」

「え? そうなんですか? あんなに強いから、てつきり……」

「ISの試合で勝ってるからって、勉強が出来てるって訳じゃないよ。一応、基本5教科は大丈夫だけど、IS関連の勉強となると話は別。本当に難しいんだよ。専門用語のオンパレードだし」

「うんうん。私も受験勉強の時は苦労したよ。佳織と一緒に姉さんに色々教えて貰ったしね。あれが無かったら、かなり苦戦してただろうなあ……」

こいつ等って結構成績はいい方だったよな?

それでも苦戦するって……。どれだけ学業のレベルが高いんだよ、IS学園。

「まあ、その時は私の友達を紹介するよ」

「友達?」

「私ね、代表候補生の友達が出来たんだ。今も何回か勉強を教わってるんだよ」

多分、その子も佳織に恋心を抱いてるんだろうな……。

「か……佳織さんがそう言うなら……」

蘭も妥協したし。

ホント、佳織の前じゃ借りてきた猫だよな。

「もう説得は無理そうだな……」

「そもそも、最初から弾に勝ち目ってあったの？」

「しれっと酷い事言わないでくれませんか？一夏さんや」

俺の心はもうボドボドだ〜！

完全にアウエーな空気になった時、部屋の扉がコンコンとノックされた。

『入るわよ〜？』

この声は……母さんか？

声だけかけて入って来たのは、我が母の五反田蓮。

自分で言うのもなんだが、相当な美人。

佳織のお母さんにも負けてねえ。

一応、自称『看板娘』

母さんに年齢の事を聞いて生き延びた奴はいない。

「佳織ちゃんに一夏ちゃん。いらっしやい」

「おじやましてま〜す」

なんでこうも息ピッタリなんだろうな……この二人って。

「今、御飯が出来たから、下に降りてきなさいな」

「もうそんな時間か？」

携帯を見てみると、時計は11時58分を示していた。

「時間が過ぎるのは早いね」

「楽しい時間はあっという間に過ぎるって本当だね」

それって、少なくとも俺と一緒にいる事を『楽しい』って思ってたたって事か…。

「……………」

おい母さんや。

一体何処を見てるか。

「佳織ちゃんか一夏ちゃんのどっちかがウチに来てくれれば、この店も安泰なんだけど……」

「??？」

こいつら……絶対に意味分かってないな…。

「蘭もそう思うわよね？」

「うん!!」

力強い頷きだこと。

「お腹空いたし、早く行こうよ」

「賛成」

さてと、今日の昼飯はなにかなく？

けど、佳織がウチに来るって、つまりはそういう事だよな…？

例え低くても、可能性はあるって思っているんだよな？

・
・
・
・
・
・

その日の夕食。仲森家。

「てな事があったよ」

楽しそうに話す佳織とは裏腹に、両親二人は…

「流石は蓮さん…もう先手を打ってきたか…!」

(この人はこの人だし、佳織も絶対意味を理解してないわね…)

親バカな夫と鈍感な娘に呆れるゆかりだった。

第22話 金と銀の転入生

月曜日の朝。

目が覚めると、そこはもう見慣れたIS学園の敷地内に存在する学生寮の私と本音ちゃんの部屋。

けど、今日からは少しだけ部屋の様子が違う。

何故なら……

「ふわあ〜……。やつぱり、色々があると落ち着くなあ〜……」

私と本音ちゃんが実家から持って来た私物が並べてあるからだ。

本音ちゃんは家から様々なぬいぐるみを持って来たみたいで、色々な動物のぬいぐるみが棚などに置いてある。

犬や猫などと言ったオーソドックスな物もあれば、鱈や鯨と言った、なんとも言えないような物もある。

「ただ好きなんだよ……」

で、私が持って来たのは勿論、各種ゲーム機に家にある好きなソフト一式。

そして、好きなラノベや漫画等々。

兎に角、二人揃って趣味全開の部屋に仕上がった。

「さて……と。今日も一日頑張りますか」

先立ってまず行う事は……

「本音ちゃん。朝だよ〜」

「ん〜……?」

私の可愛い同居人を起床させることだ。

・
・
・
・
・
・
・

最早お馴染みのように、私と本音ちゃんは、途中で合流した一夏と
箒とセシリアと鈴の四人と一緒に食堂へと足を運ぶ。

すると、なにやらいつもとは違って食堂が騒がしかった。

「朝から元気ですこと」

「若者の特権だね」

「佳織……ちよつと爺臭いわよ」

「時々、佳織は顔に似合わない事を言うよな」

早速ボコボコです…。

私は普通の事を言っただけなのに…。

「あそこなんて、なんだか変な集団になってるよ」

「ホントだ」

本音ちゃんが指差した所には、十数人ぐらいの女子がスクラムを組
んでいた。

今から何かあるのか？

「ねえ……聞いた？アレ……」

「ぼつちし聞いたし！」

「え……？何の話？」

「だくかくらく！例の仲森さんの話よ！」

「あく……あの『赤い彗星』の」

「いい話？それとも悪い話？」

「極上にいい話！」

「ふむ……是非とも聞こうか」

「なにカッコつけてんのよ……」

「それって、試合中の仲森さんの真似？」

「う……。だって、IS装備してる時の仲森さんって、すつごくカッコ
いいんだもん……」

「わかる〜！」

「っていうか、話が先に進まないから」

「ゴメン……」

「で？実際にどんな話な訳？」

「それがね、なんでも……今度ある学年別トーナメントで……」

うくん……喧騒に紛れてよく聞こえない。

流石に、入り口付近からじゃ難しいか。

「う……嘘でしょ!? それマジ!?」

「マジもマジも大マジよー!」

「そっか……」

……深く気にしたら負けな気がしてきた。

「まずは朝ご飯を食べようか……」

「賛成ですわ」

「うん……」

私も今は立派な女子だけど、未だに女子高生特有の空気には慣れそうにない。

なんつーか……独特すぎるんだよね。

そんな私の朝ごはんは『トーストセット』。

今日はなんとなくパンな気分なのです。

他の皆も朝食を注文してから受け取る。

そして、適当に空いている席に座るが、その直後に視線がこっちに集中した。

「あー仲森さんだー!」

「え? どこどこ!?」

私は街中であつた芸能人か。

「もはや、この学園内にて『赤い彗星』の名を知らない者はいないようですわね」

「凄いな〜」

「名誉な事なのか、それとも恥ずべきことなのか……それが問題だ」

「今度は哲学者っぽい事を言い出したし」

別にいいじゃん。

……って……箒? 妙に元気が無いような……。

(今、学園中に流れている噂……なんだか、あの夜に私が一人で口走ってしまった事に似ている気がする……。ま……まさか! あの時……私の他に誰かがいて、私の独り言を聞いていたのか!?) そして、それを学園中

に広めて…それが途中で変化して今に至っているのでは……)

さつきからずつと百面相してるし。

ちよつと面白い。

(ヤバイヤバイヤバイ！幾らなんでも、ライバルが一気に増殖しすぎだ!!)

今度は焦りだしたし。

なんとも新鮮な反応を見た気がする。

「ねえねえ仲森さん！あの噂ってほんっ……ぎゃぴいつ!？」

あ、一瞬で制圧された。

「あ…はははははは！別になんでもないから！気にしないで朝ご飯を食べててね〜！」

集団はそそくさと食堂の端の方に。

「あんなバカじゃないの!?!?っていうか、リアルバカ!!」

「ゴメ〜ン。つい口が滑って…」

「あの噂は本人にだけは内緒だつて、暗黙のルールがあつたでしょ!? もう忘れたの!?!？」

「うう〜…」

「けど、あの様子からして、仲森さん自身は何も知らないっポイね」

「それなら一安心……なのかな?」

ほんと、月曜の朝っぱらから元気が有り余ってますなあ。

「なんだつたのかしら?」

「さあ?」

どうやら、ここにいる面々も何も知らないみたい。

だつたら、聞いても無駄か。

「そういや、日曜に一夏と佳織つて弾の家に行ったんでしょ? あいつ元気にしてた?」

「元氣と言うか…なんと言うか……」

「変わってない?」

「は? どーゆーこと?」

「昔のまんまだつてこと」

「ああ〜…」

これで納得出来るんだから凄い。

「ねえ…弾って誰…?」

「簡単に言えば、私と一夏と鈴の共通の友人」

「中学の時に一緒のクラスだったのよ」

今は違う高校になってるけど、未だに繋がりは切れてない事に感動してたりする。

友情って尊い…って、男の子の話をセシリアの前でするのはヤバかったかな?

「?どうしましたの?」

あ…あれ?なんにも変化なし?

「あの…さ。今の話で何か思った事は…」

「特には何も。佳織さん達のご友人の方なのでしょう?名前の響きからして男性のようですが」

え…ええ?ど…どうして?

原作のようになってないから、セシリアは女尊男否的な思考のままじゃ…。

(ま…まさか!?)

今にして思えば、最初の会話の時も…それっぽい発言を一切してない!

この世界線のセシリアは最初っから男に対して否定的な考えを持ってない!?

「佳織?手が止まってるよ?」

「え?あ…そうだね」

今更、こんな変化を発見するなんて…。

(この分じゃ、後でやって来る二人もどう変化してるか分からないな…)

だって、一夏が女性である時点で男装の必要性は無いし、一夏がモンドグロツソに行っていないから、誘拐はされてない。

マジで先が読めません…。

「そうそう。その時にさ、蘭ちゃんがいきなり『IS学園に行く!』って言いだして、弾がめっちゃ困ってた」

「へえ〜…あの子が。絶対に佳織がいるからでしょ」
「間違いないよ」

え？…なんでそこで私の名前が登場するの？

「蘭ってば、頭はいいから大丈夫なんじゃないの？」

「簡易適性でAを出してたし」

「うわあ〜…それってなんか、マジで来年には来そうじゃない？」

蘭ちゃんならあり得るかも。

何気にIS学園の制服も似合いそうだし。

「なんか…三人だけで盛り上がってますわね…」

「だな…。完全に置いてきぼりだ」

「もぐもぐ…」

．
．
．
．
．
．

朝食を食べ終えてから教室に向かうと、クラスの皆がワイワイと何かを話していた。

「やっぱ、ハツキ社のやつが一番かな〜」

「そう？なんかハツキのって、デザインだけって気がするけど」

「それがいいんじゃない！」

「私的にはミューレイのが一番かな？特にスムーズモデルが」

「あれか〜…。確かに性能は悪くないけど、いかんせん値段がね〜」

ふむふむ…どうやら皆はISスーツの事について話しているみたいだ。

「皆、おはよ〜」

「おはよ〜！って、丁度良かった！仲森さんの、あの赤いISスーツってどこ製の？かなりカッコよかったけど」

「あ〜…あれね〜…」

寧ろ知りたいのはこつちなんだよな〜。

あれってリヴァイヴⅡの中にあつたヤツだし。

「た…多分、デュノア社製じゃない…：…かな？知らないけど」

「そつかく。あそこも悪くないもんね〜」

「でも、エンブレムまで入っている特注製って凄いやね。やっぱ赤い彗星だから？」

「それは関係ないでしょ」

あつたらこつちが驚くわ。

「赤いISスーツ…：…。青いISスーツを愛用している私と佳織さんが並べば、きつといいアクセントになりますわね！」

「赤と青だもんね〜」

色的にはそうかもね。

ここに黄色でも来ればもつと完璧。

「ISスーツは肌表面の微弱な電位差を検知する事により、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達し、ISはそれによって必要とされる動きをします。更に、このスーツは耐久性にも優れていて、一般的な小口径拳銃の銃弾ぐらいなら余裕で受け止められます。でも、流石に衝撃を完全に消す事は出来ませんから、そこには注意が必要です
ね」

おお〜！山田先生が教室に入りながらスラスラと説明をしてください〜！

思わずパチパチパチ〜と拍手をしてしまった。

「流石は山ちゃん！」

「それほどでも〜…：…って、山ちゃんっ!？」

いつの間に渾名が…：…。

それだけ親しみやすいって事かな？

「山ピー見直したよ〜！」

「今度は山ピー!？」

二つ目だ…：…。

生徒に二つも渾名を与えられる先生つても貴重な存在だな…。

「と……とにかく！今日が皆さんのISSスーツの申込み開始日になります。忘れないでくださいね！」

「「「は〜い！」」」

本当に分かってるのかな…？

「山田先生。ドンマイです」

「仲森さあくん…」

泣きそうな顔でこっちを見ないでください。

保護欲が刺激されると言うか…。

妙に頭を撫でたくなる。

「あのさ……皆。渾名で呼ぶのも悪くは無いけど、こうして学校にいる時はちゃんと『山田先生』って呼んであげようよ。ね？」

一応、フォロワーぐらいはしておくか。

私だってクラス代表なんだし。

「う〜ん……仲森さんがそう言うなら…」

「確かに、公私の区別はつけなくちゃ駄目だよね…」

あー、意外と素直。

「ありがとうございますう〜…」

「あはは………」

本当にこの人って大人なんだよね？

私達と一緒に制服を着て並んでも違和感無いんですけど？

「とうとう教師にまでフラグが立ち始めたよ…」

「かおりん……恐ろしい子！」

「油断も隙もあったものじゃありませんわね…」

なんでそこで呆れた目で見られるの!?

「おはよう、諸君」

「「「おはようございます！」」」

さっきまでのほのぼのとした空気が一瞬で因果地平の彼方へ。

織斑先生のおなくり〜。

一気に教室中が引き締まる。

同時に、一斉に自分の席へと一直線。

「日直」

「起立！礼！着席！」

いつもこの調子ならどれだけいいか。

「本日から本格的な実技訓練に入る。訓練機ではあるが、きちんとしたISを使用する授業になる為、各々気を引き締めるように。それぞれのISスーツが届くまでは学校指定の物を使うので忘れないように。あと、万が一にでも忘れた場合は学校指定の水着で訓練を受けて貰うからな。それすらも忘れた場合は……最悪下着でもいいだろう。ここには同性しかいないのだからな。と言う訳で佳織はドンドン忘れていいからな」

「なんでやねん」

最後に私の事を名指しで呼ばないでください。

それと、私は絶対にISスーツは忘れないから！

っていうか、忘れてたまるか!!

何が悲しくて下着でISに乗らなくちゃいけないねん！

そういや、ここの指定水着ってオタクにとつての黄金聖衣とも言うべき由緒正しい紺色のスク水なんだよね…。

いつの日か、あれを着る日が来るのだろうか…。

布面積的にはISスーツと大差ないけど。

「では山田先生。お願いします」

「あ……はい」

山田先生にバトンタッチ。

「えつとですね……実は、今日はこのクラスに転校生が来ます！しかも二名です！」

「「「ええええええく!?」「」」」

来たか……。

一体どんな風に変化しているのやら。

「ねえ……ちよつとおかしくない？同じ時期に転校生が二人も来たらさ、普通は別々のクラスに分散させるんじゃない？」

隣の一夏がひそひそ声で常識的な意見を言ってきた。

「私もそれには同感だけど、多分、生徒には知らされないような事情があるんだよ。きつと」

「なんか嫌だね……」

一夏が嫌悪感を抱く気持ちは分かる。

でも、世の中には汚い大人がいるのもまた事実なんだよ。

悲しいけどね。

「では、入ってきてください」

「失礼します」

教室のドアが開き、廊下から二つの人影が入ってくる。

片方は金髪、もう片方は銀髪だった。

表情、髪の色共に対照的な二人だ。

けど、それよりも気になったのは……

(やっぱり、ちゃんと女子の制服を着てるんだな……)

それもそっか。

男子の制服を着る理由が無いもんな。

「それじゃあ、自己紹介をお願いします」

「分かりました。なら僕から」

山田先生に促されて、金髪少女が一步前に出た。

「皆さん初めまして。フランスから来たシャルロット・デュノアと言

います。一応、フランスの代表候補生を務めると共に、デュノア社の

専属IS操縦者をしています」

二つを兼任してるのか……

「この度は、二つの理由でIS学園に来ました。一つは僕自身の研鑽

の為。もう一つはデュノア社からの出向で来ました」

デュノア社からの出向……?

「デュノア社って事は、もしかして仲森さんと関係あるのかな?」

「そうなります。詳しい事はここでは話せませんが……」

私がリヴァイヴIIを専用機としているからか……

成る程、シャルロットは私の機体の為に来た……と。

それを隠す様子が無いって事は、今回は会社から正式な仕事として

来日したのね。

見る感じ、何も企んでいるようには見えない。

「これからよろしくお願いします」

クラスからの拍手が鳴り響き、それと同時にシャルロットは一步下がった。

「では、次は私か」

今度は銀髪少女が前に出る。

「私はドイツから来たラウラ・ボーデヴィツヒだ。ドイツの代表候補生をしている」

おや、思ったよりも話すね。

原作じゃ名前だけ言って引っ込んだのに。

「今回、このIS学園にはある目的を持って来た」

目的？

「ん？」

あ、なんかこつち来た。と思つたら、隣に行つた。

「お前が織斑一夏か？」

「そ…そうだけど？」

「そうか……」

ビ…ビンタか!? つて、それだけ？

なんにもしないの？

「織斑教官。仲森佳織と言うのはどこにいますか？」

「仲森ならばお前の左斜め前にいる。それと、ここでは私の事は織斑先生と呼べ。私はもう教官ではないし、今のお前はここの一生徒にすぎん」

「了解です」

見事な敬礼ですこと。

つーか、お前も私が目的かい！

一夏の事を逆恨みしていないのはよく分かったけど、だったらなんで日本に来たの？

「……………」

やべ、目線があつた。

こ…こつちに来るよ!?

「お前が『赤い彗星』の仲森佳織か」

「い…一応そうです…」

その異名はドイツにまで知れ渡っているんだ…。

もう、この事に関するツツコみは諦めたほうがいいかもしれない。

「単刀直入に言う。私はお前をスカウトしに来た。私と一緒にドイツに来て、我が隊に入ってくれないか？」

「……………ひゃい？」

あ、驚きのあまり噛んじゃった。

「今……………なんて？」

「聞こえなかったのか？もう一度言うぞ。私と一緒にドイツに来て、我が隊に入ってほしい」

うん、聞き間違いじゃなかったっぽい。

どうしようか。

「……………ええ……………!?……………」

皆は驚いてるけど、私は一言だけ言わせてもらおうよ。

「なんでやねん!!!」

今日だけで何回言ったか分からないツツコみは、騒がしい教室に響いた。

第23話 実習も楽しやない

ラウラのいきなりの衝撃発言で朝のホームルームはなし崩し的に終了。

千冬さんの号令で授業の準備をし始める私達。

なんでも、今日の授業は二組との合同で行うようで、内容はISの模擬戦闘らしい。

ああ…山田先生が大活躍するアレね。

実はちよつぷり楽しみだったたり。

あの『ほんわか』とした山田先生の隠れた実力が見られると思うと、少しだけワクワクする。

教室で皆揃ってISスーツに着替えているが、案の定と言うかなんというか、転校生の二人は皆に質問攻めにあっていた。

シャルロットは元々から社交的な性格をしているお蔭で、皆の質問にも難なく答えている。

意外だったのが、ラウラが想像以上に皆に溶け込んでいる事。

あの原作での唯我独尊オーラはどこに行ったのか。

少し戸惑いながらも、皆とちゃんと会話をしている。

その内容の殆どが、さっきのスカウト発言についてだけど。

「さっきは本当にびっくりしたね」

「うん…。まさか、開口一番にあんな事を言われるとは思わなかった…」

自分の知識がもう通用しない事は重々承知してはいたが、まさかここまでバタフライエフェクトが起きているなんて、誰が想像するだろうか。

「聞くだけ野暮だとは思うけど、ドイツに行くつもりは…」

「無い無い！まだまだ日本でやりたい事が一杯あるもん！」

つーか、ドイツになんて行ったら…私の数少ない楽しみの一つである『アキバ散策』が出来ないじゃないか！

長期の休み（主に夏休みや冬休み）の時にいっつも欠かさずに行う、私にとって最も大事な行事。

勿論、夏コミ&冬コミも行きます。

「それを聞いて安心したよ。万が一って事があるからさ……」

「大丈夫だって。少なくとも、皆に黙ってどこかに行くような事は絶対にしないから」

なくんて言ってるよ、これがまた嫌なフラグになったりするんだよね。

……ならないよね!?なりませんよね!?

お願いだからそうだと言って作者様!

「ふう〜……日本の学校って凄いな……」

いつの間にかISスーツに着替えて、汗を拭いながらこっちに来たのは、件の転校生の一人『シャルロット・デュノア』

本来ならば悲劇のヒロインな彼女だが、今回は全くそんな気配を漂わせない。

「え〜つと……君が仲森佳織さん?」

「そう……だけど……」

「そっか。よろしくね。僕の事は気軽に『シャルロット』って呼んでくれていいから」

「了解。これからはそう呼ぶことにするよ。私の事も『佳織』って呼んでくれていいから」

「分かったよ。これからよろしく、佳織」

うくん……笑顔が眩しいですな。

まさに正統派美少女って感じ。

でも、今回のシャルロットってデフォで僕っ娘なんだな。

個性的で悪くは無いけど。

「そう言えばさっき、デュノア社の出向で来たって言ってたけど、それって……」

「うん。君の機体『ラファール・リヴァイヴⅡ』についてだよ。今は時間が無いから詳しくは話せないけど……」

そーいやそーうだ。

早く着替えないと、千冬さんの出席簿が脳天に直撃する!

なんでか私は未だに一撃も貰ってないけど、

「今日の放課後って時間あるかな？」

「放課後……」

私の放課後は基本的にアリーナでISの訓練か、アリーナが使えない時はトレーニングルームで基礎トレをするぐらい。

勉強は夜する派だから。

「多分、大丈夫だと思う」

「よかった！佳織の専用機の事の話があるから、放課後に僕と一緒に格納庫まで行ってくれないかな？」

「格納庫か……。うん、別にいいよ」

一体何の話かな？

全く想像が出来ないぞんす。

「む……」

で、そこでむくれている一夏さんはどうしたのよ？

「あ……あれ？なんか僕……睨まれてる？」

「あはは……あまり気にしないで」

「そ……そう？」

そうそう。気にしたら負けだよ、シャルロット。

なくんて話してたら、本格的に時間が迫って来たので、急いで着替えてグラウンドに直行した私達であった。

余談ではあるけど、シャルロットが女子として来たお蔭で、原作のように移動中に女子の集団に道を塞がれる事は無かった。

もしも塞がれてたら、完全に遅刻だった……。

・

・

・

・

・

「全員集まったな？では、本日より格闘及び射撃を含んだ実践訓練を

開始する！」

「「「はい!!」」」」

なんとか遅刻せずにグラウンドに集合した私達。

千冬さんの言葉に力強く挨拶する。

「早速ではあるが、今日の授業はまず、目の前で戦闘の実演を行ってもらう。そうだな……」

列をじくつと眺める千冬さん。

でも、私の予想が正しければ、今回戦わされるのは……

「よし。凰にオルコット。二人とも前に出ろ」

「「はい！」」

だよね。

うん、なんとなく分かってました。

「つて、なんでアタシ?」

「デモンストレーションをするのは大いに結構なのですけど、余りモチベーションは上がりませんわね……」

あくまで授業の一環だしね。

「はあ……仕方あるまい」

お?このパターンは……。

「お前等。少しはやる気を出せ。ここでカッコいい姿を見せれば、少しは佳織がお前達の事を意識するかもしれないぞ?」

「!!」

ぜくつたいに何か言ったな。

二人の耳元で囁くように呟いてたから。

でも、ここからじゃ流石に聞こえなかった。

一体なんて言ったんだろう?

「(……)こはやはり、栄光あるイギリスの代表候補生である、このセシリア・オルコットがやるしかありませんわね!」

「もうそろそろ……アタシの本気って奴を見せるいい機会だと思っただのよね!」

急に気力150ですか。

それともテンション『超強気』かな?

そして、二人がこうなった切っ掛けを生んだ張本人は……

「ふっ……ちよろいな。私の佳織がそう簡単にお前等に振り向くわけが無かるう」

なんかニヒルな笑みでこっちを見てるんですけど〜!?

「それで？肝心の対戦相手は何方ですの？もしや、鈴さん？」

「あら。別にアタシはそれでも構わないわよ。アンタとは一度、白黒をはつきりさせたいと思ってたし」

うおう……やる気スイッチがONになった途端、急に好戦的になったな。

「そう慌てるな。対戦相手ならばちゃんと用意してある」

「え？」

お？来るか？

私は頭上に注意を払いながら見上げる。

すると、そこには……

「ど……どいてくださあ〜い!!」

案の定、山田先生がラファールを身に纏った状態で自由落下しているじゃありませんか。

やっぱ、一夏の所に落ちるのかな？

なくんて呑気に構えていたら、猛烈に嫌な予感がした。

「あ……あれ……？」

これ……私の方に落ちてきてない!?

どうして何故私の所に!?

「佳織!!危ない!!」

「かおりん!!」

箒と本音ちゃんの叫ぶ声が聞こえたと同時に、私は咄嗟にISを起動。

衝撃に備えようとしたが、私の中のシヤア様はそれだけで終わらせてはくれなかった。

山田先生が真っ直ぐにこっちに向かって落下してくる。

それを、なんと私は……

「はあ!!」

あろうことか、膝を曲げて衝撃を吸収しながらのダイレクトキヤツチ!

しかも、どういう訳か、お姫様抱っこになってる! どんな仕組みでこうなった!?

やってる私自身が一番意味不明なんですけど!?

「か…佳織?! 大丈夫…大丈夫…?」

「ほう…これは…」

一夏の表情が凍りつき、ラウラは感心した様子でこっちを見る。

「大丈夫ですか? 山田先生」

「あ…はい…」

あれ? 山田先生の顔が真っ赤だ。

もしかして、抱えた時の衝撃でどこか怪我でもしちゃった!?

「しかし、顔が赤いように見えますが…」

「な…なんでもないんですよ!?! 本当に!」

「そうですか…」

目の前で必死に手を振りながら否定する山田先生。

まあ…大丈夫って本人が言うのなら、こつちからは何も言えないけど…。

「兎に角、貴女が無事でよかった」

「はい!?!」

「先生の身に何かあつては大変でしたから」

「心配…してくれましたか?」

「当然です (クラス代表ですから)」

「はうう…」

あ…あれれ? 今度は頭から湯気が出てる!?

「」「ちっ!」「」

なんか舌打ちが6つ程聞こえましたけど!?

「降ろしますね」

「はいい…」

どうして残念そうな顔になるんですか?

「山田先生。これからはもう少し気を付けて頂きたい」

「すいませんでした…」

ありやありや。山田先生がまるで雨に濡れた子犬みたいに落ち込んじやった。

「それから……」

山田先生に近づいて、その耳元で呟く。

「佳織に手を出すとと言う事は、私を敵に回す事と同義だと思えよ？」

「ひいひいっ!？」

何を言っただかは知らないけど、怖がらせちゃいけないでしょ。

「さて、では始めるか」

「始める…?」

「それって……」

「そうだ。今回の模擬戦の相手は山田先生だ」

「ええっ!？」

まあ……普段の山田先生を見ていたら、そんな反応するよね。

「あの……もしかして、2対1で……ですか?」

「それは流石に……」

「なんだ…不満か?それならば……」

あ、こっち見た。

「山田先生の相棒^{バディ}として仲森を入れよう。それならば文句あるまい?」

「そ…それは……」

わ…私が!?

山田先生のパートナーを!?

「仲森もそれでいいか?」

「私でよければ」

拒否権なんてないだろうし。

変に抵抗するだけ無駄無駄。

そんな訳で、私は山田先生の隣に行った。

「ところで、山田先生の實力は?」

「私が誰かをパートナーに選べと言われたら、真っ先に彼女を指定する…と言えば分かるか?」

「成る程」

近接戦が得意な千冬さんと、遠距離戦が得意な山田先生。タッグとしての相性はこの上なく抜群だろう。

ハッキリ言って、無敵じゃね？

「佳織と組むなんて……」

「これは、一気に油断出来なくなりましたわね……！」

まだ山田先生を過小評価してるな？

いいでしょう。この試合で山田先生の真の実力を知るがよい！

「では……行くとするか。山田先生、よろしく願います」

「こ……こちらこそ、よろしく願いますね！仲森さん！」

顔を向けると、照れながらもにっこりと微笑んでくれた。

なんつーか、普通に可愛い人だな。

「では、始めろ！」

千冬さんの号令と共に、私達四人は一斉に空へと飛翔し、模擬戦を始める。

さあ……どうなるかな？

・
・
・
・
・
・
・

結果から言えば、模擬戦は私と山田先生コンビの勝利。

お互いに即席のコンビではあったが、向こうは向こうで思った以上に息が合っていた。

少なくとも、原作のようないがみ合って足を引っ張り合う……なんてことは無かった。

けど、私達の方が上手だった。

正確には、山田先生の実力が上手だったと言うべきか。

あろうことか、山田先生はとことんまで私のサポートに徹してくれ

た。

私が近接戦を仕掛ければ、山田先生は後方援護を。

逆に私が遠距離からの射撃戦に移行すれば、山田先生が前に出て囮役をしてくれた。

ここまで楽しいと思ったISの試合は初めてかもしれない。

そういや、試合中に下ではシャルロットが皆にリヴァイヴの説明をしていたっぽいけど、内容は原作と同じだろうから、別に気にする必要はないよね？

「これが……山田先生の実力……」

「アタシ達がまるで赤子扱いなんて……。いつも以上に佳織の実力が引き出されてる気がしたし……」

試合が終わって、私達は揃って地面に降りたっている。

鈴とセシリアは疲労困憊って感じだけど、こっちは思ったよりも疲れてない。

なんか……体力ついてきた？

だとしたら嬉しいな。

さてつと、試合も終わった事だし、ISを収納しますか。

他の三人もISから降りてるし。

「仲森さんは本当に凄いですね……。こうして一緒に戦って、改めて実感しました」

「そ……そんな事はないですよ。私なんてまだまだ未熟者です」

「謙虚なんですね」

「そんなつもりはないですけど……」

事実を言ってるだけだし。

「今度は是非、対戦相手として相對したいですね」

「はは……その時が来た時は、どうかお手柔らかに」

今の私じゃ速攻で負けそうだけど。

「これでお前達もIS学園の教職員の實力が理解出来ただろう。これからはちゃんと敬意を持って接するように」

鈴とセシリアには悪いけど、この試合自体が山田先生の株を上げる為のものだったんだよね、きつと。

これからは少しは皆の山田先生への態度が変わればいいけど。

「さて…と。今この場にいる専用機持ちは仲森に織斑、オルコツトに凰、デュノアにボーデヴィツヒか。では、それぞれに7人グループになって実習を行う事にする。各グループのリーダーは専用機持ちが行うこと。分かったな？では、分かれろ」

千冬さんが言い終わると同時に、皆がそれぞれの場所に分かれた。原作みたいに1と2か所に固まるって事は無かった。

流石に、千冬さんの逆鱗に触れるリスクと天秤にかけたら、当然の行動だよな。

「かおりんく。丁寧に教えてねく」

「よ…よろしく頼む…」

私の所は本音ちゃんと言がいた。

普段から話す人がいると、こつちもやりやすい。

他の所も……

「織斑さん！よろしくね！」

「うん。こつちこそよろしく」

「セシリア…ねえ。まあ、実力は認めるけど……」

「褒められてるんでしようか……？」

「凰さんかく。ま、仲森さんと凄い戦いはしてたから、大丈夫…かな？」

「なんで疑問形!？」

「デュノアさんねく。お互いに未知数だから、どうなるか予想出来ないわね…」

「あははく…。まあ、頑張るよ…」

「えつと……よろしくね？」

「任せておけ。私にかかれれば楽勝だ」

……大丈夫…かな？だよな？ね？

「えくつと、皆さんいいですか？これから訓練機を一班につき一機ずつ取りに来てください。数は『打鉄』が3機にリヴァイヴが3機です。どつちか好きな方を班で決めて取りに来てくださいねく。当然、早い者勝ちですからねく」

早い者勝ち……ね。

私としては、自分もリヴァイヴを使用しているから、同型機の方が教えやすいけど。

「えっと、私はリヴァイヴにしようって思うけど、それでいい？」

「私はいいよ。かおりんが好きな方で」

「私もだ。お前の判断に任せる」

二人はOKっと。

他の子にも聞いたら、他の子達もそれでいいっぽい。

てなわけで、迷わずリヴァイヴを取りに行った。

因みに、ISは手押し可能な小型ハンガーに固定してある。

「まずは何からしたらいいのかな……？」

教えて貰う事はあっても、誰かに教えるなんて滅多にしないからな
ゝ。

最後に教えたのだって、前に蘭ちゃんに教えたつきりだし。

「各班長の人は、まずはISの装着を手伝ってあげてくださいね。一応、全員にやってもらうつもりなので、設定でフィッティングとパーソナライズはちゃんと切つてあります。取り敢えず、午前中は実際に動かすところまでやってくださいねゝ」

またまた山田先生の声が響く。

今日は張り切ってますなあゝ。

「だって。じゃあ、分かりやすく出席番号順にやろうか？最初は……」

「はいはゝい！私だよ！」

おう……元気ですな。

「相川さん……だよね？」

「そう！出席番号一番の相川清香！やっとお番だよゝ（泣）」

「メタ発言はやめようね」

皆が困惑するだけだから。

「んじや、早速始めますか。相川さんってISの搭乗経験は……」

「授業で何回か」

「それなら問題無いかな。装着から起動、それから歩いてみようか。もしも時間内に出来ないよと、どうなるか分からないからね……」

「そ…そうだね…。よし！真面目にやりますか！」

「態々、宣言するような事？」

と、まあ…：相川さんから始まって、次々と装着から起動、そして歩行と順調に進んでいった。

だけど、箒の番になった時にちよつとしたアクシデントが発生した。

「あ……」

「どうしたの？って…あ……」

どうやら、前の人が降りた時にしゃがまずに降りてしまったみたい。

訓練機の場合は、降りる際に必ずしゃがまないといけない。

そうじゃないと、次に乗る人が上手く乗れないから。

「……どうしようか……」

実は、私の中では答えがある程度出ているんだけど、実際にやっていいのかどうか……。

「……………」

「佳織？」

仮にここで私が渋っても、いずれ山田先生がこっちに気が付いて、結局は同じ事をする羽目になるだろう。

だったら、いつその事…！

「箒」

「な…なんだ？」

「ちよつと待ってて」

「え？」

私はリヴァイヴⅡを再び展開。

「では箒。失礼する」

「な……なななななっ!?!」

そのまま箒をお姫様抱っこ。

恥ずかしくはあるけど、こっちの方が楽なんだよ。

少しだけ宙に浮き、そのままコックピットに箒を運ぶ。

「ん？何故腕を絡ませる？」

「い…嫌か？」

「そうではないが……」

君の高校一年生らしからぬバストが私に押し付けられるんです！

自分で言うのもアレだけど、私と箒の胸が押し付け合って、凄くエロい事になってる……！

「しののん……いいなあ……」

本音ちゃん？

「よし、到着だ」

「え……？」

何故に残念そうにする？

「箒は私達と一緒に訓練の経験があるから問題無いな？」

「ま……まあな！」

「なら、いつも通りにな。大丈夫、お前になら出来る」

「そ…そうだな！私に任せておけ！」

意気揚々と箒は装着、起動、歩行を済ませた。

実にスムーズだったから、かなり早く終わった……のはいいんだけど……。

「何故にまた立ったまま降りた？」

「いや………なんと言うかな………本音にも………と思つてな」
「??？」

本気で意味が不明。

箒は何が言いたいの？

「ほ…ほら！本音が待っているぞー！」

「あ…ああ………」

なんか分かんないけど、まずはこれを終わらせようか。

「では本音。私に掴まってくれ」

「は…い♡」

今までで一番嬉しそうに、本音ちゃんが私にしがみついた。

「えへへ♡♡（ありがとねしののん♡♡）」

「ふふふ………。（気にするな。こう言う時はお互いさまだ）」

そして、二人はどうして見つめ合ってるの？

「かーおりん♡」

「なんだ？」

「なんでもなくいい♡」

「フツ……変な奴だ」

さて……と、とつとと終わらせませるか。

((仲森さんと本音ちゃんが思いつきリア充してる……))

あれ？なんで皆して生暖かい物を見るような目でこつちを見るの？

こうして、私達の班は想像以上に早く実習を終わらせることが出来た。

第24話 リヴァイヴ強化

「なんで……なんでこんな事に……」

「何が？」

お昼休み。

私達は屋上にいた。

爽やかな青空が広がっていて、絶好の日向ぼっこ日和と言える。

しかも、運のいいことに、今日に限っては他の生徒が人っ子一人いない。

で、私の隣で何故か落ち込んでいる筈。

屋上に設置してある丸テーブルに揃って座っている私達だが、他にはセシリアに鈴、一夏と本音ちゃん、そしてシャルロットがいる。

何故こうなったのか。

それを話すには、午前の授業が終わる時に遡る。

午前の授業が終了し、全ての道具やISを片付けていると、徐に筈が話しかけてきた。

なんでも、今日は久し振りに弁当を作ったのだが、少し作りすぎた為、私に食べてほしいとのことだった。

私としては断る理由も無いし、快くOKを出したのだが、その時にセシリアと鈴と一夏と本音ちゃんがやって来て、私が行くなら自分達も一緒に食べる！と言い出したのだ。

で、それなら折角だし、少しでも仲良くなるためにシャルロットも誘ったのだ。

本当はラウラも誘いたかったけど、彼女はいつの間にか姿を消していた。

「アタシ達を出し抜こうだなんて……」

「10年早いですわよ」

「ホント、油断も隙も無いね」

「しののんく。ちよつと詰めが甘かったねく」

「うう……」

何の事かは知らないけど、皆から一斉攻撃を受けてるな。

「な…なんか、凄く場違いな気が……」

「少ししたらすぐに慣れるよ」

「そうなの？」

「多分」

「多分なんだ…」

少なくとも、同じ転校生である鈴はすぐに馴染んだ。

彼女の性格もあるだろうけど。

「と…取り敢えず、早く食べようよ。時間も限られてる事だし」

「そう…：…だな」

よし、なんとか食事の空気に持ち込んだぞ。

箸の手元には包みにくるまれた弁当箱と思わしき箱がある。

他にも、セシリアの所にはバスケットが、鈴もタツパーを持ってきている。

一夏も手元には弁当箱を持参している。

因みに、本音ちゃんも購入部で菓子パンを購入して、シャルロットも同じで、私は手ぶら。

本当は私は箸が用意してくれてるっぽいから、敢えて手ぶら。

そうそう、一応言っておくけど、私も料理ぐらいい出来るからね。

流石に一夏レベルとはいかないけど、一般的な家庭料理ぐらいならある程度はマスターしてる。

なんせ、小学生の頃からお母さんに徹底的に教え込まれたから。

なんでも、『女なら、料理ぐらい出来なきやダメ』らしい。

どうしてか聞いたけど、なんでか教えてくれなかった。

過去に何かあったんだろうか？

「はい、佳織」

「おお〜」

鈴が私に渡してくれたタツパーに入っていたのは、彼女の十八番とも言うべき料理の酢豚だった。

嘗て鈴が日本に住んでいた時、彼女の実家は中華料理店を営んでいた。

その流れかは知らないが、鈴は昔から料理が上手い。

レパートリーは豊富だが、やっぱり中華料理が一番得意みたい。

「今朝、久し振りに作ってみたの。食べてくれるでしょ？」

「勿論！」

鈴の酢豚って本当に美味しいから、私好きなんだよな♡

「しまった……！」

「早い者勝ちよ……！」

なんか言ってるけど、今は酢豚を食べましょう。

「んじや、いただきます」

一口パクリ。

「ん〜！美味しく♡」

ああ〜！猛烈に白米が恋しい〜！

「つーか、普通に前よりも上手になってる気がする」

「そりやそうよ。別に向こうでISの訓練ばかりをしていたわけじゃないもの」

「そりやそっか」

ISの訓練と並行して、料理の特訓もしてたのか〜。

やっぱ、鈴は隠れた努力家だな〜。

私も見習わないと。

「あ……あの……佳織さん？実は私も作って来たのですが……」
「え？」

セ……セシリアも？

でも、彼女の料理は……

思わず一夏の方を振り向く。

すると……

(コクン)

無言で頷いてくれた。

あんまりこういう事は言いたくないが、セシリアの料理のセンスは壊滅的と言っても過言じゃない。

前に一度、セシリアの作ってくれた料理を試食した事があるけど、あの時はマジで死にかけてた。

一夏が傍にいなければ、本気でもう一度の死を迎えるところだっ

た。

それ以来セシリアも反省したようで、極力キッチンに立たせないようにはしていたけど、流石に不憫に感じてしまつて、一夏の監修の元でセシリアの料理の特訓を密かに行つた。

その結果はまだ知らされてないけど。

今日、それが分かるのか…？

「ど…どうぞ」

そう言つて、静かにバスケットを開けるセシリア。

中には、サンドイッチが綺麗に並べられている。

「これ…：試食はした？」

「はい！それはもう！」

「そう…なんだ」

なら大丈夫…：かな？

「い…：いただきます」

少しトラウマがあるけど、セシリアの好意を無駄には出来ないし、ここは勇気を振り絞つていきましよう！

「あむ…」

…：…：…：…：…：…：…：…：…：…：…：…

「…：…：…：美味しい？」

なんて言うか…：…：普通に食べれる。

少なくとも、不快感は全く無い。

「よ…：よかつたですわ…：！」

「へえ〜。やるじゃない」

鈴が感心した様子で笑う。

この子も間近で嘗てのセシリアの料理の破壊力を見た人間の一人だからね。

「本当に…：…：本当に苦労したよ…：。多分、受験の時以上に頑張つたかも…：」

「そこまで言うか」

受験以上に困難な料理教室つて…：…：。

「それじゃ、次は私かな？」

お、遂に本命ですか。

一夏の料理はマジでプロ級だから楽しみなんだよね♡

「はい、これ」

「おお〜」

一夏がテーブルに置いた弁当箱を開くと、そこには色鮮やかな料理の数々が。

どれもこれも実に美味しそう。

「くっ…いやっぱり、料理じゃ一夏には敵わないか…」

「凄いですわ…」

料理漫画的に言えば、弁当箱が輝いてる感じ？

こう『ピカー！』って。

あ、別にピカチュウの鳴き声じゃないからね。

「ほら、箸も早く出しなよ」

「し…しかし…」

「出さないと、昼休みが終わっちゃうよ？」

「分かっている！え…ええ〜い！」

なんでそんなに気合を入れるの？

最後に出した箸の弁当箱が開かれた。

そこにも、一夏の料理に勝るとも劣らない料理の数々が並んでいる。

「う…嘘…！箸もこのレベルなの…!？」

「まさか…このような…!？」

うん、なんかさつきからずっと、鈴とセシリアが食戟のソーマに登場するモブキャラみたいな顔になってる。

この状態で美味しい料理を食べたら、裸になっちゃうんじゃない？

「それじゃあ、まずは箸のお弁当の唐揚げから頂こうかな？」

「い…いきなりか？」

「うん」

どうして動揺するの？

んじや、パクリとな。

「おっ」

「これはこれは……。」

「美味しいね！でも、随分と凝ってるような気がする。これは……」

「生姜と醤油におろしニンニク。それからコシヨウを予め混ぜてあるんだ。隠し味は大根おろしだな」

「へえ。隠し味まであるなんて、なんか凄いね！」

「そ…そうか？」

「私が教えたんだけどね」

「それを言うな！」

あ、一夏直伝なんだ。

それでも美味しい事には違いないけど。

「へえ…日本料理って凄いな」

「あれ？アンタも料理が得意なの？」

「得意って言うか…趣味かな？この機会に料理部とかに入って日本料理を勉強したいなって思ってるんだ」

なんと、シャルロットは日本文化に興味があるお人だったか。

日本人としては実に嬉しい事だ。

「そう言えば、シャルロットの部屋割りってどうなってるの？」

「私は同じ時期に転校してきたボーデヴィツヒさんと同じ部屋になるみたい。今の時期に改めて部屋割りを決めるのは大変みたいだから」
「当然でしょうね」

原作では、この部屋割りで山田先生が本当に苦勞してたっばいし。

少しは負担を軽減できたのだろうか？

「皆すごいね」

「そう言う本音はどのようなの？料理出来るの？」

「出来ると思う」

「その発言だけで分かった」

そう、本音ちゃんは料理関係はからつきしなのだ。

本人曰く、『私は食べる専門だから』らしい。

実際、私が作った料理の試食をよくしてるし。

「佳織はどうなの？料理の方は」

「私は人並みかな？流石に一夏とかには敵わないよ」

「佳織も十分に凄いと思うけど?」

「そう?」

鍛えられてるとはいえ、この領域にはまだまだ及ばない。
もつと精進しなくては!

「つーか、さつきら佳織しか食べてないじゃない。私達も食べましようよ」

「それもそうか」

ようやく気が付いたか。

早く食べないと、午後の授業に遅刻してしまう。

なんて言っていたが、結局はワイワイしながらの昼食になった。
主に、転校してきたシャルロットに対する質問が多かったけど。

・
・
・
・
・
・
・

放課後。

私は約束通りにシャルロットと一緒に格納庫に行くことに。

その際、私の整備を担当してくれている本音ちゃんと、なんでかセシリアも同席する事に。

セシリアの参加はシャルロット言い出した事なんだけど。

「本当にいいんですの? 私と一緒に来て」

「大丈夫だよ。と言うか、一緒に来てもらった方がいいと思う」
「??」

一体何が格納庫で待っているんだ?

頭の上に疑問符を浮かべながら、私達は格納庫の扉を開く。

シャルロットを先頭に格納庫内を歩いて行くと、とあるハンガーに色んな装備群が置いてあった。

「あ、あったあった」

「これが今回、私を連れてきた目的？」

「でゆのつち。これはく？」

『でゆのつち』って……。

本音ちゃんの考える渾名って独特だよな。

ここだけは束さんにも負けてないかも。

「これは、佳織の専用機である『ラファール・リヴァイヴⅡ』専用製
作された追加兵装だよ」

「追加兵装……」

つまり、これがデユノア社から出向してきた理由？

「説明する前に、まずはこれを見て」

シャルロットが私に武器の一覧が表示された端末を渡してきた。

そこには、色々な武器の名前や姿が映っていた。

「ハンドビームガンにビームバズーカ……それに、Wビームトマホーク……そして……」

「ビ……ビット兵器?! フランスはもうここまで来たんですの!？」

「慌てないで。それも今から説明するよ」

急に息が荒くなったセシリアだったが、シャルロットに宥められて落ち着いたみたい。

「ここにある武器は全て、欧州連合の統合防衛計画である『イグニツシオン・プラン』で造られたんだ」

「確か、一時期フランスはイグニツシオン・プランから外されそうになったと聞きましたけど……」

「まあね。でも、ラファール・リヴァイヴⅡの開発に成功した事で、なんとか除名を免れたんだ」

イグニツシオン・プランについてはセシリアからも聞いたけど、結構ギリギリだったのね……。

「で、その最初の一步として、まずはフランスとイギリスで合同の新型武器開発計画が持ち上がったんだ。それで造られたのが……」

「ここにある武器類……なんだね」

「その通り。ここにあるのは後に量産が確定しているリヴァイヴⅡの

専用武器なんだ」

「イギリスとの合同……。だから、ビーム兵器やビット兵器があるんですのね……」

詳しい事はよく分からないけど、色々大変なんだあ。

「私が連れてこられた理由がようやく分かりましたわ。これが理由ですのね？」

「うん。こっちも、一度IS学園にいるイギリスの代表候補生と顔を合わせておけて言われてたから」

代表候補生も苦勞が多いんだな。

私は絶対になりたくない。

特に興味も無いしね。

「それじゃあ、ISを出してくれないかな？装着してみて、不具合が無いか確かめないといけないから」

「了解」

私はいつものようにリヴァイヴIIをハンガーに展開。

「うわあ……。こうして近くで見ると、本当に綺麗な赤なんだね……。佳織が『赤い彗星』って呼ばれる理由も分かる気がするよ」

「そう？」

私なんて所詮はパチモンですぜ？

本当の赤い彗星は私なんて目じゃないぐらいにチートだから。

「じゃ、早速装着して見ようか」

「私も手伝う」

「ほんとう？じゃあお願いしようかな？」

本音ちゃんが手伝うなら早いだろう。

思った通り、作業自体はあっという間に終わった。

ハンドビームガンとビームバズーカは拡張領域に入れて、Wビームトマホークは折りたたんだ状態で腰の辺りにある装甲に装着。

そして、ビット兵器である『ファンネルポッド』は右肩にあるシールドに装着された。

ってか、ファンネルって……あのファンネル？

形状自体はサザビーのファンネルと似てるけど……。

「あ」

装着する前は成形色である灰色だったのに、装着された途端にファネルが機体と同じ赤色に変わった。

「実際にはそこまで劇的に変わった訳じゃ無いのに、不思議と変わった印象を受けますわね」

「だね。なんか力強く感じるね」

ホント、二人が言うように変な存在感がある。

「あれ？」

端末に表示されている機体の名前が変わった？

「ねえ、シャルロット」

「どうしたの？」

「これ……機体の名前が……」

「名前？」

取り敢えずはシャルロットに見せてみる。

「これは……」

機体の名称が『ラファール・リヴァイヴⅡ』から『ラファール・リヴァイヴ・バリステイック』に変わっている。

随分と長くなってしまった……

「多分、この武器類の名前が『バリステイック・ウエポン』って言うからだと思う」

「成る程……なのか？」

それだけで名前が変わるものなのか？

なんかこれって、スパロボの機体換装に似てる気がする。

「気にする程じゃないと思うよ。別に支障があるわけじゃないんだし」

「それもそうだね」

私が気にしなければ済む話か。

「じゃあ、これからは『バリステイック・リヴァイヴ』と省略するでしょう。」

「これで、佳織のリヴァイヴはかなり万能な機体になったね」

「遠距離に中距離に近距離にと、全ての武器がバランスよく並んでい

て、しかもビーム、実弾と使い分けも出来る。これで佳織さんの強さに更に磨きがかかりますわね。私としては嬉しいような悲しいような、微妙な気持ちですけど」

ライバルが強くなって喜ぶのは、典型的な戦闘狂か、爽やかイケメンなラノベ主人公だけじゃなからうか？

「シャルロットの仕事はこれでおしまい？」

「まさか。僕の仕事は寧ろこれからだよ」

「と言うと？」

「僕のもう一つの仕事は、佳織のリヴァイヴⅡから得られた戦闘データを送る事だから」

「ああ〜…」

「そういや、私の戦闘から得たデータが、これからのリヴァイヴⅡの量産に使われるんだっけ？」

「最近忙しかったから、すっかり忘却してたや。」

「父さんも『赤い彗星』の戦闘データをこれからの開発に役立てられるって、凄く喜んでたよ」

「父さん？」

「うん。僕の父さんはデュノア社の社長なんだ」

「おお〜！でゆのつちは社長令嬢なんだ〜！」

「一応…ね」

「ま、知ってたけどね。」

「あれ？そうになると、佳織さんもデュノア社所属になるんですの？」

「希望ではそうだけど、そこは本人の意思を優先するって言ってたよ」

「……本当に、このデュノア社は普通にいい会社になってるな…。」

「あの…さ。シャルロットってご両親と仲はいい？」

「そうだね。仲は良い方だと思うよ。仕事柄、お互いに話す機会は少ないけど、休みの日とかはよく一緒に食事に行ったりするし」

「それは…お母さんとも？」

「うん。今のお母さんは再婚した継母なんだけど、僕の事は実の娘のように可愛がってくれてるよ」

「やっぱりか…原作とは真逆になってる。」

驚くレベルで家族の仲がいい方に変わってる。

「なんだか複雑な事情があるみたいですけど、家族仲が良好なのはいい事ですわ」

家の事情が複雑なのは君も同じだしね。

「さて、出来ればこれから試運転をしたいけど……」

「それはちよつと難しいかも。さつき聞いたけど、今日はどのアリーナも既に予約で埋まってるって山田先生が言ってたし」

だから、今日の放課後は一夏達は部活に顔を出したりしてるみたい。

空いた時間は有効活用しないとね。

「そつかく。じゃあ、次の機会でもいいかな？別に焦る必要はないし」

「そうした方がいいね」

場が完全に終わりの空気になりかけた時、セシリアがふと声を上げた。

「あら？そう言えば……佳織さんのビット適正は大丈夫なんですの？」

「それに関しては問題無いよ。父さんに聞いたんだけど、入学時にI S適性とは別にビット適正も調べてるんだって。それによると、佳織のビット適正はSらしいよ」

「え……S!?イギリスでもSなんて一人も……」

「最近になって判明した事だからね。無理も無いよ」

あの……私の事は放置ですか？

つーか、ビット適正がSって……これも転生特典か？

シヤア様を模しているから、ビット兵器の扱いもそれに準じてるってか？

確かに、あの人はサザビーに搭乗した時にはファンネルをまるで手足のように扱っていたけど。

「だから、ビットの扱いに関しては問題無いよ」

「後は私の練習次第？」

「そうなるね」

ビットの練習か。

何をしていいか、全く分からん。

「……ねえ、セシリア」

「なんですか?」

「今度の訓練の時にさ、私にビットの扱い方を教えてくれないかな?」

「わ…私がですか?」

「どうか、セシリアじゃないとダメだと思う」

「私じゃないとダメ……」

ど…どうした?急に静かになって…。

「分かりましたわ!このセシリア・オルコットにお任せくださいませ

!!」

「う…うん。お願いね…」

急に大声を出すからびつくりした…。

「ビット兵器の整備ってどうすればいいのかな?」

「それなら、ちゃんとマニュアルがあるから、それを見ればいいよ。本

音が佳織のISを整備しているの?」

「そうだよ」

「それじゃあ、後で整備マニュアルを渡しておくよ」

「ありがと」

本音ちゃんなら、きっとすぐに整備の仕方を覚えるだろう。

じゃあ、私の方も新しい武器を使いこなせるように頑張らないとね

!

第25話 試射

金銀コンビが転校してきて早数日。

今日は土曜日。

土曜も授業はあるにはあるんだけど、午前だけで、午後からは完全に自由時間になっている。

だからだろうか、私達が今いる第3アリーナには結構な数の人がひしめき合っている。

アリーナの数や訓練機の数は基本的に限られているから、チャンスがある時に訓練をこなそうと試みる生徒が数多い。

因みに、箒もそんな生徒達の一人。

今日はいつものメンバーに加え、シャルロットが加わっている。

けど、鈴だけがクラスの用事で少し遅れてる。

今回の訓練は、この間、私のリヴァイヴⅡに加わった新たな武装の試射だ。

ISを展開している私の隣には自分の専用機を纏ったシャルロットが待機している。

「それが君の専用機か？」

「そうだよ。『ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ』。佳織のラファールの前身となった機体だね」

「ほう……」

所々にカスタマイズを施された形跡はあるけど、基本的な形状は変化していない。

まさに、ラファールの正当な進化って感じ。

しかし……見事なまでにオレンジですなあ。

知ってはいたけど、こうして改めて見ると、あれを思い出すと言うか……

「あく……失礼な事を聞くかもしれないが、もしやシャルロットは二重人格だったりしないか？」

「僕が？なんで？」

「いや……なんとなくな。違うならばいい。変な事を聞いて済まな

かった」

「ん〜？」

思わず聞いちやったよ…。

もしかしたら、彼女の中に『シャルル』って言う男の人格がいたり〜…なんて想像しちやったけど、流石に考えすぎか。

「ところで、新しい武器の具合はどう？」

「そうだな……」

自分の手にあるハンドビームガンを見てみる。

「手にしつくりきいて握り心地も悪くない。なにより重量が軽い為、取り回しがしやすそうだ」

「それは威力よりも連射性と精密性を重視しているからね」

質より量って事か。

「それじゃあ、試しに撃ってみてくれる？あそこに丁度、的があるから」

「了解した」

現在、訓練している皆に少しだけどいてくれるようお願いして、私は真ん中に立った。

眼前にはカラフルに彩られた的が浮いている。

「では…いくぞー！」

一気に上昇して、視界にターゲットを映す。

そして、ロックオンの後に即座にトリガー！

「はっー！」

黄色く細いビームが発射され、真ん中に命中。

それを見届ける事無く次のターゲットを見る。

「ふっー！」

息を吐くようにしながらもう一発。

「そしてー！」

振り返りながら最後のターゲットも撃つ！

「……こんなものか」

使い勝手は上々……ってか？

ハンドビームガンの試射を終えた私は、皆の元に戻った。

「どうだった？」

「いい感じだ。これならば、牽制や弾幕を張るのに向いている。マシンガンと併用すれば、使い勝手も増すだろう」

「そう言って貰えてよかったよ」

「やっぱ、片手で使えるっていいよね。」

「攻撃力もマシンガンよりは上みたいだし。」

「ねえ……さっきの見た？」

「うん……見た」

「全部真ん中に命中してたよね……」

「しかも、動きながらだよ？マジで凄すぎ……」

「なんか離れた場所でひそひそと話してますぞ。」

ひそひそ話は女子高生の特権とは言え、あまりいい気分はしないな。

「次はビームバズーカをお願い出来るかな？」

「分かった」

ハンドビームガンを収納し、ビームバズーカを取り出す。

これは結構な大ききで、片手で持つには少し重い。

両手で保持するのがベストだろう。

「ず……随分とでかいな……」

「大きい事はいいいことだ！って、誰かも言ってたよ」

「誰ですの……それ……」

「こら一夏。女の子がそんな事を言っちゃいけません。」

「さて……と。体全体で支えるように持って、銃口をターゲットに向けて……と。」

「では……発射するー！」

トリガーを引いた途端、大きなビームの閃光が発射され、ターゲットを丸ごと飲み込んでいった。

その衝撃で、少しだけ後ろに下がってしまった。

「うわあ……データでは知ってたけど、こうして実際に見ると凄い迫力だなく……」

「ふむ……」

これは、さっきのハンドビームガンとは完全に真逆に位置している武器だな。

「典型的な『量より質』な武装だな。威力は非常に高いが、発射までのラグが大きい上に、両手で保持しなくてはいけないから、万が一回避されて接近でもされたら終わりだ。少なくとも、1体1の戦いで使うような代物じゃない。最低でも前衛で相手を引きつける役がいて初めて効果を発揮するだろう」

なくって偉そうに言ってるけど、これって完全にゲーム知識ですから。

オタクってこんな時に限って無駄に博識だったりするんです。

「そこまでの確に……。ありがとう！とつても参考になるよ！」

うう……。笑顔が眩しいデス……。

私みたいに『転生』なんてズルをしている人間には眩しすぎる光だ。

「お次はビット兵器の『ファンネル』をいってみようか」

「ああ」

とうとうコレの出番か……！

上手く扱えるかどうか、すつごく心配……。

そんな私の不安を感じ取ったのか、セシリアから声が届いた。

「大丈夫ですわ！先程の私の言葉を信じてください！」

ついさつき、私はセシリアからビット兵器を扱う際のコツを聞いた。

なんでも、ビットは操縦者の脳波を感知して稼働するようで、本人のイメージが大事になってくるらしい。

そこら辺はガンダム世界のビット兵器と大差ないんだな……。

ただ、サイコミュがあるかどうかの違いになるのか。

「イメージ……か」

オタクにとつて妄想……。じゃなくて、イメージは日常茶飯事の事と言っても過言じゃない。

毎回毎日、色んな妄想を脳内で形にしている。

「ふう……。……」

息を吐き、目を閉じて、精神を集中させる。

(イメージ……イメージ……ビットが飛んで行つて的を撃つ……)
初めてヤクト・ドーガに乗ってファンネルを使用したクエスもこんな気持ちだったのかな？

よし……やるぞ！

カッ！と目を思いっきり見開いて、的を見る。

そして、ファンネルに『命令』する！

「いけーファンネル!!」

シールドに装着されたファンネルポッドから三基のファンネルが飛び出して、それぞれに的に向かって行く。

ファンネルの小さな銃口から一筋のビームが放たれて、三つの的をそれぞれに撃ち抜いた。

「やった……のか……」

「凄いですわ！最初にしてこれだけ動かせるなんて！」

セシリアが自分の事のように喜んでくれた。

そこまで言われると……なんか照れるね。

「ビットの挙動も問題無し……と」

シャルロットはシャルロットで、なにやらレポートのようなものを端末に打ち込んでいる。

会社に所属するのも代表候補生と同じぐらいに大変みたい。

暇があれば労つてあげるのもいいかも。

「しかし……少し頭が痛むな……」

「大丈夫？佳織」

「ほんの少しだけだ。そこまで深刻に考えなくてもいいだろう」

偏頭痛みたいなもんだし。

「先程も言った通り、ビットは脳波で動かす兵器。故に、慣れないうちは頭が痛くなるのは仕方が無い事です。私もブルー・テイアーズに乗つて、初めてビットを使った時は頭痛に悩まされましたから」

私だけじゃないのか。

「こればかりは慣れるしかありませんわね。何回も使つていってビットの操作に慣れていけば、自然と頭も痛くなくなると思います」
「それを聞いて安心した」

これからはビットの訓練もこなさなくちゃいけないってことね。
こりや大変だ。

「では、ビットに関してはこれからもセシリアにコーチして貰おうか」
「わ…私が!？」

「IS学園広しと言えども、生徒の中で最もビットの扱いに慣れてい
るのはセシリアしかいない。これは君にしか頼めない事だ」

「佳織さん……♡」

ちよ……ええ?なんで目がキラキラしてるんですか?

「お任せください!必ずや佳織さんのご期待に応えてみせますわ!!」

「よろしく頼む」

「はい!!」

なんちゅー力強い返事……。

心なしか、鼻息も荒くない?

「ビットか……こればかりは私達じゃどうしようもないね……」

「くっ……まさか、こんな事になろうとは……!」

なんか端の方で箒と一夏が話してるけど、ここからじゃよく聞こえ
ない。

さて、ビットを戻してから、最後のヤツをしますか。

ビットに戻るように命令すると、三基のビットは真っ直ぐにポッド
の中に戻っていった。

「よし。最後は……」

腰についているWビーム・トマホークに手を伸ばそうとすると、急
にアリーナ内が騒がしくなった。

「なんだ?」

皆の視線が一点に集中する。

そこにいたのは……

「ラウラ?」

一組に来たもう一人の転校生。

ドイツからやってきた銀髪の美少女、ラウラ・ボーデヴィツヒその
人だった。

ただ、今回の彼女はいつもとは違う。

何故なら……

「あれって……」

「うん。ドイツ製の第3世代型のISだ……」

「まだトライアルの段階だって聞いてたけど、もう実戦配備されてたんだ……」

大きな銃身（あれがきつと例のレールガンだろう）を携えた、漆黒のISを身に纏っているからだ。

え〜つと……確か名前は……シユ……シユ……シユヴアなんとかレーゲンだったっけ？

名前が長すぎてよく覚えてないよお〜！

「仲森佳織、少しいだらうか？」

「どうした？」

「折り入って、お前に頼みがある」

「なんだ？」

「私と模擬戦をしてほしい」

………にやんですと？

「スカウト云々の前に、まずは噂に名高い『赤い彗星』の実力を肌で感じておきたいんだ。駄目だらうか？」

超がつく程の馬鹿真面目さんだ……この子。

急に可愛く見えてきたぞ。

周りを見てみると、ラウラのいきなりの登場に戸惑っているようだ。

一夏と箒とセシリアは警戒していて、シャルロットもいつでも出られるように構えている。

「別に模擬戦自体は一向に構わない」

「それじゃあ「だが」……ん？」

「私は今、新しい武装の試運転をしているな。少しばかり忙しい。それに……」

私はラウラに示すように周りを見渡す。

「この状態ではお互いにやりにくいだらう？また日を改めてくれると助かる」

「それもそうだな…」

「おおっ!?なんか聞き分けがいい!？」

「邪魔をしたようで悪かった。では、また日を改めるとしよう。失礼する」

大人しく帰っていった……。

なんだろう……虎とかライオンみたいな猛獣が急に懐いてくれたような感動が……。

「い……意外と言う事を聞いてくれますのね……」

「てつきり、問答無用で撃つてくるとか思ってた……」

「話せば分かる奴なのかもしれんな……」

私の中でもラウラの対する評価が上方修正されたよ。

今度からはもつと色々と誘ってみようか？

「あれで彼女は結構素直でいい子だよ？」

「そう言えば同室だったな」

「うん。部屋では思ったよりも話す事が多いよ」

なんか……想像以上にラウラが社交的になってる件。

これはとてもいいことなんだろうけど……これからどうなるの？

「ごめくん！おまたせ〜……って、あれ？皆どうしたのよ？」

遅れてやって来たISを纏った鈴が、場に流れる何とも言えない空気を感じて目が点になっていた。

「え？え？マジで一体何があったの？」

「まあ……色々とな」

「色々？」

一言じゃ難しいかもなく。

「……彼女の事は後で考えるところとして、今は最後の武器を試すとして」

「そ……そうだね」

「ならば、折角来たんだ。鈴、このWビーム・トマホークの試運転に付き合ってくれ」

「別にいいわよ。って、随分とデカイ得物ね……」

折りたたんであるWビーム・トマホークを展開する。

適当に空いている場所に並んで、両手で構える。

「では、始めるぞ」

「いつでもいいわよー!」

高速で飛び出して、私の持つビームの刃と鈴の持つ鋼鉄の刃がぶつかり合い、火花を散らした。

.....

.....

.....

.....

.....

「.....と言う事があってさ」

「へえ、ラウラウって素直でいい子なんだね」

夕方。

私は自室でベッドに寝ころがりながら、本音ちゃんと話していた。

「疲れたんだから、これぐらいはいいよね？」

「みたいだね。ラウラの事を見てみると、近所の小学生を彷彿とさせたよ...。少なくとも、私にはあんな純粹無垢な目はもう出来ない...」

「かおりんって妙な所で大人だよ」

「それって老けてるって事？」

私って、そんなにも言動が老けてるのかな？

と言うか、本音ちゃんもラウラに負けないぐらいに純粹な目をしてるよね。

因みに、本音ちゃんは午後はずっと生徒会室にいたみたい。

もしかして、意外と書記としての仕事を頑張ってる？

「流れで模擬戦をする約束をしちゃったけど、大丈夫かな？」

「かおりんなら大丈夫だよ」

「ははは.....気楽に言ってくれちゃって」

でも、こんな風に言われると、本当になんとかなるって思うから、不

思議なんだよなく。

これが言霊の力ってヤツ？

コンコン

「おや？」

誰が来たのかな？

『佳織さん？いらつしやいますか？ご夕食をまだ取られていないのでしたら、ご一緒にいかがですか？』

お客さんはセシリアみたいだ。

「はいはい。少し待っててくれると佳織ちゃんはとってもハッピー」

ガチャリとな。

「あ……佳織さん」

「夕食でしょ？丁度、お腹も空いてきたし、行こうか？」

「ええ！」

「本音ちゃん、夕ご飯に行くよ」

「はい」

「はっ!？」

え？…なんでそこで戦慄するの？

(そうだった……！佳織さんは本音さんと同室でしたわ……！浮かれていて完全に失念していました……！)

まるで、テストでケアレスミスをした時みたいな顔してる。

なにかミスでもしたの？

「どうしたの？」

「な……なんでもありませんわ！おほほほ……」

「??」

乾いた笑いが却って怪しいぞ？

「早く行こ〜？」

「そうだね」

部屋の電気を消して廊下に出ると、途端に本音ちゃんが腕に抱き着いてきた。

「どうしたの？」

「なんとなく〜♡」

「そう」

別に重く感じないから、歩くのに支障は無いけど。

「な…なななな…：…：…」

「なに〜？」

あ…あれ？なんか本音ちゃんの目が据わっているような気が…。

(本音さんがこれ程までに積極的だなんて…：…：！)

(これだけは負けないよ〜？)

…：…：多分、気にしたら負けだな。

食堂に向かう為に階段を下りると、そこである人物に遭遇した。

「お…お前達!？」

「箒」

廊下の向こうから早歩きでこっちに来る。

その手には棒状の何かが握られていた。

「しののん〜、やつほ〜」

「ほ…本音!?!なんで佳織の腕に抱き着いている!?!」

「なんとなく〜」

ぶれないなく…。

「これから夕食なんだ。箒は?」

「私は実家からコレが送られてきたから、受け取りに行っていた」

その手に持っている物を私に見せる。

「そ…それって…：…：日本刀?」

「名は緋宵。かの名匠・明動陽晩年の作だ。…と言っても分からない

か?」

「「ははは…：…：」」

さっぱり分からにやい…。

けど、日本刀なんて帯刀して大丈夫なの?つて、このIS学園は法

律上も国際上も『どこでもない土地』なんでした。

ここでは今までの常識は通用しないんだよね。

確か、セシリアも自室に何丁か銃を置いているらしいし。

「さて、では行くとするか」

って、しれっと箒も空いている腕に抱き着いてきたんですけど!?

「ほ…箒さん!? 貴女まで!?!」

「なんとなくだ」

「ぐうううう…」

まゝた火花が散ってるよ…。

(ぐずぐずしていたお前が悪い!)

(これから佳織さんと一緒にビツトの練習を通じて、あんな事やこんな事をするつもりでしたのに…!)

(そうは問屋が卸さないよ…)

く…空気が重い…。

ほら、廊下を歩いている皆も変な目で見てるじゃんか。

「ゆ…百合だわ…!百合の花が咲いているわ!」

「IS学園では割と頻繁にあるって聞いたけど、こうして実際に目でみると…」

「しかも、中心にいるのは赤い彗星の仲森さん!これはまたいいネタが手に入ったかも…ぐへへ…」

おいこらその女子共!お願いですから私をネタにするのだけはやめてください!

その後、食堂でも何故か注目的になっていて、実に気まずい食事となった。

私が一体何をした…?

第26話 噂と約束

月曜日の朝。

教室に入った私と本音ちゃんとシャルロットが最初に聞いたのは、鈴とセシリアの大きな声だった。

「そ…それは本当に本当に本当ですのね!？」

「もしも嘘だったら針一億本飲ませるわよ!」

「い…一億!？」

朝っぱらから何を話しているのやら。

「元気だねえ〜」

「同感」

「IS学園っていつもこんな感じなの？」

「血気盛んな十代だからね。少しの事でも盛り上がれるんでしょ」

「……佳織って大人だよね…」

「君までそれを言うの？」

「これからは少し自重した方がいいのかな…」

「本当だって!この噂はね、もう学園中で持ち切りなの!今度ある学年別トーナメントでもしも優勝したら、あの仲森さんと付き合…」

「………なんか断片的に聞こえたような気がしたけど、ここは聞かなかったことにした方がいいかもしれない…」

「本音ちゃんは、あそこで皆が話している事について何か知ってる?」

「ううん。変な噂が学園中で蔓延してるのは知ってるけど、詳しい内容は知らないな〜」

「そっか……」

非常に嫌な予感しかしないけど、下手に顔を突っ込めば、それはそれで私が痛い目に遭いそうで怖いんだよね…

「……よし…ここは流れに任せよう!」

「いいの?」

「どうせ私が聞いたって教えてくれなさそうだし、だったらせめて、例の学年別トーナメントが終わるまでは大人しくしてるよ」

っーわけで、今私が言うべき言葉は一つ。

「そのの皆、もうそろそろ朝のSHRが始まる時間だよ。特に隣のク
ラスの鈴は早く戻った方がいいんじゃない？」

「か…佳織っ!？」

「い…いつの間に!？」

「さつきからいたよ…」

気が付かなかったのかよ…。

「ほらほら！解散解散！」

千冬さんのように手をパンパン！と叩いて、皆を促す。

「最近、佳織が少しだけ千冬さんに似てきた気がするわ…。」

鈴、ちゃんと聞こえてるからね。

「クラス代表も大変なんだね…。」

会社所属や代表候補生程じゃないと思うけどね。

さて、私も自分の席に着きますか。

．．．．．
．．．．．
．．．．．
．．．．．
．．．．．

「はあ…。」

やっぱり、私の危惧していた通りだったか…。

(どこのどいつかは知らないが、間違いなく私の独り言を聞いた人物
が面白半分で学園中に広めたに違いない…)

どうしてこうなってしまった…。

私は単純に、もしも優勝したら佳織に告白しようと思っただけで
あって、そこから先の事なんてまだ全然考えていないんだぞ！

そ…そりや…私としても、行けるところまで行ければ最高だとは
思うがな…。

(それにしても…優勝…か)

正直言つて、専用機を持っていない私が学年別トーナメントで優勝

するのは難しいだろう。

セシリアに鈴に一夏。

そして、最強の相手が想い人である佳織だと言うのが皮肉としか言いようがない。

(幾らなんでも、前途多難すぎるだろ……)

いや……待てよ？ 確か、教室に来る前に見た掲示板にこんな事が書いてあったような気が……。

「今月開催される学年別トーナメントは、より実践的な戦闘を想定するために、ツーマンセルでの参加を必須とする。猶、開催までにペアが決定しなかった生徒については、抽選によって選ばれた生徒同士でコンビを組むことにする。締め切りは……」

ツーマンセル……つまりはコンビで戦うと言う事だな。

ならば、私が佳織とコンビを組めば非常に高い確率で優勝出来るのではないか!?

だが、その場合はどうなるんだ……?

いや、私には関係ない!

噂の有無に関係無く、最初から優勝したら告白するつもりなのだからな!

大会に優勝し、夕日が眩しい屋上で私が佳織に告白……。

(フッフ……♡最高のシチュエーションではないか!)

よし!これならいける!!

このトーナメントで一発逆転ホームランだ!!

「な……なんか篠ノ之さんが怪しく笑ってる……」

「何を考えてるんだろ……」

.....

.....

.....

.....

.....

廊下の端。

普段はあまり人通りが少ない場所に、千冬とラウラが向き合っていた。

「それで？用とは何だ？私も暇ではないのだが？」

「実は、教k：織斑先生に聞きたいことがあるのです」

「なんだ？授業で分からない事でもあったのか？」

「冗談交じりに言う千冬とは違い、ラウラはどこまでも真剣だった。

「仲森佳織とはどんな人物なのですか？」

「何？」

佳織の名前が出た途端に、千冬の眉間に皺が寄った。

「そう言えばお前……転校初日から仲森に言い寄っていたな。もしや、『上』からの命令か？」

「……………」

「言えないのか？」

「いえ……貴女にならば」

少しだけ迷ったが、嘗て教官として指導してくれた千冬ならば大丈夫だと判断し、口を開く。

「上層部から命令を受けました。『赤い彗星をスカウトし、ドイツに連れて帰れ』……と。無論、無理矢理ではありません。極力、本人の意思を尊重しろと言われました」

「あの堅物共にしては随分と寛容な判断だな」

「彼女が貴女や篠ノ之束とも関係が深い事を知って、逆鱗に触れる事を恐れたのでしょうか」

「ふん……。普段は傍若無人を絵に描いたような連中なのに、変な所で臆病な奴等だ」

以前ドイツにいた事のある千冬は、あまりドイツ軍の上層部に対してあまり良い印象を持っていないようだ。

「ですが、今は私個人的としても彼女に興味があります」

「ほう？」

まさか……とは思ったが、まだ好意を抱くまでには至っていない事

を、ラウラの表情を見て一瞬で悟った。

「伊達に長い間、佳織の事を想っていないのだ。」

「そうだな……アイツは……」

窓から見える空を見上げながら、そつと話し出した。

「簡単に言えば、底なしのお人好し……だな」

「お人好し……ですか？」

「そうだ。目の前で誰かが困っていたら、迷わず手を伸ばす。例えそれがどんな人物であってもだ」

佳織の優しさは、見ようによつては諸刃の刃と言える。

だが、その優しさに救われた人間が多いのも、また事実だった。

千冬や束も例外ではない。

だからこそ、彼女達は佳織の事をどこまでも好いているのだ。

「それでいて、一度I Sに乗れば、まるで人が変わったかのように冷静になり、凄まじい戦闘力を発揮する」

「それは噂で聞いています。これまでに代表候補生と幾度か戦闘し、いずれも圧倒したと」

「しかも、あいつには不思議なカリスマがある。私があいつをクラス代表として認めているのも、それが最大の理由だ」

仮に転生特典などが無くても、佳織のカリスマ性は決して薄れはしないだろう。

彼女のリーダーシップは、本人が元々から持っていた物だから。

「少なくとも、佳織自身は何と言われようとドイツに行くとは言わないだろう」

「どうしてですか？」

「さつきも言っただろう。アイツは身内を放置はしないと。そんな奴が一人で外国に行くと思うか？」

「それは……」

「佳織を説得したければ、ドイツ側も相当に譲歩しなければいけないだろう」

それ以前に、束がそんな事を聞かされて黙っているとは思わないがな……と密かに思った千冬だった。

「話は終わりか？」

「あ……はい」

「ならば、早く教室に行け。今ならば少しぐらいは廊下を走っても黙認してやる」

「りよ……了解です」

去っていくラウラの背中を見ながら、千冬は静かに呟いた。

「ドイツが動き始めたか……。これから他の国も『赤い彗星』を獲得しよう」と躍起になるかもしれない

「図らずも騒動の中心となりつつある佳織を想い、心配を隠せない千冬であった。」

.....

.....

.....

.....

.....

「あ？」

放課後の第3アリーナ。

偶然にも鉢合せをしてしまったセシリアと鈴は揃って間抜けな声を出す。

「もしかして、アンタも学年別トーナメントの訓練？」

「そう言う貴女も？」

「勿論じゃない。優勝は私が頂くから」

「それはこちらのセリフですわ」

ニヤリと笑う二人。

その間には確かに火花が散っていた。

「そうだ。いい加減にアンタと決着つけたいと思ってたのよね。この機会にどう？」

「あら、それはいいですね。私も丁度同じ事を考えていましたわ」

二人が完全に臨戦態勢に入った……その時だった。

「ん？そんな所で二人揃って何をしてるんだ？」

「え？」

やって来たのは、ISを纏ったラウラだった。

「貴女も訓練に来たんのですの？」

「そんなところだ。で、お前達は……」

ラウラが次の言葉を言おうとすると、ふと鈴の目線がある一点に集中しているのを感じた。

「な……なんだ？」

「……………」

以前は授業の時だった為、よくラウラの事をよく見ていなかったが、鈴は今初めてラウラの体形をよく観察した。

「……………」

自分の体（正確には自分の胸）を見る。

「……………」

次にラウラの体（当然胸）を見る。

「……………」

最後にセシリアの体（と書いて胸と呼ぶ）を見る。

「ああ……そっか……」

何かを納得したのか、鈴は静かに歩きだし、ラウラの隣に移動した。

「な……なんだ？」

ツインテールを振り回しながら前を向く。

その目はかなり鋭くなっていた。

「とつととかかかってこいやあああああああああああ
!!!!!!!」

「え~~~~~!!?」

いきなりの状況にセシリアもラウラも揃って目が点に利ながら驚く。

「ど……どういふつもりですか!!?」

「どういふつもり……? 決まってるじゃない。今回はこのラウラと組むことにしたのよ」

「はあ~~~~!!?」

鈴の発言にまたまた驚く二人。

その顔は、まるでワンピースのギャグシーンで目玉が飛び出したような顔になっていた。

「今回のトーナメントがタッグマッチになったのは知ってるわよね？」

「え…ええ…」

「最初は誰と組むか考えてたけど、この子を見た途端にピン！と来たのよ」

「な…何を言ってるんだ…？」

「神は言っている…この子と組むべきだと…」

「貴女本当に大丈夫ですよ!？」

完全におかしくなった鈴を本気で心配し始めるセシリア。

それ程までに彼女の発言はぶっ飛んでいた。

「因みに、もうチーム名は決まってるから」

「な…なんだ？」

「その名も『ボインスレイヤー』よ！」

「頼むからそれだけはやめてくれ!!」

泣きながら懇願するラウラ。

世間知らずの彼女でも、それがどれだけ恥ずかしい名前なのは一瞬で分かった。

「それ以外には『ボインキラー』か『ボインブレイカー』しか…」

「ボインは外さないのか!？」

完全にツッコみ役になりつつあるラウラだった。

「兎に角、もうこれは決定事項だから」

「拒否権は無しか!？」

「何か文句でもあるの？」

その時の鈴からはラウラすらも完全に委縮する程のプレッシャーが放たれていた。

「い…いや…」

「だったら返事!!」

「イ…イエスマム!!」

「ちゃんと『サー』を付けなさい!!」

「サ…サー！イエスマム!!」

「なんなんですよ…一体…」

もう呆れるしかないセシリアだった。

「こうなったらもう、トーナメントで雌雄を決するしかないようですわね…」

「雌雄を決する？何を言ってるのかしら？アンタとは生まれた瞬間から既に敵同士よ」

「…もう何も言いませんわ…」

ジト目で鈴を見るセシリアにはもう、呆れしかなかった。

「なんだか興が削がれましたわ…。後はお二人でごゆっくり」

「ちよつ…セシリア・オルコット!?!私を一人にしないでくれ!!」

「ほら！早く訓練を開始するわよ!!」

ラウラの訴えは空しくアリーナに響いた。

もしかしたら、今回の最大の被害者はラウラかもしれない。

・
・
・
・
・

今日の訓練をする為に第3アリーナに向かう私と箒と一夏とシャルロット。

すると、アリーナ側からセシリアがやって来た。

その顔はとても疲れ果てている。

「ど…どうしたの？セシリア」

「なにやら、凄く疲労しているよう見えるが…」

「何かあったの？」

私達が尋ねると、セシリアは盛大な溜息をついた。

「はあく…なんでもありませんわ」

「そ…そう?」

「ああ…:それと、今は第3アリーナにはいけない方がいいですよ」
「な…なんで?」

「見れば分かる…:と言いたいですが、今は見ない方がいいかも…:」
「どっちだよ」

普段は歩き方すらも優雅なセシリアがここまで疲れているなんて
…:マジで何があった?

「とにかく、今日はもう疲れましたから、これで失礼致しますわ…:」
「あ…:」

背中を丸めながら去って行ってしまった…:

「…:どうする?」

「今日は…:やめどころか?」

「それがいいかもしれない…:」

「少し見てみたくはあるけどね」

そんな訳で、今日の訓練は中止にすることに。

後に、第3アリーナで銀髪の少女がツインテールの少女にしごかれ
ていたと言おうわさを聞いた。

それって…:いや、何も言うまい。

・
・
・
・
・
・

アリーナから引き返していると、なんだか道が振動しているように
感じた。

「…:ねえ…:一夏…:」

「何も言わないで…:佳織」

いつでも逃げだせるように構えていると、廊下の向こう側から生徒の集団が押し寄せてきた。

「き…来たあああああああ!?」

「な…なんだ!?」

「こ…これって!?」

生徒達の目は凄い事になっている。

簡単に言えば、目が血走ってる。

「仲森さあああああああん!!!」

「織斑さん!!!」

彼女達の目的はなんとなく想定できる。

だから、下手に逃げようとしても逆効果だと判断した。

「私と組んでください!!!」

「組む?」

生徒達が一斉にこっちに向かって手を伸ばす。

その手の一つに一枚の紙が握られていた。

「これは?」

あ、一夏が取った。

「なにになに?…これって、学年別トーナメントの…」

「なんて書いてあるの?」

「今度のトーナメントはタッグになるんだって」

あ…あれか。

そういや、まだ誰と組むか考えてなかった。

「私と組んでください!仲森さん!」

「いやいや!是非とも私と!」

私を狙う目的は明白だな。

でも、そこに一夏もくるなんて。

今の一夏は女の子なのに…。

「あの…佳織はともかく、なんで私?」

「だって!織斑さんって何気に実力者だし!」

それと、千冬さんの妹って言うネームバリューにも引かれたんだろ
うな。

魂胆が見え見えだっつーの。

「ふう……一夏」

「うん」

この場を一番穩便に乗り切る方法……それは。

「ごめんね！私はもうシャルロットと組んでるから！」

「因みに私は箒と組んでる」

この二人を巻き込むことだ!!

「えっ!?か…佳織!？」

「おい！一夏!？」

本当に悪いとは思うけど、今回だけは勘弁してほしい。

「そっか…それじゃあ仕方ないね…」

「他に誰か実力者っていたっけ？」

「探せばきつと見つかるよ！」

お、意外とすんなりと去ってくれたぞ。

「危機一髪…」

さて、次の問題は……

「えと……僕でいいの？」

「うん。私達ってお互いにラファールを使ってるじゃない？相性はいいと思うんだけど」

「そう言えばそうだね。それじゃあ、組もうか？」

「タッグ結成だね」

ま、仮に彼女達が来なくてもタッグパートナーはシャルロットにするつもりだったけど。

理由はさつきと同じ。

同系統の機体なら、連携もしやすいだろうし。

「一夏…」

「本当にゴメンって〜！隣にいたからつい…」

「全くお前って奴は…」

なんて言いつつも、しっかりとやるのが箒なんだよね。

私は知ってるよ。

「言っておくが、私と組んだからにはビシバシ行くからな！」

「は〜い」

ははは……早速イニシアチブを握られてるし。

(予定は大幅に狂ったが、仕方あるまい……。こうなったら、どんな結果になろうとも私が勇気を振り絞るほかあるまい!)

お?なんか決意に満ちた目をしてますなあ〜?

これはトーナメントが楽しみだ。

第27話 上級生達

私がシャルロットとコンビを組んでから約一週間。

あの日から私達は一緒に訓練をして、コンビネーションの確認などをしていった。

で、今日は小休止をしようと言う事で、訓練は中止にすることにしまして、それぞれに放課後をのんびりと過ごす事にした。

あんまり根を詰めてもいい事は何も無い。

適度な休憩も大事な訓練……と、シャルロットが言っていた。

代表候補生の言葉は心に響きますなあ。

で、そんな私が今いる場所は……

「ほえ……」

全体的に機械的な印象が強いIS学園において、なんとも違和感タップリな木製の扉。

まるで、どこぞの大会社の社長室を彷彿とさせる佇まいだ。

「ここが？」

「生徒会室だよ」

隣には本音ちゃんが一緒にいる。

私一人じゃ生徒会室の正確な場所は分からないから。

前々から楯無さんから招待はされていたんだけど、想像以上にごたついて、来る機会が全く無かった。

いい機会だから、訓練を休むこの日に来ようと思ったのだ。

「え〜つと……取り敢えずノックだよね……」

私を手を丸めて扉を叩こうとすると、それを完全に無視して本音ちゃんがドアノブに手を伸ばした。

「かいちよ〜。かおりんを連れてきたよ〜」

「ほ……本音ちゃん!？」

「い……いいのか!？」

一応、親しき仲にも礼儀ありつて言葉もあるんだよ!？」

本音ちゃんが知ってるかどうかは分からないけど。

「あら、いらっしやい」

中には、楯無さんが大きなテーブルの中央に優雅に座っていた。手元には紅茶の入ったティーカップが置いてある。

湯気が出ているって事は、まだ淹れてから時間は経っていないようだ。

「その……お邪魔します」

一応、色々と挨拶の言葉は考えてきたんだけど、本音ちゃんのいきなりの行動で全部パーになっちゃった。

ってというか、頭から飛んでいっちゃったよ。

「ようこそいらっしやいました」

楯無さんの他には、眼鏡を掛けた三つ編みの生徒がいた。

リボンの色からして三年生だ。

「え……あ……そ……初めまして」

だ…誰だっけ？なんか見た事があるような気がするんだけど……。

「貴女の事はよく本音から聞いてます。仲森佳織さん」

「私の名前を……」

「言ったでしょう？本音から聞いてると。それに、仲森さんは色々と有名ですから」

「ははは……有名ですか」

『どんな意味で有名なんですか』って聞きたかったけど、怖くて聞けなかった。

「私は布仏虚。本音の姉です。いつも本音がお世話になってます」

「は……初めまして。仲森佳織です」

すつごく丁寧な人だ……。

思わずこっちが恐縮してしまう。

「本音はこの通り、のんびりとした性格をしてるから、色々と迷惑を掛けてないでしょうか？」

「もう……お姉ちゃん」

流石の本音ちゃんも、虚さんの前では形無しみたい。

「迷惑だなんてそんな。寧ろ、私の方が本音ちゃんによく助けられるぐらいです」

「え？」

「彼女がいてくれるだけで場が明るくなるし、なにより、私に整備のノウハウを教えてくれたのは本音ちゃんですから」

「あら……」

「へえ〜やるじゃない、本音ちゃん」

「えへへ〜♡」

うん、照れてる本音ちゃんも可愛いです。

「今じゃ、私のISをいつも整備してくれるようになってるんです」

「それじゃ、本音ちゃんは佳織ちゃんの専属整備士って事になるのね」

「かおりん専属……」

専属整備士……なんかいい響きの言葉だ。

本当のプロにでもなったような気分になれるな。

ちよつと照れくさいかも。

「つて、折角来てくれたのに立ち話つてのは流石に失礼ね。適当に座って頂戴」

「はい。それじゃあ失礼して……」

適当つて言つても、殆ど座る席は決まっているようなもんだけどね。

私は迷わず楯無さんの正面に座った。

だつて、彼女の目が『私の前に座つて〜！』つて訴えてたんだもん。

因みに、本音ちゃんは私の隣。

「それじゃあ、紅茶をお出ししますね」

「わ〜い♡お姉ちゃんの紅茶♡」

「本音はお茶請けのケーキを出して頂戴」

「は〜い！かおりんの為ならえんやこ〜ら」

二人揃つて奥の部屋に行つてしまった。

残されたのは私と楯無さんだけ。

「なんかすみませんでした。結構前に誘われていたのに、中々来れないで……」

「別にいいのよ。こっちは全然気にしてないわ。佳織ちゃんだつてクラス代表として忙しかったり、訓練に明け暮れていたりしてたんでしょ？」

「一応は……」

正確には、振り回されてたつて言った方が正解だけど。

「そうそう。噂で聞いたわよ。佳織ちゃん、例の二人の転校生の片方と組んだんですって?」

「え?なんでそれを……?」

「学校って場所は、想像以上に噂の拡散が早いよ。特に佳織ちゃんは学園では知らない者がいない程の有名人。嫌でも噂は耳に入ってくるわ。私のような役職についていると特にね」

「ああ……」

忘れがちだけど、この人って生徒会長なんだよな…。

最初のヘッポコぶりを見てしまった私的には、なんとも微妙な会長様だけど。

「でも、そう言うのってなんか分かります。生徒会って学校の中心にいるから、いい噂も悪い噂も真っ先に入ってくるんですね」

「中学の時の経験?」

「はい。一応、副会長でしたから」

なんて言っても、完全に名ばかりの副会長だったけど。

あの頃にやった事と言えば、殆どが雑用だった気がする…。

「それじゃあ、また副会長を試してみる気はない?」

「……はい?」

ふ…副会長?私か?

「入学して早々に結果を残して、人望、人柄、実力共に言う事なし。しかも、中学の時に生徒会の経験もある。こんな逸材、そうそういないわよっ。」

「いやいや、結果を残せたのは完全に偶然ですし、人望と人柄は普通だと思いますよ?昔の経験だって、殆ど流されてやったようなもんだし…」

「はあく……ここも噂通りって訳ね」

「え?」

また噂?

「佳織ちゃんって妙に自分の事を過小評価する傾向がある……って、

先生達が言ってたわよ？」

「ええ〜…」

先生達も噂をしてるんかい。

「もう少し自分に自信を持ったら？」

「そう言われましても…」

私がこれまでやってこれたのは、完全に転生特典のお蔭。

悔しいけど、あのクソ神がくれた特典が無ければ、私なんて当の昔に学園中の笑いものになって、皆から見放されていたに違いない。

別に全てが特典の恩恵とは言わないけど、少なくとも戦闘に関しては何違いなく特典の影響が大きい。

私は謂わばズルをしているのだ。

そんな人間がどうして自信を持てるだろうか。

ましてや、私が模しているのはかの『赤い彗星』と呼ばれた最強クラスのエースパイロットのシヤア・アズナブルその人だ。

そんな凄い人物の力を借りるなんて、私には余りにも分不相応過ぎる。

学園では私の事を『赤い彗星』なんて言ってるけど、私にその異名は絶対に相応しくない。

寧ろ、赤い彗星の名を汚しているんじゃないかと言う気にもなってしまう。

本物のシヤアが私の事を見たらどう思うだろうか…。

絶対に失望するだろうな…。

「佳織ちゃん？どうかした？」

「えっ!？」

しまった…ちょっとボーっとしてた。

「なんだか元気が無いように見えたけど…」

「あ…なんでもありません。大丈夫です」

「そう………」

咄嗟に誤魔化したけど、大丈夫かな…？

(あの表情……普段は明るく振舞ってるけど、心の奥底には人には言えないような悩みがあるのかしら…。もしかして、彼女が異常なまで

に自分を卑下するのもそれが関係して…?)

な…なんか楯無さんにジ〜つと見られてるんですけど…。

「お待たせしました…っつて、一体どうしたんですか?」

「かいちよーがかおりんを見つめてる…。」

ナ…ナイスタイミング!

布仏姉妹が戻ってきた!

「お嬢様?どうなさったんですか?」

「ううん。なんでもないわ。っつて、学園じゃ会長って呼んでっつて言っ

てるじゃない」

「これは失礼を」

あ、これって絶対に心からの謝罪じゃないな。

だって、虚さんの顔が笑ってるもん。

「それよりも、仲森さん。紅茶をどうぞ」

「あ…ありがとうございます」

「ケーキもあるよ〜♡」

虚さんが紅茶を置き、本音ちゃんがケーキを置く。

勿論、二人分。

「それじゃあ、いただきます」

「いただきます〜♡」

いつの間にか座っていた本音ちゃんと一緒に、まずは紅茶を口に運ぶ。

少し熱いけど、飲めない程じゃない。

「お…美味しい…。」

いつも本音ちゃんが虚さんの紅茶の事をべた褒めしていたけど、これは納得だわ…。

私は紅茶の専門家じゃないから詳しい事は分からないけど、これだけは言える。

…これを飲んだらもう、市販のティーパックは飲めないわ…。

「でしよ〜?お姉ちゃんの紅茶はちよ〜美味しいんだよ〜♡」

「虚ちゃんの淹れる紅茶は世界一だもんね」

「全く…二人して…。」

文句を言いつつも、その顔は完全に照れてますよ、虚さん。

「けど、本当に美味しいです。これなら毎日でも飲みたいですね」

「あら？早速告白？」

「なんでそうなるんですか？」

素直に褒めただけなのに。

「むく…いくらお姉ちゃんでも、かおりんは譲らないよ？」

「馬鹿な事言わないの。仲森さんも困ってるでしょ？」

「でも、虚ちゃんの顔、真っ赤よ？」

「ええっ!？」

あらホント。

どうかしたのかな？

「あの…：布仏先輩」

「な…なんですか？」

「私の事は名前で結構ですよ。本音ちゃんのお姉さんに他人行儀にされるのって、なんか悲しいですから」

「そ…そうですか？じゃあ、私も名前で…」

「分かりました。虚さん」

「こ…これからよろしくお願いします、佳織さん」

「こちらこそ」

よかった…。

本音ちゃんのお姉さんなら、これからも接する事は多いだろうし。いつまでも他人行儀なのはお互いに気まずいからね。

早いうちに打ち解けられれば、それに越したことはない。

「あらあら…：意外なライバルが出来ちゃったわね？本音ちゃん」

「私だって負けないもんく…」

ライバル？なんのこっちゃ。

姉妹で何か競い合ってるのか？

「兎に角、さっきの話は考えておいて。無理強いをするつもりはないけど、私はいつでも大歓迎だから」

「そうですね…。そうさせてもらいます」

それから、私は楯無さん達と雑談をして過ごした。

この日から、私の放課後の予定に『生徒会室に行く』と言う選択肢が増えた。

・
・
・
・
・
・
・

6月も中盤に入り、本格的に学園中の生徒がトーナメントの為の訓練を頻繁に行うようになる。

そうそう、この間本音ちゃんに聞いたんだけど、整備班の人達はトーナメントには参加しないらしい。

その代わり、自分が整備したISを出場する生徒に使ってもらい、そのISの挙動で成績を決めるとの事。

つまり、私の場合は、私の成績がそのまま本音ちゃんの成績に直結する訳だ。

これは増々負けられませんな。

この日、私とシャルロットはトレーニングルームにて体を動かしている。

と言うのも、今日はアリーナが全部予約で埋まっていて、使えなかったのだ。

かと言って、何もしないのは論外。

せめて、こうして体を動かして少しでも体力を付けようと考えた。

「ふう〜…」

「少し休憩する?」

「そうだね………」

今まで使っていたルームランナーから降りて、予め持ってきていたタオルで顔を拭く。

「少し飲み物を買ってくるよ」

「分かった」

タオルを首にかけながらトレーニングルームを出る。

すぐ近くにある自販機に向かい、コインを入れようとすると、後ろに誰かの気配を感じた。

思わず後ろを振り向くと、そこにはどこかで見たような金髪の生徒がいた。

このリボンの色は……3年生か。

胸元が肌蹴っていて、妙に色っぽい。

「ふうくん……こうして近くで見ると、中々……」

「はい?」

え〜つと……どなた様?

なんて考えてると、いきなり自販機を背中に壁ドンされた。

「なっ……!?!」

「結構スタイルもいいし、肌も綺麗で……」

「あ……あの……」

わ……私はどんな状況にいるの?

「オレは三年のダリル・ケイシー。お前が『赤い彗星』の仲森佳織だろ?」

「え……つと……」

ダ……ダリルって……確かアメリカの代表候補生で、そして……

「こうして汗を掻いてる姿を見ると、こっちの方もなんつーか……昂ぶってくるな」

「た……たかつ!?!」

そ……そう言えば、この人って典型的な百合な人だった!!

や……ヤバい!?!もしかしなくても狙われてる!?!

か……顔が近づいてくる……!

「……………にひ」

わざとらしく笑うと、ダリル先輩がいきなり私の顔に流れた汗を舐めた!

「ひゃう!?!」

「へえ〜…可愛い声を出すじゃん。増々気に入ったよ」
そして、トドメの顎クイ!

先輩の目が私の目を見つめてくる……。

「オレに全てを委ねてみないか…?」

「何を……」

「オレなら……お前に最高の快楽を与えられるぜ?」

「いや……私はですわ……」

先輩の唇が私の唇に近づき、その距離がゼロになろうとした……時
だった。

「何をしてるっスか!!」

いきなり黒髪の女子が私達の間割り込んできた。

「もしかしてって思って警戒していたら、案の定だったっスわね!」

「なんだよ……。折角いいところだったのに……」

「なにが『いいところ』っスか!完全にダリルの方から一方的に迫って
たじゃないっスか!」

「いや…だって、こいつみたいな奴はこつちからリードした方がいい
と思ってる」

「リードってなんスか!リードって!」

あ…危なかった……!

割と本気で貞操の危機だった…。

つーか、このいきなり来た人は……

(あの色は2年生。黒い長髪を三つ編みにしてる)

でも、背は私よりも小さい?

先輩だと分かっても、可愛く見えてしまう。

「ほら!早く行くっスよ!」

「はいはい。分かったから、そんなに引つ張るなよ」

な…なんだったんだ…?…?…?…?…?…?…?…?…?…?…?…?…?…?…?…?…?

「アンタ……仲森佳織っスよわね?」

「そ…そうですけど……」

「私は2年のフォルテ・サファイア!アンタにだけは絶対に負けな
いっスからね!」

「何が!？」

いきなりの宣戦布告!？」

本気で意味不明なんですけど!？」

「ダリルも！私と言う者がありませんながら、浮気なんて許さないっすよ!！」

「え〜？別に愛人ぐらいいいじゃねえか〜」

「絶対に駄目っす!!」

痴話喧嘩をしながら二人の上級生は行ってしまった…。

ヤバい……心臓のドキドキが止まらないよ……。

「はあ……はあ……」

それからのトレーニングは、あまり身が入らなかった。

シャルロットに心配されたから、今日だけは早めに切り上げる事にした。

女の人にあんなにも迫られたのって、生まれて初めてだよ…。

前に千冬さんや束さんに、この少し手前ぐらいの事はされた事はあ
るけど。

流石に汗を舐められた事は無かったな…。

ダリル・ケイシー……か。

これからも今日みたいに迫られたりするのかな…。

第28話 黒い雨VS赤い彗星

やってきました学年別トーナメント当日。

試合会場となるアリーナは満員御礼と言った感じで、試合を見ようとする生徒や外からのお客さん、果ては各企業や各国から来たVIPの方々の誘導で先生達や係の生徒が忙しそうに走り回っている。

そんな中、私達は選手専用を用意された更衣室にて着替えを行っていた。

ここには私とシャルロットの他にも、一夏と箒、セシリアも一緒にいた。

それ以外にも色んな生徒が沢山いて、なんとも賑やかな感じになっている。

因みに、鈴とラウラは別の更衣室にいる。

「うわあ〜……凄いな人の数だね……」

「そうだな……。私が嘗て出場した剣道の全国大会でも、これ程の観客はいなかったぞ……」

一夏と箒が驚くのも無理は無い。

私だって驚いてるし、他の子達だって観客席の事を映しているモニターを見て、改めて緊張しているみたいだし。

けど、そんな心境とは無縁の人物が二人程いたりする。

「3年生にはスカウトが、2年生には去年1年の成果を確認しに来ている人々がいるからね。ある意味では当然だよ」

「1年生は？」

「今はあまり関係ないけど、取り敢えずは能力の確認ってところじゃないのかな？」

「でも、注目している生徒は少なからずいるでしょうね」

そう、私達の隣で現在進行形で説明をしてくれているセシリアとシャルロットの二人だ。

この二人はきつと、お互いに代表候補生と言う事もあって、こう言ったイベントには場慣れしているんだろう。

うん、慣れって怖い。

「注目している生徒だと?」

「織斑先生の妹である一夏さん。剣道で全国の頂点にまで上り詰め、尚且つ篠ノ之博士の実妹でもある箒さん。そして……」

「今や『赤い彗星』の名で世界中のＩＳ関係者に一目置かれている佳織……だね」

なんつーか……溜息しか出ないな。

「姉さんの妹だからって理由で注目されてもね……」

「私もだ。なんだか複雑な気分だ」

「でも、このトーナメントはそれを払拭するいい機会じゃないかな?」

「そうですね。お二人の実力を実際に見せつけければ、お偉方も少しは静かになるでしょう」

「セ…セシリアって結構過激だね……」

「それはきつと、皆さんの影響ですわ」

「「ええ〜……」」

私達って、そんなにも粗暴なイメージなの…?

そんな事を話しながらも、ちゃっかりと着替えは済ませている私達だったりする。

「さて、もうそろそろトーナメント表が発表されるんじゃない?」

「当日に発表って言うのも、なんだかサプライズ感があつていいよね」

「その代わりと言ってはなんですけど、トーナメント表を製作した先生方には激しく同情しますわ」

「そうだな……」

本当なら、これまで通りに専用の機械でトーナメント表を作る予定だったらしいけど、なんでかそれが突然の故障。

仕方なく、先生達や一部の生徒の手によってトーナメント表がから造られて、結果としてギリギリのタイミングでの発表になってしまったわけだ。

早く故障の原因が判明する事を祈ろう。

「お?出るみたいだぞ」

箒の言葉に皆が会話を止めて、モニターに注目する。

「どれどれ〜?って……」

「あら……」

「ほえ〜……」

「にゃんと」

モニターには一年の部のAブロックの一日目のトーナメント表が表示された。

そこには一夏や箒、セシリアの名前は無い代わりに……

(やっぱり……これだけは変えられないのか……)

私とシャルロット、ラウラと鈴の名前が表示されていた。

一年生の部 Aブロック第1試合

仲森佳織&シャルロット・デュノアVSラウラ・ボーデヴィツ
ヒ&凰鈴音

・
・
・
・
・
・

「まさか、こんな形でお前との試合が実現するとはな」

「皮肉……と言うのかな、これは」

「かもしれんな」

思った以上にラウラは落ち着いている。

原作での『一夏殺るオーラ』は全くない。

それとは逆に鈴は……

「見せてあげるわよ……貧乳の意地ってやつをね!!」

「なんで彼女はあんなにも殺気立ってるの?」

めっちゃ殺る気デス……。

一体、この短期間の間に何があったの？

「……鈴は一体どうしてしまったんだ？」

「聞かないでくれ……」

「は？」

「頼むから……聞かないでくれ……後生だから……」

「あ……ああ……」

あのラウラがここまで落ち込むなんて……非常に気になるが、今は目の前の試合に集中しよう。

「これより、一年生の部のAブロック、第1試合を開始します。選手は所定の位置まで移動してください」

お、遂にか。

私達は会話を止めて、それぞれに移動した。

私達4人は勿論、会場全体が急に静まり返る。

私はハンドガンを握りしめ、シャルロットはアサルトライフルを構える。

ラウラはいつでもレールガンを撃てるように腰を低くし、鈴は双天牙月を両手で持つ。

【それでは……試合開始!!】

試合が始まると同時に、私は手に持ったハンドガンを収納し、対艦ライフルを構えた。

それを合図にするかのように、シャルロットが一気に前に出る。

だが、こう簡単には行かせないと言わんばかりに、鈴がシャルロットの進路を妨害してくる。

「残念。ここは通行止めよ」

「そんなのは最初っから分かってるさ」

「なんですって？」

「試合前に佳織が言ってたよ。『どちらかが前に出ようとすれば、ほぼ間違いなく鈴が迫ってくる筈だ』って」

「流石は佳織……いくら前の試合でこっちの武装を完全に把握してるからって、そっから私の行動予測までするなんて！」

つーわけで、私の作戦通りに綺麗に1体1が2つ出来上がり。

後は確固撃破すればオールオツケー。
私は私でスコープを覗きながら狙いを定めて……

「……！」
撃つべし!!

対艦ライフルの銃身から、大きめの弾丸が高速で発射される。

ラウラのリボルバーカノンに勝るとも劣らないスピードで飛んでいくが……

「ふんー」

それは、彼女が翳した手によって空中停止した。

「ほう……」

ラウラが翳した手を中心に、何か不思議な力場が形成されている。

あれが試合直前にシヤルロットが言っていた
『アクティブ・イナーシヤル・キャンセラ』
『A・I・C』。

正式名称『慣性停止結界』か。

「まさか、こんな分かりやすい攻撃で私に一撃を与えられると思った
んではあるまいな?」

「まさか」

「こうなる事は想定済みですよ。」

だからこそ、こつちだって『ソレ』を撃つたんだし。

「だが……いいのか?」

「何?」

「そのままでもいいのかと聞いている」

「どういう意味だ?」

「私が撃つたのは対艦用の弾丸だぞ?」

「はっ!」

次の瞬間、空中で止まった状態だった弾丸が弾子を撒き散らして炸裂した。

「ぐあああああっ!」

当然、至近距離にいたラウラに弾子は殺到し、命中する。

A I Cを発動中だったラウラに防御する術は無く、直撃を受ける事に。

ト。

一進一退の攻防に、二人は苦笑いをしていた。

「くっ……なんで龍砲が直撃しないのよ！アンタは初見の筈でしょ！」

「これも佳織から事前に教えられてたんだよ！一緒に作戦を練っている時に、佳織の方から自分の持つっている情報を開示してくれたんだ！」

「ホント……抜かりなさ過ぎて逆に驚くわ……！」

いついかなる時も万全を尽くす。

それが佳織流の戦いだった。

「射撃戦で不利なら……」

衝撃砲を停止させて、一気に突貫する鈴。

「接近戦こっちで勝負よ!!」

「だろうね！」

だが、シャルロットがそう簡単に相手の得意な距離での戦いを許すわけがない。

一瞬で両手に握っていたアサルトライフルがショットガンに変わる。

「なっ!?!」

散弾を発射するショットガンは、距離が近づけば近づくほど威力が増す。

迂闊に接近すればいい的だった。

「そこっ！」

「きやあああっ!?!」

予想外の反撃に防御が疎かになってしまい、結果として鈴はショットガンの直撃を受ける事に。

「く……こんな事で!!」

咄嗟に態勢を整えて衝撃砲で弾幕を張りながら後退。

「まさか、シャルロットが『ソレ』の使い手だったなんてね！」

『高速切替ラピッド・スイッチ』僕の得意技さ！

距離が離れたと同時に、再びアサルトライフルに持ち替えて距離を

保つ。

「しつこい！」

「逃がさないよ！」

下手に接近すれば近接ブレードや近接用の射撃武器に瞬時に変更され迎撃、かと言って間合いを取れば遠距離用の銃に変わり弾幕を張られる。

どのような状況でも常に一定の距離と攻撃のリズムを保ち続け、攻撃と防御の両方で非常に安定した鉄壁の陣。

『砂漠の逃げ水』。資料で読んだ事はあったけど、実際にやられると、ここまで厄介だったなんて！」

「時間稼ぎ、消耗戦、陽動、使い勝手は抜群だからね！」

二人の戦いは加速する。

だが、鈴の不利は否めない。

ここが彼女にとっての正念場であった。

・
・
・
・
・

アリーナにある管制室。

ここでは千冬と真耶が試合の様子をモニターで見ている。

「見事ですなぁ〜。まさか、あんな形で戦力の分担を凶るなんて」

「あれは仲森の作戦勝ちだな。鳳の性格をよく理解し分析した結果だろう」

「仲森さんって心理戦も得意なんですわね」

「単純に古い仲だからだろう」

幼馴染故に分かる事もある。

身内を大事に思う佳織は、その傾向が特に顕著だった。

「しかも、ボーデヴィツヒさんのAICを逆手に取った攻撃でファーストアタックをするなんて。私には思いつきませんよ」

「発想の転換だな。AIC発動中は対象も動けないが、アイツ自身も動けない。それを利用したんだろう」

「簡単に言いますけど、普通はその発想に至りませんよ…」

やはり、どこかで佳織と千冬は似た者同士なのかもしれない。

「即席のタッグによる連携は、却って互いの動きを制限する可能性もある。それを考慮して試合開始直後にああいった行動に出たんだろうな」

「でも、それって…よっぽど自分に自信が無いと出来ませんよね？」

「それと、相手に対する信頼もな」

「デュノアさんが転校してきたのって、ついこの間ですよ。なのに、もうそんなにも信頼してるなんて…」

「デュノアが仲森に新武装を持って来たのが大きいんじゃないか？あれで仲森の中でデュノアに対する信頼度が上がったのかもしれない」

淡々と語る千冬だったが、その心の中では……

（おのれ…！佳織を物で釣るなど！だが、そう簡単に佳織が墮とせれば、私がつくに実行している！甘い…甘いぞデュノア!!）

嫉妬と安心が混ぜこぜになっていた。

顔では無表情を装いつつも、こんな事を考えられるのは、ブリュンヒルデの成せる技か。

「今のところ、仲森さんとデュノアさんのコンビが優勢みたいですね」「やはり、近く中距離戦に特化した凰のISでは、汎用性に優れているラファールの相手は厳しいだろう。それは以前の仲森との戦いでも証明されている」

「あの時も仲森さんが凰さんを圧倒していましたよね」

「ああ。それに加え、デュノアが持っているスキルが大きな武器になっっている」

『『高速切替』と『砂漠の呼び水』。今の世代にアレを同時にこなせる子がいたんですね…』

「そうだな。一昔前でも使い手は希少だった。だからこそ強力だとも言える」

実力だけならば互角に等しい鈴とシャルロットだが、いかんせん機体の相性が悪かった。

これが二人の勝敗を分けていた。

「さて、ここからどう転がるかな…」

・
・
・
・
・
・
・

「はあっ！」

「このっ！」

プラズマ手刀とWビーム・トマホークがぶつかり合い、火花が飛び散る。

単純なパワーは向こうの方が上だけど、出力ならこっちも負けてない！

高速で接近と離脱を繰り返しながら鏝ぜり合う。

離れた瞬間にはハンドビームガンで牽制する。

当然、向こうも大口径リボルバーカノンで攻撃してこようとするけど、その発射までにはコンマ数秒のタイムラグがある。

だから、その気になれば発射を阻止する事が出来る。

(この試合の短い間で、こっちの武装のウィークポイントを的確に把握された？私の遠距離攻撃が殆ど封殺されている！これが赤い彗星の実力か！)

ラウラのリボルバーカノンを防げるのは大きい。

あの攻撃力はこつちとしても看過できないからね。

一回でも直撃を受ければ、不利は免れない。

だからこそ、攻撃の一つ一つを慎重にしなくちゃ！

「リバルバーカノンが撃てないのならば……これだ！」

成る程……リボルバーカノンが発射不可能ならワイヤーブレードってか！

けどね、それを予想してなかったって思うのかい？

「ならば……ファンネル!!」

そっちが有線式のオールレンジ攻撃なら、こっちは無線式のオールレンジ攻撃で！

「ビツト兵器か！」

「それだけではない！」

「なんだと!？」

ファンネルを動かしながらのハンドビームガンで攻撃！

これなら手数の上でこっちが上になる！

「並列思考!？」

え?なにそれ?

私は無我夢中でやってるだけだよ!?

「そー!」

「しまった!」

驚きで操作が疎かになったのか、ワイヤーブレードの動きが鈍った瞬間を狙ってファンネルで迎撃！

4基あるワイヤーブレードのうちの3基の撃破に成功した！

「そして!」

残った最後の1基もハンドビームガンで撃つ！

「これすらも……!」

「今だ!!」

呆けている場合じゃないですぜ！

私はラウラが怯んだ一瞬の隙を狙って瞬間^{イグニッション・ブースト}加速で一気に接近し、シヤア様十八番のキックをぶちかます！

「はあああっ!!」

「がはっ!？」

派手にぶつ飛ぶラウラに追撃のファンネル！

「このままでは……はっ!?!」

「この一撃で……戦いは終わる」

そして、おまけのビームバズーカ!

以前、私はこのビームバズーカは威力と引き換えに隙が大きいと言ったが、それはファンネルと併用すれば改善できるんじゃないかって思った。

まあ、実際に出来るかどうかは微妙だったんだけど。

こうしてやってみると、意外とイケるっポイ?

「照準が定まらんか……だが!」

その威力の余波だけでも充分な筈!

っーわけで、遠慮なく発射!!

勿論、撃つと同時にファンネルは退避させるけどね。

「これが……赤い彗星の力か……」

よし! 完全な直撃とはいかなかったけど、命中はした!

でも、ビームが当たる直前にラウラの表情が穏やかだったような気が……。

・
・
・
・
・
・

なんとという力か……。

この私がるで手も足も出ないではないか…。

本来ならば悔しがるところだろうが、不思議と穏やかな気分になっている。

ここまで見事に敗北すれば、逆に清々しさすらも感じてしまう。

あの教官が認めるのも納得だ。

確かに赤い彗星……いや、仲森佳織は強い。

もしかしたら、並の代表候補生程度ならば相手にすらならないのではないか？

そう思わせるほどの實力を見せつけられた気がする。

だが、本国になって説明しようか…。

いや、それはその時になってから考えるか。

『願うか……？』

は？いきなりなんだ？

『汝、自らの変革を望むか？』

何を言っている？

意味が分からんぞ。

『より強い力を欲するか？』

何が言いたいかは知らんが、そんなものは不要だ。

確かに強くなりたいと言う願望はあるが、それは誰かに与えられるものじゃない。

自らの努力と研鑽によつて得る物だろう。

よつて、私の返答はNOの一択だ。

『……………』

今度は急に黙ったな。

本当になんなんだ？

『ならば、汝はより良い『体』を求めるか？』

か…体？何のことを言っている？

『あ…もう！つまりは、スタイルが良くなりたいたかって聞いてんの！分かる!!』

突然口調が変わりすぎだ！

と言うか、別になりたいとは思わん！

私は私の体形の事を不満に思った事なんぞ一度も無い！

『なら、スタイルのいい女の子に嫉妬とかもしないわけだ』

当たり前前だ。何を今更…。

『なら、貴女には貧乳女子の代弁者になって貰おうか』

一体何を言つて…。

『これよりVTシステムの書き換えを開始します』

.....完了』

は？

『BSシステム……発動します』

ビ……BSシステム？

衛星放送の事か？

って、なんだ!?!体が……ISが!?

やめろ……やめろ……!

やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおつ
!!!!!!

『さあ、今こそ目覚めよ……ボインスレイヤーよ』

第29話 偽りの復讐者

学年別トーナメント1年生の部の第一試合。

私とシャルロットVSラウラと鈴コンビの試合になった。

初手で私はラウラと、シャルロットは鈴にそれぞれ分かれての確固撃破作戦を敢行。

激しい攻防の末、私はラウラにファンネル↓キック↓ファンネル↓ビームバズーカのコンボをぶちかます事に成功。

これだけすれば、少なくともSEは枯渇寸前か、もしくはゼロになったかしただろう。

なんて思っていた時期が私にもありました。

「な…なんだ!？」

ビームバズーカを受けたラウラの体がいきなり痙攣したように震えだし、次の瞬間には彼女のISがどろどろに融解し、ラウラの体を覆い尽くした。

「これは…!」

この現象は…:間違いはない!VTシステムだ!

正式名称『ヴァルキリー・トレース・システム』

私も詳しい原理はよく理解してないけど、確かあれって『楽しんで強くなりたいたんだけど、どうしたらいい?』って考えに『じゃあ、強い奴と同じ姿になっちまえばいいんじゃないかね?』って答えを出した違法装置だったような気がする。

心のどこかで楽観視していた自分がいた。

この世界のラウラは一夏を初めとした特定の誰かに対して嫉妬や敵愾心なんかを全くもっていない。

だから、仮に彼女のISにVTシステムが内蔵されていても、発動なんかしないんじゃないかって。

でも、それは間違いだった。

もうちよつと色々な可能性を考えるべきだったんだ!

きっと、あれはSEが尽きた瞬間に感情レベルとかそんなものを無視して、強制的に起動するようにプログラムされていたに違いはない!

くそっ！どうしてその可能性を少しも考えなかった私！！
溶けたISSが地面に落下する。

状態が状態なだけに、損傷などは無いみたいだけど……。
それを追って私も地面に着地する。

すると、そこに試合中だったシャルロットと鈴も駆け付けた。

「ちよっと！あれは一体何なの!？」

「私にも分からん……。ただ……」

「ただ？」

「ラウラのISSのSEが無くなった途端にあのような状態に陥った
……としか言えない」

「そんな……」

本当は『VTシステムだよ』って言いたいけど、そんな事を言つ
たら真っ先に私が疑われるに決まってる。

そんなのは流石に御免だ。

「SEが……？」

「意味分らないわ……」

それには激しく同感だよ。

観客席の方も現状をよく理解できてないのか、皆が目をパチクリと
してるし。

「兎に角、試合は中止ね。私達は大人しく退避して、先生達が来るのを
待った方が……」

鈴の言葉が終わる前に、溶けたISSに変化が訪れた。

奴が明確な形を取り出したのだ。

「な……なに……？」

「二人とも。気持ちは分かるが、今は迂闊に動くな」

「う……うん……」

冷や汗を流しながら様子を見てみると、ソレは動き出した。

縦長になったと思ったら、そこから手足のようなものが生えてき
て、人型に変化していく。

その速度は非常に早く、まるで早送りで猿が人間に進化していく様
子を見ているかのようなだった。

(やっぱり……千冬さんの姿になるのか…!?)

だとしたら本気でヤバイ!

確かにデットコピーではあるけど、それでもデータには全盛期の千冬さんの戦闘能力が使われている!

そんなのと正面から戦ったら、命が幾つあっても足りないよ!

しかも、相手は千冬さん本人じゃなくて、あくまで感情の無いシステム。

手加減とか容赦とかする筈もない。

内心、私が本気で焦っていると、なんだか様子がおかしい事に気が付いた。

(あれ……?)

なんか……体がごつくないか?

なんつーか……まるで男のような……

前身に皺のようなものが形成されていき、頭は頭巾のようなものに見えた。

「これは……まさか……!?!」

いやいやいや!そんな事ってあり得るのか!?

時間にして僅か数秒。

その間に目の前にある『ISだったもの』が『全く別の存在』に変わった。

そう……それは……

「「「「ア……アイエエエ!? ニンジャ!? ニンジャナンド!」「「「「

漆黒の体躯を持つニンジャスレイヤーだった。

いや、『擬き』と言うべきか。

あれはニンジャスレイヤーじゃない。

本物はあるなにも無闇矢鱈と殺気を飛ばしたりしない。

つーか、観客の皆が全く同じ反応をしたことに誰もツツコまないのね。

「か……佳織……あれって……」

「ああ……鈴。多分、お前が考えている通りだ」

「やっぱり……」

「えっ？ええっ？」

私と同じ知識を持つ鈴は、即座にあれの姿がなんなのか理解出来たみたい。

一方のシャルロットは完全に状況が分からずに置いてきぼりになつてるけど。

『ボ……………すべし……………』

「「えっ？」」

今こいつ……………喋った？

『巨乳殺すべし!!』

……………。

「「「喋ったあああああああああ!!」」」

いや、それにも驚きだけど、喋った言葉にも耳を傾けようよ！

この似非ニンジャスレイヤーはなんて言つた？

「……………ねえ……………もう状況についていけないんだけど……………」

「奇遇ね。私もよ……………」

そこ〜！諦めないで〜！お願いだから戻ってきて〜！

心の底から困惑していると、山田先生からのプライベート・チャネルが聞こえてきた。

『仲森さん！デユノアさん！凰さん！聞こえますか!?!』

「「山田先生？」」

どうやら、この通信は私達三人に行っているようだ。

『今すぐに教師部隊を突入させます！だから、貴女達はすぐに……………』

「なんだと？」

それはヤバいかもしれない…。

もしもあれが本当にニンジャスレイヤーを模しているのならば、間違いなくニンジャの掟に従うはず。

だとしたら、集団で何も言わず襲い掛かるのは非常に危ない！

「それはダメだ！」

『え!?!何を言ってるんですか!?!』

「奴が本当に姿の通りのニンジャならば、そんな事をした途端に何をするか分からない。迂闊な事はやめるべきだ」

『でも！だったらどうしたら！』

「大丈夫だ」

『はい？』

「相手がニンジャならば……」

私は少しだけ近づいて、手持ちの武装を全て拡張領域に収納した。

「こちらもそれ相応の対応をすればいいだけの事だ」

『な…仲森さん!?いきなり何を言って……』

このままじゃ埒があきそうになるので、また通信を強制カット。

「鈴……」

「分かってるわ。気を付けて」

「了解だ」

「ふ…二人とも?」

鈴はシャルロットを連れて端の方に移動した。

アイツが本当にこっちの予想通りの反応をするかは分からない。

でもやってみる価値はある筈だ!

え〜つと…手と手を合わせて合掌して、それから…本名を名乗

るニンジャは少なくて、大抵がニンジャネームを名乗るんだっけ?

だったら私は……

「ドーモ、ハジメマシテ、シヤア・アズナブルデス」

済みません……この一時だけはこの名前を名乗らせてください…

!

「あ…挨拶!?何を考えてるのさ!?そんな事をしてたら攻撃される!っ

て言うか、シヤア・アズナブルって何!？」

シャルロット「サン、ちよつと五月蠅いですよ。

『ドーモ、シヤア・アズナブル「サン。ボインスレイヤーデス』

相手も同じポーズで挨拶した!

やっぱり、こいつはニンジャなんだ!

「なんで挨拶を返すの!?意味が分からないよ!？」

「あれが礼儀ってヤツよ」

「何気に冷静だよね鳳さんは!？」

「私の事は鈴でいいわよ」

完全にツツコみ役が定着してますよ、シャルロットⅡサン。

……あれ？シャルロットのツツコみに夢中になっててスルーちゃったけど、こいつ…なんて名乗った？

「ボイン…スレイヤー…？」

なんちゅーネーミングだ…！

恥ずかしくないのか!?

ほら、観客の皆さんも逃げる事を忘れて顔を赤くしてるし！

「……………」

「なんで急に眼を逸らすの？鈴」

「別に逸らしてないし」

「いや！思いつきり逸らしてるじゃん！」

「気のせいじゃない？それよりもシャルロット、お尻出てるわよ」

「出でないよ!!」

もう完全にコントと化してるじゃんか。

あと、ISスーツなんだから、ある意味では半分お尻出てるよ。

「ボインスレイヤーⅡサン。何故ラウラを取り込んだ。貴様の目的を言うがよい」

『我が目的は唯一つ！巨乳殺すべし！貴様も巨乳！故に殺す!!』

「何故に巨乳を殺す？」

『それが我が使命が故！それ以外に理由など無い!!』

やはり、所詮はプログラムか。

こいつにはニンジャスレイヤーⅡサンのような信念が一切無い。

空虚な器に過ぎない。

「いいだろう……」

「佳織……？」

「私はニンジャではない。だが、私の大切なクラスメイトをこのまま放置しておく程、愚かでも無い」

『ならばどうする？』

「知れた事。貴様の中にいるラウラを救出する！それこそが私にとってたった一つの勝利条件だ！」

ISのパワーアシストとシヤア様譲りの反応速度を用いれば、なん

とか戦えるはず！

エネルギーはまだ少しだけ余裕があるし。

ビームバズーカとかが外部エネルギーパック式でよかったよ。

そうじゃなかったら、ヤバかったかもしれない。

「では……行くぞ!!」

『応!!』

イクニッション・ブースト

瞬時 加速で一気に加速、そのまま拳を振り上げる！

相手もそれに合わせるように、加速して拳を握りしめた！

『イヤ

!!!』

オタク知識で得た私の似非カタテでどこまで通用するかは分からないけど、少なくとも、ここで逃げると言う選択肢だけは絶対に無い

!! 私達の拳がぶつかり合い、その炸裂音がアリーナ全体に響き渡った。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

観客席で見ていた一夏達一行は、目の前の光景に言葉を失っていた。

いきなりのラウラのISの変化。

どこかで見えた事のあるような姿になったISと、壮絶な戦いを繰り広げている佳織。

力と力。

技と技。

拳と拳の応酬。

それはまさに『ニンジャ』同士の戦いそのものであった。

実際には二人ともニンジャではないが。

それでも、その体の中にあるニンジャソウルは紛れも無く本物である！

「ボインスレイヤーって……」

「セ…セシリア？さつきから頭を抱えてどうしたの？」

「なんでもありませんわ……」

セシリアはこの中で唯一、ボインスレイヤー誕生の瞬間を目撃した人物。

それ故に色々と思うところもあるのだろう。

「佳織の奴……いつの間にかこれ程のカラテを……」

「いや、あれは多分、見よう見真似だよ」

「なんだって？」

武の心得がある筈としても佳織のカラテは見事の一言だったが、それが真似事だと知り、怪訝な表情と化す。

「佳織は昔から『その手』の知識は沢山持ってた。その知識と今の自分の反応速度に加え、ISのパワーアシストでなんとか戦ってるんだと思う」

「ならば……あれは全て即席で行っているの？」

「そうなるね」

「門前の小僧、習わぬ経を読む……と言うヤツか」

物真似だけで体格で優れている相手と互角に渡り合っている。

その事実がただただ凄く感じた筈だった。

物真似なのはお互い様だが。

そんな中、唯一ついてこれていないセシリアは……

「頭が痛いですわ……」

一人頭を押さえていた。

.....

・
・

「イヤーツ！」

『グアーツ！』

私の拳がボインスレイヤーⅡサンの顔に命中し、

『イヤーツ！』

「グアーツ！」

ボインスレイヤーⅡサンの蹴りが私のお腹に直撃する。

(強い……………！)

こうして拳を交えるとよく分かる。

例え存在は偽物でも、その実力は本物だ！

そーいや、誰かが言っていたっけ。

『偽物が本物に勝てないなんて道理は無い』って。

全くもってその通りだよ！くそっ！

「イヤーツ！！」

『グ……………！』

し…しまった！

こっちの蹴りが掴まれた！

『イイイイイイイヤアアアアアアアアアツ！！』

そのままジャイアント・スイングされて、地面に投げ飛ばされた！

「くっ……………！」

「佳織っ！！」

二人の叫ぶ声が聞こえる…。

ISに守られていても、全身がめっちゃ痛い…！

『イヤーツ！！』

追撃のスリケン!!数は…………

「ええいー！面倒!!」

咄嗟にマシンガンを取り出して、飛んでくるスリケンを迎撃！

半ば地面に横たわっているような状態だったから当たるかどうか

は微妙だけど、やらなきややられる!!

「当たれ!!」

迎撃……じゃないけど、スリケンを逸らす事には成功して、結果として一個も命中はしなかった。

『見事なワザマエ!一瞬の判断でスリケンの迎撃に最も有効な武器を選び、回避してみせるとは!』

「どうも……」

今のは完全に偶然だった…。

同じ事をもう一度しろと言われても絶対に出来ない…。

「はあ…はあ……」

膝を押えながら、なんとか立ち上がる。

少しでも気を抜けば、膝が爆笑する…。

早く救出しないと、ラウラの体力が持たない!

『だが、もう体の方が限界ではないのか?』

「かもしれない……だが!」

『む?』

頬を落ちる汗を拭い去り、地面に払う。

「ニンジャの戦いとは、限界を超えてからが本番ではないか?」

『ゴウランガ……!』

なんて強がってはみたものの、本当はとつくの昔に限界なんて迎えてるんだよ。

それでも、救いたい子がいるんだ!!

「なんで佳織は武器を使わずに無手で戦おうとするの?佳織の実力なら……」

「ノーカラテ・ノーニンジャよ」

「へ?」

「ニンジャの基本は物理攻撃の戦闘術であるカラテであって、それを怠っていたら、どんなニユーク・ジツも全く意味を成さないのよ。古事記にもそう書かれているわ」

「え……ええ……つと?コジキ……つて?」

鈴は腕組みをしてこつちをジツと見ている。

あんな風に見られたら、増々負けるわけにはいなくなるじゃない！

体力、SE共に尽きかけてる…。

ラウラの事も考えれば、これ以上、戦いを長引かせるわけにはいかない。

私の状況を一言で言えば『ナムアミダブツ！』だ。

でも、このまま絶望的なまま終わらせはしない。

どこぞの指輪の魔法使いじゃないけど、私の手で絶望を希望に変えてやる！

『イヤアアアアアアアアアアツ!!!』

第30話 お前は私を怒らせた

佳織が変異したIS……ボインスレイヤーと死闘(?)を繰り広げている光景を観客席で見ているのは、一夏達だけではなかった。

「佳織さん……!」

彼女の事を誰よりも尊敬している四組のクラス代表であり日本代表候補生でもある少女、更識簪も悲痛な顔をしながら佳織の戦いを見ている。

「あ……!」

佳織がフルスイングの末に地面に投げ飛ばされる。

その途端に周囲からざわめきが零れる。

「佳織さん!」

まるで自分の事のように涙を浮かべる簪。

彼女がたった一人で戦っているのに、何も出来ないでいる自分の事を歯痒く感じていた。

「本当に……私は何も出来ないの……」

彼女も佳織と同じ趣味を持つ人間の一人。

故に、ニンジャの掟はよく分かっていた。

可能ならば今すぐにでも駆け付けたい気持ちで一杯だが、仮に行けたとしても自分に出来る事は何もない。

誰かが一緒に戦う事が許されるのならば、とつくに教師部隊やステージにいる鈴やシャルロットがやっている筈だから。

「今の私に出来る事……それは……」

必死に頭を巡らせる。

自分に出来る事は何か?

そうして考えている間にも、佳織はふらつきながら立ち上がる。それを見た簪は、無意識の内に声を上げて叫んでいた。

「頑張れ

!!佳織さん

ん!!!」

普段の彼女からは想像も出来ない程の音量。

それだけ、簪が佳織を心配している証拠でもあった。

「かおり~~~~~ん!!!がんば~~~~~ん!!!」

「ほ…本音?」

いつの間にか隣に座っていた本音も、同じように叫んでいた。

「大丈夫だよ、かんちゃん」

「本音…?」

「かおりんが誰かを守ろうとする時は、絶対に負けないから」

そう簪に言い聞かせる本音の顔は、とても大人びていた。

「その通り。私達が信じないで、誰が佳織ちゃんを信じるの?」

「お姉ちゃんまで……」

神出鬼没な簪の姉、更識楯無も現れ、その手に握られた扇子には『必勝』と書かれていた。

「と言う訳で……佳織ちゃ……ん!!!負けちゃ駄目よ……!!!」

楯無も二人に負けないぐらいの大声で佳織に声援を送る。

そんな彼女達の姿に、少しずつ周囲の生徒達も表情が変わっていき、

「そうよ……。皆、私達も応援しよう!」

「賛成!」

「あんな奴に大切な学園を荒らされるとか、絶対に嫌だし!」

急に顔が生き生きとしだして、活気が戻る。

「仲森さあ……ん!!!負けるな……ん!!!」

「そうよ!!そんな奴、ガツンとやっちゃえ……ん!!!」

「赤い彗星は伊達じゃないってところを見せてよね……ん!!!」

次第に声援の輪は広がっていき、最終的には簪達がいた観客席一帯が佳織への声援に包まれていた。

片方の観客席が声援に包まれたのなら、当然のようにもう片方の観客席も同じ様に声援に囲まれた。

「佳織くくくく!!成せばなる!!自分を信じて!!」

「お前なら絶対にやれる!!だから、最後まで決して諦めるな!!」

「私も信じていますわ!!佳織さんの勝利を!!!だから!!!」

「二いつけくくくく!!!佳織(さん)くくくくく!!!」

主に一夏、箒、セシリアの三人が声を上げているが、それに釣られるような形で皆も応援をしている。

「負けんじやないわよくくく!!」

「頑張れくくく!!!」

「そこよ!いけ!!」

皆の声がアリーナ全体を包み込む。

その声が、佳織に最後の力を与えてくれた。

・
・
・
・
・
・
・

「凄い……!アリーナにいる皆が佳織を応援してる……」

「そうね……。本当なら逃げ出したいでしょうに、それでも佳織の事を信じてくれている」

やっぱり佳織は凄い。

相手の方が上手なのに、決して諦めようとしてない。

ここから見える佳織の目は……全く死んでいない。

「聞こえる……皆の声が……仲間たちの声が……」

さつきまで俯きかけていた佳織の背筋が急に伸びた?

しかも、なんか上を向いて呟いてるし……。

「だ…大丈夫かな？流石の佳織も、体力も機体のSEももう限界に近い筈だけど…」

「確かにね。だけど、それでもやるのが佳織って女の子なのよ」
昔からそうなのよね。

諦めが悪いって言うか、往生際が悪いって言うか。

兎に角、自分から背中を見せるような真似だけは絶対にしない子なのよ、佳織は。

『周囲からの声援がシャア・アズナブル∥サンに力を与えるか…！だが！それでも越えられぬ壁が我だ!!それを思い知るがいい!!』

好き放題言ってくれちゃって。

あんなパチモン、私的にも許せないのよね。

急に佳織の体がフラ…っと前に倒れそうになる。

「か…佳織!!やっぱりもう限界なんだよ!!」

シャルロットが必死に叫ぶが、私は耐えた。

本当は私だって叫びたいほどに心配なのよ!

でも、私は黙って佳織の戦いを見守るって決めたんだから!

佳織の体が地面につきそうになった瞬間…佳織の体が消えた。

「え?」

そして、いつの間にか敵の懐に飛び込んでいた。

『なにっ?!』

流星のアイツも一瞬で間合いを詰められては、そう簡単に対処は出来ないようで、ほんの少しだけ、でも確実に隙が出来ていた。

「肘打ち!!イヤーツ!!」

『グワーツ!』

「裏拳!!イヤーツ!!」

『グアーツ!!』

「正拳!!イヤーツ!!」

『グアーツ!!!』

ボインスレイヤーの腹部に見事な三連コンボが炸裂した!

あれは流石に効いたでしょ!!

けど、佳織のターンはまだ終わらない。

「イヤアアアアアアアアアアツ!!!」

瞬時に背後に回った佳織の拳がボインスレイヤーの顔面にヒット

!

そのまま凄い勢いで地面に激突する。

『グアアアアアアアアアアアアアアツ!』

地に伏したボインスレイヤーにトドメと言わんばかりに突っ込んでいく佳織。

その目は完全に何かを狙っていた。

「先程の攻撃でようやく分かった!そこにいるな!ラウラ!!」

分かった...?そこにいる...?

「ま...まさか!?!」

さっきのラツシユは...その為に!?!

『や...やめろ!!』

「イヤ————ツ!!!!!!」

佳織の渾身の手刀がボインスレイヤーの腹部に突き刺さる!!

そして、その状態のまま、何かを引きずり出そうとしている。

「あ...あれは!?!」

「やっぱり...!?!」

アイツの中から出て来たのは...

「ラウラ!」

なんでもか全裸の状態のなっているラウラだった。

佳織は気絶しているラウラをお姫様抱っこしたまま後退し、私達の

所まで来た。

「頼む」

「分かったわ。この子は私達に任せて」

シャルロットも無言で頷く。

向こうでは、ボインスレイヤーが腹を抱えて膝をついている。

『グ...グオオオオ...』

もうああなったらニンジャじゃないわね。

唯の化け物だわ。

何を思ったのか、佳織は再びヤツの元まで行った。

「もう勝負はついた」

『何……を……』

「最初に言ったはずだ。私の勝利条件はラウラを救出することだと。それは無事に達成された。故に、この勝負は私の勝利だ」

これは佳織なりの慈悲なのかしら…。

まさか、機械にまで情けを掛けようとするなんて…。

「で…でも、どうして佳織はラウラの居場所が分かったんだろう？」

「さっきのラツシュよ」

「え？」

「あの連続ラツシュの時に攻撃しながらラウラがどの位置に取り込まれているのか探っていたのよ」

「と言う事は…まさか！佳織が最初から無手で戦っていたのは…。」

「多分、ラウラの場所をより正確に探る為でしょうね。武器越しよりも確実性はあるもの」

「そ…そこまで計算に入れていたなんて…。」

「前に佳織が言ってたわ。戦いとは常に二手三手先を考えて行うものだって」

「いやいや…幾らなんでも先を読み過ぎだよ…」

「それには同感だわ」

なんて言ってみたものの、あれは完全に場の流れに任せられた結果、無手で戦わざるを得なかったに違いないわね。

昔から佳織は信念はあっても流れには逆らえない、不思議な性格をしていたから。

まあ…勘違いとは言え、シャルロットがそれで納得したんだから、今はそれでいいか。

『まだだ……我には使命が……』

うう…私が名付け親みたいなものだけに、すつごく恥ずかしい…。

誰にも知られてないって言っても、確実に黒歴史確定ね…。

「……いいだろう。貴様に偉大なる先人の言葉を教えてやる」

『なんだと……?』

……? 一体何を言うつもりかしら?

「貧乳はステータスだ!!! 希少価値だ!!!」

『「ナ…ナンダツテ——!?!」』

あ、思わず一緒に叫んじゃった。

って、そうじゃなくて!

『ステータス……希少価値……だと……!』

「そうだ。嘗てこの言葉を言った女子高生は、自らの貧乳を何よりも誇っていた。誰に何を言われようとも、貧乳である事を卑下などしなかった」

そ…そんな子が世の中にいると言うの…!?

しかも、女子高生って……

「私と同じ……」

「ちよ…鈴っ!?なんで鈴もダメージを受けてるの!?!」

最も多感な時期である高校時代にそんな言葉を残せるだなんて……。

それに比べて私は……。

「こんなんじや駄目ね……」

「鈴……?」

「決めたわ!私もう……胸が大きい子を憚むのをやめる!」

「そ…そう……」

なんか隣でシャルロットが呆れているけど、今は無視で。

私も自分の胸に自信を持つわ!

佳織が言ってくれた言葉を抱きながら!

希少価値でステータスな私の魅力で佳織をメロメロにしてみせるんだから!

『グオオオオオオオオオオオオオツ!!!』

なんだか苦しんでるわね。

もしかして、自分の使命を否定されて、プログラムが自己崩壊をしてるのかしら?

「あ、隙だらけ」

分かってても言っちゃ駄目よ、佳織。

「イヤ——！！！」

最後の一撃はWビーム・トマホークでの一刀両断。

ここまでできたら、もう拳にこだわる必要も無くなったのかもしれない。

ボインスレイヤーの斬られた後からは火花と紫電が散っている。

「勝負ありだ、ボインスレイヤー!!サン。潔くハイクを詠むがいい」

『ひ…貧乳も…巨乳も皆…同じ胸…』

何気に五・七・五になってるわね。

意外なところで律儀な奴。

『見事なワザマエだった…シャア・アズナブル!!サン…では…サ

ヨナラ——！！！！』

最後に一言言い残して、ボインスレイヤーは爆発四散した。

「なんで…なんで最後に俳句を詠むのさ…!!?あと、季語が入ってなかったんですけど…!!」

佳織の勝利を祝うように湧き上がるアリーナを余所に、シャルロットの全力のツツコみが炸裂した。

・
・
・
・
・
・
・

うう…私は…どうして…。

『ど…どうしたの?どこか痛いのか?』

強いて言えば、心が痛い…。

『ハ…心?』

皆に迷惑を掛け、お前を傷つけてしまった…。

本当に済まない……。

『いやいや！それを言ったら私も悪かったよ！』

何を言っている……お前は被害者じゃないか……。

『別に私は被害を受けたなんて思っていないんだけど……』

お前と言う奴はなんで……。

『つーか、私の方も思いっきり殴ったり蹴ったりしちやったし……』

あれは完全に不可抗力だろう……。

それこそ気に病む必要はないと思うぞ。

『うーん……でもなあ……』

これでクラスの皆や教官に嫌われたら……私は……。

『だ……大丈夫だよ！普段は厳しそうに見えても、本当は優しいのが千

冬さんだし！それは君だつてよく分かつてるでしょ？』

それは……

『それに、クラスの皆もこんな事ぐらいで君を見限ったりはしないよ。

もしも誰かが何かを言ってきたとしても、私が何とかする！これでも私はク

ラス代表だもん！大丈夫！』

ふふ……その根拠無き自信はどこから出てくるんだ……？

『どこからと言われましても……』

ああ……確かにこれは教官の仰る通りだ。

彼女は間違いなく『底なしのお人好し』だ。

周りの女子達が彼女に惹かれるのも納得かもしれない……。

『私だけは絶対に君の傍にいる。私は君を……裏切らない』

こんな風に優しくされたら……私だつて……

仲森佳織……私はお前を……

第31話 真の忍殺

「う……うん……?」

瞼を貫通して差し込む光に反応して『彼女』は目を覚ます。

「ここ……は……?」

「目が覚めたようだな」

すぐ傍で声がする。

この声は間違えようがない。

彼女が最も尊敬している女性であり教官『織斑千冬』だ。

「ここは学園内の保健室。お前はあの後すぐに運ばれたんだ」

「あの後……?」

頭に手を当てて、少しずつ記憶が蘇っていく。

「そうだ……私は……」

思い出した。

彼女……ラウラ・ボーデヴィツヒは佳織に敗れた後、謎のシステムがラウラの意思を無視して強制的に発動し、それから……

「きよ……教官! 彼女は……仲森佳織は……痛っ!」

「あまり無理をするな。お前の全身に無理な負荷がかかった上に、佳織の拳や蹴りを受けたんだ。それによって筋肉疲労と打撲跡がある。まあ、それ程酷くは無いから、回復は早いだろうが」

「そう……ですか……」

起き上がりかけていたラウラは、再びベットにゆっくりと寝転んだ。

その時、自分が普段から付けている眼帯が外されている事に気が付いたが、気にする程でもないと判断し、何も言わなかった。

「あの時の状況は覚えているか?」

「はい。私は仲森佳織に敗れ、その直後に私のISが変貌して……」

「そうだ。……これから話す事は重要案件な上に機密事項なのだが、あの場にいた全員が見ていたから……。機密も何もあったもんじやないか……」

はあ……と溜息をこぼす千冬。

これまで、そしてこれからの仕事の事を考えると、そうせずにはいられないのだろう。

「VTシステムの事は知っているか？」

「あ……はい。確か、正式名称はヴァルキリー・トレース・システム。過去のモンドグロッソにおいてヴァルキリーを受賞した者の動きを文字通りトレースするシステムであり、そして……」

「ああ。アレはIS条約において現在、どの国家や企業、組織等で研究や開発は勿論、使用も禁止されている代物だ。それがお前にISに搭載されていた」

「……………」

沈黙しているが、ラウラは決して沈んでいるわけではなかった。

彼女の意識が飲まれる瞬間、確かに聞いたのだ。

『VTシステムを書き換え、BSシステムにした』……と。

それなのに、実際に発見されたのはVTシステム。

この謎のズレがどうしても気になった……が、ここで尋ねても答えは出ないであろうことは明白だった。

なにより、今の自分は疲弊している。

今は体を休める事が優先だろう。

「……アレは実に巧妙に隠蔽されていた。本来ならば操縦者の精神状態や意思、機体の破損状態等がトリガーとなつて発動する筈なのだが、今回発見された物は少し違った」

「……SEが無くなったと同時にパイロットの意思等に関係無く、強制的に発動するように……ですか」

「分かっていたのか……」

軍人故の洞察力か……と千冬は思ったが、実際は単純に覚えていただけの事だ。

「現在、学園側からドイツ軍に向けて問い合わせをしている。近いうちに委員会からの強制捜査が入るだろうな」

淡々と事務的に話す千冬の言葉を聞きながら、ラウラは虚空を見つめて、先程の夢の事を思い出していた。

『夢』の一言で片付けるには、余りにも鮮明な記憶。

「私は君を裏切らない……か」

「どうした？」

「い……いえ！なんでもないです……」

小声で呟いたつもりだったが、地獄耳の千冬には聞こえていたようだ。

「あの……先程聞きそびれましたが、仲森佳織は……」

「仲森なら、隣のベットで寝ている」

「え？」

千冬が隣のベットを遮っているカーテンを開くと、そこには顔や腕などにガーゼや包帯を巻いている佳織が静かに寝息を立てていた。

「なっ……!?!」

明らかに自分よりも重傷な佳織を見て、言葉を失うラウラ。

「お前を救出した後にISが強制解除され、仲森は倒れてしまったんだ。保健の先生が言うには、ずっと張りつめていた緊張の糸が切れると同時に、今まで蓄積していた疲労が一気にきたせいらしい」

「では、あの傷は……」

「あれか？暴走したお前のISと壮絶な格闘戦を繰り広げたんだ。ああもなる」

「格闘戦……」

なんとなくではあるが、救出される瞬間の事だけは明確に覚えている。

いきなり目の前が明るくなり、それと同時に、誰かに手を握られて引っ張られた。

ISを纏っていたにも拘らず、その手はまるで生身の手のように暖かかった。

「……!?!」

急に顔が熱くなった。

思わず両手を自分の胸の上で重ねる。

「お前……まさか……」

「え？」

いきなり千冬の顔が怪訝な表情になる。

(また墮としたのか……佳織……)

佳織が皆に好かれている事実には、教師として喜ぶべきか、一人の女として嫉妬すべきか、理性と本能の狭間で密かに苦悶する千冬だった。

「取り敢えず、今日はここでゆつくりと体を休めるように。私は事後処理がある為もう行く」

「わ……分かりました……」

椅子から立ち上がり、保健室のドアへと向かう。

その途中で振り返り、念を押すように言う。

「そうだ、お前に限ってないとは思うが、一応言っておくぞ」

「な……なんでしょうか？」

「いくら無防備とは言え、寝込みを襲うような真似だけはするなよ？
(それが許されるのは私だけだからな)」

「と……当然です！」

「ならいいのだがな。ソイツは同性に妙にモテるからな」

「そうなんですか……」

フツ……とニヒルな笑みを浮かべ、最後にこう呟く。

「お前が想像している以上にライバルは多いぞ。………私も含めてな」

「はい？」

それだけを言い残して、千冬は保健室を後にした。

佳織と二人つきりになった保健室。

急にソワソワしてきた。

「な……なんだ……このモヤモヤと言うか……ドキドキと言うか……言葉では言い表せないような気持ちは……」

そつと隣の佳織を覗き見る。

頭などに包帯を巻いてはいるが、その美しさは全く失われてはいなかった。

本人が起きていたら否定するだろうが。

「お前が……救ってくれたのだな……」

痛む体を我慢しながら、ラウラは佳織が寝ているベットの傍まで向

かう。

そして、その手をそつと握りしめた。

「本当に……本当にありがとう……佳織……」

涙を流しながら微笑むその時の彼女の顔は、とても可愛らしく、美しかった。

眼帯が付けられていて今まで隠れていた金色に輝く目が、静かに輝いていた。

・
・
・
・
・
・
・

「トーナメントは事故により中止になったけど、今後の個人データの指針とする為、全ての一回戦だけは行う事にする……か」

「中止の原因は絶対に今日の出来事だろうけど、完全に中止にしない辺りが、IS学園らしいって言うか……」

「何が何でもデータだけは取るぞ！と言う意思が見え見えだな」

「その辺りは仕方ありませんわ。学園側もIS委員会に各生徒のデータ等を提出しなくてはいけませんから」

「ああ……大人って大変ね。私は絶対になりたくないわ」

「なりたくなくても、時間が経つちやえば嫌でも大人になるけどね」

「ほ……本音さんって、意外とシビアな事を言いますのね……」

「思ったよりもリアリストなんだな……」

「こんな会話を学食でしているのは、毎度お馴染みの佳織ラブーズの面々。」

今回はそこにシャルロットも加わっているが。

全員の手元にはそれぞれにドリンクが置かれていて、今が食後なの

は誰にも分かった。

「まず確実に箝口令が敷かれるでしょうけど、絶対に意味無いわよね」

「今回は流石に目撃者が多すぎる。しかも、声援まで送っていたからな」

「まあ：黙れと言えば皆は黙っていてくれるとは思うけど、確実に記憶には残るよね…」

「色んな意味でインパクト絶大だったからね……」

遠い目をして呟くシャルロットの顔は、どこか疲れ果てていた。

「だが、今回も佳織のお手柄だったな」

「まさか、あの佳織さんがあんな風な戦いをするとは思いませんでしたわ」

「意外と言えば意外だったけど、凄かった事実は変わらないよね」

「そうね。私とシャルロットなんか、あれを間近で見てたから、すっごい迫力だったわよ」

「同時に、佳織がどうして『赤い彗星』って呼ばれているか、実感出来た気がするよ…」

コンビを組んで分かった、佳織の凄さ。

恐ろしく冷静なように見えて、その心の奥底にはとても熱いものを隠し持っていた。

頭はクールに、心はホットに。

言葉で言えば簡単だが、これを実践出来ている人間は非常に少ないだろう。

「その佳織は今、保健室なのよね？」

「ああ。戦いの最中は分からなかったが、実は全身にかなり無理をさせていたようだな、急いで保健室に連れていかれたよ」

「お見舞いに行きたいですけど、流石にもう時間が……」

「それ以前に、かおりんはヘトヘトになってスヤスヤ寝てると思うから、邪魔したら駄目だよ」

「分かっているって。佳織の睡眠を邪魔するなんて誰もしないよ」

「っーか、暗黙の了解よね」

鈴の言葉に全員が頷く。

「にしても……」

「あら？急はどうしたんですの？シャルロットさん」

「いやね……言動とか色々ツツコみどころが多かったけど、戦闘だけをピックアップすれば、今日の佳織ってカツコよかつたなあ〜って思って」

「」「え？」「」

遠い目の次は熱のある顔になるシャルロット。

ほう……と息を吐く彼女の顔を、ここにいる全員が一度はしたことがある。

そう、この顔は……

((恋する乙女の顔!!))

だが、当の本人は己の抱いた感情が佳織に対する恋心の始まりだと自覚はしていないようで、それを瞬時に察した少女達は同時に密かにホッ……と胸を撫で下ろした。

約一名、撫で下ろす程の胸が無い者もいるが。

「あ？」

「り…鈴？どうしたの？なんか凄い顔になってるよ？」

「なんか、どっかで誰かが私の悪口を言ってる気がする…」

口は災いの元。

皆さんも気を付けましょう。

「優勝……チャンスが……消えて……」

「当然……交際も……無効に……」

「そげなこと……そげなこと……!!」

食堂の隅で喚いていた女子達がいきなりどこかへと走り去っていった。

「なんだろう？」

「例の噂の件が無効になった事を嘆いている、佳織のファンの子達じゃない？」

「あ〜アレね。私は別に気にしないけど」

「アタシも。そんな噂に右往左往するよりは、真正面から挑んだ方が

よっぽど健全だわ。箒もそう思うでしょ?」

「そ…そうだな! あははは…」

「ん? どうしたの?」

「なんでも無いぞ! うん! ターセル様々だなく!」

「…変なの」

完全に怪しまれてしまった箒だったが、今の彼女はそんな事を気にしている余裕は無かった。

(おいおいおい! トーナメント前の『どんな結果になっても告白しよう』と思っていた私はどこに消えた!? と言うか、こんな雰囲気になって、私だけが佳織に告白とか出来ないだろ!! 完全に抜け駆けだと思われてしまう!! ここにいるメンバー全員を敵に回す事だけは絶対に避けたい!! 特に本音は! 下手に敵対すれば、どんな目に遭うか想像出来ない!!)

実際の彼女は全く『ターセル様々』ではなかった。

「今日は本当に疲れたから、久し振りに大浴場にも行こうかしら?」

「いいですね。シャルロットさんもいかがですか?」

「大浴場って、大きいバスルームだね? いいの?」

「勿論。今日は丁度使える日だよ」

「じゃあ、決まりだね。皆で行こうよ」

これからの彼女達の予定が決まったところで、一旦解散する少女達だった。

え? 入浴シーン?

そんな事したら私が殺されますよ。

だから、それぞれに想像してくださいな。

・
・
・
・
・
・
・
・

深夜の保健室。

本来ならば誰も入れない筈の閉じられた場所に、一つの人影があった。

深く被ったハンチング帽子にトレンチコート。

体型から、その人物が男性である事は明白だった。

本来なら警報の一つでも鳴りそうなものだが、そんな気配は一切無い。

それだけで、彼がどれ程の技量の持ち主なのかが分かる。

『フフフ……こうして態々、夜中に侵入までするなんて、よっぽど彼女の事が心配だったんですね？だって、アリーナで見ていた時だって、ずっとソワソワしてましたし』

「……………」

『この状況での沈黙は肯定だと捉えますよ？』

「勝手にするがいい」

『では、そうします』

何処からともなく女性の声が聞こえてくるが、周囲には聞こえていない。

この声は彼の脳裏にのみ聞こえているのだ。

「しかし、こうして見れば、彼女はどこまでも普通の少女だな……」

『そうです。彼女は転生特典を無理矢理与えられた事を除けば、至って普通の女の子ですよ』

「それを聞かされれば、増々不憫に感じてしまうな……」

『はい……。彼女は『彼』の欲望を満足させる為だけに転生させられたようなものですから』

そう話す『彼女』の声は沈んでいるように聞こえた。

『やっぱり心配ですか？』

「最初はな。だが、今はもう心配はしていない」

『と言いますと？』

「お主も聞いただろう。戦いの最中、アリーナの中にいる人々が送っ

た彼女への声援を」

『あれは凄かったですね〜』

「もしも彼女が孤独な戦いをしているのなら私もそれなりの事を考えたが、この子は一人じゃない。あれだけ多くの友が、仲間が、恩師がいて何を恐れる必要がある?」

『そうですね…。特典なんか関係無しに、彼女には人を惹きつける何かがあるのかもしれませんがね』

「それが俗に言う『カリスマ』なのだろう」

室内が暗い上に帽子を深く被っているからよく見えないが、彼の顔は確かに微笑んでいた。

『さて……………これからどうします? 『元の世界』に戻りますか?』

「そうだな。大恩あるお主に言われて『この世界』に来たが、どうやら杞憂だったようだ」

『それには同感です。私も過度な心配をしちゃいましたね。では……………』

彼の体が透明になっていき、気配が消えていく。

「シヤア・アズナブルⅡサン……………いや、ナカモリカオリⅡサンと呼ぶべきか。いつの日か君が君だけの『赤い彗星』になれる日を楽しみにしているぞ。それと……………」

彼の手が優しく佳織の頭に触れ、少しだけ撫でた。

「今日の君が見せたカラテ……………見事なワザマエだった」

『それじゃあ、元の世界に戻しますね。場所はネオサイタマでよろしいですか? フジキド・ケンジⅡサン』

「頼む」

その言葉を最後に彼……………フジキド・ケンジこと、本物のニンジャスレイヤーは姿を消した。

佳織のベットの傍に置いてある棚に『忍殺』と彫られたスリケン一枚が置いてあり、月明かりに反射していた。

第32話 静寂無き学園生活

次の日。

私は早朝に自室へと戻って、顔を洗ったりシャワーを浴びて軽く体を流したり、登校の準備をしたりした。

勿論、本音ちゃんを起こさないように静かに行ったよ。

私が保健室で起きた時、ラウラが隣のベッドで寝ていた。

今回の彼女は完全に被害者なのだから、保健室に運ばれるのは当然だけど、まさか隣合わせとは。

保健室のベットは他にもあるのにどうして…？

そうそう、なんかベットの傍にあった棚にどこかで見つけた事のあるような文字が彫られたスリケンが置いてあった。

あれは一体なんなんだろう…？

一応、回収してからハンカチで丁寧に包んで、部屋の机の引き出しに仕舞ってあるけど。

下手に誰かが触ったりしたら怪我するしね。

その後、私はいつものように本音ちゃんを起こしてから、朝食を食べるから教室に向かった。

起こした時、開口一番に『かおりくん!!』って言いながら抱き着いてきた。

なんだか泣いていたようにも見えたし、凄く心配させちゃったようだ…。

本音ちゃんには…いや、他の皆にも悪い事をしちゃったな…。

私が食堂に姿を現した時も、皆が私に注目しまくってたし。

にしても、まだ包帯は取れそうにないなあ。

動きにくくて不便なんだけど、こればかりは仕方が無いよね…。

少し体を動かすと筋肉痛と怪我で体が痛むし…。

はあく…せめて、臨海学校までには治したいなあ。

…

・
・
・
・
・

いつものように教室に入ると、食堂の時と同じように、皆の視線が私に集中した。

「だ…大丈夫なの!?佳織!?!」

「もう動けますの!?!」

「あんまり無理はするなよ!?!辛かったらいつでも私達に言え!いいな?」

「そうだよ!僕達はいつでも佳織の力になるからね!」

その筆頭がいつものメンバーだったのは、ある意味予想通りだった。

「皆……」

そんな事を言われたら……なんか……私……

「か…かおりん!?どうしたの!?!」

「ううん……なんでもない……」

涙が出ちやうじやないか……。

「ただ……皆に心配して貰った事が嬉しくて……」

はは……なんかカツコ悪いな……。

早く泣き止まないよ。

「グス……。その……皆……」

「ど…どうした?」

「みんな……ありがとう……」

せめてお礼ぐらいは言いたいな。

私はちゃんと笑えてるかな?

「「佳織(さん)……♡」」

「かおりん……」

あ…あれ?なんか急に皆が固まっちゃったんですけど?

ど…どうしたの？マジで。

「と…とにかく！まだ怪我は完全に治ってはいないんだから、無理だけはしないでね！」

「分かってるって。一応『絶対安静！』って言われてるから。それを破るような真似はしないよ」

痛む体を押えながら、ゆっくりと席に座る。

うう……着席するのも一苦労だよお。

あれ？よく見たらラウラの席が空いたままだ。

まだ来てないのかな？

席に座った途端、後ろからチョンチョンと突かれて後ろを向いた。

「ん？」

「仲森さん」

「相川さん…？」

「昨日は本当にカツコよかったよ。なんだか、本当のヒーローみたいだった」

「大袈裟だよ。私はラウラを助けようと必死になってただけ。困っているクラスメイトを助ける……クラス代表として当たり前前のをしただけだから」

「それを平然と言ったのける時点で相当にカツコいいけどね…」

え？なんかよく聞こえなかった。

「皆さん……おはようございます……」

あ、山田先生がやってきた。

前を向かなきゃ…って、なんか疲れてる？

目の下に隈が見えたような…。

眼鏡越しだからよく分からなかったけど。

「あ！仲森さん！もういいんですか？」

「はい。日常生活には支障は出ません。ご心配お掛けしてすみませんでした」

「そ…そんな！こちらこそ、また貴女に助けられて……本当に申し訳ありません…。これじゃあ、教師の面目が丸潰れですよね……」

「いやいや！先生達が後ろにいるって分かっているから、私だって頑張

れるんです。だから、そんなに自分の事を卑下しないでください。少なくとも、私は山田先生の事を教師として尊敬していますよ」

「あうく……仲森さあくん……」

「泣かないでくださいよ……」

さつきとは立場が逆になってしまった。

泣いている教師を慰めるクラス代表って……。

「もしかして、昨日の事後処理で……？」

「その通りです、織斑さん……。あ……皆さん、昨日の事は勿論……」

「学園内の秘密……ですよね？前回の事もありますから、それぐらいは皆も承知してますよ。ね？」

試しに皆に目配せをすると、私の意図を汲んでくれたかのように頷いた。

「はうく……よかつたですく……」

本当に疲れてるんだな……。

心なしか、言葉遣いが幼児退行してる気がするし。

「どうした？山田先生」

「織斑先生」

山田先生とのやりとりをしている間に、千冬さんもご登場。

同じ様に事後処理で疲れている筈なのに、今日も相変わらず凜々しいお姿で。

「む……佳r……仲森。もう怪我はいいのか？」

「完治……じゃないですけど、普通に授業を受けるぐらいだったら平気です」

「そうか。だが、あまり無理をするなよ。病み上がりが一番危険だからな」

「分かりました」

至って普通の教師と生徒の会話……で終わらないのが千冬さんクオリティ。

「今回は本当によくやった。だが、心配する方の身にもなれ。見ていて気が気じゃなかったぞ」

「はは……すいません」

あら、頭を撫でられた。

優しく撫でてくれたのか、怪我が痛むことは無かった。

「もうこんな事が起きない事を祈るばかりだな…」

あく……その……ごめんなさい。

臨海学校の時に今回以上の事件が起きる……かもしれないです。

最悪、また事件の中心にいるかも…。

今度こそ本気でヤバいかな…。

「さて……そろそろ入ってきたらどうだ？」

え？廊下に向かって話しかけてるけど、誰かいるんですか？

「はい……」

あれ？この声は……

静かに教室に入って来たのは、明らかに落ち込んだ様子のラウラだった。

きつと、昨日の事に責任を感じているんだろうな…。

ラウラは何も悪くないのに…。

あ、ラウラと目が合った。

「な…仲森佳織!?なんでここにいる!?もう起きて平気なのか!?!」

「もう何回言ったか分からないけど…私なら大丈夫だよ。流石に激しい運動とかは無理だけど、普通に授業を受けたり食事をしたりぐらいなら出来るから」

「そうか……本当によかった……」

心の底から安心したのか、目尻に涙が溜まっている。

「ボーデヴィツヒ」

「はっ!」

千冬さんに指摘されて、背筋を伸ばす。

「この度は……その……誠に申し訳なかった!!私のせいで皆を危険に晒してしまい、お前に怪我を……」

深く頭を下げたラウラが皆に謝罪した。

肩が震えている。

きつと、ここに来るまでに色々と言葉を考えて、教室の前で勇気を振り絞っていたに違いない。

短い言葉ではあったが、彼女の誠心誠意の謝罪を聞いて、責め立てるような愚か者はこのクラスには一人もいない。

「別に気にしてないよ」

「え？」

「そうだよ！私達も一部始終を見てたけど、明らかにボーデヴィツヒさんも被害者じゃない！」

「そうそう！だから、謝らなくてもいいよ！」

「寧ろ、ボーデヴィツヒさんも大丈夫そうだよかったって思ってるよ！」

「だね〜！大事なクラスメイトに何かあったりしたら、私達の方が沈んじゃうよね〜！」

「お前達……」

ほらね。皆はとつくの昔にラウラの事をクラスメイトの一員だっ
て思ってたんだよ。

「私の言った通りだろう。謝罪など不要だと」

「はい……」

ついに本格的に泣いてしまった。

「あらら……ほら、これ使って」

「すまにゃい……」

あら可愛い。

私が渡したティッシュで鼻をチーンってする姿が実に癒される。

「ところで……少しいだらうか？」

「どうしたの？」

「その……な？実は昨日……私が頼りにしている副官に好意を抱いた相
手に対してどうすればいいのか聞いたんだ……」

「ふう〜ん……」

副官って何？副隊長的な役職？

それに好意って？それって友情を感じたって意味？

「それってどんな……むぎゅっ!？」

それは一瞬の出来事だった。

ラウラの顔が急接近したと思ったら、唇にとっても柔らかい感触が

がががが〜!

少ししてラウラは離れてくれたが、私の頭は完全にパニック状態に。

「い…いきなりにやりにやにをつ!!」

呂律が回らないし……。

「か…佳織! 今日からお前を私の『嫁』とする! 異論は認めん!!」

YO ME?

「日本人の主食の…」

「それは米だ」

「雨雲から降り注ぐ…」

「それは雨」

「甲羅を背負った長寿の象徴とされる…」

「それは亀だ。 って…からかっているのか?」

誤魔化せなかったか…!

恐る恐る周囲を見渡すと、皆の時間が止まっていた。 比喻でなく。

「か…佳織の唇が……」

「あわわわわ……」

「佳織さんがががががが〜!」

「あれ……?なんで胸がチクってするの…?それにモヤモヤして…」

「かおりん〜…」

約3名が真っ白に燃え尽きて、シャルロットは困惑、本音ちゃんは泣きそうになってる。

「だ…大胆ですね… ボーデヴィツヒさん… って、 織斑先生!!」

「……………」

ち…千冬さくん!?完全に白目向いてる〜!?

「気持ちはこちらから分かりますけど、しっかりしてくださいさ〜!!」

「あ……ああ……」

朝っぱらから教室が騒がしくなった…。

これ、どうやって收拾すればいいの…?

でも、ここに鈴がいなかったことが不幸中の幸いだな…。

もしもいたらどうなっていた事か…。

想像もしたくない……!

・
・
・
・
・

放課後。私は本音ちゃんを連れて整備室に来た。

目的は勿論、ラウラとボインスレイヤーとの連戦で疲弊したバリステイツク・リヴァイヴの整備をする為。

空いているハンガーにISを展開させて、改めて状態を見る。

「うわあ〜……派手にやらかしたね〜」

「ぐ……ゴメン……」

所々に細かい損傷が沢山あつて、特に格闘戦を沢山したせいかな、両腕の部分がかなりヤバイ事になってた。

「でも、だいじょくぶ〜これぐらいならまだなんとかなるよ!」

「お願いしてもいいかな……? 私の体じゃまだ整備は難しいみたいで……」

「言われなくてもそのつもりだよ。例えかおりんが『自分でする』って言いだしても、私がするつもりだったから〜」

「そうなんだ……」

ホント……本音ちゃんには頭が上がらないなあ〜……。

「それじゃ、早速始めますか〜」

本音ちゃんが軍手をつけると、後ろからひよっこりと人影が出て来た。

「あ……あのー! 私もお手伝いさせてください!」

「簪……?」

「このタイミングで来るって事は、さっきからずっと整備室にいた?」
「かんちゃんだ〜。お手伝いしてくれるの?」

「う…うん。少しでも佳織さんの役に立ちたくて…その…」

「私は大歓迎だよ。だよね？本音ちゃん？」

「勿論！かんちゃんなら私も歓迎するよ〜！」

「だって」

「本音…：ありがとう」

うんうん。やっぱり友達同士はこうでなくっちゃ。

「じゃ、改めて始めようか？」

「うん！」

けど、またまた意外な訪問者がやって来た。

「ならば、私も一緒に手伝おう」

「「え？」」

次にやって来たのは、銀髪の軍人少女のラウラだった。

「貴女は…」

「なんでここに？」

「嫁を手伝うのは当然だろう？」

「まだ言ってるんだ…」

「よ…嫁!？」

あ…うん。そこに反応するよね、やっぱり。

「佳織は私の嫁だ」

「え…：ええっ!？」

「あまり深く気にしないで」

「は…：はい…」

なんて言つて、実は私が一番困っていたりして。

彼女の『嫁発言』のせいで、またクラスが妙な事になってるし。

「自分のISはいいの？」

「私のレーゲンならば予備パーツで組み直した。幸いな事にコアは無事だったからな」

「それはよかった」

最後にド派手に爆発してたから、正直ドキドキしてたんだよね。

明らかに木端微塵になった感じの爆発だったし。

「あの…：なんで嫁？」

「日本では気に入った者を『嫁』と呼ぶのが一般的な習わしなんだろう？ 私もそれを実行したまでだ」

「それは……」

私達の業界の専門用語ですよ〜!?

一体何処のどいつがこんな事を吹き込んだんだ!?

あ、別にドイツとどいつを掛けた訳じゃないからね？そこ重要よ？
「クラリツサには感謝しなくてはな……。お蔭で私は自分の気持ちを表現する方法を得た」

そーいや、そんな名前のキャラがいたような……。

朝は副官って言ってたけど、その人がラウラに余計な知識を……!

「それに、私はまだ助けてくれた嫁「佳織」って呼んで」…佳織に礼をしないでいい」

「別に気にしなくてもいいんだけど……」

「そっちが気にしなくても、こっちが気になるんだ。だから、機体の整備を手伝わせてほしい。駄目だろうか……?」

そんなウルウルした目で見ないで〜!

これを天然でやってるから、この子は別の意味で侮れないんだよね……。

「い……いいいいよ！本当は猫の手も借りたと思ってたし！ね？ね？」

「そ……そうですね！」

よし！簪は了承を得た！

後は……

「本音ちゃんは……」

「ワタシモダイジョーブダヨー。らうらうナラダイカンゲーダヨー」

本音ちゃんの目にハイライトが無いんですけど〜!?

本当に大丈夫なの〜!?

「よし！ならば張り切って手伝わせてもらおうぞ！」

「そ……そうだね〜。張り切って頑張ろ〜……」

やる前から一気に気力を持っていかれたよ……。

ラウラ……恐ろしい子！

その後、ラウラも交えての修復と整備を兼ねた作業が始まった。流石は現役軍人と言うべきか、作業がサクサク進んでいった。途中で簪とラウラが互いに自己紹介をしていた。

二人とも代表候補生と言う事もあってか、すぐに意気投合していたみたい。

こうして人の輪が広がっていくのはとてもいい事だと思う。

高校時代の青春はこうでなくっちゃね！

第33話 また日が昇る

「なんだかゴメンね？手伝って貰ったりして…」

「別に気にしないでいいよ。クラス代表とて、困っているクラスメイトを助けるのは当然の事だし」

時間は放課後。廊下の窓から真つ赤な夕にの光が差し込む中、佳織とシャルロットが一緒に歩いていった。

二人の手にはもうすぐある臨海学校に関するプリントの束があった。

「でも、本当によかったの？今日は予定があったんじゃ……」

「別にいいよ。シャルロットの事を放つてまで優先する用事なんて無いもん」

「え……？」

「好きな子が困っているのに他の事を優先するなんて、私には出来ないよ」

そう呟く佳織の顔は、少しではあるが赤く染まっていた。

誤魔化すように余所を向いてはいるが、明らかに照れている。

「佳織……」

「シャルロット……」

今この場には二人しかいない。

無意識の内に互いの顔を見つめ合う。

佳織の瞳にはシャルロットしか、シャルロットの目には佳織しか映っていない。

次第に二人の顔が近づいていき、そして……

・
・
・
・
・
・
・

「……あれ?」

目の前に見えているのは佳織の顔ではなくて、もう完全に見慣れた学生寮の自分の部屋の天井。

起き上がって枕元に置いてある目覚まし時計は6時30分を示している。

「……………」

まだ完全に覚醒していない頭で2〜3程瞬きをして、ようやく完全に目が覚める。

「今のつて……夢……?」

やっとの事で現状を把握したシャルロット。

その途端に盛大な溜息を吐いた。

「はああ……僕はなんて夢を……」

彼女自身は全く自覚していないが、学年別トーナメント以降、自然と佳織の事を考える機会が非常に多くなった。

授業中でも無意識の内に佳織の事を目で追うようになる始末。

もう完全に佳織の事を好きになっている証拠だった。

「もしもあのままいついていたら……」

夢の続きを妄想する。

すると、シャルロットの顔が一気に真っ赤に染まる。

「いやいやいや!僕と佳織は女の子同士なんだよ!?それなのに、そんな……」

恋愛観に関しては比較的常識人な彼女であったが、それでも佳織の事を意識せずにはいられない。

果たして、シャルロットが自分の恋心を自覚するのはいつの日か。

「……………」

ふと隣のベットに視線をやる。

すると、そこには本来いる筈の同居人の姿が全く見えないではないか。

シーツが全く乱れていない様子から見ても、最初から使用した形跡

自体が無い。

「まあ……別にいいか」

一緒に住んでいる同居人よりも、今の彼女の優先すべきは先程の夢の続きだった。

まだ僅かに残っている眠気を頼りに、再び夢の中へと行こうとする為に、静かに目を閉じた。

もしかしたら、あの夢の続きが見られるかもしれない。

そんな淡い期待を胸に。

「本当に僕つてば……どうしちゃったんだろう……」

誰に見られているわけでもないのに、己の赤くなつた顔を隠すかのように、シャルロットは全身を布団で覆い隠してから己の心臓の動悸を押えようと必死に自分の事を落ち着かせようとした。

・
・
・
・
・
・
・

「んく……？」

朝。

私は妙な違和感と共に目を覚ました。

もしもこれが実家ならば『あと5時間』なんて言うところだが、ここは天下のIS学園。

そんな甘えは許されない。

遅刻しないためにも一刻も早く目を覚まさなければ。

けど……この妙な違和感はなんだ？

なんつーか……両端から何かに抑えられているような感覚が……。

片方は腕にとっても柔らかいものが当たっていて、もう片方にはフニフニとしたものが当たっているような感じがする。

(なんだ…っこれは…)

ここで考えていても仕方が無い。

いっそのこと確かめてみた方が手っ取り早いだろう。

っーわけで、一気に掛布団を剥がして見る事に。

すると、私の両隣にいたのは…

「ん…？」

本音ちゃんとラウラの二人だった！

な…なんでこの二人が私の布団で寝てるの!?

「ちよ…ちよつと二人とも!? どうしてここに居るの!？」

「んにゃく…っかおりんく？」

「なんだ…っもう朝か…っ？」

本音ちゃんは毎度のようにどこかで見た事のあるような着ぐるみ型のパジャマ(今回はどこぞの一世を風靡した某魔法少女アニメに出てくるマスコットの姿をした諸悪の根源であるあの真っ白な獣野郎)を着ていて、それに関しては別にいい。

けど、問題はラウラの恰好だ。

「…っなんで寄りにもよって裸なのさ…」

そう。ラウラの今の恰好はまごうことなき全裸。

唯一付けている物と言えば、彼女のISの待機形態であるレッグバンドのみ。

それが却って凄いエロスを感じる。

「む…っ佳織か。おはよう」

「おはよう…っじゃないから! まずは服を着ようよ!!」

「お…っラウラウってばダイターン3だね」

…っそれって、大胆とダイターン3を掛ける?

って、ツッコんでる場合じゃないし!!

「何を言っているんだ? 夫婦とは普段から包み隠したりしないものなのだろう?」

「いや…っそれにも限度ってものがあるでしょ…」

まくた、例のクラリツサさんとやらの間違った知識の影響だな…。

もしも会う事があったら、絶対に私の手で矯正しなくては…。

「そもそも、日本ではこのようにして起こすのが一般的なんだろう？
将来的に結ばれる者同士の定番だとか」

「んな訳ないでしょ…。そんなんだったら、目覚まし時計の存在意義
が無くなっちゃうじゃん…」

「む…それもそうだな。しかし、目は覚めたんじゃないか？」

「色んな意味でね…。」

何が悲しくて、起きて早々に疲れなくちゃいけないのさ…。

「兎に角、まずは服を着て。話はそれからだよ」

「服なんて持ってきてきてないぞ？」

「…へ？」

な…なんですと？

「じゃ…じゃあ…もしかして…。」

「このまま来た。大丈夫だ。夜中に来たから誰にも見られていない」

「そんな問題じゃないでしょく!!」

年頃の女の子が全裸でうろつくとか、痴女以外の何者でもないじゃ
ん!!

「そもそも、どうやって入ってきたのさ…。一応、ちゃんと部屋の鍵は
閉めてあった筈だけど？」

「私にかかれば、これぐらいの鍵は5秒もあれば開錠出来る！」

「それって普通に犯罪！」

この子が軍人だってことを忘れてたよ…。

確かに、ラウラならピッキングぐらい楽勝かもしれない…。

「とりあえず、このままじゃ風邪を引いちゃうから…。」

即座にベットから出て、クローゼットから適当に服を出す。

「これを着て！何も着ないよりマシでしょ！」

「おお〜」

取り出した服をラウラに無理矢理着させる。

着させた後に気が付いたけど、真っ白なTシャツに『流派東方不敗
は！王者の風よ！』と前に書かれてあって、後ろには『全新！系裂！
天破侠乱！見よ！東方は、赤く、燃えている!!』と達筆な字で書かれ
ている。

え？どこで入手したかだつて？

普通にネット通販で売ってたけど？

結構お手軽な値段だったから、つい衝動買いしちゃった。

「はあく……まずは自分の部屋に戻ってから登校の準備をした方がいいよ。同室のシャルロットも心配してるだろうし」

「それもそうだな。私としては嫁と一緒に寝れただけでも大満足だし」

「お願いだから誤解を生むような言い方だけはやめて」

「所謂3Pだね」

「本音ちゃんも、どこでそんな言葉を覚えたの!？」

「この子も油断できない……!」

「では、教室で会おう!」

笑顔のままラウラは意気揚々と部屋を出ていつてくれた。

「なんかもう……休みたくなってきた……」

今日の朝食は少しポリュームのある盛る物を食べようかな……。

.....

.....

.....

.....

.....

「はあく……」

目の前にあるフレンチトーストを前に、溜息を零す。

「どうした？食欲が無いのか？」

私の両隣りにはラウラと本音ちゃん。

そして、正面の席には途中で合流した箒が座っている。

「ラウラではないが、本気でどうした？元気が無いように見えるが……」

「あ……大丈夫だよ。まだ本調子じゃないだけだから」

「そうか？前にも言ったが、無理だけはするなよ?」

「うん。ありがとね」

作り笑いをしながらフレンチトーストをパクリ。

この美味しさが私を癒してくれる…。

「かおりのフレンチトースト美味しそうだね」

「一口食べる？」

「食べる♡」

ああ……やっぱり本音ちゃんが私にとっての清涼剤だよ…。

「はい、どうぞ」

「あくん♡」

ナイフで切り分けてから、フォークで刺して本音ちゃんに向ける。

「あむ……。ん♡美味し♡」

「……………」

んあ？二人ともどったの？

「よ…嫁！私も！私もしてほしいぞ！」

「前にも言ったけど、名前と呼んでね？ほら、あくん」

「あ…あくん…」

まるで、手のかかる子供が二人もいる気分だ…。

「佳織に食べさせてもらうと、美味しさが何倍にも増したみたいだ…」

「そんな大袈裟な」

誰に食べさせてもらっても、美味しさなんて変わらないでしょうに。

「あ…あの……佳織？私も……」

モジモジしながら箸が何かを言い出そうとしていると、食堂に誰かが走ってやって来た。

「ああ〜！遅刻しちゃう〜!!」

「「あ」」

よっほど急いでいたのか。

髪の毛が所々ピンとはねた状態のシャルロットがやって来た。

「おはよう、シャルロット」

「あ！おはよう、佳織」

こっちに気が付いて、迷わずこっちに来た。

「こんな時間に来るなんて珍しいね。寝坊しでもしたの?」

「え? ははは……そんな感じ……かな?」

「でゆのっちはお寝坊さんだね」

「否定はしないよ……」

たはは……と頭を掻きながら苦笑いをしているけど、その顔は僅かに赤い。

「今日は軽食にしておいたら? 早く食べないと本気で遅刻しちゃうし」

「そ……そうだね。そうするよ」

慌てて食券販売機に向かったシャルロット。

気のせいかな? 妙に私を避けてた気が……。

「二度寝でもしたのか? あいつ……」

「かもしれないね。極稀に早く起きた時と違って、調子に乗って二度寝とかしちゃうことってあるし」

「そうなのか?」

軍人のラウラには分からない感覚かも。

起床時間とか就寝時間とかしつかりしてそうだし。

「お……お待たせ!」

戻ってきたシャルロットの手には、トーストにコーヒーが乗ったトレーを持っていた。

それだけじゃ足りないかもだけど、今所状況では仕方が無い。

何も食べないよりは遥かにマシだ。

「いただきます! あむ……」

「あらら……そんなに急いで食べたら……」

「むぐ!」

「ほら。言わんこつちやない。これ飲んで」

「うん……」

トーストを喉に詰まらせたシャルロットに、私が持っていたココアを飲ませる。

「ぷは……! ありがとう、佳織」

「困った時はお互い様だよ」

って…あれれ？急にシャルロットの顔が赤くなったよ？

(あれ…う…これって冷静に考えたら、間接キスになるんじゃない？) ん…？ココアは苦手だったのかな？

キーンコーンカーンコーン…。

「「あ!?!」「」」

今のは予鈴!?

「急がなきゃ!」

「織斑先生の出席簿が降ってくる!!」

幸いな事に、あと少しで食べ終わるから、一気に口の中に入れてしまおう。

「皆!急ぐよ!!」

「「了解!!」「」」

「は〜い」

今回ばかりは本気で急げ〜!!

廊下を走ったら怒られるかもしれないけど、遅刻して千冬さんの出席簿の一撃を受けるよりはずっとマシだと判断する!!

つーわけで、精神コマンド『加速』!!

・
・
・
・
・
・
・

皆で急いでお蔭で、なんとかギリギリの所で遅刻はせずに済んだ。
息は途切れ途切れだったけど。

流星に、まだ怪我が全快してない身ではキツかった…。

「お前達」

「「「ギクッ!?!」「」」」

「……この声は……!？」

「「お：織斑先生……」」

あ……あれ？時間はまだ大丈夫……だよな？

「揃いも揃って廊下を走るな。特に仲森。自分が怪我人だと言う自覚があるのか？」

「す……すいませんでした……」

「今回は特別に見なかったことにしてやる。だが、次は無いと思え」

「「りよ……了解」」

千冬さんの寛大な処置に感謝感激雨霰です。

私達は急いで自分の席に座る事に。

座った直後にチャイムが鳴った。

本当にギリギリだったっぽい。

千冬さんが教壇に立つてSHRが始まった。

「さて、今日は確か通常授業の日だったな。幾らここがIS学園とは言え、お前達は立派な高校生だ。中間テストが無い代わりに期末テストはちゃんどある。言うまでもないが、もし仮に赤点でも取った暁には夏休みの殆どが補修で潰れる事になる。そうなりたくなかったら、精々頑張る事だな」

テ……テストか……!

基本5教科なら問題無いけど、IS関係だけは少し心配……。

どうせこの怪我のせいで暫くはISに乗れないんだ。

ここはテスト勉強に専念した方が賢明かもしれない。

「それから、来週から始まる校外特別実習期間……所謂『臨海学校』だが、全員忘れ物なんてするなよ。たった3日間とはいえ学園を離れる事になるんだからな。あまりテンションを上げ過ぎて羽目を外しすぎるなよ。分かったな？」

臨海学校……かあ……。

先の事がある程度分かっている身としては、諸手で喜ぶことは出来ないんだよな。

せめて、初日の自由時間の時ぐらいは『あの事』を忘れて遊べればいいけど。

(「そーい、水着ってあったかな?」)

「去年の水着は……駄目だろうな。」

「多分、もうサイズが合わないと思う。主に胸が。」

「では、これでSHRを終了する。今日も学生らしく勉強に励めよ」

「あ……今日は山田先生はお休みなんですか?朝から姿を見ないんですけど……」

「おや、鷹月さんからの質問が来たよ。」

「彼女の言う通り、私も山田先生の事を見てないな。」

「昨日の今日だし、疲れて休んでいるとか?」

「山田先生は臨海学校の現地視察に行っていて今日は不在となっている。だから、今日は私が山田先生の仕事を兼任する手筈となっている」

「ほえ……一足先に……ねえ。」

「あの人も苦勞が絶えませんかあ。」

「山ちゃんだけ先に行っちゃってるんですかあ?羨ましいなあ。」

「せめて私達にも一言言ってくれればいいのに。」

「いやいや、言う訳ないじゃん。」

「あくまで仕事で行ってるんだし。」

「お前等。一々騒ぎ立てるな。山田先生は仕事で行っているんだ。決して遊びで言ったわけじゃない」

「はい、出ました。千冬さんの鶴の一声。」

「皆の『はく』の言葉と同時に教室が静かになった。」

「では授業を始める。日直」

「起立」

「こうして、今日もまた騒がしくも賑やかな1日が始まる。」

「私としては、臨海学校までに一刻も早く怪我が治る事を祈るばかりだ。」

第34話 偶には女の子らしくお買い物

放課後。まだ怪我が全快していない私は訓練をしたくても出来な
いため、必然的に暇になる。

かといって、私の都合に皆を巻き込むわけにはいかないから、今回
は私を抜きにして専用機の皆は訓練をしている。

ならば、私は何をしているのかと言うと……

「すみません……まだ怪我が治っていないのに……」

「気にしないでください。これぐらいなら平気ですから」

生徒会室で書類仕事のお手伝いをしております。

こう言った事は中学の時に経験済みだし、前世でも似たような事は
何回もしてきた。

デスクワークならばお任せあれ！

「でも、本当に大丈夫なの？その体に巻かれた包帯が痛々しいんだけ
ど……」

「大袈裟なんですよ。確かに痛みが無いと言えば嘘になりますけど、
気にする程じゃないですし……」

「貴女の場合、我慢している可能性があるから、油断できないのよね
……」

「私ってそんなに信用無いですか……？」

「こういう場面の時はね。周りに心配を掛けたくないって気持ち
は分かるけど、かと言って我慢のし過ぎは体に毒よ。時には誰かに頼った
り、弱音を吐いたりしてもいいんじゃないかしら？」

「自分的には充分にしてるつもりなんですけどね……」

流石は暗部の人間。

私みたいな一般人の嘘ぐらいいは軽く見抜いちやうか。

楯無さんには嘘はつけないなあ……

「本音。佳織さんの事をよく見ておいてね。また無茶をしないよう
に」

「は……い！」

虚さんまで……。

バカやつてる自覚はあるけど、そこまで言われるほどの事？

「つーか、何気に話を逸らしてますけど、なんで私が書類を整理している横で楯無さんは優雅に紅茶を飲んでるんですか？」

「テヘペロ♡」

「誤魔化さないでください」

私の事を労わりたいうって思うのなら、まずは仕事をしてください。今のところ、貴女が生徒会長っぽい事をしている姿を一回も見てませんよ？

「と…ところで、佳織ちゃんはもう臨海学校に向けての水着は買ったの？」

「また誤魔化した」

「い…いいじゃない…：…純粹に気になったんだもん…」

子供か…：…って、私達は未成年でしたね。

「でも水着か…：…。去年着ていた水着はもう入らないから、新しいやつを買わないとな」

「あら、そうなの？」

「成長期ですからね。今回は水着だけでいいですけど、夏休みに入ったら下着とかも新しく買わないといけないかもしれないかもしれませんね」

最近になってブラもなんかきつくなってきたし。

レゾナンスにいいランジェリーショップってあったかな？

「かおりんもなんだ。実は私も」

「本音ちゃんも？」

「うん」

セシリアや箒の影に隠れがちだけど、本音ちゃんもかなりの戦^パ闘^{スト}力の持ち主だもんね。

成長期なのも合わせて、すぐにサイズが合わなくなってしまうか。

「それじゃあ、今度の日曜日にも一緒に買いに行つて来たら？」

「それいいかも。一緒に行く？」

「絶対行く!!!」

「お…おう…」

す…：…凄い迫力…：…。

本音ちゃんって時々、普段ののんびりとした雰囲気か払拭される時があるよね…。

「かおりんとデート……ふふふ……♡」

……？なんかほくそ笑んでるけど、そんなに水着を買いに行くのが嬉しいのかな？

実は本音ちゃんってファッションが好きだったりする？

「いいわね。私も二年生じゃなかったら迷わず一緒行くのにな」

「行くんですか」

「そりゃ行くわよ。私だって佳織ちゃんと一緒に出かけたいもの」

お出かけ……ね。

生徒会長と言う立場上、忙しくて休みの日とかも忙しいのかもしれない。

「だったら、夏休みにでも一緒にどこか行きますか？」

「え？いいの!？」

「どうせ夏休みなんて、実家でゴロゴロするか、学園で訓練しているかのどっちかでしょうし。それだったら、少しでも貴重な夏休みを有効に使いたいじゃないですか」

「真面目ね。……余談で聞きたいんだけど、夏休みの宿題はどうしてるの？」

「7月中に終わらせますけど？」

「「えっ!？」」

な……なに？そんなに驚くような事？

「う…虚ちゃん！本当に7月中に夏休みの宿題を終わらせる子がいたわよ!？」

「初めて見ました……」

「かおりんって凄いね…」

「そう？」

早めに終わらせれば、後々で楽しじゃん。

一応、これだけは小学生の頃からずっとやってるけど…。

「普通はペース配分を考えてするモノじゃないの？」

「でしようね。一夏とかはそうするみたいですけど。私の場合は休みであることを最大限に生かして、7月中の殆どを徹夜して宿題を終わらせて、八月になってから爆睡します」

「ハ…ハードね……」

「その分、8月は遊び放題ですよ？時間に追われる心配も無いですし…」

「そう言われると、少し魅力的に聞こえちゃうわね…」

滅茶苦茶大変だけどね。

けど、それだけの価値はあるって思う。

なくんか話が逸れまクリステイだけど、兎に角、日曜日に本音ちやんと一緒に買い物に行くことになった。

友達と一緒に買い物……か。

高校生になって初めてかもしれない。

ヤバ……私も少し楽しみになってきたかも。

・
・
・
・
・
・
・

やってきました。約束の日曜日。

天気は快晴で、実にいい天気。

最高のお出かけ日和だ。だけど……

「なんで？」

本音ちやんと一緒に校門を出ようとしたら、そこには毎度お馴染みのメンバーが。

今回はなんでか簪も一緒にいた。

「私達を本気で誤魔化せるって思ってるワケ？」

「え〜？私はなんにも言っていないけど〜…」

「あれだけずっとニコニコとしていたら、何かがあったと嫌でも思いますが」

「佳織が関わっているって思っていたけど、案の定だったね」

「本音よ。我々に秘密は出来ないぞ」

「そんな〜」

「本音だけズルい〜」

流星は天下の代表候補生（じゃない子もいるけど）。
すぐさま勘付いてきたか。

因みに、体の包帯を隠す為には薄手のカーディガンを着ている。
これなら大丈夫だろう。

「仕方ないよ。こうなったら皆で一緒に行こう？」

「うん……」

ありやりや。すっかりしよんぼりちゃんに。

こんな時はしっかりフォローをしないと。

「臨海学校が終わったら、二人で一緒にどこかに行こうよ」

「え？」

「ね？」

「う……うん！」

皆に聞こえないように耳元でこつそりと言ったので、今度はバレずに済んだようだ。

本音ちゃんの機嫌もよくなったみたいだし。

「じゃ、行きますかー！」

目的地はレゾナンス！

いざ行かん！

・
・
・
・
・
・
・

はい到着！レゾナンス！

え？道中のモノレールでのやり取り？
なにそれ美味しいの？

私達がやって来たレゾナンスは、簡単に言ってしまうと駅前のシヨツピングモールだ。

交通網の中心地点にあるここは、電車や地下鉄、バスにタクシーと、色んな方法で来ることが可能。

しかも、市の何処からも来ることが出来、同時にどこにでも行くことが可能な場所にある。

故に、普段から人通りは非常に多い。
とにかくここには何でも揃っている。

学園からのアクセスも容易な為、IS学園の生徒もよくここを利用している。

かく言う私もその一人だったりして。
この間、予約した新作ゲームを購入した際にはお世話になりました。

「さて、まずはどうするの？二人は水着を買いに来たんでしょ？」
「そうだな〜…」

思ったよりも早く来れた為、かなりのんびりと過ごす事は出来そう
だけど。

今は午前10時ちよつと過ぎくらい。

それでも日曜日であるせいか、人は多い。

「先に水着を買って、それからゆつくりと見て回ろうか？」
「それがよさそうだな。私も丁度、新しいのを欲しいと思っていた所
だ」

「あら、箒さんも？実は私もですの」

「僕も折角日本にいるんだし、新しいのを買おうかな…」

どうやら話は纏まったみたいだ。

「わ…私も大胆な水着を買って、そして佳織に……」

「私は……」

で、なんで鈴は怪しく微笑んでいて、簪は自分の胸を見ながら溜息をついてるの？

「ここが日本のショッピングモールか……」

「珍しい？」

「そうだな……。あまり基地から出た事が無い為、ドイツでもこう言った場所に行く機会は殆ど無かった」

「そっか……」

私達と同一年でも、立派な軍人だもんね。

そりゃ、そう簡単には外出なんてさせて貰えないか。

実際は違うかもしれないけど。

「それじゃあ、はぐれないようにしないとね。はい」

「なっ……!?!」

勝手にどこかに行ってしまったわらないように、ラウラと手を繋ぐことに。

これなら大丈夫な筈。

「か……佳織の手は暖かいな……」

「そう？」

どこにでもある、至って普通の手だと思うけど？

「むく……ラウラウだけズルい……私もく！」

「本音ちゃん？」

空いたもう片方の手を本音ちゃんが握ってきた。

「さ……先を越された……」

「しれつと不覚を取る事が多いわよね……私達って」

「次の機会を待つしかありませんわ」

「前向きに……前向きに……」

皆して何を話してるんだろ？

どんな水着を欲しいとか話してるのかな？

「皆く！早く行くよー！」

「ちよ……ちよつと待つてー！」

えくと、水着売り場はどこにあったっけ？

・
・
・
・
・
・

少しうろつきながら、ようやく水着売り場に到着。

こうして話しながら歩くだけでも結構楽しかったりするよね？

「着いたは着いたけど……」

「結構、新作が出てるわね……」

「私にはどれも同じにしか見えん……」

ラウラにはそうかもしれないね。

「まずは店に入ろうか。色々と見てみない事には決めようがないし」

「賛成。ここであうだしてても時間の無駄だし」

そうして店内に入ると、まあ色取り取りの水着がわんさかある
じゃないですか。

「どんなのがいいかなく？」

「」「」「赤でしょ？」「」「」

「満場一致なの!？」

「どんだけ私に赤のイメージがついてるのよ!？」

「知らないの？最近じゃ『赤』『角』『三倍』で検索すると、一番上に佳
織の名前が出てくるのよ」

「マジですか!？」

シランカッター!

このままいくと、私服すらも赤一色に染まっていきそうだ……。

「ここで一旦解散して、適当に見て回りましょうか？一か所に纏まっ
ても他のお客さんのお邪魔になるでしょうし」

「それがよさそうだな」

つーわけで、一度散開して店の中を見て回る事に。

店の中は思ったよりも広くて、見応えはありそうだ。

やっぱ……赤い水着じゃないとダメ……だよね……？
まあ……別に嫌いじゃないからいいんだけどさ。

・
・
・
・
・
・

「何かお探しですか？」

あ、店員さんに捕まっちゃった。

「えっと……赤い水着ってありますかね……？」

「赤ですか？少々お待ちください」

つい流れで聞いてしまった……。

けど、こういった店の店員をしてるんだから、センスは信用してもいいよね？

「お待たせしました」

早いな。もう持って来たんだ。

「見た感じ、お客様は非常にスタイルがよろしいみたいなので、このビキニなんていかがでしょうか？」

「ビ……ビキニ……」

店員さんが持ってきてくれたのは、まさに赤一色な水着だった。肩紐で留めるタイプじゃなくて、首の所と背中と結ぶタイプ。

下の方も同じ様に腰の部分で結ぶタイプになっていて、確かに可愛いデザインだけど……。

（この手の水着って、ラノベとかじゃ波に浚われたりしてラツキースケベに発展する系のやつだよね……）

で……でも、今の私の周囲には女の子しかいないし、その心配は無い……と信じたい。

「試しに試着してみてもいいかがでしょうか？」

「そう…ですね」

折角持ってきてくれたんだし、それぐらいはしないと失礼だろう。
買う買わないはそれから決めても遅くはないし。

「じゃあ、試着してきます」

「試着室はすぐそこにありますので」

「ありがとうございます」

「店員さんから水着を受け取って、試着室に。」

他の皆はどんな水着を選んだのかな…。

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．

鏡に映った自分の姿を見る。

目の前には真っ赤なビキニを着た自分が映っていた。

「サ…サイズがピッタリする位にピッタリだ…」

あの店員さんは私の体をパツとしか見て無い筈…。

僅か数秒で私のスリーサイズを看破して見せたのか!?

水着専門店の店員さんは伊達じゃない!…のか？

「……………」

その場でくるっと一回り。

ふむ…悪くないかも。

「金に余裕はあるし…これにしようかな？」

見れば見る程気に入ってきたかも。

デザインも決して悪いわけじゃないし。

「……よしー」

決めた！これにしよう！

ここで迷っていたら、また延々と決めかねてしまう。そうと決まったらさっきの店員さんと呼んで……

「すいませくん。私、この水着に決め……」

試着室のカーテンを開けて店員さんと呼ぼうとすると、私の目の前にいたのは……

「か……佳織……!？」

「仲森さん？」

並んで立っている千冬さんと山田先生だった。

「佳織の水着……ビキニ……」

「あ……あの……」

「せ……先輩？」

な……なんか痙攣してるんですけど!?
本気で大丈夫ですか!?

「あ」

百万ドルの笑顔で気絶している……。

鼻から鼻血を流しながら。

「……………」

えっと……私にどうしろと?

「……………着替えてもいいですか?」

「あ……はい……」

第35話 少女達と潜む者達

水着から私服に着替えた後、山田先生と一緒に気絶した千冬さんをなんとかして起こした。

「どうやって起こしたかは内緒で。」

「…すまんな。みつともない姿を見せた」

「…いえ。お気になさらずに」

凜とした態度で言ってるつもりだろうけど、鼻から丸めたティッシュが生えてる時点で威厳も何もあつたもんじゃない。

「さっきの水着…よく似合ってたぞ」

「そ…それはどうも…」

今更言われても困るんですけど。

どう反応しろと？喜ばばいいのか？

「にしても、千冬さん…織斑先生と山田先生が揃って外出なんて珍しいですね」

「案外そうでもないぞ？休みの日とかはよく一緒に飲みに出かけている」

「正確には『連行されている』って言うべきでしょうけどね…」

「あぁ…」

「そういや、千冬さんは相当な呑兵衛だったな。」

一夏の話じゃ、家にも相当数のお酒を隠し持っているとかなんとか。

「人聞きの悪い事を言うな」

「事実じゃないですかぁ…。いつも最終的には私がタクシーを呼んで学園まで帰る羽目になるんですから……」

「む…それは済まんな…」

山田先生…結婚したら絶対にいい奥さんになりそうな人だ。

私もこんな女性を目指したいもんだ。

「そうだ。別に今は学園にいるわけじゃない。だから無理して『先生』と呼ぶ必要はないぞ。いつもの通りで構わん」

「じゃあ、千冬さんで」

「それでいい」

満足そうに頷いちゃって。

「山田先生はなんて呼べば……」

「適当でいいだろ」

「適当って……」

仮にも目上の女性に適当な事は言えないでしょ。

うくん……そうだなあ……。

「考えるのメンドいんで、名前で呼んでもいいですか？」

「い……いいですよ？」

なんで疑問形？

「それじゃあ改めまして……コホン。千冬さんと真耶さんはどうして

ここに？」

「ま……真耶さん……」

ちよつと、急に顔を赤くしないでくださいよ。

周りのお客さんがなんだと思っただけで見てるじゃないですか。

「私達も臨海学校の水着を購入しに来たんだ。決して他の連中と一緒に

に買い物に行った佳織の事を着けてきたわけじゃないからな」

「はあ……」

何故に念を押す？

「あれ？千冬姉さんに山田先生？」

「一夏か……」

なんつータイミング。

選んだ水着を持って一夏が千冬さん達の後ろからやって来た。

「二人も水着を買いに来たの？」

「そんなところだ。お前はどんなやつを選んだんだ？」

「私？取り敢えずこれかな？」

そう言っただけで来たのは、一夏の専用機『白式』と同じ真っ白な

ビキニタイプの水着だった。

「なんつーか、佳織じゃないんだけど、やっぱり私も白式と同じ色がい

いかな……って思っただけ。気が付いたらこれを選んだ」

「うわあ……結構大胆な水着をチョイスするんですね……」

一夏みたいにスタイルがいいと、どんな水着を着ても絵になるからいいよね。

「一夏は白か……」

「お？千冬さんも悩んでますなあ。」

「この人もスタイル抜群だから、ビキニとかよく似合いそうだけど。」

「……………よし」

「どうやら決まったのか、千冬さんは目の前にある棚から二着の水着を取った。」

「三人とも。どっちがいいと思う？」

「千冬さんが見せてきたのは白と黒の水着で、どっちもビキニ。」

「この二色なら……」

「『黒』」

「揃って即決か……」

「普段から千冬さんのスーツ姿を見慣れてしまっているせいか、どうにも今の千冬さんからは『黒』のイメージが拭えない。」

「まあ、黒を選んだ理由はそれだけじゃないんだけど。」

「千冬さんって肌が綺麗だから、黒い水着の方が似合うような気がするんです。ほら、よく言うじゃないですか。深い黒は女をより魅力的にするって」

「そ……そうか……？」

「ん？今度は千冬さんの顔が赤くなったぞ？」

「空調が効きすぎてるのかな？」

「それとも、スーツなんて着てるせいで暑くなったとか？」

「これを素面で言える事が、佳織の一番凄い所なんだよね……」

「確かに、これは堕ちますね……」

「おちる？何が？」

「か……佳織がそこまで言うのならば、これにするとしようか……」

「それがいいですよ」

「同じ女として、この水着を着た千冬さんの姿に興味もあるし。」

「佳織はその赤い水着にするのか？」

「はい。実際に試着してサイズもピッタリだったので」

「え？佳織も決めたの？見せて！見せて！」

がつつくなあ〜一夏は。

「ほらこれ」

「おお〜！見事に真っ赤だね〜！でも、佳織なら全然アリ！寧ろいい！」

「そ…そう？」

そこまで言われちゃうと、なんだか照れちゃうな…。

「よし、二人とも…水着を貸せ」

「え？」

有無を言わず、千冬さんは私達の手から水着を取った。

「今日は気分がいいから、私が奢ってやる」

「ちよ…いいの!?!自分で言うのもなんだけど、二つとも決して安くはないよ？」

「構わん。それに、IS学園教師の給料はお前達が思っている以上にある」

はい、大人の話をしました。

つーか、そんなに高給取りなのか…IS学園の教師って…。

「だから気にせず大人しく奢られる。それに…」

ん？急にこつちを見てどうしたのかしらん？

「これぐらいはさせてくれ。佳織には返したくても返せない程に大きな借りがあるからな」

「そ…そうですよ！今日ぐらいは私達に甘えてもいいんですよ？」

「そう言うのならば、金の半分はお前が出せよ？」

「も…勿論です！（失言でした…）」

山田先生、口は災いの元…ですよ。

「ほら、行くぞ」

「はあ〜い…」

あらら、後ろ姿が切ない。

「…今度、学園のカフェで山田先生に何か御馳走してあげようか…」
「賛成。あれ見てたらなんて言うか…保護欲が掻き立てられるよね…」

先生としてそれはどうなのかって言う疑問は取り敢えず置いて。

人として魅力的なのは確かだ。

「まあ……これからも頑張ってください。山田先生」

「いつの日かきつといい事がありますよ」

・
・
・
・
・
・
・

佳織が千冬、真耶、一夏と合流した頃。他のメンバーはと言うと

……

「あれ…ラウラ？」

「シャルロットか……」

「どうしたのさ？そんな所に立って」

「いや…な。私はこんな店に来るのは初めてでな……」

「ああ…どんな水着を選べば分らないと」

「そうだ…。くっ……こんな事では佳織の夫失格だ…！」

「まだ言ってるんだ…それ」

うくん…と顎に手を当てながら、近くを見渡すシャルロット。

すると、彼女の目線がある一点に絞られた。

「これなんかいいかもしれない」

「ん？どれだ？」

「これこれ」

そう言っただけで差し出したのは、とある水着。

どんな水着かは話の都合上まだ秘密。

「こ…これかっ!？」

「うん！きつと凄くよく似合っと思って思う！」

「そう…なのか？」

「そうだよー!」

鼻息の荒いシャルロットに次第に押されるラウラ。

そこにグッドなのかバッドなのか分からないが、タイミングよく本音が通りがかった。

「あれ〜?二人してどうしたの?」

「あ!本音!ちよつとこっち来て!」

「ん〜?」

よく状況が理解出来ないまま、シャルロットの手招きに応じる本音。

「これ!ラウラに似合うって思わない?」

「そうだね〜。これなら私もラウラウにピッタリだと思うよ〜」

「だよねだよね!?!ほら、これにすべきだって!」

「し…しかし…少し露出が多すぎないか?」

全裸でないと寝られない少女が何を言っているのか。

「何言ってるの!今時の女の子はこれぐらい大胆じゃないと!」

そんなラウラの癖を知ってか知らずか、結構ハッキリと言うシャルロット。

(ラウラウの場合は、寝る時の方が露出が多い気がするけど……)

そして、密かに心の中でツッコむ本音。

ラウラの癖を知っている数少ない人物であるが故のセリフだった。

「それに…これぐらいいしないと、他の子に佳織を取られちゃうよ? 例えぼほら……」

「ほえ?」

耳元でそつと囁くように誘惑するシャルロット。

その目線の先には本音がいる。

「本音は佳織と一緒に部屋だし、仲だっていい。ある意味、一番の強敵だって皆も言ってたよ?」

「な…なんだと!」

佳織のISと一緒に整備して以降、ラウラは本音と簪の事を親友と思っている。

だが、その親友こそが最大のライバルだと知って、彼女の体に戦慄

が走った。

「い……いいだろう！これに決めた！」

「やった！」

「ドイツ軍人として、ここで引くわけにはいかんからな！」

ドイツ軍人云々は関係ないと思うが、本人がそう思うのであれば、ここは敢えて何も言わない方がいいだろう。

これも一種の優しさである。

「では、会計をしてくる！」

「いつてらっしゃい」

その途中でぐるりと振り向くラウラ。

「本音！」

「ん〜？」

「負けないからな！」

「ふえ？」

本音からしてみれば、全く意味不明な宣戦布告をされた事になる。だが、鋭い彼女の事だから、すぐに理解するだろう。

そんな中、ラウラを焚き付けた張本人であるシャルロットはと言うと……

「あ……あれ……？」

妙なモヤモヤを胸に感じていた。

(な……なんで心がモヤモヤするの……？私は単純にラウラに可愛い水着を着てほしくて、それで……)

自分でライバルを応援してしまった事に全く気が付いていないシャルロット。

後に自分の本当の気持ちに気がついた時、後悔する事は確かだろう。

「どうしたの〜？」

「う……ううん！なんでもないよー！」

慌てて手を振って誤魔化す彼女だったが、その心中は穏やかじゃなかった。

(本当に僕……どうしちゃったの？佳織の事を考えるとドキドキし

て、なのに、佳織が他の女の子と一緒にいる場面を想像したら、胸がチクツとして……)

その感情が『恋』と『嫉妬』だと分かるのはいつになる事やら。

佳織を取り巻く少女達の青春は、色んな意味で波乱に満ちているよ
うだ。

・
・
・
・
・
・

結局、千冬さんと真耶さんに奢られてしまい、申し訳なく思いつつ
も、私達は買物が終わった他の皆と合流した。

合流した時に教師二人がいた事に皆がすつごく驚いていた。

無理は無いと思うけどね。

休日に先生に会ったりすると、ちよつと気まづくなるよね。

「お前達はこれからどうする気だ？」

「お昼を食べてから、少しウインドウショッピングをして帰ろうと
思ってます」

「そうか。ならば、我々は先に失礼させてもらう」

「「「「「え？」」」」」」

てつきり一緒に来ると言い出すと思っただけに、私を含めた皆
が呆けた声を出してしまった。

「休みの日とは言え、暇があるわけじゃないからな」

「門限だけはちゃんと守ってくださいね。じゃあ、失礼します」

行ってしまった……。

ここまで引き際がいい千冬さんもまた珍しい。

(フフフ……ここはまだ勝負時じゃないからな。臨海学校で互いに

水着になった時こそが勝負！今日だけは織斑千冬はクールに去つてやる…。精々足掻くがいい、小娘共)

な…：なんか、背筋に言葉に出来ない感覚が走ったような…：！

「ど…：どうされましたの？」

「大丈夫。問題無い」

「フラグ乙」

あ、簪はこのネタが分かる人なのね。

「先生達も行った事だし、アタシ達もお昼にしましょうか？」

「そうだね。よく見たら、時間もいい感じだし」

スマホで時間を調べたら、もう11時50分を回っていた。

どうやら、思った以上に水着選びに夢中になってたみたいだ。

時間が過ぎるのは本当に早いなく。

「どこにする？」

「ここには飲食店も沢山あるから、歩きながら考えようか？」

「それがいいと思う。ここで止まって考えてもお店の邪魔になるだけだし」

全員の意見が一致したところで、昼食を食べる為に出発する事に。

「ファミレスにファーストフード店…：よく見たらフードコートまであるんだね」

「ここって私達が思っている以上に広いから、まだ全てを見回った事は無いんだよね…：」

「む…：あれはとんかつの専門店か？あっちには回転寿司まである」

「ジャ…：ジャパニーズスシ!?行ってみたいぞ！」

寿司と聞いた途端にラウラの目がキラキラモードに。

この目にはそう簡単には逆らえないんだよね…：。

「お寿司ですか…：私も興味がありますわ」

「僕も。日本に来たら一度は食べてみたいって思ってたんだよね」

国外組は回転寿司に興味津々ですか。

「…：…：行く？」

「この空気で『行かない』とは言えないでしょ…：」

「私はいいよ。まだまだ余裕はあるし」

もうこれ確定じゃね？

「回転寿司ねえ。こつちに戻って来てから、まだ一回も行っていないわね。私も行きたいわ」

「はい決定」

そんな訳で、私達は丁度近くにあった回転寿司屋に入る事に。

入った途端に海外組（鈴を除く）は、店そのものやレーンに乗って回転している寿司に目を輝かせていた。

集団で座れる席に座って、皆で寿司を食べる事に。

基本的にサビ抜きで安い寿司をセシリア達は食べていた。

私達のように山葵に慣れていないメンバーは遠慮なくサビ有りの寿司を食べてたけど。

原作のように山葵を丸ごと食べて悶絶したシャルロットを見て、思わず笑ってしまった。

実際にこの目で見ると、シャルロットが芸能人かお笑い芸人にしか見えない。

少なくとも、私には同じ事は出来ないよ。

セシリアは生の魚類を食べる事に最初は抵抗感を感じていたが、一口食べた途端に表情が変わって、次々と食べ始めた。

日本人として喜んでもらえてなによりだ。

そしてラウラは箸に悪戦苦闘しながらも、なんとか食べていた。

セシリアとは違って生魚に対しての抵抗感は無いみたい。

理由を聞いてみたら『サバイバル技術を一通り学んでいるから、生魚程度にビクついたりはしない』だそう。

今まで一体どんな訓練をしてきたんだ…？

こうして騒がしくも楽しい昼食を終えて、少しだけレゾナンス内にある店を見て回ってから帰路に着いた。

もうすぐ臨海学校…：…か。

不安が無いと言えば嘘になるけど、皆がいるから大丈夫…：…だよ？

余談だけど、ちゃんと門限には間に合いましたよ。

そこら辺は真面目な女子高生ですよ？

・
・
・
・
・
・

佳織達が座っていた席の後ろ。

そこにも少し変わった面々が座っていた。

金髪と紫髪と黒髪。

髪の色だけでも特徴的な三人組の少女達で、周囲の人々もチラチラ
と見ている。

「……いかがでしたか？」

「初めての回転寿司だったが、中々に美味だったぞ」

「いえ、そうではなくて……」

紫の髪の少女が困惑する。

「分かっている。冗談だ」

「フツ……と微笑む金髪少女。」

その顔はとても優美だった。

「仲森佳織……一見すると普通の少女のようだったが……」

「どうされました？」

「面白い少女だったな」

「面白い……？」

急に紫髪の少女の顔が強張る。

眉間に皺が寄っている様子からすると、静かに怒っているようだ。

「フフ……実際に対峙する日が楽しみだ」

「大佐……」

そうして話している二人を余所に、黒髪の少女は一心不乱に寿司を
食べ続ける。

よく見ると、彼女が食べているのは金色の皿の寿司。

つまりは一皿500円以上のネタばかりだった。

結果、会計で5桁の数字を見る羽目になった。

金には困っていない彼女達だったが、レシートに書かれた値段を見た時に目が点になったのは言うまでも無い。

第36話 臨海学校初日

バスに揺られながら窓の外をポケ〜つと眺める。

眩しい陽光に照らされた木々が高速で後方に去っていく。

「はあく〜…」

これからの事を考えると気が重い…。

この臨海学校ではこれまでで一番の事件が待ち構えているんだから。

「かおりんく、どうしたの〜?」

「ああ〜…本音ちゃん」

私に隣の席に座っている、我がルームメイトの本音ちゃん。

きよとんとした目でこつちを見てくる。

「なんでも無いよ。少し寝不足なだけ」

「寝不足?もしかして、臨海学校が楽しみで眠れなかったとか〜?」

「ん〜…近からず遠からず……かな?」

「どつち〜?」

やっぱ、下手に原作知識とか持つもんじゃないね。

先の事を知っていると、対策が立てやすくなると同時に危険が来るって分かっているって事にもなるんだし。

何とも言えない気持ちになっってしまうよ。

「寝不足…か。佳織も意外と子供っぽい所があるんだな」

「それもまた魅力の一つでしょ」

好き放題言ってくれますね。前の席に座っている幼馴染コンビさんよ。

「あつ〜みんな〜!海が見えたよ〜!!」

「えっ!?ホントっ!?」

「ど〜ど〜っ!?」

にやはは……皆、全力ではしゃいでるね〜。

私も、この一時ぐらいいは何にも考えずに彼女達のように無邪気になりたいよ。

「海……か」

最後に海に来たのっていつだったけ？

よく覚えてないや。

毎年プールには友達連中と一緒に行くんだけどね。

その度に何故か一部の女子達から尊敬と嫉妬が緋い交ぜになった視線を送られるんだけど。

「佳織さん？何を黄昏てますの？」

「そう言うのって普通は夕方にするもんじゃない？」

「いや…別に黄昏てるわけじゃないよ。ただ、前に海に来たのっていつだったかな…って思っただけ」

「ああ…そうでしたの」

納得してくれたか。

「私も余り海には来た経験が無いな」

「そうなの？」

「うむ。軍務の関係上、上から眺める事は多々あっても、実際に入る事は殆ど無い。あったとしても海中訓練の時ぐらいだな」

「それは……入ったって言うのかな？」

ラウラの場合は境遇が境遇だからね。そこら辺は仕方が無いでしよ。

だからこそ、今回は思いっきり海を堪能してほしいって思うけど。

「そう言えば、佳織って泳げるの？」

「人並みぐらいには」

流石に遠泳とかは無理だけど。

でも、一夏と箒はそれを普通にやってのけるんだよなあく…。

そんな姿を見てしまうと、やっぱり二人は千冬さんと束さんの妹なんだなって実感する。

血筋に関しては私も決して他人事じゃなかったけど。

「もうそろそろ目的地に到着だ。お前達、ちゃんと席に座っている」

お？もう到着ですか？

千冬さんの言った通り、目の前には旅館と思わしき建物が見えてきた。
た。

それから少しして私達が乗ったバスは今回の臨海学校の目的地で

ある旅館に到着。

それぞれのバスから生徒全員がゾロゾロと降りてきて、旅館のの玄関先に整列した。

「ここが今日から3日間の間、我々がお世話になる花月荘だ。全員、従業員の方々に余計な仕事をさせないように心掛ける。いいな？」

「「「はい!!」」」」

「では挨拶しろ」

「「「よろしくお願いします!!」」」」

全員揃って挨拶すると、流石にかなりの音量になるな。

私達の挨拶の後、従業員の人達の真ん中にいた着物を着た女将さんと思わしき人が丁寧にお辞儀をした。

「はい、こちらこそよろしくお願いしますね。私はこの花月荘の女将を務めております『清州景子』と申します」

女将さんと言うだけあって、本当に綺麗な人だ。

こうして女として生きている以上、将来はあんな風に余裕のある大人の女性を目指したいものだ。

「では皆さん。早速お部屋の方に上がられてください。海に行かれたい方々は別館の方に更衣室がありますから、そこをご利用ください。もしも場所が分からなくて迷った時は、遠慮なく従業員に聞いてくださいね」

挨拶と同じように、丁寧な説明。

私も着物を着れば少しは大人びて見えるのだろうか？

皆は揃って『はい!』と返事をしてから、一組から順に旅館の中へと入っていった。

臨海学校の初日は一日自由時間となっていて、ご飯の方は旅館の食堂で各々で食べるように言われている。

旅館の料理つてなると、やっぱり新鮮な魚介類かな？

やば……不謹慎と分かっているけど、口の中に涎が…。

「さて、私達の部屋は……」

「どこだろうね〜?」

今回、私と同じ部屋に割り当てられたのは、本音ちゃんと一夏と箒

の三人。

見知った人間と一緒にだから、気楽で助かる。

「ここでじっとしていたら、他のクラスもやって来て込み合ってしまう。早く行くとしよう」

「箒はどこにあるか分かるの?」

「いや。だが、部屋の番号は分かっているのだし、皆について行けば大丈夫だろう」

「それって、迷路で迷った時に最終的に壁に手をつけて歩こうとする人みたいだね…」

「べ…別にいいだろ!」

私は気にしないけどね。

箒の言う通りに皆について行くと、ちゃんと部屋に着くことが出来た。

「私一番〜♡」

「「あ」」

本音ちゃんが真つ先に扉に手を当てて開いた。

「「「おお〜!」」」

部屋は畳から漂ってくる香りが鼻孔を擦る和室だった。

…別に、私の名前の『佳織』と『香り』をかけた訳じゃないからね?

部屋自体は数人で泊まる事を前提としているだけあって、結構な広さがあった。

窓からの景色は実に見事なオーシャンビュー。

よく見たら、トイレにバスがセパレートになっていて、洗面所まで個室となっている。

更に浴槽に至っては、大の男が足を延ばしても余裕があるほどの大きさ。

「もしかして…ここって高級旅館?」

「もしかしなくても高級旅館だな」

ダヨネ〜。

「部屋に風呂があるとはいえ、殆どの連中は大浴場に行くだろうな」

「箒も?」

「まあ…な。こうして旅館に来た以上、入らないと損だろう?」

御最も。

そんな私も大浴場に行く気満々だったりします。

私だって大きなお風呂でのんびりしたいもん!だって女の子だから!

「さて、とつとと荷物を置いて海に行くとしようよ」

「賛成♡」

そこら辺に荷物を置いてから、私達はその中から水着等を初めとした荷物を持って、別館にあると言う更衣室へと向かう事にした。

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

更衣室へ行く途中に千冬さんと山田先生に会った。

なんでか千冬さんは血走った目で私の肩を掴んで『すぐに行くからな!行くからな!!』って言ってきた。

その場にいる全員がドン引きしてしまった。あの本音ちゃんすらも……。

そうして教師二人組と別れて再び更衣室へと歩いて行くと、途中にある渡り廊下に隣接している中庭にて奇妙な光景と出くわした。

「……」

目の前で起きている状況を簡単に説明しよう。

地面からウサ耳が生えている。

もう一度言う。地面から『ウサ耳』が生えている。

そう、ウサ耳だ。

僕も私も大好きな、皆に愛される犬や猫に並ぶ愛玩動物の筆頭とも

言うべき、あのウサギの耳だ。

あろうことか、それが地面から生えている。

これを奇妙と言わずして何を奇妙と言うのか。

しかも、ウサ耳の近くには「ご丁寧に『引っ張ってください』と書かれた張り紙付き。

「……どうする?」

「無視だ」

「え?でも…「無視だ」…う…うん……」

無視を貫いた筈は、そそくさと先に進んで、一足先に更衣室へと入っていった。

「……本当に無視する?」

「でも、これって……」

「うん。多分、一夏の考えている事は正解だと思う」

このウサ耳を埋めた犯人は間違いなく束さんだ。

つか、あの人以外にこんなアホな事をする人間を私は知らない。

「つて!本音ちゃん!」

「もう既にウサ耳の所にいるし!」

「いくよ〜!」

私達が止める間も無く、本音ちゃんは両手でウサ耳を引っ張った。

「わっ!」

「本音ちゃん!」

埋まっているかと思っていただけ、実はそうではなかったようで、そこに立っていただけだったようだ。

そんな事とは知らない本音ちゃんは、勢い余って後ろに転びそうになった。

それをなんとかギリギリの所で支えることが出来た。

「大丈夫?」

「えへへ〜…ゴメンね〜かおりん」

「気にしないで。それよりも……」

「これ……どうしよう?」

そう思っで一夏に目配せをするけど、本人は首を横に振るだけ。

「あら？皆さんお揃いで一体何を？」

「セシリア……」

なんちゅータイミングで来るかな、この子は。

「……佳織さんと本音さんは何をしていますの？」

「あ……」

そう言われると、今の私達の態勢はお世辞にも普通じゃない。

絶対に何かがあったと思わせる姿だろう。

「うくん……これには深いような浅いような訳があつて……」

「どっちですか？」

どっちとも言えないんだよ。これが。

なんて説明したらいいか考えていると、何かが高速で空から落ちてくるような音が聞こえてきた。

「い!?本音ちゃん！」

「かおりん!」

咄嗟に本音ちゃんを庇うようにして抱きしめて背中を盾にする。

すると……真つ赤な物体が派手な音と共に地面にぶつ刺さった。

「いいいいいっ!」

「な……なんなんですかの!」

周囲が土煙に覆われるが、少しして煙が晴れる。

そこから姿を現したのは……

「「に……ニンジン?」」

機械的なフォルムのニンジンだった。

大きさは大体、大人一人が余裕で入れるぐらい。

「「「……」」」

全員がいきなりの事に呆気を取られていると、そのニンジンがパカツと中央から割れた。

その中から出て来たのは、案の定の人物だった。

「にゃっはっはっく!見事に引っかけたねくかおりん!いっちゃん!」

「は……はあく……」

この人の辞書には『普通』と言う言葉は無いのだろうか……。

もしも無いのならば、是非とも今日から追加してほしい。

「いや、以前に同じ事をしたらさ、着陸した途端に『ソロモンの悪夢』と『真紅の稲妻』に遭遇しちゃって、危うく捕縛されるところだったんだよね！流石の束さんも、リアルチートなあの二人を同時に相手するのはヤバかったからね。あの時は急いでその場を離れたよ」

そ：そんな事があったのか…。

つーか、やっぱり『あの二人』もいるのか！

束さんがここまで言うとは…この世界でも最強レベルの実力なのか…。

「でも、お蔭で束さんはまた一つ学習したのです！私ってばエライ！」
自分で自分を褒めますか。

「あれ？」

「な…なんですか？」

ど…どうしたんだ？

「もしかして私…お邪魔だった？」

「はっ!？」

束さんに言われて、改めて自分の恰好を確認する。

私の腕の中には本音ちゃんがいて、まるで彼女を抱きしめるような恰好になっていた。

「あわわわわ〜！か…かおりん〜！これは〜…」

「ぐ…ごめん！」

これは私も恥ずかしい！

抱きしめているせいか、すっごく顔が近いし…。

「私が目を離れた隙に、またかおりんのハーレムが増えたみたいだね」

「ハーレムってなんですか…」

人聞きの悪い事を言わないでほしい。

「君の事は知ってるよ。かおりんのルームメイトの布仏本音ちゃんですょっ…」

「えっ？」

「私がかおりんの事ならなんでも知っているのだ！えっへん！」

「威張る事ですか？」

思いつきり胸を張る東さん。

相変わらず、この人ってスタイルいいなあ〜…。

「しかも、かおりんのI.Sの整備もしてるんでしょ？えらいね〜！」

「あ…ありがとうございます〜。」

…あれ？あの身内以外を完全に見下す東さんが、初めて会った本音ちゃんに対して辛辣じゃない？

これってどういうこと？

「あ〜。かおりんといっちゃんその顔。何か変な事でも考えてるでしよ〜」

バレた。

「私だつてね、認めるに値する子はちゃんと評価するんだよ？」

「ええ〜…」

初耳なんですけど？

「と…取り敢えず、お久し振りです。東さん」

「うんうん。本当に久し振りだね〜、二人とも」

この人に最後にあつたのは結構昔だったと思うけど、何年経つてもこのテンションだけは変わらないのね…。

「ところで、箒ちゃんはどこかな？さつきまで一緒にいたよね？」

「箒は…」

言うべきか？でも、箒自身は拒否ってたしな…。

「ま、ここで教えてくれなくても、私が開発したこの箒ちゃん探知機『箒ちゃん見つける君』で探せばすぐに見つかるけどね」

色々とツツコみたい事はあるけど、まずはそのネーミングセンス：どうにかありませんかね？

「それじゃ、私はもう行くね！またね〜！かおりんにいっちゃんにほっちゃん！」

「「ほっちゃん？」」

それって…本音ちゃんの事？

って、いつの間にか彼方まで走り去ってるし！

あの速度に追いつけるのって千冬さんぐらいじゃね？

そんな人を追いつめる二人って……。
やっぱ、同じぐらいの速度で走れるのかな？

「あ……あの……先程の方は一体……？」

「箒のお姉さん……って言えば分かる？」

「お姉さん……って！もしかして、あの女性がI Sの開発者である篠ノ之東博士ですよ!？」

「そ。その篠ノ之東さん」

「ええええええええ!!？」

昔からの知り合いじゃなければ、そのリアクションは当然だよね。

「あ……あの……かおりん？なんか私……その篠ノ之博士に渾名で呼ばれたんだけど……？」

「それは多分、あの人に気に入られた証拠だと思う。東さんって昔から自分が認めたり気に入ったりした人間の事を自分で考えた独特の渾名で呼ぶ癖があるから」

「癖……なの？」

多分ね。

「まあ……今は放置しても大丈夫じゃない？目的は箒みただし。私達は更衣室に行こうよ」

「それがよさそうだね。ここにいてるって事は、セシリアも海に行くんでしょ？」

「はい。折角の日本の海ですから」

イギリスの海と日本の海って何か違いがあるのかな？

海外旅行なんて行った事ないから分かんないけど。

つーわけで（？）皆揃って更衣室へとGO。

箒には……言わない方がいいかもな。

知らぬが仏って事もあるし。

第37話 少女達の真剣勝負？

東さんとの驚きの邂逅を経て、私達は海へとやって来た。

海辺には既に多くの生徒が遊んでいて、みんな思い思いに過ごしている。

「日差しが眩しいねえ〜！」

「でも、暑すぎるって訳でもないよね〜」

「うん。変な言い方だけどさ、丁度いい暑さだよね」

まだ夏本番って訳じゃないからね。

日本の夏はまだまだこれからですよ。

「私的には……佳織の方が眩しい……」

「うん……同感……」

「お綺麗ですわ……」

「ん？」

何を後ろでぶつぶつと言いながら突っ立ってますかね？

私の水着は前に買った赤いビキニ。

でも、なんでか赤い生地在白でハイビスカスが描かれたパレオもついできたんだよね。

実際にお金を払った千冬さん曰く『おまけでくれた』だそうだ。

それを知った時、偉く興奮したらしい。

「水着とは……露出が多ければいいと言うものでもないんだな……」

「これはこれでエロいよね……」

「パレオのスリットから見える太ももがまたなんとも……♡」

いい加減に見るのをやめてくれませんかね？

そんな風に見ているお三方も凄く似合ってるって思うけど？

一夏は私も前に見た白のビキニで、箒は薄紅色の大人しめのデザイン
のビキニ。

セシリアは私達と同じように機体色を意識したのか、青いビキニに
水色のパレオ。

三人とも、私以上に魅力的だっと思うんだけどなく。

「…で、なんで本音ちゃんは『ソレ』を態々チョイスしたの？」

「え〜？似合わない〜？」

「似合わないと言うか……」

それ以前の問題と言えますか…。

本音ちゃんはなんと、いつも彼女がパジャマとして着ているようなデザインと大して変わらない顔以外の全身を覆う感じのキツネの着ぐるみのような水着。

いや…これは水着と言っているのか？

そもそも、こんな水着が本当に売ってあったの？

何処のブランドなの？とか、値段は幾らぐらい？とか気になる事は山程あるけど、今は最も気になっている事を聞こう。

「本音ちゃん……」

「な〜に〜？」

「その恰好……暑くないの？」

「別に？思ってるよりも通気性はいいよ〜」

いや…通気性が良ければいいというもんじゃ……。

つーか、なんで後ろの三人は本音ちゃんの恰好に一言もツツコみを入れないんだ!?

この溢れ出る違和感に気が付かないのか!?

「これもまた……気にしたら負けなのか……」

「??？」

まあ…本音ちゃんらしいからいいか。

「あ!？」

ん？通りすがりの生徒の一人がこっちを振り向いたぞ。

「仲森さん……やっぱり水着も赤いんだ…」

「え!？ホントだ!」

「しかも、スタイル抜群ときてるし……」

なんか段々と視線が集まってきてるんですけど!?

「パシャっとな」

「そこー何を撮ったの!？」

「仲森さんの水着姿」

「正直だな!？」

少しは誤魔化そうとしろよ!?

「……………よし。これ…私の携帯の壁紙にしよう」

「お願いだからやめてください」

「写真のタイトルは『赤い彗星、渚に立つ!』ね」

私はガンダムか!?

「ありがとね、仲森さん。これで暫くはオカズには困らないわ」

「人の水着姿で自家発電は止めて!!」

ああ……………行ってしまった。

唯我独尊過ぎて困ったな…。

パシヤ!

「ん?」

シヤッター音? 後ろから?

「「はあ…はあ…」」

アンタ等もかい!!

三人揃って鼻血を垂らしながら写真を撮りおって!

少しは本音ちゃんを見習ってよね!

「……………」

「ほ…本音ちゃん?」

こつちを凝視してどうしたの?

「かおりんの水着姿を脳内フォルダに保管してる」

「そう来たか!!」

それは防ぎようがないわ!

「ほ…ほら! 皆! 折角海に来たんだよ! 今日ぐらいは羽目を外して遊

ぼうよ! ね?」

「そ…そうだね。私ってば何をしてたんだろ…」

「これも佳織の魅力の成せる技だな」

「そこまで言うか」

箒はどこまで私を過大評価すれば気が済むの?

「そ…それでしたら! 少しお待ちいただいてもよろしいですか!」

「う…うん?」

何を始める気だ?

セシリアはどこかへとダツシユで走って行って、数分後に息を切らせながら戻ってきた。

「はあ…はあ…か…佳織さん…こちらに来ていただけませんか…？」

「い…いいけど…」

セシリアに連れられて歩いて行くと、そこには砂浜に立てられたビーチパラソルと、そこに敷かれたシート、その上に置かれたサンオイルがあった。

「佳織さん！」

「は…はい！」

「私に…その…サンオイルを塗って頂けませんこと!？」

「…ええっ!?!」

…一夏に箒に本音ちゃん…ついて来てたんだ。

「な…何を言っているセシリア!破廉恥だぞ!!」

「うわあ…セシリンってば大胆だねえ…。大胆淑女だねえ…」

「イギリス人の女の子って、こんなにも積極的なんだ…。油断できない…!」

三者三様の反応、あざっす。

「破廉恥上等ですわ!文句がお有りなら箒さんも佳織さんに頼めばよろしいじゃありませんの!」

「そ…それは…」

急速に箒の顔が真っ赤に染まっていく。

リアルにこんな反応する人いるんだ…。

「それが出来たら苦勞せんわ…!!!」

「箒…!!!」

叫びながらどっかに走っていったんですけど!?

一体何がどうしたの!?

「…行ってしまった…」

「しののんって足が速いね…」

「感想そこ!?!」

もうちよつと何か言う事無いの!?

「これでライバルが一人脱落ですわ…！さあ！佳織さん！お願いしま
す！」

「う…うん…」

箒の心配は誰もしないのね…。

「箒なら大丈夫でしょ。別段危険な場所って訳じゃないし」

「それもそう…なのかな？」

いざとなったら他の子が何か言ってくれる事を祈るしかないか。

あれじゃ、箒がどこに行ったか分からないし。

「でも、私ってサンオイルを誰かに塗った事なんて一度も無いんだけ
ど…いいの？」

「問題無いですわ。誰にでも初めてはありますもの。気にする必要は
ありませんわ」

その言い方だと別の意味に聞こえるぞ…。

私が困惑している間に、セシリアはパレオを外してから傍に置き、
同時に胸を隠している水着の紐を解いてから、それを手で押さえなが
らそつとシートに寝そべった。

その仕草が凄く色っぽくて、同性だと分かっているでもドキドキして
しまった。

「一応聞いておくけど…背中だけだよな？」

「佳織さんが望まれるのでしたら前の方もよろしいですわよ？」

「こつちがよろしくないのでもいいです！」

何を言い出すかな…この子は…

イギリスは紳士淑女の国だったんじゃないの!?

「…で？お二人はなんでこちらをジツと見えますの？」

「佳織とセシリアが変な事にならないように監視」

「私はおりんの傍にいたいだけ♡」

「ま…まあ…いいですわ。邪魔さえしなければ」

そうなんだ。

てつきり『向こうに行ってくださいまし！』とか言うと思ってた。

「うぐ…」

白人特有の綺麗な肌が眩しくて、真っ直ぐに見られません…。

っーか、純粹にエロいんだよ！

自分で言うのもなんだけど、今日の私はどうした!?

ドキドキしながらサンオイルが入った容器の蓋を開けて、中身を手の平に出す。

「あ、こういつた時はまず手の中で少しオイルを温めるといいですわ」
「わ…分かった」

温める…ね。こうして手で捏ねるようにすればいいのか？

「か…佳織いきます」

「どうぞ♡」

そっつと手を近づけてセシリアの背中に触れる。

「ひゃうー！」

「あ…ごめん！くすぐったかった？」

「だ…大丈夫ですわ…」

き…緊張する…。どうして臨海学校に来て緊張しなければいけないの？

(うわ…セシリアの肌ってスベスベで柔らかい…。なんか触って気持ちいいかも…)

(佳織さんの手が私に触れてますわ♡勇気を出してお誘いして正解でしたわ♡)

顔が無駄に熱い…。

今の私の顔って絶対に真っ赤になってるよ…。

「お…お上手ですわ…。流石は佳織さんですわね…」

「そ…そっつ…」

「ええ…。佳織さん…出来れば下の方もお願いできますか？」

「し…下の方？」

下っつてどこまでの事を言ってる？

「脚やお尻などとして頂けると嬉しいですわ…♡」
「にゃ…にゃにを!!」

いやいやいや！幾らなんでもそこはダメでしょ！

「はいダウト…!!」

「ええっ!？」

ダ…ダウト？

「セシリア。それは流石にやりすぎ」

「うんうん」

「い…いいではありませんの！実際に塗らなくてはいけませんもの！」

「だったら…「あたしがしてあげるわよ」…へ？」

「…この声は…」

「鈴!？」

「リンリン?」

「鈴さん!?!どうしてここに!？」

「いや、それはこっちのセリフだから」

何処からともなくやって来た鈴は、スポーティーなタンキニタイプの水着を着ていた。

オレンジと白のストライプで、なんとも鈴らしい水着だ。

「さつき箒が叫びながらどっかに走っていくのを見て、何があったのか気になって箒が走って来たルートを逆に歩いて来たら、案の定…！」

「そ…そんな…去っていった箒さんの行動が仇になったなんて…」

仇って、そんな大袈裟な…。

「つていうか、アンタ等も止めようとしなさいよ」

「いや、さつきまでは普通に塗ってたんだよ。でも…」

「リンリンが来る直前にこうなって…」

「成る程。つまり危機一髪だったって訳ね」

危機一髪とな？

「佳織。ちよつとソレ貸して」

「え？」

私が反応するよりも早く鈴が私の足元に置いてあったサンオイルの容器を奪い取った。

「そんなに塗ってほしかったら…」

「り…鈴さん?何を…」

「アタシが塗ってあげるわよ!!」

自分の手に適当にオイルを出して、いきなりセシリアの体に塗りだした!

「きゃ…きゃくく!?」

「ほらほらほらほらほら!!」

「ちよ…やめてください!」

セシリアが絡みつくと鈴の手を振りほどこうとすると、その拍子に体から離れていた水着が下に落ちた。

「「あ」」

その瞬間、場の空気が凍った。

「その…佳織さん?優しくお願いしますわ…♡」

「何の事を言ってるのかな!?!」

「お母様…お父様…:セシリアはどうとう…大人への階段を昇りますわ…♡」

「昇りませんよ!?!昇らないからね!?!」

完全にトリップして、こっちの声が届いてないし!!

この作品は健全な全年齢対象の作品だよ!?!ここでいきなりR—1

8な展開はNOだよ!?!

「何言ってるのよアンタは!?!とつとつと着なさいよ!!」

「り…鈴さん!?!」

鈴は落ちていた水着を拾い上げて、無理矢理セシリアに渡した。

「いつからアンタは痴女にジョブチェンジしたのよ…」

「佳織さんの為ならばいつでもチェンジしますわ!」

「その意見には共感しないでもないけど、今はダメでしょ。仮にも臨海学校に来てるんだし」

共感はあるかよ!?!

っていうか、正論のように聞こえて正論じゃない!

「全く…:アタシはもう行くから。佳織、行きましょ」

「え?」

ちよ…ちよつと?鈴?私の手を引いてどこに行くつもり?

「…:はっ!?!鈴さん!なに自然な動作で佳織さんを連れて行くこうとしますの!?!」

「ちっ！ばれたか」

確信犯だった！

「こうならやったもん勝ちよ！アンタだって同じことをしたんだし、お相子でしょ！それじゃ〜ね〜！」

「こら〜！待ちなさい!!!」

「り…鈴!?!どこに行くの!?!」

「かおりん〜！」

「私の意思は基本無視か〜〜〜!?!」

ちよ…:…わ〜〜〜!?!

鈴はどこに行きたいの〜?…つて、呑気にネタ発言してる場合じゃないでしょ…!

本気でどこに行くんだ〜!?!

・
・
・
・
・

そのまま鈴と手を繋いで走る事10分。

セシリア達がいた場所からかなり離れた所まで来た。

「ハア…ハア…ハア…:…いきなり走り出さないでよ…」

「あはは…:…ゴメンゴメン。でも、こうでもしなきゃ佳織は来てくれないでしょ?…」

「いや…ちゃんと言ってくれば素直について行くよ…」

「それは…そうかもだけど…:…」

途中でモゴモゴしただしたぞ?

お蔭で何を言っているのかよく聞き取れない。

(そうしたら…:…一夏や本音までついて来るに決まってるじゃない…)

耳を澄ましても聞こえません。

何か機嫌を損ねるような事でもしてしまったかな？

「……佳織！あそこのブイまで競争しましょー！」

「え？いきなり何!？」

「負けた方は罰ゲームとして駅前の『@クルーズ』で特大パフエを奢る事！それじゃ、よいドンー！」

「と……特大パフエ!?!それによいドンでスタートしたし!?!」

特大パフエって何さ!?!そんなメニューあそこにあつたっけ!?!

つか、私が運動関係で鈴に勝てるわけないじゃん!!

なんて言ってる間にも鈴はどんと離れていくし!!

待てやごらあ~~~~!!

・
・
・
・
・
・

穏やかな海を泳ぎながら私は考えていた。

(少し強引だったかもしれないけど、こればかりは譲れないのよね
……)

サンオイル……か……。

セシリアみたいにスタイルが良かったら、効果も絶大でしょうね。

実際、塗ってた佳織も顔を真っ赤にしてたし。

ボインスレイヤーの一件以降、自分のスタイルを卑下しないように
決意したけど、そう簡単には割り切れない。

私が『例の女子高生』の領域に至るには時間が掛かりそうだ。

(なんか……羨ましかったな……)

もしも私がセシリアの場所にいたら、どうなっていたのかな……?

やっぱり、同じように大人の階段を昇りかけるのかしら……。

この臨海学校は佳織に自分をアピールする絶好の機会。だけど、それは何も私だけじゃないのよね…。

一夏だって凄い水着を着てたし、走っていった筈だって結構可愛い水着を着てた。

セシリアも凄く似合ってたし、多分、シャルロットやラウラもかなり気合を入れた物を着てくるだろう。あの簪って子も佳織の事が好きだったみたいだし…。

え？本音？いつもならば最大のライバル認定してるけど、今回は大丈夫でしょ。

だって、あの着ぐるみじゃアピール以前の問題だし。

「あ」

そーいや、千冬さんと言う最強のライバルもいたんだった…！

あらゆる意味であの人こそがラスボスだと思う。

(しかも、山田先生も満更じゃない顔をしてた事が何回かあったのよね…)

先生もライバルとか…：…どんだけモテるのよ、佳織…。

(いやいやいや！…ここであげてどうすんのかなアタシ！何のためにIS学園に来たのか、もう忘れたの!?)

名目上の目的は甲龍の戦闘データ収集だけど、それは上の都合。

私自身は佳織に会う為に二度目の日本来日を果たしたんだから！

！
心の中で気合を入れ直した瞬間、力んだ拍子に足が攣ってしまった

(い…痛っ!?)

足が…動かない…！しかも、その拍子に海水まで飲んでしまった！

(き…気管に海水が入って…！まずは海面に出なくちゃ…！)

でも、半ばパニックになっているアタシは思うように泳げないでいた。

足の痛みに加え息が出来ない事が重なって、完全に溺れ始める。

(ヤ…ヤバイ…！これは冗談抜きでヤバイ!!)

このままじゃアタシ…！

(佳織…！)

思わず目を瞑った時、誰かの手が私の腕を掴んで引っ張り上げてくれるのを感じた。

ホント……敵わないなあ……。

第38話 青い巨星のかき氷

「鈴!!大丈夫!?!」

「げほっ!げほっ!だ…大丈夫…だと思っ…」

「そう…よかった」

全く…目の前で鈴がいきなり沈んだ時は本気で慌てたよ。

急いで泳いでいって手を掴むことが出来たからよかったものの、もしも間に合わなかったらと思うと、背筋がゾツとするよ。

「んじや、一旦浜辺に戻ろうか。背中に掴まって」

「え?でも…」

「いいから」

「…分かったわよ」

恥ずかしそうにしながら背中に掴まる鈴。

助けられるのが恥ずかしいって思うのなら、最初から競争なんて言わなきゃいいのに…。

誰かを背負いながら泳ぐのは中々にコツがいる。

中学時代に救急救命講習を受講してなかったらヤバかったな。

学んだ知識は決して無駄にはならないって、お父さんもよく言ってたし。

「その…佳織」

「なに?」

「…ごめんね。んで…ありがとう」

「気にしなくてもいいよ。大切な人がピンチだったんだ。助けるのは当然でしょ?」

「た…大切な人…」

ん?妙に首の辺りが暖かいな?

プシュ…って音が聞こえた気もするし。

大切な友人が命の危機だったんだ。

いくら私の傷が治ったばかりだとしても、多少は無茶はしますよ。

本当は少しだけ痛かったけど。

「よし、到着っ」と

やっと浜辺に着いたよ。

さて、どこか休める場所は……。

「ちよ……ちよつと！もう大丈夫よ！降ろして！」

「本当に？」

「本当よ！」

「はあ……りよーかい」

澁々、私は鈴をゆっくりと降ろす。

「おつと……」

「ほら、少しふらついてるじゃん」

「も……もうOKよ。ホント」

「……………」

どう見ても無茶してるようにしか見えないな。

「あら？佳織さんに鈴さん？」

「あ」

「げっ！」

また抱えてどこかに運ぼうかなつと思っていた時に、セシリアが通りがかった。

その顔は微妙ににやけている気がする。

「どうしましたの？なんだか調子が悪そうに見えますけど」

「うん。実はね……か……佳織！」カクカクシカジカ」

「カクカクウマウマ……。なるほど、海で泳いでいたら鈴さんが溺れかけてしまったと……」

「そうなんだ」

途中で鈴がなんか言ってきたけど、私はセシリアに事の一部始終を説明した。

「それはいけませんわ！早く体を休ませないと！」

お……おおく……セシリアも心配してくれたんだ。

なんだかんだ言っても、ちゃんと鈴の事を友達だっと思ってくれてたんだね。

ちよつと感動……。

「い……いや、セシリア。私は別に……」

「え〜つと……あつ！相川さん！」

「ん〜？どうしたの？オルコツトさん」

またなんで丁度いいタイミングで相川さんが来るかな…。

「実は……」

今度はセシリアが説明。

「そーゆーことね！よし！じゃあ行こうか！」

「え？ちよ…ちよつと!?!」

「ほら、早く休まなければ！」

鈴の両腕をセシリアと相川さんがガツチリホールド。

そのまま『先に行く人』状態で連行された。

「か…佳織〜！助けて〜!!」

「因果応報ですわ。諦めが肝心ですわよ」

「アンタね〜!!」

……取り敢えず、手でも振っておこう。

三人は揃って別館の方に歩いて行った。

行く途中、鈴が大声でこつちに向かつて叫んでいたけど、大丈夫だ

よね？

「……どこ行く」

結局、一夏や本音とはぐれちゃったし。

あ…セシリアが来た時に二人の居場所を聞いておけばよかった。

う〜ん……まだお昼には微妙に早いしなく…。

「あれ？佳織つてばこんな場所にいたんだ」

「ん〜？」

いきなり呼ばれたので振り向くと、そこには水着を着たシャルロッ

トと一緒に……

「え……え〜つと……」

頭の先から爪先までをバスタオルで覆ったミイラ擬きが立っていた。

「……ツツコみ待ち？」

「いやいやいや。佳織だつて分かってるでしょ？」

「バレた？」

知ってるよ。このバスタオル星人はラウラでしょ？

バスタオルの隙間から少しだけ見覚えのある銀髪がはみ出てるし。

「ほら、早く出てきなつて。本当に大丈夫だからさ」

「そ…その判断は私が決める……」

多分、恥ずかしがつてるんだと思うけど、そんなに気にする程の事かな？

いや………こういういった感性は人それぞれだから、私からは強く言えないけど。

「ほくら。折角海に来て水着に着替えたんだから。こうしてちや意味無いでしょ？それとも、佳織に見てほしくないの？」

「そ…それは………だが………しかし………」

「んもく…さつきからそう言つて全くタオルを取ろうとしないじゃない。僕も色々と協力したんだから、見る権利ぐらいはあるって思うんだけど？」

シャルロットも説得に苦勞してるようだ。

ここまで頑なに見せる事を拒否するつて、一体どんな水着を着てるんだらう？

シャルロットじゃないけど、私も少し興味が出てきたぞ。

「仕方が無い。ラウラがそこまで嫌だつて言うんなら、僕だけで佳織と遊びに行こうかな？」

「な…なんだつて!!」

「ほら、一緒に行こう？佳織」

「う…うん………」

これが芝居なのは私も分かっているけど、だからと言ってどうしてシャルロットは私の腕にしがみ付くの？

む…胸が当たってるんですけど……。

「ま…待つてくれ！私も行く!!」

「そのままです？」

「あ………。くっ………やむを得ん!!」

意を決したのか、ラウラはバババツ！とバスタオルを全部外して水着姿を見せてくれた。

「おお〜…」

「わ…笑いたければ存分に笑え……」

黒いビキニ系の水着で、黒いレースがふんだんにあしらってある。いつものラウラからは考えられないぐらいに露出が多いが、だからこそいいと思う。

髪型も水着に合わせたのか、ツインテールに結んであった。

よっぽど恥ずかしいのか、さっきからずっともじもじしている。

「何にもおかしいところなんて無いよね？」

「うん。私は凄く可愛いって思うよ。思わず抱きしめたくなっちゃったし」

「か…可愛い…?!」

おう…急速にラウラの顔が真っ赤に。

でも、そんな表情も可愛いです。

「せ…世辞なんて不要だ……」

「お世辞なんかじゃないって。だよね？」

「うんうん。僕もずっと同じ事を言い続けてるのにさ、全く信じてくれないんだよ。因みに、この水着と髪型は僕がチョイスしたんだ。どう？」

「ぐっじよぶ」

こんな時の返事はサムズアップだと相場は決まっている。

「シャルロットもよく似合ってるよ。やっぱり専用機の色に合わせたんだね」

「まあね。僕もこの色が好きだし」

シャルロットはセパレートとワンピースの中間みたいな水着で、上下に分かれているそれぞれを背中で繋げるような構造になってるみたい。

水着の色は黄色に近いオレンジで、今の季節にピッタリだ。

「私も見習いたいよ。一応着てはいるけどさ、絶対に水着に負けてるって思うんだよね」

「そんなことない！」

「へ？」

ふ…二人してどうしたの？

「佳織もよく似合ってるよ！断言する！」

「そうだ！嫁ほど赤を着こなせる女はそういない！」

「そ…そう？」

ラウラに偉そうに言っておいてなんだけど、本当は私も少し自信が無いんだよね…。

だって、こんな派手な水着なんて、着るの生まれて初めてだし。

「特にこのパレオがいいアクセントになってるよね！」

「流石はシャルロットだ！目の付け所が違うな！」

「なんでも出せばいいってもんじゃないんだよ！時にはこんなアップローチも必要だって思う！」

「全くもって同感だ！」

「あ…ありがとう？」

ほ…褒められてるんだよね…？

さつきとは打って変わって、ここまでぐいぐい来るとは予想外だった…。

この二人って何気に仲いいよね。同室だから？

「あ！かおりんってば、こんな所にいた？」

「え？」

この声は本音ちゃん？

「ご…ごめん…ね…？」

反射的に声のした方を向こうとすると、私の視界に入ってきたのは…

「ん…？どくしたの？」

さつきまでの着ぐるみ姿とは全く違う、至って普通の水着姿の本音ちゃんだった。

エメラルドグリーンが綺麗なビキニで、デザイン自体は至ってシンプル。

だけど、逆にそれが新鮮に見えてしまった。

いつもとは全く印象が違う本音ちゃんに、私は完全に目を奪われていた。

「……………」

「わあく！本音もよく似合ってるよ〜！」

「ありがと〜、でゅっち〜」

「むう……本音め……流石にやるな……」

はっ!?私は何を!?

「ほ……本音つてば……待ってよ……」

「あ、かんちゃんの事をすっかり忘れてたや」

「はあ……」

溜息交じりにやって来たのは簪。

彼女は水色のワンピースタイプの水着を着ていた。

ラウラが着ているのと同じように、白いフリルが特徴的だ。

「か……佳織さん!?!」

「や。その水着、よく似合ってるよ」

「あ……ありがとうございます……」

顔を真っ赤に染めながら声が段々と収束していった。

恥ずかしがり屋の彼女には人前で水着を着る事が恥ずかしいのか
もしれない。

さつきまでのラウラのように。

「佳織つて……いっつもそうなの?」

「何が?」

「なんでもない!」

……?なんでシャルロットは急に怒り出したの?

(佳織が他の女の子を褒めているのを見ると、どうして胸の辺りがチ
クチクとするんだろう……)

……ここは機嫌を直してもらった方がいいよね……?

「ねえねえ、かおりん」

「どうしたの?」

「あそこに海の家があるから、何か食べない?」

「え?まだお昼前だよ?」

「だいじょくぶ!あそこにはかき氷とかもあるから!」

「かき氷か……」

あれなら大してお腹にも溜まらないし、食べ過ぎなきや大丈夫か？
「偶にはいいかもしれないね。皆はどうする？」

「わ…私は佳織さんが行くなら……」

「簪はOKつと。二人は？」

「僕も行ってみたいかな？日本のお菓子には前々から興味があったし」

「ならば私も行こう。その『かき氷』とやらがいかなる菓子か知りたいしな」

「はい決定。んじゃ、行きますか」

次の行動が決定してところで、早速行くことに。

幸い、海の家は目と鼻の先にあるから迷う事は無い。

「こうして見ると、結構大きいね……」

「流石は高級旅館に隣接している浜辺にある海の家…。こんな所一つとっても高級感が溢れてる……」

客引きの為なら金は幾らでも使います…つてか？

そう考えると、客商売つて本当に大変だ。

「え…つと、かき氷屋さん…あつた」

すぐ近くにかき氷の屋台によくある赤い字で『氷』と書いてある小さな垂れ幕があつた。

きつとあそこに違いない。つーわけで、善は急げだ。

「すいませくん」

「おおーよく来たー！」

つて、うおっ!?!なんかこのかき氷屋のおじさん、あの『青い巨星』と呼ばれた『ランバ・ラル』にそっくりじゃない!?

「え…えつと…かき氷ください」

「了解した。味は何にするのかな？」

味は全部で4種類。

メロン味にイチゴ味、それから宇治金時にブルーハワイ。

「私は宇治金時にしようかな？」

「私はいちご♡」

「わ…私はメロン味……」

やっぱ、かき氷は宇治金時だよね〜♡

これこそ日本の夏って感じ！

「う〜む……どれにするべきか……」

「初めてだから迷っちゃうね……」

「ほう？その二人はかき氷は初めてかね？」

「あ……はい。何かおすすめとかってありますか？」

「それは勿論『ブルーハワイ』だ！」

……なんとなく、この答えが予め予想出来てしまった自分が嫌だ。

「じゃあ、それにしようかな？ラウラはどうする？」

「私も同じものを注文しよう」

「承知した。暫しの間待っていてほしい」

そう言うラルさん(なんとなく、こう呼んだ方がいい気がした)は手際よく氷を機械にセットして、かき氷を作り始めた。

「今時珍しい……。これって一昔前にあったって言われている、昔懐かしのかき氷機……」

「おお！よくぞ気が付いたな！このラル、いかにかき氷と言えども妥協は一切したくないのでな。昔の伝手を頼りにこれをなんとかして手に入れたのだ」

そこまでしてかき氷を作って売りたいのか？

あと、昔の伝手って誰だよ。どんな人物がこんな骨董品を所持してたんだ？

「マ・クベ殿には感謝しなくてはな。後でちゃんと礼の電話をしなくては」

あの人かよ!?

確かに、アイツなら色々な古い物を集めてそうだけど！

「よし、まずはメロン味完成だ」

「わ〜い♡」

「では次……」

そんな風に、ラルさんは私達と話しながらも器用にかき氷を次々と作っていった。

「よし、これで最後だ」

「感謝する」

あつという間に全員分のかき氷が完成。

天然の氷を使っているのか、凄くふわふわしている。

こんなかき氷ってテレビでしか見た事ないよ…。

「全部で1000円だ」

「と言う事は、一個につき200円なのか」

随分と安いな。

最近だと、お祭りの屋台でも500円は取るぞ？

「や…安いんですね…」

「これは趣味の一環でやっているからな。あまり値段は気にしないのだよ」

「だが、それでは赤字になったりしないのか？」

「はっはっはっ！値段は安くても数が売れば問題無い！事実、この浜辺にいる人間の殆どが買って行ってくれたぞ」

「マジで!？」

「どんだけ人気なんだよ…青い巨星のかき氷。」

「ここは私が払うよ」

「え？それは悪いよ…」

「気にしないで。ぶっちゃけ、お金を持ってあましてるんだよね…」

私が専用機であるラファールⅡを受領してから、なんでか私の口座に驚くような大金が振り込まれるようになった。

それを千冬さんに相談したら、なんでもこのお金はデータを取ってくれている私に対するデユノア社からの給料のようなものらしい。

日本円である事に驚いたけど、それは日本政府を経由して振り込まれているから…だそうだ。

本当かどうかは知らないけど。

私にそんな大人達の事情なんて知りようがないし。

「はい、1000円」

「毎度あり…今、胸の谷間から出さなかったか？」

「気のせいですよ」

「う…う…う…む…」

え？さつきまで海に入っていたじゃないかって？

お金は拡張領域に入れてましたけど、何か？

「どこで食べようか？」

「適当な木陰で……」

キョロキョロと周囲を見てみると、ふと視界の端に砂浜にネットを張ってビーチバレーをしている一団を見つけた。

傍にはちょうどいい感じの木陰もある。

「あそこにしようか？」

「いいね」

ビーチバレーでも観戦しながら食べるとしماشょうかね。

溶けないうちに行かなきゃな。

「あ！仲森さん？」

「やつほ。ちよつと見学いい？」

「いいよ！どんどん見ていつてー！」

「んじや遠慮無く」

陰になつてるから砂浜も熱くないし。

よっこいしょつと。

「久し振りのかき氷、いただきま……」

「美味し〜♡」

「もう食べてる!？」

しかも結構減つてるし！

私が見て無い所で食べてたのね…。

「美味しい……♡」

「ホントだ〜！これがかき氷……噂で聞いた事はあるけど、冷たくてフワフワで……」

「う……うむ……確かにこれは美味だな……。氷を細かくしただけなのに、ここまで美味しくなるとは……。東洋の神秘とはよく言ったものだ」

別に神秘でもなんでもないけどね。

でも、満足してくれたようだなによりだよ。

で、ビーチバレーの方も結構盛り上がりつつあるみたいだ。

夏らしいと言えば夏らしいけど。

「ほう？なにやら面白そうな事をしているな？」

「そうですね。これを食べ終わったら参加してもいいかも……って？」

この声は……横から？

「待たせたな。佳織」

私が見上げた先には、前に私と一夏がチョイスした黒いビキニを着た千冬さんが悠然と立っていた。

「……………」

その姿は本当の美しいの一言で、冗談抜きで見惚れてしまった自分がいた。

あ…あれ…？なんか顔が熱い気がする……。

なんて言いました？この人…。

「だから、食べさせてほしいと言っている」

「それってつまり…俗に言う『はいあくん』ってヤツですか？」

「その通りだ」

この人はなんちゅー事を言い出すかな突然!!

ほら、他の皆も目が点になってるし！

いや、ラウラだけはなんでか目をキラキラさせてこっちを見てるけど…。

「わ…私もしてほしいぞ！佳織!!」

「ふふ…私の後でして貰え」

「はい!!」

綺麗な敬礼乙。

つーか、もうすることは確定なのね…。

この陽気で脳がどうかしちやったのか？

明らかにいつもの千冬さんとは違う気がする。

(私の大人の魅力で一気に小娘共から引き離してくれる！見ていろよ…お前達！)

…これが千冬さんの本性じゃないと信じたい今日この頃です。

多分、するまで離れてくれそうにないし…ここは覚悟を決めるしかないのか…！

「わ…分かりました」

スプーンでかき氷を一口梳くって千冬さんの方に向ける。

「あ…あくん…」

「あくん」

あ…食べた。

「……………やはり、お前に食べさせてもらうと、美味しいな…」

「ソーデスカー」

もうどうにでもなれ〜！ははは〜！

「あ…あの…佳織？僕もいいかな…？」

「な…何を？」

「その…さつき織斑先生にした……」

「あゝ……」

シャルロットよ、お前もか。

「かおりんく。私もく」

「はは……はいはい」

この流れから察して、本音ちゃんも言うと思ったよ。

「あう……」

「………簪もいる？」

「え……でも……」

「もうここまで来たら遠慮なんてしなくてもいいよ」

「そ……それじゃあ……お願いします……」

結局、私のかき氷は一口ずつ皆の胃袋に収まる事になった。

これぐらいなら気にはしないけど、私も少し皆のやつを食べたくなってきた。

「じゃあ、私も皆のかき氷を一口食べてもいいかな？」

「……も……勿論!!」

おふ………凄い反応。

試しに言ってみただけなのに……。

「なっ………!」

で、逆に千冬さんは戦慄してるし。

(し……しまったあゝ!!佳織に食べさせてもらう事ばかりを考えて、私
が佳織に食べさせることをすっかり忘れていた!!こんな事なら私も
ここの来る途中でかき氷を買ってくればよかった……!)

やっぱり、千冬さんもガッツリとかき氷を食べたかったのかな？

今からでも遅くないから、買ってくればいいのに。

「あれ？皆さん揃ってどうしたんですか？」

「真耶か」

山田先生もご到着ですか………って、なんじゃこりや!?

「………どうしました？仲森さん」

山田先生はレモンイエローのビキニタイプの水着を着ていたが、その破壊力が半端じゃなかった。

唯でさえ普段から服越しに壮絶な破壊力を誇っていたのに、それが

水着姿になっただけでこうなるのか！

もう一歩一歩歩く度に揺れまくってるし！

完全にこれは反則でしょ!!

「……これは……」

「まさに規格外……」

「嘘……でしょ……?」

「わあ……」

私も結構大きい人達を知ってはいるが、これは間違いなく過去最強の大きさだ。

山田先生って本当に日本人？実は外国の血が混じってますとかって言われても驚かないレベルだよ？

「あ！かき氷ですか？懐かしいなあ」

「これなら海の家に売ってありますよ」

「そうなんですか？買ってこようかなあ」

前屈みになると谷間が強調されて、破壊力が二倍どころか二乗になっってます。

「真耶……貴様、喧嘩を売ってるのか……?」

「ええええっ!?別に売ってなんかいませんよ!?」

千冬さんが凄い形相で山田先生を睨んでるんですけど……

さつきまでビーチバレーをしていた皆も、思わず固まってしまっているし。

「あ……あれがIS学園の先生の實力……!」

「織斑先生も凄いいけど、山田先生はその上を行くって言うの……!?!」

「じ……次元が違う……!」

一部の女子なんて、砂浜に手をつけて落ち込んでるし。

「……豊胸手術っていくらするのかな……?」

「……そこ……それに走ったら色んな意味でおしまいだぞ!!」

「皆さんはどうしたんですか?」

「気にしない方がいいですよ」

「そ……そうですか?」

理由を聞いたら、また恥ずかしがると思うし。

ここは黙って口を閉じるのが優しさだ。

あ、早くかき氷を食べないと溶けちゃう。

急いで口の中に入れたせいで、頭がキーンとなった。

「くうう〜…。きくう〜…。…」

「でも、その痛みもある意味で夏の風物詩」

「だよね〜。私も分かるよ〜」

これぞ日本の夏！って感じだよね。

その後、かき氷を食べていたの他の皆も同じ様にキーンを味わっていた。

「い…痛い…!？」

「こ…これは一体…!？」

「にやはは〜!痛いね〜!」

…:…本音ちゃんは何んでも楽しめるんだな〜:…

それこそがこの子の最大の強みかもしれない。

「ん?」

かき氷を食べ終わると同時にお昼になったことを知らせるサイレンが鳴った。

もうそんな時間なのか。なんかあつという間に午前が過ぎていったな。

「お昼になったみたいだね。食べに行く?」

「うん。やっぱりこれだけじゃお腹は膨れないしね」

「日本のリョカンの料理か…:…興味があるな」

「お刺身は食べれるかな〜?」

「それは夕食の時じゃない?」

でも、お昼にお刺身ってなんかブルジョワみたいでいいよね。

もしもあつたら食べるかも。

「私達も行くか」

「そうですね。仲森さん、私達もご一緒してもいいですか?」

「いいですよ。断る理由なんてないですし」

(やった! ナイスアシストだ! 真耶!)

なんで千冬さんは向こうを向いて小さくガッツポーズしてるの?

そんな訳で、皆揃って旅館の食堂で昼食を食べる事に。

その途中で一夏と箒、そしてセシリアと合流した。

一夏はあの後、箒を探していて、その後はずっと行動を共にしていたらしい。

セシリアは鈴を別館に連れて行ってから、また浜辺に戻ってきたみたい。

私達の所に向かおうとしたところでお昼になったらしい。

食堂では鈴とも会ったけど、どうやらもう大丈夫みたい。

セシリアの事をすっごい目で睨み付けてたけど。

お昼に食べたのは奮発してお刺身定食にしたが、これがまた凄く美味しかった。

まさか、口の中で蕩けるお刺身を本当に食べられるなんて…。

あれと同じようなものをまた夜に食べられると思うと……じゅるり。

おっと、涎が……。

・
・
・
・
・
・
・

気が付けばもう夜。今の時間は大体19時30分ぐらい。

私達生徒は大広間を3つも繋げた大宴会場と言う場所で豪華な夕食に舌鼓を打っていた。

「美味し〜♡お昼に食べたお刺身も絶品だったけど、これもまた最高〜♡」

「確かに。こんなにも高級な食事なんて、もう二度と食べれないかも…。よく味わって食べないとね」

さつきから一夏は一口一口をよく味わいながら食べている感じ。

気持ちには分かるけど、そこまでしなくてもいいんじゃない？

因みに、今の私達は全員が浴衣を着ている。

意味不明だけど、昔からあるこの旅館の決まり事みたいで『食事中は浴衣着用』が絶対らしい。

別に気にはしないけど、どんな理由でこうなったのかは知りたい。ずらくつと並んでいる私達一年生はお座敷に座っているので、当然のように皆正座で座っている。

皆の前にはそれぞれに一善ずつ食事が置かれている。

肝心のメニューはと言うと、基本的にお刺身と小鍋、そして山菜の和え物が2種類ある。トドメに赤出汁のお味噌汁にお新香。

こんな風に言うとな普通に聞こえるかもしれないけど、実はこのお刺身が『カワハギ』だから驚きだ。しかもキモ付き。

幾らIS学園が特殊とはいえ、私達自体は一介の高校生と大差無い。それにここまでして大丈夫なの？ちよつと贅沢すぎやしませんか？

？

「お昼に佳織が美味しそうに食べていた理由が分かった気がするよ。これは確かに美味しいね」

「でしょ？和食が世界中で人気があるのも納得だよ。食に国境は無いって本当だっけ思うよ」

明日も同じ様なものを食べれると思うと、自然とテンション上がるな♡

私の右隣にはシャルロットが、左にはセシリアがいて、正面には一夏が座っている。

だからこそ分かるのだけれども、さつきからセシリアが辛そうにしていた。

「だ…大丈夫？」

「ご…ご心配は無用ですわ…」

そう言いながらも、額に脂汗が出てますよ。

まあ…本人の意思は無下に出来ないから、今はまだ何も言わないでおくけど。

「ねえ一夏。これって本わさだよな？」

「うん、間違いないよ。こんな細かい所にまで高級食材を出すなんて……」

「本わさって？」

ああ……シャルロットはフランス生まれだから知らないのは当然か。

「本わさって言うのは、所謂『本物の山葵』を摩り下ろしたモノの事を言うんだよ」

「ほ……本物？それじゃあ、学園の食堂によく出てくるお刺身定食についてくるワサビって……」

「あれは練りわさ。色々と着色をしたり、他のものを合成したりして見た目や色、味なんかを似せているの。原材料は確か……」

「ワサビダイコンやセイヨウワサビだね。純粋な日本製の山葵を100%摩り下ろしているのとは何もかもが違うよ」

そうなんだよね。

別に摩り下ろさなくても、天ぷらにしたりそのまま食べても美味しいし。

練りわさのせいで山葵＝辛いってイメージがあるけど、本場の山葵は全く辛くない。

あれは摩り下ろした時に辛味成分が出てるだけ……だったっけ？

「じゃあ、これこそが本場のワサビなんだね？」

「そうなるかな？でも、最近の練りわさも馬鹿に出来ないんだよな」

「まあね。店舗によっては本わさと練りわさを混ぜたりもしてるし」

「へえ……そうなんだ。二人とも詳しいね」

「料理は趣味だしね」

「佳織は？」

「お母さんにこの手の知識は徹底的に叩き込まれた」

「そ……そうなんだ……」

ホント……うちのお母さんは私に何をさせたいんだろう？

料理の腕が上がったのは純粋に嬉しいけど。

「……………はむ」

…今、山葵をそのまま食べなかつた？

「つ……………!!?」

やっぱり!?もう…。

思いつきり鼻を押さえて涙目になつてるし。

「ちよ…………大丈夫?」

「ら…………とか…………」

呂律が回つてない事態で大丈夫じゃないでしょ。

そんな状態で無理に笑顔を作つても説得力皆無だよ。

「ほら、このお茶を飲んで。少しは落ち着くと思うから」

「あ…あひはほ…」

慌てずゆつくりと私が手渡したお茶を飲むシャルロット。

なんかこうしてると、まるで本音ちゃんを世話してるみたいだよ。

「ふう…………」

「落ち着いた?」

「うん…。なんかごめんね?」

「気にしない気にしない。知らなかつただけなんだし。次から気を付ければいいだけだよ」

「取り敢えず、山葵は基本的に醤油に混ぜたりして食べる香辛料だから、それさえ覚えていれば大丈夫だと思うよ」

「分かつたよ。ありがとう、一夏」

シャルロットはこれで良し…と。で、お次は…………。

「う…………ううう…………」

もう明らかに限界きてるでしょ、セシリア。

「無理は禁物だよ?駄目っぽいなら、ラウラみたいにテーブル席に移動した方がよくない?」

IS学園は非常に多くの国から生徒が来ている。

その為、正座慣れしていなかったり、宗教上の理由で無理だったりする子の為に隣の部屋にテーブル席が態々用意してある。

ラウラもその例に漏れず、テーブル席に向かつた。

本人はこつちで食べたがっていたけど、正座で座ろうとすると足が痺れてしまい、結局は断念して向こうに行った。

「い…いえ…問題無い…ですわ…。この場所を確保するために費やした労力に比べれば、この程度の試練…！」

試練って。一体私が知らない所で何があったのさ。

ふと他の席に視線を移すと、箸と本音ちゃんと簪が見えた。

見知ったメンバー同士だからか、三人とも楽しそうに食べている。

「佳織。毎回の事だけど、気にしたら負けだよ」

「う…うん…？」

一夏がそう言うなら、そうなの…かな？

「ぐ…ううう…」

箸を持つ手がめっちゃ震えていますよ、セシリアさん。

もう…見てられないよ。

「セシリア」

「ここからは動きませんわよ」

「分かってる。だから…こうするの」

セシリアの皿に盛られたお刺身を箸で取って、醤油を付けてから彼女の口に近づける。

「こ…これは…!?!」

「ほら、早く口を開けて。あくん」

「あ…あくん…」

口を開けた瞬間に放り込む。

「お…美味しいですわ…♡」

「それはよかった」

こんな美味しいお刺身を食べ損ねるなんて勿体ないからね。

「それ、お昼に織斑先生にもしてたよね」

「えっ!? そうでしたの!?!」

「千冬姉さんにしたんだ…。どっちからしたの?」

「向こうから言ってきたよ」

「姉さんから…。(負けられないな…)」

い…一夏が急に真剣な顔になった? なんで?

「」「」「……」「」

な…なんで皆してこっちを見てるの?

「今の……見た？」

「うん……見た」

「また仲森さんが百合の花を咲かせてる……」

ゆゆ…百合の花？意味は分かるけど、別に咲いてなんかいないでしよ。

私は単純にセシリアが困っていたから手を貸しただけだよ？

「そう言えば、お昼にも織斑先生と同じような事をしてたような気が……」

「ええっ!?織斑先生も狙ってるの!？」

「教師すらも魅了する赤い彗星……!」

それだけはやめて。

私は何もしてないよ。

「……………」

り…鈴!?ハイライトの無い目でこっちを見るのは止めて!

「お前達。一体何を騒いでいる」

「「「あ」」」」

その場にいる全員が時間が止まったかのように停止する。

何故なら、千冬さんが襖を開けてやって来たから。

「……………何をやっている?」

「あく…つと……セシリアが困っていたみたいなので、ちよつと……」

千冬さんもこっちをジゅつと見ないでく!?

無駄に緊張するから〜!

「……………そうか」

小さく呟いた後、千冬さんは私に近づいてきて、腰を低くして耳元で囁いた。

「風呂の後に私の部屋に来てくれないか?」

「ひゃ…ひゃい!？」

へ…部屋に来いとな!?

「待ってるぞ」

ド…ドキドキが止まらない……。

この人は何を思って私を部屋に誘ったんだろう…?

「お前達。それ程までに体力が有り余っているのなら、食事の後に砂浜をランニングでもするか？50キロもあれば大丈夫だろう？」

「「「す…すいませんでした!!」「」」

鶴の一声とはよく言ったものだ。

千冬さんの一声であつという間に静かになった。

「お前達も、あまり騒ぐなよ」

「「わ…分かりました」」

私の周りにいる三人も大人しくなった。

流石の専用機持ちも世界最強に喧嘩は売りたくないようだ。

表情は変わっていないけど、なんだか嬉しそうに大宴会場を後にした千冬さん。

それって、あの一言を私に言ったから…？

「ねえ、さつき織斑先生に何か話しかけられてたけど、何を言われたの？」

「ちよつとね……」

「部屋に来てって言われたって話したら、また騒がしくなりそうだから、ここは敢えて黙っていいようか。」

バレたら後が怖いけど。

お…お刺身美味しいなー（棒読み）

第40話 先生だつて恋をする

毎度のように賑やか(?)な夕飯を終えた私達は、この旅館の一番の自慢である温泉に揃つて入る事にした。

「「「はふう〜♡」」」

「……………」

「え…え〜と…」

「蕩けるな……」

カポーンつて音が聞こえてきそうなシチュエーション。

これぞ温泉!つて感じだよね。

流石と言うべきか、石造りのこの温泉は凄く広くて、その気になれば泳ぐことすら出来そうなぐらいに大きい。

「温泉なんて、家族旅行に行つた時以来だよ……」

「私はこれが初めてだ……」

「私も。温泉の素なら何回も家の風呂に入れた事あるけど」

「ジャパニーズオンセン……体の疲れが全て取れるようですわ……」

「本当に気持ちいいねえ〜♡」

あ〜……マジでいい気分〜♡

「あ…あのさ……なんでさつきから鈴と簪の二人はずつと佳織達の事を見てるの?」

「……………ねえ……………あれ……………」

「うん……………完全に浮いてるよね……………」

「えっ?!無視!」

ん?…なんか視線を感じるけど、なに?

「嫁……………これがオンセンなのか……………」

「そくだよ〜」

「体中の疲労が癒えていくようだ……素晴らしいの一言に尽きるな……………」

「でしよ〜?」

ラウラは温泉の良さが分かるみたいだな…。

料理と同様に、温泉にも国は関係ないんだね…。

「た…確かに気持ちいいよね。僕も初めてだけど、これは癖になりそうだよ。あはは…」

シャルロット、顔が引きつってるよ。

「あれって本当に浮くのね……」

「都市伝説だと思ってた……」

「あたしも。あの5人であれなら、山田先生とかどうなるのかしら？」

「浮力が大きすぎて、体ごと浮いちゃったりして」

「有り得そうで怖いわよね……」

さつきから鈴と簪の二人は何の話をしてるの？

浮いてるって何の事？

「肩凝りも治りそうだよ……」

「佳織もか？実は私もなんだ」

「箒もなんだ。私も最近になって肩が凝り始めてさ」

「あら、奇遇ですわね。私も少し凝ってきまして……」

「かおりん、肩を重そうにしてたもんね。気持ちは分かるよ」

ほんと、こうしてお風呂に入っている間は気にしなくて済むからいいよね。

「なんか言ってるわよ」

「私達には無縁の会話」

「よね。分かるわ」

意外とこの二人って仲がいい？

「一応聞いておくけど、シャルロットも肩が凝ったりする人種？」

「え？い…いや…僕はそこまで……」

「そこまで？じゃあ、少しは凝るの？」

「す…少しだけね……」

「ふん……」

「二人とも目が怖いよ!?!ハイライトが無いし!?!」

「気のせいじゃない？」

「気のせいじゃないよー!」

今日のシャルロットは妙にツツコみのキレがいいね。

「なんか……眠くなってきた……」

「ラウラ!?寝ちや駄目だからね!?風邪を引いちゃうよ!」

んでもって、ラウラの保護者的な役目をしている…つと。

そこに関しては少しだけ同情してしまう。

「そーいや、先生達はどうしたのかな?」

「温泉はここだけじゃないから、別の温泉に入ってるんじゃないか?」

「そつか。いくら大きいとはいえ、ここだけじゃ私達全員は入れないもんね」

「納得だね」

「心なしか、お肌まで綺麗になつていくようですわ…」

入る前に見たけど、ここの温泉って滋養強壯の他に美肌効果とかもあるみたいだね。

出た頃にはきつと皆揃って玉のお肌になつてるね。

こうして、私達はタップリと温泉を堪能して、浴場を後にした。

あゝ…最高だった♡

・
・
・
・
・

温泉を出て涼みながら旅館内を歩いていると、ある物を見つけた。

「あれ?これって卓球台じゃない?」

「温泉宿にはつきものだけど、ここにもあつたんだ…」

「卓球…:テーブル・テニスですわね」

高級旅館と言えども、温泉旅館には違いないって訳か。

ちゃんと台の傍にある籠には卓球の弾とラケットも置いてあるし。

「ねえ…ちよつとやっていかない?」

「え?今から?」

「別にいいじゃない。時間ならあるんだし。ついでだから、罰ゲーム

とかも考えてさ」

「それ…面白そうだね」

「お？一夏…やる？」

「いいよ…。エアホッケーじゃ負けっぱなしだったし。ここらで借りを返しておきたいしね」

「へえ…言うじゃない。返り討ちにしてあげるわよ」

一夏と鈴は完全にやる気ですな。

「…やるっか？」

「この二人だけでやらせるのもアレだしな…」

「テニスなら出来ますけど、これはどうかしら…」

卓球か。私は体育の授業でならやった事はあるけど…。

「どうせなら、少し面白くしたい」

「面白くって？」

「古今東西卓球」

…古今東西？

「ダブルスで、交互にラリーをする。ちゃんとお題に沿った答えを言いながら」

「簪。その前に古今東西とは何だ？」

「簡単に言うと、あるお題を決めて、その答えを言っていくゲーム。例えば、お題が『赤いモノ』なら、『佳織さん』とか『トマト』とか『イチゴ』とか」

「おお！成る程な！」

「ちよ…ちよつと待って。なんでお題が『赤いモノ』で速攻私の名前が出てくるの？」

「」「」「え？違うの？」「」「」

「私自身は肌色だよ！」

私が赤いのはISに乗っている時だけで、普段は全く赤くなんて無いよー！

はあ…全く…。

温泉の後に千冬さんに部屋まで来いって言われてるけど、時間の指定は無かったし、少しぐらいはいいよね？

「じゃあ、私は審判をするよ」

「本音、お願い」

「おっけ」

・

・

・

・

・

つーわけで、最初の対戦は鈴&セシリア組VS箒&ラウラ組。

図らずも、ここで原作での学年別トーナメントのコンビが実現か。

「私は次か」

「まずは一回戦だね」

楽しみは後を取っておかなくちや…だね。

「では、私からお題を発表します」

「なんでもいいわよ」

自信たっぷりだな…鈴。

「お題は…IS学園の生徒らしく、それっぽいものにするか」

「それっぽいもの？」

「うん」

場に少しだけ緊張が走る。

そして、お題が発表された。

「今回のお題は…『ヨーロッパの剣の名前。ただし、神話や伝説に登場した架空の剣は除く』で」

「了解」

「え…ええっ!?ヨ…ヨーロッパの剣の名前!?架空のヤツはダメって…
例えばエクスカリバーとかって事?」

「そう」

「ちよつと難しくない!?!」

「そうかな？」

私的には結構簡単だと思うけど？

そんなに困るようなお題？

「三回ミスをしたら罰ゲームだから」

「その肝心な罰ゲームは何にするんだ？」

「……織斑先生の胸を揉む」

「よし！」

「んな事したら普通に死ぬわよ!!命知らずにも限度があるでしょ!!」

「罰ゲームで済めばいいね……」

た…確かに怖いけど、罰ゲームならそれぐらいしないとダメ……だよね?多分……。

妹である一夏が言うと言得力も絶大だ。

「先攻後攻はどうする？」

「じゃんけんでいいんじゃない？」

「分かったわ。じゃんけん……」

つーわけで、先行はラウラ・箒組に。

「では行くぞ!……カツツバルゲル!!」

「エストック!!」

「ファルシオン!!」

「えくつと…えくつと…あつ!?!」

「リンリン、あうと〜!」

鈴が一回ミスった。

「ちよつと!アンタ達、事前に打ち合わせしてるでしょ!?!」

「二そんな訳ないだろう(ですわ)!!」

あの短時間で打ち合わせは無理でしょ。

「鈴が罰ゲームに近づいたね」

「つて言うか、何気に皆、マニアックな物を言うよね…」

だからこそ…じゃない?

「次のお題は『アジア・アフリカの剣の名前。勿論、架空の剣は除く』」

「またなの!?!」

「これなら大丈夫だと思つて」

「その根拠はどこから来るのよ……」

「はいはい。始めるよ」

鈴がミスしたから、次は鈴&セシリア組から。

玉はセシリアが持っている。

「じゃあ、私から行きますわよ。シャムシール!!」

「ジャマハダル!!」

「パタ!!」

「よし!これなら……! 合口!!」

お?今度は続いたぞ。

「シヨートル!!」

「カタール!!」

「……青龍刀」

「あつ!? (先に言われちゃったし……!)」

「リンリン。あうと二回目」

この手のゲームって運動神経の有無はあんまり関係ないからね。

知識こそが最大の武器になるから、いくら鈴が動けても答えが分からなかったら意味が無いことになる。

「鈴が追いつめられてきたね」

「ここから逆転できるかな?」

「ここから面白くなるんだよね、こーゆーのって。」

「ちよ……ちよつと待って!次は私にお題を決めさせて!」

「別にいいよ」

「よくし……それじゃあね……」

まあ、鈴が一番罰ゲームに近いし、これぐらいはいいか。

「……お題は…… 『円卓の騎士の名前!!』アースー王!!」

「ガウエイン!!」

「ランスロット!!」

「モードレッド!!」

「……」。 (あたし今出た四人しか知らない!!)」

これで鈴の罰ゲーム確定。

他にはパーシヴァルとかトリスタンとかいるよね。

「罰ゲームはいつする?」

「いつでもいいんじゃないか?ここでも学校でもやろうと思えば出来るんだし」

「でも、やるなら素早くしないとダメだよ。真正面から行けば単なる自殺行為だし」

「もう……どーにでもして……」

完全に意気消沈ですな。

挑むのは世界最強だし、仕方が無いと言えばそれまでだけど。

・
・
・
・
・
・
・

突如勃発した卓球大会は鈴の罰ゲームで幕を閉じた。

え?私達はどうしたのかだって?

古今東西関係無しに普通に卓球を楽しんだけど?

いや、いい運動になった。

鈴が凄く吠えてたけど。

で、今の私はと言うと……

「と……取り敢えずはノックかな……」

千冬さんの部屋の前に来ています。

寮の部屋の時もそうだけど、無駄に緊張します……。

コンコンとかな。

『入ってきていいぞ』

「し……失礼します……」

そつとドアを開けて中に入る。

「来たか」

室内では千冬さんが胡坐で座っていて、その手にはどこかで見た事

のあるような缶が握られていた。

「ち…千冬さん!? 流石に飲酒は拙いんじや…」

「気にするな。今は夜、つまり勤務外だ」

「ええ…」

そーゆー問題かしら…?

「ほれ、座れ座れ」

「は…は…は…」

促されるがまま、近くに置いてある座布団に座る事に。

「こうして二人つきりで話すなんて久し振りだな」

「そ…そうですね」

少なくとも、お互いにIS学園に来てからは、千冬さんと二人になる機会は殆ど無かったな。

必ず他の誰かがいたりするからね。本音ちゃんや一夏、山田先生とか。

「山田先生はどこに?」

「真耶なら今、土産物屋に行っている。家族に買っていくと言っていた」

山田先生の家族…あの人の胸は母親譲りだったりするのかな?

「もう少しこつちに来ないか?」

「はあ…」

怪しげな手招きをしているが、ここは気にしたら負けと判断し、座布団を持って千冬さんの近くに移動し座る。

「…酔ってますね?」

「酒を飲んでるんだ。酔って当たり前だ」

「なんで嬉しそうに言ってるんですか…」

目もとろくんとしてるような気がするし。

本当に大丈夫なのか…?

「…佳織」

「はい?…つて!」

きゅ…急に抱き着かれた!?

「はあ…落ち着く…」

「あ……あのっ!?!」

「佳織は本当にいい匂いがするなく……」

こ……拘束力が強くて抜け出せない……!

一応言っておくと、いい匂いがするのは千冬さんですけどね!

「佳織はキスをした事はあるか?」

「な……ないですけど?」

「じゃあ処女か?」

「先生が生徒にそんな事を聞いてもいいの!?!」

「今は勤務外と言ったはずだ。故に今の私は教師じゃない。だから、何をしてもオールOK」

「OKじゃないでしょ!勤務外だからこそちゃんとモラルを守らないといけないんじゃない?!」

もう酔ってるどころの話じゃないよ!完全に泥酔状態だよ!

「で、どうなんだ?処女なのか?」

「しよ……処女ですよ!悪いですか!?!」

「そんな事は無いぞ。寧ろ嬉しい……って言うか、安心した」

「なんでっ!?!」

もうこの際誰でもいいから、この人を止めてく!!

「口移しで飲ませてやろうか?」

「結構です!私は(肉体的には)未成年ですよ!勧めないでください!」

「バレなければ大丈夫だろ」

「そーゆー問題じゃないでしょ!?!普段の凛々しい千冬さんはどこに行っただんですか!?!」

「普段の私はイデの発動によって因果地平の彼方に消え去った」

「物騒過ぎる!!」

もう……どっからツツコめばいいの!?!

おおうい!シャルロットさんく!?!出番ですよく!!

「ふう……」

あ……あれ?離れた……?」

「佳織分の補給は無事に完了した」

「佳織分となっ!？」

「適当に新しい成分を作らないでください！」

「もしかして、この為だけに私を呼んだんじゃ……」

「それもある」

「あるんだ!？」

「聞きたくなかった！」

「だが、お前と二人で話したくなつたと言うのも事実だ」

「千冬さん……」

「でも、なんで私なの？」

「こんな場合って、普通は実の妹である一夏を呼んだりするんじゃないの？」

「お前にはいつも苦労を掛けさせるな……」

「い……いや、別に私は苦労なんて……」

「無人機の時やラウラのISが暴走した時、いずれもお前が中心にいて解決してくれた。本当に感謝している。ありがとう」

「……急に真剣な顔になって……ズルいですよ……」

「なんか……さっきまでツツコみをしていた自分が恥ずかしくなつたじゃん……」

「けどな」

「きやつ!？」

「また抱き着かれた。」

「けど、今度はさっきみたいには力は籠ってなくて、優しく抱きしめてくれた。」

「私は心配なんだ。このままじゃいつかお前が壊れてしまいうそう……」

「千冬さん……」

「この人が弱音を吐くなんて……」

「学園では教師として凛々しい千冬さんしか見てないけど、この人なんて人間なんだ。」

「これこそが千冬さんの本質なのかもしれない……」

「私は……お前を失いたくない……」

千冬さんの体が震えている。もしかして……。

「一夏や他の生徒も大事だと思ってる。だが、私はお前が……」

泣いてる……あの千冬さんが……。

「佳織……」

不謹慎かもしれないけど、泣いている千冬さんがとても美しく見えた。

その顔に思わず見入ってしまった。

「千冬……さん……」

私の胸が……早鐘を打ってる……。

顔が……とても熱い……。

お互いに顔を見つめ合っている、この時が止まればいいと不覚にも思ってしまった。

「……すまないな。らしくない姿を見せた」

「そんなことないですよ」

「佳織……?」

この部屋に来て、私は初めて自分から抱き返した。

「私なんかでよければ、幾らでも弱音を吐いてください」

「いや、しかし……」

「担任の先生を支える事も、クラス代表の立派な仕事ですよ」

「お前って奴は……」

やっと心から笑ってくれた。

やっぱり、千冬さんは笑顔が一番だ。

「そうだ。久々に『アレ』をしましょうか?」

『アレ』か……。佳織にして貰うと、一夏と違う独特の気持ちよさがあるからな……。頼もうか」

「はい、喜んで」

いい機会だから、いつも私達の為に頑張ってくれている千冬さんを少しでも労わってあげよう。

少しでも恩返しになれば嬉しいな。

さて、偶にはシヤア様モードじゃない私の本気を見せてあげるとしますか！

第41話 彼女達の気持ち

温泉後に行われた卓球大会を終えて、暫く部屋でゆっくりとしながら同室の同級生と談笑を楽しんでいたセシリアだったが、少し喉が渴いたので旅館内にある自販機に飲み物を買いに出かけていた。

「あら？」

それは彼女が偶然にも教職員が泊まっている部屋の前を通りがかった時だった。

一年一組の担任である千冬の部屋の扉の前に耳を当てながら張り付いてる見覚えのある姿が見えた。

「……………箒さんに鈴さん？そんな所で何をして……………」

「シ——！！！」

「え？」

二人揃って急に人差し指を自分の口に当てて『喋るな』のジェスチャーをする。

増々意味が分からなくなったセシリアだったが、その時、扉の向こうから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

『本当に久しぶりですね。二人つきりですものってこれが初めてかな？こういう時って大抵は一夏も一緒ですし』

『そ……そうだな。だが、偶には二人だけするのも悪くは無いだらう？』

『ふふ……………かもですね。それじゃあ、リラックスしてくださいね？体が強張っていたら意味無いですから』

『分かっている……………んん……………！佳織い……………もう少し手加減を……………』

『ダメです♡唯でさえ千冬さんは色々溜まってるんですから、この機に全部出しちゃいましょ？』

『そ……それは……………んふう……………♡』

『効果出てきたみたいですね。それじゃあ、ここはどうかなく？』

『かお……………い……………♡や……………やめ……………♡』

『我慢してください。あ、ここもやっちゃお♡』

『あああああ〜♡』

沈黙がその場を支配した。

そして、二人がどうして真剣な顔で聞き耳を立てていたのかが理解出来た瞬間でもあった。

「……これは……何がどうして……こうなつて……え……う……ええ……??」

目がグルグルさせながら体全体を振るわせて、誰に言っているのか分からない質問を投げかける。

それを聞いているのかいないのか、箒と鈴は暗い空気を背負いながら落ち込んでいた。

「……………」

顔を真っ青にして廊下の床を見つめる二人。

その様子はさながら、バイオハザードに登場したゾンビを彷彿とさせる。

『よし！次は〜…』

『いや…少しだけ待ってくれ、佳織』

『ふえ?』

急に室内の会話が途切れる。

それを怪しんだ三人はさつき以上にドアに近づいて耳を寄せる三人だった……

「「ぶべらっ!?!」」

いきなり開いたドアの直撃を受けて、まるで北斗神拳継承者に倒されるモブキャラのような悲鳴を上げた。

「何をしている、小娘共」

「は……ははは……」

「こ……こんばんわ……です……織斑先生……」

「お……おやすみなさいですわ!!」

千冬から発せられるプレッシャーに気圧されて、思わず後ずさりする三人。

それに耐えられなくなったのか、すぐさま踵を返して逃走開始!

………したのだが………

「甘い」

「「なあっ!?!」」

一瞬で回り込まれた。

「盗み聞きとは感心できんが……まあ……これもいい機会か」

溜息を吐きながらも、怒ると言うよりは呆れている感じの千冬。

「お前等」

「「は……はい!」」

「今から他の連中……ボーデヴィツヒとデユノア、それと一夏と布仏と更識を呼んでこい」

「え……えつと……」

「とつとと行け!」

「「りよ……了解!!」」

今度こそ解放された三人は、千冬に言われた任務を果たすために、それぞれに分かれた。

「どうしたんですか?」

「なに。小生意気な鼠が三匹いたんでな。少しパシラせたただけだ」

「???」

・
・
・
・
・
・
・

数分後。

千冬の部屋にはいつものメンバーが一堂に会していた。

だが、佳織と一夏以外の全員が口を噤んでいて、室内には微妙に重苦しい空気が漂っていた。

「ふう……千冬さんってば、本当に溜まりすぎですよ。偶には発散しないと、体を壊しちゃいますよっ!」

「そう思うのなら、これからも佳織がしてくれないか？」

「仕方が無いなあ〜…」

まるで恋人のような会話をする二人を見て、目を見開いてしまう一夏以外の全員。

「もしかして、マッサージをしたの？」

「そうだ。久し振りに佳織のマッサージが恋しくなってるな」

「あ〜…分かるわ〜。佳織って独特のツボを突いてくるから、普段じゃ味わえない気持ちよさがあるんだよね〜」

唯一会話に入ってくる一夏を見て、またまた目を見開く面々。

その顔はお世辞にも年頃の少女達が見せていいような表情ではない。

「マ…マッサージ…？？」

「うん。前はよく私と佳織で姉さんの体をマッサージしてあげてたんだよ」

「時には私と一夏とでお互いの体をしあつた事もあつたよね」

「うんうん」

ドア越しに聞こえてきた声の正体が分かった途端、箒とセシリアと鈴は、その場にへたりこんだ。

「紛らわしいのよお〜…」

「そうですわ…。てつきり私は…。」

「私は？なんだ？」

「な…なんでもありませんわ！」

千冬が嫌味つたらしい笑顔で言うと、セシリアは顔を真っ赤にして否定した。

一方、事情を全く知らない他のメンバーは揃って頭の上に疑問符を浮かべている。

「取り敢えず、適当な所に座れ」

「「「「は…はい…」」」」

「は〜い」

おどおどとしながらも、それぞれが言われた通りに適当に座った。
「ん？佳織…汗を掻いたのか？」

「そりゃ、あれだけすれば汗の一つも掻きますよ」

「ふふ…悪かったな」

実は、箒達が他のメンバーを呼びに行っている間も千冬は佳織のマッサージを受けていたのだ。

お蔭で千冬の体からは凝りが取り除かれ、実にスッキリした表情になってているが、逆に佳織は汗を掻いて疲れた顔になっている。

「風邪を引いたら大変だ。もう一回風呂に行つてくるといい。今の時間ならまだ大丈夫な筈だ」

「そうですね…わかりました。それじゃあ、もう一回行つてきます」

素直に頷くと、佳織はそそくさと部屋を後にした。

部屋を出ていく時に佳織は他の女子達に向かって一言…

「頑張つてね」

と言い残していった。

それが何を意味するかは、すぐに分かる事になる。

「」「」「」……「」「」「」

一体どうすればいいのか分からないまま、全員が沈黙してしまつた。

「なんだ？急に黙つたりして…。学園でのテンションはどこに行った？」

「皆緊張してるんじゃない？」

「そうなのか？」

「え…えつと……その……」

試しに箒に聞いたら、次の言葉が出ない始末。

明らかに緊張している証拠だった。

「ほら、皆は基本的に学園で教師をしている姉さんしか知らないわけだし。いきなりプライベートモードになれて言われても難しいでしょ」

「そう言うお前は大丈夫なのか？」

「家族に遠慮する必要があるの？」

「ふむ……道理だな」

完全に姉妹の会話になっている織斑姉妹。

この時ばかりは一夏の奔放さが羨ましい女子達だった。

「にしても、他の皆はともかく、箒と鈴はプライベートで姉さんと話すのはこれが初めてじゃないでしょ。何を緊張してるの?」

「む…無茶を言うな! 私が最後にまともに話したのは小学生の頃に転校する前だぞ! あれから何年経っていると思ってる!」

「それはそうだけどさく…。じゃあ鈴は?」

「あ…あたしは…その…」

「ああ。鈴って昔から姉さんの事が苦手だったっけ」

「そうなのか?」

「そ…そんなことはないでしゅよ!」

「噛んだ時点で肯定してるようなもんでしょ…」

ジト目で鈴の事を見る一夏。

その口は猫の口になっていた。

「仕方が無い奴らめ…。一夏、そこの冷蔵庫に飲み物がある。丁度人数分ある筈だから、出してくれ」

「りよ〜か〜い」

千冬に言われるがまま、一夏は立ち上がって部屋の奥にある冷蔵庫の扉を開き、中にあるドリンク類を全部出して持ってきた。

「ラムネにオレンジジュースにスポドリ、コーヒーに紅茶にミルクココア…後はアップルジュースと野菜ジュースか」

「ほれ。遠慮せず好きなやつを取って構わんぞ」

畳に置かれたドリンクを見つめる事数秒。

飲みたい物が決まったのか、順番に取っていった。

「「「「「い…いただきます…」」」」」」

「なんで態々言うの…?」

ド緊張している皆を見て苦笑を浮かべながら、自分が取ったドリンクを飲む一夏。

「…：飲んだな?」

「そうだけど?」

「え…え〜!?もしかしてこの中に自白剤が…」

「そんな訳あるか馬鹿が。漫画の読み過ぎだ」

本音がいつものように間延びした口調で驚くと、千冬がすかさずツッコむ。

「……これ、賄賂でしょ?」

「流石に一夏の目は誤魔化せないか」

そう言つて微笑を浮かべる千冬の手には、いつの間にか缶ビールが握られていた。

因みに、佳織がマッサージをする前にも一本飲んでいた為、これで本日二本目である。

迷う事無く缶を開けて、その中身を胃の中に流し込んでいく。

「やっぱり……」

一夏だけは予想していたのか、あまり驚きはしなかったが、他のメンバーは口をあぐりと開けて驚きを隠せないでいた。

「ここが家ならば一夏に何か作らせるところなんだがな」

「今いるのは旅館だからねえ。今の時間にいきなり注文するのもあれだし」

「だな。今回は諦めるしかないか」

もう少し時間が早かったら注文していたのか。

いつもの毅然とした姿勢を決して崩そうとしない千冬からは想像も出来ない程にリラックスして酒を飲んでいる姿に、女子達は啞然としていた。

「何を見ている。私だって人並みに酒ぐらいは飲む。それともあれか? 私は傍から見るとゲッター線を口から摂取しているように見えるのか?」

「姉さんなら普通にゲッター線を克服しそうだよね……」

「聞こえているぞ、一夏」

ボソッと呟いたつもりが、ぼつちり聞こえていららしい。

酔つていても千冬の地獄耳は健在のようだ。

「け……けど、いいんですか? 今は一応仕事になるんじゃない?」

「これは佳織にも言ったが、今はもう夜。つまり……今日の仕事はとつくに終了している。故に問題は無い」

「へ……屁理屈だ……」

「固い事を抜かすな。それに……もう賄賂は受け取っているだろうか？」

千冬が全員の手元を流し見る。

「ここでやつと一夏が言った意味が理解出来た。」

「こうなったら素直に諦めた方がいいよ……。腹芸じゃ姉さんには勝てない」

「人聞きの悪い事を言うな。それではまるで私が脅しているみたいじゃないか」

「半分脅しているようなもんでしょ……」

などと言いつつも、遠慮なく飲む一夏。

長い間、千冬の妹をしてきた彼女は当の昔に諦めの境地に至っているのだ。

「さて……と。前置きはこれぐらいでいいだろう。そろそろ暴露タイムと行こうじゃないか」

暴露。

その単語を聞いた途端、一夏も含む全員の中で嫌な予感が走った。

「お前達……佳織の何処を好いている？」

まさかの名指し。

想像以上にストレートに聞いてきた千冬に、顔が沸騰する婦女子達。

「わ……私はその……いつの間にか好きになっていた……としか……」

目を細めながら両手でラムネを持って傾ける筈。

「あたしも……かな……。優しいところ……とか、好きな理由なら幾らでも言えるけど、好きになった切欠って言われると……」

スポドリをなぞりながらも、声量は衰えない鈴。

「オルコット。お前は？」

「佳織さんこそ私の理想の女性……でしたけど、今はきつと……別の理由もありますわね……」

「ほう？その理由とは何だ？」

「分かりません……でも、佳織さんを見ているところ……胸が熱く

なつて……」

最初はハキハキと答えていたが、急に口籠るセシリア。

その顔は妙に熱っぽい。

「ラウラ。お前はどうか？ 公衆の面前でああもハッキリと言ったんだ。何か明確な理由があるんだろう？」

「そう…ですね。嫁…いや、佳織はとても強くて…優しくて……」

「そうだな。確かに佳織は底なしに優しく、そして強い。その『強い』が何を指しているのか……ちゃんと分かっているんだろう？」

「はい…。実力もありますが……佳織は『心』が強いです」

「その通りだな。佳織の精神力は実力以上に常人を逸脱している。本人にその自覚は無いようだが」

愛しの佳織が褒められたことがよっぽど嬉しいのか、笑顔でビールを飲む千冬。

「佳織ってば昔から自分の事を過小評価する事があるよね」

「慎み深いのが日本人の美德とはよく言ったものだが、あれは少々行き過ぎている気がするな……」

本人が全く気が付いていない『異常性』を、ここにいる少女達はハッキリと分かっていた。

これも恋する乙女が成せる技か。

「その『強さ』に惚れたのか？」

「それもあります…。けど、佳織は言ってくれたんです」

「何と？」

『私は君を裏切らない』…と」

「成る程な……」

その時、全員が同じ事を思った。

『そんな事を言われたら、そりゃ惚れるわ』…と。

「布仏はどうだ？ 佳織とは同じ部屋に住んでいるんだ。何かあるだろうっ？」

「わ…私はあゝ……」

話を振られて急に縮こまる本音。

その顔からは明らかに湯気が出ていた。

「かおりんが頑張っている姿を見て……かおりんの笑顔を見て……気がついた時には……その……」

「好きになっていた……と?」

「はう……」

今までで一番乙女っぽい反応だった。

「それに……かおりんが傷ついている所を見て……私も支えてあげた
いって思っ……でも、私はISの操縦は苦手だし……専用機も持っ
てないし……。私に出来る事なんてかおりんのISを整備する事だけ
で……」

「……充分すぎるだろう」

「ふえ……?」

「ある意味、この中で佳織の事を最も支えているのはお前だ。布仏」

「わ……私が……?」

「そうだ。佳織が常に万全の状態で戦えるのは、お前の整備があつてこそだ。佳織も似たような事をお前に言ったんじゃないか?」

「あ……」

一筋の涙が零れ、頬を伝う。

「お前は立派に佳織の支えとなっているよ。自信を持って」

「は……い……」

嗚咽をしながら涙を浴衣の袖で拭く本音。

だが、その顔は確かに笑っていた。

「で?デユノアと更識はどうなんだ?」

「ぼ……僕ですか!」

「ああ。……もしかして……自覚してないのか?」

「ぼ……僕は……」

シリアスな雰囲気から一変。

急に話題に上げられて戸惑うシャルロット。

「わ……分かりません……僕の中にあるこの気持ちがあるのか……」

「はあ……。まあ、今はそれでいいのかもしれない」

「やれやれ……と言った感じで首を振る。」

「更識はどうだ?」

「私は……その……憧れ……です……」
「憧れ？」

「はい……。まるで本物のヒーローみたいにかッコよくて……優しくて……」

「だから憧れたと？」

「です……。でも……」

「でも？」

「今は……それとは違う風に見てしまう時があるって言うか……」

「………そうか」

またまた全員の気持ちが一致した。

『それって完全に惚れてるじゃねーか』…と。

「そ…そうだ！一夏はどうなのさ!？」

「私？勿論好きだけど？」

「え…？なんかあっさりしてる…？」

「いやだって、色々と理由付けしてもさ、好きなものは好きなんだから仕方ないじゃん」

実にスツパリとした結論。

だが、それ故に真理でもあった。

「皆に散々と聞いたけどさ、姉さんはどうなの？」

「ふっ……それを私に聞くか？」

何を今更と言いたげな顔をする千冬。

その顔はどこまでも自信満々である。

「私は佳織の事を誰よりも愛している」

「あ…愛…!？」

「わぁ〜お……」

「ス…ストレート……」

自分達よりも上の愛情表現にしどろもどろになるヒロインズ。
その自信に思わず仰け反ってしまう。

「ここにいる全員が佳織を巡る『恋敵』^{ライバル}になるわけだな」

「ラ…ライバル……!」

「だから……精々自分磨きを怠るなよ？小娘共」

これから先の事を思つて微笑む千冬。
その手には三本目になる缶ビールが握られていた。

第42話 もう一人の私

千冬さんの部屋から出て来た私は、言われた通りに二回目の温泉へと向かっていった。

「みんな……大丈夫かなあ……」

今の千冬さん、完全に酔っぱらってるからなあ……。

下手に絡まれてなきやいいけど……。

「にしても、一日に二回も温泉を楽しめるなんて、まるで貴族のお風呂みたいだにや〜♡」

皆には悪いけど、私だけもつとお肌をスベスベにしてきまあ〜す♡

「あ……あれ？仲森さん？」

「なんでここに？」

「ん〜？」

誰だ？私の事を呼ぶのは？

「岸原さんに夜竹さん？」

前からやって来たのは、私と同じ一組の生徒である岸原理子さんと夜竹さゆかさん。

勿論、二人とも浴衣を着ている。

「ほら、やっぱり気のせいだったんだよ」

「ん〜……でもお〜……」

「どうしたの？」

「あ……実はね、さゆかが仲森さんが温泉に行くところを見たって言うて……」

「だって、実際に見たんだもん！」

「でも、本人は目の前にいるじゃない」

「それは……」

ふむ……話の内容からすると、どうやら私のそっくりさんを偶然にも見かけたようだ。

「それって多分、夜竹さんが見かけた人が私にそっくりだっただけなんじゃないのかな？」

「そ……そうかな……？」

「世の中には自分と似た人が三人はいるって言うし」

「そうだよ！それに、さゆかが見かけた子って金髪だったんでしょ？」

「う…うん。なんて言うか…仲森さんがまんま金髪になった感じだった」

「金髪の私…」

うくん…想像出来ん。

「ところで、仲森さんは今からどこに行くの？」

「温泉。ちよつと汗搔いちゃって」

「汗？またなんで？」

「少し体を動かしてたら…ね」

「体を動かす…」

んん？急に奥の方を見てどうした？

「こつちって先生達の部屋がある方だよね？」

「うん」

「もしかして、さつきまで誰かの部屋にいたの？」

「ちふy…織斑先生の部屋にさつき呼ばれてさ。そこで色々話したりして、その後にマッサージ」「織斑先生!」…はい？」

こつちの話を急に遮らないでよ。

ビククリするじゃん。

「お…織斑先生の部屋に呼ばれて…」

「体を動かした…!」

「お…お…お…?」

どうして『体を動かした』の部分に着目するの？

「織斑先生って確か…」

「一人部屋…」

「聞いてますか？」

…聞こえてない。

「きゃ〜♡」

「ひっ!？」

い…いきなりどうした!?

「これはもう…」

「完全に……」

「千冬×佳織確定!!」

「おいこらそこ!?何を言ってる!?」

「急いで皆に伝えなきゃ!!」

「ご……これは本当にえらいこっちゃ……!」

「あつ!どこに行くの!?!」

私の静止を完全無視して二人は走り去って行ってしまった……。

「……どうしよう……」

まあ……いざとなったら千冬さんから直々に雷が落ちるだろうけど。

「……温泉行こ」

もうすぐ一日も終わるのに、何が悲しくてまた（精神的に）疲れな
きやいけないのさ……。

「……なんでさ」

これを言うようになったら、私も末期だな……。

・
・
・
・
・
・

「はあく……」

溜息を吐きながら私は再び温泉に隣接している更衣室の扉を開く。

そのまま、真っ直ぐに先程使った籠と同じ場所に行く。

すると、私の隣の籠に浴衣が綺麗に折りたたまれた状態で入っ
た。

「あれ?」

誰か先客がいるのかな?

一応、ここはIS学園の完全な貸切じゃないから、一般のお客さん

がいても不思議じゃないけど…。

「見た感じ、他にはいないっぽいな…」

うう…知らない人と二人つきりか…。

この時間帯なら私一人で温泉を独占できるって思ったけど、甘い考えだったな…。

「まあ…私みたいな庶民には、これがお似合いか」

下手に贅沢な事を考えちゃいけないな。うん。

「時間も限られてるし、早く入ろつと」

素早く浴衣と下着を脱いで、籠にシユートイン！

そして、温泉へと再びGO！

「し…失礼しまあ…す…？」

「ん？」

視界の先には、タオルで髪を纏めた女性の姿が見えた。

隙間から金色の髪が見え隠れしている。

海外から来た人かな？

「ほう…？これは…」

「え…？」

私の気配に気が付いたのか、ゆっくりとこつちを向いた彼女の顔は

……

「これはまた…随分と可愛らしいお客さんだ」

私の顔と瓜二つの女の子だった。

・

・

・

・

・

「……………」

「ふう……」

き…緊張する…！全然リラックスなんて出来ない…！

「どうしたのかな？先程からずっと黙っているが……」

「あ……いえ……お気になさらず……」

まさか、さつき言ってた私のそっくりさんと本当に鉢合せになるなんて…！

……そういや、温泉に行くところを見たって言ってたっけ…。

んじや、ここで遭遇するのは必然だった…？

(偶然の一言で片付けていい事じゃねえぞ！)

私もタオルで髪を纏めているため、第三者目線で見たら完全に同じ顔の人間が揃って温泉に入っているようにしか見えないだろう。

……まさかとは思うけど、ドッペルゲンガーじゃないだろうな？

私死んじやうの!?

「……………(チラツ)」

「本当にいい湯だな……」

肌綺麗過ぎだろ!!

私なんかとは大違いだよ!!

そっくりなのは顔だけだよ!!

「見た所、君は学生のようにだが……もしや、今ここに臨海学校で宿泊しているIS学園の生徒かな？」

「あ……そう……です……って、なんでIS学園が臨海学校に来ている事を……？」

「普通に書いてあったが？『IS学園様御一行』と」

そうでした。

旅館って団体客の予約とかがあると表に書いてたりするよね。

そりや分かって当然だ。

「海は楽しかったかね？」

「は…はい。久し振りに楽しく遊べました。そこまで知ってるんですね……」

「部屋から浜辺が見渡せるからね。楽しそうな声がここまで聞こえてきたよ」

「あはは……」

は…恥ずかしい!!

まさか見られていたなんて〜!

にしても……凄く大人びてる子だな…。

見た目的には私と同じ年ぐらいに見えるのに…。

「どうした?」

「あ…すいません。なんか…綺麗だなんて思って…。」

「ふふ……ありがとうございます。そう言う君も十分に美しいと思うが?」

「そ…そんなことないですよ…。私なんてまだまだ子供だし…。」

「…遠慮深いのは美德ではあるが、余り自分を卑下するのはいただけ
ないな」

「え?」

「自信を持ちたまえ。君はとても美しい」

「ありがとうございます……ごさいますしゅ…。」

美しいのはアンタの方だよ!!

そんな笑顔で言われたら、こつちの方がドキドキするじゃんか!

「そ…そちらはなんでここに…?」

「私か…。」

ヤベ。もしかして聞いちゃいけないかった?

「私は仕事でこつちに来ていてね」

「お…お仕事ですか…」

「おかしいかね?」

「そ…そんな事はないです!今時、あなた位の若さで企業や研究所と
かに所属している子は沢山いますし!全然おかしくは無いです!」

「ふふ……ははは…。そこまで必死に言い訳をしなくてもいいよ。私
は別に怒ってなどいない」

わ…笑われた…。

微笑む姿は優美で、普通に笑う姿はとても可愛らしい。

「ところで、この後君は何か予定でもあるかな?」

「い…いえ……特には…。。ここを出た後は部屋に戻って寝るだけだ
と思います」

「ならば、少しだけ付き合ってくれないか？」

「っ…付き合う？」

・

・

・

・

・

「悪いな。このような事につき合わせてしまつて」

「い…いえ…大丈夫です…」

私と彼女は、温泉を出た後に揃つて土産物屋に来ていた。

(本当に綺麗な子だな…)

湯を出たから頭に巻いていたタオルが取られて、その軽くウェーブのかかった金髪が美しく靡いている。

髪の長さは私よりも少し長くて、背中まで伸びている。

よく拭き取っていたから、浴衣が濡れる心配はないだろうけど…。

「部下達に土産を買つていこうと思つてね」

「ぶ…部下…」

もしかして…結構偉い立場の人？

「そう言えば、なんでさつきからずっと敬語を使っている？」

「それは…なんとなく…」

この子の前だと自然と敬語になつちやうんだよお〜！

「臨海学校に来ているのは一年生。つまり君は15〜6歳ぐらいと言
う事になる。私も歳は君達と同じぐらいだ。だから、無理に敬語なん
て使う必要はない」

「そ…そうなんですか…？」

「……………」

あ、敬語……。

「そう…なんだね…」

「よろしい」

精神がガリガリと削られるうゝ!!

でも、不思議と嫌な感じはしないんだよな…。

この人とは間違いなく初対面なのに、どうしてか他人な気がしないって言うか…。

緊張感を感じながらも、少しずつ落ち着きつつあるって言うか…。

「あそこ…仲森さん？」

「ホントだ。でも、隣にいる子は誰？」

「仲森さんにすつごくそっくりじゃない？」

「双子？」

「「いやいやいや」」

私達と同じように土産物屋に来ている他の生徒がこつちを見ながら、なんか話してる。

「ここでもひそひそ話はやめないのね。」

「君は人気者のようだな」

「私の表面だけを見て言ってるだけですよ」

悪口を言われるよりはマシだけど、それでもいい気分は余りしない。

「土産にはどれがいいかな？」

「やつぱり、スタンダードなお菓子系がいいんじゃない？」

「ふむ…菓子か…。妥当ではあるが、だからこそハズレが無いとも言えるか」

「なにより、土産物屋にあるお菓子は沢山入っているから、大勢で楽しめると思うよ」

「一人で食べても味気ないだけだしな。ならば、その方面で決めていこうか」

「うん！」

そんな訳で、それから二人で色んなお菓子を見て回った。

中には試食が出来る物もあって、一緒に食べたりもしたっけ。

「これにするか」

彼女が手に取ったのは、合計で20個も入っているクッキー。

イルカの形をしていて、見た目も結構可愛い。

「おや？君も買うのか？」

「あ……家族に買っていかうと思つて」

「なら、そのキーホルダーは？」

「なんか可愛かつたから……えへへ……」

私を選んだお菓子はミニサイズのケーキが10個ぐらい入っているお菓子。

選んだ理由は単純に美味しそうだったから。

で、それと一緒に貝殻のキーホルダーも買う事にした。

「……少しだけ待っていてくれ」

「う……うん……」

そう言うと、そそくさとどこかに行つてしまった。

すぐに戻つてきたけど。

「私も同じ物を買おう」

「え？」

あらあら……意外な結果に。

「ついでだ。ここは私が奢ろう」

「じ……自分の分ぐらひは払うよー！」

「気にしないでくれ。こうして付き合わせてしまった、せめてもの礼だ」

「そこまで言うなら……」

変に遠慮したら、またなにか言われそうだ。

心苦しいけど、ここは大人しく彼女の好意に甘えよう。

「では」

私の分も持つてレジに向かう彼女。

そこで二人分の金を払つてくれた。

見た感じ、そこそこの額だったけど……

「君の分だ」

「あ……ありがとう」

「どういたしまして」

今日初めて会つた子にここまでさせるなんて……。

いや、この子が飛び抜けていい子なのか？

「君のお蔭でいい土産が買えた。本当に感謝する」

「それはこっちのセリフだよ」

まさか、臨海学校に来てこんな出会いがあるなんて思わなかったよ。

人生、本当に何があるか分からないね。

「あ……私達まだ名前を言っていない」

「それだけ息が合ったと言う事だろう」

「そうかな……」

息が合う……か。

ちよつと嬉しいかも。

「わ……私は仲森佳織。君の名前は？」

「私は……」

その先を言おうとした瞬間、彼女が急にこっちにやって来て耳元に顔を近づけた。

『私』は『君』だよ。赤い彗星

!!!

私をその名で呼ぶって事は……まさか彼女もISを……？

「ちよつと!?!」

慌てて振り向くと、そこにはもう彼女の姿は無かった。

「あの子は一体……」

まるで幻だったかのように、影も形も無かった。

そして後に知る。

この時の出会いが私にとって『必然の出会い』だったのだと。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

佳織の元から去った後、彼女は軽やかに廊下を歩いていた。すると、前方から一つの人影が走って来た。

それは以前、彼女と一緒にいた紫髪の少女だった。

「た…大佐！どこに行っていたのですか!？」

「温泉に入った後に土産物屋にな」

「お一人で行動なさるなんて、御身に何かあつたら…!」

「心配無用だ。少なくとも、日本の旅館内でそんな真似をする輩はいまい」

「油断は禁物です！もしもヤクザが襲撃してきたら!」

「お前は少し任侠映画を見過ぎだ」

苦笑する大佐と言われた『彼女』。

「ほら、土産だ」

「おお！大佐自らこのような…!」

「帰ったら皆で食べるとするか」

「はい!」

先程までの心配そうな顔から一転、眩しい程の笑顔に変わる。

見える人には彼女の頭には犬耳が、尻には尻尾が見えていただろう。

「しかし…!」

「どうしました?」

「矢張り…お互いに自覚していなくても、自然と引かれ合ってしまったのだな…!」

「大佐?」

ふと、後ろを振り向いて目を細めながら微笑を浮かべた。

「このまま、君が私の同志となってくれれば嬉しいのだがな…仲森佳織…!」

第43話 天災兎と紅い椿

臨海学校二日目。

今日は終日ISの各種装備試験運用とデータ採取が行われる予定だ。

私を初めとした専用機所持者はそれぞれの国や企業から大量の装備が送られてきているから、凄く忙しくなりそう。

多分、私のバリステイック・リヴァイヴにも色々送られてきてるんだらうなあ〜。

そんな風に考えている間に、ラウラが千冬さんに怒られながらISのコア・ネットワークに関しての説明をしていた。

なんでそんな事をしているのかと言うと、それはラウラが珍しく遅刻してきたから。

現役軍人と言う事もあって、普段から几帳面な性格をしている彼女にしては珍しい事だ。

「よし。その辺でいいだろう。今後はこんな事が無いように」

「は…はいー」

あ、どうやら終わったみたい。

「では、これより各班ごとに振り分けられたISの装備試験を開始するように。そして、専用機持ちは送られてきた専用パーツのテストを行え」

千冬さんの言葉に、その場に揃った皆が同時に返事をする。

私達が今いる場所はISの試験用に用意されたビーチで、周囲の四方が切り立った崖に囲まれていて、ちよつとした隔離空間になっている。

これは多分、試験中に外部からの介入が無いようにする為だと思う。

中には、そんな事を無視してやって来る人もいるけどね…。

敢えて誰とは言わないけど…。

「私ってどうなるのかな？…やっぱりデユノア社から送られてきてるの？」

「まあ…一応ね。佳織にはデュノア社で開発されたリヴアイヴⅡ専用のパッケージが送られてきてるよ」

「……例えば？」

「遠距離戦に特化した『ハーフキャノンパッケージ』に、空中に機雷を散布する『マインレイヤーパッケージ』、脚部と背部ブースターを高機動タイプに換装した……」

「も…もういい……大丈夫……」

「そういや、ラファールⅡのモデルになったザクⅡって、想像以上にバリエーションや発展機、後継機があるんだよね…」

まさかとは思うけど、それら全てを再現しよう……なんてことは無いよね？ね？

今回はISの稼働を行うが故に、皆がISスーツを着用をしているんだけど……

(違和感無さすぎ)

やっぱりISスーツって水着以外に見えないよ…。

こういつた場所だと特に。

「ああ…そうだ。篠ノ之。お前はちよつとこっちに来てくれ」

「…？はい、わかりました…」

箒が呼ばれた…。

やっぱり……来るのか。

「急な話でアレだが、お前には今日から専用k「ちくくちやくくくん!!!」……」

……はい、案の定のご登場。

私的には驚きよりも呆れの方が強いけど…。

妙な地響きを立てながら、砂煙と共に誰かが全速力で走って来た。

普通ならあり得ない速度ではあるが、その素性を知っている者からすれば『あの人だから』の一言で全てが納得できてしまうから嫌だ。

「……来たか」

この様子……初めから来ることを知っていたな？

多分、私達が知らない所で勝手に連絡をしてきたんだろう。

禁止区域もなんのその。

『そんなの関係ねえ!』と言わんばかりにやって来た、自他共に認める天才科学者であり、ISの生みの親でもある『篠ノ之束』さん。

この人にルールを求める方が無理ってもんか…。

「…と見せかけて!本命は…。」

……猛烈に嫌な予感がするんですけど…。

「かおり~~~~~ん!!!本当に会いたかったよ~~~~♡♡♡
さあ!思う存分ハグハグしよ!そして愛を確かめ合って、最終的には一緒に大人の階段を…。」

「やめんか」

私に飛びつこうとした束さんを、いつの間に眼前にいた千冬さんが片手でダイレクトキャッチ。そこから流れるようにアンアンクローに。

「ぐにや~~~~~!!?潰れる潰れる!!束さんの脳みそがプレスされるう~~~~!!」

「因果応報。佳織に飛びつこうとしたからだ」

「だってだってだって!今までずっと会えなかったんだよ!私の中ではとつくの昔に『かおりん分』が枯渇しているのだよ!」

「その気持ちは分かるが、かと言って飛びつくのはやめろ。佳織が怪我したらどう責任を取るつもりだ」

「それは勿論、同性婚が可能な国に行つて夫婦の契りを…」

「させると思うか?」

「ぎにや~~~~~!!?パワーが増したあ~~~~~!!」

……何…この茶番…。

「……どうする?」

「ほつとけば?」

「右に同じ」

「おふ……」

し…辛辣だな…この妹コンビは…。

他の皆は目が点になってるし。

完全に置いてかれてるよ…。

少しして、ようやく束さんの顔を離した。

着地した東さんは私と一夏、箒の方を向いてニッコリと笑った。

「改めて…やあやあ！久し振りだね！箒ちゃんにいつちゃん！そして愛しのかおりん！」

「久し振りです、東さん」

「姉さんはもう少し大人しく現れる事は出来ないんですか？」

「そんな事をしたら私が私じゃなくなっちゃうよ。ド派手な登場は私の存在レイソン・デイト意義なんだから」

「意味不明な事を言うな」

「ただだけ派手好きなんだよ。」

「むむむっ?!かおりん……」

「な…なんですか……?」

東さんの視線がある一点に注目される。

何処を見て……って！

「やっぱり！去年よりも約3・25センチ程おっぱいが大きくなってるね!」

「い…いきなり何を言ってるんですか?!」

「ここには私達以外にも沢山いるんだよ!」

「3センチ……」

「赤い彗星は体の成長も3倍……?」

「……どうして同じ成長期でも、こんなに違うのかしら……」

案の定のように聞かれてるし！

「では早速、私の手で直接かおりんの成長を確かめ……ぶっごっ!」

あ、一夏と箒の鉄拳が東さんに直撃した。

「殴りますよ?」

「せめて殴る前に言っって!」

……実の妹である箒はともかく、一夏まで拳を振り上げるなんて…。

なんか最近の一夏って、段々と千冬さんに似てきてない?

「あ…あのおく…一応、この合宿は規則で関係者以外の立ち入りは……」

「何を言ってるのかなメガネボインちゃん。規則とは天才が生み出す

もの。つまりは私の意思こそが最大の規則なんだよ」

あんたはどこのジャイアンですか。

「そ…そう…ですね…あう…」

あらら…山田先生が涙目に。

これはちよつと可哀想かも。

「あ…よしよし」

「仲森さあくん…」

思わず頭を撫でてしまった。

でも、この保護欲には抗えない…。

「むむむ…！かおりんに頭を撫でて貰うなんて…いいなあ…。やっぱりかおりんは胸が大きい子が好きなのかな…？箒ちゃんもいつちちゃんもちーちゃんも皆ボインだし…。だったら私にもチャンスあり？」

そこ、なに俯いて呟いてるんですか。

ボソボソ声でよくは聞き取れなかったけど。

「かおりん！束さんも頭なでなでして〜！」

「え!？」

「いきなり何を言っている。そんな事よりも自己紹介ぐらいしろ。生徒達がポカンとしている。(佳織に頭を撫でて貰うなんて、私ですらして貰った事が無いんだぞ!!させてたまるか!!)」

「えく!?私的には自己紹介なんかよりもかおりんの頭なでなでの方が何百倍も重要なんですけど〜?」

「くっ…」

千冬さんが悔しそうな顔をしているけど…ツツコまないからね。

「し…仕方が無い…仲森…やってやれ」

「はあ…」

私なんかには頭を撫でられて、一体何が楽しいのやら。

「これでどうですか?」

「えへへ〜♡」

心底嬉しそうにしちゃって。

…そんな顔をされたら、何も言えなくなるじゃん…。

「満足したか？」

「大満足です!!!」

「そうか…。(私も後で絶対頭をなでなでしてもらおう!)」
「この言い知れない悪寒はなに？」

「今の私は気分がいいから、仕方なく自己紹介をしてあげましょく。
かおりんに感謝するんだね」

「とつととしろ」

「はあゝい。私が君らもよく知っているISを開発した天才科学者
『篠ノ之束』だよおくん」

思ったよりも普通に自己紹介したな。

てつきり名前だけ言って終わりかと思ってた。

「」「」「………」「」「」

まあ…当然の反応だよね。

世界的超有名人が自分達の目の前にいるんだから。

そりや、皆の目がさつき以上に点になるのは当たり前だ。

「お前……頭でも打ったか？」

「失礼だなく。私だって人並みの自己紹介ぐらいは出来るんだよ？」

「え………?」

「お願いだから、その目だけは勘弁してください」

いや……私達も同じ反応だからね？

「し…篠ノ之…束博士…!?!」

山田先生に至ってはめっちゃ驚いてる。

これももしギャグ漫画なら目が飛び出してるシーンだな。

「山田先生。基本的にこいつの事はシカトしてくれて構わない。貴女
は他の生徒達のサポートを頼む」

「わ…分かりました……」

トボトボと山田先生がこの場から離れていった。

「ねえ……あの眼鏡の子さ……明らかに私達以上にあつたよね？歩く
度に揺れてたし……」

「言うな。それは本人が一番自覚している」

誰のどこの事を言っているのやら。

「それで？お前が言っていた物はどこにあるんだ？」

「それなら既に準備しているよ。では…皆さん揃って空を見よ!!」
空とな？

この場にいる皆が揃って上を見上げるけど、そこには何にも無い。
「……………何も無いですよ……………つて!!」

疑問に思っただけ視線を降ろして束さんの方を見ると、いつの間にか目の前に鏡面体の逆ピラミッドのような形をした金属の塊があった。

音も無く現れたソレに、思わず後ずさりしてしまった。

「驚いた？」

「フーン！」

「あ痛!？」

出ました。伝家の宝刀『織斑先生の出席簿』。

「普通に出せ」

「えくく？」

「二回目は無いぞ…………？」

「すいませんでした」

平謝りしたし。

相当に痛かったんだろうな…………。

「じゃ…………じゃあ、お披露目するね…………」

急に大人しくなった。

流星の束さんも、これ以上ふざけたら千冬さんの逆鱗に触れるって思ってたんだろう。

賢明な判断だ。

「おーぶんせさみ」

いきなり意味不明な事を言ったと思ったら、目の前の金属の塊がパタパタと開いて行って、中身が明らかになった。

「はい。これこそが私が一から設計・開発した箒ちゃん専用IS。
機体名は『紅椿』だよ！」

「せ…………専用機…………？」

箒が汗を掻きながら目を思いつき見開いている。
そりやそりや。

いきなり専用機あげますよって言われても、混乱するのが普通だ。私だってそうだった。

「な…なんで私に…?」

「うくん…。それを語るには長くなるんだけど…」

「私から説明しよう」

「織斑先生…?」

「ここで千冬さんが出てくる?…なんで?」

「実はな、前々から篠ノ之には専用機を持たせようと思っただけだ」

「知らなかった…」

「不本意かもしれないが、お前はこの束のたった一人の妹だ。キツイ言い方だが、こいつの頭脳を欲している連中からすれば、明確な自己防衛力の無いお前は束のウィークポイントであると同時に格好の獲物になるわけだ」

「……………」

「それに関しては日本政府やＩＳ委員会も考えていたらしくてな。話し合いの結果、お前に専用機を持たせて、これまで以上に防衛力を高めようと言う結論に至ったのだが…」

「何処の誰が製造したか分からないＩＳに箒ちゃんを乗せるとか有り得ないし。それなら私が作るって自分から言い出したの」

「随分と時間は掛かったようだが、ついこの間、ようやく完成したと束から連絡が来てな。この臨海学校で渡す手筈にした…と言う事だ」

原作みたいに束さんが身内鼻直しわけじゃないんだ…。

ここまで明確な理由があると、ぐうの音も出ないな。

「本当はかおりんの専用機も私が作ってたんだけど、先を越されちゃったからね。仕方なく諦めたよ」

「そ…そうですか…」

よ…よかった…。

この人の事だから、滅茶苦茶ピーキーな機体を作るに違いないからな。

今更ながら、ラファールⅡで本当によかったよ。

「そんな訳だから、早速フィッティングとパーソナライズを始めるよ」
「は…はい」

オドオドとしながら、箒は紅椿に近づく。
すると、紅椿の装甲が割れて、操縦者が搭乗出来るような状態になる。

「あ…そうだ。ほっちゃん…：布仏本音ちゃんはあるかな？」

「わ…私…ですか？」

いきなりの本音ちゃんご指名？

本音ちゃんは他の子達に混ざって作業をしようとしていた。

「ほ…本音。篠ノ之博士と知り合いなの？」

「ほんの少しだけ…」

昨日、数分だけの出会いだったけどね。

「布仏を呼んで何をする気だ？」

「別にいく。ちよっと手伝って貰おうと思って」

「なに？」

本音ちゃんが束さんの手伝いを…？

「ほらほら！来て来て！」

「は…は…はい…」

困惑した表情でこっちに来る本音ちゃん。

大丈夫。意味不明なのは君だけじゃないよ。

「一度、間近で君の作業を見てみたかったんだよ。頼めるかな？」

「は…はい…です…」

流石の本音ちゃんも、束さんの前じやいつもの調子が出ないか。

これじゃあ、ヤバいかもしれないな。

「本音ちゃん」

「かおりん…？」

「大丈夫。私も傍にいるから」

「……………うん！」

元気づけようと思って、近づいて肩を軽く叩いて励ましたら、一気にいつもの調子に戻った。

これでこそ本音ちゃんだ。

「……本当にかおりんは凄いね……。この束さんも、かおりんにだけは一生敵わない気がするよ……」

……？束さんがいつもとは違う、大人びた綺麗な微笑みを浮かべながらこつちを見てる。

いつもこんな風な感じだったら、私も少しはこの人に対して違う感情を抱いていたかもしれない……。

「じゃあ、始めようか」

さてはて、この意外な組み合わせはどんな化学反応を起こすのやら。

紅椿の性能と同じぐらいに興味がある。

第44話 波乱の予感

東さんに並ぶ形で本音ちゃんが立って、改めて紅椿の設定作業が始まった。

その間に箒は紅椿のコクピットに搭乗した。

「あれ？これ……しののんのデータが……」

「やっぱり分かっちゃう？そうだよ。箒ちゃんの戦闘データはある程度先に入力してあるから、後は現在の箒ちゃんのデータを見ながら最新の状態にアップデートするだけなんだよ」

一から全部する訳じゃないんだ。

それなら早く終わりそうさ。

東さんはコンソールを開いて操作を開始し、それと同時に空中投影型のディスプレイを6枚ぐらい出すと、すぐに非常に多くのデータに目を配らせていく。

「ほっちゃんはこつちを使ってね」

「は〜い」

本音ちゃんは東さんに用意された空中投影型のキーボードで作業のアシストをしていく。

改めて見ると、本当に本音ちゃんは凄いつて実感する。

だって、たった一枚とは言え、作業スピードは東さんに匹敵してるし。

「お？やるねえ〜」

「えへへ〜」

なんて事を言っている東さんも、本音ちゃんと同じタイプのキーボードを6枚同時に叩いていってるし。

やっぱこの人は規格外だ。

「このISって基本的に近接対応型なんだね〜」

「おお〜！そこまで分かっちゃう？正確には近接戦闘を主軸に万能型に調整してあるんだよね〜。きつとすぐに馴染むんじゃない？念の為に自動支援装備も装備しておいたから」

「ほえ〜…凄いね〜」

「でしよでしよ〜?」

この二人……雰囲気こそつくりだ!

東さんと本音ちゃんの周囲だけ、まるで漫画で使われるキラキラのトーンが見えるようだよ……。

「そう言えば……ほっちゃん。君って前にかおりんのおっぱいを揉んだ事があるよね……?」

「な……なんでそれを……?」

「むふふ〜♡東さんはなんでも知っているのだよ〜」

なんかコソコソと話し出したけど、何を話してるんだ?

「で?どんな感じだった?」

「どんな……?」

「ほら、感触とか匂いとか……」

「ん〜……一言で言っちゃえよ〜……」

「言っちゃえよ?」

「プニポニヨ〜ン……かな?」

「プ……プニポニヨ〜ン……!」

っーか、話しながらあんなにも早く作業が出来るって……!どんだけ。

「いいなあ〜……私もかおりんのおっぱいを揉みたいなあ〜……」

「いつかきつとできますよお〜」

「ほっちゃんはいいい子だねえ〜」

今回の事で、この二人が少しでも仲良くなってくれれば、個人的には嬉しいな。

もう少し東さんはコミュニケーションを築くべきだと思っただよ。

そうすれば人生がもつと華やかになって楽しいだろうに。

「プニポニヨ〜ン♡プニポニヨ〜ン♡」

「か……佳織い〜!一夏あ〜!なんか姉さんと本音が謎の呪文を唱えながら作業をしていて怖いんだけどお〜!」

「な……謎の呪文?」

「さつきから口を揃えてプニポニヨ〜ンって言ってる……」

「なんじゃそりゃ」

どーゆー意味だよ。つーか、どこの言葉？

何を言い表してるの？

「そうそう。この紅椿は従来のISを超えるスペックになる……予定だったんだけどなく……」

「予定だった？それはどういう意味ですか？」

「まだまだ未熟なお前にいきなりオーバースペックな機体を渡してもISの性能に振り回されるのがオチだ。だから、私から性能をデチューンするように言ったんだ」

千冬さんが言ったんだ…。

冷静に考えると当然だよな。

いきなり性能が高いISを渡されても、一番困るのは操縦する本人だし。

「この紅椿ってIS……しののんの成長に合わせて色んな機能や機体性能が向上するようになってるんですね〜」

「ほう……そこまで理解していたか」

ほ…本音ちゃん？しれつと今、君の凄まじい才能の片鱗を見た気がするんだけど…？

もしかして本音ちゃんって…私が思っている以上の天才だったりするの？

「よしーこれで終わりつと！ほっちゃんのお蔭で予想よりも早く終わったよ。ありがとね」

「私もいい勉強になったから、お相子ですよ〜」

そして意外と勤勉と。

実は本音ちゃんって各教科の成績がかなり良かったんだよね…。

時々、私の方が勉強を教えて貰ってるぐらいだし。

けど、機体性能が制限されているって言ってたけど……どれぐらいなんだろう？

「今の紅椿は大体、第3世代初期機ぐらいに抑えてあるよ。これなら今の箒ちゃんでも問題無く扱えると思うよ」

「わ…分かりました」

それって……つまり、今の紅椿の性能はラファールよりも少し上ぐ

らいつて事か。

それなら確かに扱いやすいだろう。

「「……………」」

複数の視線を感じたので後ろを向いてみると、他の生徒達が作業の手を止めてこつちをじゅつと見ていた。

「おやおやく？てつきり嫉妬の一つでもするかと思っただけど、意外と何も言わないんだね？」

そりや、あそこまで懇切丁寧に説明すればね。

文句を言う前に論破されたに等しいわけだし。

「そんな君達に天才束さんからありがたい一言をプレゼントしよう」

あく…多分アレを言う気でしょ。

「この世界は往々にして不平等に出来てるんだよ。私やちーちゃん、かおりんのように生まれつき天才的な才能を持つ者。生まれた家によつて金に困らずに裕福な生活をする者。他にも例を挙げればキリが無い。分かる？真の平等なんてどこにも存在しない。ここに揃っている代表候補生達も、そして箒ちゃんやいつちゃんも、その不平等故に専用機を手に入れたに等しいんだから」

……なんだか随分と長々と語ったな…。

言ってる事は文句のつけようがないぐらいに真理なんだよな。

かく言う私自信だつて転生なんてズルをしている。

これも偏に不平等であるが故の結果だろう。

「あ、後は自動処理に任せておけばパーソナライズも終了するよ。そうだ。ついでだからかおりんのラファールⅡも見てあげるよ。前から一回見てみたかったんだ」

「別にいいですよ」

全てのキーボードとディスプレイを収納し、こつちを向く束さん。

それに合わせて本音ちゃんもこつちに戻ってきた。

いつものように私がシャア様のエンブレムを模したペンダントの形をした待機形態を握りしめて集中する。

すると、私の体を光の粒子が覆い尽くして、愛機であるバリステイツク・リヴァイヴが展開された。

「ほええ。こうして近くで見ると、隅から隅まで真っ赤なんだねえ。んじや、少し見せて貰おうかなって」

東さんがラファールの装甲の隙間にある専用のコネクターにコードを刺す。

すると、さつきみたいに空中にディスプレイが表示される。

「ほうほう…。流石はほっちゃん。本当によく整備してあるね」

「かおりんの専用機ですから」

「だよねえ！分かるわ」

この短い間ですっかり仲良くなつたな…。この二人。

雰囲気似てるからか？

「あれ？機体名が変わってる？」

「ああ…。実は、新しい装備を装着したら、それに伴って名前が変わつたんですよ」

「ふくん…。にしても、『ラファール・リヴァイヴ・バリステック』って無駄に長いね…」

「私もそう思い、普段は『バリステック・リヴァイヴ』と略しています」

「それが妥当だね」

語呂もいいしね。

(にしても、本当にISを纏ったらかおりんの雰囲気が一変するんだな…。可愛いかおりんも大好きだけど、凛々しくてカッコいいかおりんもまた…。♡)

東さんが恋する乙女の瞳でこっちを見るんですけど。

「まるでISのお手本のように武装のバランスがいいねええ。でも、機動性と運動性がずば抜けて高過ぎ。各部スラスタのリミッターが解除されただけで、ここまで強化されるもんかね？」

「それに関しては私も同感だ。こっちでは通常のラファールIIの3倍のスピードを観測している」

「3倍…。でも、このスペックじゃ精々1.35倍ぐらいが限界なのに…」

「多分だが、この速度は佳織の技量の成せる技じゃないかと思ってい

る」

「操縦者の技量で機体スペック以上の性能を発揮するのは珍しくはないけど……」

千冬さんと束さんが真剣な顔で話している…。

こんな二人を見る事になるなんて…。

私的にはかなりレアな光景です。

「その子。確かデユノア社から出向してたよね？会社から何か届いてたりしてるの？」

「え？ぼ…僕？」

「そうだよ。何か無いの？」

「こ…ここにリストが……」

「どれどれ？」

シャルロットが恐る恐る、手に持っていたタブレットを束さんに手渡した。

「遠距離戦特化型に機雷散布？なにこれ？この高機動特化型は分かるけど…」

久々の再会ではあるけど、今日は昔見られなかった束さんの意外な一面が見られて新鮮な気分だな。

少なくとも、私は束さんの愉快な部分しか知らないし。

「使用する現実的な装備としては、この遠距離特化型と高機動特化型だね。流石に同時装着は難しそうだけど。それでも一部分に特化しているのはいいと思うよ。やるべき事がハッキリしているからね」

「あ…ありがとうございます…」

また束さんが他人を褒めた!?

「た…束…もしかして熱があるんじゃないか？」

「体調が悪いのなら、あまり無理しないでくださいね。姉さん」

「薬取ってこようか？」

「なんで素直に褒めただけで、ここまで言われなれないといけないの？」

「二普段の自分の言動を顧みる（ください）」

集中砲火だ……。

私も三人の意見には同感だけど。

「これなら私が何か手を加える必要はなさそうだね。この機体に関してはほっちゃんに一任した方がいいかも」

「それは私も賛成だ。今や、このラファールⅡの事を一番知っているのは布仏だからな」

「べた褒めだな。本音」

「にやははく…照れるにや〜♡」

一度調子が戻ると、絶対にぶれないのが本音ちゃんだよね。

もう完全にデフォルメになってる。

「あ、もうそろそろパーソナライズも終わるよ。準備はいいかな？ 箒ちゃん」

「はい。待っている間に心の準備も出来ましたし」

「よしよし。それじゃあ飛んでみてよ。箒ちゃんの思った通りに動く筈だよ」

「了解です。では、やってみます」

箒が精神集中をする為に少しだけ目を閉じると、次の瞬間にはかなりのスピードで紅椿が大空へと飛翔した。

確かに速いけど、速過ぎはしない。

本当にリミッターが掛けられているようだ。

「中々のスピードだな」

「本来のスピードには程遠いけどね」

「今はそれでいいんだ」

ラファールのハイパーセンサーで見ると、紅椿を纏った箒は上空200メートルぐらいでストップしていた。

「どんな感じ〜？」

『今まで使用してきた打鉄より軽く感じます』

「機動性が違うからね〜。箒ちゃんのデータも入力されてるし」

オープンチャンネルで話してるけど、東さんも通信機でも装備してるのかしらん？

「今の状態で使える武装は、今右にある『雨月』と左にある『空裂』の二振りの剣だよ。武装データは今から送信するね」

右手人差し指をピンと立てて何かを押すような仕草をすると、なん

だか軽やかな音が聞こえた。向こうにデータが送られたんだろう。「んじや、実際に使ってみよう。まずは右の雨月ね。これは一対一で戦闘する時に有効な武装で、剣として使えるのは勿論、打突の動きに合わせて刀身からエネルギーの斬撃を放てるんだよ。威力はあるけど、射程距離がアサルトライフル程度で、お世辞にも遠距離戦闘には向かないね。機動性で攪乱しながら接近すれば問題無いかもしれないけど、基本的には近く中距離戦で使用する武器だと思っていればいよ」

説明の後、箒は実際に右の腰に装着してあつた赤い剣：雨月を装備した。

そして、全力で突きを放つ。すると、剣の周囲に赤い光球が出現し、それがマシンガンのように撃ち出されて近くの雲が蜂の巣になった。「お次は空裂だね。これは一対多数の特化した武器で、斬撃に合わせて帯のようなエネルギーの刃を放つんだよ。振った範囲に自動で展開するから便利だと思うよ。試しに今から出すミサイルを迎撃してみて」

「はい」

言うが早い、束さんはISの展開技術の応用と思われるやり方で16連装のミサイルポッドを呼びだし、同時に一斉射撃。

『……来るか！』

箒は急いで左手に空裂を装備、構えてからの流れるような動作で横に一回転するように動き、その刀身から説明通りに帯状のエネルギー波が放たれ、全てのミサイルを迎撃した。

「ほう……」

思わず呟いてしまった。

ミサイルが爆発した影響で生じた爆煙が消えると、太陽光に輝く紅椿が雄々しき姿を見せていた。

その武器の性能に皆が驚きを隠せないでいた。

「威力はあるけど、射程は短いみたいね……」

「多分、射程が短いのは紅椿の高い機動性を前提としているからだろうね」

「多少の射程距離の短さは機体の性能と篠ノ之さん自身の技量で幾らでもカバーできる」

「これから腕を磨いていけば、次第に射程距離など意味を成さなくなるだろう」

「私のティアーズのような遠距離が得意な機体とは微妙に相性が悪そうですわ」

代表候補生の皆も、それぞれに紅椿の性能を分析しているみたい。さつきまで揃って静かだったのは、それだけ集中していた証拠だろう。

「おい……」

「なくに〜？ちゃんと機体の方は性能を抑えてあるよ？」

「誰が言葉遊びをしろと言った」

「私はきちんと約束を守ったもん！」

もん！って……今年で束さん……何歳だっけ？

いや……考えるのはよそう……

「まるで絵に描いたような浪漫武装だなく……。あれじゃ私、ちよつと不利かも」

「でも、機動性とかはいっちゃんの白式の方が上だよ？」

「そうなんですか？」

「うん。確かに紅椿の武器は個性的だけど、シンプルに攻撃力が高くて、しかも他の武装も詰める白式の方が汎用性は高いと思うな〜」

「そんな風に言われちゃったら何にも言えなくなる……」

はい論破。

ま、私から見ても白式の方が使い勝手はよさそうだけどね。

束さんの何回になるか分からない説明を聞いている間に箒が降りてきた。

「おつかれ〜、しののん〜」

「いい動きだった。これからが楽しみだな」

「そ……そうか？佳織に言われると……なんだか嬉しいな……」

最後の方がよく聞こえなかったけど、喜んで貰えてなにより。今日からは箒も専用機持ちになるのか。

今年の一年生って専用機持ち多すぎじゃね？

「た…大変です…!!織斑先生…!!」

「山田先生？」

いきなり慌てて走って来た山田先生。

いつにも増して慌てていて、本当にヤバい事態である事を思わせる。

(どうとう……やって来たか)

間違いなく、専用機を持っている私達は駆り出されるだろう。

果たして私は……ちゃんと帰れるのだろうか…。

今まで考えないようにしていたけど、いざ直面すると…緊張するな…。

「佳織？急にどうしたの？」

「え？」

「かおりん……顔色が悪いよ？」

「そ……そうか？潮風でも浴び過ぎたかな…？」

適当に誤魔化したけど、一夏は鋭いから勘付かれている可能性は高いだろうな…。

「急にどうした？」

「まずはこれを見てください！」

山田先生が千冬さんに小型の端末を見せる。

すると、その途端に千冬さんの表情が強張った。

「特命任務レベルA……現時刻より対策を……」

「それがですね……実はハワイ沖で……」

「静かに。生徒達に機密事項が漏洩する」

「す……すいませんでした……」

「専用機持ちは……揃っているな」

「はい」

さつきから途切れ途切れに会話が聞こえてくる。

途中からはハンドシグナルで話しているけど。

多分、私達以外にも生徒達が二人の様子がおかしい事に気が付き始めたからだろう。

「では、私は他の先生方に知らせてきます！」

「頼んだぞ。全員注目!!」

山田先生が走り去ってから、千冬さんが手を叩いて自分に視線を注目させる。

「現時刻よりI S学園教員は特殊任務行動へと移行を開始する。よつて、本日の稼働テストは中止とする。各班ごとにI Sや道具を片付けた後に速やかに旅館に戻り、連絡があるまで自室にて待機するように！以上！解散!!」

急な事態に困惑を隠しきれない皆。

私達でさえそうなんだから、他の子達の混乱具合は半端じゃない。

「ど…どういう事？」

「ちゅ…中止って…」

「本気で意味不明なんですけど…」

皆揃ってオロオロとしまくってる。

無理も無いけど、ここは大人しく指示に従った方が身の為だと思うよ？

そうじゃないと…

「何をぼさっとしている!!とつとと片付けて戻れ!!これから許可無く室外に出た者は問答無用で拘束する！分かったら返事をしろ!!」

「「「は…はい!!」」」

こうなるから。

千冬さんの鶴の一声でようやく皆が動き始め、撤収準備が始まった。

「専用機持ちは全員集合だ。織斑にオルコット、凰にデユノアにボーデヴィツヒ、更識と仲森…それと篠ノ之も来い！」

「は…はい！」

少し戸惑いながら返事をする筈。

多分、自分も頭数に入っている事に戸惑っているんだろう。

「布仏。お前は他の連中を手伝ってやれ。それからは自室待機だ。いいなっ！」

「は…はい…」

完全に怯えきっている本音ちゃん。

「こんな時は……」

「大丈夫だ」

「かおりん……」

「例え何があっても、私全員で頑張ればきつとなんとかなる。これまでだってそうだっただろう？」

「分かっている……けど……」

「けど……？どうした？」

「なんだか……凄く嫌な予感がするの……」

……鋭いな……本音ちゃんは。

「ならば、私達が早々に片付けて、君の嫌な予感が気のせいであったと証明しよう」

「え……？」

「だから、君は作戦の成功をここで祈っていてほしい」

「かおりん……」

ISを収納してから、本音ちゃんを頭を優しく撫でる。

「じゃ、行ってくるね」

「いってらっしゃい……」

他の皆は先に行っているっぽい。

私も急がないと！

「お願い……皆無事に帰ってきて……」

こうして、今まで最大の死闘の幕が上がろうとしていた。

本音ちゃんではないが、実は私も先程から嫌な予感が胸中を渦巻いていた。

これが杞憂である事を今は祈るばかりだ……。

第45話 銀の福音

「それでは、現状の説明を開始する」

旅館の最奥に設けられた宴会用の大座敷である『風花の間』では、私を初めとした全ての専用機持ちと先生達が一堂に会していた。

照明を落としているせいか室内は仄暗く、大型の空中投影用ディスプレイの明かりだけが唯一の光源だった。

「今から約2時間前、アメリカ・ハワイ沖にて試験稼働中だったアメリカとイスラエルが共同開発した第三世代型の軍用IS『銀の福音』シルバリオ・ゴスペルが突如として軍の制御下を離れて暴走、監視空域から離脱をしたとの連絡が入った。猶、これより対象を『福音』と呼称するものとする」
千冬さんのいきなりの説明に私以外の全員が驚きを隠せないでいる。

一方の私は、原作知識から今回の事を予め知っていたから、皆ほどに驚きはないが、それでも緊張は隠しきれない。

なんせ、今回の戦いは今までとは全く意味合いが違う。

『闘い』ではなく『戦い』。

失敗すれば、それは即ち『死』を意味する。

これは模擬戦でもなければ公式戦でもない。

少しのミスが全員の命運を文字通り左右する。

目だけを動かして他の皆の様子を窺って見ると、案の定、全員が厳しい顔つきとなっていた。

国家に所属していない一夏と箒もそれは同じ…いや、きっと代表候補生の皆以上に緊張しているに違いない。

「空域からの離脱後、監視衛星による追撃の結果、福音はこの場所から約2キロ先の空域を通過する事が判明した。時間になると約50分後と言った所か。学園上層部からの通達により、目標に最も近い我々が今回の事態に対処する事になった」

次に千冬さんの口から出てくるセリフは、なんとなく予想がついている。

「学園の教員達は持ってきている訓練機を使用して周辺空域及び海域

の封鎖を行う。よって、今回の作戦は主に専用機持ちであるお前達にやってもらう事になる」

分かっていても、こうして実際に言われると……手に汗を握ってしまふな……。

「それでは、これより作戦会議を開始する。何か意見がある者は挙手をするように」

素面の私じゃ皆の会話についていけない。

ならばここは……ラファール・ヘッドギア……オン！

シヤア様モードにチェンジゲッター!!

「では、まずは私から」

「仲森か。なんだ？」

「まずはターゲットとなるISの詳細なスペックデータの開示を要求する。相手の事を知らなければ作戦の立てようがない」

「道理だな。山田先生」

「了解しました」

奥の機器の前に座っている山田先生が操作すると、目の前のディスプレイにISのデータが表示された。

「分かっているとは思いますが、これは二カ国の最重要軍事機密となる。決して口外などはしないように。もしも何らかの形で情報漏洩が判

明した場合、お前達には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる事となる」

「承知した」

流石にそこまで馬鹿じゃないですよ。

でも、情報が大事なものは本当。

敵を知り、己を知れば百戦危うからず……だからね。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃タイプ……か」

「どうやら、私のティアーズと同様にオールレンジ攻撃が可能なようですわね」

「火力と機動力に全ての性能を割り振った機体……ね。これは想像以上に厄介な奴みたい。スペック上では私の甲龍を上回っているから、正面から相対するのは自殺行為に等しい……」

「それに、この『特殊武装』つてのが気になるね。丁度向こうから僕の
リヴァイヴ用の防御パッケージが届いているけど、連続での防御は厳
しいと思う…」

「それに、このデータでは格闘性能が完全に未知数だ。所持している
であろうスキルも全くの不明…」

「うん。私の『打鉄式式』と同じで、この機体は最初から単機で複数の
相手と戦う事を前提としてるみたい。下手に突っ込めば一網打尽に
なる可能性も否定出来ない…」

代表候補生の面々は普段は決して見せない真剣な表情で意見交換
をしている。

私も少しだけ混ざったけど。

「回避する事に専念すれば、なんとか懐に潜り込めなくはないと思う
けど…。さつきラウラが言った通り、格闘戦の能力が分からないから
ね……」

「この中で最も近接戦が得意なのは一夏だ。もしもこの福音とやらの
近接戦の武装が無いのであれば、一夏を主軸に作戦を立てやすいのだ
が……」

くそく……!!

私が転生してから十数年が経過しているせいか、もう原作知識も大
まかな部分しか思えてないよ〜!

福音って近接戦闘が出来たっけ…?

それとも、近づかれたら逃げの一手だったっけ?

う〜ん……思い出せ私〜!!

「織斑先生。福音に対して偵察行動は出来ないのですか?」

「残念だが不可能だ。福音は現在進行形で超音速飛行を継続してい
る。恐らく、アプローチは最初の一回が限界だと思われる」

「チャンスは一度だけ…。と言う事は、ここは綿密に作戦を考えない
といけませんわね……」

今回は原作のように一夏の撃離脱戦法が出来ない。

一夏の白式には零落白夜が搭載されていないからだ。

総合性能が向上しても、やっぱりどこかで弊害が出てしまうか…!

「まず前提として、全員で向かうのは当然よね」

「その際の指揮官は……」

ぜ……全員がこっちを見てらっしやる……。

「ちよ……ちよつと待て！もしかして私もか!？」

「当然だ。専用機を受領してまだ間もないのは分かっているが、今は箒も立派な専用機持ちだ」

「今は少しでも戦力が欲しい。かと言って積極的に前に出て戦えとは言わない」

「箒は箒に出来ることを全力でやりなさい。いざとなったらあたし達がフォローするから」

「りよ……了解した……」

この中で最も経験が足りてないのは箒だからな。

緊張するなど言うのは酷な話だ。

「仲森、織斑、篠ノ之。お前達三人は専用機を所持しているとは言え、どこにも所属していない存在だ。故に、今回の作戦に参加するしないは自分達で決めろ」

「ここで参加しない事を選んでも、誰も文句を言ったりしませんよ？無理と無謀は似て非なる物ですから」

千冬さんと山田先生が優しい口調で言ってくる。

けど、私の中の答えはとっくの昔から決まっている。

「私は行く」

「佳織……」

「これまで何回も危ない橋は渡って来た。今更ここで待っている事など、私には出来ない」

「佳織さんなら、きっとそう言うと思ってましたわ」

どうせ、ここで断つてもあのクソ神が無理矢理にでも福音と戦わせようとすると思うけど。

「私も行くよ。もう佳織の帰りを待っているのは嫌だから」

「一夏……あんだ……」

「同じ『苦しみ』でも、帰りを待って心が締め付けられるような『苦しみ』を味わうよりは、佳織と一緒に困難に立ち向かって苦しんだ方が

何百倍もマシ」

「全く……お前と言う奴は……」

なんて言いながらも、少し微笑んでますよ、千冬さん。

「わ……私も一緒に行く！」

「箒……」

「もう……佳織が戦っている姿を見ているだけなのは嫌なんだ……。例えば足手纏いであつたとしても、私は佳織と同じ『場所』に立っていたい！」

「決意は……固いようだな」

結局、全員参加決定……っと。

ま、こうなるって予想はしてたけど。

「……分かった。ならば、全員参加を踏まえた上で作戦を具体的に詰めていくことにする。現在、この中で最も最高速度が出せる機体はどれになる？」

「多分、私のブルー・ティアーズかと。丁度イギリスから強襲用高機動パッケージである『ストライク・ガンナー』が送られてきてます。それに付随して超高感度ハイパーセンサーもついています」

「あの……パッケージ換装前提なら、佳織のリヴァイヴⅡも適任だと思います」

「と言つと……」

「さっき外でも言いましたけど、僕のリヴァイヴとは別に佳織の機体専用のパッケージが幾つか送られてきていて、その中に高機動戦闘用のパッケージも含まれているんです」

「そーいや、そんなのあつたつけ。」

「分かりやすく解説するなら、MS-06SザクⅡをMS-06R-1A高機動型ザクⅡに換装するようなもんか。」

「確かにあれなら機動力は大幅に向上するだろうな。」

「ふむ……オルコット、仲森。超音速下での訓練時間はどれくらいだ？」

「私は約20時間ぐらいですわ」

「0だ」

「オルコットはともかく、仲森は当然か……」
そりやそうですよ。

今まで縦横無尽に動いてはいたけど、それとこれとは全く別だし。
「だが、この状況で贅沢は言ってられないのもまた事実。仕方が無い、
今回はまずオルコットと仲森に先陣を切らせて、二人を後ろから追従
する形で他の連中が戦闘空域に接近する事になるか……」

あ……あれ？今ぐらいのタイミングで束さんがいきなり乱入してこ
なかつたっけ？

こう……天井裏から突然……。
「……………」

来ないし。なんで？

「白式も機動力は高いけど、流石にパッケージ換装をした機体には
劣っちゃうからね」

「それに、必要以上にスピードを上げたりしたら、それこそいざという
時にエネルギー切れになって目も当てられないわよ」

「ここは大人しく後続になるとしよう」

原作ではこの事件の下手人は束さんだったみたいだった。

確か、箒の紅椿のお披露目をしようと企んでいたんだっけ。

でも、今回の紅椿は性能が抑えられているから、そんな事をする意
味が無い。

(今回の事件……束さんは本当に関係無いのか……?)

だとしたら、一体何処のどいつがこんな事を……?)

「オルコット。お前が先程言ったパッケージはもう量子変換インストールが完了し
ているのか？」

「いえ……まだですわ」

「どれぐらいかかる？」

「20分ぐらいあれば……」

「仲森の方はどうだ？」

「私もまだです」

「こつちも多分20分ぐらい掛かると思っています。けど……」

「けど？なんだデユノア」

「他の誰かが手伝ってくれたら、もう少し時間が短縮出来ると思います」

「背に腹は代えられない…か。今いる生徒で最も整備スキルが高いのは……」

「それは勿論、ほっちゃんでしょう！」

……天井から束さんの頭が逆さまの状態で生えてる。

つか、このタイミングで来るんかい!!

「……山田先生。このバカを部屋の外に放り出してください」

「え…え? あ…はい」

ですよね。混乱しますよね。分かります。

「し…篠ノ之博士? まずはそこから降りて頂けると……」

「いいよ。私だって、この状態じゃ頭に血が上っちゃうし」

だったら最初からそんな所に上るなよ。

「あらよつと」

クルリと一回転しながら降りてきた。……見事な着地ですこと。

何気にスカートの中が見えそうになった事は黙っておきます。

……白……か。意外とスタンダードなんだな。

「ちーちゃん。ここは私とほっちゃんがお手伝いしてあげるよ」

「布仏はとにかく、お前が……?」

「うん! 私にかかればパツケージ換装なんてお茶の子さいさいなんだよー!」

お茶の子さいさいなんて言う人、久し振りに見た…。

「私なら20分と言わず5分で終わらせられるよ」

5分とな。

随分と短縮出来るな。

束さんならそれぐらい楽勝か。

「それに、ほっちゃんの腕なら同じぐらいの時間で出来ると思うけど?」

「お前がそれ程にアイツを褒めるとはな……」

「言ったでしょう? 彼女は充分に評価に値するって」

この束さんは本当にマイルドになってる…。

「これも改変…なんだろうか？」

「にしても、紅椿の全性能を發揮すれば作戦も楽になるのにな」

「今更贅沢を言うな」

「は〜い」

全性能……つて事は、紅椿の全身に装備してある『展開装甲』も封印されているんだろう。

紅椿はアレがあつて初めて真の性能を發揮出来るからな。

「ならば、布仏には私から言っておく。東、お前は仲森のリヴァイヴⅡを頼む。布仏にはオルコットの機体を頼むことにしよう」

「ほいほ〜い。ほっちゃんには悪いけど、かおりんの機体なら全力でやっっちゃうよ〜！」

「くれぐれもやりすぎるなよ」

「保証はできませ〜ん！」

いや、そこはしようよ。

「よし。ならば作戦は仲森とオルコットに先行して貰い、その後方から残りのメンバーが追従する形で目標を追跡、及び撃破を目的とする事とする。作戦開始時刻は今から30分後。各員は直ちに準備に掛かれ」

千冬さんが場を閉めるように手を叩くと、皆が立ち上がる。

「専用機持ちは自分の機体のチェックを怠るなよ。勿論、エネルギーは満タンにしておけ」

それだけを言つて千冬さんは部屋を後にした。

多分、本音ちゃんを呼びに行ったんだろう。

「それじゃ、早速かおりんの機体の換装を始めようか。私に機体を預けてくれる?」

「分かりました」

ヘッドギアを収納してから、待機形態であるペンダントを渡す。

「すぐに終わるから待つててね〜♡」

…スキップしながら出て行つたぞ…あの人。

「う〜ん……んじゃ、私はどうしようか……」

「そ…それなら、私が高機動戦闘のレクチャーでもしましょうか?」

「おおく…お願いできますか？」

「喜んで！」

山田先生の実力ならうってつけだ。

私は高機動戦闘の経験なんて全く無いから、ちゃんと聞いておかないと。

「ふ…不謹慎だと分かってはいますけど…」

「山田先生にしてやられた感じね……」

…なんで皆してこつちを見るの？

「ぼ…僕達も準備しよ？時間は余り無いし……」

「気持ちに分かるけど、今は行かないと」

「そうだな。急ぐぞ、お前達」

「う…うん……」

代表候補生の皆も渋々部屋を後にした。

「私達は……」

「姉さんの所に行くか？我々も機体の準備をしなくてはいけないだろうし」

「だね。佳織、私達も行くから。後でね」

「うん、分かった」

一夏と箒の二人も行ったか…。

「それじゃ、お願いします」

「はい。ではまず、高機動戦闘用に調整された超高感度ハイパーセンサーについて説明しますね。使用したら……」

・
・
・
・
・
・

旅館のとある一室。

浴衣を着た二人の少女が緑茶を飲みながら窓から見える景色を眺めていた。

「遂に始まりましたね。大佐」

「そうだな」

ズズズ……と茶を啜り、喉に流し込む。

風が吹き、彼女の金色の髪を美しく掻き乱していく。

「彼女達は無事に解決出来ると思うか？」

「普通なら非常に困難でしょうね」

「フフ……そうだな」

傍のある小さなテーブルに置かれた小皿の上から大福を一つとつて口に入れる。

「……暴走して破壊の化身と化した哀れな機械天使に勝つことが出来るかな？仲森佳織……」

大福を飲み込んでから、再びお茶を飲む。

「苺大福と緑茶の組み合わせは最高だな……♡」

「大佐の仰る通りで」

意味深な発言をしながらも、無邪気に大福を頬張るその姿は、どこにでもいる普通の少女のようだった。

作戦開始まで、あと少し……。

第46話 暴走の機械天使

全ての準備が完了し、私達は砂浜に並んでいた。

『作戦開始5分前です』

山田先生の声が通信越しに聞こえる。

あと五分と言葉を聞いて、嫌が応にも緊張感が高まる。

「……………本音ちゃん。そこにいる?」

『かおりん……………どうしたの?』

今回、整備員として参加してくれた本音ちゃんは、束さんと一緒にさつきまでいた風花の間に待機している。

「ありがとう。本音ちゃんがいたから、準備を早く完璧に行えた」

『う……………。私にはこれぐらいしか出来ないから……………』

「私はいつも本音ちゃんの『これぐらい』に助けられているよ」

『かおりん……………』

出発前にせめてこれぐらいは言っておきたかった。

これで後腐れなく作戦に集中出来る。

『む……………ほっちゃんばかりズルい……………束さんも頑張ったんだよ……………?』

「……………束さんにも感謝してます。本当にありがとうございます」

『きゃ……………かおりんに感謝された……………♡』

この状況なのにテンションがおかしな事になってないか?この人……………。

「全く……………あの人は……………!」

「たはは……………」

箒が頭を抱えて眉間に皺を寄せてるよ。

なんつーか……………ガンバレ。

『……………時間です……………作戦開始!!』

皆の顔を見合わせて、同時にISを展開する。

「行くぞ……………バリステイック・リヴァイヴ」

「来て……………白式……………」

「やるぞ……………紅椿……………」

「おいでなさい……………ティアーズ……………」

「行くわよ！甲龍！」

「リヴァイヴ・カスタム！」

「出る！レーゲン！」

「やろう……打鉄式式」

私達の体が光に包まれて、体にISのアーマーが装着される。

「よし」

高機動使用に装備換装された私のリヴァイヴIIは、脚部がより大型になり、その内部にブースターが内蔵されていて、背部に装着されたウイングスラスターも変更され、スラスターが二基増設されている。

これで運動性はそのままに、機動性の大幅な向上に成功している。

頭部のヘッドギアも見た目は変わらないが、より高性能なハイパーセンサーに変更してある。

「皆……行くぞ」

私が全員に言い聞かせるように言うと、全員が一斉に頷いた。

PIICを使って宙に浮き、そのまま海に向かって移動を開始する。

「では、セシリア」

「了解ですわ」

私のリヴァイヴIIと同様に換装したセシリアのブルー・ティアーズの強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』は、全てのビットをスカート状に腰部に接続し、大型のスラスターとして利用している形態だ。

更に、頭部には超高感度ハイパーセンサーであるバイザー状の『ブリリアント・クリアランス』を装着していた。

これで、私と同じ速度が出せると言う訳だ。

「皆は無理をして急がなくていい。エネルギーを温存しながら、先行する私達の後を着いて来てくれ」

「分かったわ」

眼前に広がる大海原を見つめ、気合を入れ直す。

「……………出撃!!」

次の瞬間、私達二人は一気に加速し、福音に向かって飛翔した。

『お願い……かおりん……皆……無事に帰ってきて……』

飛び立つ瞬間、本音ちゃんの今にも泣きだしそうな声を聞いた気がした。

・
・
・
・
・
・
・

流石と言うべきか、高機動使用になった私達は、あつという間に目標高度である500メートルに到達した。

「暫時衛星リンク確立開始……情報の照合完了。ターゲットの現在位置を確認……。セシリア、そちらにもデータを送る」

「はい」

目の前に表示されたレーダーに福音の位置が映される。

まだ結構距離があるけど、お互いに速度は凄まじいから、接敵するのは数秒後になるだろうな……。

「ターゲットとの接触まであと……」

「佳織さん！目標を目視確認しましたわ！」

「!!」

もうか！カウントダウンぐらいいさせろっつーの！

ハイパーセンサーによる視覚情報が目標を映し出した。

（成る程……見た感じでは、私が知っている福音と変わらないようだな……）

白銀に光り輝く装甲を纏っていて、頭部から生えている一對の巨大な翼が天使を彷彿とさせるデザインになっている。

あれが確か、大型スラスターと広域射撃兵装を複合させたアイツのメインウェポン……！

（私の記憶が正しければ、文字通りのレーザーの雨が降り注ぐことに

なる。一瞬でも気を抜いたら負ける！)

このまま行けば接触するのは約10秒後ぐらいか。

「セシリア！私が前衛を務める！背中には任せたぞ！」

「了解ですわ！」

アイツの主武装は射撃武器。

いかに相手がバ火力だとしても、懐に飛び込めれば勝機はある！

拡張領域からWビーム・トマホークを取り出し展開、両手で握りしめた。

福音との距離が着実に迫っていく。

もう少しと言う所で、私は瞬間^{イグニッション・ブースト}加速を使って一気に間合いを詰

める！

「おおおおおおお!!!」

裂帛の気合と共にWビーム・トマホークを振り下ろす！

確実に入った！……と思われたが……

「なっ!?」

福音は速度を落とさなのまま、体を捻るように攻撃を回避、そのまま体術を用いて蹴りをかましてきた！

「ちいっー!」

咄嗟にこちらでも回避。

お返しだこの野郎！と言う気持ちを含めて、得意のキックを放つ！

その蹴りでお互いに間合いが離れてしまった。

くそ……！折角、懐に潜り込めたのに！

福音は少しだけ後退して身構えた。

(どうする……！お世辞にもイニシアチブを取れたとは言い難い……！このまま攻めるか？いや、ここは……)

数瞬だけ思案に耽ると、福音から無機質な合成音声が聞こえてきた。

『最優先攻撃目標【ラファール・リヴァイヴ・バリスティック】確認。

これより迎撃モードに移行開始。【銀の鐘^{シルバー・ベル}】稼働開始』

「来るか！」

本当に暴走しているのか疑わしい程に、濃密な敵意……いや、『殺

気』を感じて、額に汗が噴き出る。

「セシリア!!」

私の叫びに何も言わず、流れるような動作でレーザーライフルを撃つことで応えたセシリア。

しかし、その一撃も紙一重で躲かれてしまう。

(あれが本当に暴走している機体の動きか!? 誰かに遠隔操作されていると言われた方がまだ説得力がある!)

声は機械的なのに、その動きはどこまでも人間的だ。

もしかして……操縦者の動きをトレースしているのか!?

だとしたら……

(プロの軍人と同じ技量を持ち、相手を撃つ事に一切の躊躇いが無い相手……)

実際に対峙すると、ここまで厄介な相手だったのか! 福音とは!

「あの翼が急加速をしているのでしょっか……!」

「かもしれない……!」

全く……『最重要軍事機密』とはよく言ったもんだ!

厄介なISを作ってくれたもんだよ! 本当に!

「セシリアはこのまま後方援護! 私は中距離を保ちつつ、隙があれば接近を試みる!」

「了解!」

「それとっておく。決して深追いはするな! 今の私達は一夏達が来るまでの時間稼ぎをすればいい! 本格的に攻勢に出るのは、その後だ!」

「はい!」

なんて言っってはみたものの……どこまでやれるのやら……!

頼むから早く来てよね! 皆!!

.....

佳織とセシリアが先行した後、他の専用機持ち達はスピードを上げながら二人を追従していた。

「流石は高機動パッケージ……スピードが桁違いね……」

「そうだな……」

鈴とラウラが少しだけ眩いた後、また沈黙が支配する。

「急がないと……いくら佳織さんがいるからって、軍用ISをたった二人で相手するのは……」

「そうだね。軍用って事は、僕等が普段から使用しているISとは違って競技用のリミッターが解除されているって事だもんね」

「そ……それはヤバくないか……？」

「ヤバイなんてレベルじゃないわよ。凄くヤバすぎる」

全員の顔に焦燥が浮かぶ。

すると、水平線の向こう側から戦闘音が聞こえてきた。

「……！お前達……聞こえたか!？」

「うん……!」

「確かに聞こえた……!これは……」

少しずつ音が近づいてくる。

彼女達の目に映ったのは……

「か……佳織……」

「セシリア……」

福音の圧倒的な火力の前に防戦一方になっている二人の姿だった。

「嘘………でしょ……？」

「あの佳織が苦戦してる………？」

「くっ……!急ぐぞ!!」

これまで常勝を重ねてきた少女が苦戦しているのを見て、戦闘空域へと急ぐ面々。

焦りと不安が支配する中、福音との壮絶な戦いが本当の意味で始まろうとしていた。

・
・
・
・
・
・

『佳織!!セシリア!!こちらの射線軸から退避してくれ!!』

この声は……ラウラ!?と言う事は……

「セシリア!」

「分かってますわ!」

レーザーの雨をなんとか掻い潜りながら、私達はその場から退避した。

すると、私達がいた場所を凄いスピードで砲弾が通り過ぎていった。

流石の福音も、自身の射程距離外からの不意打ちは回避出来ないように、その胴体に直撃を受けていた。

「今のは……」

「レーゲンの大口径リボルバーカノンか!」

これまで致命的なダメージを碌に与えられなかったけど、ようやく福音に一撃を与えられた!

「佳織!!セシリア!!大丈夫!」

鈴の叫びを聞きながら、私は皆とやっと合流を果たした。

「待たせて済まない!」

「ここからは私達もやるよ!」

「頼む」

よくし!ここからが本番だ!

『敵増援を確認。これより【銀の鐘】の全力稼働を開始します】

ぜ…全力稼働!?!こっからまだ攻撃力が上がるのか!?

白銀の翼。

その装甲がまるで広がっていくように展開していく。

「皆さん！気を付けてください！あれは……」

いつでも回避出来るように身構えておく。

果たして……どこまで避けれるのやら……！

「砲口ですわ」

今まで開いていなかった砲口すらも全部開いて、まるで羽ばたくように翼を前に出す福音。

すると、さつきまでの攻撃が嘘のように、超絶的な数の光弾が発射された！

「おのれ!!」

全員で必死に回避に専念する。

ムカつく事に、この一撃一撃の光弾は羽の形をしている。

態々こんな形を模しているなんて……完全に舐められてるでしょ！

「くあっ!?!」

「鈴!」

甲龍の装甲に光弾が突き刺さり、爆発する。

不幸中の幸いなのは、光弾の攻撃力が余り高くない事。

福音は質より量の、圧倒的な手数を持つISなのだ。

「なんなの!?!これって!」

「数が多すぎる!」

「そ……それなら!」

簪が複数のコンソールを取り出して、何かを操作し始めた。

「くっ……!」

「僕に任せて!」

シャルロットが簪の盾となって前に立つ。

「もう少しだけ……!」

簪の目と指が高速で動く。

「……よし!」

打鉄式式のミサイルポッドが全て開く。

「山嵐!!行つけええええええええええつ!!!」

合計48発のミサイルが光弾に向かって飛んでいく。

ミサイルと光弾がぶつかり、凄まじい爆発が発生する。

「やった！」

「ナイスだ簪！」

光弾が止み、攻勢に出るチャンス到来！

「今だ！一夏！簪！」

「応！！」

まるでジェットストリーム・アタックのように、縦に並んで突撃する！

「でええええええええい！！」

雪片を展開させてレーザーブレード状態になった一撃を、福音はまるで最初から見切っているかのような動きで回避する。

「う…嘘っ!?!」

「ならば！」

次は簪が一夏の後ろから二刀の刃で斬りかかる！

しかし、それすらも流水のような動きで躲してみせる福音。

「なんだとっ!?!」

「これもか…!だったら！」

「はあああああああつ!!!」

これまでで一番の力を込めた一撃を振り下ろす！

流星の福音も三連続の攻撃を完全に回避出来ないようで、僅かではあるが攻撃を掠らせることに成功した！

「逃がさん！」

緊急離脱しようとした福音に接近しWビーム・トマホークを収納、その右腕を掴む。

「捕えたぞ」

空いた手にハンドガンを展開し、そのまま連続ゼロ距離射撃!!

「シャルロット!!」

「任せて!!」

身動きのできない福音の背後にシャルロットが回り込み、必殺のパイルバンカーを叩き込む！

ズドン！と音が響き、福音越しに衝撃が伝わってくる。

「全弾叩き込む!!」

シリンダーが回り、薬莖が次々と出てくる。

それが全部出た後、シャルロットはその場を離れる。

だが、私はまだ離れない。

「このチャンス…離しはしない」

次はマシンガンを展開する。

勿論、再びゼロ距離射撃。

「こちらも全弾持つていくがいい!!」

つつても、果たしてダメージが通っているかどうか…。

コレの威力つてお世辞にも高いとは言えないし…。

「さつきはよくもやってくれたわね…。」

鈴が怒り心頭と言った感じで背後にやって来た。

「佳織！そこから…。」

「構わん！私ごと撃て!!」

「でも！」

「やれ!!鈴!!」

「くっ…！もし当たっても文句とか無しよ!!」

鈴の衝撃砲が福音の背中に直撃する。

その余波が私にも来るが、それに構っている余裕は無い。

今はとにかく攻撃あるのみ！

カチカチ。

「ちっ！」

トリガーを引きつぱなしだったから、もう弾が無くなったか！

こっちの攻撃が止んだと見るや、掴んだ腕ごと私を投げ飛ばしや

がった！

「くあっ！」

「佳織！…：…きやあっ!?!」

向かいにいた鈴とぶつかってしまい、動きが止まってしまう。

その隙を見逃す程、福音は甘くは無かった。

「佳織！鈴！避けて!!」

こいつの十八番である光弾の嵐が降り注ぐ！

このままじゃ二人纏めてやられる！

ならせめて！

「鈴ー」

「か…佳織！何を!？」

咄嗟に鈴を庇うように抱きしめて、自分の体を盾にした。

「ぐあああああああつ!!」

「今すぐ私を放して！佳織!!」

「馬鹿を…言うな…!」

この状況で手放せとか…冗談じゃないでしょ…!

「貴様あああああああつ!!!」

「絶対に許さん!!!」

「うあああああああつ!!!」

「よくも!!!」

一夏と箒とラウラと簪が突っ込んできた。

だが、福音は四人の方を向こうとはしない。

(そう言えば…さっき私の事を最優先目標って言ってたっけ…)

なんでそんな事になってるかは知らないけど、これって私が囷になれるって事だよ…。

こつちに夢中になつてるお蔭で四人の攻撃は福音の背中に命中するが、それでも奴はビクともしない。

「こちらを向きなさいなー」

「こんのおおおお!!」

セシリアのレーザーライフルとシャルロットのアサルトライフルも炸裂するが、福音は全く見向きもしない。

少しして福音の攻撃が止むが、その時にはもうバリステイク・リヴァイヴのSEは枯渇寸前にまで追い込まれていた。

「か…佳織…あたし…」

「ふっ……気にするな。お前が無事で何よりだ」

はい。強がってますけど、本当はめっちゃ背中が痛いんです。

許されるなら今すぐにも泣き出したいです。

でも泣きません。

「佳織さん!!」

簪がこつちに来て私の体を支えてくれた。

同時に鈴が私から離れた。

「派手にやられてしまった……」

目の前には破損個所を報告する表示が映っている。

(背面ブースター大破……。脚部スラスターも損傷あり……か)

これはヤバいな……!!

もう殆ど回避能力が無いに等しいじゃん……。

福音はこちらから離れて高度を取り、全員を見渡せる位置に移動した。

「い……一網打尽にする気か……!!」

「結構攻撃を当ててるのに……どうして倒れないの……!!」

「これが軍用機の性能なのか……!!」

全体的に悲壮感が漂い始めた中、ふとハイパーセンサーが何かを捕えた。

「なん……だと……!!」

この状況で例の密漁船が登場かよ……!! 冗談にしても笑えないぞ!!

「ど……どうしたんですか……?」

「あれを……」

「あれ……?」

私が指刺す方向を見ると、簪も絶句した。

「嘘……なんでっ!!」

「あれって……船!!」

「もしや……密漁船か!」

最悪のタイミングだ!! くそっ!!

「ど……どうするの……?」

「いくら犯罪者とは言え、見殺しには出来ない。ここは誰かが船の護衛をしながら後退するしかないだろう……」

「じゃ……じゃあ、一番損傷が酷い佳織が……」

「それはダメだ」

「な…なんでですの!?!」

「なんでかは知らないが、福音は私の事を最優先攻撃目標に設定している。私が船に近づけば却って危険に晒す事になる。セシリアも聞いただろう…?」

「そ…それは…」

損傷は激しいけど、ここで私が後退すれば、それは福音を旅館まで引き寄せてしまう事と同義だ。それだけは絶対に避けないと!

「箒…それから鈴。二人で船を護衛しながら浜辺まで誘導してくれ」

「ま…待て! 私はまだ…!」

「頼む…」

「ここから見ても分かるよ。」

箒…動揺してるでしょ?

初めての实战の空気と、私がダメージを受けた事に心が正常じゃなくなっている。

だって、さつきから手が震えまくってるもん。

そして、精神的動揺は鈴も同じだ。

「…分かったわ」

「鈴! お前!」

「あたしだって悔しいけど! …多分、今のあたし達は足手纏いになる…」

「くそっ…!」

納得してくれたか…。

そういや、なんか福音が大人しいが…一体何をして…。

『……………』

何処を見ている…?」

アイツが向いている先は…

「まさかっ!?!」

奴の狙いは密漁船か!

私がターゲットじゃなかったのかよ!?!

「作戦変更!! 全員で今すぐ船を守れ!!」

「えっ!？」

こっちゃんが動き出すよりも早く、福音は自慢の光弾をまたまた放った!!

今度は私達じゃなくて、船に降り注ぐように角度を変えて!

「冗談!!」

「こいつは!!」

急いで射線に入って福音の攻撃から船を守る。

それぞれに攻撃をして、少しでも光弾を船から逸らす!

私はWビーム・トマホークを回転させて盾のようにして防いだ。

「ちよ……なんで止まらないのよ!!」

「このままでは……!」

皆のダメージも蓄積し始めたか……!

これじゃあ本当に全滅してしまう!!

「総員! 船を守りながら後退!」

「!」「!」「!」「!」「!」

「殿は……私がする」

フフ……全員してそんな顔をしないでよ。

思わず笑っちゃうじゃない。

「そんな事出来るわけないじゃん!!」

「そうだ! この中で最も損傷が激しいのは佳織なんだぞ!!」

「分かっている! だが、さっきも言っただろう! 奴は私を狙っている

と! 私が後退すれば、それは即ち防衛目標である旅館が危険に晒され

ることになる! それだけは絶対に避けねばならない!!」

「そうだけど……」

「この攻撃を凌ぎながら船を護衛するのは一人二人では不可能だろう。だから、念には念を入れて私以外の全員で行ってほしいんだ」

自分で言ってる『馬鹿じゃね!』って思うけど、この猛攻を防ぎながら船を無事に浜辺に送るには、これしか思いつかないんだよ!

もっと考えれば別のアイデアが思いつくかもしれないけど、今の私にはこれが精一杯なんだ!

「皆……行くぞ」

「ラウラ！あんた！」

「佳織の決意を無駄にする気か!!」

「!!」

「私だって本当は嫌だ…だが！」

優しいなく……ラウラは。

本当に……その気持ちだけで胸がいっぱいです。

「船を送り届けたら、絶対に戻ってくるからね！」

「だから、それまでは……」

「勿論だ」

つか、マジで早く行つて。

やせ我慢もそろそろ限界だから……!

皆は高度を下げて船の所まで行き、事情を説明しながら後退を開始した。

同時に、船を福音の攻撃から防いでいる。

船と皆が徐々に離れていく……。

この調子なら……!

私と福音以外の姿が見えなくなった途端、攻撃が止んで、急にこっちを見だした。

「さて……皆が浜辺まで無事にたどり着くまで私に付き合つて貰うぞ……!」

なんて言わなくても、向こうから勝手に来るとは思うけど。

……これが私の人生の正念場かもしれない……。

第47話 撃墜

戦闘海域に突如として入って来た謎の船（恐らく密漁船）を護衛しながら後退した皆を見送った後、私は満身創痍の状態でもまだまだ元氣満々な状態の福音と対峙していた。

福音は何故か動く様子が無く、まるでこっちの動きを窺っているかのように見えた。

見れば見る程、暴走しているISには見えない。

それに、私の事を最優先攻撃目標に指定していた事も気にかかる…。

「いや……それを考えるのは後だ」

今はどうやって福音を倒すかを考える方が先決だ。

（一体どうする…？マシンガンの弾はもう無いし、ハンドガンでは威力に欠ける…。かと言って、ビームバズーカは威力はあっても撃つまでに時間が掛かりすぎる。実弾の方のバズーカは弾速が遅いから仮に撃つても命中する確率は低いだろう…。この状態で誘導兵器であるファンネルを射出しても、いい的になるだけ…。）

やっぱり……一人で戦うには何とかして近接戦に持ち込むしかないのか…？

私が密かに覚悟を決めようとしていると、ふと拡張領域内に見た事のない装備群があるのを見た。

「これは……！」

東さんに預けるまではこんな装備は無かった筈…。

なら、これを入れたのは東さんなのか…？

確かに、私宛に送られてきた装備にはこれらも含まれていたけど…。

「ははは……貴女と言う人はどこまで……」

ある意味、私以上に先を読みまくってるじゃんか……。

全く……敵わないなあ…。

「だが……もうこれしかないか……？」

奴の主武装は光学兵器オンリー。

地上戦や空中戦では無類の強さを発揮するが、どんな存在にも弱点は存在する。

一人になって頭が冷えて、ようやくこの考えに至るなんてね…。

『あそこ』なら……やれるかもしれない……」

けど、確固たる確証があるわけじゃない。

もしかしたら、何らかの対策をしている可能性も……。

「……いや。もうそんな事を考えている余裕は無いか」

死なばもろとも。

やれるだけの事をやってやる！

「残りSEはあと44。換装パーツ確認……選択。装備換装タイミン
グは着水時に限定。その際のタイムラグは約5秒……。ふっ……これ
ではまるで博打だよ……」

だが、もうこれしかない！

『最優先攻撃目標が再び戦闘態勢に移行。これより攻撃を開始しま
す』

「いいだろう……ならば来い!!」

私は福音の遙か上空に飛び上がり、そのまま真っ直ぐに降下した！

勿論、福音はそんな私を迎撃する為に銀シルバー・ベルの鐘鐘を発射する！

「そうだ……よく狙うがいい!!福音!!」

己の目に全神経を集中させて、全力で回避に専念する！

こっちのエネルギーはあと僅か……少しの被弾が命取りになる!!

「見えるぞ……私にも敵の動きが見える!!」

これなら……いける!!

最小限の動きで光弾を躲しながら、私は福音の体にしがみ付いた！

「私と共に……暗き海の底へと落ちるがいい!!!」

そのまま真っ直ぐに海底へとダイブ!!

その瞬間にリヴァイヴが光を放ち装備が換装された！

福音を蹴り飛ばし、少しだけ間合いを開ける。

「成功したか……」

まさかこんな装備を作っているなんてね…。

リヴァイヴⅡ専用の水中戦特化パッケージ『ダイバーマリン』。

ブースターを全て水流エンジンへと換装し、脚部も分厚い装甲になり、その内部にはバラストタンクやハイドロジェットを増設。しかも、装備すると同時に機体全体に一瞬で防水用のシーリングが施される。

さらに、腕部はズゴックの腕部パーツに似た物に変わっている。

勿論、あの特徴的なクローと水中で使用可能な特殊なビーム砲もついている。

そして、私の口には小型のボンベが銜えられていて、酸素供給も問題無し。

(本来は宇宙での活動を前提としているだけはある…。水中でも問題はないようだ。シールドバリアーのお蔭で動きがそこまで阻害されない)

本来なら戦場での直接換装なんて不可能に近いが、このリヴァイヴにはいつの間にか空中換装が出来るシステムが入っていた。

これもきつと束さんの仕業に違いない。

こんなシステムを作ってしまうなんて……どこまでチートなんですか？

福音を見ると、私の予想通り水中では思うように動けないようで、予想外の事態にどうするか考えているように見えた。

(すぐに攻撃に移らない所を見ると、やっぱり水中では典型的な光学兵器である【銀の鐘】は使えないみたいだな)

でも、福音だってすぐに水上に戻ろうとする筈。

アイツをここから逃がしたら、本当に勝ち目が無くなる！

ここで勝負を決めないと！

装備換装したお蔭かSEも少しだけ回復したし、やるなら今しかない！

(いくぞー！)

本格的に動き出す前に一気に突撃し、クローで斬りつける！

(よしー！)

さつきまでの動きが嘘のように鈍くなってる！

活動領域を限定して性能を上げた故の弊害ってヤツか！

福音をその場に釘付けにする為に、何回も周囲を周りながらクローで攻撃を繰り返す！

離れた時はビーム砲で牽制をし続けて、その場から逃がさないようにする。

こうなったら私の独壇場で、一気に牽制逆転した。

どれぐらいかは知らないけど、着実にダメージは蓄積している筈！

塵も積もればなんとやら、油断せずに攻撃を続ける！

(な……なんだ……?)

福音の手が淡く光っている……?

あれは一体……?

(いや……今は余計な事を考えるな！攻撃だけに集中しろ！私！)

だが、その福音の行動を疑わなかった事が……私の命運を分けた。

(もう碌に動かなくなってきた……。もしかして、もうS Eが無くなりかけているの?)

全力で福音に突貫し、クローを装甲に突き立ててからのゼロ距離のビーム砲！

(これでトドメだ!!……え?)

攻撃を仕掛けたと同時に、自分のお腹に違和感を感じた。

(これって……まさか……!)

福音の手が手刀のようになって、私のお腹を突き刺している……!

この光は……本来なら銀の鐘に使うはずの余剰エネルギーを手甲部に一点集中で集めて……威力と貫通力を高めたのか……!

こんな事を即席で思いつくなんて……!

「ぐほあ……!」

しまった……!思わずボンベを口から離してしまった……!

息が……出来ない……!

私の動きが止まった直後、福音は待つてましたと言わんばかりに海上に浮かびあがって、もう片方の手で私の首を絞めやがった……!

「ぐ……あ……!」

さつきから動こうとしなかったのは……攻撃のタイミングを計ると同時に……少しでも自分のエネルギーを節約する為だったのか

……！

暴走 I S の癖に……狡猾すぎるだろ……！

お腹から……血が止まらない……。

吐血もして……。

「なっ………！」

嘘………でしょ………？

「この状態で……ソレを使うか………！」

確かに福音の主武装である銀の鐘は両手が塞がっていても使えるけど……。

白銀に輝く機械の翼に眩い光が収束していく。

「………すまない」

次の瞬間、私の全身を凄まじいまでの衝撃とダメージが襲い、リヴァイヴⅡが文字通りズタボロにされる。

その攻撃が5秒ほど続いた後、飽きたかのように私の体を放り投げた。

(後は………お願い………)

落下していく感覚を感じながら、強烈な眠気と共に意識が深い闇へと落ちていった。

・
・
・
・
・
・
・

旅館内にある風花の間。

そこでは千冬と真耶、本音が佳織達の事を案じながら吉報を待っていた。

先程まで束も一緒にいたが、数分前に退出してどこかに行っ

まった。

「え……？通信？プライベート・チャンネル!?」

「何!?誰からだ!」

「これは……ボーデヴィツヒさんからです!」

「オーブンチャンネルにして通信を繋げ!」

「了解です!」

真耶が機器を操作し、若干ノイズ交じりではあったが声が聞こえてきた。

『こちらラウラ……聞こえますか!?応答願います!』

「聞こえるぞ!一体どうした!」

『きよ……教官!』

「私の事は織斑先生と……まあいい。今は許す。それで、どうした?福音は倒したのか?」

『それが……』

いつもはハッキリと言うラウラの歯切れが悪い事に若干の違和感を感じる千冬。

「本当にどうした?」

『……福音との戦闘中に所属不明の密漁船が戦闘海域に侵入。福音がそれを狙ったため、私達は船の護衛をしながら旅館に向けて後退中です……』

「な……なんだと!?密漁船!」

「そんな……あの周辺はちゃんと封鎖している筈なのに!」

持つてきている訓練機を総動員しての包囲網。

どこにも侵入する場所など無い筈だった。

「ま……まあいい……。それについては後から船員に話を聞けばいいだけだ」

「そうですね……。それよりも今は……」

「かおりんは!?かおりんは無事なの!」

『か……佳織は……』

本音の泣きそうな叫び声に対し、ラウラの音量が小さくなる。

「おい……なんで何も言わない?全員で後退したんじゃないのか?」

『…………原因は不明ですが…福音の最優先攻撃目標に佳織が設定されており……私達を逃がすために一人で残って……』

「「なっ……!?」「」

佳織がたった一人で殿を務めた。

余りにも衝撃的な事実にも、三人共が言葉を失った。

『自分も一緒に逃げれば旅館に福音を引きつけてしまおうと言って……それで……』

「か…佳織……」

「なんで福音が仲森さんを……」

「あ……ああ……あ……」

思わず両手で口を覆って目を見開く本音。

そして、絶句してしまふ千冬と真耶。

『もうすぐそちらに到着します……。船の受け入れの準備をお願いします……』

「りよ…了解しました……。人員をそちらに回すように手配します……」

『ありがとうございます……』

ラウラとの通信が切れた。

途端に重苦しい空気が風花の間を覆い尽くした。

「モニターは……?」

「通信状態が悪くて………あ!」

「今度はなんだ!」

「モニターが回復しました!正面に出します!」

真耶の叫びと共に正面モニターに戦闘海域の光景が映し出された。

「あ……あれは!」

そこには、佳織が福音と共に海底に潜り込もうとしている瞬間が映った。

「佳織の奴……考えたな。光学兵器主体の福音は、海中ではその力を十全に発揮出来ない」

「で……でも、仲森さんのリヴァイヴⅡも不利になるんじゃない……」

「それなら……だいじょーぶだと思えます……」

「布仏さん？」

「それはどういう意味だ？」

涙をこらえながらも二人を見る本音。

その顔からは今にも泣きだしたいのに、頑張って気丈に振る舞っているのが見え見えだった。

だが、二人は敢えて何も言わない。

それこそが今は正しいと思ったから。

「えつと……送られてきたリヴァイヴⅡのパッケージの中には水中戦専用の特化している物もあって……篠ノ之博士が密かにインストールしているのを見たから……」

「あいつめ……」

束の先を読んだ行動に、苦笑いを隠せない千冬だった。

「流石に海中の様子はモニタリングは出来ないか……」

「ですね……。一応、反応は確認出来るんですけど……」

「リヴァイヴⅡの残りSEはどれくらいだ？」

「先程までは44しかありませんでしたけど、換装に成功したのか、若干ではありますけど回復してます」

「そうか……」

それだけしか言わなかったが、千冬の顔は安堵に包まれている。

「けど、戦闘中の装備換装だなんて……可能なんですか？」

「普通は不可能だろうな。だが、あの束の事だ。その不可能を可能にするプログラムでもインストールしているかもしれない」

「あはは……」

普通なら一笑に伏す所だが、束ならば本当にやりかねないので、一概に否定できない真耶だった。

「かおりん……」

「大丈夫だ」

「織斑先生……？」

「アイツが……佳織が今まで一度でも私達の期待を裏切った事があったか？」

今までに見せた事が無い慈愛に満ちた顔で本音を優しく撫で

る千冬。

目をパチクリとさせながら彼女を見上げる本音。

「す…凄いです…！レーザーだけでしか分かりませんが、凄い動きで福音を攻撃してます！これならもしかして…！」

レーザー上で佳織の反応を示す点が福音を示す点と何回も交差し、追いつめていく様子が分かる。

だが…突然、真耶の表情が凍りつく。

「え……………」

「なんだ？もう倒したのか？」

「な…仲森さんの……………」

「山田先生……………」

様子がおかしい真耶に、二人とも怪訝な顔になる。

「仲森さんのバイタルが急速に低下していきます！」

「なんだって!？」

「かおりんが!？」

モニターには佳織の体をその手で貫いた福音が海中から浮き上がってきた。

「佳織!!！」

「かおりん!!!」

「佳織さん!!!」

三人の叫びなど聞こえる筈も無く、モニターの向こうでは福音の翼が眩く光り輝き……………そして……………

「や……………やめ……………」

ほぼゼロ距離に等しい場所で全ての光弾が佳織の体に降り注いだ。

「やめろおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

光で福音と佳織の姿が視認出来なくなる程にレーザーが放たれ、それが止んだ時には……………

「い……………い……………」

佳織の体と、その体に纏われていたリヴァイヴⅡが無残な姿を晒していた。

特にリヴァイヴⅡは原型が分からなくなる程に破壊されている。

「いやあああああああああああああああああああつ!!!!!!」

本音の叫びと共に、モニターに映っている福音が変わり果てた姿になった佳織を海に投げ捨てた。

その時：他の小型のモニターに佳織以外の専用機持ち達が浜辺に到着した姿が映し出された。

第48話 リベンジと先人

花月荘にある物置部屋。

そこはIS学園から持って来た機器が設置されていて、ちょっとした格納庫のようになっていた。

そこに風花の間からいなくなった筈の束がいた。

彼女はずつと自分が持って来た機器と睨めっこをしていて、モニターをずつと見続けている。

「かおりん……私は……」

いつも余裕に満ちている束には珍しく、この顔は焦燥に駆られている。

佳織が福音に撃墜されたことを知って、心中穏やかではないのだろう。

「……クーちゃん。かおりんの位置は分かる？」

『は……はい。佳織様の場所は撃墜された場所から少しずつ離れつつあります』

モニターの端の方には小さな画面が表示されていて、そこには束のラボにて留守番をしているクロエが映っていた。

『恐らく、潮流に流されているのかと思われます』

『そう……』

『少し調べたのですが、この時期の花月荘の周辺の海の沖合はある時間帯のみ潮流が激しくなる事があるようです』

淡々と報告するクロエであったが、彼女も少なからず焦っていた。

束が想いを寄せる少女である佳織が撃墜された。

彼女自身も佳織に興味を持っていた為、それなりにショックは受けていたのだ。

「バイタルサインは？」

『非常に微弱ではありますが、まだ息はあるようです……』

「ISには操縦者の生命維持を最低限保護する機能がある。それが動いている内はまだ辛うじて大丈夫だけど……」

『あの攻撃で機体は確実にダメージレベルEはいつています。機能停

止するのは時間の問題と思われれます。それに……』

「下手に時間を掛ければ、潮流に流されてどこに行くか分からない…。そうだったら……」

束の表情が急に暗くなる。

「ああ…ダメダメ！こんな束さんらしくない！かおりんも喜ばないよー！」

『束様……？』

自分の事を鼓舞するように頬を叩いて気合を入れ直す。

お蔭で頬は真っ赤に腫れていたが、束の表情は元に戻っていた。

「クーちゃん！かおりんの位置を捕捉しながらバイタルを見つけて！」

『束様はどうするのですか？』

「私は……」

ふと海の方を見る。

そこには密漁船と一緒に戻ってきた一夏と箒を初めとした専用機持ち達がいた。

「箒ちゃん達のISの修理と補給をする」

『……分かりました。佳織様の事はお任せください』

「お願いね」

『はい。それでは……』

クロエとの通信が切れた。

それと同時に立ち上がり、さっきまでいた風花の間に向けて歩き出した。

「それにしても……なんで密漁船なんて現れたの……？まるでいきなりその場に出現したように見えたし……」

歩きながら思案に耽る束。

いつもの調子を取り戻した彼女ならではの行動である。

「そもそも、ISはそう簡単に暴走なんてしない筈…。あり得るとすれば、単純な整備不良…？でも、軍用のISに限って整備を怠るなんてことは考えにくい…。だとすれば……」

ハッと顔を上げて空を見上げる。

「え……………」

静寂に包まれた部屋に箒の小さな声が驚く程響いた。

「今……………なんて……………」

「お…お前達……………」

「皆さん……………」

ここにきてやっと一夏達に気が付いた千冬と真耶。

だが、その顔はお世辞にも無事の帰還を喜んでいるような表情ではなかった。

「今なんて言ったんですか!? 山田先生!」

「そ…それは……………」

真つ先に奥まで踏み込んだ鈴の剣幕にビクツとなる真耶。

「……………教えてください。私達が去ってから何があったんですか……………」

「織斑先生……………」

正常な判断力を失った真耶は千冬に視線を送る。

それに千冬は無言で頷いた。

「……………仲森さんは……………たった一人で福音と戦って……………途中から海中に福音を引きずり込んで……………なんとか優位に立っていたんですが……………」

次に真耶の口から言われた言葉に、少女達は打ちのめされた。

「福音による反撃で腹部を貫かれて……………その直後に至近距離で全ての攻撃を受けて……………撃墜…されました……………」

「……………!!……………」

一夏達の心臓が一気に跳ね上がる。

「嘘……………ですよね……………? 佳織が落とされた……………つて……………」

「そ…そうですね……………そんな事が……………」

目の前の事実を正しく認識出来ない面々は、本音と同じような目で眩く。

だが、その言葉を千冬が冷徹に言い放つ。

「事実だ……………」

「そ……………んな……………」

箒が思わずその場に座り込む。

ポタ……と、何かの水音が聞こえた。

ふと音のした方を向くと、千冬の拳から血が滲んでいた。

冷静に見えても、千冬も憤りを隠せないでいるのだ。

その怒りの対象は福音でもなければ一夏達でもない。

こんな時に共に戦う事すら出来なかった自分自身に対して怒っていた。

現場指揮官と言う立場上、千冬は容易に動く事を許されない。

前回の無人機の時に出撃した際も、後で学園上層部に叱咤されたのだ。

その程度で怯む程軟弱ではないが、それでも容易に喧嘩を売っていない相手ではないものまた事実。

今の千冬はまさに、IS学園の教師と言う立場と一人の人間としての気持ちに板挟みになっていた。

「なに落ち込んでるの!!」

その時だった。

東が仁王立ちで入口に立っていた。

「た……東……?」

「姉さん……?」

悲壮感の漂う室内に入り、全員を睨み付ける。

「姉さん……佳織が……佳織が……」

「うん……知ってるよ。かおりんが撃墜されたんだよね?」

「お前……」

「でも！撃墜されたからと言って、まだ死んだと決まった訳じゃない！」

東のまさかの前向き発言に全員が驚いた。

「本当はね……私も凄く悲しいよ。こんな事を言ってるけど、少しでも気を抜くと今にも泣きそうだし……」

「東さん……」

「でも……ここで落ち込んで！悲しんで！そんな事をしてかおりんが本当に喜ぶと思うの!?泣けばかおりんが戻ってくるの!?そうじゃないでしょー!」

その場にいる全員を見渡して叱咤激励する束。

「私は絶対に諦めないよ。かおりんはまだ大丈夫。皆も知ってるとは思うけど、ISには操縦者の生命維持をする機能がある。あの損傷だとタイムリミットはあると思うけど、それでもまだ助かる見込みはある！」

「……その時間はどれぐらいだ？」

「リヴァイヴⅡのコアが無事なら……約30分が限界だと思う」

「30分……」

長いようで短い時間。

それが佳織の命を繋ぐ時間だった。

一通り説明してから、束は跪いて本音の事を優しく抱きしめた。

「え……？」

「大丈夫。かおりんは無事に帰ってくる。私が保証するよ」

「篠ノ之博士……」

「私の事は束でいいよ」

「束……博士……」

本音の事を落ち着かせるためにそつと頭を撫でる。

人肌の温もりに包まれて安心したのか、本音は静かに目を瞑った。

「布仏……。山田先生、彼女を……」

「あ……はい」

真耶は束から本音を受け取って、そのままどこかで休ませるために部屋を後にした。

「それじゃあ皆……IS貸して」

「ア……ISを？」

「そう。……助けに行くんでしょ？」

「……当然!!」

束の言葉で専用機持ち達の目は完全に生氣を取り戻していた。

見る人が見れば、彼女達の瞳には炎が見えただろう。

「何をやる気だ？」

「皆のISはさっきの戦闘で少なからず損傷してる。そんな状態じゃ仮に行ってもかおりんの二の舞になる事は明白。だったら、少しでも

可能性を上げるために多少の時間のロスは覚悟の上で補給と修復をするの」

「し…しかし、7機ものISの修復と補給をそんな短時間で出来るのか？」

「出来る出来ないじゃない！やるの！！」

「！！」

どこまでも束のやる気に満ちた目に、千冬も重い腰を上げた。

「ふっ…まさか、お前に励まされる時が来るとはな…」

「ほんと…私の事を普段からどう思っているのかじつくりと聞きたいよ…」

半ば呆れながらも余裕を崩さない束。

「これこそが彼女の本来の姿である。」

「私の全力で速攻で仕上げるから！箒ちゃん達は少しでも休んでて！」

「今はそうしろ。本来なら許可できんが、ここまで発破をかけられて黙っているなど、私の性に合わん」

「ちーちゃん…」

千冬も千冬でその目にやる気が戻っている。

それは誰もが知っている、嘗て世界の頂点に二度も君臨した世界王者の目だった。

「全ての責任は私が取る。好きにやれ！」

「合点…この束さんにまっかせなさい！」

ドンツ！と自分の胸を叩いて束は早足で部屋を出る。

「お前達は束による機体の修復と補給が終了し次第、すぐにでも再出撃して貰う。その際は仲m…佳織の搜索と救助を最優先に行え。もしも福音と戦闘になった場合は交戦は最低限にしろ。今は佳織の事が最優先だ」

「「「「了解！」「」」」」」

こうして、佳織の救出と福音へのリベンジに向けた準備が始まった。

・
・
・
・
・
・

「大佐。仲森佳織が福音によつて撃墜されたようです」
「ふむ……」

大佐と呼ばれた少女が注ぎ直した茶を飲みながら外を見る。

「ふん……所詮は一般人の女子高生。例え『同じ』とは言え、大佐とは経験などが雲泥の差……」

「果たしてそうかな？」

「ど……どういう事でしょうか……？」

紫の髪の少女が困惑した顔を見せる。

「彼女はこれまでもずっと様々な苦難を乗り越えてきた」

「だから今回も……と？そんなご都合主義が……」

「あり得ないと？」

「お言葉ですが……はい」

「お前の言葉は理解出来るがな……」

湯呑の中に残った茶を一気に飲み干す。

「そもそも、人間の誕生自体が奇跡のようなものだ。分かるか？人間とは常に『奇跡』と共にある。いや……」

目を細めて紫の髪の子を見据える。

「人間だけが『奇跡』を起こす事が許されている……」

「奇跡……」

「故に私は信じているのだよ。彼女は……佳織は必ず再び立ち上がり、必ずや福音を撃破すると」

まるで佳織の事を案じているような発言だが、その目には何も映っていない。

何処までも空虚で、自意識を感じさせない顔だった。
「今頃君は……どんな夢を見ているのかな？佳織……」

・
・
・
・
・
・

その頃。

福音によつて海に投げられた佳織はと言うと……

「……………あれ？」

周囲が全て真っ白な、謎の空間にポツンと立っていた。

「()……………どこ？」

上を見ても何も無い。

下を見ても何も無い。

どこまで行つても何も無い。

かと言つて、浮遊感があるわけでもなく、少なくとも佳織はその場に立っていた。

「そう言えば私……確か福音にやられて……それで……」

今の佳織は着なれた赤いISスーツ姿で、肝心のISは装備していない。

かと言つて待機形態になつて首からぶら下がっているわけでもない。

「リ……リヴァイヴが無い？どこに……」

思わず周囲をキョロキョロとするが、どこにも無い。

「つて言うか、ISもそうだけど……なんで怪我が無いの!?あんな至近距離でレーザーの雨を食らったんだよ!?普通なら確実にあの世行き……。仮に死んでなくても致命傷は避けられない筈なのに……」

佳織の体には傷一つついていない。

実に立派な健康体だった。

「も……もしかして……ここがああの世か!? そういや転生した時も似たような場所に来た記憶が……」

なんて言っても、すぐに有無を言わず落とされた為、記憶はかなり曖昧だが。

「そっか……私……死んじゃったのか……」

健闘空しく……か、どうかは分からないが、福音との戦闘でこうなったのは事実だった。

「その割には随分と達観しているのだな、君は」

「へ?」

いきなり別の声が空間に響く。

思わず反応して声の方を見る。

コツコツと足音を鳴らしながら現れたのは……

「嘘……でしょ……?」

赤い軍服を着た金髪の男だった。

「シャア……アズナブル……」

第49話 私だけの赤い彗星

「……行きましたね」

「ああ……行つたな……」

水平線の向こうに飛んでいく7つの機影を見ながら、千冬と真耶は静かに呟く。

その足元には疲れ果てた束が寝転がっていた。

「ふえ〜……久し振りに本気を出しちやつたよ〜……」

「ご苦労だったな。今はゆっくりと休め」

「言われなくてもそうする〜……」

苦笑いをしながら返事をする束だったが、その体はピクリとも動かない。

指一本動かす気力も無い程に疲れているのだ。

「にしても、まさか本当に僅か7分で全ての機体の整備と補給を完了してしまうとはな」

「しかも、いくつかの機体にはそれぞれの国から送られてきたパツケージに換装してましたし……」

「それぐらいはしないと、アレの相手は厳しいでしょう」

束自身も暴走した福音の危険さはよく理解していた。

今まで常勝をしてきた佳織が倒された。

それが判明した時点で彼女の中での福音の危険度は急上昇している。

「なんだか……悔しいですね……」

「真耶……?」

「私達は生徒達を守り導く立場にある教師なのに、こうしてあの子達の背中を見送る事しか出来ない……。それが猛烈に悔しくて……悲しくて……」

真耶の顔はいつにも増して沈んでいる。

人並み以上に心優しい彼女は、生徒達が戦場に向かうこと自体を悲しく思っているのだ。

「……それは私も同じだ」

「先輩……？」

「ブリュンヒルデだ世界最強などと言われていても、私自身はどこにでもいる無力で愚かな人間の一人にすぎない……。酒の力を借りなければ、己の心の中にある不安一つ払拭出来ない……。な」

「ちーちゃん……」

「家族を……想い人を守りたい願って求めた『力』だったが……こんな時に動けなければ全く意味が無い……。その事が……。私は悔しい……。！」

千冬の目尻に涙が溜まる。

「……二人の気持ちは痛い程分かるけどさ……」

勢いをつけて束が起き上がって、二人を見据える。

「今はあの子達を信じるしかないんじゃない？」

「……そうだな」

袖で涙を拭い、いつもの表情に戻る千冬。

強がっているのだろうが、せめて全てが終わるまでは『教師』でいようと言う決意の表れなのかもしれない。

「私の自慢の妹が行ったんだからな」

「私の大事な妹もね？」

「あと、私達の大切な教え子も……。ですよ」

三人は再び一夏達が飛び去っていった水平線を見つめる。

「福音に勝てとか、そんな事は言わない。皆揃って佳織と一緒に無事に帰って来てくれ……。今の私が願うとすれば、それだけだ……」

千冬が言った言葉が風に乗って響いた。

それはこの場にいる他の二人の気持ちを代弁した言葉でもあった。

・
・
・
・
・
・
・

太陽光を眩しく反射する大海原を7機のISが飛翔する。

彼女達の顔はいずれも焦りと緊張に染まっていた。

「姉さんが頑張ってくれたお蔭で、万全の状態で佳織の捜索が出来るが……」

「それでも時間をロスした事は事実。一刻も早く行かないと佳織さんが……」

箒と簪の顔に汗が流れる。

「ラウラさん。福音と交戦した場所まであとどれくらいですか?」

「この調子でいけば数分で辿り着くはずだ」

そう答えるラウラのIS『シユヴァルツツエア・レーゲン』は、今までとは違った姿をしていた。

80口径レールカノン『ブリッツ』を二門を左右の肩に装着し、遠距離からの攻撃に備えた四枚の物理シールド機体の左右と正面に構えた砲戦パッケージ『パンツァー・カノーニア』に換装していた。

セシリアは前回の出撃と同じ強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備している。

同じ装備で出撃したのは、彼女なりのリベンジに対する大きな決意があるのだろう。

更に、今回は大型BTレーザーライフル『スターダスト・シューター』も装備している。

「現場に着いたら、まずは佳織の探索を最優先で行わないとね」

「そうね…。本当は福音の奴にリベンジかましたいけど、佳織の命には代えられないし……」

シャルロットのリヴァイヴ・カスタムIIも今回は別の装備で来ている。

防御用パッケージ『ガーデン・カーテン』。

物理シールドとエネルギーシールドをそれぞれに2枚展開し、あらゆる攻撃から操縦者を守る。

圧倒的火力を誇る福音には効果的な装備だった。

そして、鈴もまた別の装備で出撃している。

甲龍の最大武装である衝撃砲の機能増加パッケージ『崩山』。背部に二つの砲口が増設され、そこから合計で4門の衝撃砲を発射可能。

その際、衝撃砲は無色透明ではなく炎を纏う。

衝撃砲の最大の利点である奇襲は出来なくなるが、それを補って余りある攻撃力の獲得に成功している。

「リーダーではもうそろそろの筈……」

「み…見えた!」

簪が指差す場所には、福音がまるで胎児のように丸くなって膝を抱えていて、その体を二対の翼で覆い隠している。

「何よあれ…：最優先攻撃目標を倒したから、自分は休みますって?」

「一見すると、確かに休眠状態になっているように見えるな…」

福音の姿が見えた所で全員がストップする。

「幸いな事に福音はまだ私達に気が付いていないようだ。この隙に佳織の搜索をするぞ」

ラウラの言葉に全員が無言で頷く。

皆がその場から散開して搜索を開始しようとすると、ラウラのISにいきなり通信が入った。

「…?…なんだ?」

「どうしたの?」

「いや…：通信が…：」

最初はノイズ交じりだったが、次第にクリアになっていく。

『あー…：あー…：聞こえますか?』

「何者だ?」

『私は篠ノ之束博士の助手を務めている者です』

「博士の助手だと…：?」

『はい。今は簡単に信用出来ないかもしれませんが』

確かにその通りである。

唯でさえ今は緊急を要する状況なのに、いきなり通信してきた相手をどうやって信用しろと言うのか。

『ですが、私も仲森佳織さんの安否を案じています。それだけは信じてください』

「……………分かった」

背に腹は代えられない。

今は利用できるものは何でも利用しなければならぬ。

『この海域のこの時期、この時間帯は潮流が激しくなっています。佳織さんは墜落地点から流されている可能性が非常に高いと思われます』

「くっ……………」

いくら気温が高くなってきているとはいえ、まだ海水の温度はかなり冷たい。

そんな中に長時間いれば体温はみるうちに低下していく。

そうなれば、助かる見込みがもつと低くなってしまふ。

『反応が低くなっていて、こちらでも詳しい場所は特定できないんです。ですから……………』

「分かっている。出来るだけ広範囲に搜索する事にする」

『お願いします』

ラウラは謎の通信の主から聞いた事を皆に説明した。

「それ……………大丈夫なの？」

「私もそう思うがな……………」

「……………姉さんの助手なら大丈夫……………だと思ふ」

「どうして？」

「姉さんは他人を極端なまでに拒絶する。そんな人が助手を持つと言ふ事は、それだけ信用されているって事だ」

「で……………でも、もしかしたら助手だって嘘をついている可能性も……………」

「そんな人物ならば姉さんが速攻で片付けている」

「だよね……………」

東の人柄をよく知っている一夏と箒だからこそ言葉だった。

「とにかく、今は当初の予定よりもより搜索範囲を広くするしかない。いいな？」

「……………了解……………」

改めて搜索を開始しようとした……その瞬間だった。

「La……」

「……!?この機械音は……!」

福音がゆっくりと翼を広げ、態勢を整えていく。

「やばい……こちらに気が付かれた!」

「ど……どうするの!」

「回避に専念しながら搜索をするしか……」

ラウラが動き出そうとした時、一夏と箒と鈴が全員の前に出た。

「お……お前達!」

「一体何をする気!」

「決まってるじゃない!こいつを足止めするのよ!」

「えっ!」

三人がそれぞれに武器を構えて福音と対峙する。

「私達が福音の相手をする!だからお前達は!」

「佳織の事を探して!」

「で……ですけど!それでは皆さんが!」

「そんなの気にしてる場合じゃないでしょ!」

鈴の叫びに全員がハツとする。

「アタシ達がここに来たのは何の為!?海に沈んでいる佳織を見つけて旅館に連れて帰る為でしょうが!目的を見失うんじゃないわよ!」

「……そう……だな……」

苦渋の選択。

だが、だからこそ選ばなければいけない。

「ここは一夏達に任せる……頼んだぞ!」

「けど、無理は禁物ですわよ!」

「ここで三人も倒されたら、それこそ意味が無いんだからね!」

「すぐに見つけるから……!」

四人は東西南北に分かれて散開した。

「さくて……福音ちゃん……」

「ここから先は……」

「アタシ達を通さないから、覚悟しなさい!」

・
・
・
・
・
・

「な……なんで……?」

私の目の前にいきなり現れたのは、金髪オールバックのCCA使用のシャア・アズナブルだった。

原作じゃ生死不明だつて言われているこの人がどうして……?

「どうした?」

「あ……い……いえ……」

突然の事でどう反応していいか分からない。

まずは何を言えばいいのか……。

「訳あって、君の事は見させてもらっていたよ」

「見られてた……」

それってつまり……。

「う……うう……」

「な……なんで泣く?」

「私……貴方の名前を貶めて……勝手に赤い彗星なんて言われて……」

絶対に最低な奴つて思われてるよ……。

私みたいな面白味も無い女に真似されて……怒ってるに違いない……。

「そんな事は無い」

「ふえ……?」

頭を撫でられた……?

「君は私以上に立派な『赤い彗星』だったと思うよ」

「で……でも……私は……」

「君の能力が後天的に付加されたものは私も知っている」

「と言う事は……私が転生者だって事も知ってるのかな……？」

「しかし、君は私のような『過ち』を起こさなかった」

「それって……アクシズ落としての事を言ってる……？」

「それだけではないが……」

「あ……苦笑いした。」

「この人もこんな顔をするんだ……」

「己のした事に後悔は無い。例えそれがどんな結果を生んだとしてもな……」

「……………」

「君が私を模した能力を与えられたからと言って、私と同じ道を歩み、同じ思想を抱く必要はない。君は君だけの『赤い彗星』になればいい」

「私だけの赤い彗星……」

「少なくとも、あの世界には赤い彗星は君しかいないのだからな」

「赤い彗星……か。」

「今まではその名前の重圧に辟易してたけど……」。

「なれるでしょうか……私も『赤い彗星』の異名を背負うに相応しい人間に……」

「私から見れば、もう既になっていると思うがな……」

「え……？」

「もう……なってる？」

「仲森佳織……君ならばきつと『彼』のようにはならないと信じているよ」

「彼……？」

「私の死後……私と同じ顔、同じ声で自らを『器』と言った男だ」

「……………」

「あの人の事か……！」

「君がいる世界も大変だが、だからと言って『あの男』のように『器』になる必要はない。君は君の人生を全うする事だけを考えろ」

「……………はい！」

私の人生を全うしろ……か。
いいさ……やってやろうじゃん！

「お話は終わりましたか？」

「来たか」

「ふにやつ!?!」

こ……今度は何!?!

またいきなり誰かの気配が出て来た!?!

「初めまして」

現れたのは、ピンクの髪のパフパフヘアの真っ白なワンピースを着た女の子だった。

「え……えくつと……?」

「私は貴女を転生させた神の後任を任された神です」

「こ……後任？」

あいつ……クビにでもなったの？

つーか、そもそも神って職業扱いなの？

「あの人は自分の権限と能力を使って好き勝手にし過ぎました。よつて、上層部の決定により左遷されました」

「左遷って……一体何処に?」

「神としての能力を全て剥奪して、更に身包み全てを剥いだ後にラクーンシティのど真ん中に落としました」

「鬼の所業だ

!!!

確かにアイツはムカつくし最低の変態野郎だけど、普通そこまでする!?!

「ラクーンシティとはなんだ?」

「簡単に説明すると……とある馬鹿な製薬会社が開発したウイルスによつてゾンビ化した人達が徘徊するこの世の地獄……ですかね?」

「それはまた……壮絶だな……」

大佐殿にまで呆れられた。

「ですが、彼が世界に与えた影響はまだ残っています」

「影響……」

やつぱ、色々とやってたんだな……アイツ。

「ですが、そんな彼でも予想しなかった存在が図らずも誕生してしまっただけです。」

「それは……？」

「私の中にある『闇』を具現化した『男』の現身……」

「大佐……？」

まさか……その現身……あの……

「佳織さん。貴女があの世界の『シヤア・アズナブル』であるように、

『彼女』は元となった『彼』と似通った出生で誕生しました」

私がシヤアで、それでその人が……

「気を付けてください。佳織さんはもう『彼女』に会っている」

「は？」

会っている……？

私の脳裏に一瞬だけ『ある人物』の顔が過った。

「まさか……」

あの子が……？

「でも……」

そんな事ってあり得るのかな……？

単純に顔が似ていたって可能性も……。

「ところで、ここってなんですか？どこもかしこも真っ白で……」

「ここは意識と無意識の狭間です」

「……………なんですか？」

なんだ？その『精神と時の部屋』みたいな響きの言葉は？

「分かりやすく言うと、あの世一步手前の場所です」

「……私って死んだんじゃないんですか？」

「死にかけてはいますね。貴女のお蔭で辛うじて生きてる感じ

ですね」

「所謂、仮死状態と言う訳だな」

「仮死状態とな」

そういや、ISには操縦者の生命活動を維持する機能があるって勉強

強したけど……。

それのお蔭かな？

「二次創作だと、これってISコアの世界だったりしますけど……」
「これは現実ですからね」

「この状況も十分な位に常識離れしていると思うが？私がいる時点で」

「それは言いつこなしです」

女神がニュータイプに論破されてる。

「じゃあ、専用機の第二形態セカンド・シフト移行も……？」

「勿論ありません」

「デスヨネー」

流星にそんな都合主義は無いから。

「そもそも、実力とシンクロ率は充分に条件は満たしますけど、貴女自身の経験値が決定的に不足してるんです。大体、まだ半年も経ってないのにパワーアップとか有り得ないでしょう？」

「ハイ……ソーデスネ……」

そのセリフは是非とも原作の一夏に向けて言ってほしい。

「さつきも言いましたけど、あの世界にはまだ前任者の残した改変の影響が色濃く残っています。貴女を中心とした事なので、大抵はさほど気にする必要は無いものが多いですが、中には……」

「決して無視出来ないやつもある……ですか？」

「その通りです。その代表例が今まさに遭遇している福音です」

「え？あれは原作でも普通に……」

「貴女が戦った福音は原作以上に強化されています。原作通りの強さなら、貴女が水中戦に持ち込んだ時点で勝負はついてるんですよ」

「自分でもやり過ぎなくらいにボコボコにしたつもりだったけど、それが理由だったのか……」

「ですから、こちらも緊急処置として少しだけ世界に介入する事になりました」

「いいんですか？」

「本来なら禁忌事項です。けど、もうそんな事を言ってる場合じゃないんです」

「私の方からも少しだけ協力させて貰った」

「大佐もですか？」

「ああ。いづれ分かるだろう」

「楽しみなような、そうでないような。」

「あ!？」

「ど…どうしました？」

「ヤバいですね…。佳織さんの御友人達が福音と戦ってます」

「み…皆が!？」

「しれっとスルーしたけど、なんか今…妙なルビがついてなかった？」

「どうやら、海に落ちた佳織さんの搜索をしようとした時に福音と交戦する羽目になったみたいですね」

「そ…そんな…」

「ど…どうしよう…。私のせいで皆が…!」

「もう少し話すべき事があるんですが、そんな事を言ってる状況じゃないですね」

「どうする気だ？」

「佳織さんを全回復…はちよつと難しいですけど、ある程度の応急処置はしておきますよ」

「応急処置ってどれぐらいだろう…」

「それと、機体の方はエネルギーだけ半分回復させておきますね」

「半分なんだ…」

「海に落ちた全壊寸前の機体のエネルギーが戻って来た時には全回復…なんて、どんな言い訳をする気です？」

「御尤もです…」

「半分でも凄いですね…」

「この子って神なのに凄く現実主義者だな…」

「更にもう一つサービスしますか」

「それは？」

「貴女の専用機『ラファール・リヴァイヴⅡ』のパッケージをおまけで差し上げます」

「パッケージ…ですか？」

「はい。それを活かせるかは貴女次第ですけどね」

どんな装備なんだろう？

ザクⅡにズゴックと来て、次に来るとしたら……

「それじゃあ、そろそろお送りします」

「わ…分かりました」

考えているうちに私の体が光に包まれながら透明になっていく。

「私からも少し饞別を加えておいた。よかったら使ってくれ」

「ありがとうございます」

また福音と戦うと思うと少し怖いけど……今ならやれる気がする。

だって、私は一人じゃないから。

一夏達だけじゃない。私の事を応援してくれる偉大な先人もいるのだから。

「ここから見させてもらおうか。『赤い彗星』仲森佳織の実力とやらを」

「存分に見てください。私は、私にしかねない『赤い彗星』になってみせますから！」

「頑張ってくれ……佳織。君ならばきつと私や『彼』以上の『赤い彗星』になれる筈だ」

この場から消えゆく中、私は見よう見真似でシャア大佐に向けて敬礼をした。

「君の健闘を祈る」

すると、彼も敬礼を返してくれた。

「……行ってきますー！」

最後に大きな光になって、私は光の粒子になって消えた。

「やっぱり…ザクⅡ、ズゴックと来たら……ゲルググですよね」

・
・
・
・
・
・
・

「!?」

こ……ここは海の中!? 寒っ!

(こ……これは……!)

目の前に表示された機体データが、なんかさつきまでとは違っていた。

水中用換装パーツが解除されていて、その代わりに別の換装パーツが装備されている。

肩部装甲が大型化していて、腕部に少しだけ増加装甲が追加されている。

そして、拡張領域内にはビーム・ナギナタと葉っぱのような形をしたシールドが。

(成る程……ザクⅡにズゴック……今度はゲルググか!)

えくと……名称は……

(近接戦特化型パッケージ『ムラサメ』……ね)

ん? これって……

よく見ると、拡張領域内にどこかで見た事のあるような武装があった。

(これは……使えるかもしれない)

こうなったら、使える物はなんでも使おう。

(まだ体は痛いし、機体もよく見たら破損個所だらけだ。けど!)

それは決して諦める理由にはならない!

(行こう……リヴァイヴⅡ。これが最後の出撃だ)

第50話 待たせたな

福音に倒されて行方不明となった佳織を搜索する為に再び出撃した専用機持ち達。

しかし、搜索を始めようとした矢先に福音が彼女達に気が付いて待機状態から覚醒し、戦闘態勢に入る。

搜索を優先させたい彼女達は、一夏と箒と鈴の三人で福音の足止めをして、残りのメンバーで佳織の搜索をすることになった。

三人と福音との戦闘音をバックに、ラウラは必死に周辺海域をハイパーセンサーを頼りに搜索していた。

「どこだ……どこにいるんだ……佳織……！」
絞り出すように叫ぶが、一向に反応は無い。

佳織の機体であるリヴァイヴⅡの破損状況が深刻な上に、佳織自身の状態も非常に危険である為、生体反応、機体反応共に微弱になりすぎていて上手く場所を特定出来ないでいる。

「あ……あれは……」

ふと、ラウラの視界の端にある物が映り込んだ。

思わずそちらの方に移動して、海面に浮かんでいる物を見つめる。

「佳織の……」

そう。ラウラが見つけた物とは……佳織が普段から自分の髪を縛るのに使っているヘアゴムだった。

完全に千切れていて、ズタボロになっている。

「くっ……！」

涙を浮かべながらソレを海から拾い上げる。

「セシリア……シャルロット……簪……聞こえるか……？」

『どうしましたの？』

『もしかして佳織が見つかったの!？』

『そうじゃない……。そうじゃないんだが……』

『……何を見つけたの？』

「佳織の……ヘアゴムを発見した……」

『『!!』』

佳織に関する物を発見する。

それが意味する事を瞬時に理解した三人は息を飲む。

「この周辺にいる可能性が高いかもしれない。出来ればこっちに来てくれないか？」

『わ…分かりましたわ！』

『急いでそっちに向かうよ！』

『ラウラさんは引き続き搜索をしてて！』

「了解だ」

通信を切つて辺りを見渡す。

「本来、操縦者が身に付けている物などはシールドバリアーに守られて大丈夫な筈。それがこうして外れて焼け焦げていると言う事は……」

それだけ、佳織が凄まじい攻撃に晒されたと言うなによりの証拠だった。

「民間人を守るのが私達軍人の本分の筈なのに……私は……！」
守るべき存在に守られた。

屈辱云々以前に、己の無力さを呪わずにはいられなかった。

『くっ………こいつ！』

『さつきよりも攻撃がより激しくなっていないか!？』

『きつと、佳織と戦っていた時もこれぐらいの攻撃をしてたんでしょうね……!』

『こんな化け物とたった一人で戦っていたなんて!』

オープンチャンネルで一夏達の苦悶の声が聞こえる。

それを聞いて反射的に福音がいる方を向く。

すると、そこには……

「い……一夏！ 箒！ 鈴！」

最初に戦った時以上の光弾の雨……いや、嵐に襲われている三人の姿だった。

なんとか回避に専念して被害を抑えようとはしているが、相手の攻撃がいかにせん激しすぎる。

いくら機動力が高くても、多少の被弾は避けられなかった。

防戦一方で全く攻撃すら出来ていない始末。

確かに囷にはなっているかもしれないが、このままでは一夏達が墜されるのも時間の問題だった。

「やはり……先に福音をなんとかしてからの方が……」

そんな考えが頭をよぎり始めた。

だが、それがいけなかった。

なんと、福音が他のメンバーの事も発見してしまったからだ。

『センサーに反応アリ。敵機確認。これより迎撃行動に入ります』

「し……しまった！気が付かれた！」

勿論、福音の機械音は他の三人にも届いていて、即座に戦闘態勢に入る。

「ようやく手掛かりが見つかったと言うのに！」

「ここまで来て！」

「でも……こうなったらやるしかない！」

こうして、福音との本格的なりベンジバトルが始まった。

・
・
・
・
・
・
・

「剣が……届かない！」

近接戦を得意としている一夏と箒にとって、圧倒的な射撃攻撃で攻めてくる福音は、まさに天敵とも言えた。

箒はまだいい。彼女の持つ剣には多少なりとも遠距離攻撃があるのだから。

しかし、一夏は違う。

いかに後付けで装備が出来るとは言え、やはり彼女の真骨頂は剣を

使った近接戦なのだ。

己が最も得意とする領域に全く踏み込めないのは、それだけで一夏には敗北したに等しい。

「大丈夫か！一夏！」

「う……うん……なんとか……」

などと強がってはいるが、内心は焦りを感じ始めている。

ラウラ達が参戦してくれたとは言え、それでもお世辞にも戦況はいとは言えない。

唯でさえこちらにはタイムリミットがあると言うのに、自分だけが攻撃すら出来ていない状況に、大きな歯痒さを感じている。

「接近さえ出来れば、レーザーブレードの一撃をお見舞いするのに……！」

雪片式型の内部に設けられた高出力のレーザーブレード。

零落白夜とまではいかないが、それでも第3世代型ISが装備する武装の中では破格の攻撃力を持っている。

直撃させれば、福音とてただでは済まない筈。

「近づければいいんだね？」

「え？」

悔しさを噛み締めていた一夏の横にやって来たのは、防御用パツケージ『ガーデン・カーテン』を展開させたシャルロットだった。

「なら、僕が盾になる。それなら行けるでしょ？」

「い……いいの……？」

「今更だよ。それに……」

福音に向かって一発の砲弾が飛来して、胴体部に直撃する。

「皆も同じ気持ちだと思うよ？」

そう言っつて、先程の砲撃をしたラウラの方を見ると、こちらを見て無言で頷いてくれた。

「ラウラ……」

「僕等が援護する。だから、近づいての一撃が最も得意な一夏と筈は迷わず突っ込んで！」

「……うん！」

作戦は決まった。

皮肉にもそれは、原作のような一夏による一撃離脱作戦だった。

「ちっ！来るよ！」

「分かった！」

シャルロットの合図でその場から散開する三人。

彼女達がいた場所を福音の光弾が通りすぎる。

「あ…危なかった…」

「安心して居る場合じゃないよ！」

「そうだったな！」

一夏と箒は互いに剣を構えて、前傾姿勢を取る。

「二人はともかく、福音に接近する事だけを考えて！」

「背中私達が守りますわ！」

「だから、絶対に決めないさいよ！」

「当然！」

再びラウラによる砲撃が撃たれる。

だが、福音も学習したのか、それを滑らかな動きで回避する。

「くっ！やはり二度目はそう簡単には命中しないか！だが！」

ラウラの目は諦めてはいなかった。

何故なら、そこには確かな勝算があったから。

「皮肉な話だが、福音は佳織との戦闘で間違いなくエネルギーをかなり消耗している筈だ！ほぼ全快に近い専用機が纏めてかかれば、いかに軍用機と言えども勝てる見込みは充分にある！」

実際、佳織との水中戦で福音はかなり追いつめられていた。

それでもまだ戦闘が可能なのは、一重に神による改変の影響である。

「二突撃!!」

エネルギーの節約の為に瞬時加速はしないが、それでも元々は白式も紅椿も高機動型の I S。

その速度は目を見張るものがあった。

当然、福音は真正面から突っ込んでくる二人に対して迎撃行動をとる。

翼を飛ばたかせながら斜め後ろに飛び、ラウラとセシリアの射撃を回避しながら銀の鐘の発射態勢に入る。

「またアレが来る……けど、その対処法はもう出来てる！」

予めデータ入力を済ませておいた簪は、打鉄式最大の武装である高性能誘導型8連装ミサイル『山嵐』を一斉発射する！

銀の鐘の光弾と山嵐のミサイルがぶつかり合い、凄まじい爆音を響かせ、前方が煙に包まれる。

「防いだ！」

「これだけじゃない!!」

更に追撃として、予め発射できるようにしておいた荷電粒子砲『春雷』も発射する！

青白い二本のレーザーが福音に迫る。

だが、煙の向こうでは命中したような音が聞こえない。

「手応えが無い……外した？」

山嵐を撃ち終えた簪がその場から離れて少し距離を取ろうとする時、煙がいきなり掻き消されて、そこから再び光弾が発射された。

「しまっ……!!」

「させないよ!!」

急いでシャルロットが簪の前まで来てガーデン・カーテンの盾で攻撃を防ぐ。

「シャ……シャルロット！」

「お……重い……!!」

盾越しでも感じる衝撃は凄かった。

「こんな攻撃を目の前で受けたんだよね……佳織は……」

出撃前に見せられた、佳織が福音に撃墜される瞬間を捕えた映像を思い出すシャルロット。

「あの時の佳織の痛みに比べれば……この程度!!」

シャルロットが簪を守りながら攻撃に耐えている間、他の面々もそれぞれに攻撃を耐え抜いていた。

「この程度の攻撃……」

迫りくる光の雨の前に、鈴は装備された甲龍の機能増幅パッケージ

『崩山』を戦闘状態にする。

両肩の衝撃砲の砲口が展開するのに合わせて、増設されたもう二つの砲口が出現した。

「どうってことないのよ!!」

合計4門の砲口から紅蓮の炎を纏った衝撃砲が発射される。

大幅に威力の増したその攻撃は、福音から放たれた光弾を見事に相殺してみせた。

「まだまだあ!!」

その勢いに乗って更に接近、一夏達がいる所まで追いついた。

「ぼさつとしてんじやないわよ!」

「わ…分かってる!」

最初に福音と交戦した三人で接近を試みる。

一夏と箒は機動性を駆使して回避をし、鈴は熱殻拡散衝撃砲で攻撃を相殺しながら接近する。

『…戦況を不利と判断。これより現空域からの離脱を最優先事項とする』

銀の鐘を止めた福音は、全てのスラスターを全開にしてこの場からの離脱を図ろうとした。

「に…逃げる!?!」

「絶対に逃がすな!下手にここから逃がせば、最悪…佳織がまだ生存している事を感じられる可能性がある!!」

「そうは……」

「させないから!!」

一夏と箒が速度を上げる。

それに伴い、福音も離脱スピードを増した。

しかし、そんな事を許さない者がいた。

「スピードならば……」

青い閃光が一夏達の横を通り過ぎた。

「今の私の方が上ですわ!!」

強襲用高機動型パッケージ『スタライク・ガンナー』を装着したセシリアだった。

そのスピードは凄まじく、あっという間に福音の背後を取った。それに合わせて、ラウラとシャルロット、簪も福音を狙い撃つ。

「そこっ！」

「くらえ!!」

「これなら！」

「当たって!!」

『!!』

いきなりのバックアタックに流石の福音も一旦動きを止めて回避をする。

「動きが止まりましたわ！」

「今だ!!」

一瞬の隙をついて、一夏と箒と鈴の三人は瞬時加速で一気に近づいた。

「はああああああああああああっ!!」

すれ違いざまに、まずは箒の持つ二本の剣による連撃が放たれた。

「次はあたしよ!!」

間髪入れずに鈴からは真紅の衝撃砲を発射しながらの双天牙月による重い一撃!

いずれの攻撃も命中して、福音はその体勢を崩した。

「今よ!!」

「やれ!一夏!!」

雪片を両手でしっかりと握りしめて、全力で振りかぶる。

「これで……」

刀身が展開し、そこから光の刃が出現する。

「落ちろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

その一撃はまさに一閃。

福音の頭部にある翼を一枚切り裂きながら胴体部に直撃した!

その時、一夏の目に福音の手甲部が見えた。

白銀に輝く鋼鉄の手は真っ赤に染まり、血が滴っている。

「その手が……」

それを見た途端、一夏はキレた。

「その手が佳織を刺したのかあああああああああああああああ
!!!!」

その場で回転しながら、遠心力を加えた更なる一撃！

それは福音のもう一枚の翼をも一刀両断し、力任せに海に叩き落
した！

「はあ……………はあ……………はあ……………」

「や……………やった……………のか……………?」

「佳織との戦闘で疲弊している上に、あんだだけダメージを与えたんだ
から……………やられない方がおかしいわよ……………」

数秒しても福音が海から上がってくる様子が無い。

それを見て、全員が戦闘態勢を解除し、佳織の搜索を再開しよう
とする。

「かなり時間をくってしまった。一刻も早く見つけなければ……………」

踵を返して佳織を探そうとすると、福音が落ちた海面が泡立ち、と
てもない光によって吹き飛ばす。

「な……………なんだ?!」

「あれは!」

海の中からゆっくりと福音が浮かび上がる。

体中に光を纏った体軀を動かしながら、全員と同じ高度まで上が
て来た。

四肢から紫電が迸り、見ただけでも力強さが増しているのが分か
る。

「まさかとは思うが……………これは……………」

自然な動作で全員を見渡す福音。

その瞬間に一夏達はISが警告を発する前に本能的に危険を感じ
た。

背筋に冷たい汗が流れて、戦闘空域全体に殺気が溢れる。

一夏によって斬られた翼の切断面から、まるでスローモーションの
ように光の翼が生えてきた。

「矢張り……………第二形態移行か!」

ラウラの叫びが聞こえた瞬間、進化した福音が消えた。

「かはあつ!？」

福音はいつの間にか一夏の完全なまでに迫っていて、その腹部に強烈な蹴りをかました。

一夏は肺から空気を吐き出しながら吹き飛ぶが、その前に福音によつて首を掴まれる。

「が……………ぐ……………!」

「貴様ああああああ!!!」

激高した筈が二刀を構えて斬りかかる!

だが、その攻撃も福音の翼によつて阻まれる。

「ば…馬鹿な…!？」

そして、筈も一夏と同様にもう片方の手で首を掴まれた。

「ほ……………うき……………!」

「こんな……………ことで……………!」

なんとかかして二人を救出したいと思うが、下手に撃てばフレンドリーファイアをする可能性が高い。

ラウラ達が躊躇している間に、福音の光の翼が眩しく輝く。

「に…逃げる!!二人共!!」

必死に叫ぶラウラの声が聞こえるが、そんな事はお構いなしと言わんばかりに輝きは増していく。

「こ…高熱源反応!？」

この場にいる誰もが絶望した時…彼方から一筋の閃光が飛んできて、一夏と筈を掴んでいる福音の手を撃ち抜いた。

「ゲ…ゲホツ…ゲホツ……………」

「い…今の一撃は……………?」

「あ…あれを見て!!」

シャルロットが指を刺した場所にいたのは……………

「……………!!……………!!」

煙を上げる銃身をこちらに向けている、一体のズタボロな状態の赤いISだった。

「……………佳織!!……………」

スコープを覗いている目を彼女達に向けて、佳織は美しい微笑を浮

かべた。
「待たせたな」

第51話 絆と共に

ま…間に合った…!

皆の戦闘反応を感知して、急いで駆け付けたはいいけど、まさかいきなり一夏と箒が大ピンチになってるなんて思わなかったよ!

しかも、よく見たら福音の様子がなんか違ってるし。

本来なら機械の翼がある場所にエネルギーで構成された光の翼が生えている。

あれがあるって事は、皆の力で一度は福音を撃破したって事だよね？

いや…マジで凄いわ。本気で尊敬。

にしても…咄嗟にセシリアの真似をして狙撃を試みたけど、まさか本当に命中するなんてね。

偶然ってあるんだね。いやホント。

シヤア大佐が別れ際に言った『餞別』がまさかコレだったとは思わなかったけど。

私が今握っているのは、嘗てアナベル・ガトー少佐がゲルググに搭乗した際に装備していた高出力試作型ビームライフル。

威力は抜群だけど…反動ですごく腕が痛い!

ISの補助で反動を軽減しているのにだよ?有り得ないでしょ!

撃った瞬間にリアルに腕からミシミシって聞きたくない音が聞こえたし。

「佳織…本当に生きてた…!」

「よかった…よかったよお…」

あ…あれ?なんで泣いてるの?

「全く…心配掛けさせるんじゃないわよ…バカ…」

「うう…佳織さん…」

「佳織…僕…僕…」

「流石は私の嫁だな…ぐす…」

「今…分かった。佳織さんこそが本当のヒーローなんだ…」

ちよ…皆まで!?確かに心配させちゃったのは悪いと思うけどさ、

泣くことないんじゃない?!

え…え…つと…一応…謝った方がいいよね…?

「皆…心配を掛けさせてしまつて申し訳ない。いや…違うな」
「こうじゃない。今言うべき言葉は…」

「心配してくれて…ありがとう」

これだな。うん。

「「「佳織(さん)く!!!」」」」

一気に涙腺崩壊!?アイエエエエエ!?ナンデ!?

『……………』

つて、んなコントをしてる場合じゃなかった。

今は福音をなんとかしなくちや!

つか、なんかさつきから静かじゃね?どうして?

『…た…ぷ…敵…』

へ?今なんて言った?

『にゅーたいぷハ敵!!倒スベキ敵!!』

「「「「「!!!」」」」」

きゅ…急に口調が流暢になった!?

これもパワーアップの影響か!?

「ニュー…ニュータイプ…?」

「アイツは何を言ってるんだ…?」

福音が言うニュータイプって…恐らく私の事だよな…。

別に私はニュータイプでもなんでもないんですけど?

私がニュータイプだったら、ビット適正の高い人は皆ニュータイプ
になつちやうよ?

(けど…これで少しだけ合点がいった)

福音が狙っていたのは私個人じゃない。

ニュータイプと言う『存在』を標的にしていたんだ。

理由は不明だけど、私をニュータイプだと誤認しているのが証拠だ
ろう。

『目標……排除スル!!!』

来る!!

福音の周囲に無数の光の弾が形成されていく。

非常に嫌な予感がしてなりません……もしかして……

「佳織!!逃げる!!」

「今のアンタは本調子じゃないんでしょ!!早く逃げて!!」

そいつは……無理な相談つてもんですぜ。

私は高出力試作型ビームライフルを収納し、代わりにビームナギナタとシールドを取り出して装備した。

「前にも言ったが……奴の狙いは私だ。ここで逃げると言う選択肢は……」

福音が周囲に作り出した光球を全て私に向けて発射した!

「有りはしない!!」

それに向かってこっちはシールドを前に出しながら突撃!!

今の私は一味も二味も違うんだよ!!

本物の赤い彗星から激励されて、やる気も気力も300%オーバーしてるんだから!!

・

・

・

・

・

「か……佳織っ!!」

福音の光の猛襲に向かって、あろうことか真正面から突撃していった佳織。

そんな姿を見せられれば、当然のように全員が声を荒げる。

「福音の奴……佳織が復活した途端にあたし達には見向きもしなくなっただわね……!」

「何処までも佳織だけを狙っていると言う事か……!」

福音から放たれる攻撃をシールドで防ぎながら速度を落とさずに接近していく。

「おおおおおおおおお!!!」

そのまま福音に体当たりをかます!……が、福音もそのまま棒立ちはしていない。

佳織が近づいたと同時に、その場から離脱。

上空に逃げてからの射撃に入ろうとしていた。

「逃がさん!!」

しかし、佳織はめげずに追撃。

シールドを持った腕を思いつき振りかぶる。

「受ける!!」

シールドを手甲代わりにした一撃が福音の顔面にヒットした!

「シ：盾 打だど!」

強烈な一撃を食らい、福音の動きが一瞬だけ静止する。

その僅かな隙を狙ってビームナギナタで切り裂く!!

「でえええええい!!」

ナギナタを回転させながらの一撃は福音の装甲に確かな傷を与えた。

福音を全速力で更に上空へを退避する。

佳織もそれを追う為イグニッション・ブーストに瞬時加速を使う!

一夏達の遙か上で、赤い軌跡と白い軌跡がとてつもない速度で何度も交差し、その度に火花と激しい金属音が響く。

「あの体とあの機体状況で……どうしてあそこまで動けるんですの……?」

「分からん……だが……」

「絶対に無茶をしている事だけは分かるわね……」

セシリアとラウラと鈴が拳を握りしめながら呟く。

もしも素手だったなら、間違いなくその手から血が滲んでいただろう。

「佳織はきつと……気力だけで自分の体を動かしているんだろう……」

「文字通り……火事場の馬鹿力……ってやつだね……」

「体中にある気力を全て総動員して、やっと動いてる状態……だと思っ……」

武の心得がある一夏と箒と簪だからこそ分かる境地。

佳織が己の限界の先にある力を振るって戦っているのが容易に想像出来た。

「佳織……体中がズタボロに傷ついて……ISだって罅だらけだった……」

鈴の言う通り、佳織自身は余り意識していなかったが、実際は体中に生傷や火傷の跡が有り、本来なら破れたりしない筈のISスーツすらもボロボロになっていた。

頭や口の端から血を流しながらも、彼女はいつもと変わらない表情を見せた。

逸れこそが佳織の強さであり、優しさでもある。

「……佳織の使っていた装備……あれは……」

「知っているのか？」

「うん……。佳織のリヴァイヴⅡに装着されていたあれは……近接戦闘特化型パッケージの『ムラサメ』だよ」

「ムラサメ……？」

「一部の装甲を厚くして、手持ちの武器は専用の盾とビームナギナタのみ。他にも装備は可能だけど、デフォルトはその二つだけなんだ」「まるで白式みたいだ……」

「コンセプトは似てるって思う。けど、それよりも気になるのは……」

「あのライフルか？」

ラウラの問い掛けに無言で頷くシャルロット。

「あれは前にも話したフランスとイギリスが合同で開発した試作武器の一つ。ちゃんとした名前すらも与えられないまま廃棄された筈なのに……」

「威力は凄かったよね……」

「一撃で福音を怯ませたからな」

「威力だけは……ね」

「意味深な言い方をしますわね」

上空で戦っている佳織と福音を見ながら呟く。

「あのライフルは、非常に威力が高い代償に使い勝手が最悪なんだ」
「と言うと……？」

「銃身が大きくて取り回しがしにくい。更に反動が凄まじすぎる。前に一回僕も試射をしたことがあったけど、その時は危うく肩を脱臼しそうになった程だよ」

「ISの方で反動を和らげるはずじゃ……」

「和らげてソレなのさ。そして、最悪なのは……一度撃つ度に銃身全体を専用の冷却装置で冷やさなきゃいけない。故に連続発射が出来ないんだ」

「見事なまでの欠陥兵器だな……」

「そうなんだ。なんでそんな代物を佳織が……」

一通り説明を終えたと同時に、佳織と福音が雲の中に入る。

「見えなくなった!」

「だが、雲の中でも音だけは聞こえる……」

白い雲がまるで雷雲のように光る。

その度に両者がぶつかっているのが分かる。

「我々も行くべきか……!」

「そうしたいのは山々だけど……」

「あの戦闘に介入するのは……難しいと思う」

「私もそう思う……。今の佳織さんと福音は間違いなく国家代表レベル……下手をしたら世界トップクラスの動きで戦っている。私達が行けば却って邪魔になる可能性がある」

「くそっ……!」

「私達は結局……佳織の役には立てないのかな……」

悔しさに顔を歪ませて、その目尻には涙が溜まる。

佳織を助けるためにここまで来たのに、最終的には救助対象である佳織に逆に助けられた。

プライドなどではなく、己の非力さに涙が零れてしまう一夏。

(君達は……彼女を助けたいと望むか……?)

「え……？」

声が聞こえた。

少し渋くて、でも優しさと温かさを感じさせる男の声。

「今の……」

「皆にも聞こえたの？」

「あ……ああ……」

「幻聴かとも思いましたけど……」

彼女達が困惑する中、声の主は構わずに声をかけ続けた。

（答えてくれ。君達は彼女……仲森佳織の力になりたいか？）

「そんなの……決まってるじゃない……！」

全員の気持ちを代弁するかのように鈴が叫ぶ。

「ここにいる皆、佳織の事が大好きなの!!好きな女の子の力になりたいって思うのは当たり前じゃない!!」

「ちよ……鈴っ!?!」

未だに自分の気持ちと向き合っていないシャルロットは狼狽えたが、それ以外の面々は揃って力強く頷いた。

（……そうか）

声は静かに呟く。

（どうやら君達の決意と想いは本物のようだ。これならば大丈夫だろう……）

「何を言っている……？」

（今の私には何も出来ない。その資格も権限も持ち合わせてはいない。だが、君達ならば……）

「さつきからなんなの……？」

（『あの男』のように……奇跡を起こせるだろう。想いと絆……その力を今こそ……）

声が聞こえなくなった直後、その場にいる全員の体が急に光りだす。

「な……なにっ!?!」

「え……ええええっ!?!」

「この現象は一体……!?!」

やがて、彼女達の全身が光に包まれて、佳織がいる場所へと飛んで行った。

（一人で勝てない相手でも、仲間と一緒にならば戦える。佳織…忘れるな。命を懸けて戦う者には、同じように命を懸けて戦う仲間が必ずいるのだと。君は決して…一人ではない）

・
・
・
・
・
・
・

「はあああああああああああつ!!!」

全身が痛みで悲鳴を上げる中、私は必死に福音と戦っていた。

前回の戦闘で余計な知恵を付けたのか、あの厄介な全方位射撃だけでなく、手刀にエネルギーを纏わせた近接戦もこなすようになりやがった。

お蔭で、こっちのビームナギナタが効かないのなんの。

斬りかかると見事に鏝ぜり合って相殺するんだもん。

これじゃあジリ貧ですよ、親方。

「雲から出た!!」

これで視界が良くなる!

ここから一気に!!

「ちっ!」

こっちを向きながら器用に撃ってくるし!

自分の背後には海面があるって分かってるのか!?

「貴様の射撃はもう見切った!!」

いい加減パターンなんだよ!

これに操縦者の意思があつたら間違はなく最強だと思うけど、今は暴走した機械に過ぎない。

どれだけ強くても、やっぱりどこかでパターンがある！

これさえ分かっただけしまえば!!

「回避など容易に出来る!!」

つーか、実際は一発の被弾が命取りだから、被弾出来ないってのが正直なところ。

なんたって、こっちは半分しかないエネルギーを遣り繰りしながら戦わないといけないんだから!

「貴様のような『破壊だけの狂気』に飲まれたりするものか!!!」

あと少し……あと少し……!!

「ここだつ!!」

ナギナタが届く距離まで来た!

「ここは……私の距離だ!!!」

喰らいやがれコンチクショー!!!

ナギナタの片方の刀身を無くし、もう片方にエネルギーを収束させる。

すると、ビームの刃が大きくなって、まるで刀のようになった。

その刃を全力で振るう!!

「くらうがいい!!!」

よし……直撃した!!これで……

「なっ……しまった!!」

福音のカウンターの手刀の一撃によって、左手に装備していた盾が破壊されてしまった!

しかも、そのままこっちの腕を掴まれた!

勿論、次に来るのは……

「そう来るか……!!」

光の翼が私を包み込む。

文字通り、追い込まれたか!

「万事休すか……!!」

今の私ที่นี่が限界なのか……!

いや、この程度で諦めたら『赤い彗星』の名が廃る!!

「私を倒すのはいいだろう……だが!!」

もう一回ナギナタの刃を突き刺す!!

「貴様も一緒に連れて行くぞ!!」

死なば諸共!!

せめて福音だけでも!!

私が覚悟を決めた……その時。

「な……なんだっ!?!」

いきなり体が光り出した!

しかも、別の幾つもの光が私の中に入ってくる!!

「う……うわっ!?!」

ま……眩し!?!

余りの眩しさに目を瞑る。

その光を警戒したのか、福音も私から離れた。

光りが止んだ時、私の目に映ったのは……

「これは……!?!」

大きく変化した私の愛機の姿だった。

私の周囲にはセシリアのブルー・ティアーズの装備しているビットに酷似した物と簪の打鉄式式の山嵐によく似たミサイルポッドが浮いていて、右肩付近にはスターライトMKⅢが、左肩にはラウラのシュヴァルツェアレーゲンの大口径リボルバーカノンが装備されている。

肩にはワイヤーブレードが設置してあって、腰には荷電粒子砲『春雷』と、それにくつつくようにして残りのワイヤーブレードがあった。右腕にはシャルロット十八番のパイルバンカーがどこぞの鋼鉄の狼さんの愛機のように装着してあって、左腕には同じようにアサルトライフルがある。

背部もなんか凄い事になっていた。

私のリヴァイヴⅡに合体するかのようになりヴァイヴ・カスタムのブースターもくつついていたから。

更に、一夏の白式と同じウイング・スラスターに加え、鈴の甲龍の衝撃砲、箒の紅椿の花弁のような大型バインダーが同時に装備されていた。

脚部はリヴァイヴⅡと紅椿を足して2で割ったような形をしていて、僅かではあるが展開装甲から刃が覗いていた。

そして、私の手には雪片と空裂と双天牙月が融合したかのような武器が握られていて、それがそれぞれに2本に分割してあった。

ついでに言えば、さつきから私の体とISが金色に光り輝いています。

「皆の機体と私のリヴァイヴⅡが……合体した……!?!」

今の状態はまさに、そうとしか言いようがなかった。

こんな事は常識的に有り得ない。

もしもこんな芸当が可能だとするならば、それは……

「彼女が……!?!」

あのクソ神の後任になった、私とシヤア大佐を会わせてくれたあの子しかない。

これが本当の神の奇跡……なのか……!?!

ふと見てみると、機体のエネルギーが全回復している上に、心なしか私自身の体力も元通りになつてる気がする。

いや、もしかしたらそれ以上かも。だって……

「体の奥底から……力が沸き出てくる……!!」

これなら……やれる!!

そう思つて武器を構えると、奇妙な声が聞こえてきた。

『ちよ……ちよつと!?!これってどういう事なのよ!?!』

『ええええええええええっ!?!なんか私達、佳織の中にいるんですけど!?!』

り…鈴に一夏!?!

なんで二人の声が私の頭の中から聞こえてくるの……!?!

パワーアップは純粹に嬉しいけど、誰かこの状況を説明して……!!

第52話 究極進化

理由は全くの不明だけど、いきなり私のリヴァイヴⅡに皆の機体が融合(?)して、超絶的なパワーアップをした。

それは本当に有難いし、いいんだけど……。

(こ……これは一体どういう事だ!?)

(私達の体が……いえ、魂が佳織さんと一つになっていますの!?)

(そんな非現実的な……)

なんで他の皆の声が私の中……正確には頭の中から聞こえてくるのささ!?

(全くもって状況が理解出来ん……)

(これこそまさに創聖合体……!気持ちいい!)

なんで簪だけアクエリオンネタをぶっこんでくるのさ!?

意外と余裕あるな!この子は!

もしかしたら、私達の中で一番肝が据わっているのかもしれない……。

私自身も混乱しているけど、まずは目の前の福音をなんとかしなくちゃ!

あいつもこつちの急激な変化に戸惑って……いるのかなあ??

少なくとも、状況を把握するためなのか、動きを止めてはいるけど。

「これは……?」

ふと目の前に機体の名前が表示された。

『ラファール・リヴァイヴ・バリスティック疑似最終形態『メサイア』メサイア……救世の王……か。』

よく見たらエネルギーの上限が大幅にアップした上で全て回復してるし。

「あ……皆。この状態に戸惑っている気持ちはよく分かるが、今だけ少し落ち着けないか?」

(え?佳織にも私達の声が聞こえるの?)

「頭の中に直接な」

(そ……そうなんですのね……)

本当に…何がどうしてこうなったんだ？

「考える事は後でゆつくりと出来る。今の私達が成すべき事。それは……」

眼前で静止している福音を睨み付ける。

(……そうだったわね。私達の元々の任務は……)

(この福音を撃破する事！)

(今度こそ……私達の手で任務を達成するぞ！)

(今の私達なら……きつと、ううん……絶対に出来る！)

(そうだ！やろう！皆で！)

意気込みは充分だな。

それじゃあ……

「これが私達の……」

腰を低くして足を曲げ、いつでも飛び出せる態勢を取る。

「最終ラウンドだ!!!」

そして、全速力で福音に向かって突撃した！

・
・
・
・
・
・
・

こっちの動きに即座に反応して、その場から後退して間合いを取ろうとする福音。

だが、そうは問屋が卸さない！

「逃がすと思うか？セシリア!!」

(お任せを!!)

セシリアの意思に反応するかのようには、全てのビットがいつも以上の滑らかな動きで福音に向かって行く！

当然、福音はビットを迎撃しようと試みる。

しかし、今のビットには全く通用しない。

(残念ですが……もう貴女の攻撃には当たりませんわ!!)

福音が放った光弾の隙間を縫うようにしてビットが動いていく。

まるで、ビットの一基一基にセシリアの魂が乗り移ったかのよう
に。

(そして！佳織の防御は僕がする!!)

私の目の前にとてつもない大きさの鋼鉄の壁……いや、盾が展開さ
れた。

体全体を覆い尽くすかのような巨大さで、福音の光弾を全て防いで
みせた！

(隙あり!!そこですわ!!)

自分の攻撃が一切通用しなくなった事に驚いたのか、福音の動きが
ほんの一瞬だけ止まった。

その隙を見逃さずに、ビットによるレーザーの包囲網が襲いかかる
！

(この感覚……今ならば!!)

レ……レーザーが曲がった!?

これが噂に聞く『偏光制御射撃』か!?

まさかの不意打ちに、福音は全てのレーザー攻撃を体で受ける事
に。

(シャルロット！盾を解除して！)

(分かったよ！鈴！)

盾が量子化されて消えた。

それと同時に背部にある衝撃砲が発射準備に入る。

(あたしはあたしの意味で撃つから、佳織は構わず攻撃しなさい！)

「了解だ！」

手に取った武器……右手には雪片に双天牙月の持ち手が付いた物、
左手には空裂に同じ持ち手が付いた物をがっしりと握りしめてから
突っ込む！

態勢を立て直した福音は後退を繰り返しながら光弾を撃ってくる

が、それは全て無駄に終わる。何故なら……

(ほらほらほらほら！やれるもんならやってみなさいよ！)

灼熱の炎を纏った衝撃砲にて片っ端から破壊されているから。これはまた……凄い威力だな……。

爆炎を潜りながら福音と激しいエアコンバットを繰り返す。

さつきと同じように何度も高速でぶつかり、交差していく。

「でえええええええい!!」

『!!』

福音の手刀と私の持つ雪片が鏝ぜり合った。

「悪いが……パワーはこっちが上だ!」

力任せに福音の体を弾き飛ばす!

けど、それだけじゃ終わらない!

(今なら使える……!姉さんの必殺剣が!!)

雪片の刀身が展開し、そこから昔テレビ越しに見た純白の光の刃が現れた。

(零落白夜!!佳織!!)

「おう!!」

少しだけ離れた福音に速攻で追いついて、その胴体を零落白夜で真一文字に斬る!!

(直撃した!)

(こいつはおまけよ!!とつときなさい!!)

零落白夜の一撃で怯んだ福音に、すかさず衝撃砲の雨霰。

吹っ飛びながら完全に体勢を崩した!

「セシリア!ビットを戻せ!」

(はい!)

ビットが私の周囲に集まって、その銃口を福音に向ける。

「簪!マルチロック!!」

(わ……分かりました!)

私の目に全ての射撃武器の標準が福音にロックされていく。

「ラウラ!セシリア!シャルロット!鈴!」

((了解!))

四人は私の意思をすぐに理解したのか、自分が担当する武装を全て攻撃態勢に移行させた。

ティアーズビットが、スターライトMKⅢが、龍砲が、アサルトライフル『ヴェント』が、大口徑リボルバーカノンが、山嵐が、春雷が、全て前方を向く。

それに合わせて、私も一旦両手に持った剣を腰に付けて、自分の手にハンドガンとマシンガンを展開した。

(ロック完了！)

「よし!!」

頭の中で全ての武器を発射命令を出す!

「これが私達の戦いだあああああああああああつ!!!!」

今思ったけど、これってモロにストフリのドラグーン・フルバーストじゃない?

まあ：別にいいか!

私の体に凄い衝撃が走るが、歯を食いしばって耐えながら全ての武器が発射されるのを見た。

流石に福音もそのまま突っ立たままではいけないようで、なんとか態勢を戻した後に回避運動をしながらの迎撃行動を行った。

けど、それはもう完全に後の祭りだった。

スターライトのレーザーが肩に当たったのを皮切りに、そこにビットのレーザーが全身を貫き、衝撃砲が何発もぶち当たる!

更にリボルバーカノンの強烈な一撃が腹部に直撃し、その四肢にハンドガンのビームと春雷のレーザー、マシンガンとアサルトライフルの弾が命中する!

そして、トドメと言わんばかりに48発のミサイルが福音に全弾命中する!

「まだだ!」

すぐにハンドガンとマシンガンを収納し、空いた手に二振りの剣を握りしめる!

瞬間加速で追いかけてながら、二つを一本のツインブレードに合体させる!

「私達の絆の力……」

それを全力で振りかぶり……

「受けてみるおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
一刀両断する!!!」
!!!!!!」

福音は回転しながらド派手に吹き飛んでいった。

(やりましたの!?)

(ちよ……!それフラグ……)

(へ?)

簪の言う通り、セシリアの言葉はフラグだった。

クソ神によって魔改造された福音はまだ動けるようで、首だけはしっかりとこつちを向いていた。

すると、いきなり福音の光の翼が消えた。

(き……消えた……?)

(いや……違う!あれは……)

福音の両手がまるでかめはめ波を撃つようなポーズになって、その手に高密度のエネルギーが収束していく。

(消したんだ!)

そうか!自分に残された全ての余剰エネルギーを攻撃に転用させて放つつもりなんだ!

(佳織!来るぞ!!)

その両手がこちらに向いた直後、本物のかめはめ波のような一撃が襲いかかってきた!

「そつちが全てのエネルギーで雌雄を決しようと言うのなら……」

一直線に飛んできた大きなエネルギー波を滑るように躲しながら、私は頭の中で皆に語りかけた。

「私達は私達全員で決着をつけてやる!!!」

私の体……正確にはISが眩しく光り輝き、徐々に光が増していく。
「皆!!行くぞ!!!」

「」「」「おう!!!」「」「」

その時、確かに皆の声が周りから聞こえた。

七つの黄金の流星が私の体から飛んで行って、福音の周囲に集結し

た。

「まずは私から!!」

黄金に光る簪の体には極限まで進化した打鉄式式が纏われていた。

【打鉄式式疑似最終形態『天照』】

「てやああああああああああ!!!」

その手に持つ薙刀の連撃を食らわせて、その直後に二倍に増えた山嵐を一斉発射!!

「当たってえええええええ!!!」

合計96発のミサイルが福音に命中し、爆発する!

福音がその攻撃で飛んで行った先には、光り輝くISを纏った箒が待ち構えていた。

「不思議だ……。今はそんな状況じゃないと分かっているのに……」

【紅椿疑似最終形態『阿修羅』】

「心が高揚している自分がいる!!」

まるで黄金に光り輝く大輪の花を思わせる背中のバインダーから、8本の機械の腕が出現。その全てに空裂と雨月と同じ剣が握られている。

「感謝するぞ!!流転の運命とやらにな!!!」

10本の腕から放たれる達人級の斬撃に、福音のボディが傷ついていく。

「セシリア!!」

「待ってましたわ!!」

箒がまた福音と吹き飛ばす。

その先には、まるで黄金の騎士のような姿をしたセシリアがいた。

【ブルー・ティアーズ疑似最終形態『黄金十二宮』】

「佳織さんの想いと決意……。絶対に無駄にはしませんわ!!!」

本来なら両手で一丁持つ箒のレーザーライフルを、片手ずつで二本装備している。

それを同時に撃ちながら、更には12基まで増えたビットで同時射撃!!

「これも……。持っていきなさい!!!」

更にそこからビットと同じ数のミサイルも発射!!

その全てが命中して、福音が爆煙に包まれる。

「まだ終わりじゃないわよ!!」

福音の真上を取ったのは鈴。

その顔は今ままで一番生き生きとしている。

【甲龍疑似最終形態『四神』^{スーシン}】

「いくわよおおおおおおつ!!!」

大型化した4つの龍砲から放たれるのは、超大型の衝撃砲。

しかも、それぞれに色が違う。

一つは赤く燃えて、一つは青い光って冷気を纏っている。

もう一つは黄色く光って雷が迸り、最後の一つは緑色の風に覆われている。

それら4つの属性を持つ衝撃砲がマシンガンのように福音に当たっていく。

「もう一丁!!!」

鈴の手に彼女の体を同じぐらいの大きさの青龍刀……双天牙月があつた。

「ぶっ飛ばええええええええつ!!!」

斬ると言うよりは殴ると言つた感じで横に斬る。

そこに上空から急速に降りてくる影があつた。

「まだ私達の攻撃は終わってない!!」
やってきたのは一夏。

その身も皆と同様に金色に光り輝き、その姿はまるで黄金の熾天使。

【白式疑似最終形態『極』^{きわめ}】

ウインバインダーが本当の天使の翼のようになって8対になっている。

そして、その手に握られているのは勿論……

「伸びろ!! 零落白夜!!」

あろうことか、雪片の二刀流。しかも、そこから伸びる零落白夜の刃はどこまでも伸びていき、まるで自分の意思があるかのように自在

に動いて福音を切り刻んでいく。

「僕も負けてられないよ!!!」

シャルロットも飛んできて攻撃に移る。

機体の各部分が巨大化し、その姿はまさに空飛ぶ武器庫。

ウイングスラスターも大型になって、機動性は全く低下していない。

【ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ疑似最終形態『エンド・オブ・アース』】

その両手にアサルトライフル、周囲には無数の銃火器がビットのよ
うに浮かんでいる。

「全弾撃ち尽くす!!!」

福音の周りを飛び回りながら、全ての銃火器が火を噴く。

その銃弾の嵐に完全に身動きが出来なくなる。

シャルロットが攻撃を終えた直後に、福音の体を拘束するように複
数のワイヤーブレードが飛来して、その両手足に巻きつく。

「まだまだ行くぞ!!!」

私達の中でワイヤーブレードを装備しているのは一人だけ。

そう……彼女だ。

【シユヴァルツェア・レーゲン疑似最終形態『自由の翼』】

フリーユージェル・デア・フライハイト

「今までの借り……ここで全て返させてもらおう!!!」

福音を体を封じた状態で6門の超大型レールガンが発射される。

そんな状態で撃たれたのだから、必中は当然の事。

命中した衝撃がこっちにまで伝わってきた。

「佳織!!!」

「締めは貴女が!!」

「やっちゃえ!!!」

「この一撃で!!!」

「全てを終わらせてくれ!!!」

「貴女の一撃で!!!」

「終止符を!!!」

皆にそう言われたら……やるしかないじゃないか!!!

私はラウラのレールガンの上に乗って、福音に狙いを定める。

「今こそ言わせてもらおう……!」

この状況……言うべき言葉は一つだけだろ!!

皆の武器と同じように巨大化したWビーム・トマホークを両手で装備し、今出来る全推進力で突貫する!!

「私達を……誰だと思っている!!!」

通り過ぎながら全力で切り裂く!!!…がビームの刃が福音に突き刺さった状態で止まった!!

「これで……!」

福音が腕を振るわせながら私の首に手を伸ばして掴もうとする。

「^{ファイナル}終幕だ!!!」

力任せにトマホークを斬り下ろす!!!

福音が海に向かい落ちていく中、その装甲が粒子化して消えていく。

「おっと」

急いで傍まで行って、中にいた操縦者の人をギリギリの所でキヤツチ。

「ふう……少し焦ったぞ」

「おや? I Sが……。」

「元に……」

「戻っていく……?」

黄金に煌めく光が次第に消えていく。

全てが消えた後、残ったのは元の姿に戻った私達の専用機だった。

「……終わった……のよね?」

「そう……ですわね」

「疲れた……。今はそれしか言葉が出ない……」

「そうだな……」

本当に終わった……んだよね……? そうなんだよね……?」

「あ……?」

戦闘が終わったと思ったら……急に力が……。

「か……佳織? 大丈夫?」

「彼女は私が運ぼう」

「お願い……い……」

「瞼が重くなつて……意識が……」

「佳織……？」

「シャルロットが私を呼ぶ声が聞こえる。」

「でも、なんでか遠くに聞こえるな……」

「佳織!!!」

「佳織さん!!!」

「不思議な浮遊感と落下するような感覚を感じながら、私は静かに目を閉じた。」

「ああ……なんだか眠いな……」

「このまま……ずっと寝ていたいな……」

第53話 大人への階段

「あり得ない……こんな事絶対に有り得ない!!」

旅館の客室の一つにて激しく激高する紫の髪の少女。

彼女が見ている投影型モニターには、自分達が所有する監視衛星から持たされた映像が映っている。

モニターの向こうでは、佳織達が黄金に煌めきながら福音を見事に撃破した様子が映っている。

「なんなんだこれは！こんな現象……絶対におかしい!!」

「だが、彼女達は実際に福音を倒す事に成功した。これは覆しようのない事実だ」

「しかし……！IS同士が操縦者ごと融合し、分離するなど……！明らかに物理法則に真正面から喧嘩を売っているとしか思えません！」

「まあ……そうだろうな」

紫の少女は違い、どこまでも空虚な反応しかない金髪の少女。

「ISに関しては私よりもお前の方が詳しいだろう？お前は思うんだ？」

「……私を知っている限りでは、通常のISにあのような機能は備わっていません」

「通常……。ならば、通常ではないISならば備わっていると？」

「それは……」

急に口籠る少女。

言いたくないではなくて、本当に分からないのだ。

「いや……待てよ？もしやあのISには……『アレ』が……？」

「どうした？何か心当たりでもあるのか？」

「一つだけ……。ですが、可能性としては非常に低いと思われます。それに……」

「それに？」

「もし、私の予想が正しいのであれば、私達はアイツよりも後手に回っている可能性があるかと……」

それを聞いた途端、金髪少女の眉間がピクッと反応した。

「ごちらの動きを読まれていたと？」

「そこまでは……。多分、何らかの対抗策の一つとして考えていたと……」

「そうか……」

それだけを言つて、彼女はゆっくりと立ち上がる。

「では、そろそろチェックアウトの準備でもするか」

「戻られるのですか？」

「ああ。佳織の勇姿を見る事が出来た。今回はそれだけで満足だよ」

「………了解しました」

佳織の名が出た途端、紫の顔の少女の顔が嫉妬に歪む。

（何故だ……！何故、仲森佳織だけが！）

彼女の心の内を知つてか知らずか、大佐と呼ばれた少女はいつもと変わらぬ顔で振り向く。

「向こうに帰ったら、お前が言った『アレ』について聞かせてもらおうぞ」

「了解しました」

紫の少女は綺麗な敬礼をして応えた。

「なら、さっさと浴衣から着替えてしまおうか」

「わ……私は室外に出ております！ごゆっくりとお着替えください！」

顔を真っ赤にして部屋の外に出る。

「………意外なところで初心な奴だな」

目をパチクリとさせてから、彼女は浴衣を脱いで着替え始めた。

・

・

・

・

・

救出に成功した福音のパイロットと急に気絶した佳織を運んで、一夏達専用機持ち達は無事に旅館に隣接している浜辺へと帰還した。

浜辺には既に千冬と真耶が待っていて、皆の事を優しい顔で出迎えた。

「そちらの様子はモニターで見ている。……よくやったな、お前達」
「姉さん……」

いつもとは打って変わって、かなり優しい言葉を言う千冬に、全員が目が点になった。

「な……なんだ？」

「千冬さんが優しい……」

「凰。どうやらお前は今から浜辺100周ランニングをしたいらしいな。感心な事だ」

「すいませんでしたああああああっ!!」

実に見事なジャンピング土下座を披露する鈴。

どのような状況であろうとも、千冬に冗談は禁句なのだ。

「そ…そうだ！佳織が！」

「それなら大丈夫だろう」

シャルロットが抱えている佳織の顔を撫でた後、手首を触って脈をみる。

「矢張りな」

「え？」

「佳織は単純に、今までの疲労とダメージが蓄積して気を失っただけだ」

「き…気絶？」

千冬の簡易的な診断に、一気に気が抜ける面々。

「よく考えて見ろ。佳織は福音とほぼ三連戦で戦ったも同然で、更にはずつと海の中にいたんだぞ？寧ろ、戦闘中によく体を持たせたと心配を通り越して感心してしまった程だ」

「そ…そう言えば……」

あんな危険な戦いを三回も連続ですれば、千冬とて唯では済まない。
い。

それをまだ子供である佳織がやってのけたのだ。

戦闘が終了すれば、今までの疲れがドツと出るのは自明の理だっ

た。

「とはいえ、今すぐにも休ませなければいけないのには変わりないがな。と言う訳で……」

千冬は半ば無理矢理に近い形でシャルロットから佳織を受け取った。

「佳織は私が運んでおく」

「」「」「ええくくく!」「」「」

「異論は認めん。お前達も念の為に体を診断してもらえ。決して無傷と言う訳ではないんだからな」

「あ……あの操縦者の方は私が預かりますから。皆さんは一回休憩をしてから診断を受けてくださいね?」

そう言いながら、真耶は箒が抱えていた福音のパイロットを受け取った。

(……意外と力があるんだな)

箒がそう思ってしまったのも無理は無かった。

しかし、真耶とて嘗ては日本の代表候補生だった女。

これぐらいは楽勝だった。

「そう言えば姉さんはどこに?姿が見えませんが……」

「束ならば、お前達が福音を倒した直後に嬉しそうにしながら何処かに去ってしまったよ。全く……アイツは何を考えているのやら……」

ぶつぶつと文句を呟きながら、千冬は旅館に向かって歩き出した。

「あーそ……それじゃあ、行きましようか?」

慌てて千冬の後を追う真耶の背中を見ながら、一夏達も旅館に戻る事に。

こうして、福音との戦いは終わりを告げたのだった。

・
・
・
・
・
・

診断に行った一夏達とは真逆の方向に歩いている教師二人。

その顔は安堵と共に困惑が混じっていた。

「さつきは皆の事を考えて言いませんでしたけど、あの時…あの子達に起きた現象は一体何なんでしょうね…？」

「私にもさつきぱり分からん。ISには未だに謎な部分も多いが、だからと言ってあんな奇跡染みた現象が起きるものなのか…？」

福音との戦いの最終局面で起きた謎のパワーアップ。

佳織達のISが黄金に光出したと思ったら、いきなりの融合。

更にそこから分離して、佳織以外のISも極限までパワーアップしていると言う始末。

もしもISを研究している科学者連中が見たら、卒倒する事は間違いないような光景のオンパレードであった。

「ここに束がいたら真つ先に聞くんだがな」

「いなくなっちゃいましたからね…」

あれから束の姿は全く見ていない。

まるで最初からいなくなかったかのように影も形も無い。

「仲森さんはどこに運ぶんですか？」

「布仏が寝ている部屋でいいだろう。あそこは女将さんに無理を言っ
て借りた部屋だからな。佳織もゆっくりと休めるだろうさ」

「なら、私はどこか空いている部屋が無いか聞いて、あつたらそこに彼
女を寝かせようと思います」

「分かった。頼んだぞ」

「はい」

真耶は少し早歩きをして廊下の向こうに消えていった。

「さて、行くか」

佳織を起こさないようにゆっくりと歩く千冬。

「また…お前に助けられたな…」

本当なら感謝したいが、今の佳織の体は本当に傷だらけで、素直に

は喜べない。

「寝かせた後に診察をしてもらおうべきだな」

急がず騒がずを厳守しながら歩いて行くと、やがて本音が寝ている部屋へと辿り着く。

「む……しまった。この状態じゃドアを開けられない」

「じゃあ、私が開けてあげるよ」

「済まんな。……って」

いつの間にか束が隣にいて、ドアノブを握っていた。

「お前……今までどこにいた？」

「トイレ」

「は？」

「いや……急に束さんのお腹がエマージエンシーコールを出してね。急いでトイレに向かって発進したのですよ」

「はあ……」

呆れて物も言えない千冬。

深刻に考えた自分が急に馬鹿馬鹿しく感じた。

「取り敢えず、開けろ」

「は……い」

部屋の中に入ると、部屋の中央に敷いてある布団に本音が静かな寝息を立てながら寝ていた。

「ぐっすりだね」

「泣き疲れたんだろう。佳織が倒されて一番錯乱していたのはコイツだしな」

本音の顔にはまだ涙の跡が見える。

それだけ彼女は泣いたと言う事だろう。

「束。佳織の分の布団を敷いてくれ」

「りよ……か……い」

言われた瞬間に束はそそくさと押し入れの襖を開けて、中にある折りたたまれた布団を取り出して丁寧に敷いていく。

「ほい完了」

佳織を寝かせやすいように掛け布団を捲る。

「つて、そのまま寝かすの？」

「仕方あるまい」

佳織の今の恰好はズタボロになったISスーツ姿。所々に破れてもいて、肌が露出している。

「本当なら今すぐにも脱がして着替えさせたいが、そんな事したら佳織に嫌われそうだしな……」

「……正直言うと、私もさつきからずっと欲情してます」

「襲ったりしたら殺すぞ？」

「……………ダイジョーブだよ」

「目を見て言え」

オドオドしながら目線を逸らす。

冷や汗をかきながら、お約束のように口笛まで吹いている。

「あ、そうだった。すっかり忘れてたよ」

佳織の首に掛けられたリヴァイヴⅡの待機形態を取り外す束。

「おい……………お前は何を……」

「何をつて。今回の戦いでかおりのISはかなり破損したでしょ？多分、IS学園の設備じゃ修復は難しいと思うんだよね」

「で？お前が修復をしようのか？」

「その通り。かおりのISは作れなかったけど、これぐらいはしたいいしね」

リヴァイヴⅡの待機形態をポケットに入れて立ち上がる。

「私は早速、機体の状況を見てみるよ」

「そうか。頼んだぞ」

「任せておいてよ」

サムズアップをしてから、静かに部屋から出て行った。

それを見送ってから、千冬は寝ている布仏と佳織に目をやった。

「……………今回だけは譲ってやる」

最後に佳織の頭を撫でた後、千冬も部屋から出て行った。

部屋には二人の寝息だけが聞こえていた。

・
・
・
・
・
・

「ん……………？」

体の痛みによって、私は目が覚めた。

「……………ここは……………」

目の前に移っているのは、見覚えがある……………ような無いような。

「あ……………旅館の天井だ」

思い出した。

ここつて臨海学校で泊まっている旅館じゃん。

「私……………」

皆と一緒に暴走した福音を倒しに行つて、色々とおつて一回倒されてから……………。

「あの人に会ったんだっけ……………」

あれは夢かもしれない。

それでも、あの人から貰った言葉は幻じゃない。

確かに私の心の中に刻まれている。

「そんで、福音と戦っている皆を助けに行つて……………」

いきなり意味不明な現象が起きて、夢中に戦っている内に福音を倒す事に成功したんだっけ。

「本当になんだつたの……………あれ……………？」

神の仕業か、それともＩＳＣＯＡに秘匿された機能的なものか……………。

「……………考えてもしゃーないか」

よく見たら、私つて今布団に寝てるし。

誰がここまで運んできたんだ？

「これ……………」

腕とか頭に包帯が巻かれてる。

多分、臨海学校と一緒に来ている保健の先生が治療してくれたんだろうな。

「明日にでもちゃんとお礼を言わないと……」

「つーか、私ってISスーツのままなんですけど？」

寝かせてくれたのは嬉しいけど、上から何かを羽織らせるぐらいはしてくれてもいいんじゃない？

「贅沢は言うもんじゃない……か」

「ここまでしてくれただけでも充分に有難いしね。」

「着替え位は自分でしますかね……つと。痛たた……」

うぐ……！思った以上に体に響くな……！

前に全身筋肉痛になった時以上にキツいかも……。

起き上がるだけでも大変だ……。

「うくん……？」

「え？」

隣……本音ちゃんが寝てた。

状況判断する事に夢中で気が付かなかつたよ。

「かおりん……？」

「起こしちゃったかな……」

だとしたら悪い事をしたな。

「……そういや、なんで隣に本音ちゃんがいるの？」

それ以前に、ここって私達が泊まっている部屋じゃないよね？

空いている部屋を使わせて貰っているのかな？

「か……かお……りん……？」

「あ……」

ヤバ。本格的に起こしてしまった。

「かおりん——」——「むぎゆ……！」

どれだけ寝ていたのかは知らないけど、もう外は完全に夜になって
いる。

「ここで大声は出しちゃいけない。」

「今は夜だから静かに……ね？」

小声で言い聞かせると、本音ちゃんはコクコクと頷いた。

「よろしい」

「プハツ〜！」

苦しかったかな？

もう少し隙間を空けとけばよかった。

「……かおりん……」

「本音ちゃん……うわっ」

い……いきなり抱き着かれた……。

「よかった……かおりんが無事でよかった……」

「本音ちゃん……」

体が震えてる……。

彼女の涙が私のＩＳスーツを濡らす。

「本当に……よかったよお〜……」

「心配させて……ごめんね……」

彼女を慰めるように、私の方からも抱き返した。

いつの間にか私の目からも涙が零れていた。

「私……むぐ……？」

……キスされた。

あまりにもいきなりすぎて、頭の中が真っ白になった。

「んん……」

「んちゅ……」

自然と本音ちゃんに合わせて、私も目を瞑っている。

私は彼女に流されるがままキスを続ける。

少しして、お互いの唇が離れた。

「私……かおりんから離れたくない……。貴女を……感じていたい……」

「本音……ちゃん……」

頬が真っ赤に染まって、目がうつとりとしている。

その表情が凄く妖艶に見えて、胸がドキツと高鳴った。

「ん……れろお……」

「ちゅ……」

また私達の唇が重なる。

今度は互いの舌が絡み合い、所謂ディープキスになった。

私の舌に乗って私の唾液が本音ちゃんの口の中に入って、それと入れ替わるように本音ちゃんの唾液が私の口の中に入り込む。

唾液と唾液が混じり合って、唇の端から流れて布団に落ちる。

そのまま、本音ちゃんが私を布団に押し倒す。

フカフカの布団だったから、傷以外には痛みを感じなかった。

もしもこれがフローリングや畳だったら、キスどころじゃなかっただろう。

「かおりん……もう私……」

「え……ちよ……?」

本音ちゃんが自分の制服を脱ぎながら、私のISスーツも脱がし始めた。

「一つになろう……? かおりん……」

「あの……私達は女同士……きやつ!」

この後、滅茶苦茶セックスした。

第54話 新たな戦乱の予感

「あの瞬間……あの場にいた全てのISと操縦者のシンクロ率が300%を超過した。その結果として、一時的ではあるけど、戦場にいた全部の機体が最終形態移行ファイナルシフトになった。本来なら形態移行なんてしない筈の紅椿ですらも……。これってやつぱり……」

岬の柵に腰かけた状態で、束は福音との戦闘時の映像を録画した映像を映したディスプレイと睨めっこしていた。

その画像の隣には、佳織のバリステイク・リヴァイヴを初めとした、戦いに参加した全てのISのデータが表示されている。

「そして、かおりんの成長速度……」

束が少し操作してディスプレイを切り替える。

次に表示されたのは、現在のバリステイク・リヴァイヴの機体の状態だった。

「ダメージレベルE……。ほんと……完膚なきまでにボロボロになっちゃったね……」

映像に映っているリヴァイヴは、見るも無残な姿を晒している。

最早、破損していない場所を探す方が難しい程に。

「このダメージの大半は、あの時に福音の攻撃の直撃を受けたのが原因。でも……これはそれだけじゃない」

また画面を切り替える。

次はリヴァイヴの稼働率が表示された。

「稼働率89.9%……。乗り始めてまだ半年も経過してないのに、この数値は異常すぎる。しかも、ちゃんと初搭乗時に設定されている筈なのに、もう機体の方がかおりんの反応速度についてこれなくなってる。今回の破損の10%ぐらいは、コアの方がかおりんの動きに無理矢理合わせようとして、悲鳴を上げたから……。こんな事って……」

「普通なら絶対に有り得ないな」

いきなり束の背後に気配が出現する。

森の中からいつものようにスーツを着た千冬が音も無く現れたのだ。

彼女の事を束は腰かけた状態で振り向いて見つめる。

「やつぱ、ちーちゃんもそう思う……?」

「ああ。担任教師として、佳織の事は間近で見てきたからな」

話しかけた後、千冬は僅かに前進して近くにあった木に背中を預ける。

千冬は目はずつと束の目を見つめていた。

「ISに乗らない時は、私達が知っているいつもの佳織だ。だが、一度ISに搭乗したら……」

「まるで人が変わったように性格が変わって、一騎当千の強さを発揮する?」

「そうだ」

先程まで真剣な顔でディスプレイを見つめていた束だったが、急に大人びた微笑みを見せる。

「……ちーちゃんはさ、かおりんの事をどう思ってる?」

「今更それを聞いてどうする気だ? 私の想いは全く変わっていない」

「あく……言葉が足りなかったね。私は、かおりんの戦闘能力についてどう思っている? って聞いたの」

「あいつの戦闘力……か」

顎に手を当てて、自分の考えを整理する千冬。

少しして言葉が纏まったのか、顔を上げた。

「ハッキリ言って異常の一言だな。少なくとも、私の知っている佳織はあんな少女じゃなかった。どこまでも普通で、何事も可もなく不可もなくを絵に描いたような……」

「そうだね。それに関しては私も同じ意見だよ。でも……」

ふと、束の視線が鋭くなる。

「ちーちゃんも既に気が付いてるんじゃない?」

「……何をだ」

「かおりんの持つ『才能』について」

「……………」

沈黙が場を支配して、風が吹く。

二人の髪が靡いて、その表情を隠す。

「かおりんには間違いなく才能がある。そう……『戦争』の才能が」
「……………」

「その才能は普段の生活の中では決して十全に発揮されない物ばかり。冷静な状況判断能力然り、優れた指揮能力然り、異常なまでの空間把握能力然り。そして…あのカリスマ性。中学の時に生徒会の活動とかで少しは片鱗が見え隠れはしていたみたいだけど、普段の生活じゃそれが限界。でも……………」

「ISと言う『兵器』に触れた事で、それまで隠れていた天才的な才能が一気に開花した……………」

「少なくとも、私はそう結論づけたよ」

話し終えて、束の表情が急に暗くなる。

「皮肉だよね…。私は自分の『夢』を叶える為にISを作ったのに、ISの持つ『兵器』としての側面に触れて初めてかおりんの持つ才能が判明するなんて……………」

「…………仕方あるまい。あの佳織が『戦争』の才能を持っているなんて、誰が想像なんてするもんか」

「うん…………。流石はあの『白狼』の一人娘だよ。チートなのは親譲り…………か」

「ふふ…………私達二人して、まだ信さんから一本取れてないからな」

「私達が二人がかりでかかってても、触れる事すら出来ないからね。全く…………信さんと言い、あの人の元同僚は皆して私以上のチートばかりしかないんだから……………」

佳織の才能の話から、気が付けば思い出話に花が咲く。

この瞬間だけは、二人は教師と科学者ではなく、幼い頃からの親友同士に戻っていた。

「で？佳織の機体の方はどうなんだ？」

「軽く調べてみたけど、想像以上に破損は深刻。私の予想通り、IS学園の設備でも全修復は難しいと思う」

「やはり…そうなるか」

「本当ならフランスに持ち帰って、一からオーバーホールした方がいいんだらうけど、それだと色々時間が掛かっちゃう。だから、ここ

は私が機体を持ち帰って修理をするよ」

「…いいのか？そんな事をすればフランスが黙っていないと思うが…」

「そこら辺は私が一言言えば問題無いでしょ。向こうだって、自分達が修復するよりははずっといいって思うだろうし」

「それもそうか…」

なんだかんだって、デュノア社も会社である以上は利益を優先しなくてはいけない。

その立場からすれば、無償で修復が出来る上に、あの篠ノ之束が手を触れたISを持つと言う肩書を手に入れる意味は大きい。

まさに向こうからすれば一石二鳥なのだ。

「さて…そろそろ行くのかな」

束が立ち上がり、尻に着いた汚れをパンパンと叩いて落とす。

「もう行くのか？」

「うん。かおりんに挨拶出来ないのは名残惜しいけど、今はゆっくりと休ませてあげたいし」

ディスプレイを消して歩き出そうとすると、千冬が引き止める。

「待て」

「なくに？ちーちゃんも私との別れを惜しんでくれるのかな？」

「そんな訳あるか。お前からばかり質問したんだ。少しは私からも質問させろ」

「ちえり。…で？何を聞きたいの？」

「私は回りくどい言い方は嫌いだ。だから、単刀直入に言わせてもらう」

「なんでしょ？」

一息してから、千冬は言葉を紡いだ。

「…あの福音を暴走させたのはおm「千冬さん！東さん！」…!?!」
言葉を遮るように後ろから叫んだのは、浴衣を着た佳織だった。

その顔は赤く上気していて、息も絶え絶えと言った感じで、旅館から走ってきたのが一発で分かった。

「か…佳織…？」

「かおりん……」

・
・
・
・
・
・

なんとか間に合った……!

なんか雰囲気的に束さんが帰りそうだったから、慣れない浴衣姿で急いできたんだけど……。

「な……なんでお前がここに……?旅館で休んでいたんじや……」

「そうですけど、少し前に目が覚めて、千冬さんがこっちに行くのを見て、それが気になってここまで来たんです」

「お前と言う奴は……」

あ……あれ?なんで千冬さんは頭を抱えてるの?

やっぱ、来たら不味かったかな?

「頼むから、自分が怪我人だと言う自覚を少しは持つてくれ……」

「はあ……すいません」

そういや、私ってば一回撃墜されたんだよね。

色んな事があって奇跡の復活を遂げはしたけど、それでも怪我をした事実は変わらないんだよな。

さつきは……その……流れで『あんな事』をしちゃったけど……。

「かおりん」

「はい?」

「さつきはお楽しみでしたね♡」

「ふえっ!」

……このセリフ……まさかこの人!?

「いや……この束さんも、まさかほっちゃんに先を越されるとは思わ

なかったよ」

「そ…それは……」

「二人の喘ぎ声。最高に可愛かったよ♡」

「喘ぎ声!」

私達の会話に千冬さんが大きく反応する。

ちよつとビクツツ!つてしちゃった。

「か…佳織!まさかとは思うが、布仏と……?」

「うう……」

そんな事、口で言えるわけないでしょ!

「ぬ…ぬかったああああああ!!二人とも寝ていたから、一緒にしても大丈夫と思つて油断していたのが仇となるとは……!!」

ちよ…千冬さん!今は夜だから、頭を抱えて大声を出すのは止めた方が……。

「そうだ。実はかおりんに渡す物があるんだった」

「渡す物?」

東さんからとは珍しい。

一体何を渡す気なんだろう?

東さんはスカートのポケットから何かを取り出して、私の所まで歩いて来てソレを手渡してくれた。

「これは?」

「お…おい。これはまさか……」

青く輝く綺麗なクリスタルだな。

感性の女の子寄りになつてるせいかな、普通に感動する。

「これはね、かおりんの専用機『ラファール・リヴァイヴ・バリステイツク』のコアだよ」

「コア……つて!もしかしてI S コアですか!?!」

「おふこーす」

これがI S のコア……初めて見た……。

つーか、直に手で触つても大丈夫なの?

「本体の方は私が持ち帰つて修理するから、コアの方はかおりんが持つてて。必ず必要になるから」

「そりや……」

そうでしょうよ。

だって、このコアには今までの戦闘記録とかが一杯詰まってるわけだし。

所謂、ブラックボックスなんだから。

「怪我が治って、夏休みにでもいいから、倉持技研に行ってみてよ」

「倉持技研だと？なんであそこの名が出てくる？」

「フフフ♪こんな事もあろうかと、実はあそこに事前に話は通してあるんだよね」

倉持技研って……一夏の『白式』や簪の『打鉄式式』、他にも学園とかに配備されている日本産の量産機『打鉄』を開発した研究所……だよね？

ISの開発者と言うだけあって、色んな研究所には顔が効くのか……。

この人ってやっぱり凄い人なんだな……。

「リヴアイヴを修理している間、専用機が無いのは不便でしょ？だから、あそこで新しい専用機を受け取るといいよ」

「新しい専用機!?!」

そ…そんなのが用意されてるの!?

しかも、束さんの口添えで!?

「また無理難題を言ったんじゃないだろうな？」

「そんな事は言っていないよ。ただ、少しでも作業が早く進められるように、これまでの戦闘データや映像なんかを予め送ってはいるけど」

「お前にしては手際がいいな……」

「かおりんの為だもん」

いや……マジでどこまで先を見据えてるんですか……貴女は……。

この人こそが本当のニュータイプじゃないのか？

もしくはイノベーター。

「よかつたら、ちーちゃんも一緒に行ってあげてよ。流石に一人じゃ心細いだろうし」

「そうだな。私も付き添った方が話も早いだろう」

「えくつと……その時はよろしくお願いします」

「任せておけ」

頭を撫でられた。

私が怪我をしているからか、その手つきは優しい。

「倉持技研で新しい専用機……白式の『姉』がかおりんを待ってるよ」

白式の……姉？

「ほう？それは興味深いな」

「!!?!」

いきなり後ろから声が!?

しかも、この声って……

急いで後ろを振り向くと、そこには金色の装飾が施された真っ赤な軍服に、真っ白なミニスカートを履いていて、同じように白いブーツを履いた目の部分を覆う仮面をつけた金髪の女の子が悠然と立っていた。

月明かりに照らされて、彼女の金髪が眩しく反射する。

「わ……私が全く気が付けなかっただ……! 誰だ貴様は!?!」

「き……君は……」

いくら仮面をつけていても、その顔つきと声ですぐに分かった。

「知っているのか……?」

「あ……はい。昨日、千冬さんをマッサージした後に入った温泉で偶然出会って、それで……」

「その通り。昨日は楽しかったな、佳織」

「う……うん……」

昨日の今日で名前呼び……。

別に気にしないけど。

「き……貴様も佳織の裸体を見たと言うのか……!」

「そこに注目するのか?」

あ、呆れてる。

「……なんで」

「ん?」

「なんで君は……かおりんと同じ声してるの?」

「そうだ……私が彼女の事を忘れられないのは、私と同じ声だからだ！」

「顔が似てる人間なら少なからず存在する。けど、声まで全く同じなのはおかしいよ」

「その答えは簡単だ」

「どういう意味？」

「私は彼女だからな」

また……！

「それは前にも聞いたけど、もうちよつと分かりやすく言ってくれない？」

「そう言われてもな。私と言う存在を一言で言い表すには、これが最も適切なんだよ」

「別に一言で言う必要はないでしょ……」

詳しく言わないと伝わらない事だつてあるよ？

「君は……かおりんのお友達？」

「友達……か。そんな関係になれたらいいとは思うがね」

その言葉は……なんか悲しいよ。

心なしか、表情も暗くなった気がするし。

「それよりも佳織。暑くなってきたとはいえ、夜はまだ冷える。そんな恰好では風邪を引いてしまうぞ」

「あ……ありがとう」

彼女が私に何処からか出した赤い上着を着させてくれた。

「しれつと紳士的行動を……！」

「まるでかおりんみたいだね……」

え？ 私って普段からそんな風に見られてるの？

こんな時に新発見？

「な……なんか話しが逸れたけど、私としてはもう一つだけ君に聞きたい事があるんだよね」

「一体何かな？ 篠ノ之束博士」

「こいつ……束の事を……！」

「いや、世界的な有名人だから、知ってても不思議じゃないけど……」

「む……」

生徒に教師がツッコまれてどうするよ。

「……君が福音を暴走させたの?」

「なっ……!?!」

「……この子が福音を……!?!」

ち……違うよね? 東さんの早とちりだよ?

「お……おい! 私はてつきり東が暴走させたとばかり……」

「いや……確かにやろうと思えば出来るけど、今回は私じゃないよ!?!」

「今回は?」

「あ……」

自ら墓穴掘りやがった。

あと、あの無人機が東さんの仕業だって私も知ってますよ。

……ここでは言わないけど。

「ふむ……」

なんで否定しようとしないの……?

「私と言うよりは……」

彼女の顔が空の方を向く。

『彼女』だな」

か……彼女?

その時、私達の上いきなりISを纏った女の子が出現した。

「な……なんだと!?!」

「そんな! 今まで反応なんて無かったのに!」

月明かりに照らされた丸みを帯びた紫色の装甲。

その形状は今まで見た事のないタイプだった。

「お迎えに上がりました。大佐」

「ご苦労だった」

「大佐……?」

……この子の事を言ってるの……?

いや、それよりも!!

「う……嘘でしょ……!?!」

「ば……馬鹿な……!」

見覚えのある髪型に紫の長髪……あれは……。

「束さんと……同じ顔……？」

第55話 本当の始まり

ど…どういう事なの…？

あの、どこかで見た事のあるような形状の I S に乗っている東さんにそっくりな女の子は…。

顔付き、髪の色と髪型、そして…声。

そのどれもが東さんそのものだ。

けど、少しだけ幼い印象も受ける。

分かりやすく言えば、彼女は学生時代の東さんだ。

「佳織に似ている奴の次は…東に似ている奴だと…?!」

「……………」

千冬さんは驚きを隠せないでいるし、東さんに至っては口を開けた状態で絶句している。

「少々帰る準備に手間取ってしまい、来るのが遅れてしまいました。

申し訳ございません」

「気にするな。私は十分に感謝しているよ」

「有り難き御言葉…」

この様子…この子は彼女に完全に心酔している。

いや…心酔を通り越して、もはや信仰に近いかもしれない。

私達が驚いている間に、東さんそっくりの女の子は『彼女』の傍まで移動して降り立った。

「君は…何…？」

震える唇で東さんが何とか声を絞り出す。

その顔は夜になって気温が低くなっているにも拘らず、汗が滲み出ている。

東さんの質問が出た途端、紫の女の子の顔が怒りに歪んだ。

「私は何…だと…？私はお前だよ!!篠ノ之東!!」

静かな空間に怒りに満ちた声が響く。

「お前もそれを言うのか…!」

「事実だからな!」

ちよっとした一言にも怒りが混じっている。

それ程までに東さんを憎んでいるのか……!

「アンジェロ。今は夜だ。少し声のボリュームを控えろ」

「す……すいませんでした! 周囲に対する配慮が欠けていました……
いきなりシユン……となる、アンジェロと呼ばれた子。

まるで借りてきた猫状態だ。

「アンジェロ……?」

「そうだ。アンジェロ・ザウパー。それが私の名だ」

ア……アンジェロ……アレに出て来た……。

彼女が『アンジェロ』なら、私にそっくりなあの子は……。

「本来ならば名前を言うのはタブーだが、貴様等だけは別だ」

「なんだと……?」

「織斑千冬……仲森佳織……そして、篠ノ之束。貴様等だけは……」

「アンジェロ」

少し喋りすぎたのか、ギロリと睨まれて大人しくなる。

「ちよつと待って……。君はなんて言うの……?」

「そうだな。佳織にはまだ私の名を教えていなかったな」

心臓がドキドキを通り越してバクバクと脈打っている。

気が付けば手に汗を握っていた。

「私の名は『フル・フロンタル』。よく部下からは大佐と呼ばれているよ
!!!」

フル……フロンタル……!!

夢の中で女神とシヤア大佐が言っていた『闇の現身』……。

この世界における『シヤア・アズナブル』が私なら、別の意味で対
となる存在である『フル・フロンタル』が彼女になるの……?

「フル・フロンタル……。『丸裸』……だと?」

「確かに、日本語に訳すとそう言う意味になるな。別に気にはしてい
ないが」

自分の名を明かしても、まだ余裕のある態度をしている。

この感じ……宇宙世紀のフル・フロンタルに凄くそっくりだ……。

「それよりも、先程なんといった? 福音を暴走させたのは……」

「私だよ。福音を暴走させたのは、このアンジェロ・ザウパーだ」
「なんで！なんでそんな事をしたの!?!」

東さんが焦燥に駆られたように尋ねる。
いつもの飄々とした態度は完全になりを潜めていた。

「大佐からの命令だったからだ」

「それだけ……?それだけで……」

「大佐の命令は絶対だ」

「お前は……」

このアンジェロも、私の知っている『アンジェロ』と中身がよく似ているよ……。

『フル・フロンタル』に心酔している所とか特にね……!

「でも、どうやって暴走させたの……? ISを暴走させるなんて、そう簡単出来る事じゃ……」

「確かにそうだろうな。だが、『私』になら可能だ」

「それは……君が私だから……?」

「そうだ！篠ノ之束……お前に出来る事、それは即ち私にも出来る事なんだよ!」

東さんに出来る事が出来る……。

それはつまり、このアンジェロも東さんと同じ頭脳を持っているって事……?

「それじゃあ……君が纏っている見た事も無い ISは……」

「私が一から造り上げた」

「一から……?」

「設計から開発。勿論……コアもな」

「コ……コアも作れるの!?!」

「この『ギラ・ズール』は私が開発した世界初の第三世代の量産型 ISだ」

「ば……馬鹿な!?!第三世代の量産機だど!?!」

「機体性能は勿論、汎用性と拡張性も打鉄やラファールを大幅に上回っている。篠ノ之束とは違って、私は己の才能に胡坐を掻いたりはない。常に自己研鑽を怠らないのだ。故に、これを開発できた」

東さんと同じレベルなのに、そこから更に努力を欠かさなかった
て言うの…？

もうチートの上更に上を行ってるじゃん…。

「アンジェロ。気持ちは分かるが、少し話すぎだ」

「はっ！」

ISを纏った状態で跪いた。器用だなく…。

「む…：…？」

「どうした？アンジェロ」

「仲森佳織が手に持っている物…。あれは…：…」

「え…：…？」

「…：…このコアがどうしたの？」

「…：…情報解析…：…結果表示。…：…やはりか」

「な…：…なに…：…？」

アンジェロは静かに立ち上がり、こっちを見据えた。

「篠ノ之束。仲森佳織が手に持っているコアは…：…『ZERO』だ
な？」

「そ…：…そこまで知って…：…！」

「当たり前だ。貴様の知識は私の知識でもある」

ゼ…：…ゼロ？なにそれ？

「あのような現象が発現した時点で、もしかしたらとは思っていたが、
案の定か…」

「アンジェロ。佳織が持っているコアが、昼間に言っていた『アレ』か
？」

「はい」

なんか…：…私だけ置いてきぼりになってるんですけど。

「なんで奴の機体に搭載されていたかは知らんが、大方、直にデユノア
社に渡したか、もしくは製造段階で量産機のコアの中に密かに紛れ込
ませたか…。その辺りだろうな」

前者はともかく、後者は普通なら絶対に不可能だ。

でも、束さんなら出来そうなんだよな…。

「お…：…おい束！ZEROとは何だ?!佳織のリヴァイヴのコアは通常の

コアじゃないのか!？」

「そ…それは…」

思いつきり目を逸らす束さん。

「そいつに聞いても無駄だ。他の事ならいざ知らず、ZEROに関しては例え拷問を受けても絶対に喋らんだろうよ」

「ぐ……」

凶星なのか、胸を抑えて蹲る束さん。

まあ……この人にまともな拷問が効くかどうかだが、そもその疑問だけだ。

「い…言っとくけど、このコアは絶対に渡さないからね!」

「別に取りつもらいはない。不愉快極まりないが、そのZEROはお前を真の主と認めた。ここで強奪しても全くもって無意味だ」

み…認められてるの?このコアに?

「それに……今の我々には無用の長物だ。『コレ』があるからな」

そうやってアンジェロが取り出したのは、私の持つコアと同じ形状の物体だった。

「え……?」

また束さんが呆けた声を出す。

今日は珍しい束さんをよく見るな。

「ど…どうして?!ソレはラボで厳重に保管してるはず!!」

「厳重?ああ……あのセキュリティの事を言ってるのか?お前が施した封印を、私に解けない道理があるわけがないだろう?」

「た…例えそうだったとしても、一体いつ……」

「普段はラボから出ない癖に、色々と理由を付けて外出しているよな。そう……あの銀髪の実験体を連れ帰った時も……」

「!!……クーちゃんと初めて会ったあの日……あの時に……」

「無人になったラボに侵入するのは、どこぞの軍事基地に入るよりも楽だったぞ。お蔭で苦も無く手に入った」

あのコアは束さんのラボから盗み出した物なのか!?

でも、厳重に保管って……あれはそれほどに大事な物なの?

「まさかとは思うが……あのコアは……」

「うん…。あの子が手にしているのは……」

「白騎士のコアだ」

し…白騎士のコア!?なんで!?

あれは白式に搭載されている筈じゃ…!

「返して!!それは!!」

「お前に言われずとも全部知っているよ。だからこそ欲した」

白式のコアがかなり重要な存在なのは私も理解出来る。

でも、手に入れて一体どうする気なの?

「そろそろ帰るぞ。長話をしていたら私も冷えてきた」

「なんですって!!?それは大変だ!一刻も早く帰還し、大佐のお体を温めなければ!!」

慌てるのってそこなの?

なんつーか…別の意味で東さんにそっくりな気がしてきた。

一般的な常識が通用しない辺りとか。

「そう易々と逃がすと思うのか?」

「白騎士のコア…今すぐに返してもらおうから!」

「ふふ…お前達にそれが出来るかな?」

「なんだと?」

「それよりも……」

フロンタルが急に私の方に寄って来た。

ちょ…顔が近いんですけど!?

「佳織。私達と一緒に来ないか?」

「え…?」

「お前は何を言っている!!」

「私は本気だよ」

仮面越しだけど、その真剣さはひしひしと伝わってくる。

でも、私の答えは……

「ダメ」

「ほう…?」

「今の私には大切な人達がいる。彼女達を放ってどこかに行くなんて有り得ない」

「……そうか」

落胆した顔を見せると、フロントアルはアンジェロに掴まって宙に浮く。

「待てー！フル・フロントアル！貴様はなんだ!?何が目的なんだ!?!」

「さつきも言ったはずだ。私は佳織であり、佳織は私でもある。そして……」

フロントアルが微笑を浮かべる。

「私は『器』だよ」

「器……?」

「そう。ISと言うオーバーテクノロジーによって歪められた世界に傷つけられ、殺された人々の悲哀、憎悪、怨嗟、憤怒。それらを全て受け止めて、彼等の想いと意思を受け入れ、体現する為だけに存在する『器』。それが私だ」

この『フロントアル』も自分の事を『器』と言うのか……。

「その上で私はこの狂った世界を『回帰』させる」

「そして、それは人知を超越した大佐にしか出来ない事！少なくとも、戦うしか能のない女と他人を見下すしかない天災には絶対に不可能だー!」

「貴様……!」

回帰って……彼女達はこれから何を……。

「覚えておきたまえ。私は私の意思で動いてはいない。私は今を生きる人々の『総意』なのだ」

それだけを言っつて、二人は上昇し始める。

「私は力づくでなんとかしようとするのは余り好みではない。故に今回は大人しく引くが、いつの日か必ず君を迎えに行く約束しよう。では……さらばだ」

「篠ノ之束!!貴様だけは、この私が必ず殺す!!覚えておけ!!!」

「待て!!!」

千冬さんの静止なんて聞くはずも無く、二人は夜の空へと消えていった。

「……ちーちゃん」

「分かっている。あいつ等を追うんだらう?」

「うん。絶対に白騎士を取り戻さないと」

「いつにも無く真剣な束さん。」

「こんな状況で失礼かもしれないけど、少しだけドキッてした。」

「かおりん」

「ふあっ!」

「急に抱きしめられた!」

「あ……いい匂いがする。」

「多分、あのフロンタルって子を止められるのはかおりんだけだと思う。だから……」

「分かってますよ。例え何があっても彼女達について行ったりとかしません」

「それが聞けただけでも安心だよ」

「少しして束さんは私から離れた。」

「ちよっぴり名残惜しい。」

「あの子達に対抗する為にも、倉持技研には絶対に行つてね」

「その件ならこつちに任せろ。私も多少はあそこに顔が効く」

「ちーちゃんなら大丈夫だね。じゃ、お願い」

束さんは崖の方に向かって歩き出して、淵に着いたところでこつちを向いた。

「追跡をしながら、二人の正体も探ってみるよ。……なんとなく予想はついてるけど」

「私もだ。だが、念には念を入れて損はあるまい」

「私も同感。それじゃ、またね!」

最後に南面の笑みを浮かべてから、束さんは夜の海に消えた。

多分、崖下に何か移動手段を持ってきてるんだらう。

「佳織……」

「言われずとも。さっきまでの事は誰にも言いません」

「頼んだ……」

「なんとか無表情を装ってはいるが、悔しさを滲ませているのは明らかだった。」

「では、旅館に帰るか」

「はい。……って、なんでいきなりお姫様抱っこ!？」

「お前は怪我人だと言っているだろう。少しでも負担を減らすためだ」

「いや、だからって!」

「ほら、行くぞ」

「ちよ……ちよっと!？」

ああ〜もう!どうして最後まで締まらないかな〜!?

.....

.....

.....

.....

宵闇の空を飛びながら、アンジェロがフロントルに疑問を投げかける。

「本当によかったのですか?」

「何がだ?」

「その気になれば、あの場で仲森佳織を捕縛する事も……」

「確かに出来たかもしれない。だが、下手に実力行使をすれば篠ノ之束と織斑千冬を同時に相手しなければいけない。仮に勝利できたとしても、佳織を巻き添えにする可能性がある」

「ですが、大佐のお力を持ってすれば……」

「私は何事にも万全を尽くす。分かるな?」

「……過ぎた事を言いました。すみません」

「構わんよ。お前が私の事を思ってた事は分かるからな」

「大佐……♡」

「それに……」

夜空を眺めながらフロントルは笑顔を浮かべる。

「佳織には力ではなく言葉で来てほしいのさ」

「言葉……」

「彼女もまた、私と同じ『器』となる存在なのだから……」

「そう……ですか」

それだけを言っ、アンジェロは仲間達との合流地点に急いだ。

・

・

・

・

・

次の日。

旅館で朝食を終えた私達は、ISや専用装備の撤収作業を開始する。

とは言っても、私は参加させてもらえなかったけど。

私が作業に加わろうとすると、本音ちゃんや専用機持ちの皆が先回りして仕事を終わらせてしまう。

結局、私は皆の作業を端から見学していた。

全部の作業が終わった頃には既に午前10時を過ぎていて、皆がそれぞれにクラス別のバスに乗り込む。

お昼は帰り道のサービスエリアでするみたい。

実は地味に楽しみにしています。

「かっおりん♡」

「んん？どうしたの？」

「えへへ…呼んでみただけ♡」

「なにそれ」

隣にいる本音ちゃんが私の腕にしがみつきながら無邪気に笑っている。

昨日の出来事があつて、どうしようか迷っていたけど、本音ちゃん自体はいつもと大して変わらない。

なら、私もなんとか頑張って普段と同じでいよう。うん。

「な…なんだ…？佳織と本音との間にピンク色の空気が見えるような……」

「やっぱ……箒にも見える？」

「あの晩、佳織さんは本音さんと二人っきりの部屋で寝たと聞きましたけど……」

「何かあったのかな…？」

「すぴ……佳織い……えへへ…」

なんか4つほど視線を感じるけど、気にしない気にしない。

あとラウラ……夜も十分に寝たでしょうに、なんでまた昼寝してるのさ……

寝る子は育つってか？

「な…なんか仲森さん……包帯とか巻いてるけど、大丈夫かな…？」

「うん。ちよつと心配だよね…」

「作業も見学してたし…」

「私達も少し気遣ってあげようか…」

うう……今日だけはひそひそ話が聞こえて嬉しい…。

これからはもつと気を付けないとな…。

もう、誰かに心配を掛けさせるのは嫌だから…。

「あれ？」

バスの外に誰かがいる。

あの姿は、どこかで…

「あ」

バスの中に入って来た。

綺麗な金髪が眩しい、青いサマースーツを着た美人さんだった。

歳は千冬さんと同じか、少し下ぐらい？

「ねえ、この中に仲森佳織さんっている？」

「はいっ」

私を呼んでる？

「仲森は私ですけど…」

「ふうくん……貴女が…」

女の人はこつちまで来ると、腰を折って私の顔を見つけてきた。

「噂に名高い『赤い彗星』。今までは映像越しにしか見た事なかったけど、直に見ると結構な美少女じゃない」

「はあ……」

私の事を異名で呼ぶって事は、この人もISを？

「あのく……貴女は……」

「ああ……まだ名乗って無かったわね」

女性は胸の谷間に持っていたサングラスをかけて起き上がった。

「私はナターシャ・ファイルス。『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルのパイロットよ」

「あ……」

「そーいや、こんな顔だったような気が……」

あの時は色んな意味で必死だったから、よく覚えてなかったけど……

「事の経緯は千冬から聞いたわ。今回は貴女に助けられたみたいね」

「私だけの力じゃありません。皆で力を合わせたから、貴女を助けられたんです」

「それも聞いている。でも、一番の活躍をしたのは貴女なのもまた事実でしょ？」

「そー……ですかね？」

自分が活躍したなんて自覚は全くない。

私は私に出来る事をやっただけに過ぎないんだから。

「貴女には大きな借りが出来てしまったわね。本当にありがとう」

「どういたしまして……」

て……と最後まで言えなかった。

何故なら、ナターシャさんの唇が私の唇に重なっていたから。

「は………？」

「いつの日か必ず、貴女には個人的にお礼をするわ。それじゃあね、可愛い『赤い彗星』さん♡」

「は……はい……また……」

ナターシャさんが去りながら手を振ったので、私も反射的に手を振る。

彼女がバスから降りるまで手を振り続けて、顔が熱いのをずっと感じていた。

ふと隣を見ると、本音ちゃんが目を丸くしてこっちを見ていた。

「か…かおりん!!」

「ちよ…どうした…」

また最後まで言えなかった。

今度は本音ちゃんがキスしてきたから。

「「ええ〜〜〜!!」」

「う〜ん…?なんかうるさいぞ〜…?」

あ、4人の大声でラウラが起きた。

「上書きする!」

「はい?」

「私のキスで上書きするから!むちゅ…」

有無を言わずに再びキスをする本音ちゃん。

もしかして、降りるまでずっとこうなの?

・
・
・
・
・
・
・

佳織に会った後にバスから降りたナターシャは、千冬の姿を見つけてそっちに向かう。

「貴様…佳織に何をした?」

「私はただ、アメリカ流のお礼をしただけよ」

「ふう〜ん…」

「お願いだから疑いの眼差しは止めて」

冷や汗を掻きながら目を逸らすナターシャ。

「思ったよりも元気があるようだな。あれだけ痛めつけられたと言うのに」

「それなら大丈夫よ。ずっと『あの子』が守ってくれてたから」
「そうか……」

ナターシヤが言う『あの子』とは勿論、彼女の相棒であり、今回の事件の最大の被害者でもある福音の事だった。

「あの子は私を護る為に望まない戦いをした。その為にあらゆる手を尽くし、コア・ネットワークすらも切断して。……佳織ちゃんを殺しかけたのは心から悪いと思ってるけど……」

「それに関しては、佳織は気にしてないだろう」

「みたいね。さっきもあの子は全く自分の事について触れようとしなかった。自分よりも他人を優先する。聞こえはいいけど、それは人としてかなり歪んでるわ……」

佳織の歪さは千冬も理解している。

一番厄介なのは、佳織本人がその事を全く自覚していない事だった。

「佳織ちゃんの為にも、私は今回の犯人を絶対に許すつもりはない。私の分も、あの子の分も、佳織ちゃんの分も、纏めて借りを返してあげるわ。地の果てまでも追いつめて……ね」

ナターシヤの決意の固さを知り、何も言えなくなった千冬。

昨夜の事を言うべきか迷ったが、少しだけ濁して言う事にした。

「あまり無茶な事だけはするなよ。……もしかしたら、今回の犯人は私やお前が想像しているよりも遥かに強大な存在かもしれない」

「それは忠告かしら？ブリュンヒルデ」

「忠告と言うよりは警告だ。下手に挑めば返り討ちになるぞ」

「……胸に止めておくわ」

少し間を開けて、千冬はナターシヤを見る。

「それともう一つだけ言っておく」

「あら、なにかしら？」

「佳織は絶対に渡さん。お前のような奴には特にな」

「ええ？実は私、今回の事で割と本気で佳織ちゃんの事が好きに

なっただけだ」

「な…なにっ!？」

「恋は駆け引き。そして、戦争でもあるのよ。下手なプライドなんて持ってたら後悔するわよ?」

「それは忠告か?」

「いいえ。これはアドバイスよ。恋のライバルに送る…ね」

優美な微笑みを見せると、ナターシャは背を向けて歩きだす。

「いつか近いうちに佳織ちゃんをアメリカに招待しようかしら?」

「い…行かせんぞ!」

「招待を受けるかどうかは佳織ちゃん次第じゃない?」

「ぐぬぬ…!」

「それじゃ、グッバイ♡」

手をひらひらとさせながらナターシャは去っていった。

その背中を千冬はずっと睨み付けていた。

「唯でさえ布仏が一番リードしているのに、これ以上増えてたまるか!」

だが、その発言がフラグである事を、千冬はまだ知らない。

IS学園にはまだまだ、佳織の事を狙っている少女達がいるのだ。

こうして、波乱に満ちた臨海学校は幕を閉じた。

そして、本格的な夏が始まる。

第56話 強くなりたい

波乱とも言うべき臨海学校から学園に帰ってきて、私を初めとした生徒達は疲れた様子で荷物を持ちながら学生寮へと向かっていく。学園に到着したのは6時間目の授業が始まるぐらいの時間で、バスから降りた直後に校舎からチャイムが鳴った。

千冬さんが言うには、今日はもう寮に戻って休んでいいらしい。その代わり、寮から出るなどは言われたけど。

まあ……臨海学校から帰ってきたばかりとは言え、今日は平日。ある意味、当然の事だった。

私と本音ちゃんも皆と一緒に荷物を持って寮の部屋に行こうとしたのだが、なんでか一夏と箒も一緒についてきた。

しかも、自分達の荷物とは別に私の荷物を持って。

「な……何故に?」

「織斑先生も言っていただろう。怪我人に無理はさせられんと」

「遠慮しないで、荷物は私が持ってあげるから」

「ここはお言葉に甘えた方がいいよ」

「うん……」

確かにまだ体が痛いのは事実だけど、荷物を持ってないぐらいじゃないんだけど……。

心配をしてくれるのは純粋に嬉しいんだけど、ちよつと過保護すぎじゃない?」

「と……ところで……な……」

「どうしたの?」

「か……佳織と本音はその……もう……」

「そ……それは……」

確かにやったのは事実だけど、私と本音ちゃんが付き合っていると言われたら、正直疑問が生まれる。

私自身は本音ちゃんを親友以上に大切に思っているけど、それ以上かと問われたら……。

「だいじょく」

「「え？」」

ほ…本音ちゃん？

「私はおおりんも大好きだけど、同じぐらいに皆の事も好きだから。まだ大丈夫だよ」

だ…大丈夫？何が？

「そ…そうなの…？」

「うん。だから、別に私の事は気にしなくてもいいよ？」

「わ…分かったよ」

……なんか、私の目の前で謎の協定が生まれた気がする。

「ちゃんと、後で他の皆にも言わないとね」

「そう…だな。何も知らないままじゃ、これから先が気まずくなるだけだしな」

「しっかし……本音ちゃんは大人だなく…。私も少しは見習わないと」

「えへへ……」

そりやく……あんな経験すれば、嫌でも精神的に大人にもなりますわな。

私から見ても、なんだか本音ちゃんが時々大人びて見えるし。

「お、着いた」

どうやら、話しながら歩いている間に部屋に着いたみたい。

「どうせなら、中まで運ぼう」

「いや、流石にそこまでは……」

「「佳織（かおりん）？」」

「……是非ともお願いします」

「「よし」」

この怪我が完治するまでは、下手に逆らわない方がいいな……。

因みに、この状態じゃお風呂には入れないから、本音ちゃんに濡れたタオルで体を拭いてもらった。

お互いに裸を見た仲ではあるけど、それでもまだ恥ずかしい事は変わらなかった。

……早く怪我を治して、一人でゆつくりとお風呂に入りたい……。

割と切実に。

・
・
・
・
・
・

次の日。

私と本音ちゃんはいつものように起床し、途中で出会ったシャルロットとラウラの二人と一緒に食堂へと向かっていた。

「まだ痛む？」

「まあね。でも、騒ぐほどじゃないよ。少なくとも、日常生活に支障が出るレベルじゃないから」

「けど、油断は禁物だよ。いつ傷口が開いたりするか分からないからね」

「りょーかい」

私だってそんなのは御免だ。

怪我が癒えるまでは細心の注意を払わせてもらうよ。

「昨夜はどうしたんだ？その状態では風呂には入れないだろう？」

「そう言えばそうだね。昨夜は二人とも大浴場には来なかったし。部

屋のお風呂に入ったの？」

「本音ちゃんはね。でも、私はこの通りだから……」

「私が体を拭いてあげただく」

「ええっ!？」

ん？驚くような事かな？

因みに、今は保健の先生に貰っている予備の包帯を巻いている。ずっと同じものを巻いているわけにはいかないからね。

「か…体を拭いたと言う事は…勿論……」

「シャ…シャルロット？顔が真っ赤になってるよっ…」

「ふふ〜♡デユノツちはエッチだねえ〜」

「ほ…本音?!いきなり何を言い出すのさ!?!」

朝っぱらから元気ですねえ〜。

羨ましい限りだよ。

「下手に入浴なんかしたら却って怪我が悪化する可能性もあるしな。ナイス判断だ、本音」

「わ〜い!ラウラウに褒められた〜!」

多分、ラウラは純粹であるが故に何も分かってないな。

でも、こんな子ほど暴走したらどうなるか分からないんだよね〜。

ブレーキが効かなくなるから、真っ直ぐに突き進むって言うか、猪突猛進って言うか。

「ま、今は少しでも沢山食べて、少しでも血を取り戻さない」と

「あはは…割と派手に出血してたしね…」

そうそう、あの福音の事件はアメリカやイスラエルの軍部がIS委員会と一緒に隠蔽工作をして、事件自体が無かったことにされている。

勿論、実際に作戦に参加した私達や先生達にも箝口令が敷かれた。

もしも話したりしたら…推して知るべしである。

「ちよ…ちよつとそこ!待つつス!」

「「ん?」」

廊下に響くいきなりの大声。

誰かと想い振り向くと、そこには息を切らせたフォルテ先輩がいた。

「お〜い、フォルテ〜。さっきから何を焦って…」

あ、後ろからダリル先輩も来た。

けど、彼女の声を無視するようにフォルテ先輩はこっちに近づいてきた。

「い…一年の子達が君が大怪我をしたって噂してたけど…」

「あ〜…」

もう広まってるんだ〜…。

ほんと、閉鎖社会だと情報の広まりが早いわ。

前にも同じ事を言った気がするけど。

「ご…この人は？」

「確か、2年のフォルテ・サファイア先輩だ。ギリシャの代表候補生だと聞いているが」

そっか、他の皆はまだ会ったことが無かったっけ。

「そ…その手…それに頭も…足まで…」

震える手で私の手を握りしめる。

私の手は包帯でぐるぐる巻きになっていて、まるでムエタイの選手がしているテーピングみたいになっている。

「君って子は…少しは自分を大切にするっすよ！」

「は…はい!？」

怒られた!?!なんで!?

「佳織ちゃんは女の子なんすよ!?!こんな風に体を痛めちゃダメじゃなっすか!ただでさえ佳織ちゃんは無理をしがちなのに、これ以上怪我をしようするんすか!？」

「ご…ごめんなさい…?」

「疑問形じゃダメっす！」

「は…はい!すいませんでした!」

うう……なんか怖いんですけど!?

「フォルテ、そんなに騒ぐなよ。皆が見てるじゃねえか」

「え…?」

動きを止めて周りを見てみると、廊下にいる全ての生徒がこっちに注目している。

フォルテ先輩も恥ずかしそうにしているけど、私だって恥ずかしいんですよ!?

「み…見るなっす!!」

フォルテ先輩の精一杯の声で、止まっていたやじ馬達は再び動き出した。

「にしても…『佳織ちゃん』ねえ?」

「な…何っすか。意味深に言っ…」

「いやね。なんだかんだ言っ…お前も佳織の事が心配だったんだな

「うって思って」

「わ…私は…」

さつき以上に顔が真っ赤になったし。

「あまりからかつちやダメですよ」

「ははは！別にいいんだよ、これぐらい」

いつもみたいに笑ってるけど、それだけ気心が知れた仲って事なのかな？

「けどな、フォルテじゃねえけど、オレだってお前の事はかなり心配してたんだぜ？」

「え？」

ダリル先輩が私の頭を撫でながら、耳に顔を近づけた。

そして、周囲に聞こえないように小声で話します。

「こう見えてもオレってアメリカの代表候補生だからさ、今回の事件の顛末とかはそれなりに知らされてるんだわ」

そう言えばそうだった…。

直接事件に関わっていなくても、代表候補生ってだけで知らされるもんなのか…。

国の名を背負うって本当に大変なんだな…。

「だから、お前の怪我の原因とかも全部知ってるわけ」

「そ…そうですか…」

「…あんな無駄とかすんなよ。自分の事を苛めたって何にも得はねえぞ？」

「……はい」

この人にも心配を掛けさせたみたい…。

急に自分が不甲斐なく感じるよ…。

私が密かに落ち込んでみると、ダリル先輩は顔を元の位置に戻した。

「何か困った事があったりしたら、いつでも来い。佳織の為なら喜んで力になってやるからよ」

「あ…ありがとうございます…」

粗暴なイメージがあるダリル先輩だけど、この人自身はすごい美

人だから、こうした微笑みってかなり絵になるんだよな…。

こんな顔を見せられたら……ちよつと照れる。

「つて！なに二人していい雰囲気になってるんスか！」

「おやく？それは佳織とイチャついているオレに嫉妬してんのか？それとも、オレと仲良くしている佳織に嫉妬してんのか？」

「そ…それは…」

「ほれほれ、白状しちまえ」

「し…知らないっスよ！もう！」

我慢の限界に來たのか、フォルテ先輩はこの場から去って食堂に向かおうとする。

けど、なんで私の手を掴んでるの？

「ほら！佳織ちゃんも、他の子も、ダリルもさっさと来るっスよ！食べる時間が無くなっちゃうっス！」

「ちよ…ちよつと!?!」

フォルテ先輩は私と手を繋いだ状態で早歩きで食堂に向かう。

「……なに？あれ……」

「分からん……」

「やっぱり…かおりんは年上キラーなんだね……」

皆…!?一緒に來ないの…!?

「あはははは！色々と文句を言いつつも、結局はフォルテも佳織の事が好きなんじゃねえか！」

「そんな事は無いっス！」

「それ、本人の目の前で言います？」

「あつ!?!別に君の事が嫌いって訳じゃなくて……」

急に焦りだす先輩。

なにこの可愛い生き物。

「ほれほれ！オレ達も行くぞ！後輩共！」

「二は…はあ…」

こうして、私達は朝食を先輩二人と一緒に食べる事になった。

いつもとは違うメンバーでの食事だったので、普段よりも新鮮な気がした。

・
・
・
・
・
・

朝のホームルームにて期末テストの事を聞かされて教室中が阿鼻叫喚に包まれて、今日の授業が始まった。

今日はISに関する授業が一切無い、所謂『通常授業』の日だ。

このIS学園は通常の高校とは少し違う。

世間的に言えば、専門学校に近いんだと思う。

だからだろうか、こんな風な授業は本当に久し振りだ。

今までも通常授業が無かったわけじゃないけど、回数は極端に少ない。

やっぱり、ISの授業が優先される事が多いみたい。

午前の授業が終了し、昼食を食べた後に一人でトイレに行って教室に戻ろうとしていると、途中でプリントの束を持って歩いている山田先生と遭遇した。

小柄な体にかかりの量を持っていた為、なんだか大変そうに見えた。

重さに困っていると言うよりも、持ちにくさで困っているようだった。

副担任のそんな姿を見せられて、何もしないクラス代表じゃありません！

「山田先生。一緒に持ちますよ」

「な…仲森さん？」

山田先生が持っているプリントの上半分を持って一緒に歩く。

「だ…大丈夫ですよ！これでも鍛えてますから！」

「でも、困ってましたよね？」

「うう……」

「最近はずっかり忘れがちですけど、私は一組のクラス代表です。困っている副担任を放置なんて出来ません」

「仲森さん……♡」

山田先生の目がウルウルし始めた。

目にゴミでも入ったかな？

「何処に持っていくんですか？」

「あ……職員室です」

「分かりました」

「このプリントも授業で使うのかな？」

だとしたら、見ないように気を付けないと。

「仲森さん。お怪我の具合はどうですか？」

「日常生活に支障は無いぐらいには大丈夫です」

「で……でも、無茶はダメですからね？」

「ふふ……そのセリフは皆から散々と言われました」

耳にタコが出来る……って言うんだっけ？こう言うの。

歩幅のせいで私が少しだけ前が出る。

それから私達は黙ったまま廊下を歩いて行く。

「………佳織さん」

「え？」

今……名前と呼ばれた？

「山田先生……」

後ろを振り向こうとすると、先生が背中に頭を押し付けてきた。

「お願いですから……もう……いなくならないで……」

「先生……？」

泣いてる……の？

「貴女が撃墜されたと知った時……胸が締め付けられるように苦しくて……悲しくて……」

「………」

この人は……本当に優しい人だな。

彼女にとって私は学園の一生徒にしか過ぎない筈なのに、その一生徒の為に涙を流せる。

それはとても素晴らしい事だと思うし、この人の最大の美德だと思う。

「佳織さんが生きて戻って来てくれた時、凄く嬉しかったんです……」
「そう……ですか……」

先生を泣かせるなんて……私はダメな生徒だな。

これまでの戦いで、私はどれだけ、この優しい人を悲しませたんだろう。

「だから……もう……」

「はい……」

山田先生の言葉と想いが心に響いて、私はこれしか言えなかった。

「心配してくれて……ありがとうございます……真耶さん」

「佳織さん……?」

「……行きましようか? 早く行かないと昼休みが終わっちゃいます」

「ぐす……はい!」

涙を拭った後、私達は再び歩き出した。

職員室に行くまでの間、私達は色んな事を話した。

生徒と教師の何気ない会話。

だけど、今の私にはこれが何よりも楽しい時間だった。

そして、私は心の中である決意を固めていた。

もう……流されるのは御免だ。

私は……強くなる。

いや、強くなりたい。だから……

第57話 動き出す時

決意を固めた私は、放課後になってすぐに生徒会室へと向かった。その目的は唯一つ。

「失礼します。楯無さんはいますか？」

「佳織ちゃん？」

ちゃんとノックをしてから入室すると、いきなりの来訪に驚いた様子の子の楯無さんが書類片手に紅茶を飲んでいた。

「お仕事中でしたか？」

「ううん。ちよつと書類を見てただけ。別に大丈夫よ」

「そうですか」

「ささ。遠慮せずに座って。虚ちゃん、紅茶をお願い出来る？」

「もう用意してます」

「早っ!？」

「私はお嬢様とは違って、ちゃんと先を読んで行動してますから」

「それって、遠回しに私の事をどんくさいって言ってるの？」

「遠回しにじゃなくて、そう言ってるんですけど？」

「うああああんっ！ 佳織ちゃあくん!!」

「そこで私に泣きつかれても困るんですけど」

普段の行いが原因でしように。

これに懲りたら、もう少し生徒会の仕事を頑張らしましょう。

呆れながらも、虚さんが淹れてくれた紅茶を一口。

うん、いつ飲んでも美味しい。

「ぐすっ……。にしても、佳織ちゃんが一人でここに来るなんて珍しいわね」

「そうですっけ？」

「うん。いつもは他の候補生の子達や本音ちゃんと一緒だし」

言われてみれば。

常に周囲に原作ヒロインがいる状態って、あたかも原作一夏のような状態だ。

でもまあ、高校時代の友達付き合いなんてそんなもんでしょ？
よく覚えてないけどさ。

「その貴女が一人で生徒会室に来るなんて、よっぽどの事なんでしょ？
何があつたの？」

「……………」

この人は暗部の長をしているから、変に腹芸で勝負しない方がいい
だろう。

ここはストレートに自分の考えをぶつけた方がいい。

「実は、生徒会長でありロシア代表である楯無さんを見込んで、願
いがあるんです」

「……………何かしら？」

「私を……………鍛えてください!!」

テーブルに両手をつき、思いつきり頭を下げた。

「……………今でも十分に佳織ちゃんは強いと思うけど？」

「いえ……………そんな事は決して……………」

私が今まで戦つてこれたのは、間違いなく転生特典による恩恵が
強い。

伝説の『赤い彗星』を模倣する能力は確かに強大だが、今の私は完
全にソレに依存しきっている。

自分の今の境遇を鑑みて、私は思つた事がある。

(まるで私は、原作の一夏と同じような状態だ……………)

自分が望んだわけでもないのに、いきなり強大な力を与えられて、
それによつてなんとか幾多の戦いを乗り越えられた。

でも、それももう限界だ。

これから先も今のような状態を維持していたら、絶対に近い将来に
取り返しのつかない失敗を犯してしまう。

そうならない為にも、私は全てを一から学び直す必要がある。

「どうして私の頼むの？ 佳織ちゃんの周りにはコーチに相応しい人
間が沢山いるでしょ？」

「それは……………」

的確な指摘を突かれて黙り込んでしまう。

それは分かっている。分かっているつもりなんだけど……。

「……ごめんなさい。意地悪な質問だったわね」

「いえ……」

「佳織ちゃんがそんな風に思ったのって、例の福音の暴走事件が切っ掛け？」

「知ってるんですか？」

「勿論。生徒会長である以上は、現場にいなくてもちゃんと情報は送られてくるから」

「そうなのか」。

IS学園自体が普通じゃない以上、その生徒会も普通じゃないって事か。

「あの事件で佳織ちゃんが最大の功労者なのは聞かされてるわ。相当に無茶してみたみたいね？」

「無茶をしなくちゃ勝てない相手でしたから……」

「それは分かりますが、だからと言って皆を悲しませていい理由にはなりませんよ？」

「虚さん……」

あくまでも穏やかな口調で虚さんが諭しながら、私の頭を優しく撫でてくれた。

「私も本音から聞かされました。佳織さん、本当に命が危なかったそうですね」

「みたいです……。少し記憶が曖昧なんですけど」

あの時見た『夢』の内容と戦っている最中の記憶はあるんだけど、その前後が少し微妙な感じ。

気を失っていたからかもしれないけど。

「簪ちゃんも本当に泣きそうにしてたわよ？ 佳織ちゃんが優しい子なのは知ってるけど、その優しさの方向を間違えるのはダメよ？」

「はい……」

自分でも、色んな事を一人で背負いすぎたのは自覚がある。

一歩間違えば、私はこうしてここにはいなかったかもしれないのだから。

自分が死ねば、悲しむ人たちが沢山いるのは分かっている筈なのに……。

「いいわ。佳織ちゃんのコーチをする話、受けてあげる」

「本当ですかっ!？」

「ええ。そんな思いつめた顔をした後輩を無下に扱うほど、私は酷い人間じゃないわよ」

それは知ってる。

なんだかんだ言っても、根っこの部分はとても優しい人なのが楯無さんだ。

「それに、生徒会長として頼ってきた生徒を放ってはおけないでしょ？」

「書類は放置しますけどね」

「余計な事は言わないで！」

ここで虚さんの茶々で、少しだけ空気が和んだ。

こんな風に話せるのも、二人が長い付き合いだからなんだろう。

「でも、今の佳織ちゃんって専用機が無いでしょ？」

「報告によれば、福音との戦いで相当にボロボロにされたとか」

「はい。ダメージレベルEだったそうです」

「文字通り、完膚なきまでにやられてますね……」

「だから、コアだけを私に渡して、束さんが機体の修復を受け持つてくれえました」

「あの篠ノ之博士が？」

「あの方なら確かに適任でしょうけど……」

二人がそんな風な反応をするのも無理はない。

世間にも、あの人が身内以外の他者を完全に見下しているのは有名だから。

「しかも、既に倉持技研に話を通して、バリステック・リヴァイヴが修理されるまでの間の代替機を用意しているみたいなんです」

「代替機っ!？」

「なんとまあ……」

絶句するよね。私も聞かされた時は驚いた。

「しかも、その機体は白式の『姉』であると言っていました」

「白式って、織斑先生の妹さんの専用機よね？」

「そうです」

「あの機体の姉妹機となると、その機体も近接戦に特化しているんでしょうか？」

「まだ何とも言えないわね。逆に射撃戦に特化しているかも。白式とコンビを組む事を前提として」

有り得そうなことだけど、白式の相棒は紅椿で確定している。

だから、どんな機体なのか全く予想が立てられない。

「一応、夏休みに入る前の休みの日にでも織斑先生に付き添って貰ってから、機体を見に行くことになってます」

「それがいいわね。まだ佳織ちゃんは全快したわけじゃないんだし」

「そうになると、特訓は夏休み明けにした方がいいですね」

「肝心の佳織ちゃんが万全じゃないと、鍛えようがないものね」

正直、私としては今すぐにも鍛えて欲しかったけど、そうは問屋が卸さないか。

まだ体には包帯が巻かれてるし、動くだけで痛みが走る事もあるし。

体調ちやんと整えないと意味がない……か。

「だから、代替機を受領した後は、体を癒す事に集中なさい。勿論、夏休みの間も訓練の類は禁止よ？」

「はい……」

「素直でよろしい」

約束を破って特訓をして貰えなくなったら困るし。

ここは大人しく怪我を治癒することに専念しよう。

「取り敢えず、折角だから今日は生徒会室でゆっくりしていくといいわ。すぐに本音ちゃんも来るだろうし」

「では、佳織さんにはとっておきのショートケーキを御馳走しましょうか」

「あれ？ 私は？」

「いるんですか？」

「いるわよ!!」

楯無さんって完全に虚さんの尻に敷かれてるよね……。

いや、虚さんの方が年上だから、当たり前と言えどそうなんだけど
や。

一応、楯無さんが主人で虚さんが従者の立場なんですよ？

これも一つの友情の形なのかな？

.....

.....

.....

.....

.....

「フ……フロンタル！ 貴様は自分が何をしているのか理解しているのかっ!？」

「してきますよ。した上で私は行動を起こしている」

広い会議室のような部屋に大きな円卓が置かれ、そこには明らかに『その手』の人間と思わしき老人達が腰を掛けているが、自分達に向けられた銃口を前に、焦燥を隠しきれずに腰を上げていた。

その銃口を向けているのはフル・フロンタル。

佳織と同じ顔を持つ謎多き少女だ。

「お前は！ 拾ってやった恩を仇で返す気か!!」

「貴方方には感謝していますよ。研究所で造られ、失敗作の烙印を押されて死ぬしか選択肢の無かった私とアンジェロを拾い、生きるチャンスを与えてくれた。だが……」

フロンタルが銃を持っていいない方の手で仮面を取る。

そこには、穏やかな笑みを浮かべた彼女の顔があった。

「私達が何も考えずに大人しくお前達の人形に成り下がると、本当に思っていたのか？」

「フロンタル……!」

「私達はずつとこの時を待ち続けた。全ての準備が整う瞬間をな」

「我々は利用されていたのか……」

「理解したか。お前達は我々を駒として使っていたかもしれないが、本当はお前達こそが我々の踏み台だったのさ」

フロンタルが老人達の一人に標準を定めると、焦りが酷くなり、死に物狂いで叫びだす。

「フロンタルが反乱を起こしたぞ! この小娘を今すぐに殺せ!!」

だが、その叫びに答える者は誰もおらず、部下は一人もやってこなかった。

「な……何故だ……! 何故誰も来ない!」

「残念だが、既に貴公達の部下達は懐柔済みだ」

「なんだとっ!」

「だ……だが、奴等は一人一人が歴戦の者達。賄賂や拷問などで簡単に寝返るような連中では……」

「知っているかね? 人間は痛みや苦しみには幾らでも耐えられるが、快樂には逆らえないと」

「快樂だと……まさかっ!」

想像もしたくない事が頭をよぎる。

だが、それを肯定するかのようにフロンタルが笑みを深くする。

「お前達の部下は実に容易かった。よもや、娼婦を宛がっただけで簡単に尻尾を振るとは思わなかったよ。どうやら、ここの連中は相当に女に飢えていたと見える」

「おのれ……!」

フロンタルが指を鳴らすと、彼女に寝返った嘗ての部下達がマシンガンを手にとってきて、それぞれに狙いを定める。

「う……くう……!」

「そ……そうだ! スコアールとオータムはどうした!? あの二人ならば……」

「その二人ならば……」

そこでアンジェロが入室。敬礼の後に報告を始めた。

「ご報告します。大佐の御命令通り、スコールとオータムは生かして逃亡させました」

「よくやった。ご苦労だったな」

アンジエロの話を聞いた途端、全員の顔が絶望に包まれる。

「Mはどうした？」

「今はまだ調整槽にいるかと」

「そうか」

ここでアンジエロも懐から銃を取り出し、老人達に向けた。

「貴様等の命運もここまでだ。醜い老害共が。大佐の大いなる計画の礎になれる事を光榮に思いながら、地獄に行け」

「やれ」

全員の銃が火を吹き、逃げ出そうとした老人達を一人残らず撃ち抜く。

鮮血が飛び散り、悲鳴が響き渡る。

だがそれでも、一方的な殺戮は収まる事は無い。

「止め」

約1分ほどに渡って斉射してから銃声が止まる。

硝煙の匂いが鼻を突くが、そんな物はここにいる者達にとっては女の匂い以上に嗅ぎ慣れている匂いだった。

全員が完全に死に絶えたかと思いきや、奇跡的にまだ辛うじて生きている老人が一人だけいた。

それを見つけたフロントアルは、高級な絨毯の上に横たわる老人達の死体を蹴り飛ばしながら彼に近づいていった。

「頼む……助け……」

「悪いが、それは出来かねるな」

少しでも足掻こうとする老人の頭に、無情にも銃口を突きつける。

「私は意思は即ち人々の総意。つまり……」

引き金が引かれ、脳漿を飛び散らせながら、最後の一人が死に絶えた。

「お前達がここで死ぬのもまた、人々が望んだ事なのだ」

銃を仕舞いこんだ後、フロントアルは部屋を後にしながら寝返った部

下達に命令を下す。

「悪いが、お前達にはゴミ処理を頼みたい。足がつかなければ手段は問わない」

「はっ！ 了解しました！」

「アンジェロ、行くぞ」

「はっ！ 大佐！」

フロンタルの背後を守るようにアンジェロが後ろを歩く。

こうして、裏社会で最も力のある組織の一つが密かに壊滅し、新たな指導者を迎える事となった。

その者の名は『フル・フロンタル』

この世に存在する、もう一人の『赤い彗星』である。

第58話 黄金の『姉』

夏休み前の最後の日曜日。

私は千冬さんの車に乗って、倉持技研と言う場所に向かっていた。目的は勿論、束さんが言っていた、私のリヴァイヴの修理が完了するまでに使用する予定の代替機を受け取りに行く為だ。

出かける際に、なんでか千冬さんに言われて、誰にも見つからないようにしてきたけど、なんでだろう？

一応、本音ちゃんが少し部屋を出た隙に来たけど、大丈夫かな？

置手紙は残してきたけど。

「こうして千冬さんが運転する車に乗るのって、初めてかもしれないね」

「そうだったか？」

「はい。私達が中学に上がった辺りから千冬さん、忙しそうにしていたから」

「そうだな……。確かに、あの頃は私も忙しくて、あまりお前達と話す機会が無かった」

忙しいと同時に、なんだか空気もピリピリしていたから、よく一夏は私の家に遊びに来ていた。

きつと、一人で家にいるのが耐えられなかったんだろう。

原作ならばいざ知らず、ここでの一夏は女の子。

たった一人で家にいれば、否が応でも不安が心を支配していったに違いない。

「それにしても、白式の姉って、どんな機体なんでしょうね？」

「さあな。幾つかの予想は立てられるが、実際にこの目で見てみない事には、何とも言えない」

高機動近接戦仕様の白式の姉妹機。

普通に考えれば、白式と同等の機動力を持つ機体を想定するが、私の予想はちよつと違った。

『『白式の姉』って言葉を聞いた時から、どうも嫌な予感が拭えなかつたんだよね……。』

私は知っている。

自分の特典に深く関係し、尚且つ『白式』という名称に非常に酷似した名を持つ、とある機体の存在を。

(まさかとは思うけど……まさかね……)

幾らなんでも、そこまで安直な事にはならないだろうと信じた。

でも、ここまで『ザクⅡ』に『ズゴック』に『ゲルググ』と来たからなあ……。

ちよつとだけ『ジオング』も考えてしまったけど、流石に足が無いISは有り得ないだろう。

パーフェクト・ジオングの可能性も無きにしに非ずだけども。

(いや……流石にパーフェクト・ジオングはチートだし、そもそもデカすぎる。常識的じゃないね)

頭の中をグルグルとさせながら考えていると、目の前に研究所らしき施設が見えてきた。

「見えたぞ。あれが倉持技研だ」

「あれが……」

生まれてこの方、研究施設なんて場所には無縁の人生を送ってきたから、少し緊張気味な私です。

「私が現役だった頃は、よくここにも足を運んだもんだ」

「そうなんですか？」

「ああ。ここの主任研究員とも知り合いなのさ」

流石は元日本代表。

顔の広さも半端じゃないですな。

過去に車でもここに来た事があるのか、迷う事無く空いた駐車スペースに車を停めた。

「では行くぞ。こっちだ」

千冬さん。入り口に案内してくれるのは普通に嬉しいんですけど、だからといって手を繋ぐ必要性ってあるんですかね？

……

・
・
・

研究所のロビーに入ると、千冬さんは真つ直ぐに受付に向かつていった。

手を引かれながら、私は辺りをキョロキョロと見渡す。

「ほえ〜……」

かなり綺麗な研究所なんだな〜。

床なんか、ピカピカに磨かれた大理石で出来てるし。

油断すれば、反射でスカートの中が見えそうになる。

「織斑千冬だ。既に話は来ていると思うのだが……」

「あ、はい！ 窺っております！ 只今お呼び致しますので、少々お待ちください！」

完全に恐縮している受付嬢の人が、慌てながら内線で誰かを呼んでいる。

「はい……はい、そうです。この間仰られていた……はい。分かりました」

受話器を置くと、作り笑いで応えてくれた。

「今すぐに来るとのことですので、もう少しだけお待ちください」
「分かった」

出来れば具体的な時間を言っほしかつたけど、別にいいか。

今日は日曜日。時間なら沢山あるから。

数分後。ロビーの奥から一人の女性がやって来た。

白衣にスク水と、初手からインパクト絶大な格好をした女の人。

「やーやー。お待たせ」

「遅いぞ。呼ばれたのならば、とつとと来い」

「久し振りに会うのに酷いな〜」

「黙れ」

「はいはい」

ん？ この人とは知り合い？

もしかして、さつき車の中で言ってた知り合いの主任研究員って、この人の事？

「その子が、束の言ってた子？」

「そうだ」

「ふくん……成る程成る程……」

「な……なんですか？」

こつちを舐め回すようにして、頭先から爪先まで視線を巡らせられた。

「初めまして。私がこの倉持技研で主任研究員をしている『篝火ヒカルノ』だ」

「え……えつと……。仲森佳織です。初めまして」

「うんうん。中々にいい子じゃないか」

「当たり前だ」

鼻息荒く自慢げに胸を張ってますね。

お蔭で少しお胸が揺れましたよ。

「この子があの『白狼』の実娘であり、『赤い彗星』の異名を持つ女の子か」

「それ……やっぱり、ここにも知れ渡ってるんですね……」

「当然。今や、ISに関わる者で『赤い彗星』の名を知らない者はモグリと言われているよ」

「そこまで……」

うう……本気で恐縮してしまう。

あの人と出会って、私は私だけの『赤い彗星』になると決意はしたけど、それでもまだ異名の大きさに潰れてしまいそうになる。

それ程までに『赤い彗星』の名は絶大な効果を持つから。

「君の事はある程度は束から聞かされているし、データも貰ってる」
「束さんともお知り合いなんですか？」

「千冬繋がりだね。ちよつとした親友兼ライバル的な感じさ」

同じ研究者同士だからか？

束さんにも同業者で知り合いがいた事には純粹に驚きだけ。

「さて。ここですつと立ち話つてのもアレだし、君の新たな相棒が待つ場所へのご案内しよう」

私達二人は、ヒカルノさんの先導に従って、研究所の奥へと入っていくことに。

なんだか探検のようでワクワクするです。

・
・
・
・
・
・
・

「ここが兵器開発部。んでもって、ここが機体設計部」

研究所内を歩きながら、ヒカルノさんが色んな部署の簡単な説明をしてくれる。

これから先、必要になるかは分からないけど、覚えておいて損は無いと思う。

知識は大切な財産だからね。

「この先が格納庫。君の新たな相棒がいる場所だ」

重厚な鉛色の巨大な扉の前に立つと、ヒカルノさんがカードキーを取り出して、カードリーダーに通す。

その後に、なにやら素早い動きで番号を入力していった。

「お待たせ。ささ、ご案内〜い♪」

ゆつくりと開かれた格納庫の中には、見える範囲だけでも多数の機器やIS用の武装、ここで開発されたという国産の第二世代量産機である『打鉄』が何体かハンガーに固定してあった。

そのうちの幾つかはバラした状態で置いてあり、何かの作業中であると推測できる。

「他の研究員はいないのか？」

「今日は日曜日だぜ？ 私みたいに自ら休日出勤を望んだり、シフト

の関係で仕方なく出てきた連中以外は、皆が週一の休みを満喫中さ」
「……相変わらずの仕事バカだな」

「私にとっては最高の褒め言葉だ。ありがとう」

「皮肉も通用せんのか……」

仕事大好き人間か。

自分の仕事に生きがいを見いだせるのは、同じ女性として尊敬できる。

これがキャリアアウーマンってやつか。

「目的地はこつちだよ」

鉄と油の匂いが充満する格納庫の中を歩いていくと、奥の方に布が掛けられた一台のISが置いてあった。

「これがそうか？」

「その通り。千冬の妹ちゃんの機体の姉であり、佳織ちゃんの新しい愛機……」

ヒカルノさんが布を思い切り引つ張ると、そこから眩く光り輝くISが姿を現す。

「百式さー！」

………やっぱりかよ………(泣)

「機体の形状は一夏の白式と全く同じか……」

千冬さんの言う通り、百式と呼ばれたこの機体は、見た目だけは白式と全てが同じ。

違う所があるとすれば、その機体色だった。

「しかし……なんだ、このド派手すぎる金色は……」

そう。このIS版の百式。

簡単に言ってしまうえば、黄金に光り輝く白式だった。

トリコロールカラーである白式とは違い、白い部分は全て金色に、青い部分はダークブルーに染まっている。

うん。見事な百式カラーですな。

トドメに非固定浮遊部位であるウィング・スラスタには見事な達筆で『百』と書かれている。

「この色になったのは仕方がないんだよ。装甲に対ビームコーティン

グ効果を持つ合成樹脂のエマルジョンの一種で、少し前に新たに発見された特殊な材料をベースに調合した皮膜材を施した結果、なんでか機体色が金色に染まってしまったんだよ」

「……私達にも分かりやすく説明しろ」

「つまり、通常とは違うビームコーティング処理を行った結果、自然と金色になったって事」

「意図して染めた訳じゃないんだな？」

「当たり前じゃん。何が悲しくて、こんなブルジョア全開なド派手な色にしないとイケないのさ」

「それもそうだがな……」

装甲に反射して、こっちの顔が見えてますよ。

見ているだけで目が痛くなる程の黄金ですな。

「機体自体は、白式の予備パーツを組み立てて完成してるの」

「ならば、性能は白式と同等なのか？」

「うんにゃ。それだと面白くないじゃん。だから、こっちは白式の時
の反省点を活かして、射撃戦重視の汎用機にしてある」

「同じなのは機体の形状だけか」

「イエス。武装面もスタンダードにしてあるよ」

「見せられるのか？」

「うん。その壁に掛けてあるよ」

ヒカルノさんの言う通り、百式の横の壁に幾つかの武装が固定されていた。

「ビーム・ライフルに、通常弾の他にカートリッジの交換で粘着榴弾や
拡散榴弾も発射可能なクレイ・バズーカ」

「あの金色の剣は……雪片か？」

「正解。私が開発した百式専用の近接戦用の武装『雪片・改』だよ」

「白式の雪片式型とは何が違うんだ？」

「汎用性かな。これも刀剣を展開させることは可能だけど、雪片式型よりも出力が低い代わりに、長期戦にも耐えられるようにしてある。
当たり前前だけど、展開中はずっとエネルギーを消費し続けるなんて事は無いから安心して」

これだけは百式の武装ってよりは、クロスボーンX-3のムラマサ・ブラスタミたいだ。

ビームを撃つ事は出来ないみたいだけど。

「でも、これだけじゃどうにも攻撃力不足だと思わない？」

「そうだな。武装自体は可もなく不可もなくだが、どうも決定打に欠けるとは思う」

「でしよ〜！ だから、ちゃんと百式にも立派な必殺兵器を用意しておきました！」

なんだろう……猛烈に嫌な予感が……。

ヒカルノさんが近くの機器を操作すると、鋼鉄製の床が開いて、そこから何かがせり上がってくる。

「……………これは……………」

「百式最強のビーム射撃兵器！ その名も『メガ・バズーカ・ランチャー』だ！」

もう言わなくても分かると思う。

例のアレですよ、アレ。

標準が定まらない、武器そのものに推進器が搭載された巨大ビーム兵器。

場合によっては、他の機体をエネルギーパック代わりにしないといけないアレですよ。

「幾らなんでもデカすぎだ！ こんな代物、普通に考えて実戦で使えるわけないだろうが！」

「何言ってるの！ 兵器に浪漫を求めるのは世の常だろうさ！」

「お前の変態染みた考えを佳織にまで押し付けるな!!」

「え〜？ 束にも一度見せたけど、すっごく興奮してたよ？」

「それはあいつが変態だからだ！」

「自分の親友にも容赦ないね……………」

でも、否定出来ないのも、また事実なのよね。

「大体、こんなデカイ物が拡張領域に入るわけが……………」

「入るよ？ 他の武器の要領がそこまで大きくないし、拡張領域の広さも白式よりも増やしてるし」

「……………もう何も言わん」

千冬さんが根負けした……………!?!

悪いとは思うけど、貴重な瞬間を目撃してしまった……………。

「そんなじゃ、コアを渡してくれる？　今から設置するから」

「は……………はい」

IS学園の購買部で買った巾着に入れてあるリヴァイヴのコアを取り出して、ヒカルノさんに渡すと、彼女はコアを作業アームに固定してから百式の外部装甲を展開し、コアをはめ込む場所に入れてから装甲を閉じた。

「よし。これで準備完了。佳織ちゃん、早速で悪いけど、百式に搭乗してくれるかな？」

「今からですか？」

「そうだよ」

コアを入れたら終わりじゃないの？

「おいヒカルノ……………まさかとは思うが、佳織に試運転をさせる気じゃあるまいな？」

「まさか。研究の鬼である私も、病み上がりの女の子を酷使させるような鬼畜じゃないよ」

「ならば何故だ」

「本人が搭乗した状態の方が、色々細かい調整がしやすいのさ」

「束から提供されたデータがあるだろう」

「そりゃあるよ？　でも、それはあくまでも前準備の段階。コアに蓄積された、これまでの経験を利用して調整出来なくはないけど、少しでも早く終わるに越したことはないでしょ？」

「それはそうだが……………」

「だべ？　そうと決まれば、佳織ちゃんは早くISスーツになって。つーか持つてる？　無いなら研究所のやつを貸そうか？」

「あ、大丈夫です。念の為に、常に服の下に着る習慣つけてますから」
「それは偉い」

少し離れた物陰で服を脱いで、ISスーツ姿になってから二人の元に戻り、そのまま百式に搭乗する事に。

「コアの情報はそのままだから、フォーマットやファイティングをする手間が省けていいね。すぐに終わるからね」

ヒカルノさんは束さん顔負けのタイピングテクを披露して、あっという間に作業を進めていく。

まだ乗っただけなので、私の性格は変化していない。

やっぱり、あの性格になるのは『ISでの戦闘時のみ』に限定されるんだろう。

なんて事を考えている間に、もう作業は終了してしまった。

「はい終わり〜!」

「早っ!」

さつきよりも百式の色がより明るい金色になっていて、体にもいい感じでフィットしている。

「これでいつでも待機形態に出来るけど、その前に武装を全て拡張領域に収納してしまおうか」

「了解です」

ハンガーから離れ、少しだけ移動してから壁にある武装に触れていく。

次々と武装を量子化して収納していくと、最後に待ち受けているのは例のメガ・バズーカ・ランチャー。

これ、本当に入るの……?」

「あ」

割とあっさり収納されてしまった。

少し確認してみると、きちんと拡張領域に入っている。

しかも、まだ少しだけ余裕あるし。

「これで本当に終わり。戻してもいいよ」

戻すのはいいけど、百式の待機形態って何になるの?

なんて思っていたら、案の定な形になった。

「……………」

「これは……サングラスか?」

はい。劇中でクワトロ大尉がいつも付けてた、あのサングラスですね。

これを私もつけろと？

「えい」

試しに装着。どっかに鏡ないかな。

「……………」

そのこの大人二人。揃って微妙な顔をしないでよ。

「に……似合ってるぞ？」

顔を引き攣らせながら言われても説得力皆無です。

「……………外す」

「それがいいね。普段からサングラスなんて付けてたら、生活し辛いでしょ」

「……………はい」

それ以前に壊滅的に似合わないってよく分かった。

ちよつとしたアクセサリーみたいに所持するでしょう。

「それと、これは百式の整備マニュアル。IS学園でも出来るようにね」

「ありがとうございます」

これは……本音ちゃん辺りに渡せばいいかな？

簡単な整備なら今の私でも出来るけど、本格的な整備となると完全にお手上げだからね。

「何か分からない事があれば、いつでも連絡してよ。直接ここに来るのもいいけど」

「まあ……それは機会があれば……………」

一人でここに来るのは抵抗があるよ……………。

「試運転は、ちゃんと怪我が完治してから行うようにね。万が一にでも怪我が酷くなったら大変だし」

「それはもう……………」

楯無さんからも言われてるしね。

そこら辺はちゃんと弁えていますよ。

「感謝するヒカルノ。世話になった」

「なんのなんの。私も噂に聞く赤い彗星ちゃんに出会えてよかったよ。前々からどんな子なのか興味はあったしね」

私の知らない場所で段々と赤い彗星の名が広がっていく……。

本物のシヤアもこんな気持ちだったのかな。

全ての作業が終了してからヒカルノさんに感謝の言葉と別れを告げてから、私達は倉持技研を後にした。

帰りの途中でお昼になったので、二人でファミレスによって食事をしてから学園へと帰った。

食事中、妙に千冬さんのテンションが高かったけど……なんで？

第59話 少女達の日々と新たなる布石

「そんな訳で、昨日の休みは倉持技研に行っていました」

次の日の朝の教室。

いつものメンバーが揃って、私が昨日学園にいなかった理由を聞いただしてきた。

ある程度は予想してたけど、こうも一斉に来られると、かなりの迫力がある。

「昨日は本当に驚いたよ。部屋に戻るとかおりんがいなくなってるんだから」

「ホントにゴメン。なんでか千冬さんに『皆に見つからないように』って言われてたから」

今思い返しても、マジで謎のミッションだったよね。

スネークさんも？マークを浮かべるよ。

「おのれ千冬さん……！」

「なんて巧妙な罠を……！」

「油断出来ないね……流石は姉さん……！」

ここで皆がジョジョ顔になって戦慄する理由が不明です。

私の目には『ゴゴゴ……』って効果音が見えるような気がする。

「ところで、佳織さんの受領した代替機とはどんな機体なんですか？」

「確かに気になるわね。直に見たんでしょ？」

「まあ……ね」

恥ずかしくて服の中に隠している、紐に繋がった百式の待機形態であるサングラスを出す事に。

無くさないようにと、首から下げられるように私なりに工夫してみました。

「サングラス？」

「これが佳織の新しい機体の待機形態なの？」

「うん。機体名は『百式』。白式の姉妹機らしいよ」

「白式の姉妹機っ!？」

いきなり一夏がテンション高くなったし。

自分の機体の系列機なのが珍しいのだろうか。

「ど……どんな機体なの？」

「簡単に言えば、金色の白式だよ。機体の形状は白式と全く同じで、パツと見で違うのは色だけ」

「パツと見ではとは？」

「中身や武装は全く違うの。詳しくは試運転の時をお楽しみに」

ここで全部話してら面白みに欠けるからね。

楽しみは後を取っておくがいいのでありんす。

「見た目が一緒って事は、私と佳織でお揃いの機体を……ウフフ……♡」

うん。一夏がさつきから変な事になってますね。

怪しい笑みが普通に気味悪いです。

「実際に動かすのはいつになるのだ？」

「多分、夏休み明けになると思う。ほら、まだ私って包帯取れてないじゃない？ だから、暫くの間は体を休ませることに専念しろって色んな人に言われちった」

「それは当たり前前。佳織さんは無理をし過ぎるきらいがあるから。少しは自分を労わる事をしてほしい」

「そう……だね。うん。これからは気を付けるよ」

福音の一件で、嫌と言うほどに思い知ったからね。

今後もある事があれば、皆も私も悲しい気持ちになる。

だからこそ、私は楯無さんに特訓をお願いしたんだけど。

「その怪我はまだ痛むの？」

「少しね。日常生活には支障はないけど、運動とかは無理っぽい。体が鈍るから、本当は少しでも動きたいんだけど」

私はいつから、こんな体育会系の思想に染まってしまったのだろうか。

ISに本格的に関わったせいかな？

「何かあれば、いつでも言いなさいよ。そうじゃなくても、アンタはいつも自分で抱え込みがちなんだから」

「あはは……その時は遠慮無く相談するよ。ありがと、鈴」

「そ……そーゆーストレートなお礼は反則よ……」
「なんで？」

「あ、予鈴が鳴った」

「んじや、私達は自分達のクラスに戻るわね」

「また後で」

「ん。またね」

鈴と簪がそれぞれに戻って行ってから、私達は自分達の席に着いた。

タイミングよく、その直後に千冬さんと山田先生が教室へと入ってきた。

少しでも遅れたら、即座にあの出席簿が振り下ろされるからね。

だが、朝のSHRで初めての期末試験の話題になると、教室のあちこちで阿鼻叫喚。

普段からキチンと勉強をしていれば、こんな事にならずに済むのにな。

その証拠に、セシリアとシャルロットはいつも通りにしてるでしょ？

一夏は少し緊張してるっぽいけど、私の知ってる一夏はちゃんと予習と復習してるから、そこまで問題無いだろう。

なんだかんだいって、本番には強いからね。実戦だけじゃなくてテストも。

本音ちゃんに至っては、余裕の表情を全く崩していない。

何気に凄く頭はいいからね。

でも、問題はあの二人。

「ど……どうするどうする……！ 英語が全く自信が無い……！」

「い……今からでも間に合うのだろうか……。まだ古文で分からない問題が多々あるのだが……」

そう。箒とラウラの二人。

箒は英語が、ラウラは古文が苦手科目となっている。

授業でも、当てられた時は目も当てられない程に動揺しまくるし。

別に何もしていない訳じゃなくて、普段から苦手を克服しようと、

私達に問題の解き方などを聞きに来てるんだけど、それでもそう簡単にはいかないみたい。

(放課後にでも、また勉強を見てあげようか……)

どうせ、今の私はやる事が無くて暇な身だし。それぐらいの余裕はありまくるのですよ。

自分の勉強は夜中にすればいいだけだしね。

一学期最後の期末テストに向けて、教室中が色んな意味で騒ぎ出す。

千冬さんの鶴の一声ですぐに静かになるんだけど。

さあて。久し振りに学生らしい生活に勤しみますか。

・
・
・
・
・
・
・

デユノア社 大会議室

そこには、欧州連合の統合防衛計画イグニッション・プランに参加している各国の重鎮が一堂に会していた。

そこには、シャルロットの父親であるアルベール・デユノアも出席している。

「例のラファールの再設計機。かなり好評のようだな」

「ええ。各国に送った試作機が非常にいい働きをしましたからね。お蔭で、最高のデータが取れた。これでまた『あの二機』の完成が近づいた」

アルベールが傍にある機器を操作すると、大会議室に映し出されていた映像が切り替わる。

そこには、全身装甲型の二体のISの設計図が表示されている。

「イグニッション・プランの集大成となるIS。ようやくここまで来ましたな」

「ええ。本当に長かった……」

それぞれに感慨深く設計図を見渡す。

それだけ、彼等の苦勞が窺えた。

「火力重視のビット兵器搭載機である、形式番号AIS-123X『バルギル』。そして、超高機動型である形式番号ISN-06S『シナンジュ・スタイン』」

「対照的な二体ではあるが、その機体性能は既存のISを完全に凌駕している。少なくとも、完成した暁にはどちらも第三世代機の枠には留まらないだろう」

「では、例の第四世代機に該当すると?」

「性能だけで言えばな」

手元にあるパンフレットをパラパラと捲るドイツの代表。

そこには、見慣れない単語が書かれていた。

「この『サイコフレーム』とか言う構造材……。これが無ければ、バルギルとシナンジュ・スタインは形にすらならなかったでしょうな」

「組み込まれたチップ単体では実効的な効果は見出せないが、コアとなる高出力のメイン・プロセッサを配置する事により、非常に高効率かつ高密度な脳波コントロールシステムとして機能する。これをISに採用した場合、マシンの構造自体にビット兵器のような脳波コントロールの機能を持たせることになる為、従来のような専用スペースを確保する必要性が無くなり、同時に単純なプロセッサ搭載量が増加する事から、今までのようなビット兵器よりも受信許容量や速度が大幅に向上し、更には機器自体の安定性も高まる結果となった……。でしたな」

「本当に、よくもまあ……。このような画期的な代物を開発出来たもんです」

「全くですな。通常なら考えも及ばないような技術。素晴らしいの一言に尽きますが……」

「アルベール殿。このサイコフレームは貴殿によって齎された物です」

が、これをどうやって開発したのですか？」

「そう……ですね。その事についても話そうと思っていました」

アルベールの顔が強張っていく。

それを見て、要人達も姿勢を正した。

「サイコフレームを生み出したのはデュノア社ではありません。この技術は、ある人物から齎された物なのです」

「その『ある人物』とは、前々から言っていた『善意の協力者』とやらですか？」

「その通りです。つい先程、ここに御到着されたようなので、ご紹介しましょう」

大会議室の扉が開き、そこから一人の女性が入室してきた。

紫の髪に眼鏡を掛け、緑のスーツの上に白衣を纏っている。

「ま……まさか彼女はっ!？」

「その通り。ISの生みの親であり、世界的な天才科学者でもある『篠ノ之束』博士です！」

まさか、束本人が自分達に協力していたとは予想もしていなかった面々は、思わず立ち上がって驚いた。

「初めまして。各国の皆様。私が篠ノ之束です。以後、お見知りおきを」

「「「「「……………」」」」」」

束が他者を見下すのは誰もが知っていたが、その彼女が物腰丁寧な口調で話したので、どう反応していいのか分からなくなっている。

「無理ありません。私も最初はそうでしたから」

「で……では、貴方は前から篠ノ之博士と交流していたと……？」

「はい。何を隠そう、ラファールの再設計を提案したのも、この篠ノ之博士なのです」

「なんとっ!?! それは本当かっ!?!」

「はい。アルベール社長の仰る通りです」

ラファールⅡの基本構造が生まれたのは、今から一年ほど前。

そんな前から世界的有名人と知り合っていたとは。

誰もが驚愕を隠せない。

そんな彼女を見ながら、彼女は心の中でほくそ笑んだ。

(ククク……上手く潜入出来た。今までずっと篠ノ之束あの振りをして技術提供をし続けたのが実を結んだな)

このセリフから分かるだろうが、彼女は東本人ではない。

では誰なのか？ それはすぐに分かる事になる。

(大佐。このアンジエロ・ザウパー。必ずや任務を全うしてみせます。どうか、御安心ください)

東……もとい、アンジエロは映し出されている設計図に目をやる。

目が細くなり、怪しく笑みを浮かべた。

(この機体が貴様等の手に渡る事は決してない。全ては大佐の掌の上……)

少ししてから全員の心が落ち着いたところで、別の話題に切り替わった。

「バルギル・シナンジュ共に性能は申し分ないが、問題は誰を操縦者にするかだな」

「矢張り、我等の国の国家代表から選出するのが妥当か？」

「それがいいでしょうな。各国の代表を集めるのには苦労するでしょうが、どうにかして機会を見つけて……」

話が纏まりかけたところで、アンジエロが手を上げて遮った。

「少しいいでしょうか」

「なにかな？ 篠ノ之博士」

「シナンジュはともかく、バルギルの方は既に私の方でパイロットを見つけてあります」

「ほう……それは？」

『『赤い彗星』……と言えば、御理解頂けるかと』

その単語を言った途端、またまた全員の顔色が変わった。

「赤い彗星と言えば、IS学園に在学中である、あの……」

「白狼『シン・マツナガ』の娘か……」

「噂では、入学してまだ少ししか経過していないにも関わらず、華々しい結果を出しているとか」

「例の『福音』の暴走を食い止めたのも彼女だそうです」

「ぐ……軍用機を試作量産機で食い止めたのかっ!？」

「信じられん……が……」

「あの『白狼』の娘ならば納得も出来る……」

「彼と同じ時代を生きた者達は、いずれもが一騎当千の強さを誇っていた」

「ジョニー・ライデン ランパ・ラル アナベル・ガトー
「真紅の稲妻、青い巨星、ソロモンの悪夢、ヴァイツシュ・トナヒュー
ガイア・マッシュ・オルテガ 荒野の迅雷、そして
黒い三連星。いずれもが歴史に名を遺すほどの歴戦の勇士達。それらに名を連ねる白狼の実娘こそが赤い彗星」

「間違いなく、彼女も彼等と並ぶ勇士になるでしょうな」

「ふむ……若い才能に最新鋭機を任せてみるのも一興か」

話が別方向に纏まり始めた。

アンジェロの計画通り。

「彼女は、我が社のラファールⅡの試作一号機のパイロットも務めていました。試作機のパイロット達の中でも最高の稼働率を記録しています」

「一応、聞いておくが……何%だ？」

「89.9%です」

「はあっ!？」

「たった数ヶ月で90%近くの数値を叩きだしているだどっ!？」

「まさか……彼女はブリュンヒルデ以上の逸材なのか……!？」

常識的には絶対に有り得ない数値。

それを実際に出した少女の存在を知り、またもや顎が外れそうに驚く面々。

「これは……決まりですな」

「ええ。なにより、篠ノ之博士の推薦となれば無下には出来んでしょう」

「では、そのように」

こうして、本人の知らない所で重大な事が決定している事に、佳織自身は全く知らない。

全てはフロントタルとアンジェロの計画の通りに。

第60話 夏直前と紫の薔薇

夏休み直前となる本日。

地獄の期末試験が終了し、結果が帰ってきた私達は教室にて一喜一憂していた。

「よっし！ 思ってるよりもいい点数だったわ！」

「私も、ちゃんと勉強をした甲斐がありましたわ」

「僕はそれなりかな。平均点越えはしてるけどね」

普段からちゃんと真面目に勉強を怠らない鈴とセシリアとシャルは、きちんと点数が取れたみたい。

「意外と余裕だった。でも、少しケアレスミスがあったかな」

簪は言わずもがな。

確実に学年トップクラスの点数を取っているに違いない。

問題は、この三人だった。

「矢張り……英語の点数が足を引っ張ってしまったか……！」

「このような無様な点数を晒すとは……不覚……！」

「超ギリギリだったけど、平均点を超える事は出来たよ……」

古文が苦手なラウラ。英語が苦手な箒。これと言った苦手科目は無いけど、最近は訓練のし過ぎで少し勉強不足だった一夏。

赤点は流石に取ってないけど、今回は少し点数が伸び悩んだみたい。

「私は割といい点数だったよ。かおりんは？」

「今回は勉強する時間が沢山取れたから、高校最初のテストとしてはいい滑りだしな点数が取れたと思う」

これが怪我の功名ってやつか。

皮肉なもんだよ。大怪我をした結果として、明らかに中学の時よりもいい点数が取れちゃったんだから。

これをこれから維持していくのは大変だなく。

「追試が無いだけマシだと思いたいが、これは夏の間に弱点を克服しておくべきか……？」

「箒がまるで受験生みたいなことを言ってるし」

まだ私達は一年生だよ？

苦手な科目を克服するって意気込みは素晴らしいけど、あまり根を詰めない方がいいんじゃない？

「はあく……。今日で一学期も終わりなんだよね……」

「いきなりどうしたんだ？ シャルロット」

「いやね。暫くの間、皆に会えないと思うと……ね」

シャルロットが黄昏ながら窓の方を見る。

代表候補生の皆は、夏休みだからと言って遊んでばかりはいられないのか。

なんせ、国旗を背負ってるんだもんね。仕方ないか。

「お前達も大変なんだな」

「まあね。多分、あたしだけじゃないと思うけど、夏休みには現状報告と称して一時帰国をしろって言われてるのよね」

「鈴もか。私も司令官に一度戻って色々と報告をしろと言われてる」

「あまり長居をせずに、すぐ戻って来るつもりではありますけど……」

「向こうに戻っても、ゆっくりと休む事は難しいだろうなあ……」

代表候補生としての仕事って奴か。

異名だけ独り歩きしている私とは大違いだな。

「あれ？ でも簪は日本の代表候補生だから……」

「ブイ。私はどこにも行かない。いつでも皆や佳織さんに会える」
言われてみれば確かに。

忙しい事には違いないかもだけど、日本だからどこか遠くに行く必要は無いのか。

それはちよつといい情報を聞いた。

「本音ちゃんは夏休みは何か予定があるの？」

「ん〜つと……一応はお姉ちゃんと実家に顔を出さなきゃだけど、それが終わったら暇かな〜」

「そっか。なら、本音ちゃんと一緒に遊べそうだね」

「うん！」

この夏休み、基本的に私って暇なのよね。

だからこそ、遊び相手が欲しくて仕方がないのです。

「わ……私も暇してるぞ佳織！」

「私も！ 別に何かする予定とか無いし！」

「そういや、一夏と箒もコツチ側の人間だったね。」

「二人共専用機持ちだから、すっかり忘れてた。」

「少し向こうでの予定を繰り上げようかしら……」

「逆にやる気が出てきましたわ……！」

「急いで仕事を済ませて戻ってこなくては！」

「ぼ……僕は別に……。でも、ちよつとぐらいなら早めに戻っても……」

「いや。別に無理して仕事を急がなくてもいいんだよ？」

「でも、代表候補生の皆でそこまで忙しそうにするのなら、国家代表の楯無さんはもつと大変なんだろうね」

「夏のお姉ちゃんに休みは無い」

「…………マジで？」

「うん。虚さんがマネージャーみたいに予定を管理して、最も忙しい時は秒単位で動いてる」

「もう殆ど芸能人扱いじゃん！」

「やべ……『赤い彗星』関連で私にも何か言ってきたりとかしないよね……？」

「もう夏休みは怪我の療養に費やすって決めてるんだから！」

「お仕事なんて真っ平御免なんだからね！」

「楯無さん……ちゃんと二学期を無事に迎えられるの？」

「別にずっと忙しいって訳じゃないから。一段落すればのんびり出来るよ」

「それもそっか。じやないと過労で倒れちゃうしね」

「高校生が過労で倒れるって……」

「それはそれで哀れ過ぎる。」

「困みに、この『過労』って言葉は日本にだけ存在しているみたい。」

「海外の人は仕事と休みをちゃんと両立してるから、過労とは無縁なんだって。」

だから、過労で死ぬ日本人が信じられないそうだよ。

その後、千冬さんと山田先生がやってきて、一学期最後のSHRが始まった。

千冬さんらしい短くも厳格な注意事項を言ってから、高校生活最初の一学期は幕を閉じた。

この瞬間から、夏休みの始まりだく！

・
・
・
・
・
・
・

某研究施設。

白衣を着たアンジェロがハンガーに固定されている一体のISと向き合って、なにやら作業を行っていた。

「これで……」

相中に集中しているのか、周りにいる他の作業員の事なんて全く目に入っていないようだ。

そこに、彼女が最も信望する人物がやって来た。

「順調のようだな。アンジェロ」

「た……大佐！ ようこそいらっしゃいました！」

他の人間には目もくれないのに、フロントルが来た時だけはすぐに分かる。

ここまで来ると、もう呆れを通り越して感心すら覚える。

「お前のギラ・ズールを改修した全身装甲型フル・スキントイプの専用機。見事な出来だ」

「お褒めに預かり光栄の極みです」

作業を一時的に中断し、背筋を伸ばしながらフロントルと向き合う。

二人はお互いに幼馴染と言っても差し支えない仲なのだが、アンジェロの方が一方的にフロンタルを持ち上げた結果、このような関係性になってしまった。

「Y A I S—132ローゼン・ズール。両手のマニピレーターを意図的に排除し、その代わりに切断能力に特化した三つ又のクローと、三連装のビーム砲。更には疑似誘導兵器であるインコムを内蔵した複合兵装となっています」

「あのバックパックはなんだ？」

「あそこには対ビット兵器用兵装である『サイコ・ジャマー』が搭載されております」

「説明を頼む」

「了解しました。サイコ・ジャマーはビット兵器を封じるビット兵器であり、射出後に八面体の特殊フィールドを形成、その中に封印したビット兵器に類する全ての武装を無力化するものとなっております」

「成る程。ビット兵器搭載型のI Sは、その殆どがビット兵器を運用する事を前提とした設計思想となっている。その最大の特徴であり切り札を封じる事が出来るということか」

「その通りです」

「素晴らしい。見事の一言に尽きる」

「ありがとうございます」

フロンタルの腹心であり、一流のパイロットでもあり、同時に東に比肩する科学者であるアンジェロ。

彼女がいなかったら、フロンタルの『計画』すら生まれなかっただろう。

「で、例の二機のI Sはどうなっている？」

「はい。私が入手した情報によりますと、シナンジュ・スタインとバルギル、共に順調な仕上がりとなっている模様です」

「そうか。それはなによりだ」

吉報を聞いて、フロンタルに笑みがこぼれる。

まるで、新しい玩具を買って貰った子供のように。

「ですが、本当によろしいのですか？」

「何がだ？」

「大佐のみならず、仲森佳織にも施しをなさるとは……。何故、敵に塩を送るような事を考えるのです？」

アンジェロが抱く当然の疑問。

それを聞いて、フロントアルはローゼン・ズールを見上げながら話し出した。

「私と佳織は互いに対になる存在であり、高め合う仲なのだ」

「高め合う……？」

「そうだ。私が『力』を手にしたならば、彼女も『力』を手にするのは当然の事なのだ。それに……」

徐に仮面を取り、アンジェロの目を真っ直ぐに見据えた。

「佳織がつまらない I S に乗って私が勝っても、面白くないだろう？」

「大佐……」

フロントアルは本気だ。本気で佳織の事を倒す気にいる。

しかも、普通に倒すのではない。お互いに対等の条件で戦い、その上で勝利を収めようとしている。

その時こそ、自分が佳織よりも上なのだと思えるかと思っているかのように。

「佳織は福音との戦いの際に負った怪我がまだ治っていないようだ。だから、この夏は佳織達にはゆっくりと休んでいて貰おう」

「それが奴等にとって最後の休息となるのですね」

「そうなるな。その間に私達は、この世界を少しでもサツパリさせるとしよう」

「と、申しますと？」

「このローゼン・ズールの試運転も兼ねて、前々から目障りだった女性権利団体の本部を潰す。徹底的にな」

「大佐はどうなさるので？」

「今回は私も参加する。私のラファールはどうなっている？」

「はっ！ 既に整備は完了しており、いつでも出撃出来ます！」

「そうか。それを聞いて安心した」

ここで一息入れる意味を込めて、フロントアルがアンジェロにドリン

クを渡す。

それをまるで聖杯のように慎重に受け取り感動する。

流石のフロントアルも、それを見て少し引いた。

「そうだ。大佐、実はご相談したい事が」

「なんだ？」

「実は、Mの機体を仕上げるのに、どうしてもビット兵器のデータが足りません。ローゼン・ズールのはあくまで支援用のビットなので、そこまで詳しいデータは必要ありませんでしたが、やはり攻撃特化型ビットとなると、きちんとした稼働データが無いと……」

「お前の腕を持ってしても難しいのか？」

「別に普通の機体ならば問題は無いのですが、Mの専用機ともなると話は違ってきます。我等の中で一番のビット適性を持つ奴の能力を存分に発揮させるには、M自身にビットを動かして貰い、そこから得られたデータを用いてOSを製作した方が確実なのです」

「そうなのか……」

顎に手を当てて少し考え込む。

数秒で何かを思い付いたのか、いきなり端末で情報を確認しだした。

「どうなされました？」

「いやな。以前に入手した情報によると、イギリスにはまだ使用者が決まっていないティアーズ型の二号機が存在しているのを思い出してな」

「それがどうかなされ……まさか？」

「そのまさかだ。この二号機を強奪しよう。タイミングは例の計画と同じでいいだろう。良い陽動にもなる」

「二カ国を同時に襲撃……となると、かなりの準備が必要となりますね。人員も補充しなくては……」

「その辺りはアンジエロに任せる。私は計画の若干の練り直しを行うとしよう」

「了解しました」

再び仮面を付けて、フロントアルは一気にドリンクを飲み干して容器

を潰す。

「今年の夏の終わり。そこから全てが始まる。その時まで一時の平穏を楽しむといい。もう一人の私よ」

光があるから闇があり、闇があるから光がある。

人知れず、世界は確実に動き出そうとしていた。

その時、少女達は何を見るのだろうか。

第61話 害虫駆除

とある施設の格納庫。

そこには、ISスーツ姿のフロントルとアンジェロが一段高い場所に立っていて、それを見上げるような形で同じようにISスーツを着た女性達や重装備の軍人らしき者達が大勢並び立っていた。

「諸君。ようやく、我々が本格始動する日がやって来た」

赤い下地に金色でエンブレグレイビングが施された、とても優美なスーツを着たフロントルが、静かに語りだす。

「今回、我々はアンジェロの専用機の試運転を兼ねた襲撃作戦を敢行する。今回のターゲットは日本に存在する女性権利団体の本部だ」

女性権利団体。

その言葉を聞いた途端、兵士達全員の顔が強張る。

一人は憎悪に、一人は憤怒に、また一人は決意に満ちた表情をする。

「君達は、いずれもISが凶ならずも齎してしまった女尊男否の被害者だ。だが、本当にISが全ての元凶なのだろうか？ 私はそうは思わない」

少しだけ兵達がざわつき始める。

だが、それを無視して話は続く。

「確かにISは高い性能を誇り、女性にしか動かせない。これは覆しようのない事実だ。だが、大抵の人間達はISの存在に目を奪われて、もっと根本的な事を忘れてる」

ぐるりと兵達を見渡し、笑みを浮かべた。

「ISはあくまでも『道具』にすぎない。それを善き事に使うも、悪しき事に使うも、我々次第なのだ。ISに罪は無い。諸君等を苦しめ、この歪んだ世を生み出した元凶が存在するのならば、それは女性こそが至高と謳い、崇め奉っている愚かな連中に他ならない」

そこで、一斉に兵達が雄叫びを上げ始める。

「そうだ！ 大佐の言う通りだ!!」

「俺達の全てを奪ったのはアイツ等だ!!」

「我等の手で正義の鉄槌を!!」

「今こそ、叛逆の時だ!!」

「「「おおおおおおおおおおおおおつ!!!」」」

血気盛んな兵達を見て嬉しそうにするフロンタルだ! だったが、話が先に進まない手で制する。

「女性権利団体。奴等こそが、今の世の明確な悪であり、駆除すべき存在だ。連中のような者達が蔓延っているからこそ、今この時も人々は苦しみ、嘆いている」

「だからこそ、我等が決起するのだ! この世界に寄生する醜くも愚かな蛆虫共を、大佐と共に滅する!!」

「権利団体は、相手が男でなくても容赦なく自分達のルールで罰する。ここにいるアンジェロの直属の部下である『親衛隊』の女性達は、いずれもが謂われも無い罪で傷付けられた男達を身を持って救おうとした結果、権利団体の逆鱗に触れ、君達と同様に全てを失った」

「だからこそ、私は彼女達に『力』を与えた。もう二度と、邪悪に屈せず、守るべき者達を守る『力』を!!」

何も言わず、決意に満ちた顔で親衛隊の隊員達は二人に向かって敬礼をした。

よく見ると、彼女達の目尻には涙が溜まっている。

「私達が力を合わせれば、必ずやこの作戦は成功するだろう。君達の無念を、あの愚か者共に思い知らせてやれ」

ここでまた兵達が叫びだす。

自分達を地獄に叩き落した憎き仇敵を倒せると思うと、居ても立つてもいられないのだろう。

「今から行くのは権利団体の根城とも言うべき場所だ。そこには間違いないくISも配備されているだろう。ISの相手はISがするに限る。親衛隊の諸君、その時はよろしく頼むぞ」

「「「はっ! お任せください! フロンタル大佐!!」」」

「だが、万が一、ISに搭乗出来ない者達がISの襲撃を受ける可能性もある。その時は遠慮無く、アンジェロが開発した『銃弾型剥離剤』リムナーを使え」

「本来はかなり大型で、しかも自分の手で直に装着させなければ使え

ない代物だったが、私の手で小型化に成功し、更には銃弾型にする事で遠距離からもISに付けることが可能となった。これならば、安全かつ高い確率でISを無力化出来るだろう」

「念には念を入れて、全員に30発ずつ配つてある。まだまだ作ろうと思えば作れるから、出し惜しみはしなくてもいいぞ」

ここでフロンタルは徐に仮面を外し、その素顔を晒した。

佳織と瓜二つの顔が、怪しい笑みを浮かべる。

「それと、これも言っておかなくてはな」

「そうですね」

急に雰囲気が変わり、若干ではあるがまたザワつく。

「連中に対する君達の怒りは、奴等を殺した程度では決して収まらないだろう。だから……」

「奴等の生殺与奪の権利を全てお前達に託そうと思う」

一瞬、二人が何を言っているのか分からなくなった。

いきなりの発言に全員がポカ〜ンとなってしまう。

「要は、生かすも殺すもお前達次第。生かした場合、その後の処遇も君達の好きにしているという事だ」

「拷問して苦しめた後に殺すもよし。集団で心が碎け散るまでレイプするもよし。好きにしろ」

「そんな事をすれば連中と同じじゃないかと考える者もいるかもしれないが、その心配は無用だ」

「例え、ただの一度でも悪の道に落ちた者は、もう人間ではない。人間の形をした別のナニかだ。悪である以上、何をされても絶対に文句は言えない。何故なら、悪とは存在すること自体が罪なのだから」

「だから、君たちなりのやり方で『悪』を罰せよ」

これまでで一番の大声が響き渡る。

兵達の士気がかなり向上したようだ。

「これで少しは世界もマシになる筈だ。さあ……害虫駆除を始めようか」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

女性権利団体の本部。

明らかに周囲の建造物とは一線を越える大きさのビルで、中には当然のように女尊男非の考えを持つ女達で埋め尽くされている。

そこに、二人の女が入っていく。

またもや束の振りをしたアンジェロと、それに付き添う仮面を外したフロントアルだ。

だが、その正体を知らない権利団体の者達は、アンジェロをISSの生みの親である束と思い込んで、嬉々として彼女をビルの中に誘い入れた。

その直後に、ビルの付近に引越し業者を装った大型のトラックが三台駐車した。

普通ならば大きなトラックが三台も停まっていれば不審に思うが、目の前にあるのは悪名高き女性権利団体のビル。

道行く誰もが『またか……』と思い、何も疑問に感じない。

元からビルの付近は人通りが少ない事もあり、すぐに周囲は静かになる。

自分達が最も崇め奉っている二人の人間の一人が本部に来た事で気を良くしたのか、中にいる誰もが今から自分達が襲撃されるなんて微塵も疑わなかった。

それは、ISSを操れる自分達こそが最強であり至高の存在であると疑わない愚かさ故か。

こうして、人知れず『害虫駆除』が始まった。

・
・
・
・
・
・
・

「あああああああああああああああつ!!!」

銃声が響き、ボロボロのレディーススーツを着た中年女性が床に血を流しながら座り込む。

彼女こそが、現在の女性権利団体の代表だった。

目の前には、ローゼン・ズールを装着したアンジェロと、自分専用のカスタマイズした真紅のラファール・リヴァイヴ・カスタムを装備しているフロントアルが立っている。

フロントアルのラファールは、機体の形状こそシャルロットの専用機と同じだが、機体色が赤に変更されている他に、手首の部分や膝の部分に黄金のエングレービングの装飾が施されていて、非常に優雅な美しさを漂わせている。

本来なら施されている競技用のリミッターが意図的に解除されている為、ラファールとは思えない程の性能を獲得する事に成功した傑作機だ。

ビルの中はトラックの中で待機していた兵達によって、あつという間に制圧され、どこもかしこも見る影もないほどに破壊しつくされていた。

普通なら、これ程の破壊が行われれば嫌でも気が付くが、権利団体は世間からとても疎ましく思われている。

だから、誰も彼女達が危機に陥っても通報なんてしようとは考えないし、警察も駆け付けようと思わない。

「大佐！一階から四階までのフロア、全て制圧完了しました！」

「よくやった。事前に言った通り、後は好きにしろ」

「了解です！へへへ……」

報告に来た兵士は、ニヤつきながら持ち場へと戻って行った。

「大佐！ 上階全ての制圧も完了です！ 大佐が予想なさったとおり、数機のISが襲いかかってきましたが、いずれも親衛隊の者達が排除しました！」

「そうか。ISの方はどうしている？」

「はっ！ パイロットはすぐに降ろして、今は親衛隊が機体を見張っています！」

「ならば、コアだけを回収し、後は放置しておけ」

「了解しました！」

「お前達も好きにして構わんぞ」

「分かりました！」

上から来た兵士も嬉しそうにしながら戻って行く。

長年の恨み辛みを晴らせるとあって、捻じ曲がった喜びが込み上げてくるのだろう。

「な……なんで！ なんでこんな事をするのですか！ 篠ノ之博士！！」

「私を……その忌々しい名前で呼ぶなああああああああつ！！」
「ぎやあああああああああああああああつ！！！」

激昂したアンジエロが、ローゼン・ズールのクローで代表の右腕を切り落とした。

鮮血が床に降り注ぎ、悲鳴が木霊する。

「醜いものだ。これが今まで世の中を掻き乱し、多くの罪無き人々を苦しめ続けた諸悪の根源とは」

「全くです」

「腕ええええええつ！！ 私の腕がああああああああつ！！」

切断された腕を抑えながら床を転がり回っている内に、ふと血飛沫の一滴がフロントルの顔に飛び散った。

「き……貴様あああああああああああああああつ！！！！」

「ぐぎいいいいつ！！ ぎつ！ んぎぎいいいいいいつ！！」

「大佐の！ 美しい御尊顔を！！ その薄汚い血で汚すとは！！ その罪

!! 万死に値する!!!」

「やべ……やべでええええええええええつ!!!」

全身装甲だから、その表情は全く見えないが、アンジエロは完全にブチ切れていた。

自身が全てを捧げると誓った存在を汚されて、周りが見えなくなっている。

「なんで……なんで私がこんな目に……」

「因果応報だろう」

「フー……フー……!」

殺さない程度にちやんと手加減をしていたとは言え、代表はもう既に瀕死の重傷で、いつ死んでもおかしくない。

そんな彼女を見下ろしながら、フロンタルは静かに語りだす。

「1月12日。ドイツにて、とある男性が道端で通り過ぎる時に軽く肩が触れたと言う理由だけでセクハラ扱いされ、有罪判決を受けた」
そこから、彼女は次々と色んな事件の事を話します。

「2月24日。台湾のコンビニで男性従業員のちよつとしたミスを見て、客である女性がそれを大袈裟にネットに書き込み、彼は徐々に周囲から追い詰められ、やがて自殺をした。他にもあるぞ」

あろうことか、フロンタルは今年あった女尊男非が原因で起こった事件の全てを記憶していた。

それを言い放つていく間も、代表は着実に死に向かっていく。

「お前達はよく『女こそが至高の存在。女だけがいい』と言っているが、それを聞く度に私は思うのだよ。お前達はつくづく馬鹿だ」と

「人間だけに限らず、殆どの生命体は『雄』と『雌』が交配して初めて誕生する。貴様等の低脳では理解出来んかもしれないが、男と女は、その両方がいて初めて互いが成り立っているんだ。片方だけがいた所で、全く意味が無い」

「もし仮に、この世が女だけの世界になったら、その世界はすぐに滅びるだろうさ。何故なら、自然な形で一人も人間が誕生しないのだから」

「軟弱な。矢張り、貴様等よりもこのアンジェロの方が優れているよ
うだな」

「うるさいよ。それよりも、白騎士を返して!!」

「残念だが、それは二重の意味で不可能だ」

「二重……?」

「まず、あのコアは私達にとって必要不可欠だな。絶対に渡す訳には
いかないのだよ」

「もう一つは?」

「コアは手元には無い。お前とは違い、私達は非常に嚴重な場所に大
事に保管している。だから、不可能だ」

「くっ……!」

天才と自称する自分が、ことごとく後手に回っている。

その事実が悔しくて、思わず下唇を噛む。

「用はそれだけか? なら、早くここから消える事を推奨する」

「どういう事?」

『掃除』が終わったら、ちゃんと『後始末』しなくちゃいけないだろ
う?」

「まさか……お前!!」

「アンジェロ」

「はっ!」

プライベート・チャンネルで各員に通達するアンジェロを余所に、
フロントルは床に散乱している、さつきまで代表と呼ばれていた物体
を踏み潰す。

「今度こそ……今度こそ必ず!!」

自分が敗走を喫する。

だが、今は次の為に逃げる事を選択した。

束が割れた窓から、自慢のニンジン型ロケットで飛び去ってから、
フロントルはISを解除する。

「通達完了しました」

「分かった」

「しかし大佐。あの女を逃がしてよかったですか?」

「構わんさ。白騎士がある限り、アドバンテージはこっちにある。否が応でもまた会う機会はある。それに……」

「それに？」

「決着の場はここではない。佳織と篠ノ之束、そして織斑千冬。あの三者が揃った時こそが、全ての決着をつける時だ」

「そうですね……」

それから数分と経たない内に、二人を含めた全員がビルから退避。

いつの間にか一台増えているトラックに捕虜となった女達を含めた全員を乗せて、遠くに去った直後、爆発と共に全ての証拠を隠蔽。

ビルの崩壊自体は、アンジェロの情報操作によって『ビルの爆破解体』と報道された。

この日を皮切りに、次々と彼女達によって世界中の女性権利団体の支部が襲撃を受け、崩壊していくことになる。

皮肉な事に、それによって女尊男卑の影響による男性の死亡事件が大幅に激減した。

第62話 お姫様とピンク色の女傑

「なにこれ……」

それは、私が自分の部屋でパソコンを使いネット検索をしている時だった。

私は、目の前の画面に表示された記事に目を奪われていた。

【女性権利団体本部ビル、いきなりの解体】

日本の某所にあるという女性権利団体の総本山ともいえるビルが、いきなり物理的な意味で解体されたらしい。

しかも、中にいたであろう代表を初めとする人間達は、何故か行方が分からない。

記事には、あの連中の事だから、まだどこかに雲隠れをして悪巧みをしているに違いないと書かれていた。

前々から世間体が最悪なのは知っていたけど、ここまで堂々と悪口を書いているにも関わらず、運営とかからなんにも言われないうって事は相当に世間からアンチの対象として見られているんだろう。

実際、私もあまり好きな連中じゃないしね。

でも、問題はそこじゃない。

「なんなの……この感覚は……」

何故だか分からないけど、この事件がどうしても他人事のように思えない。

まるで、知らない間に自分が関わりあいになっているような、そんな感覚。

「いや……まさかそんな事は……」

ふと、私の脳裏にフロンタルの顔が思い浮かんだけど、まさか彼女が関与しているわけないよね。

そこまで世の中はご都合主義には溢れてないでしょ。

もうあのバカ神は存在しないんだし、幾ら残滓が残っているとは言え、そこまでの影響力は無いだろう。

色んな事が一度にありすぎたから、ちよつと考えすぎているんだな、きつと。

ダメダメ。物事はもつとポジティブに考えないと。

折角の夏休みなんだから、学生らしく、この夏をエンジョイする事に全力を注ごう。

夏休みの宿題と言う悲しい難敵もあるけど、これは計画的にしていけば問題無し。

「後は、この体の怪我さえ全快すれば、文句無しなんだけどな〜」

かなり包帯が取れてきたとはいえ、未だに私の体の一部には包帯が巻かれている。

一応、学園の保健室からカルテが出されて、夏休み中は学園指定の病院に通院する事になっている。

「佳織〜、お昼出来たわよ〜」

「は〜い!」

一階からお母さんが呼んでいる。

お腹も空いてきてたし、丁度良かったや。

今日のお昼はなんだろうな〜♪

・
・
・
・
・
・
・

お母さんと向かい合うように座って、一緒にお昼ご飯の素麺をズルズル〜つとな。

「ん〜♡ 暑い夏に冷たい素麺はたまりませんニヤ〜♡」

「お父さんも一緒に食べられたらよかったのにね〜」

「全くだよ」

お父さんはお仕事で不在。

私達は夏休みだから家にいるけど、社会人はそうはいかないよね。

今日は一応、平日なんだし。

「にしても、佳織が包帯を巻いて帰ってきた時は私もお父さんも驚いたわよ〜」

「うん。心配させてゴメン」

「もう気にしてないわ。千冬ちゃんからも電話があったけど、大切な友達を守ろうとして負った怪我なんですよ?」

「まあ……ね」

「だったら、私も彼も何も言わない。お父さんも、心配しながらも同時に誇らしく思ってたみたいよ? 『流石は白狼の娘だ』って自慢してたし」

「あはは……」

無我夢中だったただけなんだけどね……。

お父さんにそんな風に言われると、ちよつと照れるなく。

「そうそう。今日、ドズルさんの娘さんが遊びに来る予定になってるのよ」

「え、マジ?」

「マジよ。言ってなかったかしら?」

「聞いてないよ〜!!」

「ダチヨウ倶楽部ね」

ドズル・ザビの娘って事は、あの子なんだよね!?

あのお姫様なんだよね!?

幼い頃は私とも遊んでいたらしいけど、その頃の事なんて微塵も覚えてない。

それは多分、向こうも同じだろうけど。

正真正銘、私のファースト幼馴染。

そんな風に言うには憚られる程に超ビッグな人物だけど。

最初の一言はなんて言えばいいんだろ……。

今から緊張してきたんだだけど。

・
・
・

・
・
・

お昼を食べ終えてから、リビングでテレビを見ながらスマホを弄っている、家のチャイムがいきなり鳴った。

「佳織く。悪いけど出てくれないく？ お母さん、今ちよつと手が離せないのよく」

「分かったく」

この時間帯に来るって事は、宅配便か一夏達が遊びに来たか。

もしくは、例のお客様か……。

「どなたですかく」

いつものように玄関のドアを開けると、そこには華があった。

「その……こんにちは。そして、お久し振りです」

「あ……はい」

前世でよく見た、超知ってる清楚系の女の子。

うん。私もよく知ってるミネバ・ザビその人ですな。

(遂に来たよ……)

この子が私の一番最初の幼馴染。

なんか、光栄過ぎて居た堪れないんですけど。

「また会えましたね、佳織さん」

「そう……だね。えつと……ミネバさん……」

やべく。「瞬『ミネバ様』って言いそうになつたわく。

「なんて、昔の事なんて殆ど覚えてないんですけど。佳織さんもでしよう？」

「う……うん」

「だと思った。でもいいんです。これからまたお友達になればいいんですから」

何この子……超絶いい子なんですけどく！

この眩しさ……本音ちゃん以来だよ……。

「ミネバ様〜！ 私の事も紹介してくださいよう！」

「あ、ごめんなさい」

「え？」

この声、もう一人いるの？

ミネバさんに注目しすぎて全然分からなかった。

「きゃ〜！ 本物の赤い彗星だ〜！ 感激です〜！」

……………誰だっ!? このプリキュアに出てきそうなピンク色の髪をツインテールに纏めた美少女はっ!?

いや、この子どもどつかで見た事があるような気はするんだけど……いまいち思い出せない。

「私、貴女の大ファンなんです！ 会えて光栄です！」

「ど……どうも」

私にファンなんていたんだ……。

それなりに有名人になっていた事は知ってたけど、ファンまで生まれていたのは初耳だぞ。

「ハマーン。自己紹介を」

「そうでした！ 喜びのあまり、すっかり忘れてました！」

ん〜？ 今、なにやら聞き捨てならない名前が聞こえましたよ〜？

「初めまして！ 私は『ハマーン・カーン』と言います！ よろしくお願ひします！」

「ハマーンの御父上が、私の父の部下なんです」

やっぱりか……！

この子があの宇宙世紀で最強の女性パイロットと恐れられているハマーン・カーンなのか……！

そういや、確かに子供の頃は少女漫画に登場しそうな女の子だったっけ。

（この無邪気な美少女が、将来は『俗物っ！』な女傑になっちゃうのか〜……）

一体、何がどうなればあそこまで大変化しちゃうの？

いや、どっちのハマーンも好きだけどぎ。

「にしても、まさかミネバ様が佳織様と幼馴染だったなんて思いませ

んでしたよ〜！」

「私も、少し前にお父様から教えられたばかりですから」

そうだったのか。覚えてなかったのはお互い様だったのね。

ほんの少しだけ気が楽になったよ。

「と……取り敢えず、二人共上がって。ここは暑いだろうから」

「お邪魔します」

私……とんでもない人物達と知り合いになってない？

一応、転生者で転生特典を持って専用機を所持している事を除けば、どこにでもいるごく普通の一般市民のつもりなんですけど？

……いや、自分で言ってるんだけど、もう全然『一般』じゃないわ……。

ヤバイな……どうも一般的な感覚が麻痺してるっぽい。

・
・
・
・
・
・
・

家に入れたはいいものの、どうすればいいか迷っていると、お母さんの提案で二人を私の部屋まで案内する事に。

こんな当たり前の事すら思いつかない程に混乱してたのね。

「ここが佳織様のお部屋ですか〜！」

「綺麗に整頓してあるんですね」

「まあね」

嘘です。本当は昨日、やる事が無くて部屋の掃除を偶々しただけです。

立ちっぱなしってのあれだから、適当に座って貰う事に。

「そう言えば、なんでハマーンさんは私の事を『様』って呼ぶの？ 同い年だよ〜？」

「何を仰います！ 赤い彗星の異名を持つ佳織様は、私の憧れであり全てなんです！ それと、私はまだ14歳で、佳織様よりは一歳下になります。それから、私の事は呼び捨てで構いませんよ」

あ、まだ中学生なのね。

つまりは蘭ちゃんと同じなわけと。

こう言っちゃなんだけど、蘭ちゃんの方がもう少し落ち着いてるよね。

「じゃ……じゃあ、ハマーンはどこで私の事を知ったの？」

「最初に佳織様の事を知ったのは、ネット上で公開されている試合映像を目撃した時です」

「え、そんなのあるの？」

「はい。IS委員会の公式サイトに、国家代表や代表候補生の試合の様子が掲載されてたりするんですよ」

うそ……。それもまた初めて知った。

「ん？ ちょっと待って。そのサイトに私の事が載ってたって事は、今の私って代表候補生や国家代表と同列に扱われてるって事？」

「当然じゃないですか！ IS学園での公式試合にて、数多くの代表候補生達相手に常勝無敗の大活躍をしたと、もっぱらの噂ですから！」

「私も、その話を聞いた時はとても誇らしく思いました」

あれ〜!? なんて既に校外にまで知れ渡ってるの〜!?

もうさ、今日だけで初耳な事が多すぎるんですけど!?

「そうだ！ 折角だし、コレしませんか!？」

「いつの間にそんな物を持って……」

ハマーンがどこからか取り出したのは、とあるゲームソフト。

その名も『インフィニット・ストラトス・エクストリームバーサスマキシブーストON』

……うん。もうさ、このタイトルを聞けば一発で分かるよね。

そう、ISを題材にした3D対戦オンライン対応アクションゲームでございます。

一応、私も持つてる。

今年の冬頃に『2』も発売予定らしい。

「実はこれ、最近になってアップデートされたんですよ」

「そうなの？ 知らなかった」

本気で忙しかったから、ゲームをする暇が純粹に無かった。

簪辺りは知ってたんだろうけど。

「つて言うか、ゲームなんてするんだ」

「最初はISの訓練のつもりで始めたんですけどね。いつの間にか普通にハマってました♡」

「彼女、佳織さんの勇姿に影響を受けて、ISの操縦者としての訓練を受けているんです。御父上から反対もされたそうですが、最終的には押し切ったらしいです」

もう既に将来の女傑の片鱗が見え隠れしてる……！

なんて話している間に、ゲームの準備をしてスイッチオン。

「最新のアップデートだと、とある隠しキャラが登場するんですよ。きっと、佳織様も驚きますよ」

「へ……へえ……」

なんだろう……猛烈に嫌な予感がする。

「まずは、サバイバルモードを選択っと」

「それから？」

「ここからは普通に勝ち抜いていけばいいんですけど、その時にランダムで隠しキャラが乱入してくるんです。それに見事打ち勝てれば、そのキャラが使用可能になるんですけど、これがまた凄まじい強さなんですよ。ま、見てれば分かります」

ハマーンが選択したのはイタリアの国家代表の人が愛機として『テンペスタ』と呼ばれる機体。

順調にNPCを撃破していくが、四回戦に突入した時にそれは起こった。

「来ました来ました！ これですよコレ！」

「あらまあ……」

「こ……これって……！」

パリステイック・リヴァイヴに乗ってる私じゃないです

かあああああああつ!!!

「ま……まさかコレが隠しキャラ……?」

「そうです! ゲームでも佳織様の圧倒的な強さは健在で、今まで一度も勝ってないんですよ!」

「ちよ……ちよつと待って!? 私、こんな話一度も聞いてないんですけどっ!? その前に肖像権とかあるんじゃないのっ!?」

「それは、お母さんとお父さんがなんとかしたから大丈夫よ」
「へ?」

部屋のドアの前に、ドヤ顔をしたお母さんがお盆に人数分のジュースを乗せて立っていた。

なんか少しジュースの数が多いような気もするけど。

「私に相談とかはっ!?」

「したいと思ってたけど、その頃の佳織は忙しくて連絡取れなかったじゃない。だから、こうして事後報告になったのよ」

「んなアホな……」

あ……ははは……。もうなにがなにやら……。

「それと、ついさつき一夏ちゃん達が遊びに来たから、連れてきてあげたわよ」

「一夏達が?」

達つてことは、鈴とかかな?

「やつほく。遊びに来たよ」

「お……お邪魔するぞ……」

「筈だったのか……」

これまた意外。

一夏と一緒に来たのは筈でしたか。

そっか。鈴は中国に一時帰国していなかったんだっけ。

一週間後には戻って来るって言ってたけど。

「あれ。なんか知らない子がいる。誰?」

「えと、この子達は……」

「初めまして。ミネバ・ザビと申します。佳織さんとは……そうですね。『幼馴染』みたいな関係でしょうか」

「お……幼馴染……」

うーん。正解と言えば正解なんだけど、なんか幼馴染の部分を強調してない？

「そして、私の名はハマーン・カーン！ 佳織様の一番の大ファンであり、将来的に弟子になる予定の女です！」

「なんかまた適当なこと言ってるっ!?!」

私は誰も弟子になんて取らないからね!?

そんな事が許されるような立場でもないし！

「なんだか面白くなってきたわね。お母さん、楽しくなってきたわ」

そこはそこで娘のピンチで楽しまないで！

「にしても、見事に男っ気が無いわね。別に同性婚を否定する気は無いけど」

ハイそこ！ 爆弾発言禁止！

私だって、自分の交友関係に男っ気が無いのは重々承知してるんだよ！

でも仕方ないじゃん！ この世界のIS学園にはマジで男が一人もいないんだから！

あー……完全に私の部屋がカオス状態になってる……。

自分の家でさえも私は落ち着けないの……？

第63話 他人から見た私

「それじゃ、ゆっくりしていつてね〜」

「あ、ちよ……お母さんっ!？」

ジュースを持って一夏達を案内するだけして、笑顔を振りまきながら母さんは鮮やかに去っていった。

こんな時のあの人の行動力にはいつも敵わない……。

それから、一夏と箒が軽い自己紹介をした。

「相変わらず、おばさんって元気だよね〜」

「私も数年振りにお会いしたが、あの頃から全く変わってなくて驚いたぞ〜」

でしようね。

なんでか知らないけど、母さんの容姿は物心ついた時から全く変化してない。

その事を直接本人に聞いたら『乙女の秘密よ♡』と返された。

変に鳥肌が立ったので、それ以降は話題に出さないようにしている。

「と……取り敢えず座りなよ」

「ほ〜い」

「そうだな」

箒は普通に床に座ったけど、一夏は何故か私のベッドを占領しやがった。

私の領地を奪いやがって……。

「で、さっきから何やってんの」

「これだよ」

分かりやすいように、ゲームのパッケージを見せつける。

それを見た二人は、すぐに納得したように頷いた。

「ああく。今、流行ってる『インフィニット・ストラトス・エクストリームバーサス・マキシブーストON』か。雑誌とかでも取り上げられてたね〜」

「私も少しだけなら知ってるぞ。なんでも、ISの動きを忠実に再現

したゲームらしいな。『インフィニット・ストラトス・エクストリーム
バーサス・マキシブーストON』は」

……なんで二人揃って長々とタイトルを全部言うの？
適当に略せばいいじゃない。

「お二人もご存知でしたか。じゃあ、つい最近になって行われたアツ
プデートの事は知ってますか？」

「アツプデート？ そんなのしてたんだ。内容は？」

「サバイバルモードをプレイしていると、ランダムで隠しキャラが乱
入するようになります。んで、たった今、その隠しキャラと対戦しよ
うとしている所だったんです」

「その隠しキャラとは？」

「コレです」

ハマーンが画面を指差すと、一夏と箒が目を思い切り見開いて驚い
ていた。

「これって……もしかしなくても佳織？」

「そのように見えるな……」

「その通り。この隠しキャラである佳織様を見事に撃破出来れば、そ
のままプレイアブルキャラクターとして参戦してくれるんです！」

「それは実に魅力的だが……」

「倒せるの？」

「全然。流石は佳織様と言ったところで、全く勝てません。今までに
色んな猛者達が挑戦しているようですが、未だに勝利したプレイヤー
は皆無のようです。試しに私が対戦してみましようか」

そんな訳で、ポーズ解除して試合開始。

因みに、なんでか対戦相手である私の名前表記は『仲森佳織』じゃ
なくて『赤い彗星』ってなってる。

そこは流石に妥協してくれたのね。

「き……消えたっ!! ハマーン、佳織さんが消えてしまいましたよ!」
「分かってますってミネバ様! うわあっ!! いきなり奇襲ですか
!?!」

一瞬で目の前から姿が消えたと思いきや、すぐに背後からのWビー

ムトマホークで切りかかるゲームの私。

そこからも出るわ出るわ、理不尽極まりないチートの数々。

こっちのミサイルはファンネルで全部撃墜し、少しでも距離を取ればビームバズーカを、中距離ではハンドビームガンを撃って厚い弾幕で接近すら許してくれない。

僅かな隙を見つけて攻撃しても、これまた有り得ないマニユーバで見事に回避。

そもそも、デフォオのスピードが速すぎるから、捉えるだけでも一苦労。

結果、一分も経過しない内に試合は終了。

圧倒的な力の差を見せつけられて敗北を喫した。

画面には空しく【YOU Loser】と表示してある。

「いやいやいや！ なんなのさ、あのとんでもない動きは！ あんなの絶対に勝てっこないじゃない！ つーか、幾らなんでも誇張しすぎだから！ ゲームだからって、なんでも強くすればいいってもんじゃないでしょうよ！」

「いや、かなり忠実に再現してたけど？」

「嘘っ!？」

それマジで言ってますっ!？」

「佳織は、他人から見た自分つてのをよく理解していない節があるよね」

「だな。ISを纏った佳織と対戦をした時、私達全員がああの動きを……いや、あれ以上の動きを実際にこの身で体験しているんだぞ？」

「そ……そげなアホにや……」

わ……私つてば、あんなとんでもない動きをリアルにやってたの……？

ヤバイ……全くもって自覚が無い……！

「流石に一瞬で消えたりはしないが、それに近い事は普通に起きているな」

「うんうん。赤い軌跡を綺麗に描きながらステージを見事に彩ってるかと思いきや、えげつない程に的確な一撃をお見舞いしてくるし。も

うぎ、人によってはトラウマレベルになってると思うよ?」

「ウソウソウソ〜!! ウソだと言ってえ〜!!」

「そういや、私って今まで一度も自分の試合の映像を見た事が無かった……。」

「恥ずかしいからって理由で避けてたけど、これは一度、羞恥心に耐えながら見る必要があるかもしれない……。」

「あの、お二人は佳織様の御学友なんですよね?」

「ぐ……御学友……」

「間違っではないが、そんな呼ばれ方は初めてだな……」

「その一言だけで、ハマーンがいいところのお嬢様だってすぐに分かります。」

「まあ、実際にそうなんだけどね。」

「私、学園での佳織様に興味がありません!」

「そうですね。私も普段の佳織さんの事を聞いてみたいです」

「へっ!?!」

「ミ……ミネバさんにハマーンっ!? なんでここでそんな話題になるっ!?!」

「二人とも、絶対に話さないですよ!」

「別にいいぞ」

「そだね〜」

「おいごらあ!! 私の『話すなよオーラ』を感じ取れよ〜!」

「い……いや、一夏や箒なら変に話を盛ったりはしない箒……。」

「学園での佳織は今とさほど変わりはないかな〜」

「ああ。可もなく不可もなく。その辺りは私や一夏もよく知っているいつもの佳織だ」

「勉強も運動も一生懸命に頑張ってるって感じ。普通にしていると、どこにでもいる女子高生なんだけど……」

「ISに乗ると、途端に一変するな」

「どんな風にですかっ!?!」

「うう……私の黒歴史が暴露される……。」

「もう止められない雰囲気になってるし……。」

「まず、性格が変わる」

「どのようにですか？」

「なんとさえばいいのかな……渋くなる？」

「渋くなる？」

「そうそう。一気に張りつめた感じになって、キリツつてなるんだよね。分かりやすく言えば……イケメン？」

「私は女だよ」

元となったシヤア様はイケメンだけどき。

今の私はどこまで行っても女だから、イケてるメンズにはなりようがないのですよ。

「それから、とんでもなく強くなるな。さっきのゲームの比じゃないぐらいに」

「そう言えば、そんな事を言っていましたね。あれでも十分にチートですけど、現実の佳織様はアレをも凌駕しちゃうんですか？」

「余裕でするね。本気になった佳織はもう、誰も止められないし」

「そんな佳織を疎ましく思っている連中も少なからず存在はしているんだが、そいつらも佳織の試合を見ると途端に大人しくなるんだ」

「きつと、佳織には絶対に敵わないって肌で感じちゃったからじゃないかな？」

え？ 私って地味にイジメの対象になりかけてたの？

それ初めて聞いたんですけど。

「私の尊敬する佳織様に牙を向けるとは……！ 俗物共が……！」

うおおおおおおおおい!? 今ちよつと片鱗が見えかけたんですけどおおおつ!?

明らかに宇宙世紀の女傑だった頃のハマーン様が出てきてたよおおおおおつ!?

「それでいて、数多くの名言も残してるし」

「名言！ すっごく気になります！」

迷言の間違いでしょ。

あれは全部シヤア様の受け売りだから。

『戦いとは常に二手三手、先を考えて行うものだ』とか
『ISの性能の差が戦力の決定的な差ではない事を教えてやろう』と
か

『当たらなければ、どうということはない』とか

『認めたくないものだ。自分自身の若さゆえの過ちをいうものを』
とか

よく覚えてるな……。

因みに、さつきから私は顔を両手で覆って伏せてます。

だって、めっちゃ恥ずかしいんだもん。

「凄いです……！ 早速メモしておかなくちゃ！」

「しなくていいからー！」

なんて言ってる隙にとんでもない速度でメモを書いていつてる。

これは止められないのぜ……。

「佳織さんは、とても感性が豊かなのですね」

「一言で纏められたっ!？」

今思ったけど、ミネバさんって天然キャラ？

もうちよつとお嬢様感が出てる女の子だと思っただけど、他の皆と同様に変な先入観は捨てるべきなのかな……。

「ねえ。私にもちよつとゲームさせてくれない？ 一度でいいから二

次元の佳織と戦ってみたい」

「いいですよ。でも、本当に手強いですよ〜？」

「それはさつき見たから知ってる」

一夏の気紛れによって話は強制的に終わり、またもやゲームに注目が集まった。

こんな事を言えば絶対に付け上がるから言わないけど、ナイスだー
夏！

「ちよ……この！ 動き早すぎだから！ あ〜…もう！ こっちの攻撃が全然当たらないし〜！ なのに、なんで佳織の攻撃は必殺必中なのよ〜！」

「最強の隠しキャラですから」

一夏も二次元の私には手も足も出ずボコボコにされた。

開発陣の皆さんや……私の事を強くしすぎや……。

「ならば、私が一夏の仇を取ってやろう」

「お願い〜箒い〜」

「任せろ。この打鉄で倒してやろうじゃないか」

なんて意気込んでた箒だけど……。

「な……なにいつ?! その距離から一気に懐に飛び込んでからの連続コンボだどっ?! そんなのアリかっ?!」

結局、Wビームトマホークの露と消えましたとき。

「遠近の両方において全く隙が見当たらない……。これは間違いなく、現実の佳織を忠実に再現している……」

ゲームの中の私よ。お前はこれから先、どれだけのプレイヤーを泣かせるんだ……。

我ながら、罪深い転生特典だよ。全く……。

因みに、皆が帰ってから試しに私も一回やってみただけど、見事に瞬殺されました。

自分自身に負けちゃった……。

なんかカツコよく聞こえるかもだけど、実際には凄くカツコ悪い……。

誰でもいいから、この難攻不落の乱入者を撃破してくれ〜。

・

・

・

・

・

「なん……だど……!」

「た……大佐?」

フロントアルは、テレビの前でコントローラーを握りしめたままの状

態で固まっていた。

画面の中では、例の『赤い彗星』が勝利ポーズを決めている。

「ネットの噂を聞いて、少しでも佳織を攻略する為の役に立つと思いついて購入してきたが……なんとということだ……」

体を震わせているフロンタルを、心配そうに見つめるアンジェロ。彼女にとつてフロンタルこそが全てなので、こんな彼女を見るのは耐え難いのだろう。

「これが佳織の実力か……面白い……！ ゲームとは言え、この私を瞬殺するとは思わなかったぞ。だが、お蔭で己が目指すべき場所がハッキリとした」

「では大佐」

「ああ。アンジェロ、このゲームのデータを元にシミュレーターのパージョンアップを頼む。ゲーム内ですら、これ程の実力を秘めているのだ。現実の佳織はこの数倍と置いていいだろう」

「了解しました」

「私はもう少しだけ、この佳織に挑戦し続けようと思う。コレすらも越えられないようでは、佳織に挑戦する資格すらない」

などと言ってはいるが、実際には普通にゲームが面白いだけだったりする。

普段から多忙なフロンタルにとつて、このようなゲームは眩しく映ってしまうのだろう。

それとは裏腹に、アンジェロはまたもや佳織に向けて嫉妬の炎を燃やしていた。

（おのれ……仲森佳織！ ゲームの中ですら大佐を夢中にさせるとは！ こうなったら、私もあのゲームをプレイし、貴様を血祭りに上げる為のリハーサルにしてやる！）

その後、フロンタルが世界で初めて『赤い彗星』を撃破したプレイヤーとして密かに有名になり、アンジェロは全ての機体で『赤い彗星』を撃破したプレイヤーとして名を轟かせていくことになるのだが、それはまた別のお話。

第64話　なんで登校日ってあるんだろうね

夏休みも前半戦とも言うべき七月が終了し、もう八月に突入した。んでもって、IS学園も日本全国の学校の例に漏れず、八月に登校日が存在している。

ここって治外法権的な場所じゃなかったっけ……？

地味に変な所は日本の法律に縛られてるんだよね。

やっぱ、土地自体が日本に存在してるから？

そして、一夏と箒の提案で、私は登校日の一日前に学園に戻る事にした。

一夏が千冬さんに聞いたらしいけど、学生の大半が帰省をしている以上、念には念を入れて少し早めに学園に行くのはもう暗黙の了解になっているらしい。

まあ、遅刻をするよりはずっとマシだしね。

学生寮があるが故に出来る事だ。

で、一日早く学園に来た私達が何をやっているのかと言うと……。

「へえ。佳織の家でそんな事があったんだ。無理をしても早めに戻ってきて、二人と一緒に行けばよかったかな」

「迂闊だった……」

日本に残ったメンバーである、私と一夏と箒と本音ちゃんと簪、ここにいち早く中国から戻ってきた鈴を含めた面々で真昼間から女子会的な事をやっています。

会場は鈴の部屋。まだルームメイトが戻ってきてないから別に構わないって言った。

多分、本当は寂しかったんじゃないのかな？

鈴って意外とそんなところがあるし。

「にしても、まさかアタシ達以外にも佳織に幼馴染がいたとはね」

「私自身も聞かされた時は驚いたよ。最初は冗談かと思ったけど、証写真もバッチリ残ってたし……」

「でも、かおりんは覚えてなかったんだよね？」

「まあね。お互いに会ってたのは三歳ぐらいの頃みたいだし。覚えて

る方が凄いでしょ」

「確かに」

これに関してはお互い様だったから、変な事にはならなかったけどね。

向こうの方が私よりも人間が圧倒的に出来ているってのもあるけど。

「因みに、どんな子だった？」

「うくん……そうだな……」

「あまり言葉で言い表すのは得意じゃないが……敢えて言うのならば……」

「「ならば？」」

「「お嬢様？」」

「あ、納得」

ミネバさんを一言で表す最強の言葉だわ。

つか、もうそれ以外に思いつかない。

「物腰が非常に柔らかかで、とても丁寧な口調だった」

「しかも、全身から『お嬢様オーラ』……とでも言えばいいのか？ そ

れっぽいのが放出されているのを感じた」

「お嬢様……」

「ねえ……」

簪と本音ちゃん、揃って楯無さんの事を想像してるな？

あの人も『お嬢様』ではあるだろうし。

「「はあ……」」

「ど……どうしたの？ でっかい溜息なんて吐いて」

「ううん……なんでもない」

「「じゃはは……」」

真面目な部分もあるし、普通に尊敬も出来るけど……あの無駄にテーション高い所だけは私としてもどうにかしてほしいと思う。

アレさえなければ、マジで完璧だと思うんだけどなあ……。

「そのミネバって子ともう一人、歳下の子も一緒に来てたんだっけ？ その子はどっだったの？」

「ハマーンちゃんは、今時の女の子って感じだった」
「だな。ただ少し、佳織の事を過剰にリスペクトしている感は否めなかったが」

「リスペクト？　つまり、佳織のファンってこと？」

「あの熱愛っぷりはファンの一言で終わらせていいものか……」

「もうさ、あれか完全に信仰の領域になってるよね。帰り際に普通にサインを強請ってたし」

「佳織さんのサイン……今も大切に額縁に飾ってます」

「そ……そう」

別に捨ててくれてもよかったのよ？

あれは完全に私の黒歴史ランキングでぶっちぎりの一位だったんだから。

「佳織ももうサインとか書くようになったのね〜」

「なんでしみじみしてるんだ」

「いやだって、代表候補生とかになれば、普通にサインの練習とかさせられるし」

「そうなの？」

「かんちゃんも前にしてたね〜」

「もう殆どアイドル扱いになってるからね……」

いやまあ……鈴も簪も可愛いのは認めるけど、マジでサインを書かせるの？

でも、プロスポーツ選手とかも自分達のサインを持ってるし、凄いなになればブルーインパルスのパイロットの人達でさえ独自のファンとサインを持ってたっけ。

それなら、国家代表や代表候補生の人達がサインを書いているも不思議じゃないのか？

「いつの日か、雑誌やニュースでインタビューされたりして」
「やめてよ……なんかフラグ臭がするから……」

うう……私は平凡な人生を全うしたいだけなのに……。

それもこれも全部、あのアホ神のせいだあ〜!!

ララア……お願いだから、私の事を導いて……。

主に平穏な日常を送る為に。

・
・
・
・
・
・
・

もうすぐ昼の12時に差し掛かろうとしている頃、一台のロールスロイスがIS学園の正門前に駐車した。

その後部座席から降り立ったのは、故国での仕事を終えて学園に戻ってきたセシリアだった。

彼女もまた、他の代表候補生達の例に漏れず、非常に多忙な毎日をおすごしていたが、一刻も早く日本に戻りたい一心で頑張り、その結果としてこうしてなんとか登校日の前日に戻ってこれた。

実家にいる両親は寂しがっていたが、同時に彼女の頑張りを見て感心もしていた。

その頑張りの理由が想い人に早く会いたいが故だとは思っていないだろうが。

「噂に聞いた通り、日本の夏の日差しは強いですわね……」

「大丈夫ですか、お嬢様？」

「ええ。この程度で根を上げていたら、佳織さんに笑われますわ」

セシリアの傍で心配そうに見守っているのは、オルコット家専属の筆頭メイドであるチエルシー・ブランケット。

18歳の若さで、オルコット家に仕えるメイド達を束ねる立場になると同時に、幼い頃からセシリアと共にいた幼馴染でもある。

イギリスにいた頃は、常日頃から彼女に助けられてきた。

「佳織さん……とは、噂に名高い仲森佳織様の事ですね？」

「勿論ですわ。誰よりも気高く美しく、戦場においてもその優美さが

損なわれる事は全く無い。その上、何があっても決して諦めない不屈の精神も兼ね備えている……本当に立派なお方……」

「大絶賛ですね。私もネットなどである程度の噂などは耳にしています……」

本人は全く知らない事だが、『赤い彗星』の異名は既に世界規模で拡散していて、IS関係者で彼女の事を知らない人間は一人として存在していない。

佳織が知ったら間違いなくストレスで胃が痛くなる案件だろう。

「可能であれば、私も一目でいいからお会いしたいですが……」

「佳織さんが学園に戻って来ていれば会えるかもしれないけど、そうとは限らないし……」

なんて話をしていたら、ナイスタイミングで昼食を食べに行こうとしている佳織達御一行様が近くを通りがかかった。

噂をすればなんとやら、とはよく言ったものだ。

「そういや、佳織の怪我ってどうなってるの？ まだ所々に包帯を巻いてるけど」

「少し痛むかな。今週もまた病院に行かないといけないし」

「かおりん……」

「佳織も大変だね」

「実際問題、最初はどんな感じだったんだ？ 相当に酷い怪我をしていたが……」

「私的には全身に激痛が走って、どこがどう痛いとかよく分からなかったんだよ。でも、後でちゃんとしたお医者さんに診て貰ったら、右の二の腕と肋骨に罫が入ってたって」

「きゃー！ やめてー！ 聞いてるだけで痛いからー！」

「それって……」

本音が実に気まずそうな顔をしている。

それもそうだろう。なんせ、そんな大怪我をした佳織を押し倒してから、そのまま一緒に大人の階段を駆け上がったのだから。

「あれ？ あそこにいるのって……」

「セシリアじゃない。あの子も帰って来てたんだ」

向こうもセシリア達に気が付いて、彼女達の方に歩いてきた。

「こちらに来ましたね」

「えっ!? ちょ……ちよつとどうしましようっ!? 服と髪は乱れていませんわよね? 再会の挨拶はどのようにしたら……」

「髪も服も全く問題はございません。それと、いつも通りに挨拶をなさって大丈夫だと思います」

「で……でもお……」

いつもは強気なセシリアが、珍しくへたれている。

だが、時間とは残酷なもので、彼女がどうしようか考えている内に佳織達が目の前までやって来ていた。

「久し振り。そして、お疲れ様」

「お……お久し振りですわ。佳織さん……」

（あく……もう! 頭の中がグルグルして、何を話せばいいか分かりませんわ〜!）

佳織の他にも鈴や一夏達がいるにも拘らず、セシリアの目線は一点しか見つめていない。

恋は盲目とはよく言うが、そのものズバリな事態に陥っていた。

「なによ。久し振りなのはあたし達もでしょ」

「え? あ……ああ……鈴さん達も一緒でしたのね……お久し振りですわ」

「うわ……この扱いの差、見た?」

「いつもの事じゃん」

一夏の冷静な一言。

ある意味で諦めの境地にいるのかもしれない。

「この方が、あの『赤い彗星』の異名を持つ仲森佳織様……」

チエルシーもまた、佳織が来た途端に彼女に対して熱烈な視線を送っていた。

それに気が付いた佳織が、ふとセシリアに問いかける。

「あの……さつきから私の事を見てる、そのメイドさんは一体……」

「え? ああ……そういえば、まだ紹介がまだでしたわね。チエルシー」

「はい、お嬢様」

「「お嬢様っ!?!」」

佳織と一夏と箒と鈴の一般的感覚を持つ四人が驚く中、それに全く怯まずにチエルシーが丁寧な挨拶をする。

「初めまして、仲森佳織様と御学友の皆様方。私はオルコット家にお仕えしているメイドのチエルシー・ブランケットと申します」

「「ど…………どうも…………」」

ぎこちなく挨拶を返すと、眼にも止まらぬ速さで四人が声を潜めながら少し離れた場所でひそひそ話をし始める。

「ちよ…………ちよつと！ あれってマジもんのメイドさんっ!?! 秋葉原とかに大量に存在しているコスプレしてる連中じゃなくて、本職の！」

「つばいね…………。前に『少しでもいいから女つばさを勉強しろ!』って弾に無理矢理メイド喫茶に連れていかされた時に見たメイドさんとは服装も雰囲気も言葉遣いも全く違うし…………」

「そんな事をしていたのか…………。しかし、あの物腰はタダ者じゃないぞ。私から見ても全く隙が見当たらない。あれが真の従者なのか…………」

「スカートも全く短くないし、頭の前から爪先まで『メイドさんオーラ』が溢れてるよ…………。なんか、雰囲気は圧倒されそう…………」

四人はそれぞれに初めて見る本物のメイドに対する感想を述べていた。

一応言っておくが、本音も立派な『本職のメイド』ではある。

それつばい雰囲気を醸し出していない上に、本人にその自覚が全く無いから誰も気が付かないが。

「ね…………ねえ…………アレ…………お願いしてみない?」

「え…………? 怒られないかな?」

「その時はその時だ。ダメ元で言ってみればいいじゃないか」

「そ…………そうだね…………」

覚悟が決まったのか、四人は元の場所まで戻ってきて、チエルシーにあるお願い事をした。

「あ……あの……ちよつといいですか？」

「なんでございますか？」

「一回だけでいいから『お帰りなさいませ、ご主人様』って言ってくれませんか！」

「それぐらいでしたら、お安い御用です」

「そ……そうですね。やっぱりダメ……ってっ!？」

驚いている佳織を余所に、チエルシーは彼女の目の前に立ってスカートの端を掴んでから優雅に挨拶をした。

「お帰りなさいませ、佳織お嬢様」

「……」

まさかのアレンジが加わった事で、完全にフリーズしてしまった。何をしたいのか全く分からないセシリアと簪と本音は、完全に目が点になる。

「「「うおおおおおおおおおおおっ!!!」」」

「本場本職の『お帰りなさいませ』キタ———!!!」

「やば……マジで感動してるかも……」

「う……うむ……流石はプロだな……見事な挨拶だった……」

「名前で呼ばれちゃった……」

もう完全にミーハーなファンになりつつある四人。

他の人間達からすれば、彼女達こそがそう言われるべき立場なのだが。

「あ……ありがとうございます。なんか素で感動しました……」

「これぐらいなら喜んで致します」

「何かお礼が出来ればいいんだけどな……」

「それでしたら」

ふと思いついたように、どこからともなくチエルシーがサイン色紙とペンを取り出して佳織に差し出した。

「是非とも、佳織様のサインを頂けませんでしょうか？」

「わ……私のサインっ!？」

「はい。今や世界的な有名人となっている『赤い彗星』のサインを欲しいとずっと渴望しております。この機を逃したら一生直筆のサイ

ンを入手出来ないと思いましたが、不躰ながら、こうしてお願いした次第でございます」

「そ……そこまで言われたらしない訳にはいかないよね……」

丁寧語で捲し立てられた佳織が拒絶なんて出来ようも無く、呆気なく押されてサインをする事に。

「こんなんでいいの……かな？」

「思ったよりも手慣れてるのね」

「……練習したから」

「あ、やっぱり？」

「アイドルのサインとかを参考にして何回も練習したよ。やってる最中、物凄く空しくなったけど」

「気持ちは分かるわ」

一番最初の頃と比べたらかなり上達している。

だが、その成長を感じた瞬間、物悲しくもなる佳織であった。

「あの、よろしければ『チエルシーさんへ』的な事を書いてくれると嬉しいのですが……」

「チエルシー。あまり我儘は……」

「それぐらいなら大丈夫だよ。英語でいいですか？」

「いえ、日本語で結構でございます。オルコット家に仕える者として、ちゃんと勉強はしているので」

「本当に凄いですね……っと。出来た」

書き終えたサインをチエルシーに渡すと、感動のあまり色紙を両腕で抱きしめた。

「ああ……本当に感激です。お嬢様について来て正解でした」

「まさかチエルシー……この為だけに日本まで同行すると言い出したんじゃない……」

「何の事でしょうか？ 私にはサツパリです」

誤魔化した。この主人にして、このメイドである瞬間だった。

「では、お嬢様。私はお部屋にお荷物を運んでおきますので、お嬢様はどうかこのまま皆様方とご一緒に昼食でも楽しんでください」

「え……ええ……お願いするわね」

「お任せください」

ルンルン気分でセシリアの荷物を持ち上げて、そのまま寮の方に向かって行った。

スキップに鼻歌交じりで荷物運びをするメイドの姿は、色んな意味で悪目立ちしていた。

「……個性的なメイドさんだね」

「チエルシーがあんなにもはしゃいでいる姿……初めて見ましたわ……」

主人であるセシリアですら見た事の無かったメイドの一面を垣間見た佳織達は、なんとも言えない気持ちになったと言う。

第65話 夏休みはフラグの宝庫である

学園入り口付近にある門でセシリアと合流をした私達は、そのままの足で食堂まで向かって、既に昼食を食べていたシャルロット&ラウラの二人と一緒にテーブルについた。

「つてな訳で、セシリアんとこの本職のメイドさんにサインを書いてあげたでござる……」

「少し遅いと思っていたら、そんな事になっていたのか」
「ゴザルって……」

冗談でも言わないとやってられないのでござすよ。

「本当に申し訳ないですわ……佳織さん」

「いや、あまり気しないですよ。皆じゃないけどさ、私も最近はこの手の事は割り切り始めてるし」

「佳織もすっかり有名人になってるわよね〜」

「ファンクラブとかがあるだけでなく、ゲームにも登場するぐらいだしね」

「ゲームに登場っ!?!」

『『赤い彗星』の異名は留まるところを知らないんだな……』

私もさ、この異名がどれだけ凄くて偉大なのかって事は物凄く理解しているけど、私自身はごく普通の家庭に生まれた、ごく普通の女子高生なんだよ?」

転生者って部分を除いては……だけど。

「鈴達にはもう聞いたんだけどさ、セシリアやシャルロット、ラウラも似たような事ってした事はあるの?」

「そうですね……。私の場合は、代表候補生と言うよりは、オルコツト家当主として矢面に立つ事が多いですわね」

「成る程」

「そういや、セシリアにはISとは別の部分で有名なところがあるんだった。」

「こうして一緒に学生をしているから、普段は全く意識してなかった。」

「僕も似たようなものかな？　ほら、自分で言うのもアレだけど、デユノア社ってかなり有名だから、その社長の一人娘ってだけで色んな雑誌の取材を受けたりするのに、おまけに代表候補生でもあるからね。つい昨日までは気疲れするような仕事ばかりだったよ……」

社長令嬢も大変なんだな……。

でも、原作みたいに険悪であるよりかは相当にマシなのかな。

「私はあくまで軍人だから、そう言った事は少ないが……」

「何かあるの？」

「うむ。時折、市民を招いてのイベントなどが開催される事があるのだが、その時によく記念写真を要求される事があるな。何が嬉しいのかサツパリ理解出来んが」

「あ……」

幾ら凛々しくしていても、ラウラは可愛いからね。

男女問わず、可愛い子と一緒に写真を撮りたいって気持ちはあるもんだ。

多分、本人が知らないだけで彼女のファンクラブとかもあるんじゃないの？

「ねえ……前々から聞こうとは思ってたんだけどさ」

「何？」

「私……ってよりは、『赤い彗星』の名ってどれぐらい広まってるの？」

「それは……」

「世界中よ」

「ふえ？」

いきなり後ろから声が聞こえたと思ったら、いつの間にか楯無さんがいつものように扇子を持った格好で立っていた。

「楯無さん」

「久し振りね、佳織ちゃん。その様子から見ると、怪我の治り具合はいみたいね」

「はい。まだ大きく体を動かす運動とかは無理ですけど、軽いランニング程度なら問題無いつて病院の先生からも言われました。夏休みが終わる直前には間違いなく全快するって太鼓判を押されました」

「それはよかったわ」

けど、それって言い換えれば私の怪我が全治一か月だったって事なんだよね。

まさか、自分がそんな重傷を負うとは思わなかったよ。

「かいちよく。せかいじゅくってどーゆーこと？」

「そのまんまの意味よ、本音ちゃん。『赤い彗星』の名は今や、世界中のＩＳ関係者に知れ渡っている。特にフランスやイギリス、中国やドイツ。私の所属しているロシアにも知れ渡ってるし。噂じゃイタリヤは本気で佳織ちゃんを日本から引き抜こうと画策してるって聞いてるわ」

「それって、佳織をイタリヤの代表候補生にするって事ですか？」

「多分ね。まだ噂程度の情報なんだけど」

ふひやく……。

あ、思わず変な声が出ちゃった。

「特に凄いのがアメリカね」

「それって……やっぱり例の事件と関係が？」

「ええ……」

周囲をキョロキョロと見渡した後、楯無さんは近くから椅子を引張ってきて私達の傍に座り、顔を近づけて小さな声で話し出した。

「暴走事故を起こしてしまった自国のＩＳを最悪の状況になる前に食い止めてくれた最大の功労者って事で、米国は佳織ちゃんの事を非常に高く評価してるの。今はまだ各国との関係があるから沈黙を保ってるけど、何らかの形でその均衡が少しでも崩れたりしたら……」

「手段を選ばずに佳織を自分達の元に置こうとする……だろう？」

「御明察。流石ね、ラウラちゃん」

……あれ？　もしかしなくても私の立場ってかなり危うい場所にあつたり？

そんな事を言われると、急に胃が痛くなってくるよ……！

「ＩＳに触れてまだ一年も経過していない女の子が、あれだけの戦績を残してるんだもの。そりゃ、上の連中からすれば喉から手が出る程に欲しい金の卵に見えるでしょうね。下手したら、篠ノ之博士の時以

上に世界各国が佳織ちゃんを得る為の競争をし出す可能性もあるわ」
「姉さんの時以上……だと……!?!」

東さんの時も相当に凄かったって聞いてるけどね。

なんせ、I Sを生み出した張本人であり、I Sコアを製作可能な唯一無二の人間なんだから。

I Sが世界の中心になりつつある現状では、あの人を得た国こそがトップに立つと言っても過言じゃないだろうし。

「佳織……」

「大丈夫だよ。私は皆の前からいきなり姿を消したりしないって」

「本当だな……」

「約束だからね。ゆびきりげんまんだからね」

「破つたらしく針千本なんだからね」

「それだけは勘弁だなあ……」

聞いてるだけでも痛そうだし。

「……なんだか私のせいで変な空気になっちゃったわね。ごめんなきい」

「気にしないでくださいまし。遅かれ早かれ、この問題にはいずれぶつかる日が来るのですから」

「セシリアの言う通りです。その時に対する心構えが出来たと思えば、決して無意味な話じゃなかったと思います」

「そうだな。私は佳織がそう簡単に他国などに靡くとは思っていないがな」

「私も。変な言い方かもしれないけどさ、どこかに所属するってのは……なんか『赤い彗星』っぽくない」

「一夏……」

そうかもしれないね。

本当の赤い彗星は軍に所属していたけど、時代が移り変わるごとに彼の立場は大きく変化していった。

それに、彼は自分の事を『宇宙を駆ける騎士』と言っていた。

宇宙空間を自由自在に飛翔する彼が、何かに縛られるのはおかしい。

実際には色んなしがらみに縛られてたけど。

「佳織には最後まで『自由』でいて欲しいかな」

「そうだね。私もそうありたいと思うよ」

自由……か。

私自身がそう思っても、この『世界』がどこまでそれを許してくれるかな……。

「変な話をしちゃったお詫びに、私がデザートを御馳走するわ。何がいい?」

「黒蜜団子とか食べたいです!」

「佳織ちゃん……意外と渋いチョイスするのね……」

そう? 和菓子は日本人の魂じゃない?

おはぎにみたららし団子、女の子は甘いお菓子は大好物なんじゃないの?

・
・
・
・
・
・
・

昼食を食べた後、皆は揃って寮の自室に帰る事にした。

夏真っ盛りの陽気は女の子のデリケートなお肌には大敵だからね。

日焼け止めも塗らずに外出するような猛者はここにはいなかった。

と言っても、ラウラだけは例外的に気にしてなかったけど。

でも、シャルロットが必死に説得して、彼女はなんとか納得してくれた。

んで、私は寮に戻る前に少しトイレに寄って手を洗っている最中なんだけど……。

「思ったよりも手がベタついちゃったわね。ちゃんと手を洗っておか

ない」と

鈴も一緒に手を洗っていますのです。

楯無さんの奢ってくれた食後のデザート。

鈴は私と同じ黒蜜団子を選んで食べた。

別にそれ自体はいいんだけどさ、微塵も迷った素振りが無かったよね。

「ふく……綺麗になった」

手を振って水分を落として、後はハンカチで拭き拭きと。

前世ではこんな事、全くしてこなかったな。

トイレで手を洗ったら、すぐに自分の服で拭いてたし。

心が体に惹かれて、完全な意味で女になりつつあるって事なのだろうか。

「ところで佳織」

「ん〜？」

「今度の土曜日って何か予定ってある？」

「土曜日？ そ〜だな〜……」

皆と違って、今の私ってマジで暇人まっしぐら状態だし。

仮に予定があるとすれば、病院に行くぐらいかな？

「土曜は病院の日でも無いし、大丈夫だと思うよ」

「そ……そう」

ん？ 何をそんなに安心してるんだ？

「実は……さ。あたし、こんな物を持ってるんだけど……」

照れながら鈴がポケットから取り出したのは、二枚のチケットだった。

「ウォーターワールド？」

「そ。今月出来たばかりの場所で、前売り券は今月分が全て完売らしいわ」

「それだけ期待されてるって事か。ん？ それじゃあ、このチケットは？」

「あたしが買ったの。勿論、自腹で」

「スゲ〜……」

「これってかなりのレア物なのよ？　なんせ、当日券に至っては開場二時間前に並ばないと買う事すら出来ないぐらいだし」

「テーマパークって、どこもかしこも似たようなもんだね……」

どこぞの夢の国だってそうだし、夏休みに突入しているこの時期は、更に倍率が上がっている事だろう。

それをゲットした鈴には純粹に驚嘆しかない。

「よければさ、一緒に行かない？」

「けど、私は怪我人だよ？　そりゃ、前よりかは相当によくはなってるけど」

「ダメ……かしら？」

そんな目で見ないでくださいな。

まるで私が悪いみたいじゃないか。

「そこまで動く事は出来ないけど、それでもよかったら一緒に行くよ。ずっと家に引きこもりっぱなしってのもアレだと思ってたし」

「ホントっ!?! やった!!」

そこまで喜ばれると、なんかこっちも照れくさいね……。

でも、鈴と二人きりで遊びに行くとか、かなり久し振りかも。

中学の時は一夏や弾がいつも一緒だったし。

(臨海学校でいつの間にか本音が大きくリードしてたし、このまま黙って敗北するアタシじゃないって事を、ここで教えてあげるわ！

この夏で佳織と一気に近づいて、そしてそのまま……♡)

「うへへへ……」

り……鈴……ちよつと笑い声が怖いよ？

その後、待ち合わせ場所を決めてから話は終わった。

けど、私達は知らなかった。

この時、物陰から密かに私達の話聞いていた人物がいた事に。

「抜け駆けは許しませんわよ……鈴さん……!」

……

「なに？ ウォーターワールド？」
「はい！ 偶には息抜きでもしたらいかかと思ひまして！」
「ふむ……」

格納庫で自身のISの調整をしていたフロントルは、アンジェロ直属の『フロントル親衛隊』に所属している女性から一枚のチケットを渡された。

「本当は私が行こうと思つたんですけど、その予定の日にアンジェロ隊長から任務を言い渡されてしまつて……」

「そうか。だが、諸君が任務に励んでいる時に私だけ寛ぐというのもな……」

「何を仰います！ 大佐は常日頃から私達以上に頑張つていらつしやるじゃないですか！ 時には心と体のリフレッシュでもしないと身が持ちませんよ！」

「そ……そうか」

凄い剣幕で迫ってくる女性隊員に、思わず後ずさりをしてしまうフロントル。

だが、驚いている一方で、彼女の行っている事も一理あると思つていた。

「だが……そうだな。お前達に休息を促しておきながら、肝心な私が休まないのは論外か」

「そうです！ 休息もまた立派な任務ですよ！」

「確かにな。わかつた。このチケットは有難く頂戴しよう。感謝する」

「はいー！」

女性隊員から貰つたチケットをポケットに仕舞いながら、フロントルはある事を失念していた事に気が付いた。

(しまった……。私は水着なんて持ってないぞ……)

だがしかし、行くと決めた以上は引き下がれない。

仕方がないので、明日にでも水着を買いに行こうと思ったフロントルであった。

こうして、またもや妙なフラグが立ったのであった。

第66話 伏兵は一人じゃない

「なんでよ……」

「あはは……」

「なんでアンタがいるのよ……!?」

鈴と一緒にウオーターワールドに行く約束をした日。

私は鈴と待ち合わせをした場所であるIS学園の正門前に行くと、何故かセシリアがニコニコ笑顔でそこに立っていた。

見るからに出かける用意をしていて、何かの荷物が入っているバッグを持っている。

なんで彼女がここにいいのか分からないまま、こうして鈴の事を待っていたんだけど……。

「鈴さん」

「な……なによ……」

「貴女……佳織さんと一緒にウオーターワールドに行くつもりだそうですわね?」

「な……なんでセシリアがそれを……!」

「他の方々は出しぬけても、この私だけはそうはいきませんことよ?」

「うぐ……!」

もしかして、前に私と鈴がトイレでした会話を聞いてた?

全く気が付かなかった……。

「で……でも! あそこのチケットは激レアなのよ! そんな簡単に入手は……」

「あら、こんな所にこんな物が」

「うそおっ!」

余裕たつぷりにセシリアがバッグの中から取り出したのは、鈴が持っているのと同じチケット。

しかも、皺一つついていない超新品。

「オルコット家の力を持ってすれば、この程度は造作も無い事ですわ」
「ブルジョアめ……!」

さ……流石はイギリスの名家のお嬢様……!

チケット一つ手に入れる為に家の力を使うとは……！

「これで、私も一緒に行っても問題無いですわよね？」

「うぐぐ……！」

チケットで顔半分を隠して、なんだか楯無さんみたい。

一方の鈴は本気で悔しそうにしてる。

仕方がない。ここは助け船を出してあげますか。

「鈴」

「佳織……」

「仕方がないから、今日は三人で楽しもうよ」

「でも……」

「その代わりと言っちゃなんだけど、またいつか時間を作って二人でどこかに出かけよう？」

「え？ いいの？」

「勿論。だから、機嫌を直して……ね？」

ここでウイंक&舌を少しだけ出す。

これでどうだ！

「そ…そうね！ ここで変に渋っても大人げないしね！ 仕方がないわね〜！ 今日だけよ？」

「うん」

よし。これでなんとか、今日一日を気まずい空気のまま過ごす事だけは回避出来たぞ！

ギスギスしたままじゃ、楽しめるものも楽しめないしね。

「話は纏まりましたの？」

「一応ね」

「そうですか。では、早く行きましょう♡」

「わっ!？」

いきなりセシリアが私の腕にしがみ付いてきた!?

「ちよ……! どさくさに紛れて何してんのよ!」

「あら? 何の事かしら?」

「この〜……! じゃあアタシも!」

「ええっ!？」

ちよ……鈴もっ!?

両腕にしがみ付かれたら、本気で歩きにくいんですけどっ!?

「ほら、さっさと行くわよ佳織!」

「あのですね!? この恰好は物凄く歩きにくいんですけどっ!」

「文句言わない!」

「は……はい……」

怖えく……女子高生怖えく……。

あ、今は私も立派な女子高生なんだった。

こうして、女三人で姦しくお出かけする事になったのでした。

・

・

・

・

・

モノレールに乗り、そこからバスを乗り換えて一時間弱。

途中で水分補給などもしながらも、私達は本日の目的地である
ウォーターワールドに到着した。

「思ってたよりも大きいんだね……」

「文字通り、新装開店してるからね」

「夏休みという事もあって、かなり賑わってますわね」

セシリアの言う通り、受付があるゲート付近だけでもかなり沢山の
人間がいる。

しかも、その殆どがカップルだったり家族連れだったりだ。

取り敢えず、リア充は死ぬ。そして、お父さんは家族サービス頑
張ってください。

「これ……入るまでも時間が掛かりそうね……」

「地味に行列が出来ますものね……」

「念の為と思って、その自販機でジュースを買ってきて正解だったね……」

脱水症状になるのが怖くて買ったけど、早くも役目を果たしてくれるとは思わなんだ。

こりや、中に入っても油断せずにこまめに水分補給は行った方がいいな。

「まずは並びましょ。チケットを渡さないと始まらないし」

「ですわね。佳織さん、行きましよう」

「うん………っ!?!」

え………? なに………この感じ………。

「どうしたの? 気分でも悪い?」

「あ………ううん。なんでもないよ」

もう何も感じなくなつた………。

でも、なんだつたんだろう………? 凄く妙な感覚だった。

まるで、自分がもう一人いたような感じがした………。

この感覚は………前にも一回体験したような気が………。

一体何処だつたつたつ………?

・
・
・
・
・
・
・

「まさか、チケットを渡すだけで10分近く掛かるとは思わなかったわ……」

「あれだけ賑わっていれば無理も無いですけど、それでも長く感じましたわね……」

「たった10分。されど10分か……」

やっこの事で園内にはいることが出来た私達は、更衣室へと直行する事にした。

とつとと水着に着替えて、プールで涼みたいからだ。

「佳織の水着って臨海学校の時と同じやつ？」

「うん。だって、まだ一回しか着てないんだし、勿体ないじゃない？」

「佳織……」

「な……なに？」

「その節約精神はいいけど、女の子としてはどうかと思うわよ？」

「ええ？」

ど……どーゆー事？

別に何もおかしくないよね？

「あたしも臨海学校の時と同じ水着を持ってきてるから、あまり偉そうには言えないけど、女の子としてもっとオシャレに気を使うべきよ？」

「自分では十分に使ってる気なんだけど……」

「最低限はね。あたしは、もっと色んな服を買うべきだって言ってるの。スタイルもいいんだし、マジで勿体ないわよ？」

「うーん……」

そう言われてもな。

人並みには気を付けてるつもりなんだけど……。

「テストパイロットとして、デユノア社から給料は貰ってるんでしょ？」

「まあね」

前に通帳を見た時は驚きすぎて銀行で大声を上げちゃったけど。

だって、どう考えても一介の女子高生に払うような金額じゃなかったんだもん。

「なら、それで買えばいいのよ。佳織が自分で稼いだお金なんだから、誰も文句なんて言わないから」

「そりゃ……ね」

でも、それとこれとは話が別な気がするんだよね。

なんて話している内に、更衣室に到着。

賑わっている割には中は意外と空いていて、どこでも好きな場所で着替える事が出来そうだ。

「そういや、入り口の所にあった案内板に更衣室は何か所かあるみたいなことを書いてあったつけ。」

「それなら、この状況も納得できるかも。」

「ほら。セシリアなんて見てみなさいよ。ちやつかりと新しい水着を買ってるじゃない」

「ホントだ」

「折角日本にいるんですもの。様々な水着を着てみたくなつたのですわ」

「なんて言つて。本当はそのオニユウの水着で佳織を誘惑する気だつたんでしょ?」

「べ…別に関係ありませんわ!!」

「おうおう。顔を真っ赤にしちゃつて。」

でも、照れて慌てるセシリアも珍しいな。

なんか普通に可愛いと思つてしまつた。

私達は三人並んでロッカーを使つて、話しながら水着に着替える。

「あ、今気が付いたけど、私の隣にも着替えてる人がいるや。」

「少し五月蠅かつたかな……。」

「ふう……。水着なんて初めて着るから、柄にもなく悪戦苦闘してしまつた。これでよかつたのか?」

「ほえ?」

「こ……この私そつくりの声つて……まさかっ!」

「む? さつきから聞こえていた声は……」

ロッカーを閉めてから、向こうもこつちを見た。

そこにいたのは、紛れもない彼女だつた。

「フ……フロントタルっ!」

「矢張り佳織か。これも運命か……」

髪型と髪の色以外は私と瓜二つの少女、フル・フロントタルがピンク色の可愛らしいビキニを着て隣に立っていた。

「なんで彼女がここにいるのさ……。」

・
・
・
・
・
・

水着に着替え終わった後、私達は園内をぶらついてた。
何故かフロントルも一緒に。

「へえ。そんなじゃ、アンタはあの旅館で佳織と知り合ったんだ」

「そうなるかな。あの時の事はいい思い出になったよ」

「そ…そう。それは何より…」

そして、ビックリするぐらいにコミュ力が高いんだよ！

あつという間に鈴と仲良くなってるし！

「で…でも…『フル・フロントル』…ですか…」

「ん？ なに顔を真っ赤にしてんのよ、セシリア」

「なんでもありませんわ…」

そっか。セシリアはフロントルの名前の意味を理解しちゃってるのね。

年頃の女の子の名前に『全裸』はないよね。

いや、成人男性の名前でも有り得ないけどさ。

「しっかし、フロントルって何から何まで佳織にそっくりよね。まるで双子みたい」

「「そうかな？」」

「ほら。言葉も被ったし」

「「あ…」」

なんで妙なところでユニゾンするんだよ私達！

本当は全く違うのに、マジの双子みたいじゃんか！

「佳織と双子か…悪くないな」

「ちよつとっ!?」

「冗談だ」

君の冗談は洒落にならないんだよ……。

「ところで、我々はどこに向かっているのかな?」

「別にどこって訳じゃないわよ。適当にぶらついて、よさそうな場所があれば入るってだけ」

「ふむ……そういうものなのか……」

この反応……もしかして、これ系の場所に来るのは初めて?

だとしたら、増々彼女の素性が気になってしまう。

「夏のプール……それだけで人口密集地帯になるのは明確ですわね」

「だね。涼むのが目的の筈のプールなのに、人が沢山入り過ぎて、逆に汗掻いてる人がいるし」

これじゃ本末転倒でしょ。プールに来た意味無いよ。

「これは……来る時期を見誤ったかしらね」

「八月の終わり頃に来れば、少しは空いてたかもだね」

「確かに。今は夏休みのど真ん中ですものね。ある意味で一番、人が集まってくる時期ですわ」

この時期に肖って売店とかも頑張ってるけど、かなりの行列が出来て客をさばききれてないし。

あゝあ。店員さんが困ってるよ。

「折角、波があるプールとか入りたかったのにな」

「ここってそんなのがあるの?」

「みたいよ? それがこの目玉みたいなことをCMで言ってたし」

「そうなんだ」

波のプールか……。それは私も興味あるかも。

「とは言え、このままでは日光で体力を消耗する一方だし、まずはどこか日陰にでも入って休みながらこれからの事を考えるのが得策だと思うのだが?」

「それがよさそうね」

「私もフロントタルさんに賛成ですわ。病み上がりの佳織さんに無茶はさせられませんから」

お。嬉しい事を言ってくれるね。

でも、私もそれには賛成かな。

「ねえ。あそこの喫茶店、席が一つ空いてない？」

「本当だわ。あの大ききのテーブルなら、この四人で座っても問題無いかも」

「誰かに取られない内に、早く行きましょう」

「それがよさそうだ」

そんな訳で、まだ碌に水に浸かっているにも拘らず、早く私達は休憩をする羽目になった。

にしても、温泉に続きプールまで一緒になるとは……。

何気に私とフロントタルって裸の付き合いが多くない？

第67話 水上ペア障害物レース（スタート編）

ウォーターワールド内にある喫茶店に入り、店員さんに空いている席へと案内された私達。

丁度、狙っていた席だったので四人仲良く並んで座る事が出来た。取り敢えず、適当にドリンクでも注文してしましましょうか。

「私はオレンジジュースで」

「ならば、私はアイスコーヒーを頼もうか」

「んじゃ、あたしはアイスココアをお願い」

「では、私はアイステイーを」

うん。分かってはいたけど見事なまでに皆バラバラですね。

注文をメモして奥に消えた店員さんには同情しよう。

「にしても、こうして離れた場所から改めてみると、本当にどこもかしこも人ヒトひとで一杯よね」

「時期が時期なだけに……と言ってしまったえばそれまでですけど、それでもこの人の量は異常ですわ……」

「まあ、ある意味で日本の都会の原風景みたいなもんだし？」

「ふむ……誰もが考えることは一緒……ということか」

本来、プールって涼を取るために来る場所の筈なのに、これじゃあ全く寛げないでしょ。

冗談抜きで本末転倒な事態だと思う。

あく…ほら。プールサイドで待機している監視員の人達も忙しそうに東奔西走してるし。

「今日みたいな日だと、スタッフの人達も休む暇がないだろうね」

「これじゃ、客よりも先にスタッフの方がダウンしそうよね」

なんとも世知辛い世の中を女子高生の身で嘆いていると、店員さんが注文の品を持ってきてくれた。

「ご注文は以上でよろしいでしょうか」

「はい」

「では、ごゆっくり」

この状況ではゆっくりしたくても出来ないだろうに……。

定型文だと分かっているけど、ツツコまずにはいられない。

「あく…生き返るわ…」

「まだ何もしてませんけどね」

「でも、この陽気だと何もしなくても体力は奪われていくよね」

「確かに。油断せずに水分と塩分の補給は怠らないように心掛けないとね」

フロントルの言う通り。水分だけじゃなくて塩分もちゃんと取らないと、本気で熱射病で倒れかねない。

屋外では当然だけど、この季節は室内でも油断は禁物だ。

暫くこうしてのんびりする空気が流れ始めた時、各所に設置されたスピーカーからいきなり園内放送が聞こえてきた。

『これより！ 本日のメインイベントである水上ペア障害物レースの受付を開始します！』

「「は？」」

水上ペア障害物レースとな…？

これって原作ではセシリアと鈴が参加したイベントだったような気が…。

『イベント開始は午後の一時から！ 参加希望の方々は十二時までにフロントまで来て参加受付を済ませてください！』

これだけを聞けば、明らかに客引きの為のイベントだと思うが、スタッフ側はこれだけでは終わらせなかった。

『猶、優勝したペアには沖縄五泊六日の旅へとペアで招待致します！！』

「「え？」」

あ。今、セシリアと鈴の耳がピクンってなった。

どう考えてもさっきの『沖縄旅行』って単語に反応しましたね。

「沖縄…」

「旅行…」

「「しかもペアで…」」

い…嫌な予感がする…。

「佳織」

「佳織さん」

「「行きましよう（わよ）！」」

「だと思ったよ……」

二人揃って私の肩を掴んで目を光らせてるんだもん。

原作一夏でもない限り、絶対に二人の考えている事が分かるよ

……。

「ふむ……ペアで出場か……面白い……！」

ふえ？ ま……まさか……フロンタル……？ 冗談だよ……？

……

……

……

……

……

「「なんでこうなった……」」

あの後、私は三人によって受付まで強制連行されて、そのままの流れで一緒にレースに参加する事に。

んで、その際にくじ引きでペア決めたんだけど、その結果が……。

「フツ……。私と佳織のペアならば優勝は間違いあるまいよ」

「ソーデスナー」

鈴とセシリアのペアと、私とフロンタルのペアに分かれた。

鈴達はともかく、私とフロンタルは瓜二つの顔なんだから、こうして並ぶと本当の双子みたいだ。

でも、不思議と嫌な感じはしないんだよね。

それどころか、なんだか落ち着きさえ感じる。

「それでは！ 第一回ウォーターワールド水上ペア障害物レースの開催です!!」

司会のお姉さんがジャンプしながら叫ぶと、それだけで観客席から歓声があがる。

特に男連中が鼻の下をだらしなく伸ばしている。

あゝ……男のあんな姿を見た時って、女はこんな気持ちになるんだなゝ……。

つーか、どうして参加選手の全員が女性なんだよ。

ここは男も参加しろよって言ったかったけど、どうも男の人達は大会の空気を読んで自ら参加を辞退したようだ。

なんかそれっぽい事を観客席で言ってるのが聞こえた。

「皆さん！ 参加者の女性陣に今一度、惜しみの無い拍手を!!」
しなくていい。

うう……：：：ISの試合である程度は慣れたとはいえ、流石に水着姿の状態でこんな大衆に晒されるのはかなり恥ずかしいよゝ！

「心配は無用だ」

「フロントアル？」

「他でもない、私達二人が組むのだぞ？ 結果は既に確定しているも

同然だ」

「そう……だね。うん！」

「いい顔だ。では、準備運動でもしておこう」

屈伸に数回のスクワット……つと。

後は腕とかも伸ばしておかないとね。

「もうご存知かと思いますが、優勝賞品は常夏の楽園である沖縄旅行五泊六日の旅！ 皆さん、気合を入れて頑張ってくださいね！」

勿論。やると決めたからには全力で行くよ。

私は病み上がりだけど、こんな時ぐらいいは本気出してもいいよね？

私達の隣にいる同級生コンビは特に要注意だし。

だって、さつきから髪が逆立ちそうな勢いで気合入ってるもん。

「再度のルール確認です！ レースの舞台となるのはこの50×50メートルの巨大プール！ その中央に設置してある島へといち早く

渡り、そこに設置してあるフラッグを取ったペアが優勝となります！

コース自体はご覧の通りに円を描くような形で中央の島へと続い

ています。その道中に設置された数々のトラップは、基本的にペアでなければ突破不可能な仕組みとなっております！　つまり、このレースでは足の速さや運動能力以上にペアとなった二人の相性と友情が試されるわけですね！」

友情ね〜。

私とフロンタルはまだ出会って間もないけど、それでも彼女とは不思議な縁がある。

それに、絆の深さは一緒にいた時間の長さとは比例しない。

「どうして中々……。あの中央の島が最も厄介と見た」

「だね。あれだけ空中に浮いてるし」

正確には上からワイヤーで吊り下げられてるんだけど、どっちにしても難しいのには変わりがない。

ゴールこそが最大の難関とは、このレースを考えた人はいい性格をしてるよ……。

「厄介ではあるが、我々の前では見戯に等しい」

「少なくとも、私達は『普通』じゃないしね……」

鈴とセシリアはちゃんとした訓練を受けた代表候補生で、私は特典を授かった転生者。

フロンタルの正体は未だに不明だけど、アンジェロを従えて『大佐』なんて呼ばれている時点で大体の察しはつく。

「さあー。いよいよレースの開始です!!　位置についてよ……」

私達を含めた全員がそれぞれに走り出す体勢になる。

そして、競技用のピストルの音が空高く鳴り響いた瞬間、私達は一斉に走り出した。

目指すは天空に浮かぶゴール。ただそれだけだ。

・
・
・
・
・
・
・

レース開始直後、いきなり前方を防いできたペアの股の下をスライディングのように潜り抜けてから全力ダッシュ。

私達と同様に別のペアに足を掛けられそうになったセシリア&鈴ペアも、それをジャンプして難無く突破。

実はこのレース、ルール上で他の選手の妨害が許されていたりする。

一体何処のレースゲームだっつー話ですよ。

バナナの皮や赤い亀の甲羅とか投げてこないだろうか？

「行くぞ佳織!!」

「うん!!」

「こっちもダッシュよ！ セシリア！」

「分かってますわ!!」

まだレースも序盤だというのに、既に参加選手は二つのグループに分かれていた。

一つは只管に走って逃げ切る事を考えた真面目組と、相手の妨害をする事ばかりをしている過激組に。

勿論、私達と鈴達は真面目組だ。つていうか、私だけしかいないって言った方が正しいか。

後ろはもう完全に乱闘騒ぎになってるし。

「これはさっきのお返しよ！」

「とくと受け取りなさいな！」

「キヤアアアアアアアアツ!!」

り：鈴とセシリア組がさっき足を掛けようとしてきたペアを蹴ってプールに落とした……。

何気にあのコンビって息ピッタリじゃね？

「では、君達にもご退場願おうか」

「えいー！」

「うそおおおおおおおおっ!!」

私達も、再び仕掛けてきたさっきの妨害コンビへ向かったのツインキック！

二人仲良く水の中へとドボンしてしまいましたとき。

「ちよ…ちよつと待って！ 鈴とセシリアも！」

「む？ どうした？」

「佳織さん？」

「あ……佳織が言いたい事が分かったかも……」

生き残った他の参加者達の視線が全て私達に集中してる……。

間違いない……私達が最優先排除目標に設定されてしまった？！

「私達は参加者達の中で明らかに最年少だしな。それが最も活躍しているのが我慢ならないのだろう」

「冷静に言ってる場合か！ 来るわよ!!」

鈴の叫びと同時に、全員が一斉に襲い掛かって来た！

その目は完全にバーサーカーになってる。

って言うか、約数名はもう完全に人語を失ってるし!?

「佳織！ フロントタル！ ここは一時休戦して協力して迎え撃つわよ！」

「妥当な案だ。佳織、いいな？」

「無論だ」

ありや。ちよつとだけ私も『赤い彗星モード』になってるや。

もうI Sを展開しなくてもなっちやうのね……。

「私達四人に！」

「そのような妨害は！」

「通用しないと！」

「思っ頂きますわ！」

次から次へと襲い掛かってくる暴走した選手たちを投げたり落としたりして、少しずつ数を減らしていく。

その際、しれっと彼女達に正気を取り戻させる為の工作も忘れな
い。

「イヤアアアアアアアアアアアアツ!?!」

「フツ……。これで少しは頭が冷えただろう」

「少し……頭を冷やそうか……?」

私とフロントルの手には、妨害してきた女性達の水着のブラが握られている。

攻撃を仕掛けながら水着をはぎ取り、彼女達の動きを完全に封じると共に正気を取り戻させた。

同じ事はセシリア達も考えていたようで、二人の手にも水着のブラが握られていた。

「おおっつと!!」フル・フロントル&仲森佳織ペアとセシリア・オルコット&凰鈴音ペア、最年少ながらも一騎当千の大活躍!! あの二つのペアにより、殆どの選手が失格となってしまうたく!!」

どんなもんだい! 伊達に死の淵から蘇ってないんだよ!

え? そんな事は何の自慢にもならないって?

「これで邪魔者は消えたわね……」

「そうだな。では、ここからは……」

「純粹な勝負といきましょうか!」

「負けないからね!」

ここで思った以上に時間を使ってしまったから、先頭グループとは差が開いてしまった。

けど、私達ならば今からでも十分に逆転は可能な筈!!

改めて、私達は目の前にある第一関門である一つ目の小島へと向かって行くのだった。

第68話 水上ペア障害物レース（ゴール編）

第一関門は、ロープで繋がれた小島を片方が固定をして渡り、それを向こう岸で支えてからもう一人が渡るってものだった。

これは前にバラエティ番組で見た事がある。

あの時は芸人が面白おかしく渡っていたけど、生憎と私達は芸人じゃなくて女子高生。（約一名を除く）

だから、遠慮無く本気で行かせて貰う！……って、なんでさっきからフロンタルはこっちを見てるの？

「佳織。どうやら、他の連中を倒している間に、我々は想像以上に時間を食ってしまったようだ」

「そうだね。だからこそ一刻も早く……」

「故に、私はここで強行突破をする事を提案する」

「は？」

きよ……強行突破とな？

「向こうもその気のようにだしな」

「え？」

私が振り向くと、そこでは鈴とセシリアが屈伸をしたり腕を回したりと、軽い準備運動をしていた。

まさかとは思うけど……二人とも……。

「佳織が考えている事は正しいと思うぞ」

やっぱりですかっ!? ……なんでフロンタルが私の考えた事を讀んだのかは、今は考えないようにしよう。

「佳織。私の体にしっかりと掴まれ」

「へ？ 掴まるって……キヤアアッ!?!」

ちよ……なんでいきなり私の事をお姫様抱っこするのっ!?

本気でめっちゃ恥ずかしいんですけど!?

ほらく! ギャラリーの人達が凝視してるしく!!

あと、普通にセシリアと鈴がこっちを見る目が怖い!!

「あたしらの前で佳織をお姫様抱っことか……」

「いい度胸してますわね……!」

ハイライト！ 二人共、目からハイライトさんが出張してるんですけど!?

早く呼び戻して〜!!

「では行くぞ」

「ちよ……待っ……!」

私の言葉が最後まで紡がれる前に、フロンタルは私を抱えた状態のまままで全力疾走し、そのままの勢いで大きくジャンプ!

まるでオリンピックク選手のような見事な大ジャンプで渡りきった。

本来ならば一人分の重量しか支えられない筈の小島だけど、フロンタルはその小島が完全に沈みきる前に間髪入れずに再びジャンプをしてから見事に向こう側へと降り立った。

「フツ……」

その人間離れた動きに私も鈴とセシリアも、他の選手たちも、そして会場にいる全ての人間も一瞬だけ呆然となった。

けど、次の瞬間には一気に沸き上がり、大歓声が響き渡った。

「うおおおおおおおっ!! あの子マジでスゲエエエエエエエツ

!!!」

「もしかして、なんかのスポーツでもやってんのか……?」

「揺れてたな……」

「ああ……揺れてた。見事に美少女二人のデカメロンがバインバインのブルンブルンだ」

「俺……今日ここにきて本当によかった……」

うん。一部の男連中は後で覚えとけよ。

「くっ……! フロンタル……そっくりなのは顔だけじゃないって事ね!」

「最初から油断をしたつもりはありませんけど……認識を改めますわ!」

フロンタルの動きに触発されたのか、鈴達も見事過ぎる動きで軽やかにジャンプして、こっちまで渡って来た。

『これは本当に凄すぎます!! 彼女達はいずれも女子高生らしいですが、どうみても常人の動きではありません!! これはもう、優勝はあ

の二組のどちらかで決まりなのか?!?」

だろうね。正直言って、普通の人達が何の対策も無しに私達に勝るとは思わない。

少し前までは『私は普通だ』って言ってただらうけど、転生特典がある上に、色んな修羅場を経験してきたせいか、しれつと身体能力とかガチで向上してるんだよね。

だからこそ、今の私はこの三人に追従出来てるんだけど。

「ふむ……このままの方が効率がよさそうだな」

「え？ あの……フロンタル？」

「では佳織。私の首元に腕を回しておきたまえ。落ちないようにな」

「あはは……」

降ろす気は全く無いのね……。

これって、私だけがピンポイントで羞恥プレイじゃん!!

結局、私達はこのままの状態で第二関門まで共に走っていき、二つ目の小島の場所まですぐに辿り着いた。

『第二関門は斜めになった複数の小島を渡って頂きます！ ただ単に斜めになっただけと思うべからず！ これが意外と難しい!! スタッフも試しに何回かチャレンジをしましたが、その殆どが水の中に落ちてしまいました!!』

それは単純にスタッフさんの運動神経が悪かっただけじゃない？

いや、こっちの運動神経が異常なのか？

「これは勢いをつけて一気に行くべきと判断する」

「それはあたし達も同感ね」

「少しでも油断をしたら、一気に真っ逆さまですわ」

これも前にテレビで見た事がある。

シンプルな仕掛け程、想像以上に難しかったりするんだよね。

「少し無茶をする。私から離れるなよ」

「う……うん」

フロンタル。それって普通は男の子が女の子に言うべきセリフだよ。

でも、ちよつとだけ胸キュンしちゃった。

少しだけ後ろに下がってから助走をつけて、そこから勢いをつけて
リズムカルに連続ジャンプ！

「はっ！… ふっ！… ほっ！…」

す…凄い！ 全く危なげも無くクリアしちゃったよ！

フロンタル自身も全く汗とか掻いてないし！

「アタシ等も続くわよ！」

「合点ですわ!!」

うおっ!?! あの中英ペアも普通に渡って来たしっ!?

改めて、代表候補生って普通の人間じゃないって思うよ……。

「このまま」

「一気に！」

「突き進みますわよ！」

渡った感動も無く、私達は次のエリアへと移動。

第三の関門は、なんとターザンロープで向こう岸に渡るやつだった。
た。

この競技を考えた奴……絶対にエロい構図しか考えてないな……。

「ふむ。これは流石に抱えたままでは渡れないな」

「だ…だよね〜！ 仕方ないよね〜！」

ほっ……。やっとこの羞恥から解放される……。

でも、このターザンロープ……意外と距離があるな。

なんか、途中で手が滑って落ちちやいそうだよ。

「どっちが先に渡る？」

「ここまで来たら、どっちでもいいような気がしますわ」

「それもそうね。んじやまずは……」

鈴達が話し合っている間に、いきなりフロンタルが私の手を掴んで
ロープを掴ませた。

「私が先に行くの？」

「いや。そうではない」

「それじゃ……」

本気でどうする気？ 全く意図が読めないんだけど。

「この状況でも、時間短縮をする方法はあるって事さ」

「どうやって……」

私が訪ね終える前に、フロンタルも私の手に被せるようにしてロープを掴む。

え？ ちよい待ち。これってもしかして……もしかします？

「私が君を落ちないようにしよう。さあ行くぞ」

「あのフロンタルっ!? この体勢は拙いんじや……キヤアアアアアアアアッ!」

私の言葉なんてガン無視して、フロンタルは地を蹴って私をロープと自分の体に挟むようにしてから空中に身を投げだした。

「ぬあああああああつっ!!」

お先にく♪ なんて言えるだけの余裕があればどれだけよかったことか。

必死にロープに掴まりつつ、背中にはフロンタルの大きな胸の感触が直にある。

恐怖とドキドキが一緒になって、もうわけわかんない事になってるんですけどく!?

「よっ……と」

「キヤッ!」

着地の瞬間に少しだけ足を滑らせて、思わずフロンタルの胸に抱き着くような形になった。

そんな私を彼女も優しく受け止めてくれて、自然と目が合ってしまった。

「大丈夫か？ 足元には気を付けたまえ」

「う……うん。ありがとね……」

「どういたしまして。お姫様」

「おひ……!」

なんでそんなセリフが素面で言えるかなく!?

いや、これに関しては私も人の事は言えないか。

「「こらそこく!!」」

「「あ」」

いつの間にか鈴達もこつちに渡って来てたや。

物凄い怖い顔をしてるけど。

「しれっといい雰囲気になってるんじゃないわよ……!」
「今日会ったばかりなのに……なんでここまで発展してるんですの……!」

いや、私とフロンタルは今日が初対面じゃないし。

あれ? さっき言わなかったっけ?

その後、私達は怒りのスパーモードになったセシリアと鈴のコンビによって僅かではあるが抜かれてしまった。

着かず離れずのデットヒートを繰り返している内に、ゴール最後の関門が立ちはだかった。

「む?」

「え?」

「は?」

「へ?」

私達四人の前にいるのは、いずれも筋骨隆々な競技用ビキニを着た三人の女性達。

よく見たら彼女達が着ている水着にはウォーターワールドのロゴが刻まれていた。

どうやら、あれはスタッフ用に支給されている物のようだ。

ってことは、最後の関門ってのは……。

『ゴール前の最後の難関!! それは、この日のレースの為にバイトとして雇った女子ボディビル日本代表選手の方々です!!』

「「なんですとおおとおおおつ!」」

「「フンツ!!」」

「ほう……?」

どう考えてもオーバーキルでしょうが!! ここのスタッフはマジで何を考えてるんだっ!?

もしも私達がこのレースに参加してなかったら、一般の人達が彼女達と相対する事になるんだぞ!! 絶対に勝ち目なんて無いだろうがっ!?

『この最強最後の関門を突破した先に、栄光のゴールが待っています

!! 果たして、あの美少女四人はどうやって、あの難関を潜り抜けるのでしようかつ?」

アツハツハツく! 完全に他人事だなオイ!

「我々は!」

「あの『黒い三連星』に憧れ!!」

「今日までずっと体を鍛え、チームワークを極めてきた!!!」

「その私達に! そう簡単に勝てると思うな!!」

……なんだって? 今……なんて言った?

あろうことか『黒い三連星』に憧れた?

いや、それは別にいい。

他の人が誰に憧れを抱いても、それはその人の勝手だ。

でもさ、この感じって……。

(明らかにあの人達を意識して、真似しようとしてるよね……?)

チームワークを極めてきた? ふざけるな。

私から見ても、こいつ等の動きは彼等に比べてお粗末が過ぎる。

これでは明らかに猿真以下のお遊戯だ。

「佳織……」

「フロンタル……」

どうやら、フロンタルも私と同じ気持ちらしい。

ならもう、やる事は一つだよな。

「行くぞ!!」

「来るか!!」

こんな連中、私達がやっつけてから、あの人達の凄さを改めて思い知らせてやる!!

「マッシュユ子! オルテガ子! あの美少女達にジェットストリームアタックを仕掛けるぞ!!」

「了解だ! ガイア子!!」

「少しは名前を振れええええええええええええええええええつ!!!」

明らかにふざけてるだろ!! なんだガイア子って! マッシュユ子って!! オルテガ子って!!!

こんのおく……本気であの人達を侮辱してるだろ!! 許せん!!!

「私の拳を受けてみ……なにいつ!? 私を踏み台にしただどっ!?」

「貴様等如きが!」

「次は私が! ギャアアアアアアッ!?」

「あの人達を模倣しようなどと!!」

「おのれ〜! 二人の仇は私がと……ギニャアアアアッ!?」

「100年早いわ!!」

ガイア子を踏み台にしてから、マッシュユ子を私達二人のキックで撃退。

最後に襲ってきたオルテガ子は、その頭を掴んでから前転宙返りをして回避した。

「こんなものか」

「容易かったな」

「ば…馬鹿な……!」

「私達の必殺のコンビネーションが……」

「こうもアツサリと敗れ去るとは……!」

必殺のコンビネーション? アツサリと敗れ去る? 何を言ってるんだこいつ等は。

「何を言っている。お前達が敗れたのは当たり前前の事だ」

「なんだって?」

「もしも今のが本物の黒い三連星の攻撃ならば、私達なんて初撃すら回避出来ずに簡単に倒されていたよ」

「では……」

「あんなのは模倣にすらなっていない。明らかに偽物以下の駄作だ。そんな技に私と佳織が敗れるなど絶対に有り得ん」

「そんな……」

「彼等を本気でリスペクトしているのなら、もっと死に物狂いで訓練を重ねる事だな」

「……私達の完全敗北だ。行け……」

「言われずとも」

あゝ……スッキリした! これで心置きなく先に進んで……
ああっ!?

「フロントアル！ 鈴達が先に行ってる!!」

「しまった！ 我々が彼女達を撃破している間隙を突かれたか!!」

急いで二人を追いかけて、辛うじてゴールの小島直前で追いついた。

でも、お蔭でかなり体力を消耗しちゃったよ……。

「げ！ 追いついてきた!」

「流星は佳織さんですわ……! でも、フラッグがある小島は直に見るとかなり高い場所にある……!」

「ぶつちやけ、ここでは嫌でも足止めを喰らうように出来てんのね……!」

うわ！ なんかめっちゃ高っ!?

フラッグがある小島は私達の頭二つ分ぐらいの高さに位置していて、どう考えても普通のジャンプじゃ届かない。

肩車ならなんとか行けるかもしれないけど、それだと安定性に欠けるし……。

「佳織」

「な…なに？ どうしたの?」

「実はな、アレを見た時からずっと考えていた事がある」

「それって?」

「それは……」

あ…あのっ!?! フロントアルさんっ!?! またもや私の事を抱えてどうするおつもりでっ!?

しかも、今度はお姫様抱っこじゃなくて、なんか肩に担ぐような格好……ってっ!?!

ちよつと待ってよ!?! この体勢は……猛烈に嫌な予感がしますですことよ……?!

「こうしてから、君をあそこまで投げ飛ばす」

「やっぱりっ!?!」

なんじゃそりやっ!?! 完全にふざけてないっ!?!

いや……彼女がおふざけをするとか有り得ないし……じゃあマジでっ!?!

方が勝者になります！ 果たして、一体どちらがフラッグを手にしていたのでしょうか?!』

ブクブクブク……。

なんか自然と目を瞑ってしまったけど、取り敢えずは上に行つて酸素を確保しよう。

普通に息が苦しくなってきた……!

「取つたど

!!!

あれ?」

え? なんで鈴も何か持つてるの? 私が握ってるのって……。

『……これはあああつ!! 最後の最後、落下しながらも気合と根性でフラッグを握りしめたのは仲森佳織選手でした――

――!!』

え? それじゃあ……。

『優勝は……仲森佳織&フル・フロントル選手ペアに決定しました――

!!!』

「や……やったああああああああ!!!」

よっしゃ

!! まさかの優勝ですよ!! プロ

デューサーさん!!

って、少し待って。それじゃあ、鈴が持つてるのって何なの?

「か……佳織……」

「鈴?」

なんでこっちを見ながら鼻血を出してるの?

それに、なにやらその手に握られている物には見覚えがあるような……。

「ゴメン。そして、ありがとう。優勝は出来なかったけど、それ以上に眼福だったから悔いは無いわ……」

「佳織さん……素敵ですわ……♡」

ちょ……セシリアも鼻血出してるっ!?

んでもって、フロントルがニヤニヤしながらこっち見てるしっ!?

よく見れば、なんか男性客がすごい目で私を見てる……?」

「え……うそ……マジ……っ?」

鈴がその手に握っている物。

そして、男共の視線の先を辿っていくと……そこには……。

「キャ……キャ

」

完全に丸見えになってる私の胸があるし

!!!!

鈴が握ってるのは私の水着のブラか

!!!

私は急いで自分の腕で胸を隠して、鈴から水着を奪還した。

「こつち見るな

!! 男共

!!!

「二デスヨネ

!!!

思わず、手に握っていたフラッグを全力で観客席に向かって投げつけてしまった。

うう……どうして、よりもよって大衆の面前でラブコメみたいな展開になるんだよ……!!

これじゃ、幾ら優勝しても全く喜べないじゃないか

!!!!

第69話 頑張れアンジェロちゃん

暑い……暑すぎる……!!

本当になんなのだ……この異常とも言える暑さは……!

そういえば、仕事に赴く際、出かけ際に大佐から有難いお言葉を頂いたっけ……。

『アンジェロ。日本の夏、特に都心部などは非常に気温が高い。だから、熱中症などで倒れてしまわないように、ちゃんと水分補給や塩分補給などをしてちゃんと対策をしておくように。お前に倒れられたら、私も皆も心配するからな』

うう……今思い出しても感動してしまう……。

なんてお優しいお方なのだ……大佐は……。

まるで女神の如き慈悲深いお言葉……このアンジェロ、しかと胸に焼き付けました。

ですが……。

「ここまでとは予想してませんでした……」

私は、今後の活動の為に日本に赴き、様々な企業の代表などと会っているのだが、問題はその道中だった。

遠い所は普通に交通機関を使用すれば問題無し、近い所は歩いていける。

大変なのは、中途半端な場所にある企業だ。

バスに乗るには近すぎるし、歩いていくには少し遠すぎる。

そんな微妙な場所が一番困るのだ。

「念の為と思って薄着をしてきたのが大当たりだったとは……」

いつも、私がああ忌々しい篠ノ之束を装って人に会う時は、余所行き用のスーツを身に纏うのだが、流石に今日のような炎天下の日にそれをするのは自殺行為だ。

だから、生地が薄目のYシャツとタイトスカートを着ているのだが、それでも肌に粘り付くような暑さは全く変わらない。

次の場所に行くためにこうして歩いているだけで、全身から汗が止めどなく流れてくる。

気のせいかな、道行く男共から変な視線を向けられているような気がするのは何故だろうか……。

(汗でブラが透けて見えてる……)

(汗を流すスーツ美人……)

(普通に興奮するでござる)

なにやらイヤらしい気配がしたのは気のせいかな？

暑さのあまり、頭が変になってしまったのだろうか……。

このままでは本気で熱中症になってしまう！

その前に、さつきその自販機で買った経口補水液で水分補給をしなくては！

「……………温い」

ずっとバッグに入れっぱなしにしていたせいか、すっかり温くなってる……。

一応、水分補給はちゃんと出来たけど、普通に不味かった……。

げんなりとしながら少しだけ前かがみになりながら歩いていると、大きなビルに設置されている巨大モニターにニュースが映し出された。

『11時のニュースをお伝えします。 昨晚、[×]市[○]町に住んでいる

□□□□さんが熱中症で倒れ、緊急搬送されました』

そういえば、涼しい筈の夜でも熱中症になる者は多いらしいな。

我々も油断しないように体調管理には十分に気を付けなくては。

『二時間後、□□さんは搬送先の病院にて死亡が確認されたそうです』

ああなってしまうからな。

実際、私も暑さで死にかけているのだが。

「救急車……」

私の横にある道路を、一台の救急車が走っていった。

どこかで誰かが倒れたのか、もしくは誰かを病院に運んでいる途中なのか。

どっちにしても、この時期に救急車が走る理由なんてかなり限られるだろう。

「また熱中症患者でも出たのか……？」

ああ〜……心なしか意識が朦朧としてきたような……。
いや、しつかりしろアンジェロ・ザウパー！

私は親衛隊隊長にしてフロントル大佐の側近であり右腕！

このような歩道のだ真ん中で倒れるなど論外だ!!

(このような暑さ……嘗て私や大佐が味わった地獄に比べれば……！)

ミンミンミンミンミンミン……。

(すみません大佐……割と今はあの頃と同じぐらいにキツイです……)

そういえば、さつきニュースで11時だと言っていたな。

次の予定は13時30分ぐらいだった筈だから……。

「少し早めに昼食を食べて、どこかでゆつくりと涼んで体力を回復するものありか……」

おい、画面の前のお前達！

決して私は暑さに負けて自分に甘いわけではないからな！

暑い時はどこかで涼む。当然のことだろうが！

私は何もおかしい事はしていない！

「どこか……どこかにいい店などは無いか……」

今更だが、よくよく周囲を見渡したら、ここは駅前のショッピングモールの近くじゃないか。

いつの間にこんな場所まで来ていたのか。

まあいい。どちらにしろ、ここならばいい店が見つかりそうだ。

周囲を見渡しながら、私は愚かしくも自室で涼しく過ごす事ばかりを考えていた。

(部屋に戻ったら、まずは汗で濡れまくった服を全部脱いでから洗濯機に突っ込んで、それから熱いシャワーを浴びて汗を流して、裸のまままでベッドにダイブ！ 最後は冷房全開にしてからのキンキンに冷えたコーラを一口……)

飲みたいなあ……コーラ……。

「ん？」

ボクツと視線を泳がせていたら、視界の端にオープンテラスの力

フエらしき店が見えた。

時間帯のせいなのか、そこそこ客は入っているようで、ここから見るだけでも賑わっているように感じる。

ただ、この暑さの中でオープンテラスを利用する猛者はいないようで、見事に誰もいない。

ま、当たり前だな。誰だって、こんなこんな気温ならば迷わず涼しい店内に入る。私だって入る。

「あそこにするか……」

まだまだ席は空いてそうだし、涼を取ると同時にここで昼食を食べてもいい。

もういつその事、ここで一時間ぐらい粘ってやろうか。

「……………行く」

アホな事を考えている間に、増々気温が上がった気がする……。

もう限界だ……コーラ飲みたい……冷たいコーラ……。

欲望に身を任せたまま、私はそのカフェへと足を向けていた。

この時、店名をよく確認しなかった事が、後に新たな黒歴史を生み出す切っ掛けになるうとは、この時の私は全く考えもしなかった。

・

・

・

・

・

入った店の中は涼しかった。そりやもう涼しかった。

もしも、この場にいるのが私だけだったら、割と本気で泣いていたかもしれないと思うほどに涼しかった。

(猛暑の日の冷房が、ここまで人間に癒しを与えるとは……)

帰ったら基地内の冷房を増やす事を大佐に提案してみよう……。

私が密かに冷房の素晴らしさを実感していると、店員がやって来て私を適当に開いている席へと案内してくれた。

案内されたのは窓際の席で、外ではさつきまでの私のように汗を流しながら歩いているサラリーマンの姿が見えた。

(ククク……。精々、薄汚い汗を流して馬車馬のように働くがいい……。私はここでたつぷりと涼ませて貰おう……)

なんとも言えない優越感に浸りながら、私は店員に迷わずコーラを注文した。

やっぱり、まずはこれじゃないとな。

「以上でよろしかったでしょうか？」

「ああ。後でまた何か頼もうとおも……」

その時、テーブルの上にあるメニュー表に気になる物が見えた。

この時期、誰の眼にも魅力的に見えるそれは、こう書かれていた。

【バニラアイス】

ゴクリ……。

アイスとコーラの組み合わせか……。悪くないな……。

いや、それどころか普通に最高じゃないのかっ!?

シュワシュワのコーラと、甘くて冷たくとろけるバニラアイス……。

クツ……。想像するだけで涎が……。

「こ……これも頼む……」

「バニラアイスですね。畏まりました」

頼んでしまった……。もう後戻りは出来ないぞ……。

いや、何を後悔する必要がある？

私は客だ。飲みたいと思つた物を、食べたいと思つた物を頼んで何が悪い？

それよりも、コーラとアイスが来るまでに昼食に何を食べるか考えておくか。

やはり、脂っこいものよりはあっさりとした物がいいな。

となると、ここは……。

「ハア……」

さつきからずっと見えない振りをしてきたが、ああも露骨な溜息を出されると、流石に視線が向いてしまう。

私の隣の席には、何やら悩み事でもあるのか、二十代後半と思わしき女が大きな溜息を吐きながら黄昏ていた。

私と同じようなスーツを着ているということは、こいつも仕事の途中で涼を求めてここに来たクチか？

「……………」

な……………なんだ。

いきなり私の事を舐め回すように見やがって……………。

「顔……………スタイル……………声……………問題無し」

何がだよ。

「もう……………なりふり構ってるわけには……………ブツブツ……………」

本気で訳が分からん。

こいつは何がしたいんだ？

「お待たせしました。ご注文のコーラとバニラアイスになります」

「ありがとうございます」

こんな私でも、ちゃんと感謝の言葉ぐらいは言えるのだぞ？

店員が去っていったから、私はストローが刺さったコーラを持ち上げて一口飲む。

「んんん♡」

コレだよコレ！

私が飲みたかったのかこれなんだよ！

ああ……………コーラが五臓六腑に染み渡るようだ……………。

この炭酸のシュワシュワが最高なんだよな〜！

「あむ。んん♡」

コーラの後には勿論アイス。

一口食べただけで、今までの疲れが全て吹き飛んでいくような感覚がする……………。

矢張り、疲れた時には甘味が一番だな！

「なんて眩しくて可愛らしい笑顔……………。もう彼女しかいない！」

うおっ!? いきなりなんだっ!?

この私がコーラとアイスを交互に食べるといふ贅沢を堪能している時に近づいてくる奴はっ!?

「その紫髪スタイル抜群の美女さん!」

「……………まさかとは思うが、それはよもや私の事を言っているのではあるまいな?」

「あなた以外に誰がいるっていうの!」

少なくとも、今の店内に私以外に紫色の髪の間人はいな。

「いきなりであれなんだけど……………」

「なんなんだ……………」

「バイトしないっ!」

「はあ?」

私の両手をいきなり掴んでから、その女はとんでもない爆弾発言をした。

あまりにいきなり過ぎて、不覚にも呆けてしまったのは内緒だ。

第70話 買い物に行こう

暑い……その一言しか言うべき言葉が見つからない……。

私は今、IS学園の正門前にてシャルロットとラウラの二人と待ち合わせをしている。

ここは人工島だから、地面からの照り返しがキツすぎる……。

上と下から同時に責められるって……どこのAVだよって話ですよ。

「まだかな……」

かれこれ、ここで待ち続けてから10分以上が経過したような気がする。

いや、もしかしたらまだ1分も経ってないかもしれない……。

(ヤバ……暑さで時間の感覚が分からなくなってきた……)

早く来てくれ二人共……そうじゃないと、佳織とろけちゃう。

一体どうしてこんな事になったんだっけ……。

そう……あれは確か……。

・
・
・
・
・
・
・
・

全ては、夜に自宅にある自分の部屋にてのんびりとパソコンでネットサーフィンをしている途中で掛かってきた電話が始まりだった。

スマホの画面を見て、掛けてきた相手がシャルロットだと知った私は何の疑問も抱かずにその通話に出てしまった。

ここでちゃんと自分の頭の中にある原作知識を思い出しければ、こんな事にはなっていなかったのに……。

「もしもし?」

『あ、佳織? 今、大丈夫かな?』

「うん。普通に暇してたけど……どうしたの?」

『聞いてよく! ラウラったらさ、学園の制服とかと自国から持ってきた軍服以外に服らしい服を全く持つてないって言ってるんだよ!』

「へ? 服?」

『そう! 私服の類が一着も無いの! 僕達は仮にも華の女子高生なんだよ? こんな絶対には有り得ないでしょ?!』

「あ……うん。そうだね……」

ラウラは生まれが生まれだけに世間一般の知識には疎いし、それに加えて同じ隊の人達から間違った日本知識を植え付けられてるからなく……。

かく言う私も、殆どがお母さんの買ってきた服ばかりで、自分で選んで買った服なんて数着しかないんだよね……。

女の子として流石にどうかとは思うけど、ぶっちゃけ言っただけであんましファッションには拘りとかないしなく……。

『だよね? そんな事だから、明日ラウラの服を買いに行こうと思うんだ。勿論、佳織も一緒に来てくれるよね?』

「そつかく。いつてらつしやい……は? 今なんつった?」

『IS学園の正門前に10時頃に来てね! 待ってるから!』

「ちよ……ちよつとつ!? シャルロットさくん!? 私はまだ行くななんて一言も……切られてる……」

・
・
・
・
・
・
・

こうして、私はシャルロットの勢いに負けて、有無を言わず一緒にラウラの服を買いに行く羽目になったのでした。トホホ。

「お待たせ〜！」

校門に背中を預けてボ〜っとしていると、寮の方から手を振ってやって来た二人の美少女の姿が。

あの真っ白なワンピースを着た金髪少女はシャルロットで、その隣で見られた制服を着ているのがラウラか。

夏休み中も外出するのに制服を着るのは確かに問題かも……。

「ごめんね。ちよつと服を選ぶのに手間取っちゃって」

「全くだ。別に服なんてどれでもいいだろうに」

「そんな訳にはいかないよ！ 折角のお出かけなんだよ？ しつかりとおめかししていかないよ！」

「私には全く理解出来ん話だ……」

同じくだよ。

私も人並みには気を使うけど、そこまで時間は掛けない方かな。今、着ている服だつて適当に目についた物を引っ張ってきただけだし。

「つて佳織！ その服は……」

「ん？ どこか変かな？」

今日の私の服は、半袖の白いYシャツとデニムのミニスカ。

かなり外が暑かったから、スカートはかなりきわどい短さだけど、これならそう簡単には捲り上がらないでしょ。

後は適当に柄の入ったキャップを被って、少しでも涼しくする為にダリル先輩のように胸元を常識の範囲で開いてから、そこに百式の待機形態であるサングラスを掛けている。

「悪くない……悪くないけど……」

「けど？」

「ちよつと地味だよ。それじゃあ、佳織の魅力が半分も引き出されない」

「ええ〜……」

地味って……そんなに酷いかな？

お母さんは別に何にも言わなかったけど……。

「仕方がない。ラウラだけじゃなくて佳織も一緒に僕がコーディネートしてあげるよ！」

「いや……別に私は……」

「よし！ それじゃあ出発しようか！」

「話を聞いてくれ……」

この子って、ここまで猪突猛進だったっけ？

なんか、原作の一夏みたいな性格になってるんですけど。

あれかな。家庭環境に問題が無いから、その分、彼女の性格も明るくなってるのかね？

これは少し明る過ぎる気もするけど。

・
・
・
・
・
・
・
・

バス停まで行く途中、自販機でジュースを買った。

待っている間にもペットボトルを一本飲んだんだけど、それだけじゃすぐに喉が乾いてしまう。

唯でさえ異常気象なレベルの暑さなんだから、多少のお金は必要経費だと割り切って、こまめな水分補給を心掛けないと。

その事は二人もちやんと分かっているようで、私と一緒にドリンクを購入していた。

バス停についてから喉を潤しながら待っていると、割と早くにバスがやって来てくれた。

「あ。バス来たよ」

「早く涼みたい……」

「私もだ佳織……。教官から日本の夏は暑いと教えては貰ったが、これ程とは思わなかった……」

今年が特別に暑すぎるだけだよ……多分。

少なくとも、去年はもう少し涼しかったような気がするし。

やって来たバスに乗ると、夏休みにも拘わらず想像以上に車内が空いていた。

少しでも体を休めたいと思っていた私にとっては実に有難い状況だ。

「ここなら三人で座っても大丈夫じゃない？」

「そうだね」

最近のバスはかなり大きめに席を設けていて、女子高生三人ぐらいなら余裕で座れるぐらいの幅がある。

特にラウラは小柄な方だから、絶対に大丈夫だろう。

「「涼しい……♡」」

このバスは冷房じゃなくて窓から入ってくる風で涼を取っているけど、これはこれで悪くない。

ってというか、機械の風よりも自然に吹く風の方が気持ちいいよね。

(車窓から景色を眺める金髪少女……絵になるな……)

シャルロットの美しさに目を奪われたのは私だけじゃないようで、先に乗っていた女子高生グループらしき集団がこっちを見て色々と話していた。

「見てよ、あそこの三人……」

「あの金髪の子……綺麗ね……」

「銀髪の子が着てるのってIS学園の制服じゃないっけ？ 自由に改造が出来るって……」

「っばいね。って事は、あの子らはエリート？」

「入学倍率が一万超えてるらしいし、間違いないわね」

やっば、世間から私達ってそんな風に見られてるのね。

分かってはいても、なんとも言えない気持ちにはなりますな。

「巨乳女子高生……」

「なんと色っぽいのでござろうか……」

「せ…拙者、ちよつと興奮してきたでござる……」

私達とは通路を挟んで向かい側に座っている見るからなオタク集団がこつち……というか、私の胸にばかり注目しているのを感じた。

人の胸ばかり見てんじやねえよ！ あれかつ!? 男は皆オツパイが好きなのかっ!?

前世の私ってどんななんだっただけ……全く思い出せん……。

「どうしたの佳織？」

「いや……少しだけ空しくなっただけ……」

「??？」

幾ら暑いからって、やり過ぎは禁物って事だな……いい教訓になったよ。

・
・
・
・
・
・

バスを降りて少し歩いた所にあつたのは、駅前のデパート。

どうやら、ここが今回の目的の場所のようだ。

「ここかく……」

「デカいな……。色んな店が密集しているようだが、一体どうする気だ……シヤルロット？」

いつの間にかシヤルロットは肩から掛けているバックから雑誌のような物を取り出してうんうんと唸っている。

さつきから目がひつきりなしに動いてるけど、何を見てるの？

「ここはこうだから……うん、分かった。この順番で回れば無駄が無

いね」

「はあ……」

一人だけで盛り上がってますなく。

完全に私達とは空気が違うし。

「最初は目的でもある服を見て、その後にはランチを食べる。最後に小物とか生活雑貨的な物を見ていこうと思うけど、二人共それでいいかな?」

「うん」

ここで私とラウラの心は一つになった。

この買い物の間、シャルロットには絶対に逆らわないようにしようと二人で誓った。

「ねえ佳織。ラウラにはズボンとスカート、どっちがいいと思う?」

「なんで私に聞くの? そーゆーのって普通は本人に聞かない?」

「来る前に一度、ラウラにも直接聞いたんだけど、その時は『どっちでもいい』って言うんだもん」

「そうなの?」

「ああ。どっちがいいかなんて私にはサツパリだしな」

「だから、佳織に聞こうと思ったの。流石のラウラも、佳織が選んだものなら嫌とは言わないだろうし。ね?」

「うむ。嫁が選んだものならば着なくてはな」

私は嫁じゃないっつーの。何度言えば分かるんだよ。

でも、シャルロットの言ってる事も一理あるな。

私以上にファッションに疎いラウラに『どっちの服がいい?』と聞くのは少し酷だ。

最初は第三者が選んだ服を着せて、それを基準にして自分で選ばせるようにしていくのがベストなのかもしれない。

「と言ってもな……ぶつちやけ、どっちもラウラに似合いそうな気がするし……」

「そうなんだよね。それが一番の問題なんだよね……」

なんせ元がいいからね。そりゃ、何を着せても絵になりますよ。

地味な私とは大違いだわ、ホント。

「兎に角、まずは上から……七階から見えていくよ」

「む？ どうして上から見て……」

ラウラが何かを言おうとした瞬間、私は彼女の肩を掴んで首を左右に振った。

軍人であるラウラはすぐに私の言いたい事を理解して、素直にコクンと頷いてくれた。

「今のシャルロットには……」

「下手に口答えをしない方がいい……か。了解した、佳織」

もう完全に、この場の主導権はシャルロットが握っている。

ここに来た時点で、私達は彼女の言う事に従うしか道は残されていないんだ。

「ほら、早く行くよ二人共！」

「は〜い」

せめて、変な格好をさせられないように祈っておこう。

これからの事に少しでも不安を覚えながら、私は二人と一緒にエレベーターに乗った。